

---

# ネギマシニカル

灰色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギマシニカル

### 【Nコード】

N9969R

### 【作者名】

灰色

### 【あらすじ】

みなさんの作品に触発されて書いてみました。  
本作はオリ主最強もの。

ネギまに転生したチートな少年の奮闘記です。

4月2日、タイトル変更しました

## プロローグ（前書き）

はじめまして。灰色です。

このプロローグのあと、第二話くらいまで心理描写メインの、第二の  
プロローグとなる予定です。

## プロローグ

「はろはろー」

一枚布で体を包んだ螺旋の男性が親しげに声をかけてきた。

「君転生できることになったけど、どんな世界行きたい？」

「とりあえずあなたは誰だ」

当然の疑問。男性はどこか納得したように頷いた。

「そういうときは回想シーンに入るといいよ。はい、どうぞ」

<回想開始>

学校帰りに本屋へ。

ザレゴトディクシヨナルを購入。帰路につく。

通り魔と遭遇。

ズタズタ

<回想終了>

「まだ読んでないのに!!」

血で汚れた!つてか僕死んだ!?

「うん君死んだ」

「デイクシヨナルは!？」

「転生先で読めばいいじゃん。持ってけるようにしてあげるから」

「渡りに船、とは少し違う気もするけどありがたい。で、あなたは?」

テンプレなら僕の死は何かの間違いで、彼は神様かなんかなんだ

るう。

「始めまして。ゴータマ・シッダールタです」

「あれ仏様？」

シッダールタ。確かお釈迦様だったはず。武術の心得もあって、強く優しく博識で、家柄もいい元祖的なんでも超人だとか。

「インドの弟子達なみの信頼度だね……………」

なんかちょっと引かれた。

「テンプレなら神様の出番では？」

「テンプレって、神様が失敗して、って？」

黙って首肯。お釈迦様に微苦笑された。

「そうそう失敗しないからこそその神様だよ」

おお………！僕今お釈迦様に諭されたよ！なんかすっごいテンション上がる。

「もともと輪廻転生は仏教の観念だしね」

そんなものか。ていうかあれ？

「何に転成するかを選ぶ、ってことですか？確か仏教では、一度成った生き物には成らないはずじゃ………」

「うん。だから君には『人間』じゃなくて『異次元人』に成ってもらう。つまり創作の世界への転生だね」

あ、そこはテンプレなんだ。

「転生先でも、普通の人間じゃなくて所謂バグキャラだね。私がちーと能力をあげよう」

チートが平仮名だった。横文字は得意じゃないのかな？無学な僕にはわからない。

「そんなこと出来るんですか？ 言うてはなんですけど、お釈迦様にはそんな万能な、えっと、印象はありませんが」

「いめーじって言うていいよ。使うのに不自由するだけで、意味はわかるから」

微笑笑するお釈迦様。 なんだかイメージが纏まらないお方だ。

「転生の概念にちょっと手を加えるだけだからね。 もともと創作の世界への転生が例外だし」

それもそうか。

どの世界か、能力の上限は。 いくつか気になることはあるけど、何を置いても聞きたいことがある。

「例外、ということは全ての死者を転生させているわけじゃないんですよね？ なぜ僕を転生させて下さるんですか？」

僕としては特に含みもない質問だが、お釈迦様は言いにくそうに口ごもった。

「……………取り繕いはしない。君が恵まれない子供だったからだ」

「恵まれない？」

どういうことだろうか。食に困ったことはないし学校にも通えた。趣味の読書に勤しむ金銭的余裕もあった。僕より悲惨な子供達なんて、それこそ世界中にいるだろう。

「恵まれていることに気付かないのが恵まれている証拠であるように、恵まれていないことに気付けないのも、恵まれていない証差なんだよ」

……………もしかして、ディクシヨナル以外に悔いのない人生を否定されたのだろうか。って言い方したらホントに薄いかも。

「で、君はなんの世界に行きたい？どんな能力が欲しい？それとも、現世に転生する？」

わざわざ分けたと言うことは現世に転生する際は人間じゃないのだろう。ミジンコか、フジツボか、フナムシかも知れない。

「じゃあ、魔法先生ネギま！の世界に。確認ですが、原作ブレイクしていいんですね？」

「もちろん。君はねぎま！の世界で好きに生きるといい」

「能力の数に上限は？」

「特にはないよ。私の力及ばないときは、少し削ってもらおうけど」

しばし黙考。なんてするまでもなく決まってる。

「取り合えず曲弦系使いたいですね。紫木一姫ちゃん並か、それ以上で。音使いも曲識さん並か以上」

いきなり病蜘蛛、零崎越え。大丈夫かな？

「うん。大丈夫だよ。他には？」

「罪口商会のスキルが欲しいですね。F a t eで言う【道具作成】スキル」

「両方つけちゃおうか。罪口商会として魔力のない物を。【道具作成】Aで魔力のある物を」

順調にチート化していくな、僕。

「まだまだ行けるよ。ばつちこいだよ」

お釈迦様の人物像が激しくブレていく。残像が見えそうなブレぶりだ。

「では、真庭忍法足軽。相生拳法背弄拳を使えるようにして下さい」

「虚刀流はいいの？」

「刀は使いたいですからね」

あの世界には神鳴流があったはずだし。

「鑓七実並の見稽古も、大丈夫ですか？」

「いいながら思い出したね？いいよ。まだ大丈夫」

まだ大丈夫なのか、どうしようか。流石に【大嘘憑き】は気が引けるし、僕じゃあ世界をなかつたことにしてしまっただろう。

過負荷は全部危険かな？

「宗像三年生の暗器術も欲しいですね。あと空間製作も」

「はいはい」

なんか調子に乗っちゃいそうだ。そろそろやめとこうかな。

「最後に、絶刀と斬刀を下さい」

「あれ？それだけでいいの？」 これだけで十分かつ十全にして万全なまでにチートです。

「じゃあさーびすで筋力と敏捷をA+++にしよう。魔力よりも気の方がいいかな？気もA+だ」

あれ？お釈迦様楽しんでね？このままだと僕のチート化がとめどないよ。

「この辺が私の限界かな」

モノローグが恥ずかしい。

「年代とか場所は指定ある？」

「原作に絡めればなんでもいいですよ」

紅き翼参入もよし。魔法生徒としての入学もよし。いつそ学園長の茶飲み友達でも構わない。

「じゃあ私の趣味と偏見で選んじゃうよ。どこがいいかな」

絶対僕よりお釈迦様の方が楽しんでる。

「よし決めた！」

やおらお釈迦様が手を打った。その顔は苦笑でなく微笑んでいる。

「じゃ、そこは着いてからのお楽しみ。早速送っちゃうね」

有無を言わず、お釈迦様は僕に両手の平を向けた。

そして短く一言。

「Good Luck」

ネイティブな英語を最後に、僕の意識は途絶した。

## 第一話

皆さん久しぶり。結局お釈迦様のキャラが掴みきれなかった、僕です。

現在5歳の僕は関西呪術協会の本家、近衛の分派の一つである罪口の家の子だ。苗字はきつとお釈迦様の仕事、いや御業だろう。

罪口鷲志。それが今生の僕の名前。

頼んであった能力は全てが順調に作用している。全裸でも絶刀と斬刀は隠し通せるし、罪口商会として糸も作った。普通に走るだけで並の瞬動より早いというチートぶり。

神童なんて持て囃されているが、まだまだ手の内は見せていない。

周りに明かしたのは音を使つての認識疎外（これは気配遮断として披露）と、運動神経、そして暗器術だけだ。

暗殺者さながらの才能だが、前世からの誠実さが気に入られ、今は木乃香の護衛として本家でお世話になっている。

「ここにきて、お釈迦様がおっしゃっていた『恵まれていない』と痛感する毎日だ。

「ここで送っているのは『恵まれている』『暮らしなのだろうが、差し引いても、なるほど前世は酷かったかもしれない。』

「なあさぎくん、聞いとる?」

はっとする。少し呆けていたようだ。

「ごめん。なに?」

「あんな、今からせつちゃんと川に遊びにいこおもとるん。一緒に行かへん?」

大輪の花が咲いたように笑う女の子。近衛木乃香。

僕の護衛対象で、恩人の娘で、前世を通して、最初の友達だ。

川と言えば、確か刹那との仲たがい（に見えるだけ）のきっかけになった事件が起こるはず。それを抜きにしても離れるわけにはい

かないが。

「そうだね。今朝はお味噌汁が美味しかったし、僕も行こうかな」

「なんや、変なこといなあ」

からからと笑う木乃香を連れて、まずは刹那を迎えに歩いた。

前世のせいで物として生きること、誰かに隷属することには抵抗があるが、それでも守ることはできるだろう。

何物からも、何者からも、木乃香を守り抜こう。

木乃香が魔法使いになるなら、僕はその従者として、この身の全てを木乃香のために使い切ろう。

僕の心を救ってくれた少女を。

なんて、いい感じで章を区切ったのに、早速僕は失敗した。

川に落ちるイベントは起こらなかった。

僕が注意を促したし、注視してもいた。川には落ちず、木乃香と刹那がギクシャクすることも、当然なかった。

それは、刹那が神鳴流の姉弟子に呼ばれて僕達から離れたとき、刹那と姉弟子さんの姿が完全に見えなくなってからやってきた。

### 『眠りの霧』

誘眠の霧と共に、暗色のローブを羽織った男が5人、現れた。

僕はとっさにレジストするが、木乃香は眠ってしまったようだ。積極的な魔法介入は長の意味じゃない。これはむしろ望ましいか。

「関西の次期頭首。なるほど膨大な魔力だ」

こっちこそなるほど、だ。

原作ではこんなタイミングでこんな事件は聞いてない。恐らく川

に落ちる事件のせいで計画を先延ばしにし、別のタイミングで起こるはずの事件だったのだろう。

ここで僕が失敗すれば、きっと刹那は先に帰った自分を責める。刹那はちつとも悪くないのに。

その自責は、原作通りか、それ以上の確執を生むだろう。

もし木乃香と刹那の関係悪化が、起こらなければならぬことから、これもきつとバックノズルの一種なのだ。

もっとも、わざわざそうしてやるつもりもないが。

「坊や。悪いことは言わないからその女の子をこっちに寄越せ」

男の言葉を見無視し、僕は木乃香を僕の上着の上に寝かせた。

「聞こえないのか？それとも意地を張っているのか？」

さつき巡回中の鳥型式神が飛んでいるのが見えた。すぐに本山から援軍が来るだろう。

というより常に誰かが張り付いていないだけでもう不十分だ。それだけ結界が信頼されているのか。

「おい小僧、いい加減にしろ」

寢息を立てる木乃香をよく見ると、膝を擦りむいている。眠り落ちたとき、膝を擦ってしまったようだ。

「もう待たん。リウ・ラウ・リロウ」

男の始動キーを遮る形で、僕は大きく右手を振った。それに合わせて、男の体が解体される。

「ああもう、うっとう死いいな」

僕ははっきり。苛立っている。

こんな小物の接近を許したこと。木乃香との接敵を許したこと。木乃香のそばで、戦わなくてはならないこと。

いくら能力を貰っていても、経験を積まなくては宝の持ち腐れだ。

僕には経験値が、経験知が足りない。

「女の子が寝てるんだ。もうすこ死死ずかに死てくれないか」

刹那のように疎遠になるんじゃない。木乃香とは、今のまま友達でいる。それでいて従者として、盾として、剣として強くなる。

そのために、まずは

「お前らを掃除死なくちゃな」

ちなみに、僕は死配人の能力は持ってないよ。

なぜか知らないけど怒ると死吹の方言が出るんだ。お釈迦様の茶目っ気かな？

方言しかり生い立ちしかり。あの人（？）なら他にもオプシヨンつけてるかもしれないな。

『限界』つてのも、『他にもオプションつけたいし、この辺で止めとかなないと私のやりたいこと出来ないかな』つてことかも。

さて、考え事という名の現実逃避はそろそろやめて、現実と向き合おうか。

僕は今、長こと近衛詠春さんに抱きすくめられています。

いや別に長に特殊な趣味があるってことじゃないよ？ただなんか、五人をバラしたあと、駆け付けた長が一目散に僕に駆け寄ってきたんだ。

僕も驚いてる。

「怪我は、怪我はありませんか？」

体を離し、しかし肩を掴んだまま長が問い掛けてきた。

「はい。ありません。これは全部返り血です」

流石に素人じゃ返り血を浴びないように立ち回るのは難しい。二

十人目の地獄のようにはいかない。

もちろん木乃香にはかかってないよ？

「木乃香お嬢様を狙う侵入者のようでしたので、指示を待たず抗戦しました。初の実戦で思うように動けず、生かしておくのを忘れてしまいました。申し訳あり」

最後まで言う前に、もう一度抱きしめられた。

「そんなことはどうでもいいのです。私は、木乃香と鷺志が無事で、本当によかった……………」

と、

「あなたはもう、私の子も同然なのですから」

言ってくれた。

そういえばこの方は、刹那にも似たようなことを言っていたはずだ。

なるほど。

いい人だ。

## 第二話（前書き）

ここまでで心理描写メインは終わりです。  
次回からはちゃんとキャラ会話を出します。

## 第二話

こんにちは。この度近衛本家に引き取られた、僕です。

あの後詠春さんの強い要望により、僕は正式に本家に寝食の場を得ることとなりました。

つまり近衛さんちの子供になりました。養子として。

とは言っても苗字は罪口のままだし、木乃香も刹那も変わらず「さぎくん」と呼んでくれるけどね。

変わったことと言えば、今まで「長」と呼んでいたのが「詠春さん」になったことくらい。これも詠春さんの希望だ。刹那もそう呼んでいる。

木乃香は「いっぱいさぎくんと遊べるね!」と満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。

その笑みは、僕の決意をより強固にした。

僕と刹那は境遇が似ている。

魔法より体術、気が得意。木乃香の護衛。片や神童、片や天才。

他にもいくつがあるが、ぱっと思いつかぶのはこれくらいだろう。

同年だし今は身長もどっこいどっこいだ。

そのお陰か、僕は刹那にもよく懐かれていた。

「なーなーさぎくん。さぎくんも神鳴流剣士になるん？」

『神鳴流剣士』だけ発音がしっかりしていた。それだけ真剣に挑んでいるのだろう。

「ああ。僕も少しは体を鍛えないと、刹那に笑われちゃうかと思っ  
てね」

うちそんな意地悪ちゃうもん。と頬を膨らませる刹那が可愛くて  
たまらない。

違うよ？ロリコン的な意味じゃないよ？

今、僕は刹那と一緒に神鳴流の道場に来ています。

詠春さんをお願いして入門を許可してもらった。

目的は勿論神鳴流の体得だが、裏の仕事をするに当たって表の顔を用意しておくのは悪くないだろう。いわば、裏用の表の顔だ。

僕は見稽古貰ってるし、動機も不純。真面目にやる人はいい気分しないかもしれないけど、護衛のためだ。そこは大目に見てもらおう。

『覚えのいい子供』に見えるようにセーブするしね。

ちなみに裏の仕事だが、僕が詠春さんに無理を言ってやらせて貰ってる。

『近衛』の役に立つ上で、仕事の経験は絶対に必要になる。

魔帆良の近衛は老獪な妖怪だ。木乃香を守るためには、実力以上に実績が必要になる。

なるべく派手に、有名に、しかし実力の底を見せずに仕事をこなす必要がある。

裏の仕事中は、何か別の名前を名乗ろうと決めていた。

公私をわけ、少しでも木乃香と裏を離すために。

で、裏の名前だけど、せつかく名前が『し』で終わるんだし、『零崎鷺識』にしようと思った。

しかし、だ。

零崎一賊の身内想いは最高にカッコイイけど、殺しを生き様と現す一賊を名乗るのは、僕には抵抗があった。

『仕事』のときに名乗るのに、『生き様』はそぐわない気がする。雰囲気的には『始末番』で天吹もいいし、僕の戦闘スタイルとか

性質的に『暗殺者』の闇口もいい。

でもやっぱり、仕事で殺す時に名乗るんだから、これが1番だと思っ。

「匂宮だ。匂宮とだけ、覚えていればいい」

男達の怒号の中、僕は静かに宣誓した。

零崎は、開始しない。

普通は名乗れば気付かれるだろう。

実際目の前の男に限らず、この場にいる十人弱の魔法使い達は残らず僕の声に気付いた。

だがその全員が、僕を見つけれないでいる。

僕の声聞くことは、僕の術中に嵌まること。僕の声気付けば、

僕の姿に気付けなくなる。

そこに空間製作を加えれば盤石だ。

僕に気付かず、僕を見付けず、僕に殺される男達。

考えてみると、これは拭森にこそ近いかもしれない。

たしか貫通が人識に似たようなことをしていたような……

じゃあ『匂宮』よりも『拭森』を名乗った方がよかったか？

そんなこんなで裏の仕事をしてる内、僕にも中二なあだ名がついた。

一番有名なのは、『前後左右』。読みは『デッドアングル』。

折角なので曲弦系用の黒手袋を『前後左右』と名付けた。メイドイン罪口。

あだ名が広がるんだ。その分有名にもなってくるだろう。名を  
広めるために、意図的に生かしておいた奴も何人かいる。

名前が広まれど顔が割れない。それは若手には言えない組織の傷、  
陰となるだろう。

未知の技術。未知の獲物。未知のプレイヤー。

そんなもの、若手に言えば嘗められるだけだからね。

有名になったら、それが僕であることを示す何かを残す。

麻帆良のみに向けたメッセージ。

僕の、プレイヤーとしてのネームバリューで木乃香を守る。

### 第三話

皆さんお久しぶり。中学一年生となった、僕です。

現在入学式。偉い先生方の話が退屈だし、少しだけ回想にふけるうかね。

とって、別に回想シーンに入るわけじゃないけど。

木乃香と刹那は関係がギクシヤクすることなく、同時に麻帆良に入学することになった。もちろん僕もね。

刹那はもう魔法に関わっている。僕ほど極端にはないけど、裏の仕事もこなしてる。

原作と違うところと言えば、木乃香を『このちゃん』と呼んでいること。口調は敬語になっている。

一番の違いといえば、やっぱり実力だと思う。

十回に一回は式の太刀で。刹那の修業相手はもっぱら僕と詠春さんだしね。木乃香は基本原作通りかな。違いは僕がいることく

らい。

今夜0時。魔法生徒達は実力を試される。

少し、気を引きしめていこうかな。

そして0時。世界樹前広場。

すでに関係者は全員が揃っている。魔法生徒は先輩も来ているよ  
うだ。

「こんな時間に集まってもらわねばならんこと、まずは詫びよう」

学園長が髭に隠れた口を開いた。無駄に威厳を感じさせる。

「新入生ももう知っていると思うが、魔法を知っている、使える  
君達にはこの警備員として働いてもらいたい。ここにいる諸君は  
依存無しと取るが、よいな？」

木乃香のためにも、こいつらとは（少なくとも表面状は）仲良くしなきゃいけない。面倒だ。

「君達の実力を見るために、一つ試験を用意してある！」

この作品で初めての長台詞がまさかのぬらりひよんだよ。木乃香も刹那もいるってのに。

学園長に促され、教員の一人が一步前に出た。誰だあれ？多分名もないモブだ。

その教員が何かを唱えるや、足元から大量の異形が這い出した。

おそらくは低級だろう、三十近い悪魔達。

何人かの新入生が呻くのが聞こえた。もちろん刹那は含まれない。

「諸君らには、この悪魔と戦って貰う！」

どうせ学園長も完全討伐なんか期待してないだろう。おそらく、対多数においてどれだけ上手く立ち回れるか、援軍が来るまで生き延びられるかを見る試験だ。

「では、こちらで指名したものからじゃ」

褐色の肌をした、女性らしい体つきの少女が全ての悪魔を撃ち抜いた。

教員達が感嘆のため息をつくのが聞こえる。さすが龍宮。伊達に傭兵やってない。

「次、桜咲刹那！」

「はい！」

促され、前に出る刹那。

「気負うなよ」

「大丈夫ですよ。あんなのより、さぎくんの方がよっぽど怖い」

緊張はしてないらしい。なら大丈夫だ。刹那はおそらく、魔法教師に匹敵する実力者だから。

「準備はよいな？では、始め！」

声と同時に、刹那は縮地で一気に移動した。入りと抜きが完璧な、まさに縮地。詠春さん直伝さ。

悪魔達の真ん中に表れた刹那は、その手の夕凧をまず一振り。

奥義でもなんでもない、ただの薙ぎ払いだ。ただし斬線は見事の一言。今の刹那なら、きつと裁縫糸を縦に斬れる。

斬って動いてまた斬って。その繰り返しでどんどん悪魔が還っていく。

刹那は速度に才能を発揮していた。彼女のスピードは、きつとかBはある。縮地が加われば並では追えないだろう。

見ていた誰もが絶句している。学園長と高畑教諭はただただ感心し、葛葉教諭は完全に瞠目している。

「見事じゃ。詠春殿から聞いてはいたが、実際目になると凄まじいの」

学園長に一礼し、こちらに戻って来る刹那。目で語って来る。どうでしたか？と。

「よかったよ刹那。最初の縮地が特に。多分刹那はこの学園で最速だ」

長瀬がどれくらいかは知らないけど、まさかサムライマスターより速いってことはないだろうし、なら詠春さんといひ勝負の刹那の方が速いだろう。

僕の称賛に、満面の笑みを浮かべる刹那。

「ありがとうございます！」

「本当に凄まじいね」 ふと入ってくる第三者の声。

「私も結構自信があったんだが、ね。龍宮真名だ。よろしく」

「桜咲刹那だ」

握手を交わす二人。おお、こつやってあのコンビが出来上がったのか。刹那も、敬語でも丁寧語でもないじゃないか。

「次、罪口鷺志！」

おつと僕だ。

全く。ようやく原作キャラ同士の絡みだぞ？もう少し堪能させてくれよ。

「さぎくん、えっと……頑張つて下さい！」

何を頑張ればいいのか、多分刹那もそこに引っ掛かったんだろう。

「彼も強いのかい？」

「私の師匠だ」

学園長のもとへ向かう僕の背中に、そんな会話が聞こえた。これはいけない。

「刹那」

顔だけ振り返って声をかける。刹那はキョトンと首を傾げた。

「僕とお前は、友達だ」

刹那の反応はまたず、今度こそ学園長の元へ向かった。

「罪口くんじゃな？詠春殿から聞いておる。なかなかの手練じゃそ  
うじゃの」

こんなところで西の長の名前出しているのか？雰囲気が剣呑にな  
ったりは、取り合えずしてないけど。

「いえいえ。僕なんてまだまだですよ」

「謙虚じゃのう」

僕が裏の仕事をこなしていることは知っていても、『人殺し』についてには知らないはずだ。

僕が匂宮で、曲弦師で、デッドアングルなのを知ってるのは、詠春さんと刹那。あとは噂を広めるために生かしておいた雑魚くらいだ。

僕のことは『腕の立つ、ちょっと変わった戦い方の神鳴流剣士』くらいにしか聞いていないはず。

まだまだ正体を明かすには早いしね。もうしばらくは、そう思っていて貰わないと。

「では試験を始めるが、武器は持つとらんのかの？」

「持ってますよ。ほら」

右手に絶刀、左手に斬刀を、それぞれ取り出す。暗器術ってかなり便利だ。真黒さんはどうやって教えたんだろう？

「結構。今度こそ試験を始めよう」

他の教員ですら驚く中、さすがぬらりひょんは飄々としている。  
いや、ぬらりくらりしているのか。

さて。詠春さんが「なかなかの手練」と評してくれた以上、その顔を潰すことは出来ない。

さつき見取った『魔法の射手』とか『紅き焰』の実用は後回しだな。

いい加減疲れの見える教員が、何度目かの悪魔召喚を行おうとすると、それを遮るように高いソプラノボイスが響いた。

「やめておけジジイ。そいつ相手に低級悪魔じゃ、三桁いても足止めにすらならん」

声の主は誰であろう、『不死の子猫』を名に冠する吸血鬼。キス  
シヨット

「エヴァか。まさかお主が呼び出しに応じるとは思わなかったわ」

「ふん。面白そうな輩を見つけたのだな」

声とは裏腹に、心底つまらなそうに学園長を見下すエヴァンジェリン。つと、僕に視線を移し、その端正な顔を盛大に歪めて言い放った。

「はじめましてだな。デッドアングル」

「デッドアングルだと!?!」

エヴァの言葉に、僕よりも早く反応したのは眼鏡をかけた黒人男性。多分ガンドルフィーニ教諭だろう。

あまりの反応速度に僕はいつそ落ち着いてしまった。

「名乗ったつもりは無かったけど?」

「何度も名乗っているじゃないか。『匂宮』?」

「随分物知りだね。キティちゃん」

「貴様が有名なだけだ」

「『匂宮』は有名でも『罪口』は、ましてや『鷲志』は調べる必要があるほどに無名なはずだけど」

「なに。私には有能な従者がついていてるだけさ」

エヴァが顎で促した先にいたのは……………茶々丸？一年生時点でもういるのか？だとしたら原作時は最低3歳か。

3歳。無表情。博識。万能。

やめよう。これ以上はきつと危険だ。

「学園長！彼の入学を即刻取り消すべきです！！」

ガンドルフィーニ教諭が声を張り上げた。まったく。こつなるこつとがわかってたから隠そうとしてたのに。

「なぜかね？」

「なぜって、人殺しですよ!？」

ま、健全な反応ではあるよね。赤松世界ってそうそう人死なないし。

「そう言わないで下さいよ。僕が手に掛けるのは、近衛詠春以下の近衛の者と、僕が身内と認めるごく一部の友人に害なす輩だけなんですから」

今の所は詠春さん。木乃香。刹那の三人だけだね。

「そういう問題じゃない!魔法に携わる者が人を殺す、これがどういふことはわからないのか!？」

「じゃあ黙って殺されるっていふんですか？」

「そうは言っていない!殺さなかったって本国に送るなりやり方があると言ってるんだ!」

温い輩だ。報復されることをまるで考えてない。友達が、恋人が、家族が復習の対象になるなんて、夢にも思っていないのだろう。

正義を信じる自分は正義だと信じ込んでいる。

自分の正義（思想）を押し付けるなんて、世界征服やら人類補完計画やらを目論む連中と大差ないっていうのに。

「どんな状況であれどんな相手であれ、殺すのは良くない。と？」

「そうだ！」

「人殺しなんかせず、人助けに従事してこそナギのような立派な魔法使いだと？」

「そうだ！！『紅き翼』のような、『彼』のような立派な……………」

「大戦の英雄が、人を殺死てないとも？」

「……………っ！」

「ナギ・スプリングフィールドは『戦争』の英雄ですよ？人を殺死ていない訳がないで死よう。誰よりも人を殺死たからこそ、英雄です」

「仮に人を殺死ていないと死ても、彼の、彼等の戦いに巻き込まれ

て一体幾つの命が途絶えたか？」

「考えたことはないのですか？考えたくはないのですか？」

「産まれついでに犯罪死や」

「産まれながらの人殺死」

「あるいは、後天的な殺人鬼」

「そんな人達がいるとは、思っていないで死よう？」

「そんな人達がいるとは、思ったこともないで死よう？」

まだまだ続けたりないが、この辺にしておかないと反感が強いらる。例え話で最後だ。

「ときにガンドルフィーニ教諭。盗みは悪でしょうか？」

口調が元に戻った僕の言葉に、ガンドルフィーニ教諭は小さく答えた。

「……………当然だろう」

「子供でも？」

「子供だからって許されることばかりじゃない！誰であれなんであれ、盗みは悪だ！」

今の台詞は覚えとこ。早くネギ君こないかな。

「それが餓死を間近に、かろうじて動けるスラム街の子供が盗んだ、人から違法に搾取を続ける為政者が大して口もつけずに捨てようとしたパンでも、悪かい？」

「……………っ！？」

「あなたがた立派な魔法使いは、そんな子供を捕らえ、罰するのかい？」

「それは……………」 やれやれ。

ガンドルフィーニ教諭はおろか、他の魔法教師達まで黙っちゃったよ。ウルスラの脱げ女まで僕を睨んでる。

「僕なら捕らえる。捕えて、余罪を追求する。たっぷり時間をかけて、ね」

「なっ！？君に人の心は……………」

「その間、その子供は拘留されるだろう。雨風を凌げる留置所で、





ああ、そういえばそんなことやってたっけ。ガンドルフィーニ教諭ももう異論は無いようだし、さっさと始めよう。絶刀と斬刀も、どこか所在なさ気に見えなくもない。

「して、君が彼の前後左右であるというのは、事実かね？」

「自分から名乗ったわけじゃありませんけどね」

「ふむ……………」

顎に手を当てて黙考する学園長。眉毛がなければ皺と見分けがつかなくなりそんな目をついと滑らせ、一人の教員を見遣った。

「頼めるかの？」

その一言で、周囲の教員までが緊張したのが伝わった。相当の実力者なのだろう。

「僕は構いませんよ」

そういった教員は、どこかたびれた印象のスーツを着て、眼鏡

をかけ、顎髭を生やした壮年の男だった。

おそらく、『彼』だろう。

「おやおや、おやおやおや、まさか貴方に相手をしていただけるなんて、思ってもみませんでしたよ」

「僕を知っているのかい？」

「知っていますとも。どうしようもなく、どうするまでもなく知っています。貴方はとても有名ですからね。僕のように名前だけでなく、容姿や戦い方まで有名ですよ」

思わず口調が乱れるほどテンションが上がる。

男性は微かに苦笑したようだった。

「それは、光栄だね」

「スーツ、髭、眼鏡。戦い方は、無音の遠距離攻撃、ですか？」

「おっと、どうやら本当に知られてしまっているようだね。対して、

僕は君を知らない」

「そうですね。僕の戦い方は、寧ろ戦わない連中にこそ似ているんですから」

「なんの話だい？」

「こつちの話です」

さあ、無駄話ももう終わりだ。

「始めましょうか」

高らかに、彼の名を呼ぶ。

「神多羅木先生！！」

side・高畑

「今更視点が変わろうとは思っまい！」

目の前の少年、罪口鷺志くんが叫んだ。

「何を言ってるんだい？」

「こつちの話です」

掴み所の無い少年だ。

「さて、どうやら自己紹介の必要があるみたいだね」

僕の苦笑混じりの言葉に、罪口くんが首を傾げた。

「僕の名前は高畑・T・タカミチ。ここの教師さ。神多羅木先生は、そつちだよ」

指差す先で小さく頷くサングラスの男性。彼が神多羅木だ。

「あれ？」

さっきまでの、ガンドルフィーニ先生を相手取っている時とはまるで違う、年相応の仕種で首を傾げる罪口くん。

「本当にわかってなかったんだね……………」

僕の言葉が聞こえてないように、罪口くんは何事もかたまっていない。

「つかしいなー。こりゃ奇野も混ぜとってるかも……………」

キノ？

なんのことが、聞いてもきつと、「こっちの話です」とはぐらかされるのだらう。

「罪口くん。準備はよいか？」

「ああ？あ、ああ……………いいですよ」

両手の刀を一瞥し、答えた後は僕から目を離さない。柔和な表情の消えた、鋭い目だ。

「それでは、始めい！」

### 第三話（後書き）

ガンドルフイーニ先生をイジめる回になってしまった……

次回は戦闘描写あります

## 第四話（前書き）

戦闘が短めになってしまいました

チートが持久戦ってのは難しいですね

## 第四話

S i d e ・高畑

「始めい！」

学園長の合図と同時に、罪口くんの姿が消えた。

S i d e ・刹那。

やっぱりさぎくんは凄い。開始と同時に、いきなり高畑先生の背後を取ってみせた。確か、相生という、今は廃れた流派の技らしい。

「くっ!?!」

瞬動を入れたり、その場で回転したり、バック転をする高畑先生  
のその背後に、つかず離れず寄り添うようにさぎくんはいる。

「貴方の技、無音拳は射程と威力が凄まじいだけのパンチです。拳  
技の王道と言われるボクシングにも、柔軟戦術と言われる軍隊格闘  
技にさえも、背面を殴る技は存在しない」

後ろに回られたら、振り返ればいいのだから。

しかし、振り返った先にもさぎくんはいない。

振り返れば振り返るほど、探せば探すほど、さぎくんの行方は知  
れなくなる。

だからこそその前後左右<sup>ヘッドアングル</sup>。

「……………凄まじいな、君の友人は」

「ああ。自慢の幼なじみだ」

「……………」

ふと、何気なく答えた言葉に隣の少女、真名が僅か目を見開いた。

「ど、どうした？」

「……………いや、応援してあげようと思ってね」

含みのある微笑み。きつとこの少女に、私の心の内は見透かされたのだろう。

顔が赤くなるのを感じる。顔が熱くなるのを感じる。

せめてもの救いは、さぎくんが高畑先生の背中から目を離していないことか。

もう何度振り返っただろう？

なにをしても、どう足掻いても、どう藻掻いても、罪口くんは視界に触れない。

「 88回。そろそろ三桁を越えますよ」

決して見えない位置から、僕を何度殺せたかを教えるだけ。髪の毛一本触れて来ない。

衿元にスピーカーでも付いてるんじゃないかと、本気で思う。

「なるほど。それがあだ名の由来かい？」

「由来の一つ、です」

「まだ奥があると？」

「秘密です」

苦笑する。こんな掛け合いも、彼は僕の背中を身ながらしているのだ。

「僕は若者に背中を向けられるほどの人物じゃあ、ないんだけどね」

「実績のある、大きな背中ですよ。誇ってください」

ああ、タバコが吸いたくなってきた。

不意に、唐突に、足を後ろに蹴り上げる。

「っ!?!」

息を吸わず、息を吐かず、予備動作を入れない不意打ちは、どうやら有効に働いたらしい。

罪口くんは僕の蹴りを右手の直刀の背で受けていた。

蹴りの勢いで体を反転させ、接近戦に持ち込む。

殴る殴る殴る殴る。

蹴る蹴る蹴る蹴る。

微調整は全て瞬動で行う。

瞬動の真骨頂は接近戦でこそ発揮される。僕はそう考えている。

間近の人間が頻繁にブレるのだ。こちらの初動を読ませなくするには十分働く。

「久しぶりに顔を見た気がするよ」

「奇遇ですね。僕もです」

言葉を交わす間も手を止めない。足を止めない。

しかしその打撃の全てを、最初の蹴りを除く全てを、彼は避わしていた。

「まさか捌かせることも出来ないなんてね」

「驚きたいのはこっちですよ。考えて見れば、拳圧を飛ばす、なんて荒業をこなす人が、接近戦が弱い訳がないですよね」

でも、と

そろそろ、と

「僕も反撃しましょう」

大きく一步後退し、罪口くんはそう呟いた。

それを追うより早く、罪口くんは、再び消えた。

さぎくんが本気を出すようだ。

side · ガンドルフィーニ

馬鹿なっ！？罪口くんが消えた！？

さっきまでの、高畑先生の背後に回る立ち回りとは違う、完全な消失。

見ると、他の生徒や先生達、学園長までが罪口くんを見失っているようだ。

彼は今、この場にいる人間全員の死角に立っている……………！

「これで132回です」

流石のデスメガネも、空間製作には対応出来ていないようだ。

声を出した瞬間は見つかるけど、すぐに見失う。さっきまでと違い、まさに前後左右から声が聞こえるのだから、慌てるだろう。

ちなみに、音使いのスキルと黒手袋『前後左右』は使っていない。本気は出しても奥の手は隠すさ。

「……………まいったね。いざとなったら寝転がって背中を隠すつもりだったんだけど、どうやらそれでも駄目らしい」

もう何度目かしない苦笑を漏らす高畑先生。素直に自信の不利を認めるあたり、ガンドルフィーニ教諭とはものが違う。

高畑先生は両手を頭の後ろに回し、

「参った。降参だ」 そう宣言した。

「それでは、もういい時間ですし失礼します」

僕で生徒の試験は最後。僕は学園長にそう告げて踵を返した。

「うむ。各人、勤務シフトは後日伝達する。解散！」

当然だが寮の門限は過ぎている。こういう時のために魔法生徒は魔法生徒同士で相部屋なんだが（そういえば刹那と真名は相部屋じゃないようだ）、今年の男子は奇数で、僕は一般人と相部屋になった。

気配遮断が上手い、とでも聞いていたんだろう。まったく面倒極まりない。

さて、入学というひとまずの一大イベントを終えた今、一段落ついたと言っただろう。

ゆっくりとザレゴトディスクショナルを読むとしよう。

そして後日。宗教観念の薄い日本においてもサービス業と一部の働き者以外が休息を取り、小学校の僕ちゃん達が唯一自主的に早起きをしてテレビにかじりつく日。

日曜日がやってきた。

僕は茶々丸に渡された紙片を頼りにエヴァの家を捜している最中だ。

なぜ『紙片』なのか？

これが断じて『地図』ではないからである。

「女子中等部校舎を右手に見て59歩、大きな楠に向かって35歩、3回回って……」　なぜか、道のりが文字で記されていた。しかも歩尺だ。

「ちつくしょうロリの福音め！あいつの歩尺と僕の歩尺じゃ全然違うだろうが！！」

ここは既に女子領なのだ。いい加減周囲の視線がイタい。こんなところ、相部屋の谷愚痴に見つかつたら大惨事だ。あいつは女子にランク付けをするようなアホなんだ。

仕方ない。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、だ。

「すみません。ちょっとお尋ねしたいのですが」

「はい？」

立ち止まって苦悶する僕に、怪訝な目を向けながら横を通り過ぎようとした女子生徒を呼び止めた。

一つに纏めた薄い茶髪。大きな丸眼鏡。意思の強そうな目。あれ？もしかして長谷川千雨ちゃんじゃね？

「えっと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんを探ねて来たんですが、どちらにいらっしゃるかご存知ありませんか？」

学生が学生に学生の家を尋ねるにしては過ぎた敬語かもしれない。  
まあ敬語を使える若者って稀少だよな。

「……………マクダウエルさんの家なら……………」

若干怪訝そうな顔をしながら、きちんと教えてくれる女生徒。よ  
っぽど動揺しないかぎり敬語は崩れないらしい。

「いやー助かりました。なにぶん彼女に渡されたメモがこれでして」

紙片に目を通して苦笑する女生徒。ん〜、多分長谷川さんだよな。  
いや、ちうちゃんかな？いやいや、やっぱり長谷川さんがベターか。

「どうもありがとうございました」

「いえ、たいしたことじゃ……………」

もしかして、これは縁が遭ったと言えるのだろうか。

ここだな。やけに立派なログハウス。

ノックしてもしもし。いや普通にノックしたよ？

「どうぞ、お入り下さい」

中から茶々丸の声がした。中へ入るよう促しているが、どうすベ  
きか？

エヴァが客の対応を茶々丸に一任するのはわかる。納得できる。

だが茶々丸がドアを開け、顔を見せ、中へ促す。という動作を省  
き声を出すだけに留めるだろうか？

茶々丸について語れるだけの面識は無いが、用心するに越したこ  
とはないだろう。

「お邪魔します」

わざと間延びした声を出し、扉を開けて上着（学ラン）を放り込  
んだ。瞬間、学ランは見るも無惨な雑巾へと退化を遂げた。

「ずいぶんな対応じゃないか。人権どころか人命まで踏みこむ接客法なんてどこで習ったんだ？」

「んなつ!？」

エヴァが驚愕に染まった顔で振り向いた。

学ラン放り込むと同時に背弄拳で回り込んでいた僕でした。

「き、貴様が悪い!!」

やれやれ責任転嫁か。襲った側より襲われた側の方が悪い状況なんて、すぐには思い付かないぞ?しかしどうやらエヴァには続ける言葉が用意してあるらしい。一体どんなもつともらしい言い訳が聞けるのか、ちよつと楽しみではある。もつとも、どう足掻いたところで僕に有罪が下ることはないから、せいぜいいい寝物語が聞けることだけを期待しておこう。ん?なんだい?一体なんと言うつもりなんだい?600年の知識と経験を言い訳に注ぎ込んでみなよ。陪審員(いるかもしれない読者)を納得させ得るだけの言葉を吐いてみなよ。さあさあさあさあ!!!

「先週来なかった貴様が悪い!!」

実は招待された次の日曜日を自室で過ごし、その次の日曜日が今日でした。

「なんで一週間空けたのか、貴様こそ私を納得させる!」

「『次の』日曜なんて言われなかったから」

「小学生みたいな言い訳をするな!!」

「自分の落ち度を棚上げするな」

先週はアホの谷愚痴を追い出してディクシヨナルを読んでいたんだ。

「一週間延びたくらいどうってことないだろう?何週間生きてんだか知らないけど」

一年が52週と一日だから、三万千二百週間と六百日か。六百日

の計算は面倒だからパス。そういえば閏年も勘定に入れてない。

「マスターは……………」

ぼつりと、それまで無言を貫いていた茶々丸が零した。

「マスターは先週の土曜日、なかなか寝付けないようでした」

「茶々丸!？」

なにやらエヴァがうるたえだした。面白そうだから『前後左右』を付けて拘束する。

「う、動かない!?! 貴様なにをした!?!」

「まあまあ落ち着こうぜ吸血鬼。落ち着いて君の従者の話を聞こうじゃないか」

ふふふ、抜け出せまい。いくら一姫ちゃんを基準に能力を貰ったとはいえ、もともと曲弦系は拘束に特価した極限技。

ただの裁縫糸でも人の動きを封じるのだ。罪口特製の鉄鋼糸てつこうに絡まって逃げられるものか！

「枕に顔を埋めて笑いを堪えたり、ポーッと虚空を見つめてにやけたり、足をバタバタ動かしたり、とても落ち着かない様子でした。」

まったく想像できない。精神は肉体に引っ張られると言うが、まんま見た目通りの行動だ。

「あれは、そう、まるで……………」

主の顔をどこか慈しみの表情で見つめ、

「初めての友達を家に招待した子供のようにでした」

「……………「じめん」」

「謝るなああああああ!!!」

なんか、通り名に反してかなり純粹なようだ。

よく考えたら今朝の罨だつて、「先週来なかったんだから今週はきつと来る」という無邪気な信頼の現れと取れるんじゃないか？

やばい。罪悪感がムクムクと。とりあえず曲弦糸を解こう。

「ホントにごめんよ吸血鬼。もう意味の無い嫌がらせはしないからさ、多分」

我ながら浅い謝罪だが、幸いにもエヴァは顔を向けてくれた。涙目だ。

「……………エヴァでいい」

「え？」

「私のことはエヴァと呼べ！吸血鬼なんて、私がお前達を『おい人間』と呼ぶのと一緒にだ」

未だ良好とは言えないが、多少は機嫌を直してくれたらしい。

「私もお前をダンと呼ぶ」

「ダン？」

「Dead AngieからDangを取ってダン、だ」

「私のことは茶々丸で構いません」

エヴァに合わせ、茶々丸が改めて名乗った。二人とも、モノローグではそう呼んでいるが、お墨付きということなので、折角だし声に出してみた。

「よろしく。エヴァ、茶々丸」

今度、【破戒すべき全ての符】でも造って登校地獄を解いてやる。こいつらなら、木乃香や刹那とも、きつといい友達になれる。

## 第四話（後書き）

エヴァ達と仲良くなる話でした。

鷺志の周りにはもう少し人を増やす予定です

## 第五話（前書き）

明日は「花物語」発売日ですね。

明日は開店前から本屋に並びます（キリッ

この為に明日休みを取りました

## 第五話

「あ、ヤバイかも」

エヴァ達と友達になったその日の夜。僕は自室でそれを感じた。

「ん？どうした罪口」

気まぐれで学園に巡らせた探査用の糸に反応があったのだ。

侵入者はすでにこちらの警備員と交戦中。さすがに有利不利まではわからないが、それは問題じゃない。

問題なのは、そこに一般人らしき生徒が近付いていること。

認識障害魔法を仕掛けていないのか、はたまた機能していないのか、とにかく一般人がその近辺を通りかける。

いや、広い範囲で暴れているようだし、その一般人は既に戦域に踏み込んでいると言っている。

それが誰であれ、普通より死にやすい世界になんか関わらないほうがいいに決まってる。

「……………学園長から追加料金貰わないと」

「あ？なんだって？」

アホの言葉を見殺し、僕は部屋の外に出た。結構距離があるし、久しぶりに走らなきゃいけないな。

side・千雨

なんか聞こえる。

固いものが壊れる音。柔らかい物が何かに叩き付けられる音。空気の抜けるような音。誰かの笑い声。

なんつか、嫌な予感。

ここが学外なら用心しながら好奇心に従うんだが、生憎ここは麻帆  
良だ。

君子危つきに近寄らず、見猿言わ猿聞か猿だ。

仕方ない。夜になって何故か無性に食べたくなったカップ麺は諦  
めよう。ニキビなんかも気になるしな。

そうして寮に戻ろうとつま先を向けたとき、

グシャッ！！！と、

金髪の女が足元に飛んできた。

「……………え？」

飛んできた、というより、『飛ばされてきた』感じだ。着ている  
服がエロティックに破けているが、多分ウルスラの制服だろう。

「あ、あなたは……………」

女が口を開いた。端正な顔立ちは泥や擦り傷、血で見る陰もない。

「なぜここに一般人が……………、早く逃げなさい……………！」

言っていることは解るが理解ができない。なぜ傷だらけの女がいる？誰かにやられたからだ。誰にやられた？飛んできた先だろう。逃げろと言われた。

そいつがこっちにくる？

反射的に振り向いた。ゆっくりなんて余裕はない。停滞した思考に反して素早く動く首が恨めしい。

そこにいたのは

「ストップ。君は見なくていいことだよ」

「あんたは……………」

確か昼間の、マクダウエルの家を聞いてきた少年だ。

人相を聞かれれば「目が二つ、鼻と口が一つずつ」としか言えない。街を歩く男性の顔の平均を取ったような、特徴が無いことが特徴にならないほどの特徴の無さ。

「君はこのまま寮に帰るんだ。今日はひとまずぐっすり眠るといい。今夜の説明が欲しいなら、広域指導員の誰かに『匂宮と話がしたい』と言つといい。僕に繋がるようにしとくから」

どこかボーっとした頭で、私は今度こそ帰途についた。

背中に「音も効きづらいか……………」という呟きを聞くことなく。

「高畑先生、今お時間よろしいですか？」

翌日の放課後。私は広域指導員の高畑先生を呼び止めた。別の人

がよかつたけど仕方ない。

なぜかこの人には無責任な印象を受けるんだよ。出張ばかりの担任、みたいな。

「長谷川くんだね、なんだい？」

昨日の少年はなんと言っていたか、確か……………

「匂宮……………？つて人と話し、たいんです、けど……………」

名前を出した途端、先生の顔が強張った。普段は見せない厳しい貌。

「……………いつかされてはいたけど、本当に聞かれるとはね」

「え？」

「いや、なんでもないよ。えっと、『彼』に用だね？今呼ぶから、ちよつと待つてて貰えるかな」

そういつてどこか（多分匂宮さん？のところだろう）に電話をかけた。二言三言交わしてすぐに切ってしまった。

「世界樹前広場で待ってるそうだよ」

「ありがとうございました」

ていうか、あの人に取り次げるんだから高畑先生も関係者なんだよな？先生に聞いてもいいんじゃないか？

そう思ったとき、すでに先生はいなくなっていた。

side・鷺志

認識障害だけじゃなくて音を使つての操作も効きづらい。もしかしたら呪い名の天敵に為れるんじゃないかな長谷川さん。

「あ、いた」

長谷川さんが現れた。

「よく見つけたね」

「?ど真ん中で腕組んで立ってたら、見つかりますよ」

一応、空間製作は試してただけだね。

遠目にはわからなかったみたいだけど、近付いたら迷わず僕のところに来た。

「敬語はいらないよ。僕は罪口鷺志。はじめまして」

「罪口……………?匂宮じゃなくて?」

「それについても説明しよう。着いてきて」

長谷川さん(そういえば彼女から名前聞くの忘れた)を促して、僕はエヴァの家に向かった。

「……………」

今、僕と長谷川さん（自己紹介された）はエヴァの別荘を借りている。ちょうど説明が終わったところだ。

長谷川さんは眉をひそめ、顔を曇らせ、雰囲気が悪くなっている。

まあ自分の回りで日常的に非日常が飛び交ってる、なんて信じたくないよなあ。

「……………つまり麻帆良は魔法使いの都市で、魔法使いの先生や生徒なんかが霊地であるここを狙う侵入者や妖怪なんかと戦って、そのときに一般人を巻き込まないように張る結界が私には効きづらい、と?」

「ほとんどオウム返しだけど、それで間違いないよ」

長谷川さんはハア、と深く息を吐いた。

「あまり慌てた様子はないね？」

「こんなトンデモ空間見せられちゃ、そりゃな」

そりゃそつか。

「それでね長谷川さん。魔法関係者は基本、一般人を巻き込んでしまった場合、その記憶を消去してもとの日常に戻らせるんだ」

けれど、と続ける。

「けれど君は結界に干渉しない。結界が干渉できない、稀有な人種なんだよ」

「前フリはいいから、本命を話せよ」

無駄に長い台詞は僕のアイデンティティの一つなのに……

「君の記憶を消してしまうと、今回のような危険がこの先何度もあるだろう。そのとき都合よく助けてくれる人はそう居ない。君が望むなら、僕は君に危険回避の手段を示せる」

「危険な一般人に戻るか、危険な関係者になるか、ってか？」

「身も蓋も無い言い方をするとね」

長谷川さんは少し口を閉じ、思案気に目を伏せた。が、すぐに顔をあげ、

「記憶消去は論外だ。どうせ危険なら知識はあった方がいい。だから私に回避の手段とやらを教えてください」

さすが、原作において一番不安定な主人公を支えただけのことはある。あるいはこの芯の強さゆえに結界を無視できるのか。

「手段は大きく三つ。戦う。逃げる。隠れる。だね」

「逃げると隠れるは違うのか？」

「厳密に言つとね。振り切るかやり過ぎすかの違いと見てもらっていいよ」

長谷川さんは再び目を伏せた。どれがいいか考えているんだろう。今度の思考は少しばかり長かった。

やがてキツと強い視線をあげ、告げる。

「逃げながら、隠れながら戦う手段を教えてください」

たっぷり時間をかけて、彼女は欲張りな答えを出してくれた。

「隠れることに関しては、僕が使える技を教えよう」

「なんで隠れること限定なんだ？」

「戦うことと逃げることなら、僕の創った道具で補えるからさ」

そう。罪口商会と【道具作成】の合作、言わば【罪口産業】――！

「はい。これがその道具」

そういつて手渡したのは石の付いたブレスレットと大量のお札。

「お札には攻撃魔法が封じてあつて、ビシッ！とかざせば使えるから。もちろん魔力消費無し。慣れるとアクション無しでも使えるようになると思つよ」

「このブレスレットは？」

「それは所有者の敏捷性を大幅に底上げするお守りだよ。使い方は二種類。石を指で弾くか、「アクセル」と発声するだけ。持続時間は最長三時間。発動の重ね掛けで速度アップ時間ダウン、だね」

「ふーん………」

道具をマジマジと見詰める長谷川さん。　　うるんげと言うか、怪訝というか、そんな観かただ。

「ちなみにそのお守りは『快足のチャーム』と言います」

「hack／／かよ！？つて、じゃあこのお札は！？」

「火炎太鼓の召喚符〜破魔矢の召喚符まで」

「GUかよ!？」

「名作でしょ？」

「名作だけど……………」

さすがにターゲットマーカーなんてないけどね。勿論趣味百パーセントで造りました。

「取り合えず戦う手段と逃げる手段はその二つ。使っちゃったら補充するから、いつでも言ってくれていいよ。もちろん長谷川さん自身も鍛えるけどね」 瞬動は優先的に覚えて貰おう。魔法は一先ず後回しかな。

「で、隠れる手段だけど、もしかしたら長谷川さんは薄々感じているんじゃないかな？」

「え〜と……………？、流石にヒントが少なすぎじゃないか？」

「ヒント1、僕の名前」

「罪口、鷲志……………」と、匂宮っ。」

「ヒント2、隠れると言ってるけど、実際は相手の意識の裏に立つ技法」

「……………」

「ヒント3、十三階段」

「あなた西尾維新大好きだろ!？」

「いつそ西尾唯神と言ってもいいくらいだ」

はいはい無駄口無駄口。

「というわけで、長谷川さんには空間製作を教えます」

そういえば貰っただけで使ったことのない忍法足輕を教えるてもいいかもしれない。

「どういつわけだよ……、っていうか、私に出来るのか？あれは世界を終らせる手段にも使える、前準備のいらぬ呪い名みたいなもんだろ？」

「すごい主観的だけど、合ってはいるかも……？」

でも相手と規模によっては準備要るときもあったっけ。

「多分長谷川さんなら大丈夫だよ」

これって、教えようにも技自体が見えないから本来教えづらいんだけど、長谷川さんには見える訳だしね。

刹那は結局体得出来なかったけど、長谷川さんは出来ると思う。あ、ちなみに刹那は、体得こそ出来なかったけど不意打ちが上手くなったよ。

一通りの話を終えると、長谷川さんは先程よりよっぽど深くため息をついた。

「それじゃ、これからよろしく。罪口さん」

「ああ、苗字はやめて欲しいな」

「苗字で呼ぶのは敵だけ、ってか？」

まさか、と苦笑する。恐れ多いにも程がある。あまりの作中チートっぷりに人類最強と人類最終のスペックは辞退したんだ。

あ、でも筋力と敏捷A+++は十分チートか。まあオプションだし、使えてないのも許して貰えるよね？

「敵が呼ぶのは『勾宮』の名前だね。罪口の苗字は家名だからそこそこ有名、個人の名前の方が知名度低いんだ」

良くも、悪くも。

「裏稼業に身をやつしてる以上、少しでも日常は裏と離れたいんだ」

「ふ〜ん……………」

僕が人殺しであることはもう伝えてある。なのに事情を察して、普通の友人のように接してくれるのは、正直とてもありがたい。

立派な魔法使い候補たちはともかく、他の主要キャラは、どうやらいい人ばかりだ。

「なら私も千雨でいい」

ほんと、いい人ばかりだ。

## 第五話（後書き）

早速一人増やしました。

もうちょっと増えるかもしれない。

次回から前後編でオリスト（今更かな？）入ります。

## 第六話 前編（前書き）

では前編をば

もう何時間もしないうちに後編も更新できると思います

## 第六話 前編

「なぐ罪口、お前付き合い悪すぎねえか？」

朝一番で顔を合わせることになるこのアホ、谷愚痴が僕のルームメイトだ。

「いつもいつも、日曜になると出掛けっちまうしさ」

たった二週間で付き合い悪いつて、お前が人にべた付き過ぎなんじゃないか？

こいつとあんまり仲良くすると、木乃香や刹那、千雨にエヴァと茶々丸がアホの目に掛かる恐れがある。

こんなアホ、名前を知るだけ脳細胞の無駄だ。

「今日はお出掛けないのかよ？」

お前は僕に居てほしいのか居ないでほしいのかどっちだ。

今日は男子の友達と遊ぶ予定があるんだよ。

学園の周囲には糸張ってあるし、木乃香の周りには刹那がいる。生憎女子領にはおいそれと入れないから、刹那に任せっきりだけど。

なんとか負担を半減しないとな。

「なあ罪口、聞いてんのか？」

ちなみにここまで、僕は一切声を出していない。

とここで部屋の扉を叩く音がした。

「あれ、客？」

谷愚痴が怪訝な顔で扉を開けた。そこにいるのは僕と同じ1ーC  
(容姿順じゃないと信じたい)の男子生徒二人。

「おはよう。罪口くん、起きてる？」

今喋ったのが国喜田。喋らなかったのが「ジョン、国喜田。どうしたんだ？」

「どうしたって、聞いてないの？」

「聞いてない」

「ああ………罪口？」

「言っていない」

はあ………とため息をつくジョン。もちろんニックネームであって、日本人の両親を持つ日本人だそうだ。

「なるべくなら話しかけたくないのはわかるし俺も同じだが、それでもなぜか谷愚痴は俺達の友達なんだから、教えてやってくれよ」

「なんの話だ？」

「四人で遊びに行こうって話」

「俺含まれてんのになんで俺に言わねーの!?!?つか俺の扱いひどくねえか!?!?」

醜く喚く谷愚痴を尻目に、僕は不快に顔をしかめ、ジョンはやれやれと肩を竦めた。

結局アホを含めた四人でカラオケに行くことになった。

今はいわゆる商店街を歩いている、いやさ突っ立っているところである。

「谷愚痴遅いね」

「トイレ探しにどこまで行ってんだ？」

「いつそアホはほつところか」

ちなみに最後が僕だ。

ほつところ、なんて行っても僕はなんとなく嫌な予感がしていた。普段は大して役に立たない直感だし、普段なら箸にも棒にも掛けない

い（誤用である）のだが、なぜか引っ掛かる。

「仕方ない。僕ちよつと見てくるよ」

そういつて谷愚痴が走っていった方に向かった。

「いいじゃんちよつとくらいな」

「こゝ、困ります」

「いやホントにちよつとだけ。会っただけでいいから」

「あんたちよつとしつこいぞ」

ああ神様仏様。あそこでナンパしてるアホが谷愚痴じゃありませんように。

「お、罪口いいところに！可愛い娘見つけたんだ。お前も誘えよ！」

わかっていたさ。あれがアホの谷愚痴だったことも、

「あ、さぎくん」

「やれ………」

被害者が木乃香、刹那、千雨の三人だったことも。

やめてくれ千雨。僕をそんな目で見ないでくれ！！そいつが可哀相な方向にアホなだけであって、僕はそいつとは違うんだ！

「あれ？罪口この娘たちと知り合いなのか？」

「むしろお前が誰だ」

とりあえずアホを足蹴にして三人のもとへ。

「ごめん。残念ながらこいつは僕の友達なんだ」

「残念ながら？」

「麻帆良男子中等部七不思議の一つでさ、『いつの間にか友達になっっているアホの怪』ってのがあって、それがこいつ」

木乃香が笑い、刹那が苦笑し、千雨がため息をついた。

「おいおい罪口、紹介しろよ。誰だよこのA++の女の娘達！」

馴れ馴れ死く肩をくむな鬱陶死い。

「こっちのサイドテールの娘が縁録緑ちゃん。ストレートの娘がお姉さんの縁録紫ちゃん。眼鏡の娘が二人の従姉妹で先崎咲ちゃんだ」

木乃香と刹那が笑いをこらえ、千雨が呆れた。

「お前こんな可愛い娘達とどこで知り合ったんだよ！俺にもその出会いスポット教えるよ」

お前もう酢野原に改名しろ。その方がなんからしい。

「この前本を買いに出たときにコンタクト落としてさ、咲ちゃんも

眼鏡かけてるだろ？大変さを知ってるからって探すの手伝ってくれたんだ。緑ちゃんと紫ちゃんはそれのお礼をするとき一緒にいたんだよ」

「お前コンタクトだったのか？」

「知らなかったのか？」

裸眼で2・0あるわ。千雨は伊達だし。

「でも彼女達を遊びに誘うのはやめた方がいいな。実は緑ちゃんたちのお母さんがご病気でね、入院してるらしいんだ。今日もきつとお見舞いに行くところだろう。ほら三人とも買い物袋持ってるだろ？きつと見舞いの品だ」

きつと仲良くショッピングの途中だったんだろう。

「ああホントだ！いやごめんな緑ちゃん紫ちゃんに咲ちゃん。俺別に邪魔するつもりはなかったんだ」

このアホがお人よしで良かった。

「ほら、国喜田もジョンも待つてるし、早く戻ろう」

谷愚痴を促して二人の所へ戻る途中、ふと、あの三人いつの間に仲良くなったんだろう、と思った。

side・千雨

なんだっ たんだ今の……………？

今のはさぎ（あだ名でいいと言われた）だよな？

「驚かせてしまいましたね」

刹那（さぎ繋がりで仲良くなった。木乃香も友達だ）が苦笑しながら話し掛けてきた。あのアホ面には自分も驚いただろうに、説明してくれるようだ。

「ちぎくんは昔から』ああ』なんですよ」

「さぎくんはな、面倒なことがあると口からでまかせ並べて煙に巻くことするんよ」

なんだその性格。狼少年の話から学ぶことはなかったのか？

「さっきのややこしい名前はなにか元ネタあんのか？」

「名前はその時々で全部違うみたいやね。いつだったか、自分を『檻盛織刻』言うとした」

「私は『色岸識奈』と言われたことがあります」

なんでわざわざややこしい名前なんだ？いや即興で出てきたなら  
凄いとと思うけど、縁録縁って……………

「変わった奴だな」

木乃香は微笑し、刹那は苦笑した。

s i d e .

誰かと誰かと誰かと誰か

誰かが言った。

「あれが近衛木乃香か？」

誰かが言った。

「あれが頭首の血統か？」

誰かが言った。

「あれが勾宮の飼い主か？」

誰かが応えた。

「そっだ」

side・鷺志

午前中で解散し、今はエヴァアの家に向かっている。あそこは近いうちにたまり場になると僕の直感が告げていた。前述した通り大して役に立たない直感だが。

「エヴァ、いるか？」

「ダンか。どうした？」

いや、実は……

そう話始めようとしたとき、

「あれ、さぎ？」

「あ、さぎくん」

奥の部屋からおそらく別荘帰りだろう刹那と千雨が現れた。

「二人もいたのか」

「ああ。私の特訓に付き合っただけだ」

「千雨さん。もうほとんど空間制作をマスターしてますよ」

暇を見付けては別荘に籠ってたからね。そのうち年齢の弊害を無くす薬でも造ろうかな。

「木乃香はどうしたんだ？」

「私の式を飛ばしてあります」

「異変は？」

「ありません」

「おいおいおい」

僕と刹那のやり取りに千雨が割って入った。刹那もどこか不安げな表情だ。

「なにかあったってのか？」

千雨の問いと

「ん、ん」

とびつひつクと

ゴシヤツツッ！！！

エヴァがフラスコを扉に投げつけるのは、

ほぼ同時だった。

外には四人の人影が立っていた。全員成人男性に見える。

「匂宮と闇の福音に違いないな？」

質問の体をなしているが、それは確認だったのだろう。男達は返答するより早く言葉を繋げた。

「匂宮は我々の侵入を察知していたようだが、小娘を逃がすには至らなかったか」

くぐもった笑いを漏らす右端の男。応じるように他の三人も笑った。

「私とダンの名前を知って挑んで来るとはな。自殺するなら勝手にビルから飛び降りろ」

エヴァの挑発にも連中は笑いで応えた。

「近衛木乃香の誘拐が我々の任務だが、我々は勾宮、お前に興味がある」

「お前を仕留めれば我等の名はいつそう広く知れ渡る」

「お前を仕留めれば我等への謂われなき罵倒はなりを潜める」

「我等はお前が羨ましい」

つまり私怨か。しかも見当違いと見た。

「お前らを始末した後、近衛木乃香を誘拐する。援軍は期待するな？強力な呪力結界を敷いてある。このように、な」

言葉と同時、男の懐から延びた昏い赤光が辺りを包んだ。

「無限怪牢」

その眩きが、恐らく魔法具の名前だろう。

光が消えると、僕はギリシヤの闘技場のような場所で男と二人だけで佇んでいた。

「空間乖離の魔法具か。随分大掛かりだね」

「解せんな」

僕の言葉が聞こえなかったかのように、目の前の男が漏らした。

「なぜ落ち着いていられる？一緒にいた他の連中のことが気にならないのか？近衛木乃香のことが気にならないのか？」

「どうせ僕と似たような状況だろう？心配しなくても、彼女達は君ごときの仲間にごうごうされるほど柔じゃないよ」

千雨がちょっと不安だけど、空間制作はいい感じで覚えてきてるしね。

茶々丸はエヴァ家に残ってるからこのことを学園長に報告してくれる（後始末くらいはできる）だろうし、木乃香には信頼できるスナイパーを雇ってある。

「昼間にあれだけ動いとして、対策されてないはずがないだろう？」

探査の系がずたずただったしね。動くまでは時間があつたから、問題はスナイパーが高給取りだつてことくらい。

「……………まあいいさ。我等は貴様と闇の福音さえ倒せればそれでいい」

そういつて、男は背を丸め、大きく息を吸い込んだ。

### 烏族獣化

烏族の混血だったのか。

「我等の名は『亜形』（じあけい） たつた四人の精鋭達だ」

変化前の口でそう告げ、変化後の嘴で、名乗った。

「私のことは、そうだな。烏族と、そう呼べ」

S i d e ・ エ ヴ ア

『亜形』

そう名乗ったそいつは大きな大きな鬼だった。

「僕は鬼と人の混血。赤鬼とでも呼ぶがよい」

「ならば私は様を付けて呼べ。それで貴様に呼ばれることを我慢してやる」

「かつ！童がようほぞく」

さつきから挑発しているが反応は芳しくない。大味な見た目に反して沈着であるらしい。

今私はゴツゴツした岩礁地帯に立っている。四方を海で囲まれた小さな島だ。

「万が一にも逃げられたくは無いからのう。流れる水で辺りを囲った」

「いらん配慮だ」

もとより『ここ』に来た時点で、私に逃げるつもりはない。

「さあ西洋鬼。この赤鬼が東洋鬼の恐ろしさを見しちやる!!」

叫んで、赤鬼が突進してきた。

side・刹那

『亜形』、か。

寂寥感が漂う荒野で、私と男は対峙している。

聞いたことが無い組織だ。それほど深いところにあるのか、たんに無名なだけか。

「さあねーちゃん。神鳴流のねーちゃん。楽しもうぜ？」

さっきまでどこにでもいる優男だった人物は、今や耳と尾、獣毛を生やした半人半獣と化していた。狗神と名乗ったこの男。狗族のハーフか。

知らず、自身の背中に意識が向く。知らず、自身の髪を目で捉える。

忍子の証の、白。

「貴様に『ねーちゃん』と呼ばれるような年齢ではない」

後ろ向きになりかけた思考を強引に振り切り、強く声を出した。

狗神はけたけたと笑う。

「それもそうだが、嬢ちゃんとは呼ばれたかねーだろ？なんか馬鹿にしている風だぜ。あんたをそう呼ぶとさ」

この男……………

「知ってるぜ。あんたの白い翼のこと。あんたの白い髪のこと。あんたの紅い瞳のこと」

この男……………！

「あんたは呪われた仔だ。そうだろう？」

この男……………！！！！

「さあ呪われ仔。俺と遊ぼう。呪われた翼を、呪われた体を振るってみせろー！！」

S i d e ・ 鷺志

「パス」

S i d e ・ 千雨

『亜形』！？知るかつ！！

なんだこれどこだこ誰だこいつっ！？

後ろには確かについさつきまであったエヴァハウスは跡形もなく、  
それどころか四方を囲う植物すべてに見覚えがない。

あるとすれば画面越し。なんかの特集で見たどっか外国の森林。

エヴァンジェリンの別荘の亜流か？どっかの森林地帯に飛ばされた？

なんにせよ、さぎ達と隔離されたのはいたい。私に出来るのは影に、陰に隠れるだけ。裏に立つことだけ。

チャームの効果だけじゃ逃げ切るのは難しいってさぎも言っていた。瞬動だつて練習中だ。

まずは目眩まし！

「おれっちの名前は猿」

「火炎太鼓の召喚符！」

思わず叫んじまったあ！？

だけど目眩ましには充分だ！熱と光で、一瞬でも視界は消える！

「おれっちの名m……………あれ？」

何か喋ってやがるが気にしない！空間制作の才能があつて良かったぜ……………

「おおっ？どこに隠れた？」

いつの間にかでかい猿みたいな外見に成ってやがる男が大きな木や葉っぱの裏を探している。

遮蔽物が多いフィールドで良かった。視覚的な死角も多いし、むこうはこっちが隠れてると思ってくれるから、私は堂々と立っていられる。

助けが来るのを待つのもありだが、他もこんな状態なら時間がかかるんだろっなあ……………

「どこにいつか知らねえけど、聞こえつか？おれっちの名前は猿王えんのうだあ」

やたらと間延びした声でどやす男。聞こえちやいるが応えてやる義理はないよな。

ああくそ。毛が焦げちゃいるが火傷すらしてねえんじゃねえか？

早く助けに来てくれよ。

## 第六話 後編

side・エヴァ

目の前の、赤鬼が大きく吠えた。

「ふはははは！！どうしたどうした！！大きいのは凶体と口だけか？」

私の胴体より太いこん棒を奮う巨体を虚仮にする。

右に振るわれれば下に、左に振るわれれば上に。大振りになったら即座に懐に入る。しかし、攻撃はしなし。

「ぐおおおおおおおお！！！！！！」

屈辱に顔を歪ませ、赤鬼がより力強くこん棒を振り回す。

「はあっはははははははは！！！！！！」



今の私は、より全盛期に近いぞ……………！

side・刹那

「おうおう！なかなか速いじゃねーか」

この男、私の縮地について来る！？さぎくんに唯一素直に褒められた速度を、この男も持っているということか。

「速度が自慢かい？悪いが俺もさ！人間と狗じゃ基本的な身体能力が違っんだ！！」

「基礎が高い貴様が私と同程度なら、才能も努力も私が上だな」

「あぁん！？」

随分単純な脳みそだな。こんな簡単に挑発に乗るんじゃない、仲間もさぞ大変だろう。

「凄むのはいいが言い返す言葉が無いんじゃないのか？それとも言い返す頭が足りないか？」

さぎくんならもつと上手く挑発するだろう。

相手の逆鱗を雨垂れで穿つように騙るさぎくんの挑発は、味方としてもハラハラする。

「よおしそこまで言うなら俺とスピード勝負だ！！」

……まさかここまで単純とは……

烏族と名乗った（偽名とすら言えない。僕が『こんにちわ日本人です』と名乗るようなものだ）男は、どうも人の血が薄いようで、見た目は烏族そのものだ。

「貴様の戦い方は有名だ。噂を広めようとしたこと、その弊害を知るがいい！！」

偉そうに語る男は既に地上に居ない。僕の頭上から大声で話し掛けて来ている。

なるほど確かに勤勉家らしい。

上空で羽ばたいている彼奴に糸は届かないし、届いても風と音で乱れる。同じ理由で音も使えない。近付いて来るところを狙うしか無いのだが……

「『魔法の射手連弾・氷の69矢』！！」

これだよ……

ちよっと横に動いて斬刀・鈍を取り出し、

「零閃編隊・七機」

しゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃりんしゃりん！

1機で2、3発切り落とし、自分の体に当たるものだけを防ぐ。  
制服が少し破けた。

「神鳴流に飛び道具は効かないよ？」

「神鳴流でない技を使っておいでよくほざく」

「いやいや、これはれっきとした神鳴流だよ。ただ君が知らないだけで、同時に僕が知ってるだけ」

僕が神鳴流を習ってから正式に形に加わったんだぜ？僕以外誰も出来ないけど。

「しかし、確かに埒が明かないな……。少し手段を変えようか」

言つと男は始動キーと呪文を呟きだした。上空にいるからって随

分悠長な。

ひよいと杖を取り出して、

「『魔法の射手・闇の一矢』」

「む!？」

男が慌てて翼を動かし、かろうじて矢を回避する。数射ってなんぼって作中でも言ってたし、こんなもんか。

「西洋魔法が使えるのか……。今までの貴様の被害者達は皆、斬殺体だったはずだが」

「使わないと使えない。一字違いで大違いの好例だね」

まあこういう勘違いを期待して今まで表立っては使わなかったんだけど、まさかホントに勘違いしてくれるなんてね。

「しかし、今のは失敗だったな。もっと多く射っていれば中たっていたかもしれないぞ」

お言葉に甘えよう。

「『魔法の射手連弾・闇の199矢』」

「むおおおう!?!」

大慌てで羽ばたく男の姿が実に滑稽だ。可笑しくって仕方が無い。自然と頬が歪む、いや緩むのを感じる。

ちなみと言うか、もちろんと言うか、エヴァのを見取った。

「ぐうう! 『風花・風障壁』!!」

あれは確か10tの衝撃に耐えられるけど一瞬しか持たない上に連発不可っていう魔法だよな。

おっ上手い。楯張りながら突っ込んできた。ホーミングは弱効果だし、あれなら十分か。

「はあ、はあ、はあ、はあ………。やっと見せた表情らしい表情がそれとは、貴様それでも人間か!?!」

酷い言われようだ。傷付くねえ。あまりの衝撃に50矢追加しちゃう

「ふうん!!」

最初から持っていて、実は今まで使わなかった大振りの鈍のような武器を振り回し、魔法の矢を叩き落とした。

「魔法使いでもない貴様がそれも簡単に無詠唱をポンポンと……!!」

それでも努力したんだけどね。見稽古じゃ魔力の運用までは見取り切れなくて。

ところで「」はやり過ぎた気がする。お茶目な男の子へのジョブチェンジは高難易度だ。

side・千雨

「さつきからちまちまちまあ……………」

大男（猿王とか言ったか）がぼやくのが聞こえる。

定期的に呪符で攻撃したり、投石で意識を逸らしたり、あるいは攻撃に見せかけて木を倒すのが目的だったり、穴を掘ったり葉っぱの位置を変えたり。

もちろん定期的であることを悟られないようにずらしながら続ける。

流石にさぎには遠く及ばないので空間製作にも手間が多い。習う前の言葉を拾って訂正したい。

ちよつと頑丈過ぎんだらあいつ！？火も水も風も岩も闇も光も効きやしねえ……………！

ちよつと肌の面積が増えたくらいで、かろうじて破魔矢で裂傷をつくれただけか。

「いい加減出てきてくんねえかなあ」

喋り方が鬱陶しい割に気は長いらしく、力任せに辺りに当たり散らすことが無いのありがたい。

「冗談じゃない。姿を見せようもんならどうなるかわかったもんじゃねえ！」

これじゃギリ貧だ。なんとか打開策を用意しねえと………！

取り合えずその場凌ぎを続けるのが、今の精一杯。こつこつとき  
は、各種主人公の閃きが羨ましい。

ま、時間稼ぎってことは時間があるってことだし、実験的に色々  
試そう。まずは温度差から。

ポケットから火炎太鼓の召喚符を取り出し、猿王に向けて構えた。

side・エヴァ

「『闇の吹雪』!」

洋の東西は違えど、流石は鬼。最強種わたしの類似だけあってタフネスだけは尋常じゃない。私の魔法を頑丈な表皮と、なんらかの魔法具による障壁で耐えきっている。

「いい加減倒れる。貴様が我慢強いと私もいい気分では暴れられるが、他の連中が少しばかり心配だ」

ダンとサクラザキは大丈夫だろうが、ハセガワが心配だ。

そう言うってから、そう思ってから、ふと気づいた。

まさか、私が他人の心配をする日が来るなんて、な。

「その顔……………」

私の自嘲を見てとって、赤鬼は忌ま忌ましげに顔を歪めた。

「その顔は気に入らん……！！」

「言われのない非難だな。私は600年ほどこの顔でいるが、それは私のせいじゃない」

鼻を鳴らして見下す私に、しかし赤鬼はそれを否定した。

「違うな」

「何が、違う？」

「吸血鬼に為ってから600年のうち、最初の頃は恐怖と懐疑に満ちた顔だったはずだ」

こいつ、私が後天的な吸血鬼であることを知ってるのか。

驚きではあるが、別に隠していることではない。だからどうした、だ。

「そのうちに自責が混ざり、怒りが混ざり、そして諦念に至った。自身に味方はなく、四方を見回せば敵ばかり、とな」

「まるで見てきたように言っな」

「体験してきたのだ」

赤鬼の言葉に、僅か鼻白む。

「我らは、体験してきたのだ」

side・刹那

「体験……………？」

馬鹿げた提案とは思いながらも乗った勝負（駆けっこだった）で五回目の引き分けを向かえ、なぜか唐突に自分騙りを始めた狗神に耳を貸していた。

向こうから時間稼ぎを始めるとは、本当にありがたい。

「お前は、京都の生まれなんだろう？あそこはいい。ハーフだって、よっぽどの例外でなければ受け入れらる」

よっぽどの例外とは、言ってくれる。

「俺達の生まれはもっと違うところだった。バラバラだった。ハーフってだけで迫害された。生まれて最初に、産湯より先に罵倒を浴びた」

不幸が自慢か。

それなら私だって騙れるし、さぎくんだって負けないだろう。ようは生まれを呪って生きてきて、ようは理解者が居なかった。そう言いたいんだろう。

「いやま、実際そー言いたいんだけどな」

もうちょっとなんか……と頬を搔く。

「聞いていてあまり気持ちのいい話じゃないからな。とある人物のお陰で、話の腰を折るのは得意なんだ」

「威張んなよ。誇れるこつちゃねーだろ」

「すみませんさぎくん。同意します。」

「俺達は、親の愛を受けなかった。友の愛を作れなかった。寵愛も敬愛も、恋愛なんかもありやしなかった。『亜形』の間にあるのだから、友愛じゃなく仲間意識でなく、ただ見下し合ってるだけ。あいつより俺の方がマシだ。俺よりあいつの方が悲惨だ。そうやって自分の傷を自分で舐める。傷の舐めアイすらしちやいない」

独白を続ける狗神に、かつての自分を重ねることは、もうない。

「どつでもいい」

男の独白を聞いて、最初に出た言葉がそれだった。

「不幸自慢とか」

「不運自慢とか」

「なんでもいいしどうでもいい」

「なんだかんだ言つて、結局あんた達が言いたいの『愛』に『飢え』てるってことだけだろ？」

「そんな奴どこにでもいる。別にあんた達が特別ってわけじゃない」

「さも悲劇の主演であるかの様に言ってるけど、あんた達はどこまでいっても脇役だ」

「どこまでいっても引立て役だ」

「これ以上は無駄口さえ時間の無駄だ」

すらり、と鈍を鞘から抜き放つ。同時に左手に鉋を。

「来なよ。次の一合で切り伏せる」

「……………抜いてしまつては居合はできまい」

「あれはもともと秘剣なんだ。あんたに見せるのは勿体ない」

「吹いたな小僧!!」

激昂した烏族が、僕に向かって落下してきた。

side・千雨

「なあ頼むよお。そろそろおれっちもなんか言わなきゃなんねえ気がすんだよお」

色々試した結果、やっぱり破魔矢が一番効くようだ。

だが一発じゃ足りない。じゃあいっぱい射とう。

子供みたいな発想で、破魔矢の同時発動のために準備を進めていく。

「おおい」

なんだか泣きそうな声が聞こえるが、無視だ。

準備と言っても、ようは何枚か同時に手に持つだけ。同時使用は初めてだから上手くいくかは解らないけど、やらないよりはマシだろう。

やらずに後悔するより、だ。

私は相変わらず姿を隠したまま、猿王の背後を取った。

右手に五枚。左手に五枚。それぞれが干渉しないように間隔を空けて構える。

準備は完了。心の準備も終わった。後は狙いをつけて、失敗しないように、気をつけて。

破魔矢の召喚符！！

左右合計十本の光の矢がすべて猿王の右膝に殺到した。

よし、上手くいった！

猿王の膝は、なんとちぎれることなく、しかし半分を吹き飛ばされていった。もう動かすことは出来ないだろう。

「ぐううおおおおお！！！」

全く予測していなかった痛みと衝撃に、猿王が苦悶の表情で絶叫する。

巨体を地面に倒し、足を抱え込むように転がっている。

この好機を逃すほど、さぎの鍛え方は温くない。

一時的に空間製作を解いて猿王に接近。顔の近くに膝をつき、そして……

猿王の周りに結界を張った。

と言って、もちろんエヴァのような魔法使いが張るそれじゃない。

空間製作とエヴァの簡易催眠術（本来は精神を別の空間に連れ込むためのものらしい）の合わせ技。名前はつけてないけど、とにかく自分以外のものを意識できなくする。

認識できても意識できない。確かにあるのに解らない。

あの別荘がなかったらモノに出来ていないだろう技術。

何かに大きく気を取られていないと掛けられないが、一度掛ければ後は楽だ。耳元で囁くなり目を合わせるなりで重ね掛けすればいい。

ふう。と息をついて、それでもちゃんと警戒して、少し離れたところ腰を下ろす。

「さびい。後は任せた」

S i d e ・ エヴァ

私としたことが、動揺したか。

血に塗れた体を見下ろし、自嘲気味に口の端を上げる。

「貴様ごときを相手に返り血を浴びるなんて、随分鈍ってしまったな」

何も応えない骸と為った赤鬼を見下ろし、私は右手を軽く振った。

血振りの必要もないのについてしまうのは、この魔法がまがりなりに『剣』だからだろうか？

『断罪の剣』

私は一体、この鬼のどんな罪を断ったのか。

そんな感傷的なことを、つらつらと考えていた。

らしくない。この鬼の言葉にあてられたか。

そう言って、自嘲しながら。

S i d e ・ 刹那

「斬岩剣!!」

「きかねーって」

もう何度目か、狗神が私の斬撃をかわしてみせる。

「俺は対神鳴流のために特化して鍛えられてんだ。神鳴流剣士じゃ、

なにがあっても俺には勝てねー」

先程語った生い立ちに関係があるのか、あるいはただの気まぐれか。とにかく狗神は本当に神鳴流を知り尽くしているようだ。

いかに同じ流派とはいえ、個々人で変わる予備動作をすっかり見て取り、こちらが技に移る前に避けている。

避けながら攻撃されたことも、何度となく。

最早満身創痍と言ってもいいくらいに、私の体は傷ついていた。

「諦めなつて。ねーちゃんなら俺達と同じハーフだし、悪いようにやしねーよ。ただ匂宮を殺して、近衛の次期サマ拐わかすだけだつて」

こんなとき、さぎくんならなんと言うか。考えるまでもなく分かる。

随分前にした質問だ。

『死んだら何もならないよ。ありきたりで悪いけどね。死んでもせ

いぜい微生物が喜ぶだけだし、矜持もプライドも誇りもかなぐり捨てて生き延びた方がいいよ』

矜持とプライドと誇りは同じ意味では？

『そこが大切。全部同じ意味だけと言い方が違うと使いまわせるでしょ？何をどう使うか、それを考えるだけで選択肢は広がる。時には選択肢を選択しない選択肢もあるんだよ』

私は

「降参だ」

そう呟いた。

「お？」

「降参だ。そう言ったんだ」

狗神は訝しげに私を見ている。まさか本当に勝負を放棄するとは思わなかったんだろう。

「提案なんだが、私を『亜形』に加えてくれないか？」

「何い？」

素っ頓狂な声音で聞き返す狗神。そう驚くことでもないだろうに。

「そつだな……………桜咲を転じて『桜』『裂き』。『桜』を『斬る』。』おつ』を『きる』」

しっかと狗神に目を合わせて私の閃きを伝える。

「尾切羽。でどうだ？『亜形』の五人目、『尾切羽』だ」

「く……………ははは……………」

狗神は呆けた顔で渴いた笑いを漏らし、私を凝視している。私の真剣な眼差しを見て考えあぐねている。

動揺、しているのだ。

「百裂桜花斬ッ！！！」

渾身の力で奥義を放つ。桜の花弁の如く散る気と、剣圧で舞い上がる砂塵。

渾身の一撃に、手応えはなかった。

「あつぶねー、なんてこともねーよ。こんな不意打ち、不意打ちとも言えねーぜ。だいた」

斬斬

「報復絶刀！！！」

一撃目を避け、安心して能書きを垂れはじめた狗神に大上段からの必殺を叩き込む。

手応え、充分……………！！

「て、めえ！神鳴流じゃ……………ね、ーぞい、まの太刀……………！！」

「神鳴流剣士だからといって、他の剣術が使えない訳じゃないだろ  
う」

使わないだけ。

いつだったか、さぎくんはそう言っていた。

神鳴流の奥義を避けてからの、ただ振り下ろすだけの稚拙な攻撃。

斬閃も剣線もない、剣技ならぬ力技。

一流の相手ならまず通用する。と教えられた不意打ち用の技だ。

「……………」

どうやら狗神は事切れたらしい。右肩から左脇腹へ、胴体を半ば  
まで斬られて僅かでも息があつたことが異常なのだ。

「ふう……………」

このため息は辛勝を修めたことへの安堵か、自身の相棒への弔い

か。

私の右手には、大きく曲がって、大きなヒビまで入った夕凧が握られている。

s i d e ・ 鷺 志

ビュウウウウウウウ！！

猛烈な風切音をたてながら男が急降下してきた。

真上を狙う辺り、やはり空中戦には慣れているんだろう。

僕には武器での攻撃は普通に通用する。僕が呪い名の罪口じゃないからか、あるいは摘菜じゃないからか。ともかく僕の体は武器で傷つく。

だからあれを迎え撃つ必要があるのだが、いかんせんかなりのスピードだ。左右どちらの刀を使っても、辛うじて受けるのが精一杯だろう。

男の目は鋭く僕を睨みつけている。どんな些細な動きも見逃さない。どんな微細な動作でも見抜いて見せる。そういう目だ。

だから僕は特になにもせず、ただ鈍と鉋を隠した。代わりに両手には『前後左右』

「!？」

この手袋の意味を知っているのか、男は羽を広げて急制動をかけた。しかし間に合うはずもない。そういうタイミングを待ったのだ。

では、

「本邦初公開」

急制動の風圧に乗り、僕の体が大きく舞い上がる。

上から覆い被さるように落ちてくる物体と、それが起こす風圧に

よって、その物体の真上に。

「忍法足軽」

この声は、きくと聞こえなかったと思う。

side・千雨

私が猿王を封じてから、それほど待たずに辺りは見慣れた学校の敷地内に戻った。

既に魔法先生達が待っていて、生き残り（なんと猿王だけだ。みんな血の気が多すぎる）を拘束してどこかへ連行していった。

私も関係者で、しかも敵を無効化したと知った瀬流彦先生が目を剥いていた。優秀な先生が三人もいるんだ。これくらい出来て当然ですよ。

エヴァと茶々丸に見送られ、今は三人で歩いている。

「今回のことで、詠春さんは対応を変えざるをえないだろうね」

「護衛が二人揃って敵さんの術中だもんな」

刹那とさぎが暗くなった。やっちまった。

「そ、そういえばさ、さぎ」

咄嗟に話を振ったが、何を言えはいいやら。いやもちろんそんなつもりは無かったと謝って、お前らは普段からよくやってるとか言うべきなんだろうが、なぜかついと口が動いた。

「なんで昼間の男友達はさぎを苗字で呼んでたんだけ？」

それは昼間から気になっていたことだった。刹那もそういえばと顔を向ける。

対するさぎは、あーあれね、なんて気のない様子でいる。

「特に意味はないけど、あえて言うなら彼等はツナギだからだよ」

「ツナギ？」

「そ。安い加工肉に使われるカンガルーの肉みたいに、彼等は導入から本編へのツナギなんだよ」

「ちょっと待て。今聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ」

「っていつか聞き捨てならないことしか聞こえなかった。」

「自分の友達をそんな扱いかよ……………」

「あの、さぎくん？カンガルーのお肉って、嘘ですよ？いつもの無駄口ですよ？」

「お腹減ったね。やっすいハンバーグでも奢るよ」

「少なくとも今はいらねえよ……！」

「いつはまったく。麻帆良のぬらりひょんより、よっぽどぬらりくらししてやがる。」

とにかく疲れた。眠くて仕方がない。もちっと平穩な日々が欲しいね。

「變は最上。上には變があり、變の上は何も無いんだよ」

## 第六話 後編（後書き）

ちょっと長めになってしまいました。

冗長にはならないように気を付けたのですが……

親切な指摘から辛辣な意見まで、ビクビクしながらお待ちしています。

## 第七話（前書き）

なんの予告もなくタイトル変更してすいません

前のタイトルは友人知人から総スカンを喰らってしまった。

それで変更したのですが、どうも僕にはネーミングセンスがないよう  
うです……………

## 第七話

指定した場所には相手の方が早く着いていたようだ。

「待たせちゃったかな？」

「時は金なり、という金言について考えていたからね。そう暇でもなかったよ」

チクチクと攻撃された。待っていたことも否定しないし。

「まあ、この後に用事があるわけじゃないし、多少色を付けてくれれば文句はないよ」

しかもたかられた。

「ここは僕が持つよ」

言うが早いか、龍宮さんはウェイトレスを呼び止めてあんみつを注文していた。電光石火とはこのことか。

「はいこれ。言われた通りの額だよ」

すすすと差し出す茶封筒。中には、お岩さんが数えれば「一枚足  
「……………五枚多い」ってなる人数の福沢諭吉が。

これでも友人価格と初回割引で安くしてくれているらしいが、学生にはキツイ額だね。一応収入はあるけど。

「うん。確かに」

チラツと中を見て、満足気味に頷く龍宮さん。何かの間違いじゃないかという期待は、今崩れた。

「ところで、どうしてこんなお店を待ち合わせ場所に？」

『こんな』とは言うが、取り立てておかしな場所じゃない。ごく普通のカフェテリアだ。

「ただの、じゃないだろう。こんな、いかにも女の子の子した店。ちよつと鷺志さんのイメージと違うと思うけど」

「特に意味は無いんだけどね。この後ここで待ち合わせしてるんだ」

僕の答えに、龍宮さんは渋面を作って苦笑した。嗜めるような口調で、

「女性との待ち合わせ場所に、そういうチョイスはいただけないな」

・朝6時に呼び出し

・次の予定がある

・次の予定に合わせた待ち合わせ場所

3分の2を満たしている……………！？

行橋未造の忠告を活かしていなかった。

運ばれてきたあんみつに目を移して、龍宮さんは嬉々としてスプーンを手に取った。なにこれ可愛い。

「待ち合わせの時間は大丈夫なのかい？私はこれを食べ終わるまで退く気はないよ」

「それについては大丈夫。待ち合わせは1時間後だから。まさかそれまでには食べ終わるよね？」

僕の言葉を聞くと、龍宮さんはイタズラっぽく微笑んだ。

「なら早く食べ終えて、陰から鷺志さんを見ていようかな。慣れない場所で所在なげに佇む鷺志さん……………売れるな」

誰にだ。売るな。というか撮る気が。

ところで、話を換えようとする龍宮さん。こんなに自由な人だったのか？

「近衛さんのことはどうなるんだい？」

「木乃香のこと？」

「魔法について、話すのか、話さないのか」

僕と刹那、二人揃って隔離されたという事実がある以上、魔法について話して、それなりの知識を持ってもらう方が木乃香も安全だ

ろつ。というのが僕と刹那の意見だ。

後始末を学園に任せて寮に戻った僕は、谷愚痴に解らないよう声を調整して詠春さんに事の顛末を話した。

その返答は、今日明日中には届くはずである。

「気にしてくれるんだね」

「鷺志さんは大口の客になってくれそうだからね」

それが本心なのか照れ隠しなのか、僕には解らないが、後者だと思っただ方が夢があるだろう。

ほどなくして、龍宮さんが席を立って、僕が気配を絶って周囲を確認し、確かに龍宮さんがいなくなったのを確認してからほどなくして、待ち合わせの相手がやって来た。

「お。待たせちゃったか？」

「大丈夫。待つてすらないよ」

「いやそれはいつそ失礼だろ……………」

待ち合わせの相手。誰であろう千雨である。伊達眼鏡の奥にある眼をすがめて早速ため息をついた。

「じゃ、行こうか」

千雨を促して席をたった僕だが、すぐに足を止めた。服の裾をつまむ感触に止めざるを得なかった

とかなら可愛かったのだが、残念ながら足を止めた理由は髪をむんずと捕まれる激痛だった。

「……………流石に痛いよ」

「さぎくんが無視せんかったらせえへんもん」

可愛らしく頬を膨らませる木乃香だが、傍から見ると、いや当事者から見ても乱暴極まる所業だ。

「このちゃん、さぎくん。その辺で」

刹那に窘められる。確かに、不要な視線を集めているようだ。

「久しぶりやね。さぎくん」

「一週間ぶりだね木乃香」

先週の土曜日以来かな。なんだか随分会ってない気もするけど。

今日は珍しく四人で遊びに行く予定だ。昨日の騒動の前から話していた事だったし、昨日の今日で木乃香から離れずにいられるのはありがたい。

「さぎくんはどこ行きたい？」

「僕はどこでもいいよ」

褒められた回答じゃないだろう。何も言われないのは僕の性格を理解してくれているからか。

「私は皆さんが行きたいところに」

「私もこれといって無いな」 こういう、計画を立てずに遊びに行くのは現代っ子特有のものらしい。携帯が発達してからは計画的な行き当たりばったりが普及したそうだ。

そしてカラオケ

そういえば僕はカラオケに来るのは初めてだ。

暗さといい狭さといい、子供の頃にお菓子とジュースを持って這入り込んだ押し入れの中を彷彿とさせる。

押し入れの中で熱唱すると思うと、また違った、倒錯的な楽しみがある。かも。

「さぎくん歌上手いな」

「次、刹那だよな」

今し方『鋼の救世主』を歌い終わったところだ。千雨はなんだか珍獣を見る目で僕を見ていた。

「……………マイクで人格変わりすぎだろ」

そんなことないと思うけど。僕は普段から熱いパトスを迸しらせているというのに。

「メルトツと〜け〜て〜し〜ま〜いつそお〜」

あれ？刹那……………だよな？

はにかみながらも歌詞を完璧に歌う刹那は、なんと云うか随分と印象が違う。

「今日のために私と別荘で特訓したんだよ。歌なんて歌ったことがないそうだな」

エヴァよく貸したな。もしかしてエヴァも一緒に歌ったりしたんだらうか？

それにしてもよく『メルト』なんてあったもんだ。なんてメーカ

「だろっ？」

ヒヨイとディスプレイの機械（名前わからない）を手に取って確かめる。これが社名かな？

『ジヨード』

ジヨードねえ？まさか漢字で浄土、と書くのだろうか？はは、まさかね。

「曲のチヨイスも千雨？」

「あれは刹那が気に入ったやつ」

一体どうやってボカロなんて……

この後、千雨が『God Knows・・・』を歌ったり、木乃香が『亡國覚醒カタルシス』を歌ったり、三人で『1000%SPARKING!』を歌ったり。ここにこんな曲があるあたり、もしかしたら本当に浄土かもしれない。

次いでゲーセン

ここではシューティングゲームで僕が活躍した。

龍宮さんとは何度か警備に当たったことがあるので、その時見取った銃術を応用してみた。

「ちぎくんすげーいい！」

表示される『パーフェクト』の文字に、木乃香はきゃっきゃと喜んでくれている。しかし僕の表情は曇っているだろう。

「努力の伴わない結果なんて、虚しいものだよ……………」

「虚しいのは景品じゃねえか？」

「え〜？可愛いやん。ねえせつちゃん」

「えー！？ええつと……………」

ちなみに景品は1分の1オオアリクイ。剥製？いいえぬいぐるみです。

「なんでこんなに精緻なの？っていうかこれ、5キロはあるよ」

まったく。こんなもの貰ったところで、僕じゃなかったら往生してるところだ。

「ちょっと待て。今どこにしまった？」

「え？見ての通り、ポケットだけど」

「そんなサイズのぬいぐるみが入るポケットなんて、見ての通りなわけねえだろ！？」

まあもちろん暗器術だけど。

レースゲームでは以外にも木乃香が独走した。まあこれに関して木乃香が凄いのか僕たちがへばいのかは判然としないけど。

「さぎくん逆走しすぎ」

「なんでスタートと同時に後ろ向くんだよ」

「僕に聞かないでくれ。この車が勝手に後ろを向くんだ。きっと何か大事なものを過去うしごに置いてきてしまったんだよ」

「ちょっと格好良く言わないで下さい……」

四面楚歌だね。三人だけだ。

クレインゲームは千雨の独壇場だった。慣れているのか、木乃香や刹那のリクエストをポンポン取っていく。

僕なんか一つで精一杯だ。

僕が取ったのは愛らしくも見える人形だった。

手の平より少しだけ大きい、しかし不思議と手に馴染む感触。暖かみのある、植物由来のエコ素材。きっとこれから流行の先端を行う人気の人形になるはずだ。

「どう言い繕ったって、お前が取ったのは藁人形だからな」

千雨は僕に夢も見せてくれないのか。

僕が取ったのは、藁をヒトガタに縛っただけの、実に簡素な藁人形だった。

「吸い込まれる用に動いたな。クレーン」

「脇目も振らずにその人形に向かいましたね」

「交換しない？」

「いっや」

「断る」

「あ、あはは……………」

にべもないとはこのことか。

そのまま一日を遊び通し、空が茜色になる頃。

「木乃香。これあげる」

僕は木乃香に一つのシンプルなブレスレットを手渡した。純銀製ではあるが、一切の意匠がない小さなチェーン。

「貰えるんは嬉しいけど………どうかしたん？」

「いや、ただのお守りだよ。それを着けると、布団に入ってから『ああ！なんか無償にあの漫画のあのシーンが見たい！！』ってことがなくなるんだ」

千雨の肩がピクツと動いた。欲しいのだろうか。

「そんななるのさぎくんだけやえ？それにお布団入ったらブレスレットなんて着けてへんし」

「じつとも。」

「じゃああれだ。無病息災の祈願」

「…………ま、さぎくんがおかしいのはいつものことやしね」

あんまりだ。千雨と刹那が肩を震わせているのがわかる。あんまりだ。

その掛け合いを最後に、今日のところは解散の運びと相成った。

解散から十分後。エヴァ家。

「じゃあ刹那。夕凧見せて」

「はい……………」

刹那に渡されたのは、大きく歪んで、ヒビの入った夕凧だった。ここまで酷いと…………

「直すのは無理かも。打ち直した方がいい」

ガツクリと頂垂れる刹那。詠春さんから譲り受けたものだしねえ。

「詠春さんからの物だからこそ、壊れたんだよ」

「え？」

「この刀は詠春さんと、『紅き翼』と一緒に戦ってきた刀だ。いい加減寿命だったんだよ。刹那が落ち込むことじゃない」

「ですが……………」

「刀なんて、僕が持つてる一振り以外消耗品だ。折れるし曲がるし刃も鈍る。僕が新しく打ってあげるよ」

といつても上手く打てるか解らないけどね。罪口のスキルがあっても、普通の武器は良く考えたら造ったことないし。

古槍頭巾や四季崎記紀のようには行くまい。

僕たちのやり取りを見て取って、

「そんなことしなくても、仮契約すればいいだろう」

こともなげに、エヴァがそう言った。

「仮契約、つてのは？」

「魔法使いとその従者が結ぶ契約の、いわばお試し版だな。魔力の供給で身体能力の底上げもできるし、『アーティファクト』という便利アイテムも貰える」

「……………そんなのがあるなら、最初に教えてくれても良かったんじゃないか？」

「教えても、最初の貴様なら断つただろうさ」

「あん？なんでさ？」

千雨とエヴァのやり取りは置いていて、

「そつだね。刹那なら多分刀か剣が出るだろうし」

僕が打つより、時間も手間もお金もかからない。暗器術を持ってない刹那でも持ち運べるし。

「よし刹那」

仮契約しよう。と言つ直前。

「おいダン」

「え？」

エヴァに呼ばれ、振り返ったところで、

唇に柔らかい感触が。

「~~~~~っ!!!」

顔を真っ赤にした千雨にひたすらポカポカ叩かれています。僕です。

「いやハセガワが渋って面倒だったから、私の糸で」

面倒だからで女子中学生にキス強要すんな。

「しかも契約の魔法陣敷いてないだろ」

「ああ、忘れてた。すまんハセガワ。もう一回」

千雨が破魔矢を連発し、エヴァがそれを障壁で防ぐ。真祖つてす  
っい。

「あ、あの、さぎくん」

「ん。こっちも済ませちゃおうか」

「あう……………はい……………」

顔を真っ赤にして縮こまる刹那の周りに魔法陣を敷き、いざ契約  
執行。

淡いと強いの間くらいに光に包まれ、仮契約カードが現れた。

刀を正眼に構える刹那が描かれている。

「よし成功。刹那、早速アーティファクト出してみて」

「はい。『来たれ』」

未だ顔の朱い刹那の声に応じ、一振りの日本刀が顕れた。

「ん……………」

その刀を、見て、診て、視て、看て、観る。

「童子切安綱、だね」

平安時代の刀匠、安綱の作品。天下五剣にも数えられる名刀。その切れ味は凄まじく、罪人の死体六体を両断し、あまつさえ土台の鉄にまで刃を届かせたとか。

「古くは蜘蛛切りと呼ばれてね。土蜘蛛の精霊を切り伏せたとも言われてる。『童子切』の由来は、源頼光が酒吞童子という悪鬼の首を切り落としたという逸話からだね」

「さぎくんは物知りですね」

「そつでもないよ」

アーティファクトとしては、破魔の効果が強いのかな？触れた魔力を散らす効果があるみたい。劣化『ハマノツルギ』みたいな。

「その刀を今後の相棒にするなら、厳しい修業が必要だね。なにせ間合いも重さも全然違う」

体の一部と言えるまでに馴染んだ武器より、軽く短い。しばらくは余計な力みが抜けないだろう。

「精進します！」

「……………なんか元気いいね」

朱い顔を綻ばせ、しかし不意に、抜け駆け、お嬢様、合わせる顔、なんてぶつぶつ呟いている。なにやら内に秘めた葛藤がありそつだ。

「そらダン。次はハセガワだ」

ふと見ると、千雨が手足を見えない糸で縛られてフローリングに転がっていた。人形使いの糸だろうけど、ほとんど曲弦糸みたいなもんだね。

「そんなこと言っても、嫌がる女の子に無理矢理キスする趣味はないよ」

ため息混じりに苦笑するが、エヴァは苦笑なしでため息をついた。

「……………一度も二度も一緒だ」

「え？」

「一度も二度も大差ねえよ！楽にパワーアップ出来んならその方がいい！！」

なにやらやけになった様子の子の千雨。もう糸は解いてもらったようだ。

「だそうだ。さっさと済ませろ」

それじゃあ改めて。

「……………んっ」

契約執行。

出て来たカードには大きな時計を持った千雨の絵が。名前は……………

「エヴァ。これなんて読むの？」

「……………読めないのか？」

普通の日本人はラテン語の心得なんてないの。

「直訳して、【不揃いの文字盤】といったところだな」

文字盤。絵といい名前といい、予想していた電子系のアーティファクトとは違うようだ。絶対パソコン関係だと思ってたのに。

「千雨。ちょっと『来たれ』って言って。アーティファクト出るか

ら

「……………なんつでお前は平気な顔してんだよ……………!」

ギロリと僕を一睨みして、千雨は『来たれ』と呟いた。顕れたのは鋭い矢印が長短合わせて六本。

「時計が関係してるなら、これは長針と短針かな？」

「お前が見た方が早いだろ」

「もう見てるけど、イマイチ解らないんだよね」

やっぱり魔法に関しては見稽古だけじゃカバーしきれないね。そういう魔眼がないと。

「使ってみればわかるんじゃない？」

「どつ使つんだよ？」

「先端が鋭くなってますし、やっぱり刺すんじゃないですか？」

「攻撃用だったら迂闊に刺せないね」

綾瀬さんのアーティファクトがあれば調べられると思うんだけど。

「ちょっと待て。確か以前気まぐれに買ったアーティファクトの辞典が有ったはずだ」

なんだそのご都合主義。せめて伏線くらい張っとけ。

「どれだけここで暇してると思ってるんだ？暇潰しくらい用意してある」

「契約の相手もないのにアーティファクトを調べるってのが涙を誘うね」

「……………黙れ」

こっちの方が痛い沈黙でした。

千雨のアーティファクトは補助系の物だった。

長針と短針で、刺した対象の時間を操るモノらしい。

長針なら遅く、短針なら速く時間が流れる。

長短の幅は術者の任意で決めることも出来るらしい。しかも刺した対象の『何』に作用するのかまで選べるとか。

例えば、怪我をした僕に短針を刺し、怪我をした部分の代謝の間を速めれば、怪我の治癒を短縮出来る。といった具合だ。

「練習次第で応用の効きそうなアーティファクトだね」

「刺した痕は自動で回復。至れり尽くせりだな、魔法ってのは」

「便利に越したことはないでしょう」

「皆さん。そろそろお戻りにならないと、寮の門限が……」

茶々丸の言葉に時計を確認し、大慌てでエヴァ家を後にした。

今日は詠春さんから連絡が来なかった。木乃香への対応は、まだ決めかねているらしい。

## 第七話（後書き）

今回は生臭い部分無しです。事件のない日曜日はこんな風に過ごしています。

木乃香に魔法をバラすか否かで悩んでいます。

次回更新は少し先になるかも知れません。

## 第八話（前書き）

割と早目に出来ました

バラすとバラさないと両方書いて、「ああこっちの方がいいな」って方を載せました

少し短めです

## 第八話

『木乃香に魔法のことを話しましょう』

それが、詠春さんの答えだった。

「いいんですね？僕は記憶消去とか苦手ですよ？」

『する気も無いこと言わないで下さい』

「どこまで話しますか？魔法世界や、裏の仕事については？」

『私は、全て話してしまっていていいと思っています』

決然と、詠春さんは言い放った。全て、つまり僕の仕事や、刹那の生い立ちも……

『ああ、もちろん話すことを強制している訳ではありません。話しづらいこともあるでしょう。細かな采配は、本人に任せます』

僕は話すことになんの抵抗も無い。あるとすれば、自分のせいで僕が人殺しになった、と木乃香が思い込んでしまうことくらいだ。

魔法に夢を見られるのも、出来る限り避けたい。生臭いことには巻き込みたくないが、危険に首を突っ込まれても困ってしまう。

『大任ですが、受けていただけますか？』

詠春さんが神妙な口調で問う。僕の答えなんて、解りきっているだろうに。

「承りました」

その日の放課後。僕は刹那をエヴァ家に呼び出した。

「詠春さんから連絡が来たよ。魔法について、木乃香に話してほしいって」

「……………そうですね」

「細かいことや個人的なことは無理に話さなくていいそうだよ」

「……………はい」

安堵したような、苦しんでいるような顔。いつそ命令なら、すつきり話してしまえるのに。そんな顔。

「話すなら、自分の意志で話す。話さないなら、自分の意志で話さない。刹那が決めることだ」

「……………はい!」

刹那が力強く頷いた。その一泊後。

「で？貴様らの大事なお嬢様には、いつ話すんだ？早い方がいいんじゃないか？」

ソファーにゴロンと寝転がったエヴァが、不意に口を開いた。寝ているのかと思っていたが、聞いてはいたらしい。

「何かのついでに話すことでもないからね。何か都合よく事件にで

も巻き込まれない限り、次の日曜に話すつもりだよ」

フン。とエヴァは鼻を鳴らす。

「チサメに聞いたぞ。そういうのをフラグと言っらしいな」

いつの間にか名前で呼んでいた。

フラグをへし折って、日曜日。

エヴァ家にはエヴァ、茶々丸と、刹那、千雨、木乃香、僕の六人が集まっていた。

「どしたん？なんやさぎくん、珍しく真剣な顔してるえ？」

「ちょっと、大事な話があつてね」

「大事な話？」

人差し指を顎に当てて首を傾げる木乃香。やおらポンと手を打つて、

「なんや、みんながずっとうちに隠しとったこと？」

と、言うてのけた。

「このちゃん、気付いてたんですか……………」？

「うーん、なんか隠しとるんは分かっただけ、何を隠しとるかはわからんえ」

ただ、と、それがなんでも、と、

「うちも、やっと仲間になれるんやね？」

寂しそくに、否。寂しかった笑顔を浮かべていた。ずっと、疎外感を与えていたらしい。

だが、事はそう簡単ではないのだ。

「木乃香。そうやって喜ぶのはいいけど、これから話すのは知らなくてもいいかもしれない話だ」

もちろん、そんな事は長くは続かないだろう。だが、それでもモラトリアムはある。

「無縁なら無縁のまま、疎遠なら疎遠のまま、無関係なら無関係のままだった方がいい、そんな話だ」

そんなことは構わず、無関係であることなど関係なく木乃香を狙う輩はいるだろう。だが、そんな奴らならなんの抵抗もなく始末できる。始末してやれる。

「それでも、聞きたい」

僕の続けようとした言葉は、疑問符を無くして木乃香の口から零れ出た。

別荘内。

僕は木乃香へ魔法についての説明を終えていた。今は木乃香が口を真一文字に引き結んでうんうん唸っている。

ちなみに、まだ人殺しについては話していない。魔法が呑み込めたら話すつもりだ。

「魔法使いがおって、先生と生徒で、お化けがぎょうさん攻めてきて、戦うん？」

ぶつぶつと単語を繰り返す木乃香。今だ呑みきれないらしい。

「おじいちゃんとお父様が関東と関西で、仲悪くて、うちがいったい魔力持ったって、関東におるんが問題？」

ちよつと一度に詰めすぎたかもしれない。

「う~~~~ん……………」

眉を八の字にして口を波線にして腕を組んで、一際長く唸ったあと、

「ん、わかったえ！」

あっけからんと、そう言った。

「……………本当に解ったのか？」

つい千雨が口を挟んでしまうほど、それは呆気なく呑みこまれたように見える。

「まあなんや、もし間違ってもさぎくんとせつちゃんが教えてくれるやろ？」

ちょっと樂觀的かもしれない。まあ、教えるけど。

「なににせよ、解って貰えたなら幸いだ。次はもう少し重い話だけど、大丈夫？」

話すと決めたのに、聞くと答えられたのに、なぜ未だそんなことを聞くのか。

もしかしたら僕は、人殺しだと知られたくないのかもしれない。

「大丈夫。聞きたい」

木乃香の包容力は、木乃香の許容量は、僕を呑込んでくれるだろうか。

「僕はね木乃香。人殺しなんだ」

「最初に人を殺したのは確か五歳のときかな」

「うん？ああ、そうだね。確かに僕が殺したのは木乃香を守るためだ」

「でも勘違いしちゃいけない」

「僕は決して後悔していない。むしろ満足すらしていたんだ」

「もちろんそれは僕が人殺しを楽しんでいたからじゃない」

「僕はずっと昔に酷いトラウマを抱えている」

「それを受け入れてくれたのが近衛で、癒してくれたのが木乃香だった」

「詠春さんは僕に立派な家をくれたし、家族にもなってくれた」

「木乃香は僕の義姉だしね」

「刹那も、千雨もエヴァも茶々丸も、家族みたいなものだ」

「少なくとも、僕はそう思ってる」

「僕は誰かに強制された訳じゃない」

「僕は誰かをお願いされた訳じゃない」

「僕は僕の意志で、近衛に恩を返そうと思った」

「幸い才能はあったからね」

「すぐに戦力になれた。役に立てた」

「それでも、恩を返せたとは思ってない」

「僕はこれからも、近衛に恩を返す」

「僕はこれからも、木乃香たちと一緒に居たい」

「話しがそれたけど、つまり、僕は人殺しなんだ」

僕の独白を聞いて、木乃香は大粒の涙を零した。

ボロボロ泣いて、嗚咽を漏らして、しかし「ごめん」と言わないのは僕の意を汲んでくれたんだろう。

そう思うのは、決して都合のいい解釈ではないと思う。

いつまでも泣く木乃香を、刹那がギュッと抱きしめた。

「わ、私も、このちゃんに隠していることがあります」

木乃香が涙で濡れた顔で刹那を見る。抱かれないから、互いの表情は見えないだろう。

「それを話すには、とても、とても勇気が要ります」

つつかえつつかえ、心のわだかまりの一部を吐き出す。

「だから、もう少しだけ、その勇気を溜める、時間を下さい」

木乃香は刹那に応えようとして、しかし嗚咽で上手く喋れない。

言葉の代わりに、木乃香は力強く刹那を抱き返した。

刹那は、心の底から安堵したように微笑んで、木乃香と一緒に、しばらく泣いた。

**番外編 あったかもしれない第八話（前書き）**

あったかもしれないけど結局無かった第八話です。

続きは、今のところ予定していませんので、悪しからず。

正規の第九話は近い内に更新できそうです。

## 番外編 あったかもしれない第八話

「魔法について木乃香に話すのは、もう少し待って欲しい」

月曜日の早朝。僕と刹那は学園長室に呼び出され、人類最長の頭を下げられていた。

「木乃香が自分から関わるでないなら、なるべく魔法とは離しておきたいのじゃ」

ため息が出る。もっと解りやすく言えないのかな？

関わるなら英雄の息子とがいい。英雄の息子に協力させたい。英雄の息子のパートナーとしたい。自分から関わったなら、文句を言われる心配もない。

「あなたとはなるべく波風を立てないように言い付かっています。—  
先ずは応じましょう」

『自分から関わるでないなら』

らしくない失言だ。この言葉は、英雄の息子との同居を邪魔する

材料になる。学園長への反骨心がないとは言わないが、それと分け  
ても、徹底して木乃香から魔法を遠ざける。

「お話が以上なら失礼します。授業もありますから」

「さぎくんよろしかったのですか？」

女子校舎の廊下で、刹那が話しかけてきた。さっきのことだろう。

「このちゃんと魔法を離したいのは私も一緒ですが、やはり話して  
しまった方が安全なのは……」

「刹那の言いたいことは分かるし僕も同意見だけど、学園長が僕た  
ちにああ言って来た以上、詠春さんにもなにか言い訳をしてる  
はずだ」

婿養子である詠春さんに、義父として対応したのかもしれない。  
「僕は木乃香の祖父じゃ」とかなんとか言って、関東の長ではなく  
血縁として口出しするくらいならやりかねない。

無理が通れば道理が引つ込む。

「無理を通すために道理を取っ払うくらい、あの妖怪は平気の平差でやってのけるさ」

それにしても、木乃香が『巻き込まれた』場合について言及しなかったのはケースバイケースを想定してのことかな？そういう時は自分達が気付くだろう。そういう時は自分達に相談してくれるだろう。

そう思っているなら、甘すぎる。

「それに、老人には優死く死なくちゃね」

ああもつ。イライラする。

「罪口、飯にしようぜー」

アホが僕の肩に手を乗せて言う。国喜田とジョンも集まってきた。

「今日は学食か？」

「僕はパンだよ」

「んじゃ教室だな！」

声が大きいアホだ。

ジョンも国喜田も、そしてなんと谷愚痴までも弁当を自分で作っている。小学校の調理実習で豆腐を切つて以来、刃物は鈍と鈍しか持ったことがない僕には、当然調理のスキルはない。

迂闊に手を出せば罪口商会や【道具作成】が顔を出し、きっと奇野もビツクリの害毒が出来上がる。

### 閑話休題

僕が学食なら食堂へ。買い食い（誤用かな？）なら教室でと言つ具合に、僕に合わせてくれている。

アホには感謝しないけど。

「なあ、なんか廊下が騒がしくないか？」

ジヨンの言葉通り、なにやらざわついているのが分かる。聞こえてくる内容だと、どうも誰かが来たらしい。誰だあの人、なんて声が聞こえる。

騒ぎはどつやら廊下を進んでいるらしい。

「おい、こつちに近付いてないか？」

「通り道なんじゃない？」

「職員室にで行くんだろ」

僕も概ね同意見だが、国喜田たちの言葉に反し、教室の扉が勢いよく開かれた。

「罪口鷺志さんというのはどなたですか？」

「お、お姉様、せめて放課後に……………」

そこに居たのは金髪と茶髪二人の少女。高値・D・グッドマンと佐倉愛衣だった。

「こいつです」

「ありがとうございます」

僕に軽く会釈して谷愚痴に向き直るグッドマンさん。

「貴方が罪口さんですね？お話があります」

「え、俺え！？」

「貴方じゃないんですか？」

「いえ彼が罪口です。何分ここは男子中等部ですから、いきなり美人に声をかけられて照れるんですよ。ほら罪口、お前呼ばれてるんだからちゃんと返事しろよ。ははは、こいつ女性に免疫無いもんで、どうも緊張してるみたいです。アホみたいに口開けてないで、しゃんとしないと。そんなんじゃ呆れられるよ？すいませんこいつ上がり症の気があるらしくて、お話なら人目に付かないところ、そうで

すね屋上なんてどうですか？学生が男女で話し込むには絶好の場所でしょ？この教室を出て左に行けばすぐに階段がありますから、後は三回踊り場を跨げばもう屋上です。今日は天気も、まあ悪くはないし気持ち良く話が出来ると思えますよ。ああでもこいつ本当にメンタル弱いですから、本題に入る前に五分程世間話をして十分程十八歳以下にしか見えない非實在青少年の實在について話し合ってください。毎度こうですから昼休みなんか大半が潰れるんです。お陰で僕も多少は口が回るようになりましたよ。もっとも罪口は陣の修羅旋風拳もかくやってスピードで回る口ですけどね。ああ、こんな話はどうでもいいですね。ところでこいつになんの御用でしょうか？みたところウルスラの制服みたいですけど。もしかして愛の告白ですか？あはは、そんな慌てないでくださいよ。冗談ですよ冗談。こいつが貴女方みたいな美人さんに告白されるわけないですよ。でもそうすると本格的に理由が思い浮かばないんですが、なんででしょうか？ああすいません立ち入ったことをお聞きして。忘れてくださって結構ですよ。後で罪口を問いたですとします。もちろん冗談ですからお気になさらず、安心して込み入った話でもなんでもしてください。ほら、急がないと本題に入ることも出来なくなりますよ？いいですか、五分程の世間話と十分程の非實在青少年の實在について、ですよ？忘れないでくださいね。さあでは、どうぞごゆっくり」

僕の短いアドバイスにグッドマンさんは引き気味の笑顔でお礼を言い、谷愚痴を引っ張って教室を出ていってしまった。後ろを佐倉さんが怪訝な顔でついて行く。

思い込みの激しい性格は楽でいいね。最初に話してしまえば、後は話を聞かずに突っ走ってくれる。

「じゃ、お昼にしようか」

「そうだな。腹減ったよ」

「僕今日は新メニューにチャレンジしたんだ」

「それは楽しみだ」

国喜田の新メニューにして自信作に舌鼓を打ちつつ、その昼休みを過ごした。

そして放課後。やっぱりというか案の定というか、ゲッドマンさんは再び教室に現れた。肩を震わせて僕をキツと睨み据えている。

「聞きましたよ。貴方が罪口さんだそうですね」

「はい。僕が罪口です」

あっけからんとした様子に一瞬鼻白んだようだったが、すぐに強い視線を寄越した。

「昼間は どうして嘘をついたんですか？」

「嘘、ですか？ ちょっと心当たりがないですね」

「昼休み！自分は罪口ではないと、隣の少年が罪口だと言ったじゃないですか！」

「僕は自分を罪口じゃないなんて言ってますよ？」

アホを罪口だ、とは言ったけど。

「ああ、昼休みは僕を探していらしたんですね。すみません、なにせ『ツミグチ』と『タニグチ』、音がにってるでしょ？」

「あなたはっ、自分で隣の少年を何度も『罪口』と言っていたじゃありませんか！」

「言ってみましたっけ？」

「っ!?!」

おお恐い。すごい表情だよ脱げ女。エヴァよりよっぽど悪っぽい。

「どつやら昼のことでそんなに怒っているようですね。あれはお互い様、ということにしませんか?」

「お互い様、ですって?」

「貴女の滑舌が悪いのか、僕の耳と発音が悪いのか、谷愚痴の頭が悪いのかは知りませんが、僕だつてつまらない勘違いで時間を費やしたんです」

「『僕も被害者だ』」

いや〜言ってみたかった。一文字違っけど。

「~~~~~っ!?!」

すごい形相だ。鬼女もかくや、般若のごとき面構え。きつと彼女

なら鬼子母神になれるだろう。

言い過ぎた。

「と、とにかく 今日今すぐ、は都合もあるでしょうし、寮に帰って、簡単に仕度を整えたら図書館島に来なさい!!」

言うだけ言ってさっさと教室を出て行った。忙しい人だ。

「……………帰るか」

寮に帰ると携帯に着信があった。木乃香からのメールだ。今日は体育で刹那が大活躍だったらしい。あの刹那が自分から目立つことをするとは思えないから、きつと木乃香がせっついたのでだろう。

刹那からもメールが来た。どうやら長瀬や古に目を付けられたらしい。それが体育の活躍に続いたのか。お気の毒に。

今度は千雨からだ。アホ毛が特徴的な同志に会ったらしい。千雨は自分の趣味をあまり卑下せずに学校生活を送れている。今度同人誌の手伝いをするそうだ。

着信。今度は茶々丸からだ。

ほほう、エヴァが独自に曲弦系を練習中。おや、猫がとうとう茶々丸の手から直接餌を食べたか。今度僕もお邪魔しよう。「茶々丸の匂いを付けた方が懐いてくれるかな？」と付け足した。無表情で慌てる様が目に浮かぶ。

全員に返信を打ってから、夕食を摂って風呂に入って寝た。

何かを忘れていている気がする。何を忘れたのかは覚えてるけど。

「今日は無理矢理にでも連れていきます!!」

翌日の放課後。グッドマンさんはまた現れた。

逃げるのは簡単だけど、どうせ目的を果たすまで何度でも会いに来るだろう。

「僕を忘れる」

一言だけ言って、僕は寮に帰った。

「さあ罪口さん！今日こそは私と来て貰います！」

驚いた。どうやって『音』をレジストしたんだろう？

「私としたことが、学園長に言われるまで誰にどんな用があるのかも忘れていましたわ……………」

何かを余計なことを死たら死いなあの妖怪。

さてどうしよう。アレが関わる辺り、よからぬことなのは間違いない。だがどんな方法で音に対抗したのか解らないし、必要以上にアレに手の内を晒したくない。

面倒なことこの上ないけど、一度応じればいいかな。後を引きずるものだったらそのとき誤魔化せばいいし。

ちょっと楽観的な気もするけど。

「図書館島ですか？」

「はい？」

「早く行きましょう。今日は見たいテレビがあったような気がするんです」

今日は僕の方が早く教室を出た。

図書館島ではなく、小さな喫茶店に入った。

「確認します。貴方が罪口さん。つ・み・ぐ・ち・さんですね？」

「くどいですね」

「どこかの誰かさんに騙されましたから」

「ひどい奴もいたもんですね」

「どの口がそんな……」

「何故か脇道に逸れがちですね。早く本題に入ってください」

「どの口でそんな……！」

どうも気が立ってるみたいだ。カルシウム不足じゃなかるうか。

「ありがとうございます」

しばらくの葛藤の後、グッドマンさんは深く頭を下げた。

「少し前、私を助けて下さったのは貴方だと、学園長から伺いました」

千雨を助けたときだろう。あのときの警備員はウルスラの制服を着ていたはずだ。

このタイミングで明かすのか。何かイベントを用意して、僕たちに木乃香のことでアクションを起こしづらくさせたいのだろう。

思い込みの激しい性格は厄介だ。

そういう意味では、わりと早目に呼び出しに応じて良かったかもしれない。

「ああいえ、お気になさらず。ではこれで」

紅茶二杯とコーヒー一杯分の伝票を掴んで席を立つが、がっしと袖を捕まれた。

「そういう訳にはいきません。貴方がどんな方かは正直よくわかりませんが、それでも恩を返さないわけにはいきません」

ああもう、面倒臭い。

## 第九話（前書き）

最近刀語を読み返しました。

何度読んでもいいですね。いいですね。いいですね。いいですね。いいですね。

## 第九話

あの暴露話から数日後。僕は別荘でここ最近の努力の結晶を前にしていた。

「ついに、ついに完成した……………」！

「こおの変態がー！！！」

感動に打ち震えていると、後ろからスパーンと頭を叩かれた。

何かと振り返ると、顔を真っ赤にして小刻みに震える千雨と、同じく顔を赤くした木乃香と刹那が立っていた。

「急にどうしたのさ。結構痛いよ」

「イタいのはお前だよ！なに才能の無駄遣いしてんだ！？」

もしかして目の前の集大成のことを言っているのだろうか？だとしたら、これを造った、言わば親として、職人として、『無駄』と言われたことに異議を唱えなければならぬ。

「無駄とは、言ってくれるね千雨。これは僕が全精力を注いだ、僕の悲願にして念願だよ？」

「こんなもんにそんなもん注ぐな！」

「こんなものだって？千雨はこれがなんなのか正しく理解してるかい？」

「う……………ああ……………」

顔を一層赤くして口ごもる千雨。さっきからなんだろうか。

「あんな、ちぎくん」

黙ってしまった千雨に代わり、木乃香と刹那が前に出た。

「ちぎくんも男の子やし、興味あるんはわかるけど……………せめてうちらの目に付かないところに置いてくれんかな？」

「その……………私たちには、ちょっと……………」

その様子に、僕は何やら行き違いがあるのを感じた。

僕の主張と彼女達の主張は、根本的なところで食い違っている。

「これ、なんだと思う？端的に言って、何に見える？」

僕が集大成を指差して聞くと、彼女達は口を揃えて、

「裸の女の子」

その通り。僕の集大成とはつまり、人造人間のことだった。

罪口と【道具作成】の複合、罪口……産業だか商業だか……  
……農業や漁業じゃなかった気がするけど、なんかそんなので造り  
あげた人体。

見た目は中学生くらい。長い銀髪が特徴的な、肌の白い女の子だ。  
全裸の。

……確かに、誤解されても仕方ないかもしれない。

「ああ、木乃香。この娘に制服着せてあげてくれる？」

「制服って、今胸ポケットから出した麻帆良の？」

「ん、そう」

制服を渡して出口へと向かう。外ではもう夜になるだろう。

「お、おいさぎ。どこ行くんだよ？」

「その体を使う娘を呼んでくる」

おっかしいな。

今僕は四件目のコンビニで途方に暮れていた。目当ての少女がいないのである。

確か夜は一人が怖いとかでコンビニにいる、って言ってなかったっけ？

そこまで考えてはたと気付いた。

僕、幽霊見たこと無い。

翌日の放課後。木乃香たちへの説明を後回しにして、僕は空間製作で姿を隠し、一人女子中等部に来ていた。

彼女がどのクラスにいるのかは分かっていたが、どの学年かがわからない。2年か3年かが曖昧だったので、取り合えずA組を片っ端から観ていった。

そして、とうとうその怪現象を見つけた。

誰もいない夕暮れの教室で、空中を自在に乱舞する一本の鉛筆。

「相坂さよさんかな？」

僕の言葉に驚いたのか、鉛筆が踊りをやめ、床へと落ちた。その後フワリと浮き上がり、机の中へ。

「えっと、何か言ってるのかもしれないけど、僕には君が見えないんだ。声も聞こえない」

リアクションなど望むべくもなく、僕は虚空に向けて語り続ける。

「君が望むなら、僕は君に体をあげる」

ガタン!!

急にイスが暴れた。驚きを表現してくれたのだろうか？

「もちろん要らないなら要らないで構わないけど。どうする?」

なんて問い掛けたところで結局彼女の真意はわからない。刹那や龍宮さんみたいに、目を凝らせば見えるかな? やらないけど。

「興味があつたら憑いてきて」

そして別荘。

今日も三人は揃って中にいた。

「あんまり長居すると老けるよ?」

「大丈夫だよ」

応えて、千雨は左腕を見せた。そこには矢印の様なものが刺さっている。

アーティファクト。【不揃いな文字盤】

「これで刺して、新陳代謝諸々をそのままに、老化だけを遅らせる」

言っている千雨自身も納得がいてない表情だ。

新陳代謝と老化を切り離して操作してる？っていうか若い内の老化ってつまり成長なわけで、それを遅らせていいのか？いいのか。別荘だし。

チラと茶々丸に視線を送る。

「はい。確かに千雨さんの言う通り、代謝をそのままで老化だけを遅らせています」

便利だな魔法。それともこれは概念的な話になるのだろうか？だとしたらやはり魔法の土俵か。

「いつの間にアイコンタクト出来るほど仲良くなったんだよ……………」  
あんま話してるイメージないぞ？」

千雨の言葉にふと視線を重ねる僕と茶々丸。

「いつの間について言われても……………」

同時に首を鏡合わせに傾げて、

「「ね？」「」

「物凄く仲良し!?!」

騒がしい千雨は置いて、寝かせてある人造人体の元へ。

「多分這入れると思うけど、試してみて」

「?誰に言うてるん?」

疑問符を浮かべた木乃香の言葉に応えたのは、

「私です!?!」

ガバリと起き上がった相坂さよさんだった。

「「「キャー――――――!!!!!!」

!!!!!!!!!!?????????」

起き上がりざまに大声出しちゃ、驚かれるのも無理ないよ。

「まあつまり、彼女は幽霊なんだよ」

当然、僕はさよ（名前でもいいと言われた）についての説明を強いられていた。面倒だから省いたけど。

さよのことはエヴァに教えてもらったと言っている。

「で、さぎくんはその娘のために体を造って」

「その娘を探してやった、と？」

「そうなるね」

「……………」

木乃香がひたすらジト目だ。今回はあまり嘘ついてないのに。っていつか僕って言うほど嘘ついてないよね？

「なんで手を貸そうと思ったんだ？」

「ペン回しが異常に上手いって聞いて、見たいな〜って」

「うわぁ、って顔された。いやいや、さよのペン回しは尋常じゃないよ？伊達にウン十年回してない。」

「あ、見ます？」

「以外とノリのいいさよがペン回しを見せてくれるそうさ。せっかくだし、皆も見るといい。」

「えっと、あれ？……えい！……あれ？」

「しかしどうも上手く回せない。と言うより上手く動けていない。」

「まだ体が馴染まないのかもね。普段のは『騒霊現象』だし」

「そ、そんなー!？」

「悲観的にならなくても、時間をかけて慣れればいいさ。それより、何か不都合はない？」

「うん……」

肩を回したり足を揉んだり腰を捻ったり腕を組んだり。突然ハツと顔を上げ、叫んだ。

「おっぱいが大きき」

言わせねーよ。

現在、僕は別送内で黒板の前に立っている。目の前には椅子に座る木乃香とさよ。

木乃香には護身の魔法を、さよにもなにがしかを教えるところだ。さよは『騒霊現象』をもっと上手く使いたいらしいので、その辺は後でエヴァや茶々丸にでも聞いてもらおう。何故かここにいるけど。

「木乃香は微妙な立場なんだよね。関西の重鎮の娘で、関東の庇護下にあって、両方の長の血縁で」

水に浮いた油膜の、境界線みたいな感じ。

「僕の杞憂だとは思うけど、万一にも木乃香の使う魔法なり術なりを利用されたくはないんだよね。僕に政治的やりとりは出来ないし」

音で洗脳するのは、きつと政戦とは言えないだろう。

「そこで、木乃香には新しい術式の開祖に成ってもらおうと思う」

「新しい、って、そんな簡単に出来るものなん？」

「簡単じゃないよ。僕がやろうとしてるのは、泥壁に高圧水流で無理に穴を開けるような作業だ」

木乃香の膨大な魔力がないと出来ないことだ。

「魔法、魔術、呪術、呪法、道術、陰陽道、その辺の原点を木乃香の使役にしよう」

「はい！よくわかりません！」

何故かさよが元気よく右手を上げて発言した。木乃香もよく分かって無いようだし、説明はするけどね。

「つまり、身近な物に意味を付けて魔力を付与し、強引に神秘を起こそう、ってこと」

確かパタリロがそんな事をしてたはずだ。服とか拭とか吹とか福とか。あれは神様だったけど。

「うーん？」

「まあ深いところはやりながら覚えよう。最初は難しい上に魔力消費も激しいと思うけど、使ってる内に世界に馴染むと思うから」

とすると、木乃香には意味付けた物を持ち運ぶ為に暗器術を覚えて貰おうかな。

魔力の使い方はエヴァに手伝って貰おう。彼女の経験は得難いものだ。

さよの『騷霊現象』は実際、見事なものであるらしい。

僕にはよくわからないが、鉛筆をああも精緻で緻密に動かせる幽霊はそういないとか。

「麻帆良で浄化もされない成仏もしない、悪霊化もしなければそもそも教師達に見つかりもしない。実は結構霊格高いかもな」

とは、エヴァの談。

しかし『騷霊現象』の難易度は物の質量や体積、物量で左右されたりするらしい。重いほどに難しいとか、大きいほどにブレるとか、多いほどに及ばないとか。

鉛筆をクルクル回せても、机は浮かせて精一杯、らしい。

「肉体みたいなものだ。使っていればその内に、重い物も大きい物も細かく動かせるようになるさ」

これもエヴァの談。

僕は幽霊だなんだは専門外だ。幽霊の事で知ってることなんて、キユウリとナスで彼岸と此岸を行き来することと、地縛霊の二階級特進が浮遊霊だったことくらい。

さよに関しては、肉体のメンテくらいしか助言は出来まい。

もともと、助言なんて門外漢だけど。

PS・エヴァの封印を解きました。

## 第十話（前書き）

今回、迷走しました。

満足はしていませんが、これこそ独りよがりかもしれません……

オリキャラ登場の回です。

## 第十話

「君は、自分が何をしたか分かってるのか!？」

今夜は星が綺麗に見える。いやこの言い方だと「本当は綺麗じゃないけどそう見える」って捉えられるかもしれないから言いかえよう。今夜は星が綺麗だ。

と言って、別に僕が詩に目覚めた訳じゃないし、天体観測に来た訳でもない。三角形を探すにはまだ早いだろう。

「君が解放したのは、悪の魔法使いなんだぞ!？」

『君の知らない物語』は名曲だよな。っていかsuperce  
1-1が好き。『ワールドイズマイン』とか。

阿良々木くんの長台詞でのツッコミは正直懂れる。彼のような性格に僕はなりたい。

「彼女を封印したのが誰だか分かってるのか!？彼の英雄、『紅き翼』だぞ!？」

ところで『ネギま!』に来た僕はもしかして『緋色の英雄』を読めないのだろうか? 『シヨード』が出版業も営んでいることを祈るう。

っていつか千雨は西尾維新知ってたんだし、杞憂か。

「・・・罪口くん。そろそろ話を聞いてもらえんかのう?」

「ちゃんと聞いてますよ。聞き流してるだけです」

「それは『ちゃんと』とは言わんのではないか?」

「そうですね、訂正します。前言訂正」

「っ!? いい加減に・・・」

「だからいい加減にして、今から話を聞きますよ」

正直ガンドルフィーニ教諭の話は聞きたかない。

望んで聞こうという人はそういないだろう。信仰心も好奇心も無いのに宗教勧誘に耳を貸しはしないように。

「もう一度聞く。君は自分が何をしたか分かっているのか!？」

「不当に隔離され、陰口を叩かれながら労働を強いられていた少女を解放しました」

言葉に詰まるガンドルフィーニ教諭。ちよつと穿った見方だろうか?合つてると思うけど。

「……そんな言い方はないだろう。彼女は英雄に封印された悪の魔法使いだぞ」

「その言い方こそ卑怯ですね。聞いた話では、エヴァは三年で呪いを解かれるはずだったんでしょ?それを、英雄が掛けた、常人には解けない呪いであるのを良いことに、力を強引に押さえ付け、労働を強いて、しかし彼女を侮蔑する。大した『正義』ですね」

「しかし!今まで彼女が何人殺して来たと……!!」

「貴方は食事を責めるんですか?」

再び押し黙る教諭。分かってはいたようだ。それでも、なけなしの意地なのか文句を続けた。

「吸血鬼は食事を摂らなくたって、死ぬ訳じゃない……！」

「死なないからその飢餓感を我慢しろと？死なないからこそ永劫続く苦しみを、永劫甘受し続ける、と？」

「そんなことを言いたいんじゃない……！」

「学園長。相手を換えていただきたい。感情に任せただけの物言いでは会話すらまともにはなりません」

未だ何事か言い募ろうとするガンドルフィーニ教諭を黙殺する。

大体、呼び出しの時間と場所が悪質過ぎる。

授業中に放送で呼び出し、学園長室に単身赴き、そこで魔法教師の過半数が揃っていた、なんて、威圧する気満々じゃないか。

なんかもう力抜けちゃって。それに、冒頭から延々『正義の主張（失笑）』なんて、読者が離れたらどうする！！

呪いに関して、学園長はもともと気にしてはいないのだろう。今は英雄の息子にどう絡めるか、その算段を架け替えているのかもしれない。

あの後を描写しても、さっきまでのやり取りをリプレイするだけなので、割愛。まあ正義の魔法使いは今後僕たちへの過干渉を自重する運びとなった。

約束するまでもなく了解しておいて欲しいものだね。生徒の交遊関係なんてさ。

二年生になりました。

ちょっと跳躍し過ぎた感も無くは無いと思わないことも無いが、この間の特記事項なんて、指を折って数えられる程度しかない。

谷愚痴が魔法に関わりかけたってことと、さよが長期入院からの復帰扱いで復学したこと。あとはせいぜい、侵入者の謀で、はかじごとデスメガネと本気の死闘を演じたってくらいだ。いやあ焦ったねあれは、まさか背弄拳を打破するあんな手段があるなんて……！！

いやまあ三番目は嘘だけど。

最近、意味も無く脈絡も無くしょーも無い嘘を突拍子も無くつく男というキャラになろうと思ってるんだ。

長期休暇を利用してエヴァ含む木乃香たちと行った旅行中に、ふと思い付いたキャラ立て。これからは積極的に嘘をつく！と決意したんだけど、あの時の皆の表情は忘れられない……

さて、勘の良い皆さんなら既に違和感を覚えているだろう。

冒頭からの『これ無くてもいいんじゃない？』と思える中身の薄いモノローグ。

皆さんにも経験があると思う。

聞かなくてもいい話、聞きたくもない話。例えば授業中の先生の

自分語り。例えば尊敬できない上司の長話。

こんな時、どう時間を潰すか？

もちろんきちんと話を聞くのが最良だろう。そういう真面目な優等生も、多くは無いまでもいるはずだ。

しかし僕を含む大半の人間は、そんな話は聞き流す。聞き流して別の作業に勤しむ。

意味もなく過去を振り返ったり、取り留めもなく嘘を想像したり、自分の頭の中が誰かに聞かれていると仮定してその誰かに語りかけたり。

しょうがないだろ？僕は現役の中二なんだ。

で、僕は今、奇怪な女の子の話を聞き流していた。

「聞否（聞いていますか）？先輩。今は私が話していますよ？」

「聞いてるよ」

流してるけど。

彼女は今年麻帆良に入学してきた魔法生徒。ふちろくみどり縁録緑さん。

どこかで聞いた名前だが、学園長によると戸籍もその裏も、しっかり確認が取れているらしい。

彼女は本名が縁録緑であり、魔法生徒であり、一人っ子の、新生だった。

名前の一致は偶然だと思う。まさかあんな取り留めも無い会話を聞いていて、しかもわざわざ偽名に使う理由も、まあなくもない（僕たちへの警告。『いつも見ているぞ』）が、それならアクションが遅すぎる。

だから僕は、彼女を一般の魔法生徒だと判断しておく。

で、僕はなぜか彼女に懐かれて、途方に暮れている次第だ。

「緑ちゃんは北海道から来たんやって？」

「肯認<sup>オウコウ</sup>。いわゆる一つの道産子です」

「肌真っ白やな。せつちゃんどどっちが白い？」

「並競<sup>オウケイ</sup>つてどこですか。桜咲先輩肌綺麗ですね」

僕に話していると言っておきながら、もう木乃香との会話を楽しんでる。

「緑ちゃん。すっかり馴染んでるね」

日は入学式。時は放課後。場所はエヴァハウス。

初対面の緑ちゃんは、木乃香を筆頭に普通のメンバーに違和感なく溶け込んでいた。一種の空間制作かもしれない。

いつの間にか、名前で呼び呼ばれる仲だ。

「緑ちゃん。僕は先生にあまり良く見られてないから、一緒にいると心証悪くなるかもよ?」

「別構<sup>べつこう</sup>。独りよがりの、他人にマッサージを強いるような正義に興味はありませんので」

結構キツイことを平気でいう娘である。同感ではあるけど。

「聞及（聞いたところでは）、さぎ先輩はここでほとんど唯一の無頼派だとか」

そんなこと言われているのか僕は。五人の女の子に囲まれている身としては、非常に心苦しい。

「知有（知ってますよ）。彼の高畑さんにも手出し出来ない、二十年前に生まれていたなら『紅き翼』と同格間違い無し、と言われる麒麟児だと」

期待が尋常じゃない。

確かに不意打ちは得意だし、ただやられるだけ、なんて有り得ないとは思うけど、広域攻撃を連発されると正直キツイと思う。

「其置<sup>そのまゝ</sup>、今夜の警備員試験。暇でしたら見に来て下さい」

暇なので、見に来た。

「ガンドルフィーニ教諭含む正義陣とははっきりとした距離が空いている。」

「緑ちゃん、どんな戦い方するんだろうね」

「自信はあるようでしたが、体のこなしは素人のそれに見えました」

僕の言葉に、隣の刹那が応えた。

「ここに来ているのは僕と刹那、エヴァに茶々丸で四人だけだ。」

木乃香も千雨も、関係者であることは既に知れ渡っているが、実際に魔法を使うところを見られている訳じゃない。いざという時にシラを切り通すためにも、こつ言う場にはいないほうがいいのだ。

「どうせ証拠がなけりゃ『正義』に出来ることは限られる。」

「次、縁録録！」

学園長の呼び掛けに前が出る緑ちゃん。

手ぶらだ。杖すら持っていない。

「何も持っていないようじゃが？」

僕に言った時と同じように問う学園長。それに緑ちゃんは呆れたように首を振った。

「聞無（聞かない）くださいよ。知ってらっしゃるんでしょ？」

緑ちゃんの言葉にただ頷くだけの学園長。まあ立場上、その辺は把握してなきやマズイだろう。

「では、始め！」

去年と変わらず、それは悪魔の討伐だった。三十ほどの低級悪魔。それを緑ちゃんは一瞥し、フツと息をつく。

「速行（では、行きますよ）」

ギョロリと、彼女が左目を見開いた。

距離のせいで僕にはよく見えなかったが、眼球の表面に魔法陣が浮かんでいたそうさ。茶々丸談。

その眼球（魔法陣）からバキバキと音を立てて大きな鬼が一匹、這い出てきた。

額に二本の角がある、パンツ一丁の東洋鬼。鬼ヶ島に居そうなあれだ。

這い出た鬼はその腕と脚だけで悪魔を蹴散らしていく。怪獣映画のような光景をバツクに、緑ちゃんは僕たちに笑顔で手を振っている。

程なくして、蹂躞を終えた鬼が緑ちゃんの元へ戻っていく。緑ちゃんは軽く言葉を交わし、鬼を、今度は右目へと戻した。

口笛なんか吹いて、緑ちゃんは余裕そのものだ。まあ、彼女自身は動いてないしね。

「へえ、緑ちゃん。強いんやね！」

「そんなことはありません其違。強いのは私の仔であって、私じゃありませんし」

「・・・お前も大概変わってるんだな」

日曜日、いつものメンバー+1はエヴァの別荘に集まっていた。この『+1』が取れる日も、結構早く来るかもしれない。

「凄所（凄い所ですね）、ここがダイなんたら魔法球ですか」

入って来たときはそう言って驚いていたが、五分足らずでもう慣れたらしい。

「そういえば置取、木乃香先輩は学園長のお孫さんだそうですね」

「ん？そつやえ？」

「すみません。実は私、あの人を見て『うわ、絶対この人寝返りうてないよ』って思っていました」

思っているだけにしてほしかった。

## 第十・五話（前書き）

断章的な一話です。

今回の話は今までにも増して灰色の趣味で書かれています。広い心で迎えて下さい。

これからちよつと更新の間隔が開くかもしれません。すいません。

次話から原作入る予定です

## 第十・五話

ガチャガチャガチャガチャ

そんな擬音を立てながら、緑ちゃんの左目から鎧武者が這い出てきた。

否。それは武者とは呼べないだろう。

立派な鍬形の兜。

無骨な籠手。

鉄塊を思わせる胴丸。

大樹の根のような具足。

一目で業物と分かる抜き身の日本刀。

それらは何に着られるでもなく、あたかも人が身につけているが如く浮遊していた。

透明人間が戦支度をしたような、と言えるかもしれない。

全身(?)を露にした甲冑は足を肩幅少し狭めに開き、右足を引いて安定させ、手の刀を青眼に構えた。

「緑ちゃん。こいつ結構強そうだけど」

「ネウリですおね肯認。達人と言って差し支えないと思います」

「弱そうな……って頼まなかったっけ？僕」

「言返(そうは言いますが)、実際に弱い妖物よりも圧倒的に強い妖物に手加減させた方が安全じゃないですか？」

「そんなこと出来るの？」

「ホチロン肯認です。出来るから言いました」

小生意気な緑ちゃんと相對するのは誰であろう、近衛木乃香である。

今日は、というか今日も、というか、ともかく日曜日。

いつもの如くエヴァハウスに集まったいつもの面々（緑ちゃん含む）は、特に何をすることもなく何かをしようとしていたのだが、どうせ暇なら、と別荘に移ってトレーニングをする運びとなった。

トレーニングをするのは主に木乃香とさよ。それに千雨。

なんと緑ちゃんには体の中に無数の妖怪（本人は妖物、と言っていた。大判焼きと今川焼きくらいの違いだろう）を飼っているらしい。エヴァと茶々丸を除いた僕たちの中で一番人間離れしている。

そんな緑ちゃんには木乃香の相手を頼んだ。木乃香はまだ不慣れだし、万一必殺の威力が出ても緑ちゃんの妖怪は緑ちゃんの中に帰る（還るに非ず）だけらしい。

千雨の相手は刹那。

彼女達は絶賛かくれんぼ中だ。千雨が隠れ、刹那が捜す。

千雨は空間制作のトレーニングになるし、刹那は己の死角を減らし、かつ周囲を注視するという高難易度のトレーニングだ。

さよの相手はエヴァがしている。

なにやら怪異同士相通じる物があるらしい。吸血鬼と幽霊じゃ随分違うと思うが、そこは突っ込んだら負けだ。

「一ツ式」

ふと、木乃香が咳いた。それに合わせて木乃香の着る服に魔力が走る。

一ツ式は常時発動の魔法。木乃香が触れている物は《意味》を保つ。

そして術式発動の短い掛け声。

「ちえりお！」

すいません悪ふざけです。木乃香が予想以上に気に入っちゃって、

引っ込みつかなかったんです。

ともあれ、声に合わせて《意味》が魔力を持った。服が持つ、  
『着用者を守る』意味を強化した、鎧。

「行良（行きなさい）。加減を忘れずに」

緑ちゃんの令に応じ、鎧が刀を突き出した。加減してるのに突き  
つて、本当に大丈夫か？

なんて思ったものの、結局杞憂に終わった。木乃香の服は、きち  
んと木乃香を守って見せた。

「二ツ式。ちえりお！」

木乃香がどこからともなく大量の釘を取り出し、鎧に向けて放る。

二ツ式は瞬時発動の魔法。予め魔力を付与した物を使い、その物  
の《意味》を発揮できるタイミングだけ術となる。

投げられた釘のうち、半分程が鎧に届いた。どうやら本当に加減  
しているらしい。反射的に叩き落とそうとして、堪えたのがわかっ

た。

ドズン！ドズン！ドズン！

鎧に当たった釘が急激に伸長し、その五体を貫いた。

釘の持つ『貫く』、『留める』《意味》を強化した結果だ。

「三ツ式。ちえりお！」

木乃香が翳した紙から炎が迸った。紙には『燃』の文字。

三ツ式は文字の《意味》の増長。

元々意味を持っていると言われる文字や言葉を魔力で強化する。

どうやら木乃香も大分慣れてきたらしい。そろそろあの魔法にも名前を付けた方がいいかもしれない。名前は重要だ。

しかし、なんだかんだ言って木乃香の魔法は傍から見るとまるで陰陽術だ。あのときの僕の葛藤は、意味を無くしつつある。

「茶々丸。行こうか」

「はい。さぎさん」

特訓に励む皆を背に、僕と茶々丸は別荘を後にした。

僕と茶々丸は外に出ている。特に重要な何かがある訳ではない。ただやることがなかっただけだ。

260

それで、僕たちは尽きかけている食糧の買い出しと、散歩をしに、外に出ている。

「あれ、茶々丸？」

「鷺志さんもいるネ」

「道の反対からハカセと超が歩いてきた。ハカセが白衣を着ているが、研究室帰りだろうか？」



もちろん僕が持って（隠して）いる。

「持つてる訳無いさ、デートだもん。男の子は財布を持ってれば事足りるのさ」

なんだか自分のキャラがブレ始めている気がする。多分今の僕は笑った時に歯が光る。

「そ、そんな……これが娘を男に取られる気持ち……？」

「むしろ娘に先を越される気持ちじゃないかね？」

どんな状態だそれは。

打ちひしがれているハカセに「婚前旅行はンジャメナ。新婚旅行はバレッタに行くよ」と囁いた。

もっとメジャーな所に行つてえ〜、という声をバックに、僕と茶々丸は散歩を再開した。

所変わって、どこだここ？

まあ学校の敷地内なのは間違いないけど。なんかただっ広い中を結構な数の麻帆良学生が行き来している。

「おや、罪口くんじゃないか？」

声の主は、一見するとそちら系のヤヴァイ人。蝉が鳴いたら葛西さんと呼びたくなる見た目の魔法教師だった。

「かs・・・神多r・・・ヒゲグラ先生」

「・・・一回目はわかる、違う名前だ。なんで二回目を言い直した？」

「だって言いづらいじゃないですか。カタラギなんて。あ・あ・あ・い、なら阿良々木がベストです」

「やむを得ず」

茶々丸が若干険のある声で僕の言葉を遮った。その目は真剣そのもの。

「カタラ、まで言ってしまったては、ヒゲゲラと言い直すよりも最後まで言った方が早いです」

ボケた。

「正直に言いますよ。『羅』の字がうる覚えで、使いたくなかった。変換も一字ずつになるからカタカナの方が良かった、と」

ボケ倒した。

「絡繰さんて、結構ユーモラスなのね・・・」

葛葉先生が呆然と声を漏らした。茶々丸は表情に出ないだけで、実は感情豊かなんだ。説明はしないけど。

しかしなんだね。この二人はセットの感覚がある。きっと学祭後のイメージが強いのだろう。

「で、二人だけなんて珍しいわね。何してるの？」

「おや、最近の教師は生徒間の交友関係を詮索するんですか？」

「……そうね。あやm」

「まあ聞かれて困ることでもないのでお答えしますけどね」

ヒゲグー先生の鉄面皮はともかく、葛葉先生の顔色はコロコロ変わる。結構面白い。

「若い男女が歩いてるんですよ？もちろんデートに決まっているじゃないですか。健全な不純異性交遊です」

「聞かれて困ることじゃないすかっ！！！！」

葛葉先生はツツコミ要因確定だ。

ところで隣の茶々丸が真剣にヤバい。なんかブーーンって音がする。多分冷却ファンが高速で回転している音だろう。ファンの方が稼動熱でいかれそうだ。

なにやら葛葉先生が打ちひしがれている。ついさっき見たような

光景だ。

もしかして今は彼氏がいないのだろうか？離婚したとか恋人が出来たとか言っていた気がするけど、今は離婚し恋人までの『』の部分なんだろう。

「葛葉先生は恋人はいらっしゃらないんですか？」

聞いてみた。

周りで学生が騒いでいるの聞こえる。

「おい聞いたか。なんか門の方で雷が上がったらしいぜ」

「俺見たぜ！落ちてねえんだ、下から上に雷が走ったんだよ！」

「お前の目は光速が見えるのか？」

「ホントだつて！」

「おーい！なんか工学部と土木部、建築部に仕事の依頼だつてよ」

「学園長直々だぜ？」

不穏な会話を聞き流し、取り合えず僕は自分の前髪をつまんだ。

「……焦げた」

「あれはさきさんが悪いと思います」

茶々丸が冷たい。まあ自覚はあるけど。はっ！？

「心配するな。自覚はある」

「思い出したように言わないで下さい。冗長でつまらなくなるだけですよ」

意乗（その通り）です。さき先輩は元々大して面白くないんですから。これ以上つまらなくなっただろうするんですか？

なぜか緑ちゃんにそう言われた気がした。ここにはいないのに。

「ていうか、茶々丸ネタわかるんだね」

「……………千雨さんとさぎさんの掛け合いが、面白そうだったので」

「勉強しました、と？」

無言で頷く茶々丸。かゝわゝいゝいゝ！

「茶々丸。なにか欲しいものない？お兄さんがなんでも買ってあげるよ」

八ツ橋を買った。葛餅を買った。わらび餅を買った。ちんすこうを買った。羊羹を買った。饅頭を買った。きんつばを買った。アイスクリーム(チョコ)を買った。アイスクリーム(バニラ)を買った。アイスクリーム(ミント)を買った。アイスクリーム(イチゴ)を買った。イチゴパフェを買った。苺大福を買った。苺クレープを買った。苺のチョコレートフォンデュを買った。苺×練乳を買った。練乳×苺を買った。イチゴキャンディーを買った。イチゴタルトを買った。ベーコンとイチゴとハチミツのサンドイッチを買った。……なんだ今の？口直しに餡蜜を買った。色黒スナイパーが釣れた。

「珍しいね。鷺志さんと茶々丸だけかい？」

偶然だと信じたい。

「もちろんデートだよ」

「……両手に一杯の甘味を抱えて？」

「彼女への貢ぎ物」

龍宮さんは呆れ顔でため息をついた。やれやれと首を振り、いつかのような口調で、

「女性への贈り物に大量の甘いものなんて、気配りが足りないんじゃないかい？」

ふっ、僕だって成長するのさ……！

「それこそ甘いよ龍宮さん。茶々丸の事を理解しきれていないね」

「ほっ……？」

挑戦的な笑みを浮かべる龍宮さん。その顔も、直ぐに引き攣ることに  
なる！

「茶々丸は、カロリーを気にせず甘いものを食べられるんだよ……  
・？」

そのとき、龍宮さんに電流走る……！！

「……………いや、やっぱりその量は食べきれな  
いだろう」

はい。

その通りだと思います。

結局、アイスクリーム（各種）だけ食べて、残りは皆へのお土産  
になった。飲み物はカフェ・オレとイチゴミルク。フルーツ牛乳と  
練乳を買って帰途についた。

## 第十・五話（後書き）

作中のお菓子には灰色の趣味です。飲み物も灰色の趣味です。

## 第十一話（前書き）

間隔が空く、と言っておきながら意外と筆が乗りました。

今回から原作突入ですが、皆さんに気に入っていただけるか不安でなりません。

せめて暇潰しになれば、幸いです。

## 第十一話

「ナギの子なら、きっと奔放で自由な子でしょう。さぎは私に似て几帳面ですから、きっと苦労するとは思いますが、どうか、友人の息子を、よろしくお願いします」

そう詠春さんをお願いされた。

他の人、例えば学園長に同じことを言われても、きっと僕は取り合わなかったろう。

しかし、詠春さんだ。

大抵の人から見ればネギは『英雄の息子』だ。元老院あたりは『狗』とか『道具』かもしれないが、そこに大した違いはない。

詠春さんは、『友人の息子』としてネギを見ている。単身来日する『友人の息子』を、『自分の義子』に任せてくれたのだ。本当は徹底して無関係でいるつもりだったけど、詠春さんにそう言われては否もない。

と、言う訳で、僕は駅周辺の人払いを済ませていた。

S i d e ・ネギ

修業の地、日本。

僕は今日から先生だ。

逸る気持ちを抑え、電車からヒョイと降りる。杖が心配だったけど、引っ掛かることもなく降りられた。

「・・・・・・・・あれ？」

日本の朝は皆早足で忙しない、って聞いてたけど・・・・・・・・誰もいない？

ドオンー！

大きな地響きと共に、目の前に女の子が転がってきた！

「……あつ、大丈夫ですか!?」 一瞬ボウツとしちゃったけど、よくみると全身が泥で汚れている。

「だいでいび傷無です。それより、あなたも魔法使いですか……?」

「も、って、あなたも!?!」

僕が聞き返したとき、もう一度、さっきより少し小さな地響きが起こった。

その方を見ると、浅黒い肌をした、半裸の大きな男の人が、僕たちを見下ろしていた。

「な、なんですか!?!あれ……!?!」

そこらの建物よりよっぽど大きな男の人。まるで小山を立たせたような大きさだ。

「だいだらぼっち。日本の各地に例のある、山や湖を造ったと言わ

れる国造りの神の一種です」

に、日本の神様！？なんでそんなお方が！？

「其悟ひいせいつて、信仰が薄れているせいで大きな力は出せない用ですね。なにやら良からぬ気に当てられたのでしょうか。凶暴化しているようです」

か、神様が暴れてるなんて……。修業中の僕になんとか出来るわけが……。！？

だいだらぼつちが大きな腕を僕に振り下ろしてきた。避けたら、この女の子に当たる！！

「風楯……」

咄嗟に杖を構える僕の前に、普通サイズの男の人の背中が割り込んだ。

その人が何かをしたようで、だいだらぼつちの腕が払われる。

「君、少年。大丈夫？」

男の人がそう言って肩越しに振り返った。黒髪に黒い目の、普通の日本人だ。

「は、はい。大丈夫です……」

僕の返事に満足したように、男の人は軽く、本当に軽く微笑んで、いつの間にか持っていた右手のカタナを構えた。

真っ直ぐ伸びた腕で持つ、真っ直ぐ伸びた日本刀。

「取り合えず勢いを削ぐから、あとは緑ちゃんに任せるよ？」

「わかりました  
意得」

勢いを削ぐ？

この人はたった一人で神様を相手にするつもりなの！？

「神鳴流決戦奥義……」

辛うじて見える速度で大きく踏み込み、一瞬でだいだらぼっちに肉薄するその人。

「応用編!!」

右手のカタナを両手で持ち、右下から左上に勢いよく振り上げた!

「天劍絶刀!!」

凄まじい轟音とまぶたすら焼きかねない雷光を轟かせ、そのカタナは振り抜かれた。

「ありがとうございます!」

「気にしないでいいよ。むしろ巻き込んでしまったことを謝りたいくらいだ」

助けてくれた男の人、罪口鷺志さんはそう言った。なるほど。これが日本人の美德、ケンキョか。

「ところで少年、ネギくん。時間は大丈夫？」

「あっ!？」

罪口さんにもう一度頭を下げ、僕は学校に向かって走り出した。

s i d e ・ 鷺 志

　　だいだらぼっち（に紛する化け狸）が腕を振り下ろすのを見て、僕は瞬動で間に割って入った。取り合えず腕を払いのける。

「君、少年。大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です・・・」

まあ怪我のないタイミングは計ったしね。緊張はさせても怪我をさせないタイミング。我ながらいい時機だった。

「取り合えず勢い削ぐから、あとは緑ちゃんに任せるよ?。」

「わかりました  
意得」

出来る限り派手な技を決めよう。素人ネキに辛うじて解る程度の凄まじさが必要だ。

曲弦系は解りづらい。音は解るわけがない。魔法は僕自身が大した使い手じゃない。やっぱり神鳴流か。

「神鳴流決戦奥義……」

加減を加えて減速した瞬動で間合いを詰め、下段に構えた鉋の柄頭に左手を沿えた。

「応用編!！」

斬＋突＋気（同時押し）

「天劍絶刀！！」

「低級狸には過ぎた技だけど、まあいいでしょ。」

さて、僕はあのイベントが何時に起こったのか、詳しい時間を知らない。なので千雨と密に連絡を取り（愚痴が大半。子供先生はいかにも彼女の嫌いな『非日常』だ）つつ、そこに糸を張り続けた。

そしてとうとう、糸がそれを感知した。大きな荷物を抱えてよたつきながら歩く小柄な人物。

急いでその場に駆け付けると、前髪で目が隠れた、蛇に絡まれかねない少女が両手に一杯の本を抱えていた。

「ね、君」

「ひゃあ……」

僕としては転ぶ前に本を持ってあげるつもりだったんだけど、声をかけたのが悪かったらしい。

元々引つ込み思案で人見知りな彼女のこと、見知らぬ男（知り合いに家族以外の男がいるか不明だが）に声をかけられて竦み上がった。しまった。

そこがちょうど階段。なるほどバックノズルとはこれか。

少し離れたところでネギが杖を構えたのが見える。僕はそれを糸で邪魔しながら、女生徒の体を支えつつ本を拾った。まあ落ちる前なのだから、拾った、というのが正しいかは不明だが。

「あ、え……………」

「ごめん、驚かせちゃったね。少し持っつて言おうと思ったんだけど」

「あ……………はわわ……………」

みるみる顔が赤くなる。暴発する前に体を離し、さっさと本を抱

え直した。

「これは僕が返しておくよ。図書館でいいのかな？」

答えは聞かず、ただその場を後にした。多分彼女もどもるばかりでまともな会話にはならなかっただろう。

チラリとネギに視線を超越し、それにネギが気付いたのを確認して、取り合えず図書館島へ爪先を向けた。

「罪口さん！さっきのは・・・」

「さっきのはいただけないな。スプリングフィールド君」

ネギの言葉に先んじて、僕はネギを軽く諫めた。

「もちろん彼女を助けようとするのは尊いことだ。そこはいい。ただ魔法を使うのは感心出来ない」

「魔法は君が思うよりも真剣に隠すべきなんだ」

「人助けをしたいと思うなら、魔法を使って、その記憶を消すなん

て乱暴はいけない」

「魔法を使わずに済むよう、体を鍛えるのも大事だよ？」

「そうだこの石をあげよう。これは僕が用意した魔法石でね」

「魔力を落ち着かせる、暴走を防ぐ効果がある」

「君は魔力の制御しきれていないみたいだしね」

「ほら、この指輪だよ」

「魔法発動体にもなってるからね」

「いかにも魔法使い然としたその杖は、あまり持ち歩かないほうがいい」

「君のお父さんには味方同様敵も多い」

「君を利用しようとする人も少なくはないだろう」

「確かに君の父は英雄と言えるだろう」

「だけど忘れてはいけない。君には父とともに母もいる」

「父がなぜ英雄と呼ばれるようになったのか？」

「ただ憧れるだけじゃなく、考えることも必要だよ」

「おや、誰かがスプリングフィールド君を探しているようだね」

「行ってあげるといい」

「これは僕の連絡先だ」

「いつでも相談に乗るよ。困ったことがあつたら聞くといい」

ネギがどこか虚ろな目で戻っていった。

音は使っていないから、あの影響の受け安さは彼自身のものなのだろう。

まあ言っても九歳だ。多感な時期である。泳春さんの件もあるし、長い目で洗n・・・調ky・・・教育していこう。

子供を導くのは、やはり身近な年上の仕事だろう。

なんて綺麗にまとめようとしたところで、僕は彼にあまりいい印象を抱いていないし、本当に長くなりそうだ。

今まで明かされていなかった設定しんじつ！

神楽坂と木乃香は別の部屋だった！

木乃香は千雨と相部屋になっている。これはいずれ来ると分かっていたネギと木乃香を離す策だったのだが、意外とあっさり学園長は了承した。

そして今。

どうやら神楽坂一人だった部屋にネギが転がり込んでいるらしい。

お姫様とネギを引き合わせるのが第一、ということかな？

「おい罪口、何ぼーっとしてんだよ？」

あれから五日。

ネギはくしゃみで魔法を暴発させることもなく、宮崎さんにフラグを立てることもなく、そういえば神楽坂への「英語ダメ」発言もなかったらしく、当然惚れ薬騒動もなく、漫画にしたなら「あれから五日」くらいで導入されてしまうくらいに何も起こらなかった。

「ほら罪口お前の番だ」

ジョンにバットを渡された。今は体育の授業中。担任がなにやら急用で出掛けてしまったのでレクリエーションに興じているところだ。ちなみに競技は球技である。野球だ。

「担任が急用でいねーからって始めたレクリエーションで、野球をやることになっただろうが。で、お前の打順だからってジョンがバ

ットを持ってきてくれたんだぜ？」

「もう少し早く説明しろアホ。そもそもツナギは冒頭に出る冒頭に」

・  
・  
喚くアホを無視して、僕はバッターボックスの立った。相手は・

「んっふ、罪口さんですか。これは気合いを入れないといけませんね」

A組の恋墨だった。

微笑みと甘いマスク、博識が売りで球技が得意な優等生だ。僕は彼も魔法生徒ではないかと思っっている。

「あまり気負わないでよ。スポーツはあまり得意じゃないんだ」

「おや、それは驚きですね。先ほどの、谷愚痴さんを蹴り飛ばしたときなんか、腰が入ってましたよ」

「慣れてるからね」

「それも、どうかと思いますが・・・？」

スツと、恋墨が目を細めた。やや真剣な口調で問い掛ける。

「これから僕が投げる球。打ち取れたら」

台詞の途中で投げてきやがったよこの優男。

まったく。屋上まで飛んだボール、僕が取りに行かなきゃいけないのか？

288

そして屋上。

そういえばそんなイベントあったな、なんて懐かしんでいた。

「あ、さぎくんや〜！」

屋上ではつら若き乙女が惜し気もなく白い手足を晒している。

つまり体操服でドッジボールをしていた。

「なんですかあなたは？ここは女子領ですよ」

長い金髪を風に靡かせ、日本人離れた容姿の少女に言われた。  
多分いいんちよだろう。

「えっと、ボール飛んで来なかった？ちょっと飛ばしすぎちゃって」

「ボールって……男子領からここまで届くわけないでしょう」

ボテ

いいんちよの言葉が終わる頃、ちょうどボールが飛んできた。

「あ、追い越してた」

はて。どうしてこうなった？

「頑張れさぎく〜ん！」

「罪口さん、頑張ってください！」

ネギや木乃香の応援が聞こえる。コートの中には僕一人。

なぜか、なぜか2ーAの代わりにドッジ対決をすることになっていた。

「ふ、ふん！誰が相手でも同じこと！」

「たとえ自分が打った打球を追い越すような男子が相手でも、私たちは負けない！」

「何せ私たちの正体は……」

ああもつ。なんか向こうはすっかりやる気だよ。

黒百合とか名乗って中二に笑われてるよ。ちょっと同情するよ。

「えっと？黒ラフレシア、でしたっけ？なんでもいいから始めまし  
よう」

「百合です！」

ラフレシアのリーダーらしき黒髪の女生徒が初っ端からボールを  
全力投球してきた。大人気ない。

取り合えずそれをキャッチした。避けたらギャラリーに飛んでく  
し。僕の真後ろには身内が集まってるのだ。

横から投げてくれたら素直に当たるのに。

「きゃんっ!?!」

取り合えず一人アウト。軽く投げたつもりだったけど、思ったよ  
りボールが重くて、勢いがついてしまった。

「くっ、トライアングルアタック行くわよ!!」

確かラフレシアの陣形だったはずだ。指示を出した女生徒はボールを素早く（僕から見て）右側の女生徒に回した。

僕はそれを受けて左を向く。

「えっ!?!」

ボールを回された左の女生徒が驚き、勢いのないボールを放ってくれた。当然、事もなげにキャッチできる。

「な、なぜパスルートがバレたの!?!」

そりゃトライアングルって大声で言ってるし。せめてスクエアとか言っときゃもう少し誤魔化しが効くのにな。

その後は実に退屈。僕が取って、僕が投げて、ラフレシアの花弁が散っていくだけの勝負だった。

「聞いたぞ罪口!お前女子と楽しく授業やってきたそうじゃねえか!?!」

寮の自室に戻ると、アホがアホ面を近付けてアホな声でアホなことを言うアホがいた。

なんか最初と最後の『アホ』で同じものを指してしまった気がする。

「コーコーサーのお姉様方とドッジボールできゃっきゃウフフでいやーなんだっただそうじゃねえか!！」

うぜえ。

携帯がメールを受信した。木乃香からだ。

今日のドッジのことだった。格好良かったと褒めてくれている。古さんの口元が緩んでいたらしいが、気のせいであって欲しい。

刹那からもメール。最近になって三行以上のメールが打てるようになったようだ。顔文字まで入っている。

彼女のイメージのため、内容には触れない。

千雨や茶々丸からもメールが届いた。内容は概ね木乃香と同じもの。細部は違うが、その細部も、長瀬さんがウズウズしてたとか、古さんの目がキラキラしてたとか、そんな違いだ。

それぞれに返信を打って携帯を閉じる。

そういえば、桜通りの吸血鬼。出るはずもないわけだが、あのイベントもフルスルーだろうか？

取り合えずアホを床に沈めて、今日の宿題に取り掛かった。

## 第十二話（前書き）

今までで一番グダグダな展開かもしれません……

バカレンジャーって結構難しいですね。

鷺志のキャラが最近ブレてきました。彼は一体どこにいくんでしょ？

## 第十二話

前回吸血鬼騒動への伏線みたいな事を言っておいてなんだが、そういえばその前に学期末試験がある。魔法の本を探して夜の図書館島に赴く、そんなイベントだ。

確かあれはネギの魔法を知った神楽坂が主動でバカレンジャーが出る、という流れだったと思うので、ここでは大丈夫かと思ったんだけど……

『今から図書館島行くんやけど、さぎくんもけえへん？』

と、木乃香から電話を貰った。

学園長の企みは、どうやら魔法バレ無しの状況もカバーしているらしい。

「じゃあお邪魔しようかな。ちょっと待ってて」

「あん？なんだよ罪口。お前どっか行くの？」

相部屋の弊害。アホに電話内容を聞かれた。

「男女比6：2で、『夜の図書館！ドキドキ 秘密の絵本搜索ツア  
ー！！ポロリもある・よ（／／／／／）』パート13」

騒ぐアホを寝かしつけ、僕は図書館島へと急いだ。

道中で携帯に着信。ディスプレイには人類最長の文字。

「はい匂宮」

「なんで僕にだけ殺し名？」

「僕には時間に多少の余裕もあります。が、もしかしたら自覚も無いのかもしれませんが、学園長は古い先短く棺桶に額まで入ってるんです。話の途中で逝去されてもつまりませんし早く本題に入ってください」

老人の囁り泣きは聞いていて気持ちのいいものじゃないと今知った。

『図書館島での一件。あまり大きく動かないで欲しい』

回復後、学園長は端的にまとめた。

『この件は儂が直々に担当しておる。そう大きな危険は無い』

「つまり多少の危険はある、と？」

『転んだ拍子に骨を折ることくらいはあるかもしれん』

「まさか学園長の道楽で生徒たちを魔法に巻き込むわけじゃありませんよね？」

『ネギ君の修業の一環じゃ』

「彼の修業は『日本で先生をやること』と聞いていますが？」

『うむ。立派な『魔法先生』になって貰おう』

解釈の違い、と言い張るつもりか。メルディアナの校長と口裏を合わせているのか、学園長の独断か。どっちにせよ、年端もいかないう子供を、老獪な奸計に嵌めるようなやり方は気に入らない。

ネギ個人はそう好きでもないけど、『子供をたぶらかす大人』は嫌いだ。イライラ死てくる。

「大丈夫ですよ。過度な手助けをするつもりはありません。あくまで、木乃香こもたけに誘われて、乗るだけです」

『し』を使わないように話すのって結構気を使う。いや『き』も使っていないけど。

さつさと電話を切って、僕は図書館島へと急いだ。

「あ、さぎくんや〜」

「さぎさん、こんばんはー!」

さよもいた。男女比が変わってしまった。

「木乃香さんからメールを貰ったんですけど・・・返信の打ち方がわからなくて、直接部屋に行っちゃいました!」

で、今に至る、と。

さよは長い間傍観者だったはずだが、何も見て分かるものばかりではないらしい。特に近代科学。卓越した科学は魔法と区別が付かない、とはよく言ったものである。

麻帆良においては皮肉だが。

「んん？ラヴ臭が漂ってきたねえ。一体どっちの彼氏だい？このか？さよ？」

長い黒髪の、眼鏡をかけた少女が鼻をヒクつかせて寄ってきた。

「木乃香。この夏場の台所でよく見かける方も、友達？」

「早乙女ハルナ。パルって呼んだって」

「いやあだ名は私から名乗るべきじゃない？っていうか初対面でG扱い？しかもこのか分かっちゃっう上に否定も無し！？」

集まっているのは原作と大体同じメンバーだった。違うのは僕と

さよ。それとネギがパジャマじゃないことか。

「あ、あのっ!!」

不意に、死角から大声で話し掛けられた。ちょっとビックリ。

「こ、この間はありがとうございました……」

「ああ、本の娘だね」

「はい。えと、宮崎のどかです!」

「僕は罪口鷺志。よろしく」

「むっはあー!ラヴ臭くふああ!!」

真っ赤になった宮崎さんに撃退されるバル。何気にアクティブだ。

「このか。この人が『頼りになる』助っ人?」

そう入ってきたのは鈴の髪飾りを着けたオッドアイの少女。神楽坂だろっ。

「うん。そっやえ」

「木乃香、褒めたって何もでないよ。飴ちゃん食べるかい？」

「貰っ」

飴（オレンジ味）をコロコロと転がす木乃香。まったくうい奴め。

「さぎさんは頼れる男の人です！」

「飴ちゃんあげよう」

飴（グレープ味）をコロコロと転がすさよ。まったくうい奴め。

「……なんか、罪口さんのキャラが掴みきれないんだけど」

「君の触角は掴みやすいよね」「ちょ、これ髪だから!？」

パルを置いてネギをちよいちよいと手招き。

「な、なんでしょうか……?」

「こうなった経緯を教えて」

「はい。えっと……」

ネギの話を聞く限り、どうやら魔法バレはしていないらしい。本人もわからないままに、あれよあれよと事態が運び、ここに至るか。

学園長。生徒に魔法使用疑惑。

「あ、あの……!」

「ん?」

正直目の前で大声だすのは勘弁してほしい。耳が痛い。物理的に。

「罪口さんがついて来てくださるなら、百人力ですね!！」

まだ日本語に慣れていないのだろう。それは当人に直接言う事じゃない。

「ケーキをあげよう」

しかしなんだ、結構いい子じゃないか。

「え、えええ!?!どこから出したんですか!?!」

「ポケットから」

「ポケットからホールケーキ!?!」

賑やかな探索になりそうだ。

そして、図書館島内部。

いや本当にすごい規模の蔵書だ。少くからい高めの入館料を取っても本の虫が相当数わくだろう。

確か原作では本が雪崩落ちたりトラップが発動したりと、インデイーでジョーンズなイベントがあったはず。

館内に糸を巡らせて本を支え、ついでに進行方向の罫を使い物にならなくする。

「さよ」

「はい？」

「大丈夫だとは思っけど、もし誰かが落ちそうになったら支えてあげてね」

「はい！任せて下さい」

笑顔で拳を握るさよ。大分安定してきた『ポルターガイスト騒霊現象』。ここが初の実用場面かもしれない。

といつても、ネギは魔法封印していないし、僕もカバーしている。そうそうイベントは起こらないだろう。

学園長との約束？学友のために指を軽く動かすだけだ。咎められる謂れはない。

む。  
バカレンジャーの見せ場を過度に奪うことなく、かつ滞りなく進む。

しばらく歩くと綾瀬さんの携帯に着信があった。地上の宮崎さんとパルからだ。

『こちら地上班です。その先に休める場所があるので、そろそろお弁当にしてくださいー』

ー第178 閲覧室

なぜか本棚の頭と同じ高さにある広場だ。

「あ、これおいしー」

「ポテチいる人ー」

「ほしいアルー」

なんで椅子でなくテーブルに車座？

「あの、罪口さん」

ここ数十分で大分僕に慣れたネギが小声で話し掛けてきた。

「この図書館、やっぱり……」

「魔力を感じる。かい？」

「気付いてたんですか？」

「そりゃ、ね。どうやらここには何かがあるみたいだね」

学園長謹製のゴーレムとかね。

現在、バカレンジャーの面々がツイスターゲームに勤しんでいます。

っていうか、クリア後です。

『る』にいきそうだった佐々木さんの手と神楽坂の足を糸でちよちよいといじり、佐々木さんの手を『ら』に誘導。どうでもいいけど『おさら』じゃなくて『さら』でいいよね？

「やったー！クリアだー！！」

「メルなんとかの魔法の書ゲットだぜー！！」

よろこぶバカレンジャー。まあこのために全身薄汚れてきたわけだしね。

ところで学園長はどうするつもりだろう？本手に入れちゃったら地下での勉強会はできまい。

『フオ。よくぞ全ての質問に答えた。では次の……………』

「暴飲暴食っ！！」

なんか無限ループ入りそうだったんで、ぶつつけ本番『暴飲暴食』ぼういんぼうしょくを叩き込む。片手で一体計二体。ゴーレムはデユラハンにジヨブチエンジを遂げた。

「今のは……」

「臂掛拳、とは違うアルね。あれは両手でやっては意味がないアル」

「うむ。むしろ片手より威力は落ちるでじやなろう」

「避けづらさを重視した、力任せの平手……」

「で、じやなろうな」

何やら冷静な分析が聞こえる気がする。好きなことだから発揮できる思考力。分からないでもないこともなくなってしまう。

「あれ？」

さよと木乃香だけは今の寸劇にも硬直せず、メルキセデクの書を

奉る祭壇へ向かった。

「どうかした？」

書の前で顎に手をあて、うんと可愛く唸る木乃香。ひよいと書に伸ばされたては、しかし虚しく空を切った。

「これ、本物とちゃうよ？」

『……………え？』

一瞬の沈黙の後、バカレンジャーが祭壇に殺到した。

「ほ、ホントだなにこれすり抜けるー！？」

「掴めないアルー！！」

「これでは読めんどじわるな」

「どじわるのー！？」

プチ阿鼻叫喚。やれやれ、だ。

まあ実際にそんな本があつて、時間をかければ到達できる場所に保管されているなら、とつくに高等部や大学部の皆々様が殺到して  
るだろうさ。

「今回の教訓は、楽な方法を探す時間があつたら、勉強に当てなさい。つてところかな？」

あの詐欺師ならもっと上手いこと言っただろうな。

頑張れネギ。ここからは教師の仕事だ。

その翌日から開催された勉強会の結果、2 - Aは見事学年10位に収まった。

最下位からの大出世とはいえ、このなんとも微妙な結果は、一体何が問題だったのだろう？

原作と今回の違いは大きく三つ。

- ・地下合宿の有無。
- ・バカレンジャーの行方不明事件の有無。
- ・学園長の直接介入の有無。

果たしてどれが、順位低下の主因なのだろうか。

この三択は、後日談にも今回のオチにもなりはしないだろう。

## 第十三話（前書き）

仕事場から休憩中に投稿。

ちょっとメタってます

書き方を変えてみました。

## 第十三話

「朝礼。おぎ先輩」

朝一番。取り立てて急ぐでもなく学校に向かっていた僕の背後から、緑ちゃんが現れた。

「おはよう。緑ちゃん」

普段なら登校中に会うことはないが、夕べはちょっと夜更かしして、朝が遅くなってしまったのだ。

お陰で木乃香とも千雨とも刹那ともさよとも別。一人淋しい登校風景となるところだった。

「せっかくだし一緒に行こうよ」

「許堪かまいませんが、先にお代を頂いても？」

「僕との登校は対価がないと嫌なのか・・・」

「其違とんでもない。対価程度じゃ足りませんね。不釣り合いな具合の報酬が必要です」

「必要、って言ってる時点で多分対価だよ」

朝から少し気分が落ち込む。緑ちゃんのノリはお昼頃ならベストだが、朝一では少々キツイ。

ともあれ、何気ない会話や他愛もない会話、益体もない会話を交わしながら歩を進める。なんだかんだ言って、結局緑ちゃんと話すのは結構好きだ。

「話変、先輩って魔法使えるんですよね？」

「往来ですの話じゃないと思うけど、使えるよ」

「感心しますね。私は魔法の詠唱なんか出来ません。精神的に」

「中二とかいうなよ？」

「自分で言ってるじゃ世話ないですね」

言ってるやるなよ。ここではいい年した大人がいい調子でいろいろやってるんだから。

「其無、私は口が回りませんで。噛み噛みです」

「それこそそんなイメージないけどね」

「この会話だけでも随分噛みかけています。何度先輩を呼び捨てに



しかも噛んでる。

「良別いじつやないですか。一字が万字って言いますし」

「君それが言いたかったただだね」

字が違う。なんてツツコミ、僕は入れない。

「言通それに、早口言葉は苦手だって言ったじゃないですか。大体今のは難しすぎます。さぎ先輩だって言えないに決まっています」

「東京特許許可局局长今日急遽許可却下、東京特許許可局局长今日急遽許可却下、東京特許許可局局长今日急遽許可却下」

「一違おしですね。最後名古屋になってました」

「僕はウミウシ以上ヒトデ以下か」

それと便座カバー。

まったく。これじゃあまるで貰ったバトンからネタが湧いたみたいじゃないか。取って付けた様なこの一文がまた腹立つ。

「あれ？なんだろあれ」

「今日はいいい日差しですね。風も心地いいです」

「言葉のキャッチボールをしようぜ・・・」

「何言なにいうてるんですか? ボールですからキャッチボールなのであって、言葉でしたらキャッチラングウィツジです」

「そこはワードでいいんじゃない?」

「和訳したら掴む言葉ですね」

「おお、政治家が欲しそうな文句だ」

「彼らはマスコミの目を掴んで話さないので大丈夫では? 特に最近の総理ときたら・・・」

「あれ? なんだろあれ」

「何事なにうしよました?」

僕たちの進行方向には人だかりが出来ていた。汗臭そうな輪が形成されている。

「何有なにうしよつた? まるで格闘技系の部活が寄ってたかって中武研の部長である古先輩に勝負を仕掛ける毎朝の恒例行事みたいな光景ですけど」

「多分そうなんじゃないかな?」

近付くとハッキリ分かる。どうやら正にその通りだったようだ。

このイベントは修学旅行から帰って来てからだと思ってたけど・・・

ああ、よく見たらネギがない。彼が遭遇するのが修学旅行後だと、そういうことか。

うわぁー！！

あつと言う間に人だかりが崩れた。流石古さん。一般人最強格。

うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

一人、やすい金髪の男子生徒がこっちに跳んできた。僕は咄嗟に（相応の手加減をして）蹴り返す。

コンボが繋がった

ええええええ！？

再び空の人となる男子生徒。その行く先にいるのは・・・クマの着ぐるみ？

「その人、危ない！」

優しい誰かがそう言うが、僕は彼女（顔は見えないが多分女性だ）の心配なんて少しもしていなかった。

クマは声に反応して振り返り、その腰を鋭く切って滑るように蹴りを繰り出した。着ぐるみを着ているとは思えない、鋭い蹴り。

しかも彼女の蹴りは一撃では終わらなかった。足が霞んで見えなくなるほどの連撃、連撃、また連撃。

そばで見ていた男子生徒がごみ箱の蓋を開け、クマがそこに金髪を蹴り込んだ。

流れるような流れ。実に綺麗な一場面だった。

「惜しむらくは僕が彼等の友人じゃないことか……」

「平気だいじょうぶですよ。さぎ先輩も十分変人の素養を持っています」

悲しい箔押しである。

「むむっ！昨日の人アルね！！」

「人違いです」

「私と勝負アル！！」

「僕医者に激しい運動を禁じられてるので」

「さあ、どこからでもかかってくるアル！」

バベルの塔って神話があったよね。言葉が通じなくなるやつ。

古さんはすっかり臨戦体制。仕方ないので僕も構えを取った。

足を前後に開いて腰を落とし、手を前に伸ばす。前足の側を上、後足の側を下に。胴体を手足に隠す懐の深い構え。

天上天下の構えだ・・・！

やけに堂に入ってやがる。

あいつ、空手家か！？

周囲からざわめきが聞こえるが、生憎僕は神鳴流剣術しかまとも  
に習ったことはない。以前神鳴流の道場にきた無手者の見よう見真  
似である。

まあ、だから古さんも攻めあぐねてるんだけど。

伏線無しで突然現れた彼は、中々の使い手であつたらしい。

「ああ、そういえばかかってこい、って言われてたっけ」

流石に、「何て言っただけから」とは続かないようだ。

瞬動は使わず、ただ踏み切っただけの移動（敏捷チート）。

流石に目を剥く古さん。あれだけ深く腰を落としておいての素早い移動。格闘家だからこそ通じる不意打ち。

「一喰い・・・！」

体重を乗せた右手を大上段から振り下ろす僕。ギリギリで後ろに躲わす古さん。

流石に昨日見せてるし、不意を突いても慣れない大技じゃ避けられるか・・・。

予測済み。

「下の歯っ！！」

腕の勢いにつけて足を踏み切つての、胴回し回転蹴り。上からくるのに下の歯。

流石にそこまで間合いが空いているわけじゃない。踵は空振り、ふくらはぎが古さんの脳天を捕らえた。どうも威力軽減の為に前に

出た節もある。

古さんの認識を、少しプラスに動かそう。

「……ってあれ？イタくないアル……？」

「手加減したからね」

忍法足輕の汎用性は輪ゴムに匹敵すると思う。

名付けて、「一喰い・下の歯」甘噛み『』。

目をキラキラ輝かせる古さんや、騒ぐギャラリを置いて、僕は  
緑ちゃんの元へ戻った。

あれ？もしかして武器暗器凶器なしのバトルって、これが初めて  
かも。

「お、来たかな？」

「あん？何が？」

夕べ張った糸に反応。麻帆良に侵入者があった。

灰汁取りの如く張った糸で、ようやくかかる生き物。取り合えずそのままその糸で拘束、現場に向かった。

「なんだってんだこりゃあ！？こんな罨じゃ、いくらオレっちでも見破れっこねえ！」

剥き出しの虎挟みすら見抜けなくてよくもまあ抜け抜けと。

寄りにも寄って女子寮大浴場にダイレクトで這入ることないだろ。お陰で全身全霊の空間製作を強いられるんだ僕は。

さて、本国に送り返してはいおしまい、かな。結局コイツが一番一般人を巻き込んでるし。

「しかし、このネズミがいるってことは、やっぱり吸血鬼イベントは無しか」

「む！誰でえアンタ！？」

魔法世界への連絡方法なんて知らないし、学園長に任せるか。そう思ってネズミを拾い上げたとき、

「カモくん？」

赤毛の少年が現れた。

ネズミ縛るのと、この辺の探索で大分系使っちゃったし、見過ごしてしまったらしい。

正直ゴネられるかと思っていたが、存外にすんなり、本国への送還を了承してくれた。

「カモくんとは友達ですけど、それと犯罪は別ですから。軽犯罪とは言え犯罪は犯罪。キチンと正すのも友達の役目だと思います」

誰だこの優等生。

正直抱いていたイメージと違いすぎる。もっと融通の効かない感情主義者だと思ってた。

妄信的で盲目的な思想主義の面倒臭い性格だと思ってた。

僕の思い違いだったのかな？それともたった今脳裏をよぎった限定三回の御仏スマイルが関係しているのかな？

それとも、あの拙いとすら言えない嘘を、あのネズミがつかない原因か？

まあなんであれ、楽だからいいけど。

「あの、罪口さん」

「なんだいスプリングフィールド君？」

「あ、ネギでいいですよ。ファミリーネームじゃ長いですし」

「じゃあ改めて、なんだいネギ？」

え？僕？苗字で呼ばせるよ？

そのうち気が向いたら名前と呼ばせるのも吝かじゃないかもしれない。あんまムカつかないしこのネギ。

農薬は使つておとつんのでんせつ（聞いて）いても、保存料は使わおくさんのおはなし（聞かせ）ないよ  
うに頼んであるし、もしかしたら度々繰り返した有機農法おせつきほうが効いた  
のかもしれない。

ともあれ、このネギは品質せいかくがいい。

「僕に体術を教えてください！」

勢いよく頭を下げ、ネギはそう言った。日本文化によく馴染んでる。

どうしよう？正直僕のはチートに頼る部分が多い（というか頼りつきり）だし、格闘そくは古さんに任せた方がよさそうだ。

ああでももうじき修学旅行か。朝倉さんに魔法バレするんだっけ？

いろいろイベントはスキップしてるし、大丈夫だとは思っけど、念のため瞬動くらいは教えといてもいいか。

「僕はそう達者なものじゃないけど、簡単な歩法くらいで良かった

ら

「あ、ありがとうございます！」

どうでもいいけど、そんな大声出したら・・・

「こらー！ネギ坊主！！」

「センサー覗きー？」

あゝあ見つけた。

揉みくちやにされるネギをよそに、僕は空間製作と音と縮地でその場を後にした。

願わくば、ネギが僕の名前を出しませんように。本気で洒落にならないから。

後日。木乃香と刹那と千雨とさよからメールが届いた。内容はもちろん風呂場の件。

アホの記憶を操作してアリバイを製作。ずっとインディアンポーカーに興じていたことにした。

あの薬味め……！

## 第十四話（前書き）

ネギのくだり、無理矢理感が……

今回から修学旅行編です。

## 第十四話

修学旅行である。

実は我がクラスの大意は当初ハワイに向いていた。しかし僕は木乃香の傍から離れるわけにはいかないし、まして今回のそれは大きな騒動があると分かっている。

そこを、まあ音を使ったり使わなかったりでなんとか皆を懐柔し、なんとか京都市行きと相成った。

「班のメンバーは各々好きな人と組んでくれ。尚、家庭の事情的なあれこれで、なんやかんやの内に恋墨が京都に同行する運びとなった。このクラスと行動を同じくする予定なので、どこかの班に入れて欲しい」

「よろしくお願いします」

僕の班は言わずもがな。アホ、国喜田、ジョン、恋墨。そこに僕を入れて五人である。

代わり映えのないメンバーで申し訳ないが、無難というのは尊いものだと思つ。

「今回の道程、学園長のよからぬ思惑が働くようですね。彼の少年

教師が駒とされるようですが……。東西の確執も大きいと言  
うのに、修学旅行のついでに親書の受け渡し。聞けば西の頭領は婿  
養子だとか。公私の混同も、ここまで来ればいつそ天晴れとさえ言  
えますね」

説明ご苦労。

お察しただけだと思うが、恋墨も魔法生徒である。年齢や性別  
の都合上、警備員として共に動く機会が多かった。

彼にも彼の思惑があるようで、学校にいい印象を持っている訳で  
はないようだ。彼の学校生活もまた、痛快な物語と成り得るのだろ  
う。

「あの、罪口さん」

修学旅行に持っていくカバンなどを買いに出てきたのだが、そこ  
でネギと遭遇した。

「おや、誰かと思えばいつだったか僕の名前をホイホイ出したネギ  
少年じゃないか。どうかした？」

「えー？えつと、その節は、すいませんでした……」

「いやまああの場にいたのは事実だし、僕の心は猫の額の如き広さを誇ると自負しているからね。大して気にしていないこともないよ」

「えっと……、ようするに、心が狭いから許してないよ、と？」

「本人に聞き返せる辺り、存外豪胆だね？」

まあ本当に気にしてないけど。身内の誤解は解けたしね。

ネギの話の聞くところ、たった今学園長から特使としての任務を賜ってきたらしい。

恋墨情報早過ぎないか？もう少し懇意にした方がいいかもしれない……。

「それで、一応は応じたんですけど、こつ言つのは学校行事のついでなんかでいいんでしょうか？学園長にはそここのところはぐらかされてしまつて……」

おやま。

どうしたのかねこのネギは。原作に増して子供らしくないぞ。最初に言った『考える』つてのが効き過ぎたかな？

「その辺は学園長も何か考えがあるんじゃないか？多分だけど。自信はないけど」

そして考えもないだろうけど。まあ実際、血縁はなくとも一応『近衛』だし、東西の確執は半ば形骸化しつつあるのだ。それこそ、親書が渡った事実さえあれば済むほどに。

「そう、ですか。罪口さんがそうおっしゃるなら、大丈夫ですよね」

なんか期待が大きい。お父様の代わりに僕を据えたりしないですよ？

二、三世間話をして、どうやらようやく形になりつつある瞬動を軽く披露して、ネギは意気揚々と帰っていった。

さて、僕はカバン探しを再開しよう。

そして当日。集合場所の駅前。

集合時間は九時。我等が3-Cは誰一人の遅刻もなく、全員集合及び点呼を終えていた。

皆なかなかの張り切りようである。

「やぎく〜ん！」

「おはようございまーす！」

木乃香とさよが元気よく手を振ってくる。元気がいいのはいいとだ。

ちなみに向こうの班編成は、木乃香、刹那、千雨、さよ、エヴァ、茶々丸の六人で固まった。

木乃香は神楽坂と一緒にないのを少なからず残念がっていたが、既に東西の確執や自身の立ち位置を自覚している。関係者で纏まった方が、神楽坂を巻き込まずに済むだろう、ということを知っているのだ。

こんなどうでもいいことで我慢を強いてしまう辺り、僕はまだまだ足りないものが多過ぎる。

「あれ？罪口、あれって縁録さんか！？」

「は？」

「先崎さんもいるんだな！ついてるじゃん！」

ああ、そういえばアホには縁録緑、縁録紫、先崎咲として紹介していた気がする。

全く人騒がせな。一瞬後輩の姿を探してしまったじゃないか。

「やっぱり可愛いな。彼氏とかいんのかな？」

「おい谷愚痴」

低く名を呼び、谷愚痴と目を合わせる。

「あいつらに手を出死たら、僕は容死や死ない」

取り立てて変わったこともなく、僕たちは新幹線に乗り込んだ。

「ちっくしょう、また俺がビリかよ！！もうすっからかんだぜ！？」

谷愚痴がカードを派手にバラ撒いた。グーで殴って拾わせる。

「罪口は強いな。やり込んでる感がある」

「後ろから見ていても、まるで全員の手札を見透かしているかのよ

うな札捌きですよ」

「今度僕にも教えてよ」

「いやはや何と云うか、暇潰しのカードゲームは僕の独壇場と成りつつある。」

そうやり込んでいるわけでもないし、もちろんイカサマをしているわけでもない。天性の才能というやつだろうか？

「お前ら……なあにやってんだ？」

ふと、通路から担任の、怒気を孕んだ声が聞こえた。僕たちは声を揃えて答える。

「『『『『『カード麻雀』』』』』」

募集された。

大人しく読書に勤しんでいると、車内販売のオネイさんが現れた。言わずもがな、天ヶ崎千草である。

何故メガネをかけていないのか。ネギまではメガネって結構稀少だと思う。

取り合えず、牽制の一撃。

しゃりん

抜刀はもちろん、納刀すら、いやさ鞘すら見せない零閃。暗器術との併用ヴァージョン。カツコイイ名前募集！

狙ったのは髪。肩口で、ちょうど後期の奇策士どこの様に切り揃えるつもりだったんだけど、

ばさり

と、クビチヨンパされた人形ひとがたの紙が、天ヶ崎に成り代わった。

「式神か・・・」

突然いなくなった車内販売のオネイさんに周囲の生徒が慌てるが、それは直ぐにより大きな騒動に飲み込まれた。

キヤーーーーーー!!!???

隣の、女子達がいる車両から悲鳴の大（およそ三十）合唱。

行ってみれば案の定、そこでは緑色の両生類カエルが跳梁跋扈していた。

てつきり今から仕掛けるものと思っていたが、ふむ。考えて見れば修学旅行で使う車両なんて大分前から決まっただけで当然。そのシートやらにでも仕掛ければいいんだから、直前に出張する必要はない訳か。

じゃあなんで式神を寄越したのが気になるけど、そういえば原作ではしずな先生の水筒からも出てきてたな。ダメ押しにでも来たか？

どういう意図でこんな稚拙な妨害を試みたのか、出来ることなら脳みそ開いて確認したいけどそれを思うのも詮なきこと。大人しくカエルの捕獲に従事した。

これまでで、一番無駄に曲弦系使ったと思う。

「はい。これで全部だね」

「ありがとうございます、罪口さん。けど……これが、妨害なんですよか？」

「まあ相手が子供だし、って思ってるんじゃないかな？」

もしくは、警戒だけさせて狙いは別にある、とか。リョウメン的でスクナ的な狙いが。

「なににせよ、用心するに越したことはないよ」

ちよつと悪戯心が芽生えてみたり。

「親書は、大丈夫？」

原作ならネズミが言う台詞。結果として墓穴を掘ることになる要らない一言。それをあえて吐いてみた。

「はい、大丈夫です。親書は内ポケットに縫い留めてありますから」

なんだこの用心深さ。手紙を服に縫い付けるなんて発想、子供にあるのか？

なんか、このネギ転生者じゃないかって気がしてきた。

僕の訝しげな表情を見て取ったのか、ネギは少し照れ臭そうに、

「罪口さんにお説教されてから、色々なことを考えるようになった

んです」

「ん？」

「今までの僕は、父さんの事ばかり考えて、父さんばかり追いかけてました。それでネカネ・・・従姉妹のお姉ちゃんにも心配かけて、反省したつもりになって、それでも父さんしか見ようとしてませんでした」

うんそうだね。そこも呆れられる由縁だよな。

「でも、罪口さんに怒られて、諭されて、教えられて、気付いたんです。父さんを見習うとかそれ以前に、僕が何も知らない子供だった」

「あまり子供らしくないことを言ってるけどね」

「それは罪口さんのせいですよ？」

ははは。ユーモラスじゃないか。

「知らないことを知るには、学ぶか教わるか気付くしかないって、気付いたんです」

「それで、その機会に遭ったときにしっかり『知る』ために、常に考えることを癖付けよう、と？」

「はい！」

「屈託のない無邪気な笑顔はいいけど、それは結構厳しいと思うよ？」

疲れる生き方だし、多分元老院あたりはいい顔をしない。

遠くない将来、破綻しそうだ。

「そのときは、そのときです！」

「ははは・・・」

早速考えてないじゃないか。

まあ適度に考えないことも大切さね。

焚き付けた張本人らしいし、木乃香たちの障害にならない範囲なら、協力もしてあげるよ。

## 第十五話（前書き）

未明と夜と、連続投稿でしょうか？

内容が薄くなっていないといいのですが・・・

ポジティブ思考ってどうやるんでしょう？

## 第十五話

「京都おーっ!!」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ!!飛び降りれっ」

「では拙者が・・・」

「おやめなさいっ!!」

元気がいいねえ。

綾瀬さんが水を得た魚のように清水寺の解説をしている。あそこまで饒舌に話す綾瀬さんは初めて見た。

「おい罪口、飛び降りろお！」

「貴様がな」

ニヤつきながら気持ちの悪いテンションを発揮するアホの背中を、ジヨンが勢いよく蹴りつけた。

そんなコントを横目に、僕ははしゃぐエヴァの相手に必死だった。

「落ちて着けエヴァ。外出には慣れたんじゃなかったのか？」

「京都だぞ京都！一番日本らしい街じゃないか！一度来てみたかったんだ！！ここが清水寺か……」

エラくテンションが上がっている真祖の吸血鬼。頬を上気させ、せわしなく周囲を見回している。

千雨は苦笑しながらパンフでエヴァにここの説明。茶々丸は記憶データベースからパンフに乗ってない情報を開示。さよはひたすらに感心していた。

木乃香と刹那は微笑まし気にそれを見ている。いやあ実に好ましい光景だ。

「おい罪口、そろそろ離れとけ。新田が嫌な感じに凝視してる」

ジョンに注意を促される。確かに新田先生の『風紀を乱すな』オーラが目に見える濃度になりつつある。史上最強はんまさんちの生物ゆづじろつくん的な、アレ。

そういえばここって哀川さんと出夢くんの決戦場だったよね。

「最強種エヴァ、ちょっと本格的にバトらない？」

「いやめい!!」

千雨は吊り男のタロットを使った

僕に一定時間の麻痺効果

ただの笑えない冗談じゃないか。笑って流してほしいねえ。

「キャー！ーッ!?!」

「またカエル！ー!?!」

おっと落とし穴イベントだ。僕しばらく動けないんだけど、どうすべき？

直ぐに千雨に解説して貰えた。あのままだったら今度こそ新田先生の雷がおちていただろうから、助かった。

まあそれも自業自得だろうけど。

僕が現場に追いつくと、事態は音羽の滝の飲酒事件に移っていた。

酔い潰れる女子中学生たち。お酒のことはよく分からないけど、ひしゃくに何杯でベロンベロンなんて、度数（だよね確か）が高いのか？急性アルコール中毒が心配だ。

「な、なんだこれは！？」

驚きに声を荒げる新田先生。まあ観光地で生徒が酔い潰れていたら普通驚く。

「あ、新田先生、瀬流彦先生！滝の上にお酒が仕掛けてあったみたいなんです！」

「お酒！？」

事情を知った新田先生は、観光客を標的にした悪質な悪戯と判断。警察に通報した。

これで天ヶ崎が捕まれば楽なんだけどね。

ホテル嵐山。

女子は本館、男子は別館に別れて部屋に荷物を置き、点呼の後に

一時自由時間となった。

食事までは少し時間が空く。その合間に、ネギから電話がかかってきた。

『今日のことと相談があつて……』

「妨害のことだね？」

『はい』

「用心した方がいいと思うよ。昼間の妨害が子供の悪戯レベルだったのは、君の年齢以上に存在を誇示する目的があつたからだと思う」

『誇示、ですか？』

「そう、誇示。私達はお前の行動を見ているぞ。いつでも襲撃できるぞ。ってわざわざ教えて、ホテルの外に意識を向けさせる気じゃないかな？レベルが低かつたのは、力量を量らせないため」

『……罪口さんの言う通りだとすると、敵は既にホテル内にいる、もしくは侵入する手段を持っている、ってことですか？』

「かもしれない、ってこと」

『じゃあ侵入防止の他にホテル内の警戒も必要ですね。このかさんのこと、罪口さんはご存知ですか？』

「学園長から聞いたのかな？だとしたら言われなかった？僕は木乃

香の幼なじみだよ」

『そういえば、今日も一緒に行動してましたね。エヴァさんもいましたし、あの班は皆さん関係者なんですか？』

「関係者って言うより有識者かな。木乃香も千雨もさよも、深く関わってはいないし魔法も使えない」

『関係者はエヴァさんと刹那さんだけ、ですか』

「木乃香も自分の立場は理解してるし、刹那たちもいる。特にエヴァは今制約はないわけだし、むしろ敵が気の毒だね」

『伺いました。【闇の福音】だと。父さんのことも』

「その辺は別の機会にしよう。今は君の持つ親書の話だ」

「おりましたな。お嬢様とその番犬」

「神鳴流の先輩が二人、それも一人はウチと同じ二刀。神童と天才がいつぺんに、なんて、ウチ嬉しくなって来ました」

「.....」

「なんでもええけど、俺はあのにーちゃんやるで？女を殴るんは趣味やないねん」

「いやいや、ここは数に任せて強襲すべきじゃないかな？」

ザツ！と、距離を取り、思い思いの構えを取る面々。白髪の少年は特に構えず、ポケットから手を出したただけだ。

「おいおい。ここは二、三言葉を交わして、『って！誰やお前ー！』って言うのが定番だろ？」

「罪口……鷲志……」

「できれば匂宮って呼んで欲しいな」

「知らんわっ！食らえっ『狗神』！！」

「ざんがくんけん」

「零閃」

最近になって気付いたんだけど、左に鞘を挿して、右手に斬刀、左手に絶刀の方がいいよね。零閃的な意味で。

というわけで、最近の僕は以前とは逆、右手に斬刀、左手に絶刀を持つようにしていた。絶刀で月詠を、斬刀で小太郎を捌く。

「猿鬼！熊鬼！」

「ちよつと落ち着いっつよ。『動きを止めて』」

ギシッ

僕の言葉に合わせて全員の動きが停止した。もちろんフェイトを含めてだ。

ああでも、やっぱりフェイトはキツいな。今にもレジストされそうだ。

「僕は別に君達と敵対しに来たわけじゃない。ただ協定を結びに来たんだよ」

「……………」

あれ、返事がないね？もしかして加減を間違えたかな？

「口と各種循環器くらいは動いていいよ」

「つぶはあぁっ！ー！」

三人が大きく息を吐いた。危うく死者三名で一段落つけるところ

だった。

「…………あれ？それって僕別に困らないね。まあいいや。詠春さんの仕事を無用に増やさず済んだ、ってことで。」

「協定の話だけど、木乃香たち学生に手を出さなければ、僕は親書の件に口だしをしない」

「…………それを信じるとでも？」

「この場で君たちを殺さないのは、証明の一つにならないかな？」

「……………」

天ヶ崎が顎に手を当てて黙考する。困るよねこんな協定。君たちの目的はその木乃香なんだから。

それでもここでは受諾せざるを得ない。断れば僕が暴れるのが目に見えているから。

君たちに出来るのは、一旦協定を結んで準備を整え、然る後に手の平を反すこと。

仮に、あのなんとかかっていう契約を遵守させる宝具を持っていても、それを使って困るのは自分達だしね。

僕としては、詠春さんの養子<sup>むすこ</sup>として、西の使い手に攻撃する大義名分があればいい訳だし。

「いやです、ウチはおにーさんと切り合いたいんやもん」

「ずっとこいで月詠のねーちゃん！俺かて戦いたい！」

「早いもん勝ちです」

ははっ、気楽でいいね。天ヶ崎は額を押さえてため息ついてるよ。

「呑むか、吐くか。楽な二択じゃない？」

「……わかった。その申し出、受けるよ」

「新入り！？何言ってるんや！」

「勝手に決めないで欲しいですね」

「了解は得たよ。それじゃあね」

揉め事は内々で解決してね。

《 》  
《 それでは麻帆良中の皆さん。「いただきます」》  
《 》

『いただきまーす』

ネギの音頭に続いて、あつちでは華やかな声。こっちでは野太い声で唱和する。正直食欲減退だ。編集で男声だけ省いてほしい。

向こうでは酒に酔っていた面々が悔しがっているのが聞こえる。ネギは木乃香の班に接触しているようだ。木乃香の護衛の話か、親書の話か。

「なあ罪口。お麩食べられるか？」

「嫌いではないね」

「じゃあ俺のお吸い物食べてくれ！苦手なんだよあの触感・・・」

「あ、じゃあ僕のも貰ってくれないかな」

「すまん、俺のも」

「僕のも、いかがですか？」

僕の班はどれだけ麩が苦手なんだ。お腹がタポタポになるだろうが。

「ネギくん今日ウチの班と見学しよー」

「ちよつ、まき絵さんネギ先生はウチの3班と見学を！」

ワーワーギャーギャー

喧々囂々。

男子連中はひたすら嫉妬の視線をネギにぶつけている。視線に質量があつたら、きつとホテル嵐山の半分が消し飛んでいるだろう。

原作通りなら宮崎さんの班についていくことになるはずだが、今回宮崎さんはネギに気がある訳じゃないみたいだし、ネギが誘いに応じたのは班のメンバー見たからだ。

今回も、きつと木乃香の班か、もしくはどこにも付かずに警邏をするに終わるだろう。

僕たちはもちろん、木乃香たちと行動を共にするつもりだ。

「鹿です！」

「鹿だな」

「フハハ！鹿だー！！」

上から順に、さよ、千雨、エヴァである。

千雨は特にはしゃいでいるわけじゃないけど、さよとエヴァのはしゃぎ振りが半端じゃない。鹿、可愛いしね。

ちなみにアホは、良い子に見せられない道具や、悪い子にも見せられない方法でその行動を制限している。女の子が大勢いてテンションが残念な具合に高揚してしまったらしい。

国喜田はもともと温和だし、恋墨は関係者故の自重。ジョンはどうも有識者みたいだし、我関せずのスタンスを貫くつもりだろうだ。

おかげで僕はなんの気兼ねもなく木乃香たちと修学旅行を楽しめる。ただ、旅行中に消費する糸は、多分50gを越えるだろう。

「おいダン！鹿煎餅があるぞ鹿煎餅！食べてみるー！」

「意味がわからないから。少し落ち着け」

「むむむ！結構美味しいですー！」

「食うな！吐けー！」

まあ人が食べても大丈夫なようには出来ているらしいけどね。

なんで躊躇いなく口にできるんだよさよは………、あ、やっぱ言わなくていい。

ちなみに、ネギは木乃香の班に付いて回っている。

どうせ親書も狙われる訳だし、昨夜の件もある。向こうの総勢が計れない以上、みだりに離れる訳にもいかない。

エヴァがいるんだからこっちは心配ないけど、親書を持つてるネギがウロチヨロしてると一般人にも危害が及ぶかもしれない。

格好の的になっちゃうけど、結局纏まるしかないのだ。

まあ二日目は襲撃的なイベントは無かったはずだし、常に糸で索敵を行っている。何かがあればすぐに気付ける。

「さぎく〜ん。鹿が、鹿が〜！」

「このちゃん！」

悲鳴に首を巡らすと、鹿が木乃香の回りに寄り集まっていた。手には鹿煎餅の空袋。足元にぶちまけてしまったらしい。

「はははは！コノカは本当に動物に好かれるな！」

「きつとマイナスイオンが出てるんですよ」

「さよが言う台詞じゃねえと思うが・・・」

「足！足舐められとる〜！」

「この鹿め！俺と変われ！！！」

「復活すんなアホ！！！」

告白イベントもなく、魔法バレのイベントもなく、山も落ちもない修学旅行二日目は終わる。

ネギは明日の自由行動に乗じて親書の進呈に向かうらしい。

多分今日が唯一の、修学旅行らしい日だろう。

第十六話（前書き）

中々話が進まない・・・

修学旅行編、もう少し長くなりそうです

## 第十六話

修学旅行三日目。

カモがいなくとも、魔法バレがなくとも、どうやらお祭り好きは麻帆良の性らしい。何をやらかしたのかは知る由もないが、3-Aは皆仲良く正座をさせられていた。

しかして、祭り好きは女子に限らず、男子もまた、その大数が朝までの正座を課せられていた。

女子はどうか分からないが、男子は本館への侵入を試みたのだ。

もちろんそんなものが糸に繋がらない訳もなく、全員その場で束縛。新田先生を誘導して全員お縄となった。この件で、新田先生に『ハイブアンドシーク不可視拘束』とのあだ名が付いたらしい。

羨ましくなんかない。本当だ。

食事も終え、今日は自由行動日。ネギが親書を渡しに行く予定の日である。

ネギの姿は既がない。彼を誘う生徒から隠れ、とうに館外への脱出を遂げているはずだ。

「さあて。今日はやっと自由行動だな。この日がメインだし、楽しまないとなー!」

アホが気合いを入れている。まあ反論はしないけど。

その場でちゃっっちゃと精神干渉。アホに音で暗示をかけ、僕が共に行動していると思わせる。

「じゃあ僕、向こうと一緒に行くから」

「おう」

「羨ましいね。黒一点なんて」

「ええ全く。あやかりたいものです」

僕の班は物分かりが良い奴ばかりで、本当に助かるよ。

「遅いぞダン!常盤金成という武将を知らんのか!」

「知らん。武将じゃねえ。ちゃんと平仮名を使え」

そのテンション昨日から続いているのか？もしかして皆の顔色がそこはかとなく悪いのは寝不足か？

「で、皆はどこに行くか予定立ててるんでしょ？」

「いえ、実は……」

「なあんも」

「立ててないんです」

「呆れることにな……」

「予定は未定、です」

「つまり行き当たりばったり、と？」

乾いた笑いを漏らす刹那に千雨。茶々丸は無表情だが、他の三人はニコニコ笑顔だ。いやエヴァは魔王っぽいけど。

まあ予定なんて立てたところで、あのテンションのエヴァが居たんじゃない破綻する。彼女の興味と采配で、今日の道程は決まるのだ。

side・ネギ

「えっと、ここでいいのかな？」

僕は、罪口さんに貰った詳細な地図（周辺の美味しい食事処三十箇所を網羅）を頼りに、なんだか難しい漢字の書いてある大きな鳥居の前に立っていた。

ここが関西呪術協会の本山、であつてと思う。地図にも『目障りな鳥居と辛気臭い竹林、うんざりする鳥居群が目印』って書いてあるし。

いや、僕がそう思った訳じゃなくて、鳥居と竹林が一致するなつて。

「ううう、ちょっと心細いな・・・」

形だけって聞いているけど、まがりなりにも敵対勢力の総本山へ単身乗り込む構図だ。妨害仕事を働く敵もいるわけだし。

「あれ？何か書いてある・・・」

罪口さんに渡された地図の右下に、『緊張したらここをめぐって？』と書いてあった。あ、ここ剥がれる！

ペリペリペリ

心地好い音を立てて上の紙が剥がれ、下の紙が露になる。そこには・・・

ガンバ！！

隠れて見てたりしないよね？

ひとしきり周囲を見回して、ようやく鳥居をくぐる決意をした

のが約四十分前。

僕はひたすらに鳥居をくぐり続けていた。

おかしい。経過時間と進んだ距離が釣り合わない。

」……やっぱり」

鳥居の一つにさつきつけた印を見つけた。

どうやら、敵の罠に掛かったらしい。

時間稼ぎが目的なら既に術中だ。僕自身違和感を感じただけで、打開の方法は皆目見当もつかない。

うう……、陰陽道の勉強もしておけばよかったな……。

いやいや。弱気になっちゃダメだ。こんなときこそ考えなきゃ。

さつきも思った通り、これが時間稼ぎなのは間違いないと思う。

僕は子供で、魔法も大して上手くない修業中の身だ。隔離する意味なんてそうないだろう。

それこそ、親書くらいしか。

それに、僕に危害を加えるつもりなら空間系の罠なんかじゃなく、もっと攻撃的なものにすればいいんだから。

時間稼ぎなら、僕がここから抜け出さないように、抜け出したときまたすぐ仕掛けが打てるように、見張りがあるはず。

まずは、その人にアクションを起こそう。

「もう我慢出来んわー!!」

絶叫と共に、学生服を着た少年がどこから飛び降りてきた。

「俺は犬上小太郎！勝負や西洋魔術師!!」

・

・

・

はっ!?

や、やられた!

まさか考えを止めさせるために突撃をかけるなんて!!

見張りが一人なら正面から勝負を仕掛けるなんてありえない。最低でもあと一人は見張りがあると考えるべきだろう。

一人が注意を引き、もう一人が遠方から仕留める。これが定石。

思考と行動が止まった今を攻撃されなかったのは、風向きか立ち位置か他の何かか、ともかく運が良かったに過ぎないはずだ。

目の前の少年と戦いながら周りにも気を払う。これはただの戦いじゃない。知謀を駆使し、相手の手と思惑を読み、神経を使う、チエスにも似た高度な頭脳戦！

厳しい戦いになりそうだ。

side・鷺志

程よく自由行動を満喫し、休憩がてら入った公園で練乳を飲んでみると、それに気付いた。

「やられたな」

「そうみたいだね」

エヴァの言う通り、やられた。してやられた。

近付いて来る物やなんかには注意してたけど、離れていく者には

無頓着だった。

今、公園の中にいるのは僕たちだけだ。

「近衛木乃香に間違いないな？」

「ウチは罪口木乃香です」

いつの間にか誰かが居た。それも大勢。

結構広い公園なのだが、僕たちを囲むようにグルリと広がり、外の様子は伺えない。びっしりと人壁が出来ている。いつの間に現れたのやら。

「力づくを許されている。擦り傷くらいは覚悟してもらっぞ」

木乃香の言葉に耳を貸さず、老若男女入り乱れた人壁の、その一人一人が魔力を発した。

掲げた符が輝き、そして魔物が招来する。

大小様々、河童のようなものから一つ目の巨体から、取り合えず呼び出した、といった感じだ。

一目で低級下級とわかる連中だが、果たしてそれで何かが出来ると思ってるのか？

「まあ待てダン」

刀を取り出したばかりをエヴァの小さな手が遮った。その顔には面白そうな笑みを浮かべている。

「弟子の成長を計るのも師の務めだぞ」

「弟子って、僕は別にそんなつもりで鍛えた訳じゃ……」

「お前がどんなつもりであれ、鍛えたのならそれは師弟だ。それに、私たちが監督できる範囲で事が起こるなんてそうあることじゃない。いい機会だと思え」

さつきまでのような旅行感覚ではなく、六百年を生きる魔法使いとしての台詞。自分は弟子なんかとったことない癖に……

「それもそうだね。『亀の甲より年の功』とも言っしね」

「よしダン。私たちも運動をしよう」

「学園に戻ったらな」

全力の曲弦系でエヴァを拘束しつつ、僕は地面に腰を下ろした。

今度こそ周囲に気と糸を配し、これ以上の罠を警戒しながら、

「聞いた通りだよ。危険があったら僕たちがサボするから、なんとかしてみなよ」

「いきなりかよ……」

「普通の修学旅行じゃ出来ない経験ですね！」

「マホーの修学やね」

「この程度、物の数ではありません」

意気込む刹那だが、

「ああいや、刹那の相手はあっちかも」

「え？」

僕が指差す方向から迫るのは、猛烈な剣気。鬼気迫る迫力を放つ剣鬼だった。

「どうも〜、神鳴流です〜。おはつに〜」

「え……お……お前が神鳴流剣士……？」

「はい、月詠いますー」

かーいらしい格好のかーいらしい二刀使いが、刹那の相手。昨日の感じだと、二人の実力は伯仲しているはずだ。

原作でも同程度だったみたいだけど、僕と詠春さんでやたらに鍛えた刹那と尚も鎬を削れる辺り、もしかしたら世界の修正力が月詠を鍛え上げたのかもしれない。

「『来たれ』」

「はぁ……『来たれ』」

刹那と千雨がアーティファクトを出し、刹那はそれを八相に構え、千雨は短針を自分に刺した。千雨のアーティファクトは切嗣のようなフィードバックもないし、結構便利だと思う。

「刹那も使うか？」

「いえ、今回は遠慮しておきます。同門同士、実力で」

神鳴流は、他の多くの流派と違って同門の仕合を禁じていない。同じ技を修める者同士、(得物の違いはあれど)互いが互いの物差しになるだろう。

「ええなあ、ウチも欲しいなあ」

「私も欲しいです……」

ボヤきながらも着々と準備を進める二人。ちなみに茶々丸も傍観の体だ。まあ茶々丸じゃあ機銃の掃射で終わっちゃうしね。

木乃香は自分の服に二ツ式を、さよの服に二ツ式を展開した。未だ直接触れていない物への二ツ式は無理らしい。

さよはポケットから五つの玉を取り出す。パチンコ玉サイズの、純銀製の玉だ。それを『騒霊減少』で宙に浮かせた。

「開始の合図は無いよ。一応真剣勝負だからね」

そういえば、これがただの足止めだった場合、エヴァはどうするつもりなんだろう？

おかしい。

さつきから探る限り、どうも周りに人がいる様子はない。

僕が動いても、デコイ 罔妖精を走らせても、見当たらない。

虚空瞬動は使えないから竹や鳥居を駆け上がるしかないけど、上から見ても誰もいない（と思う）。

「なんや、さつきから逃げてばっかやないか！」

まさか本当にこの直情的な少年だけなのか？

いやいや、いくらなんでもそんな馬鹿なことがあるはずない。例え人手不足でも、戦線に立ちたがる血の多い人が見張りに向かないなんて、子供の僕にもわかる。

でも……

「ええ加減にせえよ西洋魔術師！逃げることしかでけんのか!？」

隠れている人をあぶり出すには、隠れている人にアクションを出させるには、どうすればいいか。

とつさに思い付く方法は二つ。

僕が倒れるか、彼が倒れるか。

もつとあるかも知れないけど、多分それが一番手っ取り早い。

「こらー！聞いとるんかお前！？バーカバーカ！アンポンターン  
」！

それに、いい加減相手してあげた方がいい気もしてきた。

逃げ回る足を止め、魔力を集中・・・！

タ、タンツ！

二度の瞬動で少年の背後に回って力任せのパンチ。普段なら難なくかわせるだろう一撃を、しかし少年はまともに喰らった。

「かはっ！？」

背中を中心、背骨を拳骨が叩く感触。魔力でカバーしていなかったら確実に拳を痛めたであろう、人を殴る感触。

どうにも嫌な感覚だ。

でも、小太郎君は僕より格段に場慣れしてる。このチャンスを逃す訳にはいかない！

そのまま力任せ流れ任せの連続攻撃。足場を失いながら、芯を崩してしまいがらの、取り合えずの連撃。

「こんの・・・調子ん乗りなやあつ！！」

「ぐえつ！？」

小太郎君の後ろ蹴りが僕の鳩尾に突き刺さる。足の裏全体を当た、内蔵に響くキック。

障壁を張っているけど、慣れない衝撃は僕の動きを止めるには十分過ぎた。

立ち止まってしまった僕に、小太郎君は両手での掌打を打ち込んで来た。

ツイてる！

その攻撃に乗って、僕は後ろに大きく跳んだ。

よくある、後ろに跳んで衝撃を殺す回避ではなく、衝撃に乗じて間合いを取る回避。すっごく痛い・・・！

でも、距離は取れたし、障壁も効いてる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！『風精召喚、剣を執る戦友』！！」

「お？」

「『迎え撃て』！！」

武器を持つ人形精霊を放って牽制。小太郎君がそれを蹴散らす間にもう一度背後へ。

確か、前足を強く踏み込んで、腰を回して、肩を出してから、拳を突き出す！！

ズシン！

「ゴフ・・・！？」

さっきよりもずっと強い手応えがあった。小太郎にも効いてるみたいだ！

突き出した拳を引き戻し、足を入れ替えながら今度は肘を打ち込む。後ろ足を前足より半歩だけ出しつつ小太郎君のふくらはぎを蹴り、崩れた上体に今度は搦り上げるように、刺り込むように内側から肘を打ち上げる！！！！

一撃ごとに小太郎君の呼気が漏れる。今度こそ効いてる！

最後は確か、足を振りながら踏み下ろして、それに合わせて腰から背中を、ぶつける！！

グラッ

「わ、わわっ！？」

最後の最後でバランスを崩し、踏鞴を踏む。その隙を逃すほど、小太郎君は甘くなかった。

「ぐう、『狗神』いつ！！」

「っ！！」

小太郎君の呼び声に応じるように、彼の周りから黒い狗が飛び出した。

五匹の狗はそれぞれが僕の四肢を狙って殺到し、一匹に至っては首にその牙を定めている。

辛うじて首への攻撃は逸らしたが、手足へ突き立つ牙はしっかりと障壁を抜いていた。

「油断したで。まさか西洋魔術師にドツキ合いで遅れをとるとはな」

「いつ、痛う・・・」

「見よう見真似って感じやったな、今の。よっぽどええ師匠がついとるらしい」

小太郎君の言う通り、今のは罪口さんの真似だ。一度だけ、罪口さんの連続的な体術を見たことがあった。確か、タニグチ？さんに使っていたものだったと思う。最後の体当たりで、交通事故を彷彿とさせる吹き飛び方をしたのが印象的だった。

「最後のはなんや？心意把とか八極拳とかに似とったけど・・・  
、ただの猿まねで爆発勁なんて出来るわけ無いやろ、がっ！」

言葉に合わせて、未だ起き上がれない僕の背中を蹴り上げた。強化されているらしいそれは、僕の体をサッカーボールのように浮かし、鳥居に叩き付ける。

「お喋りも油断の内かもな。もう終いにするで・・・！」

再び、狗神が小太郎君の周りに立ち上がった。五匹のそれが互いに絡み、小太郎君の右手に収束していく。

「都合よく助けが来るんわ、マンガの中だけやで」

「いえいえ、最近はその辺もシビアで、マンガの中にも助けは来ないみたいですよ？」

「「っ!？」」

突然割り込んだ声に、僕と小太郎君は揃って首を振り向けた。

そこにいるのは、何と云うか幸の薄そうな印象の細面の男の人。

その人を視界に修め、小太郎君は忌ま忌ましげに舌打ちした。

「ちっ……、なんぼなんでも相手が悪いで……」

悔しそうにそうぼやくと、小太郎君は右手を地面に向け、そこに集めた狗神を放った。石畳が碎け、辺りに砂埃が舞う。

「もつと鍛えて、体調がいいときにまた頼むで！」

そんな声を残し、小太郎君はさっさと姿を消した。

助かった、のかな？

「怪我は・・・ありますね。本山で治療をしましょう」

「あの・・・貴方は？」

「ああ、申し遅れました」

男性は辛うじて起き上がる僕に向き直り、ニコリと微笑んで、言  
った。

「関西呪術協会の長を務める、近衛詠春といます」

罪口さん。僕は今ご都合主義を見ました。

## 第十七話（前書き）

読み返してみるとイマイチな出来かも・・・

眠気を言い訳にしようと思います。

## 第十七話

side・鷺志

そう手こずる様子もなく、木乃香たちは魔物を圧倒していた。

もちろん低級揃いと言うのも大きな要因だろうけど、しかし連携が思った以上に素晴らしい。

さよは『騒霊減少』で銀玉をひたすらに振り回す。高速で移動するそれは、無軌道の弾丸となって銀の耐魔性を遺憾無く発揮する。

木乃香は、用意したものとやその場に転がるものを術に使ってサポートがメイン。防御だけでなく、石ころを蹴飛ばして『動く』意味を付与。これもやはり弾丸扱いだ。

千雨は空間製作を操り多方向からの波状攻撃を阻止しつつ、僕が渡した道具を使って味方の有利の、敵の不利に働く。あるいは広範囲攻撃と、遊撃手の役を果たしている。

刹那と月詠の戦いも白熱していた。今は、刹那の側に勝利が近いだろう。

安綱は野太刀ではない。遠間を詰められる不利はないし、僕の相手で多少は二刀にも慣れてきているのだろう。

昔から慣れ親しんだ間合いでこそ無いが、それを埋めるだけの修行は詰んでいるはずだ。

「流石ですな、センパイ」

「無駄口とは、余裕だな」

「余裕なんてあらしまへん。両手を使っていっぱいっばいっばいです」

「減らず口を・・・」

「結構上手いこと言ったつもりなんですけど」

会話の間も剣戟は止まない。刃が心配になる勢いで互いの刃物をぶつけ合っている。

普通はあれだけ叩いたら刃が潰れるところだけど・・・、気による強化の賜物か、大して面を気にした様子の無い殺陣の中でも、見事な刃紋を保っている。

「月詠っ！」

月詠を呼ぶ鋭い声が響く。それは千草の声だった。

「小太郎が負けた！一旦引くで！！」

「え、ウチまだ満足出来て・・・」

「ええから早し！」

「ぶ〜・・・センパイ、また今度、切り合いましょ」

語尾にハートを散らして、月詠は転移の符を使って逃げおおせた。

その後の展開は早いもので、周りを固めていた術士も蜘蛛の子を散らすように走り去り、既に一人も見当たらない。神隠しみたいだ。

「はあ・・・、疲れた・・・」

「使った分は後で補給するね」

千雨には【道具作成】の方も教えた方がいいかもしれない。中々魔法が上達しないんだよね。

「気になる事を言っていましたね。コタローが負けた、とか」

「連中の目的は時間稼ぎだったみたいだね」

「両手どころか足の指でも足りない人数使って足止めか？どんなVIP待遇だよ」

「でも、エヴァさんとさきさんが加わったらそれでも足りなかったんじゃない？」

「連中は運が良かったただけだな。私の憂さを晴らすには、小物過ぎた」

不遜な態度はいかにもエヴァらしい。自分の意見で敵の思惑に乗ってしまったことを、誤魔化そうとしているらしい。

いいけどさ。

「コタローなる人物はことは別に動いていて、それを妨害されないように私たちをここに縫い止めていた、と？」

「じゃあその、『別の目的』ってなんだと思う？」

「……………!!まさか……………!!」

「親書だろうね」

「ではネギ先生が！」

「多分ね。皆で本山行こうか」

訳を知っているのは僕と刹那だけ。木乃香も千雨もさよも頭の上に？マークを浮かべている。

なんとか一人で解決しようとしてたから、細かいどころか粗筋すら説明していなかったのだ。道すがら、説明するとしよう。

「お父様久しぶりや〜」

「はは、これこれこのか」

久しぶりの親子対面。ほのぼのするね。

「つ、罪口さん！皆さんも!？」

「やあネギ」

「無様だなぼーや」

「ど、ど、ど、ど、どしてここに?」

状況説明中。なう ろーでいんぐ

どうやらほとんど原作通りに進んでいるらしい。しかしネギが拳法を……、ネギの見稽古も結構ランク高いよね。

となると気にするべくは夜の襲撃か。

取り合えず糸を展開。侵入者があればすぐに分かる。問題はフェイトの相手だが、なんとかなるといいな。

「もう親書は渡ったんだね」

「はい。ついさっきお渡ししました！」

「ええ。しかと賜りました」

「じゃあ特使としての仕事は終わりだね。連中も、もう妨害の意味はないわけだ」

「そうですね。自棄にならないといいんですけど……」

まあ自棄以前に別の目的があるんだけどね。他の過激派はともかく、天ヶ崎千草には、野望とも言える大望がある。

それだけは、注意が必要だね。

空気を伝って、糸を伝って、外の会話が伝わってくる。

相当近くで話しているのだろう。じゃなきゃいくらなんでも内容が分かるはずが無い。知覚できるサイズじゃないから、バレないとは思っけど。

『コラ新入り！あんたが追わんでえーゆーから放つといたら、本山に入られて手出しできんやんか！親書も渡つてしもたしーっ』

『大丈夫ですよ。僕に、任せてください』

うわぁ……………、襲撃フラグ……………。

「へえ、まだ桜なんて咲いてるんだな」

既に日も落ちて、空に鎮座するのは下弦の眉月。

明かりとしては些か心許ないが、しかし間近の桜を見るなら十分だろう。

「うん。ここ結構遅くまでさいとるんや」

「夜桜ですね」

「七郷はありますか？」

「茶々丸がネタだと!？」

「確かあつちに……………」

「あんのかよ!?!」

賑やかだねえ。

詠春さんとネギは今頃昔話に花を咲かせている。もっとも、話するのは専ら詠春さんだけだ。

これで再び妄信するようになったら、やはりネギはそこまでだろう。

結界も監視も正常に作動しているのは既に詠春さんに確認を取っている。侵入者があれば見張りの者がすぐに警報を鳴らすことになっているそうだ。

つまりどういふことかと言つと、

ズシンッ

見張りは既に石像と化している、と言つことだ。

「……………驚いたね。匂宮は剣士だと聞いていたけど」

「剣士も拳士も、どっちもケンシだろ?」

言いながら、後ろの皆に逃げるよう促す。足音が遠ざかっていくのが聞こえるから、上手く伝わったのだろう。

肘から伝わる感触を信じるなら、コイツは幻影じゃない。

鈍を取り出し、柄に手を沿える。フェイトが相手だと何があるかわかったモノじゃない。

「二刀流だと聞いていたけど、それも違うのかな」

「相手によって得物を変えるのは、そう珍しいことじゃないと思うよ」

「それもそうだね」

背弄拳。

居合の構えからフェイトの背後へ回る。このまま一気に十七の肉塊に変えてやる……！

そんなネタすら許さず、フェイトは足を引いて両手を絞り、背中を開きながら体当たりを繰り返した。しかも瞬動で、だ。

「かはあっ……！」

その背撃をまともに喰らって数歩よろめく。ネギは出来なかった

みただけで、これが爆発勁だ。胴体や肩での勁では、十字勁や沈墜勁と併用。拳や足の場合は纏絲勁も合わせる複合的な発勁。

平たく言うところ『すっごく痛い体当たり』。

「忘れてたよ。中国拳法には真後ろを攻撃する手段があるんだっけね」

「……どこか安心したように見えるけど？」

「まあ安心はしてるよ。またぞろ後ろ蹴りでも喰らおうものなら、いい加減ネタ不足が甚だしいからね」

「……なんの話だい？」

「気にしないでいいよ。こっちの話」

今度は鉋も取り出し、両手で連続技に繋げる。

上下から同時に、左右から同時に、上から右から左から下から、あるいは同時、あるいは時間差を付けて殺到する斬撃を、しかしフエイトは全て捌いていく。

まあ、こっちの攻撃が二刀なのにして、向こうの防御は四肢があるからね。

「本気を出さないのかい？」

「なんのことかな？」

「匂宮の被害者は斬殺がほとんどだそうだけど、中には刀傷じゃないのも少なからずあるそうだよ」

あちゃー……

曲弦系バレてる？

「じゃあ遠慮無く、本気でいくよ」

「！」

フェイトの無表情に微かな驚きが混ざる。特に変わったことはない。特に変わったことはない。

侵入から今に至るまで、体中に繋がっていた糸を一気に絞めた。

総数、千八百と三本。

しばらくここに縫い止めておこう。

木乃香たちは大丈夫か、残りの糸で様子を探ろうとしたとき、

パシヤッ……

「……しまった」

いつの間に入れ代わっていたのか、複雑に絡まった糸は濡れそぼった糸玉となって転がっていた。

side・千雨

さぎに任せて逃げたはいいけど、なんだこれ……。

屋敷の中はそこら中が精緻な石像で埋め尽くされていた。その表情はみな一様に、驚愕や苦悶に歪んでいる。

「恐らく敵の魔法です！対象を石化させる魔法があると聞いたことがあります！」

悪いが、あまり意味の無い情報だな。何にせよ、敵の魔法を警戒しなきゃいけないことに変わりはない。

解呪とかは専門家に任せりゃいいだろ。

「向こうの目的はこのかなんだろ？本丸が壊滅こんじゃ、どこに逃げればいい？」

「さぎくんが私たちを逃がしたということは、あの少年は相当な実力者なのでしょう。しばらく合流出来ないと考えた方がいいかと」

「となると……」

「近衛詠春殿が、今一番頼れるのでは？」

「ってか茶々丸。お前のマスター様はどうしたんだ？最強の魔法使いなんだろ？」

「マスターは詠春殿にお金を借りて、昼間買い損ねた生八橋を各種買いにいきました」

「何やってんだあの合法ロリ！？呼び戻せ！」

茶々丸にエヴァの相手を任せ、取り合えず木乃香を頼りに廊下を走る。

「このまま敵と会いませんように！」

切なる願いが通じたのか、どうやら敵とのニアミスはないままに詠春さんに合流できた。先生とは襲撃の前に別れていたらしい。

「皆さんは私の部屋から出ないでください。ここは私の工房でもありまして、並の結界よりは強固な陣も敷いてあります」

「お父様・・・」

「心配はいりませんよ。娘を負う父は、何よりも強くなるものです」  
「カッコイイですな」

ギギン！！

突如割り込む剣戟の音。奇襲をかけた剣士の二刀を、詠春さんは袂に持っていたらしい懐剣で受けていた。

おいおいおい、あんな小さなモンで大丈夫なのか！？

そんな心配も虚しく、詠春さんは時に懐剣で、時に素手（！？）で二刀の連撃をことごとくいなしていく。

「隠居生活で錆ついたりかと思いましたが、達者なもんですな」

「生憎、優秀な義息がいましたね。錆つく暇は貰えませんよ」

「長っ、ここは私が！」

「任せます。私は他の輩を叩きましょう」

「ちょ、行っちまうのかよ!?!」

「刹那なら大丈夫ですよ。どうやら腕は相応、互いにいい研鑽となるでしょう」

その見切りは凄いと思うけど、わざわざ敵のパワーアップ計るとねえだろ!!

「隠居の悲しい性ですよ」

内心の叫びに律儀に応え、詠春さんは一瞬で視界からいなくなってしまった。

しかも、どうやらゴスロリだけじゃ終わらない。

詠春さんが消えた直後、低い文言がいくつも重なり夥しい怪異怪魔がところ狭しと現れた。

「お父様がなくなるのを待ったみたいやね」

「昼間のより上等そうですよ?。」

「穢滅しなくとも、さぎさんがいらっしやるまでこのかさんを守り  
抜けば私たちの勝ちです」

「ちょっとだけ気が楽になったよ」

詠春さん、隠れた術師は見落としたんだよな?見逃したんじゃないよな?

私たちの成長を思っていることなら、頼むから次は平時してくれ。

## 第十八話

side・ネギ

詠春さんの話は惜しいけど、生理現象は耐え難い。家屋自体が広いせいか、トイレは随分遠かった。

その帰り、詠春さんのもとへ戻ろうと廊下を歩いていると、

「よう西洋魔術師」

学生服の少年に呼び止められた。

「小太郎君！？どうしてここに！」

「無駄な問答はやめようや。こう言うときは、互いに名乗ってドツキ合えばええねん！犬上小太郎！行つくでええー！！」

言っておきながら、小太郎君は僕に名乗る暇も与えず仕掛けてきた。

昼間より早く、重く、鋭い攻撃。距離を取れば小さな狗神を飛ばして牽制し、距離を詰めれば彼の間合いだ。

為す術もなく、成すべくもなく、小太郎君のパンチが、キックが、

頭突きが狗神が、僕の体に痛烈な打撃を刻んでいく。

障壁が効いてるから大きな怪我はないけど、抜かれるのも時間の問題だろう。その前になんとかしないと……！

瞬動を使つて一旦大きく距離をとる。

「なんべんやつても……!?」

さつきと同じように狗神を撃とうとする小太郎君に、僕は再度の瞬動で肉薄する。

一瞬だけ硬直した小太郎君の足を、僕は思い切り踏み付けた。僕の踵は狙い変わらずその親指を踏み抜く。

突然の激痛に上体を折る小太郎君の、その顔を、踏み付けたのは逆の膝で迎えた。

「ぐふあっ……!!」

以前罪口さんがタニグチさんに使っているのを見たことがあった。大事な血管を切ってしまったかのように吹き出す鮮血が印象的だった。

ともあれ、これで僅かながら時間ができた！

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル！」

「闇夜を切り裂く一条の光」

「我が手に宿りて敵を喰らえ」

詠唱に応じ、手に集まる魔力が雷の属性を帯びていく。

そこに、小太郎君が思い切り足を振り上げた。

「っけんな！なんぼなんでも、んな長い詠唱さすかい！！」

「くっ！？」

「今度こそ舐めた真似させんでー！！」

再び始まる小太郎君の連撃。一度時間が空いたお陰で多少の余裕ができた。幸い罪口さんとの特訓で動体視力には自信がある。なんとか防御は出来そうだ。

『防ぎきれない連撃は正中線を優先して防ぐべし』

『威力が予想出来ないモノを受けるのは愚策。腕の側面や甲鶴を使って逸らすべし』

『その際、腕を回すと尚よし。太極拳を以って、これを化勁を言う』

と、罪口さんに片手で攻め立てられるタニグチさんが大声で叫んでいるのを聞いたことがある。

芝居がかったその台詞が気に障ったのが、罪口さんの攻撃はその後勢いを増した。

「はっ！そんな素人丸出しの捌きで、いつまでも凌げると思っなやあ！！」

もちろん思ってないよ。

「『火よ灯れ』」

「！？」

魔法を勉強する上で、初歩中の初歩。発動体の先に篝火にもならない小さな火を燈す魔法。

それを、殴り合いの間合いで、目と鼻の先で発動させた。

眼前。零距离とも言える近距離での不意の発火。萎縮しない生き物なんてそうは居ない。

「解放。『白き雷』！」

「っ！！ぐあああああ！！」

瞬動で動きながらの戦いを主軸に置くと決めるとき、確実に使えるようにしようと練習した遅延呪文！

これが、僕の渾身の不意打ちだ。

「っはっ……、やるやないか、西洋魔術師……！」

「ネギ・スプリングフィールドだよ」

「……はっ！ええやる。覚えてる」

今で倒しきれなかったのは、正直痛い。

どうやら小太郎君も満身創痍だけど、それはもちろん僕も同じだ。

状況は振り出し。僕に不利なまま仕切直した。

side・刹那

「百花繚乱!!」

「おーろーげっか」

私と月詠の戦闘の余波で数多の怪魔が果てていく。月詠はそれを特に気にした風もなく、私を攻め立ててくる。

月詠の二刀は小太刀。さぎくんの様な太刀の二刀ではない正当の二刀流だ。

つまりその分間合いが深い。

月詠はそれを利用し、どうやら爪先と踵に刃を仕込んでいるらしい靴での蹴りを連携に組んでいた。

実質的には四刀流と言えるかもしれない。

もちろん、蹴りに関してはそう練度が高いわけでもないのに、靴にさえ気をつければ怖くはないが、それはつまり靴には気をつけなくてはならないということ。

手加減しているさぎくんと戦っている気分だ。

「昼間は猫を被っていたわけだ？」

「いいえいえ。お昼は本気を出す前にお呼びがかかりましたよって」

間延びした喋りとは裏腹に、月詠の剣戟は苛烈を極める。

実は頭も切れるのだろう。さっきから何度斬撃に誑かされたかわからない。

正に、五体が刃物というわけだ。

鍛えに鍛えた瞬動が無ければ、私はとつに臓腑を撒き散らしていただろう。

「強いですな、センパイ」

「そうでもない。さぎくに比べたら兎戯に等しく拙いものだ。そつだな、さぎくんというから、腕が上がるのだろう」

「ウフフ。初々しくて、ええですな」

「・・・煩い」

のんびりした会話だが、当然剣戟は止まない。

もつしばらく、切り結びは止まるまい。

side・千雨

取り分け強そうな怪物に【長針】を突き刺す。と途端にそいつの動きが止まった。

否。正確には動いている。微かに、少しずつ、知覚できない鈍重さで、動いている。

全身の時間を遅らせてやった。超人薬の原液よりは、流石に早いけど。

ついでに近くの連中をまとめて鎖で縛る。これ自体はただの鎖だが……

「このか、OKだ!」

「二ツ式待機【鎖】、ちえりお!」

木乃香の発声と同時に、ギチギチと音を立てて鎖が怪物を締め上げた。鎖の『縛る』、『戒める』意味を強化してのそれは、金ピカの

鎧で「天の鎖よ！」とか言うのが様になるかもしれない。

鎖？木乃香が持ってた。

「千雨さん。離れて下さい」

茶々丸がナニカ白い粉が入った袋を投げた。

その袋は怪物達の中心で中身をぶちまけ、その粉を空気中に巻き上げる。

「準備ええで！」

「行きます！」

皆で木乃香の回りに固まり、さよが銀玉を操って粉の中で激しくぶつけた。

高い可燃性を持つ粒子が空气中に舞い上がると、空気に触れる面積が増え、可燃性が格段に上がる。一定以上の密度でその粒子が漂う中、どれか一つにでも火が点くと、隣り合う粒子に延焼を繰り返す。

この連続的な延焼反応を、『粉塵爆発』と言う。

木乃香の防御のお陰で私たちには微風も届かないが、どうやら怪

物には有効だったらしい。

弱っている怪物にはさよが銀玉を仕掛け、爆風の煽りを受けた術師は茶々丸が対人用の制圧弾で弾いていく。

爆発で服が煤けた神鳴流剣士二人は、特に気にするでもなく切り合いを続けていやがる。

元気なことで。

s i d e ・ネギ

経験をして自力をしても、僕が不利なことは間違いない。だから、それは僕にとって幸이었다。

ガシャーーン！！

と、僕たちのすぐ横に巨大な氷塊が落ちてきた。よく見ると中に人が

「ち、千草姉ちゃん!？」

どうやら小太郎君の知り合いらしい女性が、氷付けにされて転がってきたのだ。

「やれやれ。手応えも何もあつたものじゃ無いな」

「エヴァさん!？」

声と共に空から降りてきたのは、誰であろう最強の魔法使いだった。

「呼び出されて来てみれば、人の友人を相手に随分好き勝手してくれたじゃないか……」

指をゴキと鳴らしながら口角を吊り上げるエヴァさん。なにやら目が反転しているような……?

「私の楽しみを邪魔するに飽き足らず、私の友人を政権争いの駒にする……? 久しぶりに全力で魔力を使うのも悪くないかもしれないな」

凄まじいプレッシャーが肌を焼く。僕に向けられたものでも無いのに卒倒しそうだ。

向けられている小太郎君も、目を限界まで開いてカチカチと歯を鳴らしている。それでも意識を保っているのは、もしかしたらそういった強敵と対峙した経験でもあるのか。

一步。また一步と、悠然と、泰然と、傲然と、エヴァさんが小太郎君に近付いていく。その彼女の、

「エヴァ、止まって下さい」

鬼神のごとき迫力をものともせず、詠春さんが待ったをかけた。

s i d e . 刹那

唐突に、月詠の動きが止まった。刀を振り上げた姿勢のまま、不自然な体勢で停止する。

「とうか、私も動かない？」

「やあや、お待たせ」

不意に現れたさぎくんが、気軽そうに片手を上げた。

side・鷺志

「鷺志。どうでした？」

「もちろん、全部詠春さんの指示通りに」

「ありがとうございます」

「忠臣として言わせて頂くなら、些か以上に不平等な処置かと」

「忠臣としての意見などありません。義息として、言ってください」

「甘すぎます」

なんと詠春さん。今回の過激派、その実働隊を一人も死なせることなく捕らえさせたのだ。

もちろん曲弦系を使えばそんなことは造作もないけど、しかしいくらなんでも甘すぎる。計画の中枢を担っていた天ヶ崎なら、情報のために生かすのもわかる。

けど、他の連中、特に下っ端は見せ締めの意味を持っても始末するべきだ。

「おや、鷺志は甘党だと思っていましたが？」

「詠春さん……」

「あなたの心配もわかります。ですが、私は魔法に関わるものにも太平があってもいいと思うのです」

「……詠春さんがそうおっしゃるなら、是非ありません。僕は連中の尋問を。程なくして手を回していた重鎮まで辿り着けるかと」

「手間をかけます」

「いえ。近衛の敵は僕の敵です。糸を引くのは僕の専売だと、しらしめてきますよ」

修学旅行最終日。帰りの電車の中は、危惧していたほど騒々しいものにはならなかった。

騒ぐ気性の連中は、どうやら道中騒ぎすぎて疲れてしまったらしい。今は軒並み涎を垂らし、この旅の道程を思い起こしているだろう。

意外にも情に厚かったエヴァを抑えるのには結構な手間とお金をかけた（大量の生八橋が必要だ）けど、他ならぬ木乃香の説得により、結局は矛を収めてくれた。

他の皆も、人死にがないとわかると安心したようだった。

フェイトには逃げられたが、天ヶ崎、月詠、小太郎の三人はしっかりと拘束し、今は関西のとある場所で懲罰なりなんなりを受けているはずだ。

京都のどこかに、誰かがいた。

「はは、ははは！逃げおおせた！逃げおおせたぞ！！このままでは終わらん。無能な長が据えたその場凌ぎのよそ者なんで、認められるか！！青山を蹴落とし、私が関西の長になる！！！」

その誰かは口の端に泡を飛ばし、自らが語る幻想に陶醉しているようだった。

「そうとも。西洋魔術師なんぞ日本から追い出し、日本の恐ろしさを魔法世界の異形どもにも教えてやらねばならん！そのためには、やはり近衛木乃香の魔力がいる。リョウメンスクナノカミを復活させるために！！」

「なるほど。あんたが発案死やか」

「っ！？誰だ！！」

いつの間にか、誰かの背後に誰かがいた。

新しい誰かは顔に火男の面を被っていて、その表情は窺えない。

ただ、かろうじて見える目にだけは、静かで、確かで、燃え、滾る怒りを、溢れんばかりに宿していた。

その日。とある誰かが行方不明になった。

その日。ある男の父親が、僅かに顔を曇らせた。

第十八・五話（前書き）

イベント間のワンクションです。

全体ゆる〜い仕上がりです。

## 第十八・五話

修学旅行から帰った翌日。振り分けられた休日を利用して、僕はお土産を配り歩くことにした。

葛葉先生を発見。

「これ、お土産です」

「あら、ありがとう。って何？これ」

「昔僕が鍛えた刀です」

切っ先諸刃造り。中反り。しつとりと霞を付けた乱れ刃。柄と鞘は桜の霊木。玉鋼から僕が造り、水減しを神水で上げた野太刀の逸品だ。

もとは刹那への誕生日プレゼントのつもりだったが、思ったよりも出来が良くなかったので神棚に上げ、そこで浄めを行ったまますっかり忘れて早十年。

材料から道具から、全てを禊いだ上に十年間の神上げがあったモノだから、これはもはや神具といって差し支えない対魔性を持つ刀となってしまうた。

今となつては、刹那も実績のある霊刀（しかも魔力保護付き）を持つているし、結局この刀は無用の長物となつた。肥やしにするのもなんだし、同じ神鳴流の葛葉先生に使つて貰つた方が、この刀も喜ぶだろう。

僕のこの気まぐれは、きつとこの刀が葛葉先生を選んだと言つてとだ。

「しかもこれ、僕のオリジナリテイが鍛ち込であるんです」

「オリジナリテイ？」

「抜いて、棟をなぞつてみてください」

「………なにか、小さな溝があるわね」

「そう！その溝こそがオリジナリテイ！日本刀史上初の試みです！」

こればかりは、彼の四季崎記紀や古槍頭巾も未着手のはず！！

「刃の腹に極細の溝を幾条幾十条と刻んであるんですその溝は腰と切っ先で太さが違つていて液体が触れると毛細管現象で溝を伝い即座に切っ先からこぼれ落ちる仕掛になつていますつまり！！」

一気にまくし立ててから大きく間を空け、葛葉先生の気を引いた。

彼女は先を促すように息を呑んだ。

僕は人差し指をピンと立て、告げる。

「キュウリを切ってもくつつかないんです」

微妙な顔で曖昧に笑いながら刀を受け取ってくれた葛葉先生に手を振って、僕は次の相手を探していた。

自慢じゃないが僕は顔が狭い。土産を渡す相手を探すのは、麻帆良学園都市でなくても大変だっただろう。言ってる悲しくなってくる。

程なくして、二人目を発見した。

「こんにちは。シスター・シャークティー」

「あら罪口さん。こんにちは。先日の修学旅行は大変だったそうですね」

「そうなんですよ。エヴァがあんなにも生八橋に傾倒するなんて思いもみませんでした。あいつ茶々丸に作り方を覚えさせましたから、しばらくは茶々丸も大変でしょう」

「あらあら」

口元に手を当ててクスクスと笑うシスター。彼女は問題児かすがや美空トラブルメーカー以外には基本こんならしい。

「春日さんからお土産、貰いました？」

「ええ。山のような八橋と小山のような生八橋を」

『生』の方を少なくした辺り、微かな脳みそを絞った跡が伺える。

春日さんのことだから、「シスター・シャークテイーは教会にいらした人に配ったりしちゃうだろうからいっぱい買ってこっぜ!」  
みたいな足跡を脳内で辿ったに違いない。

シスターはどこか呆れたようにため息をついた。これは相当な量らしい。

「こんなこともあろうかと!」

ひょいと取り出したのは長方形で銀色の、密閉された袋。を二つ。

「これは?」

「お茶です。こつちが焙じ茶で、こつちが抹茶」

「抹茶は知っていますが・・・ホウジ？法事ですか？」

「いえ別に死者を弔うお茶とかじゃありません」

なんか以外。日本長いみたいだし、てっきり知っているものと。

「焙じ茶というのはですね、二番茶以後の硬い葉っぱと茎を強火で焙じたお茶のことです。熱湯で飲むのが一般的ですね。飲む毎に焙じるのが一番ですけど、このままでも飲めますよ。香りがいいお茶です」

普通のお茶よりタンニンが多いから少し渋いけど、慣れるとそれも美味しいものだ。

「どちらも僕が店頭で味を利いてきたので断言できます。美味しいですよ」

「それは楽しみですね。あとで美空とココネも呼んで、いただきましょう」

にこやかに手を振るシスターに見送られ、その場を後にした。いつ会っても怒鳴るイメージが沸かない。

「高畑先生ー。ヒゲグラ先生ー」

「やあ罪口くん。どうしたんだい？」

「俺と高畑君と間違えた以外、俺のことをマトモに呼んでないんじゃないか？」

「いいじゃないですか、ヒゲグラ。愛嬌がありますよ、『グリとグラ』みたいで」

それはそうと、と僕は箱を取り出した。

「これ。修学旅行のお土産です」

「僕達に？」

「ええ。こっちはヒゲグラ先生に。こっちは高畑先生です」

大きい箱をヒゲグラ先生へ、大きい箱と小さい箱を高畑先生に渡す。

「僕は一つ多いね。何か聞いてもいいかな？」

「お二人に共通して、酒器です。取り合えず目に付いたのを適当に買ってきました」

「・・・まあ、買ってきてくれた気持ちをありがたがるっ」

後で明石教授にもあげるものだ。

「小さい方は電子タバコです。さっきそのコンビニで買いました」

「包んでください」の一言にあれほど緊張するとは思わなかった。せめて丁寧な店員さんで本当によかった。

ガンドルフィーニ教諭を発見。一人で歩いているなんて、きっと友達がいらないんだ。

「ガンドルフィーニ教諭」

「ん、罪口君か。どうかしかい？」

なにやらどもる様子のガンドルフィーニ教諭。いつもの口撃かと

警戒しているのだろう。

そんな彼の鼻先に平たい箱を差し出してやった。

「これ、修学旅行のお土産です」

「………私に、かい？」

思いつきり怪しまれている。今までが今までだったから、仕方ないかね。

「京都で『生八橋を作ろう』っていう観光客向けの講座があったんです。それで、普段ご迷惑をおかけしているガンドルフィーニ教諭に是非と思ひまして」

「罪口君………」

なにやら感じ入っている様子のガンドルフィーニ教諭。教えが通じた、というやりきった感が溢れる面差した。

「他にも配る人がいるので、これで」

「ああ。ありがたく頂戴するよ」

ちなみに中身は、味噌、白味噌、赤味噌、葱味噌、酢味噌、八丁味噌、手前味噌にそれらの合わせ味噌。そしてカニミソだ。

彼には、善意も時には迷惑にしかならない事を学んでもらおう。

僕のは、悪意だけ。

おかしいな。僕って初期は結構アンチな立ち位置のはずだったんとおもうんだけど……。そういえばネギが品種改良せいかくかいぜんされてからあまりアンチしてないような……。

プルルルルル

電話着信。高畑先生だ。さっき別れたばかりだけど、なんだろう？

「はい、罪口です」

『やっぱり殺し名は僕だけか……』

ブチ

まあアンチの理由なんて『嫌いだから』なんだし、木乃香たちに余計なことしなけりゃいいんだけど。

プルルルル

今度はヒゲグラ先生からだ。オチは分かっているけど、もし出なければ、きつと何度も繰り返すのだろう。仕方ない。

「はい、匂宮」

『順応早過ぎないか?』

「なぜ他の先生の携帯を?」

『だって僕の着信拒否されてるし……』

そういえばしたような気がする。どうでもいい事って簡単に忘れちゃうよね。

「で、用件は?」

『うむ。実は、今しがた学園に荷物が届いたんじゃ。宛先は僕。贈り主は匂宮と書いてあった』

「ああそれ、僕からの修学旅行土産です」

『ふぉ？土産？』

「ええ。今回のお土産で一番お金がかかってますよ。何と言っても特注品ですからね」

『特注……』

「学園長の威厳をそぐわない、大きめの表札と、夜に布団を跳ね退けないよう、体を囲う形のベッドです」

『ほほう……』

「表札は職人が直に鑿を入れたものです。ベッドも、学園長に合わせて頭の箇所を少し長くしました。どちらも旅行の前から予約を入れていたものですよ」

『気持ちありがたい。気持ちはありがたいがの、罪ぐ「匂宮」……  
・匂宮君』

「何か不都合が？」

『これどう見ても墓石と棺お』

「あら、さきさんではありませんか？」

「こんにちは」

声に振り向くと、そこには高音さんと愛衣ちゃんが立っていた。愛衣ちゃんは深くお辞儀をしている。

「久しぶり。その後どう？」

「どうもこうもありません。血が全然足りないんです」

「結構挑んでるんですけど、全然出してくれなくて……」

「ああ、血はね、みんな劣するんだよ。あれだけ出してるのに、使えるのは出ないもんね」

「全くです……」

深くため息をつく高音さんと僕。愛衣ちゃんも細く息を吐いた。

「もう何匹狩ったかわかりません……クシャルダオラ」

「テオさんも出すって聞いたんですけど……」

「まあ、数挑むしかないんじゃない？」

僕たち、狩友だったんです。

僕が狩猟笛。高音さんがランス。愛衣ちゃんが大剣（イベク工限定、ハマノツルギ）。結構いいパーティプレイだぜ？

「まあ古龍の血は置いといて、二人にお土産があるんだ」

「そういえば修学旅行でしたね」

「お姉様、覚えてたくせに」

「何か言っただかしら？」

「いいえ、何も」

まずは高音さんに、細長い箱を差し出した。

「開けても？」

「構いませんよ」

中から出たのは朱塗りの釵。飾りの鈴が涼しげな音を出している。

「まあ・・・綺麗な釵」

「一目でビビッと来ました。きつと似合いますよ」

「ありがとうございます。大切にします」

釵を箱にしまい直し、笑顔で大事そうに抱える高音さん。うん。そんなに喜ばれると買ってきた甲斐もあるというものだ。

「こっちは愛衣ちゃん。確か、ご当地キティでいいんだよね？」

「はいっ。覚えてて下さったんですね！」

「愛衣、いつの間に……」

そういえば、土産は何かいいか聞きに行ったときは高音さんいなかったかも。

「はい、これと、これ」

「二つもいいんですか？」

「いいっていいって。そんなに高いものでもないから」

「ありがとうございます！」

嬉しそうに小袋谷を開ける愛衣ちゃん。一目に入っていたのは

『人リキティ』。人力車を押しているキティちゃんだ。

そして二つ目。

「・・・・・・・・えつと、なんですか？これ・・・・・・・・？」

「京都限定、リヨウメンスクナノカミキティ」

顔が二つ、腕が四本ある鬼相のキティ。腕には剣やら弓矢やらを  
持っている。

「京都、ですか？飛騨じゃなくて？」

「京都だって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

多分魔法バレしてるよね。正直こっちはネタで買った。

それから少し世間話をして、今度三人でモンハンをする約束をし  
て二人と別れた。千雨もエヴァもモンハンやるんだけど、なんか皆  
で集まると空気が固くなるんだよね。

いつか皆で楽しくやりたいものだ。

「やあ緑ちゃん」

「君誰ですか？」

「恋人の顔を忘れたのかい？」

「死望、気持ち悪い」

「字が酷い。いや内容も非道い」

「何用？用件は短くお願いします」

「なんかしばらく見ない間に刺々しくなってない？」

「其無。そんな、出番が全然なくて拗ねました、なんてことは全くありませんよ？」

「へー。そっかー」

「次回は私が出ずっぱり！」

電波を受信した緑ちゃんは放つといて。いや放つといちやまずい。

「これ、お土産。頼まれてたあぶらとり紙」

「礼述あしがたつ」ございます。覚えていられたんですね」

「ついさっき似たような言葉を聞いたけど、なぜか緑ちゃんのは腹立つね」

「老因としせいですね。更年期障害では？」

「ちげーよー！」

言葉に込められた悪意のせいだよ。

「それと、食べ物だったよね」

「領認はい」

僕は用意していた箱を差し出した。僕これ結構好きなんだよね。

「はいこれ。』『うーるー』」

「頭腐どんなあたま？」  
「どんなあたましてますか」

「え？変かな？」

「何故京都で名古屋の名物を買ってくるんですか。脳みそまで糸み  
たいなサイズになったんじゃないですか？」

「まあまあ、こっちはネタだよ。ちゃんと本命もあるから」

「沖縄菓子とかじゃありませんよね？」

「むしろ逆」

「息抜？」

「はい。『白い恋人』」

「知得？先輩私がどこ出身か分かってます？」

京都じゃエヴァにツッコミっぱなしだったものだから、ついつい誰かのツッコミが欲しくなっちゃって。なんて言い訳は、左目に魔法陣を浮かせはじめた後輩には通じないだろう。

「ごめんごめん。こっちが本命の、生八橋。中身は味噌とかじゃないよ」

「何言？当然じゃないですか。生八橋に味噌そんなせのを入れるなんて、それはただの馬鹿です。呼吸をする価値もない、生きていることを土下座して詫びなければならぬような阿呆です。死んだ後すらバクテリアに分解を拒否されるような、生きながらの屑ですよ。まさか先輩、誰かにやっただんですか？」

心に来た……

「実は……、ガンドルフィーニ教諭に……」

「安堵。<sup>なんだ</sup>あれ、いや彼ならいいんです」

なんか許して貰えた。

「では先輩。私は虫はあまり得意ではないので、これで」

「それなんで今言った？」

ネタだけ振って、緑ちゃんは本当にどこかに行ってしまった。手を振っている女生徒が見えるから、きつと友達と遊びにでも行くのだろう。

そういえば、結局いろいろと白い恋人も持って行かれた。

第十八・五話（後書き）

4月26日。

『浸透圧』を『毛細管現象』に訂正しました。

## 第十九話（前書き）

「何言ってんだこいつ」

今回のコンセプトはこの一言に尽きます。  
読み返してみて、本気でそう思いました。

完全無欠に趣味で書かれています。

正直、途中で読了を諦めても無理のない中身です……

だが後悔はしていない！  
むしろ満足だ！！

## 第十九話

side・緑

「おはよ、緑」

「朝礼小豆ちゃん」

目を擦りながら起き出したのはルームメイトの大豆生田小豆ちゃん。冷や奴にアンコを載せるツワモのです。

「朝ごはんなあに?」

「昼飯です」

「寝ぼけてる?」

「……悔認……」

幸い今日は日曜日。このまま二度寝をきめるのも、まあ悪くはないでしょ?。

side・鷺志

「うつむ」

日曜の朝っぱらから、僕はベッドの上で唸っていた。

明け方に侵入者があったのは確実なんだけど、どうも何かをしに来た、という印象がないのだ。

あつちをウロウロこつちをチヨロチヨロ。

三人組の女。大人一人と子供二人。

これは間違いなさそうだけど、それ以外がわからない。

学園長の客なら学園長室に向かえばいいし、敵なら何かを仕掛ければいい。しかしその様子がこれっぽっちも伺えない。

一般的な客まともじゃないのは確実だ。糸越いとこしても魔力を感じる。

「うつむむむむ」

「お、おい、罪口、助けてくれ！首から下が動かねえ！か、金縛りだ！？」

まあいつか。

僕の仲間になにかするようなら容赦はしないけど、そうでないなら学園長を倒そうと学園長を討とうと学園長を墮とそうとしたことじゃない。

むしろ望むところだ。

「おい、罪口！？まさかお前も動かないのか！？なんか、お前の呻きに合わせてドンドン体が重くなるんだ……！」

考えても分からないことは考えないのが一番。そう決め込んだ僕のはのんびり二度寝と洒落込むことにした。

アホの怯えた声は、BGMには少し喧しい。

コンコン

薄い微睡みの中、もう少しで眠れる。というタイミングで扉がノックされた。アホに出させようにも、どうやらアホも寝てしまったようだ。金縛りどうしたよ。

「はいはい、誰？」

扉を開け、不機嫌も露に顔を突き出すと、そこにいたのは男子寮の寮管だった。

寮管は僕に来客を告げると、さっさと管理人室に戻ってしまふ。壮大な寝癖がついていたから、きっと彼も今まで寝ていたんだろう。

しかし、客とはいったい誰だろう？

教師ならわざわざ管理人を通すまでもないし、男子なら知り合いはこの寮内にしかない。となると女子しかないわけだが……木乃香かな？

おはようございます  
「朝礼。先輩」

「緑ちゃん？」

寮の入り口で所在なさ気に佇んでいたのは、僕の後輩の緑ちゃんだった。

「どうしたの？日曜の朝から僕のところに来るなんて、珍しいね」

「なにをいいますか否違。珍しい、ではなく、初めて、です。さも二度目以降であるかのように言わないでください」

「ごめんごめん。で？本当にどうしたの？」

「なにやら何事、面倒事を呼んでしまったようなので、先輩に処理を手伝っていただこうかと」

「緑ちゃんは正直だね」

「それが美徳ですから」

でもオブラートに包むことは覚えた方がいいと思う。

もちろん手伝うけどね？

「で、面倒事っていうのは何なの？」

「かんだん要約に言ってしまうと、御家騒動です」

「御家騒動？」

「はい肯認。自分で言うのもなんですが、結構イイトコのお嬢なんです。」

私

北海道に構える封魔の一家、縁録。それが緑ちゃんの実家だそう  
だ。

神鳴流のように、門扉を構えて対魔術を教え継ぐのではなく、家  
系、血を重視して封魔術を受け継ぐ一族。

体内に怪魔を招き、封じ、使役し、また別の怪魔を封じる。これ  
を繰り返して封魔の大家として確立させた縁録家。緑ちゃんは語ら  
なかったけど、これは相当に辛いはずだ。

封じる必要がある。ということは、人に仇なす怪魔であるという  
こと。それを体の中に飼うなんて、きつと相当の苦痛苦渋を味わっ  
てきたのだろう。

「まあ、辛い分馴染んでからは以外と愛着も沸きますよ？出産の逆  
バージョンです」

「強がりかい？」

「恣誤おぼ？」

縁録の家は女性上位であるらしい。男性の多くは怪魔を招く激痛  
に耐え切れず、シヨック死してしまうのだとか。

「じゃあ緑ちゃんは中学生にして、いやその前、小学生にしてその激痛に耐えたの？」

「否違<sup>いしえ</sup>。耐えた、というのは誤弊<sup>ごへい</sup>があります。痛かったのかもかもしれませんが、私はそれを覚えていないので」

「覚えてない？」

「とある事情がありまして、何代か前のご先祖様が血統に術を打つたんです」

その術は、母が子を身籠った瞬間から、体内の怪魔を胎内の子供へと少しずつ、少しずつ移す術。

出産を終えた母体は疲弊し、心身共に弱っている。体内の怪魔は敏感にそれを感じ取り、反骨心の強い輩は体を食い破って封を破ることも、少なくなかったそうだ。

だから、体内の怪魔を胎内の子供へと『遺伝』するようにした。そういう術式を血に施した。

当然産まれたばかりの赤子ではそれらを統べる術をもっているはずもない。生後、最低でも五年。母は子を離すことなく抱きつづけ、体内の怪魔を御し、またその方法を体に覚え込ませるのだとか。

ちなみに、その術のお陰で男子も怪魔を使役できるようにはなつたが、やはり新しく封じることができず、未だ縁録の男達は肩身の狭い思いをしているそうだ。

「で、その、御家騒動つてのは？」

「私に家督を継げと言つのです」

「……つまり、緑ちゃんは縁録の長女つてこと？」

「肯認<sup>はい</sup>。母が先天性の卵子不足で、長いこと子供が出来なかつたんです。私に兄弟姉妹はなく、私が縁録本家の長子です」

「なんで継がないの？聞いた感じだと、かなり裕福な家なんじゃない？それとも結構窮屈だとか？」

「……」

僕の質問に、緑ちゃんは少しだけ顔を伏せた。僅かに曇った表情でつま先を見詰めている。話しづらいことなのだろう。

やがて緑ちゃんは、いつものように、ちょっと聞き取りづらい冒頭句で続けた。

「嫌嫌風習が出来たんです」

「……聞いてもいいの？」

「ダメなら話しません。先輩は黙って聞いていてください」

僕頼まれてる側だよな？

「昔は子供に怪魔を移す母親も、相当な激痛を負っていたそうなんです。代を重ねる事に増えてきた怪魔全てを引き抜く。内蔵をえぐり出す痛みだそうですよ。それは招くときは比べものにならない痛みで、大抵の母体は、ここで死んでしまいます」

それが無くなった。

本来なら喜ばしいことのはずだ。

しかし、長い家系図を記す内に、それは変貌を遂げた。

「いつの間にか、それを潔しとする風潮が生まれてしまったんです。怪魔を封じる一族は、怪魔を伝えて命を終える。もともと絶命に意味を見出だし、神聖化するのは生物の性さがですからね。それを、護ってきた人々に伝えて、『この人たちは命を燃やして護ってくれてい』と強く擦り込んできたんです」

それは、今更やめる訳にはいかなかった。いつそ信仰されるまでに崇められた縁録は、人々の信仰という甘い味を忘れることが出来なかった。

「だから、安全に受け継ぐようになってから、母親が死なないことを老害たちは疎ましく思った。往生際が悪いと諍った。そして強制したんです」

死ぬことを」

縁録に新しく生まれた鉄の掟。

娘が封魔師としての力を十分にもったとき、母親はその命を捨てて、強大で、長大で、超大な怪魔を封じ、娘へ伝染す。

そういう、迷惑窮まる風習らしい。

「この滑稽なところは、代を重ねて強くなる縁録の娘が、命を賭けるほどの怪魔なんて、今の時代殆ど残っていないところです」

代を追う毎に、その体内に宿す怪魔の量は増えていく。

たまに整理一（どうやって？）するらしいのだが、それでも夥しい数の怪魔達が蠢くことに変わりはない。

赤ん坊の内に移されるそれらは、新しい宿主の容量を無理矢理に広げる。自分達が狭苦しい思いをせずには過ごせるよう、勝手気ままに靈力を増築するのだ。

そうする毎に、縁録の娘達が封じる怪魔の許容量は増え、応じて命の危険も去っていく。

「ですから所否、昨今の縁録はその忌まわしい風習のために遠征までするんです。強い怪魔を求めて、自殺旅行ですね」

「それが、母親を死なせるのが嫌で、緑ちゃんは親元を離れてきたわけだね」

「じぶんから己望進んで親を死なせようと思う子は、そういないでしょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうだね」

「で？ 家庭の事情はわかったけど、面倒事の詳細は？」

「親戚が私を連れ戻しに来ました」

「ははは。それを言うために随分遠回りをしたものだ。」

「別にいいけど。」

「それは、今日の前にいる三人でいいのかな？」

「承認肯認」

既にあたりは人払いを済ませてある。広めに空間も作ったし、人が寄ってくることはないだろう。

目の前にいるのは三人の女。

メガネをかけた妙齡の女性。

茶髪の、高校生くらいに見える少女。

黒髪の、中学生くらいに見える少女。

「メガネの方が母の妹の紫さん。茶髪が従姉妹の黄緑さん。黒髪が、同じく従姉妹の明ちゃんです」

「ってことは分家だね？紫さんの怪魔は黄緑さんが受け継いでいて、明ちゃんは受け継いでいない、と」

「肯認。より分かりやすく紹介するなら……」

緑ちゃんはピンと人差し指を立て、三人を順番に指差した。

「平仮名が紫さん。数字が黄緑さん。アルファベットが明ちゃんです」

「うん？」

なんのことかな？

僕が疑問を挟むより早く、三人が口々に言った。

「y t t m t k t y、m d r」

「1 . 1 . 4 . 2 . 2 . 5 . 4 . 2 . 7 . 2 . 4 . 4、4 . 1 . 5 .  
5 . 3 . 2 . 7 . 4 . 4 . 1 . 2 . 1 . 9 . 1 . 1 . 2 . 1 . 2 .  
2 . 1 . 7 . 5」

「けめにれ。んつせつてふうちほねけつんけせよ . . . .」

「6 . 1 . 1 . 2 . 6 . 1 . 1 . 2」

「これくかすぬえ」

「6 . 1 . 1 . 2」

は . . . .  
は . . . .  
は . . . .

「因<sup>ちなみに</sup>穴、濁音と小さな『やゆよ』は補充してください

「いやいやいや、それ以前にさ、あの人たち、何言ってるの？」

「此其<sup>これ</sup>、縁録の特徴なんです。神聖な存在は、下民に簡単に理解されてはいけならしいですよ?」

「……それで、あんな奇怪な話し方を?」

「肯認<sup>はい</sup>」

「誰が何言ってるか、少しもわからないんだけど……」

「一応<sup>それでも</sup>、意味のあることを言ってるんですよ?紫さんののは、サラダがどつとか言つ有名な暗号らしいですし」

「……サラダ……?」

ますますわからない。サラダって、野菜のアレでいいんだよね?

「っていつか、それでなんで意思疎通ができるの?聞いたそばから解読できるほど縁録家はIQが高いの?」

「そこはほら、あれですよ。家族のシンパシー」

「これはテレパシーの域だよ」

「家族ってそういうものじゃないですか?」

「……」

やばい。僕前世はアレだし今世はすぐに養子に来たしで、まとも  
に家族してないかも。

え？なに？家族ってみんなデフォルトでテレパシー出来てんの？  
木乃香と詠春さんもそんなこと出来んの？

「あ、ああ、そうだよ。基本だよ、テレパシー。僕も出来るよ。  
当然だよ！」

「6・1・6・1・6・1！1・1・9・4・6・1・10・1・  
2・1・9・1・5・1・1・2・2・1・1・5・4・1」

うつせえ！口調が面倒なキャラは同時に無口になれ！！ぶつぶつ  
数字呟きやがって、雲仙冥加気取りか？彼女の言葉は未だ理解でき  
ねえぞ！

「這虫<sup>せんばい</sup>。私は黄緑さんと話し合いますから、潰虫<sup>せんばい</sup>は紫さんと明ちや  
んをお願いします」

「話し合う？あれと？」

まあテレパシーがあれば出来るのかもしれないけど……

「まあいつか。じゃあ、えっと……こつちの言葉は通じるん  
だよな？」

「肯認。<sup>うなづ</sup>さつきも黄緑さんが反応したじゃないですか」

ああ、やっぱりあれは僕に言ったのか。中身はさっぱり解らないけど。

「じゃあ、紫さんと明ちゃん。暴れるつもりなら向こうで。大人しく話し合っならここで請け合っよ?」

「えむする』きにぬせ」、『ふもれは」

「おんえtynmあbrrrtmrdssy?」

「7・1・1・1、3・3・2・5・3・2・4・1・2・4」

「<sup>だぞう</sup>聞通よ、先輩」

「いや分かんねえよ」

僕の当然過ぎる返答に、しかし緑ちゃんは呆れきったように息を吐き、教えてくれた。

「彼女達は手荒に連れ帰るつもりです。長女は私が相手をお願いしますから、先輩は二人の相手をお願いします」

「ああうん。わかった」

最初からそう言ってくれればいいのに。いや分かるように言ってくれればいいのに。

「otn sk 1 t i 1 n s s r t おmうん？」

「ちおえんぬえひ。におたんつせつてぶへむぬいつくる

「……mあ、s r m s うk

「うんうん。そうだよね。僕もそう思うよ

だから一刻も早く会話の少ないバトルパートに移ろう。

s i d e . 緑

「多分派手な勝負になりますから、なるべく離れて遊んでください  
ね」

「僕の心配をしてくれるんだ？」

「嘲笑、紫さんと明ちゃんの心配です」

「わかってたよ」

何やら不服そうな顔をしながら、先輩たちは離れていった。紫さんと明ちゃんもそれに続く。

「一拍、わざわざ待っていてくださるなんて、黄緑さんは優しいです  
すね」

「1・1・5・1・4・1・5・5・2・2・7・5・4・2・7・  
5、10・1・2・1・9・1・2・3・7・5・4・1・1・2」

「突勢本題ですか？せっかちなんだかのんびりなんだか、あなたの  
キャラは定まりませんね」

「2・2・7・1・2・3・9・4・8・3」

「気まぐれですか」

彼女は私ほどに怪魔を飼っていない。

お婆さんの怪魔は私の母に受け継がれ、それは今私の中にある。

しかし親より子が強くなるのが縁録。特に紫さんは母より優秀だ

つたと聞きます。

ならば、黄緑さんには、質の高い怪魔がいるのだろう。

「1 . 1 . 5 . 5 . 6 . 3 . 1 . 3 . 3 . 2 . 8 . 2 . 1 . 3 . 5 .  
2 . 6 . 1、6 . 5 . 4 . 5 . 6 . 5 . 4 . 5 . 1 . 1 . 2 . 2 .  
9 . 4 . 9 . 3 . 5 . 4 . 1 . 2 . 5 . 5 . 4 . 2 . 1 . 0 . 2 . 2 .  
4 . 4 . 4 . 4 . 3 . 8 . 3 . 1 . 2 . 2 . 1 . 1 . 2 . 7 . 1 .  
1 0 . 2 . 6 . 3 . 1 . 3 . 3 . 2 . 5 . 1 . 2 . 3 . 4 . 4 . 7 .  
5 . . . . .」

そう。

黄緑さんの言う通り、命を捨ててまで強い怪魔を封じなくてもないのだ。

子供の方が強くなる縁録の家では、親が命を賭ける怪魔を、子供は命を賭けるまでも無く封じることができるのだから。

だからあれはただの悪習。あれはただの、見栄を張るための下らない儀式に他ならない。

だから私は逃げたのだ。

親を無為に死なせたわけではない。

「時過も駄弁いつまでっているつもりはないんでしょう？早く終わらせまし

「よっ

「1・2・10・1・9・4・9・3・7・1・4・4・  
・5・1・1・2!!」

「そして、私が左目に、黄緑さんは右目に、それぞれ陣を構築した。」

side・鷺志

「素直について来てくれるのはいいけど、どこに行こう？」

「今回は開けた場所でも構わないんだよね。曲弦系使わないし。」

「曲弦系は切り札ではなく伏せ札なのだ。なんとなく多用している感が否めないし、学園の警戒には使っているけど、今のところはつきりと知っているのは詠春さんと木乃香たち皆。それとフェイトだけ（のはず）。」

「緑ちゃんの親戚なら下手に殺しちゃうわけにもいかない。なので

今回、体術で乗り切ります！

魔法？あれ苦手。

「んえ、d k m d i k t m r？」

「え？」

「d k m d i k t m r n n n n？」

「えっと……どこに行くのか、って聞いている？」

僕の質問に、明ちゃんはグッ、と親指を立てた。古い。

「どうせ君達以外の人は来ないし、別にどこでもいい……っ  
！？」

台詞の途中で、ナニかが僕の顔目掛けて突っ込んできた。避ける  
ことは出来たけど、今のは？

ブブブブブブ……

大きな羽音を立てながら、大きな蜂が紫さんの伸ばした右手に止  
まった。あれは、紫さんの怪魔？

「子供を産んだら、その子供に受け継ぐんじゃないの？」

「おいつつになぬ、うつるせこほおせろしにふなけるんり」

何言ってるのか分からないけど、でもよく考えたら受け継がれるのは怪魔であって能力じゃない。なら子供を産んで、体力が回復してから新しく怪魔を封じることが出来るわけか。

なら明ちゃんも怪魔を飼っていると見ていいだろう。それがどんなもので、どれくらい居るのは分からないけど、注意しておくに越したことはない。

しかし、紫さんはどこから怪魔を出したんだ？眼じゃないのか？

面倒だな。音使って終わらせちゃおっかな。

でも今日暇なんだよね。木乃香たちは女子面子で出掛けちゃうし、エヴァは僕だけ大宝玉出たのが気に入らなくて、茶々丸とばかり狩りに行くし、緑ちゃんはあっちだし。

暇つぶしがあることを喜ぼう。重畳重畳。

ところで今の奇襲は、『どこでもいいならここでもいいでしょ？』っていうことだろうか？

ガシャガシャガシャガシャ

答えは明ちゃんの口から聞こえてきた。

とだって、別に明ちゃんが『がしゃがしゃがしゃがしゃがしゃ』なんて言っているわけじゃない。

彼女の口から、骸骨が這い出して来たのだ。

「うっわぁ……………」

僕、ドン引き。

「nnndysnhnnう!!」

「いやいや、これは引くって」

今、意思の疎通が出来たと思う。

「うrsい!wtstttt、skdknnmntkつwkjnnい  
nd…!!」

ああ、ダメだ。わかんね。

何?『うアールエスい!』って。僕謎解きなんてできないからさ、

答え教えてくれないかな。

まあ教えてくれたところで、どうせあの話し方だから分からないだろうけど。っていうか緑ちゃんは普通（？）に話せるんだから、別に話せないわけじゃないんだよね？なんで話さないんだろ？

っていうか、彼女達が分家なら、緑ちゃんは帰って来ない方が都合いいんじゃない？後継ぎがない以上、分家から見繕うしかないんだし。当主になれるかもしれないのに、なんでそれを放棄するんだろ？

まさか、それで緑ちゃんを消しに来た、とか？

ざわり、と、感情が波立つのが分かる。もしそうだと言うのなら、手足の四本くらい切り落とさないと安心できない。

僕の怒りを感じ取ったのか、骸骨が全身を震わせて躍りかかってきた。

「君達、緑ちゃんに何かする気かい？」

ガシャン

大した名前も持たないただの骨なんて、物の数ではない。唐突に崩れた骸骨を見て、明ちゃんは驚いているようだ。彼女には、僕がなにをしたのか見えなかったのだろう。

「うぬ」

紫さんが口を開いた（明ちゃんの意味ではない）。

「ぬなくくいてくえせなえぬえ？」

「え？」

「んっせつてひゆこなく。くいてくえせなえぬえ？」

聞き返した意味がない。

「んっせつてぶ、うひしあしをせねけつんさなふぬえん」

「ん？」

『tkおmttrdsy  
』dd's、Mdrgrnkrrbwtsttggttppnnrrnn』

「ちわなふえめくえひ」

『Mdrhtnnsidd。あnnnr、szmkkthtrkw  
』kkdkr。rkd』

「うひしねくかとなくなみせえひ」

「……………」

いいこと言ってるのかもしれないけど…………

通訳が欲しいね。わけわかんね。

ともかく、と、僕は鈍と鉋を構えた。

「緑ちゃんが嫌がる以上、僕はあなた達を追い返す」

side・緑

既に二桁近くの怪魔を還されている。

封じた怪魔は、軽傷なら問題無し。重傷なら体に還り、致死なら世界に換える。召喚ではなく封じられた怪魔には概念上の『死』が待っている。

「時満いいかげん様子見はやめたらどうですか？」

「・・・・・・・・・・」

本格的に始めてからは、黄緑さんは無口になった。話すことはない。問答は無用。そう態度で示している。

「呆まうたく・・・・・・・・、会話は仲良しの第一歩ですよ？」

「・・・・・・・・・・」

言い合う（というか一方的に言い募る）間も、互いの怪魔が苛烈な戦いを繰り広げている。

黄緑さんのアッコロカムイ（大きな蛸。本来は内浦湾に棲む）が足を伸ばし、私のアラサラウマ（長い尻尾で毛の無い猿。あるいは熊とも）が前足でそれを払う。

一見アラサラウマの劣勢だが、アッコロカムイはイワエツウンナイ（一つ目の妖怪。壁や岩に穴を空けて飛んでいく）によってその柔らかい頭に無数の穴が空けられている。

体力的にはアラサラウマが有利だ。

今、私も黄緑さんも一体ずつしか怪魔を出していない。

どんな怪魔を持っているか計れない以上、乱戦による不意打ちを警戒しているのだ。

まして私は実質上の後継ぎ。内に封じる怪魔の量は黄緑さんでは及ぶべくもないが、しかし紫さんは強力な怪魔をいくつも封じたと武勇伝を持っている。

それに、私自身把握仕切れていない怪魔なんて、実戦で使う気にはなれない。

用心のし過ぎということはないだろう。

ギエエエエエー！！

！！

アラサラウマとアッコロカムイが同時に還っていく（くる）。アッコロカムイの嘴と、アラサラウマの牙が、それぞれの体を通ったのだ。

ふう。

黄緑さんがため息をついた。

「3・5・9・5・3・5・9・5・8・3・1・3・3・3・7・

2・6・1・1・5・10・1・9・2・5・4  
「

黄緑さんの目が限界まで開かれ、そこに二重三重の陣が敷かれる。見覚えのある陣だ。言葉通り、虎の子を出してくるつもりだろう。

なら、私も。

side・鷺志

せつかく構えた変体刀だが、僕はそれをしまっていた。

今は一本の槍を構えている。

罪口として造った武器の一つだ。どうせ造ったんだから、死蔵しておくのも勿体ないだろう。

ちなみにこの槍。もちろんただの槍ではない。

投げれば穂先から三十の鏃が飛び散り、突けば三十の鏃は体内で

爆ぜる。

ケルト神話第二部。アルスター伝説の主人公。英雄クー・フーリンが魔女スカハサから賜ったとされる、海獣の骨から造られた魔槍、ゲイ・ボルグを模した物だ。

クー・フーリンは足を使って投げていたそうだが、生憎僕にそんなスキルはないし、投げて使うには僕と敵の距離が短すぎる。

今、僕の相手をしているのは、一つ目の巨人。サイクロプスだった。

「わざわざ輸入しなくたって、日本にも『入道』とかいるじゃん・  
・・」

呟きながら、サイクロプスの腕をかい潜り、心臓目掛けて、

「その心臓、貰いつける！」

槍を、突く！

槍が厚い胸板を貫くと、その内側で、鍔が筋繊維や肺、心臓をズタズタに引き裂く音が聞こえる。

ちなみにこのゲイ・ボルグ、使い捨てである。

一度放った鏃を回収するのは面倒だし、嫌だ。

その内魔力とかでより本物に近い槍を造るのもありだろう。

グウウオオオオオオオオオオウ!!!

「!!!」

唐突に、大きな魔力を感じた。その手の感度が鈍い僕にも分かる巨大な魔力と、それを持つモノが放った咆哮。

それは緑ちゃんたちのいる方から進しっている。

そちらを振り返ると……………

「ははは……笑っちゃうよ……………」

あれ、ダイダラボッチじゃね？

向かい合ってるの、鬼神兵じゃね？

鬼神兵は、如何せん本物も偽物も見たことがないから『かな?』くらいにしか言えないし、よく見ると些か小さい気がしないでもないが、結構強いのが分かる。

そういえば学園にも石化封印されていた鬼神が何体かいたし、もしかしたら結構いるのかもね。鬼神。

ダイダラボッチは、以前タヌキが化けたのを見たことがある。あれから、頭の葉っぱと太い尻尾をどけたらこうなるだろう。

すげえ。巨人VS巨人だ。

初号機と、名前忘れたけど侵食型の使徒。あれみたいな戦いを期待してしまう。あれは戦いというより虐殺（食事？）だけだ。

緑ちゃんはどっちなか。それを考えている間にダイダラボッチが動いた。

巨大過ぎる腕を唸らせ、力任せに殴り掛かる。大質量の一撃だ。喰らえば人間ではただでは済まないだろう。ましてダイダラボッチは地形を自在に変える力を持っている。

対する鬼神はと言つと……

「……………回し受け？」

手の平を相手に向けた前羽の構え。そこからダイダラボッチの拳を鋭く手刀で受け、その手を掴んで体を反し…………

「い、一本背負い!？」

銀色宇宙人クラスの巨体で、鬼神は日本の武術を駆使していた。

さて、いつまでも大迫力のK 1を楽しんでいるわけにもいかない。紫さん達に向き直ると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

共に口をポカーンと開けて放心していた。

「やれやれ・・・・・・・・」

これじゃあ今から仕切直しも出来ないだろう。どうせ彼女達も、僕が還した二十体、換えた三十体でもう手持ちは数少ないだろう。

後始末を誰に押し付けるか。それを考えながら巨人達の暑苦しい肉弾戦に目を向けた。現在鬼神有利。

おお、アルゼンチンバックブリーカー。

腕を振り回すだけのダイダラボッチに足払いをかけ、ジャンピングニーを決めた鬼神に軍配が上がった。

どうやら鬼神を使役していたのは緑ちゃんであつたらしい。

「母に伝えて下さい。当主にはならない。黄緑さんに任せます、と」

言葉を預かり、紫さん達は帰っていった。なんだかあつさりしすぎてない？不気味なんだけど。

「きにすゑ気掛きことはありませんよ。縁録の老人は今までの怪魔を失いたくないようですが、そんなに膨大な数いなくても怪魔の封印はできるんです。先輩にも何か言っていたかもしれませんが、結局は当主わ最有力候補が誰かに権利を譲れば解決です」

本当にそんな簡単に済むものなのか。

これまで受け継いできた怪魔の数はそれこそ星の数ほどいるだろう。それは、たった一言で終わりに出来るものなのだろうか？

「緑ちゃんがそう言うならいいけどね」

「良事」  
いいんです

何かあれば、今度は木乃香たちも黙ってはいないだろうけど。

「ところで緑ちゃん。僕今日凄く暇なんだけど、遊んでくれないかな？」

「では鬼ごっこをしましょう。私が審判をするので、先輩は逃げて下さい」

「鬼は誰？」

「今喚びます」

「人払い解いちゃったからやめて」

そついえぼ、

ネギが  
こぼろ

こーすいね（古さんに）

4・4・3・2・1・2・9・2（てしいり）（弟子入り）

したらしい。

## 第十九・五話（前書き）

完全無欠。

徹頭徹尾。

純粹に趣味のみで書かれています。

正直、読まなくても今後の展開になんら支障はありません。今まで  
もそうだったかもしれませんけど・・・

ええ、今回、灰色の趣味が全面に押し出され、まずもって鷺志が空  
気です。

恐らくは90%近くの人達には辟易とするほどに詰まらない話です。

## 第十九・五話

寝坊してしまったとある日の登校途中。僕はいつか見たような光景に出くわした。通学路にできた人ばかりである。

幸いその中に見知った後姿があったので、気になった僕はその背中に声をかけてみた。

「おはようさよ。これは何の騒ぎ？」

「おはようございます、さきさん。これはここ最近の通学途中の名物ですよ」

「名物？」

僕が詳細を尋ねるより早く、事態は推移した。少女の声が響いたのである。

「他にいないなら、今日はここにいてだけで締め切るアルよ？」

それは木乃香たちのクラスメイト。古さんの声だった。

はて。ということとはこれはいつか緑ちゃんと出くわした毎朝の恒例行事なのだろうか？

しかしそれではさよの言った『ここ最近の』という言葉と噛み合わない。結構有名な行事だから、まさかさよが知らないなんてこともあるまいに。

「ネギセンサーが古さんに弟子入りしたそうで、ネギセンサーのしゅぎょうの一環だそうですよ？」

「修行の一環？」

「はい。今までは古さんに挑戦していた人達がネギセンサーに挑んで、勝てたら古さんから直々に稽古をつけてもらえるとか」

そつえば弟子入りしたんだっけ、ネギ。

原作ではフェイトが中国武術を使ってた、って理由で弟子入りしてたけど、ここではなんだろ？単純に強いからかな？

小太郎にボロツボロにされたらしいしね。

「よろしくお願いします！！」

「あ！始まるみたいですよ」

「時間はまだ余裕があるし、見ていこうかな」

「結構すごいんですよ」

ネギは直立して目を閉じ、臍のあたりで上に向けた手の平を重ねていた。

あれは小周天かな。

色々種類のある周天だけど、今ネギがやっているのは自身の内気を収めて循環器や五体の反応、つまり身体能力を高めるものだ。

丹田に意識した気を腰に抜き、背骨を上げて頭頂部を経由。今度は体の前面を通して丹田に戻す小さな巡りだ。

ちなみに大周天というものもある。

丹田の気を股間から膝、足の裏を経由して背面を上り、前を返って丹田に戻す。

この大きな巡りを大周天といい、これに置いては天と地のどちらか、あるいは両方から気を吸収して大幅な強化が望める。

まあ周天にも効果にも多種あるわけだけだ。

例えば圏境。

これは周天の効果の一つで、気を収めて自身を自然と限りなく同化させること。達人ともなると相対する相手すらその姿を見失うほどに気配を消せる妙技らしい。

ちなみに見たことはない。

っていつかネギが気を使って（無論紳士的な意味ではない）いる！？

「俺からいくぜっ！！」

僕の驚きをよそに、『W』形の髭をした大男が火蓋を切った。雄叫びを上げて大きな腕を振りかぶっている。

そして何かをする前に、ネギの連環腿で顎を蹴り抜かれた。

意識を刈った男にはもう見向きもせず、ネギは他の挑戦者達に接敵していく。

一人。また一人。そこそこのペースで人だかりの数が減っていくなか、やはり一筋縄ではいかない、一角の連中も確かにいた。

ライダースーツ（多分）を着て髪を立てた、軽い印象のある生徒が放つ回し蹴り。ネギは別の生徒を蹴った直後で体勢が安定していない。これは避けられないだろう。

案の定蹴りをくらったネギは、足をつけなかったこともあって無様に地面を転がった。

「追い打ちい！！」

勢い込んで畳み掛けようとする男は、その言葉を残して吹っ飛んだ。火行炮拳。形意拳の技、五行拳の一つだろう。

結構威力のある蹴りだったと思うけど、どうやらネギは受けきっていたらしい。

大きく肩を竦めて首を守る防御。タンガードムエイ。ムエイタイだ。

木刀を持った男には素早く細かい連蹴りで間合いを取っている。

痺れを切らした剣道部（恐らく）が大上段に構え直すのを見て、軸足をスライドさせながらの回し蹴り。

足首をスナップさせず、つま先を当てる蹴り。今度はサバットの横蹴り（シャツセ）か。

見事こめかみをえぐるつま先だが、それが下策なのはついさっき経験したろうに。

胴着を着込んだ偉丈夫がそれを逃さず足払いをかける。ネギは為す術もなくしたたかに背中を打ち付け、一瞬の絶息。

胴着の男は容赦なくから空きの腹に足を踏み下ろした。どうやらあの男、通り一辺の空手かではないらしい。

それをネギは、両手で掴みにいった。

体重＋筋力での踏み付け。当然掴みきれはるはずもなくその踵はネギの鳩尾を踏み抜いたわけだが、どうも様子がおかしい。男が足を庇うように身を引いた。

パンチャックシラットかカラリパヤトウか、ともかく南国の格闘技だろう。筋繊維の隙間に指を突き入れ、経絡を見出す点穴を用いると聞いたことがある。

腹への打撃と足一本。

随分分の悪い交換に思えるが、ネギに大したダメージはないようだ。

どうやら徘徊打功（自分の体を杭や石にぶつけて打撃耐性をつける練功）も積んでいるらしい。さっきの絶息はただ息を止めただけか。

その後も、ネギの奮戦は見ていて中々に面白い。

ボクシングのデンプシーロール。

サンボのヒールホールド。

ブフ（モンゴル相撲）のドウークルトウホ（回転投げ）。

アルマーダ（回転蹴り）やメイア・ルーア・ジ・フレンチ（三日月蹴り）はカポエイラのものだ。

穿弓脚に旋風脚。暗腿に塔槍腿。

テコンドーのティオティチャギ（飛び後ろ蹴り）まで持っている。

偏りを見るに、どうやらネギは蹴り技に傾倒しているらしい。

「はあぁっ!!」

ボクシンググローブをつけた男が素早くジャブを刻んでいく。それを化勁や手刀受けでいなすネギ。

しかし、いかんせん両手を使ったラッシュのスピードには追いつけなかった。拳を下に払おうと振った手が虚しく空を切る。相手方のフエイントにハマったのだ。

「貰ったぁ!!」

男が放ったのは鋭い前蹴りだった。あの野郎、キックボクシングかよ。

上からのパンチにはかり気を取られていたネギは、今度こそまともにそれを喰らって吹き飛んだ。転がりながらも体勢を立て直し、何とか起き上がることはできた。

しかし、それを見逃すほど甘い輩は残っていない。

長いリーゼントの男が打ち込む、正中線を捉えた左正拳。間合いギリギリのそれは、体勢を崩せば引いて避けられないこともないだろう。ネギも、大きく一歩引こうとした。

その直前で気づいたらしい。その拳が纏う気功に。

遠当ての使い手でリーゼント。彼が豪徳寺か。

しかし、これでネギは避けられなくなった。

もとより崩れた体勢を、さらに崩して引けば気弾は避けきれず、正中線に迫る拳は、横に逃げることも許さない。

ならば受けるしかないだろう。

ガシィッ！

ネギは左右の手刀を合わせ、下から上に豪徳寺の拳を打ち上げた。十字受けだ。

受け切れたが、これは致命的なミスだぞ。ネギ。

十字受けは、練度の低い者が使つと受けたあとの隙が極端に大きい。両手を上下のどちらかに振り抜いてしまつからだ。

ネギの体は今度こそがら空き。豪徳寺は十分な踏み込みから、今度は右手での正拳を放つ。

それに合わせて、ネギは豪徳寺に倒れ込んだ。

「……え？」

豪徳寺のマヌケな声が聞こえる。

振り上げた両手を降ろしながら、大きく踏み込みながら、その小さな頭を勢いよく突き出す。

心意把の一つ。鷹爪把だ。

全身を駆動させて打ち込む頭突き。大きな隙が出来かねない技で、カウンターで使うのが一般的。全体重に加えて相手の推進力まで加わる強力な技。これを絶招に持つ人も少なくはない。

だが、だ。

見事に喰らった豪徳寺は息を吐きだし地面に沈む。なまじ強い突きを持っていた分、反し技も強くなる。

そこはいい。問題はネギの方。

ネギは打ち込んだ姿勢から、どこかフラツキを見せている。

鷹爪把に限らず、多くの頭突きは実戦に向かないとされている。

実践するまでに必要な功夫が膨大な量になるせいだ。

その当たりが強ければ強いほどに、反動も大きい。生半かなものが打てばまず脳震盪は免れず、意識を保っていても次の動きが大きいく鈍る。下手をすれば頸椎骨折だってありえるのだ。

その後は、こでまでの奮戦が嘘だったかのように、ネギはタコ殴りにされるだけだった。

## 第二十話（前書き）

ここ最近忙しすぎてテンションが不安定です……

今回、いつもより短めです

## 第二十話

弟子入りイベントが終わったと言うことは、そろそろ悪魔襲来イベントだろう。お誂え向き、とは違つかもしれないが、今日は雨まですで降っている。

木乃香たちは今頃エヴァハウスにいるはずだ。これからしばらく、雨の日にはそうするように伝えてある。

かくいう僕も、紺色の傘をクルクル回しながらエヴァハウスに向かっていている最中だったりする。

エヴァには静観を言い付けてある。言わなくても何もしないとわかってるけど、念のため。MMと魔帆良、どっちの意志かは知らないけど、ネギの強化には必要なイベントだしね。

ちなみに僕、ネギに結構好意的だったりする。

慕われるってのはいいものだね？何て言うか、弟が出来たみたいで。いや妹か？

『小学生までなら男子だって妹だ!!』

いつか真顔で言えるようになりたい。

「いんばんは」

不意の声に驚いて振り返ると、金髪碧眼の少年が立っていた。

全身を黒い衣装で包んだ美少年がニッコリと顔全体で笑っている。

「お兄さんの名前はなんですか？」

「いきなりだね。人の名を聞くときは自分から名乗るものだ、って教わらなかったのか？」

「教わらなかった」

「じゃあ仕方ない。オレの名前は咎<sup>とが</sup>凧<sup>なぎ</sup>咎<sup>とが</sup>女<sup>め</sup>。高等部の一年だ」

「咎<sup>とが</sup>凧<sup>なぎ</sup>？罪口さんじゃないんですか？」

「罪口……？」

「ああ」

「聞いたことがあるぞ」

「確か中等部の三年で」

「成績優秀」

「スポーツ万能」

「眉目秀麗」

「友達想い」

「悪魔的な発想と」

「神懸かり的な指遣いで」

「芸術品とも言える仕事を数々生み出してきた」

「若き天才クリエイターのことだな？」

「いいえ。平凡な成績で、ちょっとだけ運動ができて、詰まらない顔で、自分に甘く他人に厳しく、残念な発想とそこそこの指遣いで、ゴミと見粉う愚作を迷惑な数排出した、生きる粗大ごみ製造機のことです」

「断じて知らん」

泣いてなんかないやい！

「どこに行けば会えますか？」

「さあな。彼は学園のどっかに自分の工房を持ってるって話だぜ？先生にでも聞きゃわかるんじゃないかねえか？」

「そうですね、そうします。お手数おかけしました」

「気にすんなよ」

手をブンブン振りながらにこやかに去っていく少年をじっと見る。角を曲がり、その姿が見えなくなるまで。

やがて姿を消した少年にため息をつき、僕は踵を反した。

「学生証には罪口鷲志って書いてありますよ？」

反した先には、たった今見送ったばかりの少年がいた。しかも手には内ポケットに入れていた僕の学生証まで持っている。

どうやった？

「それは罪口の学生証だ。今日拾ってな、明日あたり返そうと思ってる」

「この写真はお兄さんでは？」

「お？オレはこんなにカッコイイか？嬉しいねえ、アメちゃんをあげよう」

僕の学生証をヒラヒラさせている少年に、

しゃりん

と一閃、零閃を見舞う。斬刀狩りでなくとも十分過ぎる程に早いその斬撃を、少年は胴体でまともに喰らった。いや、

手応えがない。

鈍を通した肉体は、一文字に上下を分かたれたまま黒く粗い粒子となり、ブブブブブブ、と音を立てて飛び立った。少し離れたところで再び集まり、さっきと同じ少年の姿をとる。

「怖いな。卿らはそんなモノを好んで嗜むのか？私を慕う臣民には、まかり間違ってもやれん下賜だ<sup>かし</sup>」

「口調が大分かわったね。さっきまでとは大違いだよ」

「それは卿も同じこと。やはり卿が、ツミグチサギシか」

「そういう君は誰だい？僕の知り合いには、小さな羽虫になる友人はいないけど」

僕の質問に、少年はフツと小さく笑った。右手を胸に当て、恭しく頭を下げる。

「私は蠅の王。これで悟らぬ者には名乗る価値はないが、卿はどうか？」

「……参ったね。あんたはもつと仰々しい姿形だったと思っけど？」

「見た目の造形などどうとでもなる。現に私は、卿の目の前で我が臣民の姿を模したぞ」

「やっぱりさっきのは蠅か。でかい蠅の姿をとる、ってのは聞いたことあったけど、まさか小さな蠅に分裂するとは思わなかったよ」

「ふん。元々の私を思えば、多少の差異など気にもなるまい」

「それもそうだね」

蠅の王、ベルゼブブ。

悪魔王ルシファーも一目置くとされる、地下帝国の最高君主。

原形のベルゼバアルから、人々の信仰で歪められ、悪魔に堕ちた元神様。

悪魔たちには慕われる、空軍の支配者らしい。

「で？偉大なる王様が、一下民たる僕になんのようで？」

「勘違いしないで欲しい。私は王として卿に会いにきた訳ではない」

ベルゼブブは大仰に手を広げ、再び全身を蠅の集団へと変えた。最初僕に声をかけたときも、ああやって現れたんだらう。学園全体に張った糸は、そう細かくしてはいないからね。

蠅達が収束し、今度は髭を蓄えた老紳士の姿をとった。ダークスーツがよく似合う。

「私を召喚せしめた者がいてね。今の私はあくまで使役される使い魔だ」

## 第二十一話（前書き）

閲覧注意です。

食事時に投稿しておいて難ですが、食事中および食事前には読まないで下さい。

とてもグロイ表現が含まれます。

## 第二十一話

「零閃編隊・二十五機」

一振りで約四匹。計百匹程の虫を切り落とした。

「今のは絶対に蠅じゃなかったぞ蠅の王」

「卿は視野が狭いな。何も私の臣民は『肉を食む子』だけではない。『突き刺す子』も、『血を吸う子』も、皆私の臣民だ」

「そつえば、害虫の帝王だったなあんたは」

視野がどうか、複眼と比べんな。

斬った蜂は残骸を床に散らしていた。還ることなく、ただその死骸を晒している。

蜂を繰り出す前と後で、ベルゼブブの手袋から刺繍が減っているのも見て取れた。

どうやらベルゼブブは、完全に現界しているわけじゃないらしい。

術者の力量か他の理由か、ともかくベルゼブブの本体はここにはいない。虫を寄せ集め、それを寄代に力の一部を起こしているに過

ぎないのだろう。

「何が『臣民を模したぞ』だよ。むしろお前が模されてんじゃないかねえ」

「……先言葉を訂正しよう。卿は中々に慧眼だ」

「どういたしまして」

つまり、この王に勝てなくても虫を全部たたき落とせばいいってことか。

しかし、百匹で手袋の刺繍か……

それだけの虫を集めたことも驚きだけど、それを、少なくとも半分は削らなければならぬのか……？

軽く鬱だ。僕も虫は得意じゃない。

まあ地道に頑張ろう。

「雷鳴剣」

雷の轟音と稲妻の高温が、周囲を焼いた。

冗つつつ談じゃない。

斬魔剣。雷鳴剣。雷光剣。百花繚乱。百列桜花斬。桜楼月花。天  
劍絶刀。

とにかく神鳴流を試しまくった。コンクリを割り、店舗を吹き飛ばし、それらの瓦礫が粉塵になっても尚止めず、エヴァにプリンを食べられたとき以上に執拗な攻撃を見舞った。

しかしそれでも、ベルゼブブはようやく両手が露になっただけだった。

「私の臣民は、卿ら人類より余程多くこの世にいるのだよ」

「補充はしなくていいの？」

「私を慕う臣民を徒に散らすのは忍びない。それに、今私の元にいる臣民だけで君は一杯一杯だろう？」

「塵も積もればなんとやら。数の暴力を体験してるよ」

軽口を叩きながら、頭では別のことを考えている。

不気味なことに、なぜか奴は攻撃らしい攻撃をしてこない。

たまに殴りにきたり、さっきのように少数の虫を飛ばしてくるだけだ。僕を倒すのが目的じゃないのか？

「君の主はもしかして、ネギへの加勢を警戒しているのかな？」

「む？」

「だとしたら見当違いも甚だしいよ。僕はネギに手を貸すつもりなんて」

今は。

「ない」

「卿こそ見当違いだ。それも、二つほどな」

「聞かせて貰えるかな」

「私の目的は英雄の息子への干渉妨害ではない。無論、本来の目的は明かせないがね」

『英雄の息子』、ね。

取り合えずベルゼブブを呼んだ奴はネギを知ってるみたいだ。ヘルマンとも関係があると見ていいだろう。

「それに、卿ら脆弱な人間は私の主には成り得ない」

「……あ、そう」

「それは実に不愉快な思い違いだ。自分勝手に私を歪め、あまつさえ侮蔑の対象にまで貶た貴様等が私の主だ、などと」

やべ、地雷？

ブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブ  
ブブブブブブ

ベルゼブブの感情の高ぶりに合わせるかのように、そこから中から羽虫が集まってきた。黒い雲が現れたかのような大群だ。

「まいったね……………、暗器のストックには殺虫剤も毒けむり玉も無いんだけど」

【王の財宝】とかなら入ってたかな？毒けむり玉。あれ重宝するよな。



なんでわざわざGチヨイスしたんだよ！？人間の好き嫌い熟知してんじゃねえかあの蠅！！？

まるで地面が蠢いているかのようなその大群を、もちろん直視できるはずもない。匏の頑丈さにものを言わせて、やたら滅多に奥義を連発した。

学園都市の案内板、書き直す必要があるかもしれない。

目茶苦茶に奥義を撃つ中、やはりベルゼブブは人間の多くがGを嫌うことを知っていたらしい。知った上で、それを利用する狡猾さを持ち合わせていた。

大群に向き合う僕の真後ろから、ベルゼブブの配下が忍び寄っていた。糸に繋がることなく、羽音が耳に届くこともなく、当然意識できるはずもなく、僕はその虫に触れられた。

「つつつつ！！！！？」

瞬間、右肩に激痛が走る。焼け付くような、焼き切れるような痛み。肉を力任せに引きちぎられるような激痛。使い慣れた自分の体で、見知らぬ何かが好き勝手をしている違和感。

痛みの元、右肩から飛びたったのは一匹の蚊だった。特筆すべき点のない、至極普通の、蚊。

普通でないのは、右肩に残る痛みと違和感。

そこでは、幾百もの幼虫が蠕いていた。

蠅の幼虫が、肉を喰い、皮膚の下を這いまわり、その皮膚を喰い破って体表に出て、再び皮膚を喰って体に潜る。

見れば見るほどに悍ましい光景。生きながらに虫の苗床になるなど、日本ではまず考えられない境遇に、僕は陥っていた。

ヒトフバエ。

成虫は森の中など、人と触れることのない場所で過ごし、鬱陶しくなることもないが、幼虫は違う。

蚊などに入った卵は、吸血に際して人体に侵入し、皮膚の一枚下で孵化する。体を食べるだけだから宿主の危機など一切を省みず、ただただ肉を喰い続ける『捕食寄生』する蠅だ。

孵化するまで中々気付けない秘匿性もさることながら、真に厄介なのは、孵化の後も迂闊に手を出せないということ。

自分で取り除こうとして、もし幼虫を潰してしまえば、その体液は自分の血管やリンパ管に混じり、敗血症を引き起こす。

しかも、この幼虫からは魔力を感じる。ベルゼブブが強化でもしたんだらう。でなければこんなに早く孵化するはずがない。強暴にもなっているらしい。お陰で酷い痛みだ。嫌悪感から嘔吐を堪えるのがしんどい。

「私の臣民はね、種を越えて手を取り合うのだよ」

僕の苦悶を見ながら、さも誇るかのように、高く歌うかのように、王が語る。

「肌の色。宗教観。領土。資源。文明。支配欲。そんなもので同種同族と血を流しつづける貴様等とは違うのだ。だからこそ私の臣民は誇り高い」

なるほど、民のありようは王の誇りか。中には互いを食い合う虫もいると思うけどね。

自らの臣民を誇るその姿は、確かに王としての偉容を持っているのかもしれない。

僕は、王なんて器じゃないけど。

「・・・・・・・・・・エリ・エリ・レマ・サバクタニ」

「うん？」

いつの間にか止まっていた虫の行進と羽音。王の言葉に静かに聴き入っていたが故の静寂は、僕の眩きをベルゼブブに届かせた。

「・・・・・・・・・・フ」

そして、

「フフ、ははは、ふふハハハ！フハハハハハ！ハハハハハハハハハハアハハハハアハハハハハハ！！！！」

老紳士の見た目にそぐわない、大口を開けた哄笑が、羽音に変わって辺りに満ちた。

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ（主よ、なぜ私を見捨てたもうた）？フハハハハ！なんだ、もう観念したのかね。卿は人類では上位の戦士だと聞いていたんだがねえ！」

ベルゼブブは高らかに言う。己の臣民に、自らの強さを誇示するように。己の臣民に、自らの指揮を見せ付けるように。

「とんだ期待ハズレだよ。本気を出せない私にすら負けるなんてね」

語りながら、それでも近寄ってくることはない。何事かを警戒しているのが目でわかる。僕はそれを分かった上で、取り合わない。

「気分はどうだい？散々虐げてきた、散々潰してきた、散々見下してきた我が臣民の温床となった気分は？」

語りながら、それとなく視線を動かしているのがわかる。僕がしているであろう細工を探している。僕はそれを分かった上で、取り合わない。

「『出来ることなら消してくれても構わない。1人のために6700万人を危険にはさらせない』。私はこう言われていたが、やれやれ、君が6700万人もの命をどうこう出来るとは思わないがね？」

語りながら、警戒しながら、睥睨しながら、しかし確実に虫たちが僕に近付いていた。ベルゼブブから下賜された魔力で強化された眷属。地獄の蟲だ。

「……………本当につまらないね。君はこれで終わりかい？」

「そんな訳ないでしょう」

たった今、終わったところだよ。

「むづづうう！？」

轟と唸りを上げて、僕の周りを劫火が蹂躪した。

虫を焦がし、虫を燃やし、蟲を焼く。為りたてとは言え悪魔の眷属、罪にはこと欠かないだろう。

「貴様！何をしたあ！！！」

「特に何も。魔法使いらしく、魔法を使っただけだよ」

「馬鹿な！私の魔力を受けた臣民が、たかだか無詠唱の魔法などで……！！！」

「何をいつてるんだか。ちゃんと詠唱したじゃないか」

エリ・エリ・レマ・サバクタニ。

僕の始動キーだ。

ピンチのもしもを考えて、意味のある言葉を選んだ。

「どうやらベルゼブブは知らなかったようだが、僕は魔法使いで、音使いなんだよ。」

声を聞かせて、その後の声を聞かせないなんて造作もない。まあ、悪魔相手に、なんて皮肉な使い時があるとは思わなかったけれど。

「慎重が仇になったな、蠅の王」

本来のベルゼブブなら火は効かない。彼自身が火を使役するからだ。

しかし今回のベルゼブブは全力ではなく、しかも焼くのは蟲達。

多少の耐性はあるだろうけど、薄く細く脆い羽や足、触角なら燃えないはずはない。

虫にほのおはこうかはばつぐん！小学生でも知ってるぞ。

「焼死か熱死か窒息死。お好みのものをどうぞ？」

やがてベルゼブブ自身も姿が崩れていく。彼を模っていた蟲達が死に行く。その最中、ベルゼブブは僕を大きな複眼で睨んでいた。

「許さんぞ。私を侮辱したこと、私の臣民を苦しめたこと、私の臣民を焼き殺したことを。決して忘れない。必ず貴様を殺し、我が国の食卓に乗せてやる」

怨嗟の声か、呪いの言葉か、必殺の決意か、いずれかを残し、

蠅の王は、空軍の支配者は、暴食の悪魔は、その真価を發揮せぬまま、還っていった。

「ふう〜・・・・・・・・・・」

ようやく、止めていた息を吐く。出来れば再選は御免被りたい。既に満身創痍、一杯一杯なんだ。

肩の幼虫はとつくに蒸発し、傷口も焼いて止血は出来た。治癒魔法ってどれくらい効果があるんだろう？一応このままでも運動には支障は少なそうだけど・・・・・・・・。

ああもう、こんな傷作って、皆に怒られるじゃないか。

少しその場で休んでいると、複数の足音が聞こえてきた。

「罪口さん！！こつちから凄い魔力が・・・」

「う、何この臭い・・・・・・・・・・」

「うわ！なんやこの傷!？」

「なんや、もう終わってますのん?」

ネギと、神楽坂と、小太郎と・・・・・・・・月詠?

もう少し空間保っておけばよかった。少し騒がしいメンバーだ。

「だ、大丈夫ですか罪口さん！？凄い火傷・・・体中、あちこち切ってるし・・・」

「小さな傷は言わないでよ。せつかく誤魔化してたんだから」

「何言ってるんですか！待ってて下さい。今応急処置を・・・」

手を翳して魔法を掛ける。僕があげた指輪は活躍しているらしい。

「いくら罪口さんが強くても、無理をしちゃダメです！」

ははは。ネギに説教されてるよ僕。なんか異様に悔しいな。

「僕の心配もいいけどね、もしかしなくても、神楽坂さんに魔法バレしたんじゃないの？危険なことに巻き込んだんじゃないの？」

「う・・・」

「やれやれ。そんなネギに日本のことわざを教えてあげよう」

「ああ皆々、一緒に」。

「自分の頭の蠅を追え」

第二十一・五話（前書き）

今回は特に中身が薄いかもしれません。

なんだかやつつけみたいになってしまいました・・・

せめて、せめて女性陣の可愛さが伝われば！

## 第二十一・五話

「始まりはいつも唐突だ。」

ともすれば使い古され、ありきたりとも、定型句とさえ言える言葉だが、当然これにも初めて言った人物がいるはずで、その人物は名前が知れるほどに評価されてもいいと思う。

少なくとも、僕は彼ないし彼女を高く評価したい。

幸い、僕の肩は優秀な先生方の治療魔法のお陰で跡も残っていない。こつも見事に治されては感謝することも吝かではない。

結構深く焼いちゃったから、なんの後遺症も残らなかったのは、まさに僥倖と言っていいだろう。

いつものように、エヴァの別荘で皆で寛いでいたときのこと。

「はい木乃香。 あーん」

「あーん」

木乃香の口に生八橋。

「はい刹那。 あーん」

「あ、あーん……」

刹那の口に生八橋。

「はい千雨。あーん」

「や……（むぐむぐ）」

多分『やらねーよ!』と言おうとした千雨の口に生八橋。

茶々丸の作った生八橋を皆に手ずから食べさせるのが、最近のマイブーム。

緑ちゃんは断固として食べてくれないけど。

「はいさよ。あーん」

いつもの流れなら、ここでさよも雛鳥のごとく口を『あーん』と開けて待っているのだが、今日は違った。

さよはへの字に曲げていた口をパツクと開けて、叫んだ。

「や……（むぐむぐ）」

何を言おうとしたのか分からないけど、とりあえず生八橋。

口に物を入れたまま喋るような行儀の悪い事はしない。さよは生八橋を行儀よくもぐもぐ噛んで、やがてゴクンと飲み込み、再び大きく口を開いた。

「あーん」

あ、喋らないんだ。

さよの口に、生八橋。

「やっぱり必要だと思っんです！」

程なくして、さよが思い出したように（実際に思い出したのだから）叫んだ。

「……ま、確かに必要かもね」

「さぎさんもそう思いますか！」

「うん。この間あんなことがあったばかりだし、あって困るものでもないからね」

「はい！私もまさしく同じことが言いたかったんです！」

「えらく興奮してるけど、大丈夫？」

「こ、興奮なんかしてません！！」

いや間違いなくしてるって。見てみ？語尾全部エクスクラメーシ

「ヨンマーク（！　これ）ついてるよ？」

「そうと決まれば、早速行動かな？」

「は、はい！」

「エヴァ、木乃香。準備お願い」

「はい」

「少し待て、今敷く」

「私は図鑑を持ってきました」

「ありがとうございます」

刹那と千雨はやることないので、待機。木乃香とさよはリップク  
リームなんか塗っている。女の子だねえ。

え？主語？もちろん仮契約だよ。

……ってかあれ？もしかして今僕たちテレパシー出来た？

もしかしたらもしかすのか！？と喜び勇んで緑ちゃんを見ると、  
彼女は霊界探偵が実は魔王の息子だった漫画を読んでいた。最終回  
が、正直ちよっぴり不満だね。

「ダン、準備できたぞ」

「なぜか久しぶりに『ダン』って呼ばれた気がする」



「生八橋の味がした」

さて、次は木乃香だ。

え？ホツペに紅葉が散っている？H A H A H A！気にすんなよ。

取り合えず、余計なことは言わないほうがいい。という事は学んだ。

学んだところで活かせるかは別だけど。

「じゃあ木乃香の番だね」

「ん」

陣に入って目を閉じ、顔を突き出す木乃香。

はあ〜・・・・・・・・カワイイ・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

おっといけない。トリップした。

ヒョイツと口をすぼめて顔を寄せる。軽く触れるだけで契約は執

行されるのでそう深く合わせる必要はない。というかこれでも凄く恥ずかしいんだ。

契約執行の一際強い光を合図に、僕はさっさと体を離れた。こんな、何度やっても慣れるものじゃない。

「……………(ボソツ)」

「え？」

「なんでもないっ！」

木乃香がどことなく不服そうにソツポを向いた。エヴァがニヤニヤ笑って見ている。なんだろう？

なんか、「なんでクレンジー買った」だか「慣れて喰えへん勝った」だか「なでて暮れ辺飼った」だか、そんな感じの事を言っていたような気がするけど……………

「何をボサツとしてる。さっさと出してみる」

「図鑑の準備は出来ています」

茶々丸が分厚い本を抱えて立っている。もちろんアーティファクトの図鑑だ。

ちなみになんかもちろんと言っか、木乃香が主で僕が従者だ。これは木乃香も了承済み。僕が近衛の下なのは当然だ。

ところで僕のアーティファクトはどんなだろう？やっぱり気にな

るよね。

「じゃあさよ。せーのでいこうか」

「はい」

せーの。

「『来たれ』」

召喚の文言と共に、さよの手には小振りなスイカ程のサイズの丸い石が。僕の手には、詠えたようにピッタリな黒い革手袋が現れた。

「じゃあ茶々丸。さよの方からお願い」

「はい。さよさんアーティファクトは、『魔弾タスラム』の用ですね。太陽の石とも呼ばれる投擲用の石で、ケルトの太陽神、『長腕のルー』の道具の一つです」

茶々丸は図鑑を開きもせずそう言った。どうやら内容はすべて覚えていらしい。なぜ図鑑持って来た？

魔弾タスラム。ルーの持ち物の一つで、やはりこれも投擲武器。フラガラッハのように自動で敵に飛んでいくような機能はないが、その効果は神話が保障している。

ルーの祖父、バロールの左眼の魔眼を銀の瞼ごと貫いた代物である。投石機などを使って用いらしいが、さよなら『騒霊現象』でなんとかなるだろう。パチンコ玉と魔弾じゃ、まるで勝手が違うだろうけど。

「神様の道具ですか……」

「火力は十分だよ。今後はそれを使えるよう、練習を調整しよう」

「はいっ！」

元気でよろしい。

さて次は僕の番だ。

黒い革手袋の道具なんて、浅学非才な僕は寡聞にして知らないが、しかしアーティファクトとして現れたからには、神話にせよ伝説にせよ伝承にせよ、あるいは過去の逸話だろうと、なにがしかの実績を持っているはずである。

いったいどんな逸品なのか。僕がワクワクして待っていると、

「これは……」

茶々丸が訝し気に首を傾げた。

「茶々丸。どうかしたのか？」

「マスター、さぎさんのアーティファクトですが……」

何やらボソボソと小声で話し合っている。

なにかしら問題のある代物なのだろうか？

「さぎさんのアーティファクトですが、魔力を消費して糸を編む、【人形使い】の道具です」

「糸か。僕にピッタリな手袋だね。今からこれが前後左右だ」

欲を言えば、魔法攻撃力UP！みたいなものが欲しかったけどね。

「いえ、そのアーティファクトはもともと【前後左右】デッドアングルという名前です」

「………うん？」

「少し妙なんですけど、そのアーティファクトは600年程前に登録されたことになっています」

「その言い方が妙だね。偶然同じ名前の手袋が、偶然僕の手に移った。それだけじゃないの？」

「っていつか、僕の名前はこっちが元ネタなのかも。」

「登録は600年前ですが、更新がついさっき、ほんの5分前なんです」

………

600年前にあったことになっていて

僕に逃えたようにピッタリサイズで

僕の曲弦系にもピッタリで

情報の更新が5分前・・・

僕はもしかしたら、と思いその手袋【前後左右】を改めた。手の甲を見たり、手の平を眺めたり、透かして見たり、ひっくり返したりひっくり返して、見つけた。手首の部分だ。

金色の糸で『made in 浄土』と刺繍されていた。

## 第二十一・五話（後書き）

次回から学祭編ですが、そのあたり良くプロットが練れていません。

少し更新の感覚が開いてしまうことになると思いますが、どうか温かい目で見えてやって下さい。

## 第二十二話

よく、『祭は準備が1番面白い』なんて言うが、確かに準備も十分に面白いと言えるだろう。

決して日常ではない熱気がそこら中に満々ている。イジメなんかあるはずもない、底抜けに明るい僕のクラスも、当然例外ではなかった。

普段から無駄にテンションの高いアホなんか、最近はおバーヒート気味だ。

「いいか野郎共！今日で準備終わらせっぞおおおお！！！」

オオオオオオオツツ！！！！

クラス委員長の掛け声に、まるで勝鬨かちどきのように応じるクラスメイト達。僕達のクラスは簡単な喫茶店をやることになっている。

普通の喫茶店では客が入る訳もないので、そこはほんの少しのオリジナリティ入り。

「罪口、そつちの準備は？」

「問題無いよ。全員分完成してる」

「おお！流石罪口商会だな！」

委員長の竹下ああああ君（親父さんが舞い上がって連打してしまつたらしい）が僕に親指を立てた。それに失笑で応じて、僕は帰り支度を整える。

「それじゃああああ君。僕はこれで」

「竹下と呼べ。ああ。じゃあな」

「ちょ、絶叫！なんで罪口帰すんだよ！？」

「そうだぜ絶叫。まだ準備は終わってねーんだし、罪口にや居て貰つた方がいいって」

「絶叫言うな！！！」

絶叫。ああああ君のあだ名だ。本人は気に入らないらしいけど。

「いいんだよ。罪口は自分の割り振り終わらせたんだから」

ブーブーと文句の上がる中、僕はジョンと国喜田にだけ挨拶して、教室を出た。

暑苦しい狭苦しい息苦しい中で、長時間目ま苦しい作業なんてしていたくない。

「あ、罪口さん!」

校舎を出てしばらく。エヴァハウスに向かって歩いていると、いかにも元気な子供の声が僕を呼び止めた。

「ネギと……小太郎と月詠。あと神楽坂か」

最近よく見かける四人組だ。悪魔襲来で神楽坂に魔法がバレてから、よく四人でつるんでいる。

いや、月詠は専ら刹那に張り付いてるか。

「どうかした?」

「学園祭のことでお話があるんです」

「格闘大会やて格闘大会!もちろん罪口のにーちゃんもでるやろ?」

「オニーサンが出はるんやったら、ウチも頑張ってまっわ」

格闘大会、か。

あれってネギだけじゃなくて小太郎の成長イベントでもあるんだよね。僕は出る必要ないんだけど……

「格闘大会って、誰に聞いたの?パンフなんか出てたっけ?」

「超さんに聞きました」

うっは、一気にきな臭くなった。

イレギュラー  
僕とか考えるネギとか、彼女が経験した歴史とは違う転回だと思  
うんだけどね。だからといって曖昧に様子見、なんてできないか。

まあ彼女の強制認識魔法については、どう動くかは決めてある。  
— 先ずは静観させてもらおう。

「どうだろうね。気が向いたら出てみるのも吝かじゃないかな」

「え〜、んなこと言わんと出ようや〜。俺罪口のにーちゃんと闘っ  
ん楽しみやねん」

「僕も罪口さんと手合わせしたいです！」

「気が向いたらね」

もっとも、そんな面倒臭そうで汗臭そうな大会出ようとは思わな  
いけどね。クーネル出てるし。

「ウチは占いやるんよ〜」

「私はコスプレ」

「私は部活で、軽く表演を」

おしえたくありません

「黙秘」

「私は野店を。茶道部ですので」

「私は囲碁部にいるぞ」

「はっはー。バラバラ過ぎだぜー」。

もちろん学祭での催し物の話だ。どうせ時間はあるんだし、予定が合う限り全部見て回るけどね。

「そういうダンはどうなんだ？たしか、喫茶店だったな」

「ああ。それはパス」

「パス？」

「うん。僕はちょっとばかり過酷な準備を強いられたからね。あああ君の采配で自由参加が認められてるんだ」

「ここ最近、別荘（別荘）でやってたアレか？」

「うん」

「私たちとダベリながら片手間でやってたアレか？」

「うん」

「さぎくん、それズルとちゃう？」

「嘘はよくないんじゃない？」

「やだなあ、ズルくもないし嘘でもないよ。ただ自分の有利を黙ってるだけ」

「十分ズルいのでは……?」

おおう、茶々丸にまで責められちった。まあ確かに、せつかくの学園祭なんだし、自分が何もしないって、結構もつたいないのかな？

「そついえば格闘大会なる催し物があるらしいね」

「格闘大会？」

「つて、去年もやってたじゃねーか。なんで初耳風なんだよ？」

「そうだったけ？なにせ去年はちうちゃんの写真を撮るので忙しくてさ」

「ンガアアアアア!!!」

千雨が唐突にヘッドドラムを始めた。いいじゃないか、可愛かったんだし。

「格闘大会か」。闘つとるさぎくんカツコエエもんな」

「ちよつとエントリーしてくる」

「即決にも程がありますよ先輩」

緑ちゃんは口数よりもため息の方が多いかもしれない。

side・ネギ

「待つとつたぞ」

しずな先生に呼ばれて広場に赴くと、そこには幾人かの先生と生徒が立っていた。真ん中にいる学園長が軽く呼び掛けてくる。

「ネギ君にはまだ紹介しとらんかったの。ここに集まっとるのは学園都市の各地に（うんぬん）」

なんとここにいる人物は全員が魔法関係者らしい。まあこんな時間にとこに呼び出されればなんとなくわかるけど。

ちなみに小太郎君と月詠さんも一緒に来ている。修学旅行の件でガンドルフイーニ先生は眉をひそめて見ているけど、他の方はとくに承知して下さっている。

学園長の話を聞いていると、どうやら魔法の秘匿に関する話らしい。呪い級のおまじないの、実行阻止だ。

関係ないけど、そういえば僕は魔法の秘匿に関して、罪口さんか  
らしか教わった覚えがない。メルディアナでも教わったのかもしれ  
ないけど、あそこは村民も魔法使いばかりだったせいか秘匿意識は  
かなり薄かったように思う。

まあ、麻帆良も相当なものだけど。

「誰かに見られています」

「何？」

パチン。

神多羅木先生が指を鳴らす動きに合わせて、無詠唱の魔法が放た  
れた。風の刃のようなそれは一直線に空を切り、何かの機械を真っ  
二つに両断した。

「魔法の力は感じなかった。機械だな」

「生徒か・・・やるな。人払いの魔法を抜いてくるとは」

「ウチの生徒達はあなたどれないですからねー」

「追います」

「深追いはせんでいいよ。こんなことが出来る生徒は限られとる」

そんな悶着がありながらも、学園長は区切りをつけて解散の号令  
を出した。

「ネギ君も生徒に告白されたりせんようにの」

それは僕が気をつけることじゃないし、今言うことでもないと思う。だいたい思春期の学生相手に、『お祭りでの告白を阻止せよ』『なんて、少しどころか結構難しいことだと思う。定期的に起こるのだから、もっと確実な対策は練れなかったのだろうか。』

そんな内心が滲まないように気をつけて、曖昧に笑うに留めた。

「驚いちゃったよ。世界樹伝説、ホントだったんだね。魔法先生も結構いたし」

「けどあいつら戦ったらほとんど大したことない奴らやで。俺とかネギのが強いかもしれん」

「オニーサンやったら指先一本でちょちよいのちょいなんやろーな」

「もう。二人ともすぐそっちに話持ってくんだから」

「しかし、魔法センサーの仕事まで入って、格闘大会は大丈夫なんか？普通のセンサーの仕事もあんなやろ？」

「そこは大丈夫だよ。ちゃんと調節してるから」

やたらめつたに予定を埋めることはしない。もちろん学園長が心配するようない。それに関しては罪口さんの方が心配だ。

それとも罪口さんならレジスト出来るのかな？

ドカツ！

不意に大きな音がして、売店のテーブルが倒れた。カゴに入っていた商品が散らばる。

「だ、大丈夫ですか？」

思いつきり転んでしまったらしい誰かに手を貸すと、

「あれ！？あなたは……」

「ネ、ネギ坊主。丁度よかった、助けてくれないか」

出席番号19番。超鈴音さんだった。

怪しい奴に追われている。

その言葉が示す通り、超さんは白い仮面を着けた黒衣の集団に追われていた。

屋根の上を駆け回る僕達に、なんの苦もなくついて来る男（多分）たち。

「オイオイオイなんやアレ!？」

「ウチら、結構スピード出してるんやけどな」

「超さん、これは一体!？」

小太郎君と月詠さんも一緒に動いてくれている。超さんを抱える僕はいつもよりスピードが出せない。

こういうとき、功夫の不足を実感する。もつと軽身功を積んでおけばよかった!

「実は私、悪い魔法使いに追われてるネ。ネギ先生に助けて欲しい」  
「」

悪い魔法使い・・・?

そうして逃げる最中も、進行方向の屋根から黒衣の男が這い出るのが見えた。

影の魔法。西洋魔術!？

「もう逃げんの飽きましたわー」

「こいつら俺の狗神みたいなモンや!殺ってええやろ?」

数を増やす男達に痺れを切らした月詠さんと小太郎君が立ち止まり、迎撃の姿勢をとった。

どのみち相手はしなきゃいけない。

「事情はわからないけど仕方ない。倒すよー!!」

「よっしゃー!」

「はいなー」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!」

小太郎君は我流の肉弾で、月詠さんは神鳴流で、僕は魔法で、それぞれ黒衣の精霊を蹴散らしていく。

あまり派手なのはマズい。二人もそれを分かっているから、不用意に狗神や奥義を撃つたりはしない。

あらかた数を減らすと、僕達は建物の影に入った。

事情を聞くとしても、超さんははぐらかすばかりでまともに答えてくれない。

うーん……?

「お喋りは終いや。三人、近づいて来るで」

「あやー、マズイネ。今度また捕まったら、さすがに記憶消されてしまっかもしれない」

ボソツと、超さんが聞き捨てならないことを呟いた。

『今度』？『また』？

それに、記憶を消す？

「おいネギ」

僕が深く考えようとする前に、小太郎君が声をかけてきた。

「ここはもう囲まれてるで。距離、右から50・80・50。一人は屋根の上や」

「どうしはります？斬ってもええどすか？」

「ダメです！」

取り合えず月詠さんを嗜める。罪口さんの日々の教育しつけのお陰で衝動は弱くなってるみたいだけど、人斬りの性はなかなか治らないらしい。

「ぶー。つまらんなー」

「ほなら、どうする？」

「こつちから出向いて雑踏の中で決めよう。僕と小太郎君は下。月詠さんは上をお願いします」

なぜか？うっかり斬っちゃってもいいように。

「行きます！」

僕の掛け声に応じて、月詠さんは屋根の上に跳び上がり、僕と小太郎君は体を伏せて走り出した。

「『戦いの歌』」

小さく呟き身体能力を強化。腰を落としたまま泥歩で敵との距離をつめる。

「『風花・武装解除』！！」

不意に足元に現れた僕に驚き、一瞬動きをとめた彼の銃を弾いた。

「むうっ！？」

すぐに懐に手を入れる彼に肉薄し、ズシンと震脚して、貼山靠！！

「ぐふっ！」

背中に硬い感触。彼の手は予備の銃と僕の背中に挟まれ、多分骨折くらいはしていると思う。

うう……、老師や罪口さんならもっと思いつきり吹き飛ばせるんだらうな……

怯んでたたらを踏んだ彼にもう一步踏み込み、手刀を喉元に突き付けた。発動体の指輪をつけた右手。

「つて、あれ？」

そこにいたのは、ガンドルフィーニ先生だった。

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「な、なんなんですかこの方ー！？」

「月詠さーん！ストップ、ストップ！！」

「月詠のねーちゃん。やめやー」

笑顔で二刀を振るう月詠さんをなんとかだめ、先生達に状況の説明を求めた。

「事情を聞きたいのはこちらだよ、ネギ先生。なぜ君が、エヴァンジェリンにも関わる問題児、要注意生徒の超鈴音をかばっているんだ？」

「え……、問題児……？」

問題児。そんな認定はすぐには受けないだろう。

前からわかっていたことなら、なんで担任の僕にそのことを引き継がないんだろう？

「つまり、超さんは今までに何度も魔法使いの会合を覗き見していて、

何度と無く出した警告を無視して、今回も事に及んだ、と？」

「そつだ。われわれ魔法使いが現代社会と共存するために、一般人には多くを知られるべきではない」

「超さんは、どうなるんですか？」

「彼女が警告を無視したのはこれで三度目だ。あの凶悪犯、エヴァンジェリンにも手を貸している。記憶を消すことになるだろう」

記憶を消す。

それは妥当な処置なのかもしれない。

技量次第では個人で一軍と渡り合えるような技術。秘匿してしかるべきなのだろう。さもなければ、魔女狩りが今の世で再び行われることになるかもしれない。

ここで超さんを不用意に庇っても、もしかしたらこの先、もっと危険なことに首を突っ込んでしまいかもしれない。

知らなければ対処できないとしても、そもそも知らなければ巻き込まれずに済むこともあるだろう。まして、超さんは魔法使いではないのだから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかりました」

僕の言葉に、ガンドルフィー二先生は目を細めた。この先生が何を考えているのか、正直よくわからない。でも、高音さんと愛衣さんは、どこか失望の眼差しを向けて来ている気がした。

「わかつてくれたならいいよ。いくぞ超君」

「ネ、ネギ坊主」

超さんが両側を影の精霊に固められて連行されていく。そこに、僕はもう一度声を投げた。

「ですがガンドルフィーニ先生。彼女の処置は、他の先生にお願いします！」

「なに？」

ガンドルフィーニ先生が怪訝そうな顔で聞き返した。今何を考えているかは分かる。

「ガンドルフィーニ先生を信頼しないわけではありませんが、どうも先生は『違反を重ねる生徒』ではなく、『エヴァンジェリンさんに関わる生徒』を僻視しているように見えます」

「む……」

口ごもるガンドルフィーニ先生。多少の自覚はあったのだろう。

「超さんは僕の生徒です。今回の件も、僕は関わっています。僕に関係のない話ではありません。今回僕は、『違反を働いた生徒の取り締まり』を『手伝った』んです。この程度の要求は、飲んでいただきます」

高音さんと愛衣さんは小さく吹き出し、ガンドルフィーニ先生は

苦虫を噛み潰したような顔をした。

『完璧』は信用できても、『潔癖』は信用できない。

いつだが、罪口さんがそう言っていた。

## 第二十二話（後書き）

これは学祭編なのでしょうか……？

前日、ですね。

次回、次回から本格的に学祭編です！

## 第二十三話（前書き）

連日投稿。

！  
このお話を読むときは、部屋を明るくして、画面から離れて見てね

## 第二十三話

「ですから、僕は別にすつぽかしたわけじゃないんですよ。あえて理由をあげるならそうですね、普段の学園長の態度にも非があるんじゃないですか？そりゃもちろん公私を分けて、非常時にキチンと動いてくださるなら僕も文句はありません。ですが普段のようにぶざけ半分の口調で召集を頂いて僕が応じない、なんて解りきっているのでは？誤解を恐れずに言うなら、僕は学園長に少なからず反感を持っています。それは普段のどこかふざけた印象からも分かって頂いているものと思っていました。もしかして学園長は関わりの深い一学生すら表面的にしか見ていないのですか？いやまあ『学園長』という役職上、生徒と触れ合う機会が少ないのは重々承知しています。ですが、だからといって、後々こうして学園長室に呼び出すほどの重要な会議に、『ああ、罪口くんかの？老い先短い老人からのほんの些細な頼み事なんじゃが……』なんて始めるのはいかにも冗談臭くはありませんか？問答無用で通話を切り、即座に電源を落とした僕の判断は、決して間違つてはいないと信じています。僕を叱るのも結構ですが、その前に自分を省みることも大切だと思えますよ。ただでさえ学園長は軽んじられる事が多いんですから、なけなしの威厳を保ちたいと思つたのならそれ相応の態度を保つたほうが無難です。それと、ええと、クラスの出し物でしたっけ？あれに關しても、キチンと担任の先生を通して認可をいただいた案であり、クラスの総意で決まつたものです。今さら文句を言われつつ出て出し物を変えるのは間に合いませんよ。今がいつだかわかっていますか？学園祭当日の、午前2時ですよ？ええ？なんですか？あなるほど、学園長は出し物ではなく僕が用意したオリジナリテイが気に入らないんですね？問題ありませんよ。アレは人には完全に無害ですし、何より学祭中しか使えません。ほんの手遊び程度の才

モチャじゃありませんか。アレよりよっぽど危なそうな出し物なんてゴマンとあるじゃありませんか。その辺りをおおらかにしてしまっうのが、ここの結界の難点の一つですよ。え？話を交えるな？交えてなんかいませんよ。僕はずっと学園長の質問に答えています。なんにせよ、もう準備は出来てしまっただんです。今さら変更はききませんし、また変更するつもりもありません。どうしてもとおっしゃるのでしたら、担任の先生を通して通達をして下さい。ああ断っておきますが、もし魔法の行使が認められたら、少しかだけ暴れちゃいますよ？ああそういえば。そういえばですよ学園長。学園祭中の警備はどうなっているんですか？僕を含む生徒たちは平時よりもほんの少し警戒する旨、日中1、2時間程度のシフト、召集が掛かった際の絶対対応答くらいしか聞いていませんけど。え？先生方で受けもって下さるんですか？それはありがたいですね、生徒たちは生徒たちで、クラスの出し物はもちろん友人や恋人との交遊も大切ですからね。魔法生徒の友人が魔法生徒じゃないわけじゃないんですから。ですが学園長。お心遣いは嬉しいですけど、いくらなんでも無理があるんじゃないですか？何せ学祭中は外部からも人が来るんですよ？そこに良からぬ思想をもつ輩が何人混ざっているか分からないんですよ？それを、僕がほんの少し指を動かすだけで17の肉塊に変貌するような方々に任せて本当に大丈夫なんですか？……

・ いえいえ、勘違いしないで下さいよ学園長。僕は先生方を過小評価しているわけでも、自分を過大評価しているわけでも、増長しているわけでも、ましてや来るかもしれない敵を過大評価しているわけでもありません。ただ単純に、疑問に思っただけです。学園祭なんて一般の生徒を人質に取ることも簡単なのに、高畑先生や僕クラスの敵が現れたらどうするおつもりですか？まさか無策で、そんなことそうそうないから、なんて心構えではいませんか？もしそんな甘い考えでいるのでしたら、すぐに捨てて下さい。『そうそうない』は『たまにはある』なんです。その『たまに』が今回でない補償なんてどこにもないんですよ？そういえば今年はネギ・スプリングフ

イールド先生がいますね。彼の英雄の忘れ形見。そこを利用しよう  
と考える輩もいるんじゃないですか？英雄の息子を利用しよう。英  
雄にはひどい目に合わされた、息子に仕返ししよう。利用の仕方  
も様々ですね。旗印にして教団じみた軍を興そう。国家に反旗を翻  
そう。いや、本当に教団を作って、悪徳宗教でも真似ようとするか  
も  
しれませんよ？あれは上納金が凄まじいらしいですからね。生徒を  
守るのは大前提として、メルディアナから預かっている彼の警護も  
あつて然るべきではありませんか？え？なんですか？なんですか  
？冗談じゃありませんよ。確かに僕はネギに悪からぬ印象を持っ  
て  
いますし、ネギも僕を慕ってくれていると思います。ですが、だ  
か  
らって子守なんて冗談じゃない。子供っぽい所作を見せない少年で  
はありますが、彼が10歳だか9歳だか、ともかく小学生程度の子  
供であることは事実なんです。お祭りともなれば騒ぎたくもなる  
で  
しょう。それを責めるのは酷です。ですが僕は僕でもう予定を立て  
て  
いるんですよ。木乃香たちと一緒に学園祭を満喫する、という外  
せ  
ない予定を。ですからその辺りもなんとかしてください。え？  
大  
いなる力には大いなる責任が伴う？あなたは蜘蛛男の叔父さん  
で  
すか？僕の力は近衛を、詠春さん以下の近衛を護るためのもの  
で  
す。麻帆良のためではありません。それとも学園長、あなたは木乃  
香  
のついでにネギを守れと、そうおっしゃるおつもりですか？英雄  
の  
娘を護るついでに、英雄の息子を守れと？そんなことをして、ど  
ち  
らかが疎かになつたらどうするんですか。残念ですが、木乃香は  
と  
もかくネギについて責任を取るつもりはありませんよ？麻帆良に  
お  
いて、僕は何より木乃香を優先し、次点はエヴァの家に集う仲間  
達  
です。その次が魔法を知らない一般人。魔法使いはどうぞ、自  
分  
の自分を守って下さい。え？・・・・・・・・・・・・・・・・  
つ  
まり。つまり学園長は何かあつた際の責任を負って下さると？  
・  
・ああいやダメですよ。そういう重要なことは頷くだけじゃなく  
て  
、キチンと言葉にして下さい。ええ、ええ・・・・・・・・はい。  
わ  
かりました。『学園祭中に起こつた不祥事について、全ての責任』

を学園長は負って下さるんですね？いやあそう言っていたらと僕も気が楽になりますね。何と言っても、僕は一介の中学生ではないんですから。ええ、分かりました。木乃香のついででいいんですね？木乃香のついでで、かつ責任は学園長が負う。その条件で、ネギ・スプリングフィールドの身の簡単な警護、しかと請け負いますよ」

## 第二十四話（前書き）

ポツキーってすげーよな、最後までチョコたっぷりだもん。

友人からきたメールでした。正体不明の笑いが込み上げ、しばし爆笑してしまった……

あ、すみません。内容とは全く関係ないです。

## 第二十四話

学園祭初日。

敷地内が普段に倍する勢いで賑やかな中、僕は一人で涼しげに歩いていた。

初日は皆が皆出し物が入っていて、僕は一人ぼっちを余儀なくされたのだ。

「緑ちゃんとか、たんに僕と居たくないだけかもしれないけど・・・」

なんだか緑ちゃんの態度が辛辣なんだよね。僕にだけ。

一応グルッと回ってみただけど、やっぱり一人だと味気ないね。ネギの護衛にしたって、どうせまだ何も無いんだし。

と、いうわけで。

さっさとみんなの出し物を見に行こう。まずは木乃香から。確か占いとか言っていたはずだ。

占い研究会の部室は一目でそれとわかるものだった。

なにせ部室の入口に怪しげな天幕を張り出し、手書きの看板でおどろおどろしく『表だけ』と示されているのだ。わからないはずがない。

「やあ。来たよ」

「あ、さぎくんや」

「え？なに？誰？」

「近衛さんの彼氏!？」

恐らくは占い研究会のメンバーだろう、これまた一見して占い師でござい、という格好の女生徒が現れた。

僕を指差して黄色い声を上げている。正直、少しうるさい。

「さぎくんも占いにきたん？」

どうやら彼女達は無視して構わない相手らしい。木乃香は僕の手を引いて中に入れてくれた。

部室にはいくつかの天幕が敷かれ、それぞれに『星座』、『手相』、『名前』、『水晶』、『タロット』、『八卦』とある。

そもそも『八卦』が『占い』の意味だから分類として分けるには不自然なのだが、そこはご愛敬というところか。

「はい。さぎくんはここな」

「木乃香はなにで占うの？」

「ウチはこれ。トランプ占いやよ」

「……トランプで占うの？」

ニッコリ笑って頷く木乃香。いや可愛いけどね。

「ほな、三枚引いて〜」

「はいはい」

木乃香が扇状に広げたトランプからこれぞという三枚を選び、引き抜いた。どうでもいいけどトランプを綺麗に広げるのって結構難しいよね。

「なに引いた？」

「ハートの1。クラブの10。スペードのJ」

ポーカーだったら中々の手札だろう。ロイヤルストレートが狙えるぜ。

今は関係ないけどね。

僕が引いたカードを見せると、木乃香は、むむむう……、と

唸って目を閉じる。

やがて普段通り可愛らしく目を開き、僕に人差し指指を突き付けた。

「さぎくん。今年の夏、特に夏休み中は蠅に纏わり付かれるえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

心底嫌な占いだ。

「え、と？その結果はどうやって出たの？トランプに『夏』とか『蠅』とか、そんな情報はないと思うんだけど・・・・・・・・？」

僕の当然の質問に、木乃香はヒマワリのように微笑んで、

「乙女のインスピレーションやえ」

と言っただけだ。

『麻帆良（秘）コスプレコンテスト』

「千雨みっけ」

「お、さぎ。ホントに来たのか」

「心外だね。まるで僕が嘘ばかりついてるみたいじゃないか」

「でも嘘つこつって努力してんだろ？」

「うん」

「そこは嘘でも『NO』つつつとけよ……」

呆れたように言う千雨は、十二単を二重に着たような豪華な服装だった。地毛は纏めて、その上に白髪ウィッグを着けている。

「その衣装重くないの？」

「見た目ほどじゃねーよ。袖とか裾とかに切れ端縫い付けてるだけで、実際に厚着したわけじゃないからな」

「へ〜」

イロイロやるもんだ。

「まあでも、正直来てくれてよかったよ」

「うん？」

「いや、もうエントリーしちゃってるし」

「………うん？」

僕が千雨の言葉の意味をはかりかねていると、

「準備できてますかー？」

Tシャツを着てつば付き帽を反対に被った、見るからにADっぽい格好の男が話し掛けてきた。

「あ、すみません。彼がここにきてゴネちゃって」

「え？困りますよ、もう始まってますから」

「え？え？」

わけのわからぬまま、僕はADにつれられて更衣室に押し込まれた。

そして5分後。

「………僕骨肉細工は出来ないよ？」

「暗器術があんだろ。アレで口からなんかだせよ」

袖のない忍び装束。全身を鎖で巻いた僕の姿があった。

18番『ちう』さんと、19番『罪口』さん。キャラクターは『奇策士とがめ』と『真庭蝙蝠』でえす！

しかも千雨、本名で登録してやがる。まあ演じてるキャラがキラだし、ただのエントリーネームだと思ってくれだろう。

僕はもともと、それなりの有名人だしね。商会的な意味で。

僕と千雨の登場でにわか騒がしくなる観客。といつても視線の大半は千雨に向いていて、僕なんてまるで居ないかのようだ。

たまに向く視線といえば、『こいつちうちゃんの何?』という視線。

ふん。優越感しか湧かんわ!

そしてアピールタイム。千雨は僕に向かって適当に構え、右の拳を勢いよく鳩尾に突き出してきた。

「ちえりおーー!!」

「ぐふう・・・!」

腹と口を押さえて呻く僕をよそに、すでに会場は大盛り上がりだ。千雨は可愛い上にスタイルもいい(3 A内で比べるべからず)からね、本来出るだけで優勝して当然だ。

しかしもちろんそれだけで終わるわけにもいかない。

僕はさも口から出したかのように絶刀・鉤を取り出し、それを杖にして立ち上がってみせた。

・・・あれ? 意外と反応薄いな。

なんか悔しかったのでさらに斬刀・鈍。劣化版ゲイ・ボルグまで取り出した。

それに一拍遅れて、ようやく大きな歓声が上がったのだった。

優勝はもちろん。僕と千雨のダブル受賞である。

「おーい、刹那ー」

運動系の部活は一部が屋外で出し物をしている。中武研などがそうだが、剣道部もそうであるらしい。

「あ、さぎくん」

刹那は胴着を着込み、竹刀を振っていた。今はただの素振りだ。

「出し物は、今から？」

「はい。演劇風の表演をします」

「演劇？」

「子供が多いですから、桃太郎をやる予定です」

「いいねえ。鬼ヶ島では丁々発止もあるわけだし。芥川龍之介の書いた桃太郎は凄惨を極めるけどね」

「え？芥川って、芥川賞のですか？」

「まあ知らなくて普通だけどね。芥川龍之介は桃太郎をリメイクし

「てるんだよ」

「へえ〜・・・どういう風に変わるんですか？」

「まず桃太郎は、キビ団子を半分しかあげません」

「え？」

「鬼ヶ島で平和に暮らす鬼達の、財宝を目当てに侵攻を開始します」

「え？」

「桃太郎は指示を出しつつ逃げる背中を刀で斬りつけ、犬は喉笛を食いちぎり、キジは目玉をつついてえぐり出し、猿に至っては鬼の娘を凌辱ののちに絞め殺します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「桃太郎は鬼の子供を人質に取り、その子供に財宝の乗った車を押させて村に帰りました」

「あの・・・さぎくん・・・」

「桃太郎はその後幸せに暮らしました。・・・とはいきませんでした。子鬼は大人になると見張りのキジを噛み殺し、鬼ヶ島へ帰ったのです」

「さ、さぎくん・・・」

「鬼たちはたびたび桃太郎の住まう村に出向き、桃太郎の家に火を

放つたり、寝首をかこうとしたり、猿は人違いで殺されてしまいました。桃太郎は鬼の復讐に怯えながら、残りの人生を歩むのでした」  
たしか、こんな話。

「さ、さぎ……くん……」

おっといけない。つい興が乗って喋りすぎたらしい。桃太郎と聞いて集まりかけていた子供達が遠巻きに怯えた目を向けてくる。

「ゴメンゴメン。刹那のうろたえる顔があまりに可愛かったから、つい」

「それ謝ってますか!？」

とかいいつつほんのり頬を染める刹那蕩れ。

「た、大変です桜咲さん!」

戯れる僕と刹那の間に面をつけたままの剣道部員が勢い込んでか  
けてきた。

「鬼役の尾荷さんが階段から落ちて両腕を開放骨折しました!」

ホントに大変じゃねーか。

「そんな……鬼役は彼が一人七役だったじゃないか!」

そして開放骨折と聞いても演劇も心配か刹那。骨が皮膚飛び出してんだぞ?

「尾荷さんは、『俺のことは気にしなくていいと伝えてくれ。なあに、こんなもんツバつけときゃなおるさ。致命傷以外はな、ケガなんて言わねーの』と」

尾荷さん無駄にハードボイルドな。

「それから、『だが流石にこのまま子供達の前に出るわけにやいかねえ。夢を与えるのはいいが、悪夢にするのはいけねーや。なんとか代役を見つけてくれ。俺にはわかるぜ。こんなとき、真剣な奴が困るこんなとき、神様ってのは粋な計らいを見せるもんさ。きつと俺よりいい役者が見つかる』と」

「そんな……」

何やら悲痛な顔で俯く刹那。え？尾荷さんって普段からこんななの？ちよつと会ってみたいんだけど。

「僕でよければ、台本見せてよ」

一人七役ってのは、少し辛そうだ。

ふっ……。

まさか桃太郎で泣く日がくるとは思わなかったよ。

あの台本、きつと尾荷さんが用意したんだろうな。実に素晴らしい作品になっていた。

やむなき理由を持ちながら、それを明かして自身を正当化しない、誇りを持った悪<sup>おに</sup>。それに対し、使命を帯び、仲間を連れ、小数で死地におもむく正義<sup>ももたらさう</sup>。

まさか彼らの戦いに、あんな決着があるなんて……………

近い内に、尾荷さんのお見舞いに行こう。そしてサインを貰おう。

僕がどこにいるか、皆さんわかりますか？

……………

はいそうです。緑ちゃんたちの教室です。

結構な行列だね。人気があるらしい。

看板には『RPG喫茶』とある。なにやら興味をそそるじゃありませんか。

「いらっしゃ……………入断<sup>ごらっしやいませ</sup>」

「緑ちゃん今嫌そうな顔しなかった？」

入店（入室？）した僕を迎えたのは、笑顔を一転、不服そうなため息をつく緑ちゃんだった。ロープレで村娘なんかを着ている、『布の服』と名付けられそうな服を着ている。

「寂奴様おひとりですね？」

「疑問符ついたけど確定形じゃん。確かに一人だけど」

「早帰いそいでにどうぞ」

「さつきから本音だだ漏れだからね？」

通されたのは、掃除用具入れと向き合って食事が摂れる、客を舐めきっていると思えない席だった。

「何頼しちめつもんが決まりましたらお帰り下さい」

「頷かねーよ？」

目礼すらせずに去っていく緑ちゃん。他のお客には実に丁寧な対応を見せていた。

「……………おっと、目から青春の汗が。」

ところでこの教室。『RPG喫茶』というだけあってかなり手を入れてある。

特に従業員が素晴らしい。

着ぐるみとは思えないリアルなゴブリン。

向こうが透けて見えるスライム。

本当にスツカスカのスケルトン。

オシボリを運ぶコウモリ。

あちらでは中身の無い鎧武者が空いた器を下げている。

取り合えず、頑張れ認識疎外魔法。

ちなみに『金色の衣纏いし朱の白片』オムライスは、とても美味しかったです。

おや？そろそろ格闘大会の予選が始まる時間だね。

刹那も出るって言ってたし、木乃香たちも応援に来てくれるそう  
だ。

これは頑張り甲斐がある。

## 第二十五話（前書き）

もしかしたらお気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、僕と灰色は格闘とか大好きです！

それはもう大好きです！！

なので、学祭編、というよりも格闘大会の部分がそこそこの長さになってしまおうと思われま

しばし暑苦しい描写が多くなるとは思いますが、女の子も戦うので、何とぞ容赦の程を、お願い申し上げます。

## 第二十五話

「おいさぎ。お前これ見越してたのか？」

格闘大会の会場変更の知らせを受け、今僕たちは電車に揺られている。

たわいもない話をしながら時間を潰していると、PCをいじっていた千雨がその画面を向けながら言った。

「これって？」

「これだよ。こ・れ」

『まほら武道会

麻帆良学園最強への挑戦！

集え！腕に覚えの猛者どもよ！

優勝賞金はなんとなんとの一千万円！！

参加者急募！開始直前まで』

「い……」

「いつせんまんえん……」

木乃香と刹那が絶句している。普通の中学生には馴染みのない額だろう。もちろん僕にもない。

「へえ。誰かのテコ入れでもあったのかな？」

「……本当に知らなかったのか？」

「うん？なんで知ってたと思うのかな？」

「なんか、お前なら何を知っててもおかしくないかなと」

「ははは、そんなわけないだろう。僕が知ってるのは、僕が知っていることだけさ」

まあつまり原作知識だけだ。

「え？私達が出るのってこれですか!？」

「なんでこんなおつきくなつとるん？前はもっと小さかったえ？」

「今さぎが言つたる。テコ入れだよテコ入れ」

「テコ入れ？」

「あゝ、テコ入れってのは……」

千雨がテコ入れについて説明する中、僕は隣の茶々丸の髪を結いながら考え事をしていた。

魔法の強制認識についてはどうでもいいしどっちでもいい。今は格闘大会のことだ。

僕が刹那も誘ってアレに出るのは、（木乃香に促されて、も大き

な理由だが）もちろん刹那のスキルアップが目的だ。ついでにネギや小太郎、月詠までアップしてもいいかもしれない。

今のところ、僕は魔法世界までは行かないつもりだ。

詠春さんによく頼まれているとはいえ、日本での修業をほっぽって私事にかまけるような奴の面倒はみきれない。

魔法世界のことは、今は置いていて。

格闘大会にしたって、どうせ優勝はできないのだ。

もちろんスキルのには可能だろう。アルビレオがいなければ。

確かあいつは幻影だったはずだ。ネギに托すことがあるから出場した、とか。

僕やエヴァが当たるならともかく、刹那とは当たらないで欲しい。もし一回戦からでも当たろうものなら、大会に出たこと自体が無駄になるし、そんなやり方で刹那を負かした輩を、僕が許せると思えない。

英雄殺しなんて称号は、今はいらない。

どうやって組み合わせを決めるのかはよく覚えてないけれど、いざとなったら糸や音を使うのも、まあ躊躇いはしない。

そんなことをつらつらと考えているうちに、電車は目的の駅に着いた。

「あ、罪口さん！」

「せくんぱい」

取り合えず月詠を拘束。こんな人込みで抜刀されてたまるか。

「なんか凄いことになったな。優勝賞金一千万て」

「最初は十万円だったのにね」

原作では誰かに教わっていたはずだけど、その誰かはここでは一般人らしい。ネギと深い関係ではないようだ。

「伝説の格闘大会の復活、ゆーてましたなー」

「ああ、20年前の、だろ？」

「復活？」

ちなみに月詠は3-A所属だったりする。刹那だけでなく千雨や木乃香ともそこそこの仲だ。

しかしなんだ、今日の千雨は説明キャラと化しているな。茶々丸がどことなく寂しそうだ。

「茶々丸」

「はい？」

クルリと振り返った茶々丸は後頭部に三つ編みを垂らしている。

いや、正確には三つ編みとは言えないだろう。

三つ編みなのは肩のあたりまで。そこで二つに別れ、三つ編み。肩甲骨を少し過ぎた辺りでそれぞれ二つに別れ、三つ編み。腰の辺りでさらに別れ、三つ編み。

電車に揺られる間に随分な力作が出来上がってしまった。

「イチゴパフェ食べる？」

「いただきます」

小さなスプーンを動かして黙々と、モグモグと食べる茶々丸がとっつっつっても可愛い。

やがて流れたアナウンスに従い会場へと踏み込むと、皆から見える位置に円盤状の機械が設置された。その機械は『ヴェーロン』と音を立てて起動し、自身の上に光を照射する。するとそこには、

「超さん……？」

ネギの誰何すいかの通り、超鈴音のホログラムが立ち上がった。

『大会参加者の諸君。私自身がこの場にいないこと、まずは深くお詫びしよう。』

私が本大会の主催者、超鈴音ネ』

オイ、まだガキじゃねえか

バカ。知らねえのかよ麻帆良の最高頭脳を

『このホログラフィが作動しているということは、会場に来れない事情があるということネ。もしかしたら、世界平和のために暗躍している最中かもヨ?』

ずいぶんウイットに富んだジョークだね。ガンドルフィーニ教諭あたりは、腹を抱えて笑ってるんじゃないかな?

『 私はここに、最盛期の『まほら武道会』を復活させるネ。』

飛び道具及び刃物の使用禁止!!

・・・そして呪文詠唱の禁止!!

この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ!!』

「え?」

「んなつ!?!」

「おいっ!?!」

「ほう・・・」

「罪口さん、これは……」

その後の超の説明など耳に入らぬ様子で、僕の周りの面々は驚きの声をあげるばかりだ。

「気にすることはないよ。確かにこれは嚴重注意ですむ問題じゃないけど、麻帆良の結界は『優秀』だからね」

「ダンの言う通りだ。周りを見つめる。反応しているのは魔法関係者ばかりだろう？」

「でもよ、私みたいにその結界に抵抗持つてる奴がいたらどうすんだ？」

「その人は、『麻帆良だから』って納得するよ」

「それは……そうかもしんねーけど……」

僕の説明に、しかし千雨は納得がいかないようだ。それもそうだろう。僕と出会わなければ、千雨はここでも煩悶としていたのだから。

「心配しなくていいよ。麻帆良に千雨同様の抵抗力を持つ人はいない。僕が調べたんだ、間違いはないさ」

もともと麻帆良でもその手の抵抗力を持つ人の調査は行っていたらしい。

まあ当然といえば当然か。でなきゃこんな都市、『魔法は実在し

てますよー』ってカミングアウトするためにあるようなものだ。

で、その抵抗力を持っている人には個別に認識疎外の魔法をかけるのだそうだ。

胸糞悪い。

「そういうわけで魔法バレは心配しなくていいよ。僕も個人的に認識疎外かけるしね」

まあ半分以上無駄なんですけどね。

「フフ、なかなか面白いことになっているようだね」

慌てる僕たちとは対称的に、悠然と歩いて来る四天王の残り三人、龍宮さん、長瀬さん、古さん。

「一千万なら私も出てみるか。なあ楓？」

「そつでござるな。ツミグチ殿、でござったか？そちらも出るようござるし、ここは拙者も……」

「ムム？罪口さんも出るアルか？なら私も出るアル！この間のようにはいかないアルよー！」

勝手にやる気を出さないでくれ。君達には刹那と当たって欲しいね。

「老師たちも出るんですか!？」

「あいあい」

「遊びの大会で一千万ならボロい儲けだ」

「こんな大会滅多にないアルよ」

ネギが慌てて小太郎がやる気を出し、月詠はいつも通り。

「やあ、楽しそうだね」

そんな風にフラリと現れたのは、最強の広域指導員高畑先生だった。

「ネギ君達が出るなら僕も出てみようかな。ネギ君が小さい頃、あの程度力がついたら腕試ししようって約束してたしね」

「……うん！胸を借りるつもりでいくよ、タカミチ！」

「お、元気がいいね？」

「高畑先生が出るなら私もです！..!」

「あ、アスナさん！？あの、ちゃんと落ち着いてから喋った方が……」

「ウフフフフフ、斬りごたえがありそうな方たちやなー」

「ねーちゃん、刃物はあかんで言うつつたやる？」

「そうですよ月詠さん！また罪口さんにお説教されますよ？」

「お説教はいやですー。人斬れへんのもいやですー」

「アレも嫌コレも嫌なんて都合がよすぎです。常に何かを我慢するのが社会つてものですよ？」

「ん〜・・・じゃあ、我慢してお説教聞いたら、人斬つてもええの？」

「ダメですー!!」

なんか超が、ナギがどうのって言ってたけど、誰も聞いてなかった。

予選は平たく言えば、バトルロワイヤル。

四角い舞台の上でやたらめったに暴れ回って、残った2名で本選出場、だそうだ。

「おいおい罪口さんじゃねえかよ」

「ダイジヨブかい？こんなんで指痛めたらつまんねーぜ？」

「し心配どーも」

何人か顧客が混ざっている。僕は人より小柄だと言って言えない

こともない体型だし、何かの間違いだと思われているらしい。

お前ら知らないだろ。この大会、本選メンバーの半分が女子中学生だぜ？

「さぎくーん。頑張つてなー」

「頑張るー」

実は密かに練習していた技がついこの間完成したばかりなんだ。今日はその練習でもさせてもらおう。

『ではA組人数揃いました』

刮目せよ！これぞ……

『試合、開始い！！』

「そよ風爆風拳！！！」

周囲は風速100キロだが対象者周辺はあくまでそよ風ソフトタッチ！の安全使用！まさに男の子の夢を叶える風系究極奥義！！

惜しむらくは、ここにはむさい男しか居ない、ということか。

久しぶりに使う気がする筋力と敏捷にチート。

僕の拳圧に翻弄され、一般人レベルの腕自慢達が空を飛び、宙を舞い、そして場外に落ちていく。

「フハハ！見る、人がゴミのようだ！！」

これはヤバい。かなり楽しい！

「フハハハハハハ！！消し飛べー！！！！」

ギャー！！！！

何事だこれー！？

チクシヨーー！！

絶叫を上げながらリングアウトしていく選手達。

あれ？この組僕しか残らないんじゃないかね？なんて考えてしまうほどに、呆気ない。

「ハツハツハ。技術屋に負けてるようじゃまだまだ　　っ！？」

パン

「……驚いたね。まさか不意打ちで弾かれるなんて」

今のは、高畑先生の無音拳か……

「人の話は最後まで聞きましょうって、小学校で教わりませんでしたか？」

「君の話には聞き入らないように努力してね」

「これは手厳しい」

「君と話していると鏡に問い掛けられているような気分になるよ。別に嫌いなわけじゃないけどね？」

「鏡に？どういう意味でしょうか」

「そうだね。例えるなら　　！？」

シャリン

「……人の話は最後まで聞きましようって、小学校で教わらなかったかい？」

「教わりませんでした」

しかし、まさか至近で零閃をかわされるとは、ね。やっぱり木刀じゃ零閃は無理か。

「罪口君も認識疎外かけてくれてるんだっけ？」

「ええ、かけてますよ」

「なら遠慮はいらないね？」

「……ええ、どうぞ」

「左腕に魔力。右腕に気」

おや？

「合成！」

ドフっ！！！！

高畑先生が両手を合わせた瞬間、凄まじい風圧と閃光が炸裂した。

って感卦法かよ。本気だな高畑先生。

「前はいいようにやられちゃったからね。さすがにあのままっついでうのは悔しいから、本気を出させてもらっつよ」

「随分大人気ないですね？」

「ははは。僕も向上心はあるからね、強い人と戦いたい。それが本心」

そして、『紅き翼』に近付きたい、ですか？

「嫌いじゃありませんよ。そっついの」

「でも好きでもないんだろっつ？」

「この三年で随分僕のがわかってきたじゃありませんか」

「まあね」

「いいでしょう。先生が本気を出すと言っつなら、僕はせいぜい手加減して、いい勝負を演じましょっつ」

「それはありがたい、ね！」

気合いと同時、今度は豪殺居合い拳。

これは、迂闊に触れると木刀が折れるかな？

サイドステップでかわし、殺到する居合い拳を木刀で捌く。その間に接近してきた高畑先生を、豪殺を撃たれる前に切り付ける！

「なんの」

しかし高畑先生も読んでいたのか、瞬動で僕の右横に付けてきた。

右利きの剣士の最大の死角は、実は右側だ。

左側なら抜き様に切れるし、振り抜いた形からでも突きに移れる。

しかし利き手側は勝手が違う。

抜刀から到達までに一瞬の開きがあるし、外してしまえば隙が大きすぎる。利き手は筋肉が付きやすく、つまり強張りやすくもあるのだ。

そこを付くなんて、本当に大人気ない。

高畑先生が豪殺を構えるのを見て取り、僕は左手で棍を突き出した。狙うは顔面。顔面への突きは、まずもって見づらいからね。

「・・・うわっ!？」

慌ててかわす高畑先生。体勢が崩れましたよ？

「劣化零閃・編隊百八機」

シャーーーーーー……

もはや連続音としてしか聞こえない鞘走りの（今回は木刀と手の平の摩擦）音。それを、高畑先生は大袈裟にバックステップして避けた。否、逃げた。

「そんなに怯えないでくださいよ。これに刃は付いてないんですから」

「君なら剣気で木の葉を切れそうだけど」

「今度試してみます」

斬空閃×零閃……

「零閃特攻・神風八百八機」

まあつまり飛ぶ零閃。斬空閃の乱れ撃ちってところだね。高速の。鈍使えば光速くらいは出ると思う。

「千条千鋊無音拳!!!」

ドパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパ!!!

!!!

派手にぶつかり合う拳圧と剣圧。

僕の方が数が少ないけど、そこは点と線の違い。高畑先生の方が忙しい。

シュツ！と、

高畑先生が僕の背後に来たのが気配でわかる。互いの攻撃はいまだ激突を続けているが、どうせどっちも放った後だ。

「退歩靠撃！」

一歩退きながらの背撃。以前僕がフェイトから喰らった技だね。

背中に確かな感触が確認できる。ジャストミートツ！

左足を大きく退きながら反転し、裏拳。しかしこれはかわされた。

それでいい。もともとよけさせる為の攻撃だ。

向こうはこっちの反応を見ながら裏拳を避ける。こちらは向こうの位置を確認する。

同じ回転で足元に鋭く回し蹴り。かわされる。その足を軸に体を沈め、逆の足で下段足狩り込み。

「くっ……！」

今度こそ当たった！

蹴り足は振り抜かず、相手の足と交差させたまま立ち上がり、相

手の腰を手で勢いよく抱き寄せ、自身の脇腹に叩き付ける！

「弓步臍山靠！」

「ぐふうっ！！」

内功が甘ければこれ一撃で内臓破裂もありえる。そうでなくても怯ませるには十分だ。

よろめく高畑先生から半歩間合いを外し、一度半身に構え直す。

三才歩（前足をどけてから後ろ足で大きく踏み込む）からの崩拳。後ろ足で斧刃脚（相手の膝を踏み付けるように蹴る）。その足で震脚して頂心肘（肘打ち）。側面に踏み込んで、貼山靠（背中での体当たり。鉄山靠）。

「スーバクシ四拍子！」

今度こそ、たたらを踏む間もなく吹き飛ばす高畑先生。二回三回と床を転がり、しかし欄干を掴んで場外を免れた。

「しづといですね」

「……往生際が悪いのが、僕の長所なんだ」

そう答える高畑先生の顔は、しかし微かに歪んでいる。

内心を表に出さないのは立派だけど、今が聞いてないはずはない。相当なダメージだろう。

「ここはもともと先生には不利ですよ。先生の技はもつと広い場所で、巻き添えの出ない環境でこそ真価を發揮出来るものでしょう？」  
多対一。

豪殺居合い拳は、どう見てもそれにこそ適している。

常に自信に不利な状況を想定しての、数の力に対する為の技であると思う。

物量に対するために、上限を破って上げた火力。それが高畑先生の、否。ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグの技なんじゃないだろうか？

「……そうだね。確かにここでは、僕は全力で振り抜けない」

「……」

「でも、それを言い訳にはしないよ。僕も、男だからね」

「……随分格好付けますね」

「後達ネギくんの前だからね。不格好でも、付けられる内は付けておかないと」

そう言って小さく笑う高畑先生。普段の彼なら後頭部でも掻きながら笑うんだらうけど、流石に今はそんな愚は犯さない。

「ところで罪口君。君はもう僕の攻撃を避けられそうもないね」

「……ああ……、そうみたいです。まさか、狙ってたんですか？」

「まさか。でもちよūdいし、ネギ君には、こūいう戦い方もある、っていうことを覚えて貰おう」

今、僕の後ろには、僕の後ろの観客席には、木乃香たちがいる。

僕が避ければ、あの大砲のような攻撃が（本気ではないとはいえ）木乃香たちに及ぶ。

「大人の小汚さを見せ付けるわけですか？」

「反面教師として、ね」

「敵が味方を入質にとるなんて、王道ですね。まるで少年漫画みたいだ」

「ゴツい弟と霊界探偵の決勝戦を思い出すね」

「あれいいですよ。読み返したいんですけど、今もう売ってないんですよ」

「僕が全巻持つてるから、学祭が終わったらおいでよ」

「いいんですか？」

「いいとも」

楽しみが増えたね。

「では決着といきましょう」

「うん。僕もなるべく強く撃つよ」

ズゴゴゴゴゴゴゴ・・・・

高畑先生の拳に感卦の気が集中していく。これは、もし避けたら大惨事だね。

生憎僕には決め手になるような必殺技はない。チートにせよ能力にせよ、通常技が必殺技みたいなものだしね。

手加減するって言っちゃったし、暗器術で仕込んでるあれやこれやで凌ぐしかなさそうだ。

「……………」

「……………」

沈黙したまま互いの様子をうかがう。何か気を逸らさないか。何かで気を逸らすことはできないか。探し合う。

高畑先生は重心を調整し、僕は暗器を選出する。彼我の準備が整ったとき、

『ちよつとー！ー！ー！聞こえないの！？試合、しゅー！ー！りよー！ー！』

朝倉さんの声が響き渡った。

『なあに予選で決勝クラスの戦いしてくれちゃってんですか！？もうその組アンタらしか残ってないでしょうが！ー！予選は、2人勝ち抜け！ー！ちゃんとルール説明聞けやー！ー！』

.....

正直、忘れてた。

## 第二十五話（後書き）

とかいいつつ今回女の子戦ってねえ!?

鷺志

「僕とオッサンの殴り合いって……、誰得だよ」

僕は割と満足した。

鷺志

「読み手の事を考えろ!」

梓外 山も落ちも意味も無い日常風景（前書き）

女の子を書いてみました。

短いですが、箸休めにどうぞ

梓外 山も落ちも意味も無い日常風景

天気は快晴。気温も湿度も実に快適。そんな日って、ついつい寝過ごしたりしちゃいませんか？

どうやらこの家の子は、睡魔と陽気の最強タッグには勝てなかったようですな。

「nsgst---!!」

ドタドタと階段を駆け降り、勢いよくリビングに降りてきた少女は、そこで朝食（目玉焼き、ベーコン、トースト、コーヒー、ジャガ芋とワカメのみそ汁）を食べている女性に声を上げた。

「nnndおkstk rni n!？」

「きづかすいふきしせむせつ。うくれぐきけぬくとつひ」

「1 . 1 . 3 . 1 . 2 . 1 . 9 . 1 . 1 . 3 . 3 . 3 . 1 . 1 .  
2 . 7 . 5 . 1 . 3 . 3 . 3 . 2 . 5 . 3 . 2 . 3 . 3 . 2 . 1 .  
5 . 2 . 4 . 1 . 6 . 4 . 9 . . 1 . 9 . 4 . 5 . 1 . 1 . 2 . 5 .  
5 ?」

「w t s h t b t r h m n i n ! !」

こんなやり取りもこの家ではいつものこと。ちよつと複雑な家庭環境に目をつむれば、なんのことはない『家族』です。

「zzknnnnkkrrrrjjjjkkkk!」

「ころむねけあとさなはー」

「ひーい」

「1 0 . 1 . 4 . 1 . 3 . 2 . 7 . 5 . 7 . 5 . 1 . 3 . 1 . 2 .  
2 . 3 . 5 . 4」

「くかねね、めれいくとなけな」

「1 . 5 . 6 . 5 . 1 . 4 . 4 . 4 . 4 . 1 . 1 . 9 . 1 . 5 . 4」

「ゆお!そぬきねふえにええぬすえ!」

「6 . 1 . 1 . 2」

## 第二十六話（前書き）

なんだか盛り上がりどころの無い1話です

前話の最後に入れても良かったかも・・・

## 第二十六話

side・ネギ

『皆さーん！もう試合始めて下さーい！！』

言われてからハッと気付く。僕を含む選手の全員が、罪口さんとタカミチの試合に見入っていた。

開始と同時に竜巻があがったのだから、気を取られるなどというのが無理だ。

ともあれ僕も試合中。気を取り直して自分の立つステージ上の人達に気を向けると、

ギ、ギブアップ……

控えめに手を上げる選手がいた。

俺も！

俺も、やめとく

優勝出来なきゃ治療費で破産しちゃうよ

香典なら貰えそうだけどな

最初の一人を皮切りに、続々とギブアップを申告する選手達。

あ、あれ？九割以上の人がいなくなっちゃった……

ステージに残ったのは僕を含めてほんの数人。っていうか老師も同じステージだった。

「え、え……と？」

「ああ、えと……始めようか……？」

「あ、はい……よろしく願います」

……おかしいな。僕はもつと、こっ……アツいものを期待してただけど……天下一武道会みたいな。

『さ、さあー皆さん気を取り直してえー！！優勝賞金一千万ですよー！麻帆良の最強決定戦ですよー！！』

朝倉さんの声がどこか虚しく響いた。正直、かなりグダグダだ。

目の前で繰り広げられた人外バトルを思えば当然かもしれないけど、観客のモチベーションも、多分もう上がらないだろう。

「いくよ、ネギ君」

「はい。豪徳寺さん」

残ったのはほんの数人。僕はそのうちの一人、豪徳寺薫さんと対峙していた。リーゼントが特徴的な老け……大人っぽい方。

朝の手合わせで何度もお世話になっている。最初はやられっぱなしだったけど最近はず勝ち越してきた、いわば最初の壁だった人だ。

「フツ。俺を今までの俺と思わないことだなネギ君。朝の手合わせ、あの混戦じゃあ使えない技だってあるんだぜ？」

不敵に笑い、オーソドックスな中段の構えをとる豪徳寺さん。僕との間合いは約7メートル。普通なら詰めなきゃ何もできない距離だ。

「受けてみる！喧嘩殺法、未羅苦流究極闘技！！」

豪徳寺さんの右手に気が集中していくのがわかる。しまった！今の長い口上の間に突っ込んでいればよかった！

「超必殺・漢玉！！！！」

振り抜かれた拳から放たれる拳大の気弾。あれは、遠当て！？

迫る気弾を弾き、僕は体を低く落して構えを変える。豪徳寺さんはもう一度さつきと同じ構えをとっていた。

「初見でかわすとは、やるじゃねーか！」

左足を半歩出し、つま先を外側に向ける。左手を顔の右側に、右手は左の腰に。

「だが今のは挨拶がわりだ！今度こそ本気で行くぜ！！」

右足で跳び、左足で加速。思いっきり跳びながら右手を突き出す。

「超必殺・漢だぶわああー！！！！？」

絶招歩法・せんしゅぽ箭疾歩。

全身を使った体当たりのような突きを顔に食らった豪徳寺さんは、ビリヤードのボールのように転がって場外に落ちていった。

「なかなかアルねネギ坊主。次はこの人アル」

いつの間にか他の選手を軒並み場外に吹き飛ばしていた老師が、髪を逆立てた胴着の男子生徒を示した。

「確か、中村さん？」

「よおネギ君。あと一人脱落すれば本戦に出れるんでね、悪いけど君を相手にするよ」

残っているのは僕、老師、中村さん。これなら僕でも中村さんに向かうだろう。

中村さんは腰を深く落とし、両掌を下段に構えた。

「いくぜ！烈空掌！！」

下段からの掬い上げるような掌底。

普通なら届かないそれも、やはり気弾を飛ばしてきた。しかも豪徳寺さんより練りが早い。

「避けたか。だがそれだけじゃ終わらないぜ！食らえ、烈空双掌！」

今度は両手から放たれる気弾。しかしその分威力は大分落ちているように見える。

「まだまだあ！烈空・・・」

ズシン・・・！

瞬動で懐に入って頂心肘。遠当ては溜めの間動けないのが難点だと思う。実践するなら、せめて今の半分で練れるようにしないと。

それに、遠当てに固執し過ぎて接近戦の功夫が足りない。

「ん、まあ及第点アル。頂肘は肘の真ん中より少し手首側、固い部分を当てるアル」

「多謝、老師」

僕と老師の本戦出場が決まった。

side・小太郎

「なんや、やる気なくすで……」

「もちろん、あないな強さのにーちゃんとは戦ってみたいけど、今のテンション下がったらしゃーないわ。」

「なんや、ほとんどギブアップしてもーたし……」

「なあにーちゃん。俺の相手してくれへん？」

「ハイ。ヨロシクお願いシマス」

「なんや変な話し方やなー。まあ、楽しめたらええけど、なー！」

「言い終わると同時、俺はガタイのいいそののにーちゃんに五人で同時に飛び掛かった。」

「五つ身分身や！見るのは初めてやる？」

「分身が上中下段から襲い掛かり、にーちゃんが攻撃を受け止める。その間に瞬動で背後に移動し、」

「吹き飛ばやーー！！」

「渾身の掌打を叩き込んだ。」

ズゴン

「予想よりよっぽど重い手応えを残して、そののにーちゃんはステージの端っこまで吹っ飛んだ。」

すぐさま体制を直して俺に両手を向けてくる。でもそんなときにはもう、俺はにーちゃんの懐や。

「我流犬神流！狗音爆碎拳！！！」

狗神を腕に集中させて打つパンチや。これを喰らって、今度こそにーちゃんは場外に吹き飛んだ。

渾身の一撃やったんやけど、にーちゃんはザブザブ泳いで観客席に跳び上がって帰っていった。

うーん……、威力落ちたかな？

なんか随分重くて硬いにーちゃんやったな。中武研かもしれん。イーゴンフとかいうのやっとなのかもな。

同じステージでは月詠のねーちゃんも残ってた。人は、斬つたらん。

Aブロック

第一試合

佐倉愛衣

対

犬上小太郎

第二試合

大豪院ポチ

対

クウネル・サンダース

第三試合

月詠

対

高音・D・グッドマン

第四試合

ネギ・スプリングフィールド

対

タカミチ・T・高畑

Bブロック

第一試合

罪口鷺志

対

神楽坂明日菜

第二試合

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

対

山下慶一

第三試合

古フエイ

対

桜咲刹那

第四試合

長瀬楓

対

龍宮真名

第二十六話（後書き）

女の子出たぞ

鷺志

「どや顔で言うな。ってかどこに出た？」

ほら、古さんとか月詠とか

鷺志

「古さんはネギにアドバイスしただけだし、月詠にいたっては話してすらいないじゃん」

でも出たじゃん

鷺志

「厚顔無知とはこのことか……」

## 第二十七話（前書き）

いよいよ格闘大会本戦です。基本は今まで通り鷺志視点となります。

## 第二十七話

発表された組み合わせ表を見る僕たち。ところどころ原作と同じ組み合わせが見えるものの、やはり大分様変わりしている。

僕の相手は神楽坂、か。

「あ、あの・・・罪口さん」

「うん？」

控えめに声をかけてきたのはここ最近いつそう拳士らしくなったネギだった。

ネギは薄く涙を貼った目で僕を見上げている。何かを訴えている、そんな目だ。

「手加減してあげてくださいね・・・？」

すっごく心配そうな目で言われた。

「アスナ、今日は美味しいもの食べに行こ？」

「私もご一緒します。今日は騒ぎましょう」

「ああ、神楽坂。その、なんだ・・・・・・高畑先生！今日だけでいい、神楽坂を遊びに連れて行ってやってくれ」

「うん。僕で協力できるなら、喜んで」

「ダン。後始末はしっかりしろよ？」

「さぎさん。マスターの別荘でしたら安直に適しています」

「ねーちゃん・・・次も、元気だな？」

「あ、あれ？皆さんどうしたんですか？」

「あ、さよさん」

「あれ、見たって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・神楽坂さん。何か、欲しいものありませんか？」

・・・・・・・・

皆が僕をどう思っているか、よく分かるうというものだ。

「おいおい皆。おいおいおい皆。僕はそんなに信用ないかい？僕はパンツをはいた女の子には取り分け優しいことで有名な罪口くんだぜ？パンツをはいた女の子のもとに現れ、パンツをはいた女の子を助けるパンツの味方さ。僕にとって殺しは、生き方でも生き甲斐でも生き様でもなくただの仕事だ。どこの殺人鬼じゃないんだぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なぜだ？ 僕の説得力に溢れる口上を聞いて、なぜ皆はあんなにもジト目で返せるんだ？

「なあなあさぎくん」

「なんだい木乃香」

「女の子の好きな体の部位は？」

「まぶた」

「女の子のドキツとする動作は？」

「まばたき」

「女の子の好きなファッションは？」

「パンツはいてる」

「こんなのどこを信用しろってのよ……」

神楽坂が、いやこの場の半数の人間がげんなりした様子で僕を見ている。え？なんか変なこと言った？

「アスナさん、ギブアップした方が……」

ネギの親切心からの言葉に、しかし神楽坂は声を荒げた。

「うつさい！ギブアップなんてしないし負けもしないわよ！こんな変態に負けるもんですか！！」

そういつて肩を怒らせてズンズン歩いて行ってしまった。慌てて

ネギが背中を追うが、まったく目もくれずに足も止めない。

「なあんか、思うところがありそうだね……」

僕の眩きは、皆からの冷たい視線のもと無視された。

本戦当日。選手控室。

「さぎさん、頑張ってください！」

昨日は最後まで来れなかったさよも応援に来てくれている。今日はお化け屋敷のシフトに入っていないらしい。

「罪口さんが予選を通るのはわかりきってましたから！」

「信頼が嬉しいね」

昨日。神楽坂に致命傷を与えないように、木乃香と指切りをした。

『仲間』との約束を破らないことくらいは信用されているので、今日は皆安心顔だ。

「おはようございます。罪口さん」

「罪口のにーちゃん、おはよ」

ネギと小太郎もやってきた。今日の一戦目は小太郎と愛衣ちゃんだったはずだ。

「メルメル」

『無題：愛衣ちゃんへ。小太郎との試合だけど、開始と同時に、取り合えずホウキの柄を小太郎に向けてみるといいよ。PS・パンツ何色？』

送一信。

なんか僕、随分変態度上がってないかな？

「ネギ。決勝、は無理やから、準決勝で勝負や！」

「タカミチに勝てたら、ね」

「なんや弱気やな。大丈夫やて。ネギの腕試してみたいなもんやろ？」

「でも昨日の予選見てたら、さ……………」

「ああ……………」

ん？なんか視線が集まってるね。

「ま、まあなんや、俺はお前と当たれんの楽しみにしてるで？」

「うん。僕もだよ」

「俺が勝って、ライダーは平成やって教え込んだる！」

「何言ってるのさ。ライダーは昭和だよ！V3のよさがわからないの！？」

その後はライダー議論に終始した。うんうん。子供はこうでなきや、ね。ちなみに僕は昭和ライダー派。V3をチョイスしたネギには共感もてる。

『さぎくんメールやえ〜・・・さぎくんメールやえ〜』

おっとメールだ。おや愛衣ちゃんだ。返信早いね、今時の娘って感じ。

『アドバイス：ありがとうございます！アーティファクトを使うといい、ってことですよね？柄を相手にですね。わかりました！PS・心配してくださるんですね。ありがとうございます。でもちゃんとハーフパンツ履くから見えませんかよ』

うん。ちょっと反省した。

現れた高畑先生と神楽坂達が原作チックな会話をしているなか、僕は自責と自省にかられていた。

第一試合。小太郎VS愛衣ちゃん。

朝倉さんのマイクパフォーマンスに応じて舞台へと上がる彼女達

を、観客は不満混じりの声で迎えた。

なんだあれ、どっちもガキじゃねえか

どうなってんだ主催者ー

はん、そのガキに度肝抜かされるんだぜお前らは。

「あ！あの人は!？」

「この前の人ですなー」

僕の横でネギと月詠（ちなみに月詠は糸で軽く拘束してある）がなにやら反応を示した。学祭前の悶着で会ったのだろう。

「おはようございます。ネギ先生、鷺志さん」

「おはよう、高音さん」

パサリとロープをおろしたのは選手としても出ている高音・D・グッドマン。僕の狩友の一人だ。

「鷺志さんも出ると聞きましたので。簡単にはいえ立ち回りを指南して頂いたので、その成果をお見せしたいと思っております」

「そんなこと気にしなくていいのに。日常に現れれば、それは修練の証だよ」

愛衣ちゃんも結構頑張ってたからね。前衛職と後衛職の違いがあ

るから、勝てないにしても原作ほどアツサリ負けることはないだろう。

『第一試合 F.i.g.h.t.!!』

お、始まった。

「『アデアット』」

短い文言と共に愛衣ちゃんの手元に現れるホウキ。なんて言うのが忘れたけど、確か武装解除のアーティファクトだったはずだ。

小太郎はあまり性格変化がないから、「女は殴れない」とか思い違いも甚だしいエセフェミニズムを発揮しているのだろう。

戦闘で向かい合う以上、そこにY染色体の有無を持ち込むことがどれほど不粹でどれだけ無礼か、あの小僧はわかってない。

意地でも女は殴らない、って主義があるわけでもないみたいだしね。

トントンとステップを踏んでいた小太郎が一瞬足を止めた。おそらく瞬動の予備動作だろう。

トンッ！

ゴンッ!?

「つつはあ!?!」

僕の助言通り、ホウキの柄を突き出したところに瞬動。構図としては小太郎が自分で武器に突っ込んだ形だ。

『おおっと小太郎選手!信じられないスピードで間合いを詰め、同じく信じられスピードで反応した愛衣選手に迎撃されたー!!いきなり観客置いてきぼりだコイツラー!!』

朝倉さんの半ば投げやりな声が響く。まあこのレベルでも十分常識の範疇外だし、観客は訳ワカメだろうからね。楽しませるには話術が要るわけだ。

予想外の展開と手応えに一瞬動きが止まった愛衣ちゃんだが、脳天に不意打ちを食らった小太郎より早く状況に帰ってきた。

おお、無詠唱の魔法の射手。

三本の炎の矢が小太郎に殺到した。服を焦がし、髪を焼き、皮膚を焙る。<sup>あぶ</sup>

「つぐうう・・・!」

一瞬怯んだものの、やはりそこは裏で鍛えた胆力か。小太郎は瑣末なダメージは気にもとめず、左手を突き出した。

しかし攻撃した側とされた側。精神的な優位は未だ愛衣ちゃんにある。

愛衣ちゃんは小太郎の手と肩に触れたまま反三才歩（片足を90度回して踏み込み、素早く相手の側面に回り込む）で小太郎の左側に回り込んだ。

小太郎の攻撃と愛衣ちゃんの体重、僅かな筋力で小太郎はグルリと回り背中から床に叩き付けられた。

「かはあつ!？」

小太郎が大きく息を吐き出した。背中全体から落とされたからね。息が止まっているだろう。

『これは、まさに大番狂わせだー!!現れた子供二人の激しい攻防!そしてそれを制した女子中学生!!小太郎選手、ダウンとみなしてカウントを取ります!』

会場は思わぬ展開に大盛り上がりだ。しかしよく見れば盛り上がっているのは一般人の客か、格闘に造詣そうけいの薄い魔法関係者だけ。

僕と木乃香たち、それとネギは、この後を半ば予想していた。

「……………そろそろ、だろうね」

僕の咳きが聞こえたかのようなタイミングで、

ギユバツ

小太郎が動いた。

『8！9・・・つてあれえ！？いつの間にか、小太郎選手が愛衣選手を押さえ込んでいるー！！』

《今何があったのでしょうか。解説の豪徳寺さん》

いつの間にかアナウンス役についている僕の茶々丸が豪徳寺さんに解説を求めていた。ちくしょう、僕だって出来るのに！

《特に変わったことはしていませんね。首跳ね起きで起き上がった、あとは佐倉選手の手を捻り上げながら擦り伏せただけです。ただし、信じ難いスピードで、ですが》

僕の茶々丸がわざわざ話を振ってあげたのに、見たまんまなことしか言えない豪徳寺（敬称略）。それだけじゃないだろう。未だ警戒を解いてなかった愛衣ちゃんを警戒して、カウントがギリギリになるまで、愛衣ちゃんの気が緩むまで待った小太郎の心算を褒めるべきだろう。

少し前まで、あんなに猪だったのに。ネギに影響されたかな？

やがて腕を取られた愛衣ちゃんがギブアップを申告し、第一試合は犬上小太郎の勝利で落ち着いた。

第二十七話（後書き）

どうだ出たぜ女の子

鷺志

「お前つてや」

うん？

鷺志

「女の子の女の子らしい動作って書くの苦手だろ」

う．．．

鷺志

「確かに女の子出たけど、愛衣ちゃんなんか『アデアット』しか言  
つてねーぞ」

ぐふっ．．．

し、精進します．．．

第二十八話（前書き）

ちょっと短めです。

どじど

## 第二十八話

「いやー負けた負けた。強いなねーちゃん！」

試合を終えて僕たちのもとに戻って来ると、小太郎はカラツと笑ってそう言った。

「え、え？負けたのは私では……」

愛衣ちゃんと高音さん、神楽坂は戸惑った様子だが、ネギと月詠、僕と木乃香たちは小太郎の言いたいことを理解していた。

今の勝負の勝敗がわかるなら、小太郎は精神的にも伸びるだろう。

「あかんで。ねーちゃんのがホウキやなくて刃物やったら俺の頭完熟トマトかザクロになっとった。俺が怯んだときも、魔法やなくて直接攻撃やったら避けられへんかったし、その間に強い攻撃呪文詠唱されとったら終いや」

小太郎は裏の人間だ。

実戦を知っている人間だ。

ならば試合も死合ためしあひ大きな違いはない。相手に殺意があつた場合を想定して考えるものだ。

そして、愛衣ちゃんに殺意があれば、たとえホウキでも頭蓋骨陥没くらいはあつたかもしれない。

試合に勝って、勝負に負けたのだ。

「で、ですけど、私は鷺志さんのアドバイス通りにしただけで・・・」

「それも関係あれへん。人脈利用すんのも兵法や」

快活に笑う小太郎だが、今のやり取りに不審を感じないようだと進歩はないかもよ？

「言ってることはもつともだけどね小太郎。今の愛衣ちゃんの言葉は、僕に行動を『読まれて』いたってことだよ？」

「うぐ・・・」

「これは小太郎の普段を少しでも調べていれば簡単に予想できる」とだ。どうせ『弱そうな女の子は殴れない。なら殴らずに勝とう。じゃあ風圧だ』みたいな考えだったんだろう？

「うぐぐ・・・」

「それは驕りだよ」

「どうしようもない慢心だ」

「その慢心が、今回の『死』を招いた」

「なぜかわかるかい？」

「そう。君のエセフェミニズムが問題なんだ」

「相手が女の子だから殴れない？」

「相手が女の子だから戦えない？」

「笑わせないでよ」

「君は長瀬さんや古さん、龍宮さんや刹那とは戦ってみたい」  
「と思ってるんだろっ?」  
「それはいけない」  
「君の『殴れない』と『戦ってみたい』の違いは、戦闘を見たこと  
が」  
「あるか」  
「ないか」  
「の違いでしかない」  
「それは頂けない」  
「見てからじゃ遅いんだよ」  
「刹那の本気を見た後じゃ、小太郎は微生物のご飯になってる」  
「いや、きつと見ることはかなわないだろう」  
「戦う戦わないの線引きはもっとハッキリつけるべきだ」  
「弱そう」  
「強そう」  
「そんな感覚じゃなくてさ」  
「例えば、このエヴァは女子供を殺さない」  
「子供の範囲が些か不明瞭ではあるけど、女か男かはすぐにわかる」  
「漫画ではよくわからない人もいるけどね?」  
「だから小太郎も、戦うか戦わないかの選定はもっとハッキリする  
べきだ」  
「そして、戦わないにしても警戒は怠らずにするべきだ」  
「これからも、生きて練習を続けたければね」

いつの間にか第二試合が終わっていた。勝者は言わずもがな、クウ  
ネル。

「一瞬でしたね」

「俺説教されてて見れへんかった……」

「クウネル・ダスだっけ？かなり強いみたいだね」

「いえ、そんな生活習慣みたいな名前じゃなかったと思いますけど……」

食う寝る・出す、ね。念のため。

「おい。クウネルっての、こっち見てねーか？」

千雨の言う通り、クウネルはハッキリとこっちを見ている。ネギを見ているのだろう。確かそのためにわざわざ格闘大会に出ているはずだ。

順当にいけば準決勝でネギと当たるけど、高畑先生との試合がどうなるかだよな。

「そついえばさネギ。少し前は各種中国武術の他に、ボクシングとかムエタイとか空手とか柔術とか合気道とかカラリパヤトウとかプンチャックシラットとかサバットとか、某一人多国籍軍並に色々やってたみたいだけど、今もあれだけやってるの？」

「いえ流石にそれは……。あれは自分に何が合うのか試してたんです。今はもうコレと決めてます」

「へえ。何？」

「旋風脚とか穿弓脚とか三日月蹴りとか、足技はあちこちから貰ってますけど、本格的にやってるのは『八極拳』と『劈掛掌』の二つです」

おや。

原作では八極拳と八卦掌、剛と柔の修学だったと思うけど、ちょっと変わったね。より攻撃的だ。

劈掛掌。劈掛拳とも言うね。

今さら説明なんかいらなかな？腰を切って上体を振り、それに載せて腕を振り抜く掌法だ。

曲線的な足運びで長打を打つ劈掛掌。

直線的な足運びで短打を打つ八極拳。

この二つはとても相性がいいとされ、『劈掛と八極、併習すれば鬼神も戦く』と言われる。両方を学べば隙はなく、鬼神でさえも恐れ戦くという意味だ。

彼の『凶拳』李書文も劈掛掌を学んだらしい。

「ですが、まだ始めたばかりですから、とても実践はできません・・・」

「ああそうか、そうだよな」

そういえばこのネギは別荘使ってないんだっけ。

劈掛掌は、実践までとても時間のかかる武術の一つだ。

まずは正しい形を学び、正しい素振りでの功夫を積む。これが基本功。基本功だけで3ヶ月をかける流派だってあるほど、これは大切なのだ。

基本功の功夫が足りれば、次は素振りを当てる修練。

流派にもよるけど、最初は束ねた濁いた布。次は束ねた濡れた布。砂を詰めた布袋。泥を詰めた麻袋。砂利を詰めた麻袋。

一つ一つ時間をかけて功夫を積み、徐々に段階を上げていく。これによって強力な硬功夫いこんぷを身につけるのだ。

硬功夫が未熟なら、自身の攻撃で自身の腕が折れる。爪が剥がれる。皮が破け、肉が擦れる。

「詳しいですね、罪口さん」

「生みの親の方針だね」

「？ お父さんに武術の嗜みが？」

「いや、天の意思的な意味で」

「ああ……」

僕とネギでそろって上を見上げる。何か皮肉でも言ってるように口を開いたところで、

『第三試合、Fight!!』

高音さんの試合が始まった。

「先日はお世話になりましたね。ですが、今日はこの間のようにはいきません!」

高音さんが高らかに宣言したその時には、月詠は既に高音さんの背後にいた。

シャキ……ン

木刀に見えたそれは、どうやら仕込み刀であつたらしい。一瞬だけその白刃を晒した月詠は、もうその刃を納めていた。

バラツ

そして、大方の予想通り高音さんの服が細切れになった。

「は……え……!？」

たぶん

そんな効果音が聞こえそうだ。でき得ることならそれを事細か、微に入り細を穿って、僕の語彙の限りを尽くして描写したいところ

だが……。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

いつの間にか僕の前後左右を固めた木乃香たちが、それをさせてくれないだろう。

「目、閉じような？さぎくん」

「……はい」

「その指、動かしたら折ります」

「……はい」

「耳も塞いどけ」

「……はい」

「切り落としましょう」

「どの部位をですか!？」

みんな、目どころかそもそも顔が笑ってない。

最近は何月も大人しかった。だから、このままほのぼの終わるの  
だろう。僕はそう勝手に思っていた……

「ああ……やーらかそうな、オニク……」

ゾクリ……

刹那や龍宮さん、武に秀でた人の体が強張る。明確に対象を縛ら  
ず、ただ振り撒かれた殺意よろこびに身を竦める。

シュカツ!!

一度納めた白刃を、凶刃を化して振るう月詠。

刹那に負けずとも劣らぬ速度で高音さんへと襲い掛かる。両手の  
刃を閃かせ、靴に仕込んだ刃を煌めかせ、押さえ込んでいた殺意うを  
爆発させた。

月詠は既に高音さんに肉薄している。二人の距離は、まるで睦まじい恋人同士のそれだ。

これは僕も間に合わない。

キチンと見ていれば間にあっただろうが、今の僕は木乃香たちに四方を物理的に包囲され、かつ気も緩んでいた。今からでは、それこそ雷精靈化でもしなければ間に合わないだろうし、そんなことしてる間に高音さんの肌には殺意が食い込む。

僕が………

僕が曲絃師じゃなければ、高音さんは死んでいた。

「あゝん、オニーサンのいけず〜」

四肢を空中に縫い付けたまま、月詠が間の抜けた声で鳴いた。

## 第二十八話（後書き）

鷺志

「なあ」

・・・はい

鷺志

「お前高音さんの見せ場なんだと思ってんの？」

・・・すいません

鷺志

「結局描写も少ないしさ」

・・・返す言葉もございません

鷺志

「まったく・・・。読者様の心が広いことを祈ります」

楽しんでいただければいいんですが・・・

第二十九話（前書き）

友人

「ミンミンゼミってミンミンって鳴くじゃん？」

友人

「ツクツクボーシはツクツクボーシって鳴くじゃん？」

友人

「じゃあアブラゼミはアブラ！って鳴くべきじゃね？」

灰色

「・・・・・・・・」

友人

「アブラッ！アブラッ！」

灰色

「・・・・・・・・」

友人

「アブルア（巻き舌）！アブルア（巻き舌）！」

友人

「アブルルウアアアアアアア（巻き舌）！！！！」

無言で掌打を打ち込んだ僕は悪くない。

## 第二十九話

「ドンマイ高音さん。大丈夫だよ、ほとんどの人見えてないから」

ステージから降りてきた高音さんは僕が貸した上着を掻き抱くようにしてうずくまってしまった。控室に動く間も恥ずかしらしい。

「う、うう・・・あんな大勢の前で服が、服が・・・」

頭のかんざしを揺らしてプルプル震える高音さん。原作ではどうやって立ち直ったのだろうか？

「大丈夫大丈夫。確かに大勢の前だったけど、大抵の人は月詠の殺気に当てられてたから」

「ですが、それでも見られたことには見られました・・・。これではお嫁に行けません・・・！」

ほとんど涙声で訴える高音さん。ふむ。原作よりよっぽど淑女っぽいね。好印象じゃない？

「それこそ大丈夫だよ。そのときは、僕が貰ってあげるから」

みんな知ってるか？地獄って意外と身近にあるんだぜ？

いやもう、ホント………死ぬかと思った。これまでの人生で1番怒られたね。

ちなみに、試合は高音さんの勝ちである。

月詠は刃物を使ったせいで反則負けだ。彼女の教育にはまだまだ時間が要るらしい。

「よかったですね高畑先生。先生が月詠と戦ったら、負けないまでも手足の5、6本は落とされていたかもしれませんよ?」

僕は高音さんの次の相手である高畑先生に声をかけた。高音さんは控室で木乃香たちと楽しそうにお喋りしている。今は茶々丸の服（グレーのゴシックワンピース。胸元に黒いリボン付き。メイドイン罪口）を借りているらしい。

「これで先生のお相手は高音さんと相成ったわけですが、もしケガでも負わせようものなら、僕も一瞬だけ全力出しちゃいますよ」

ざわり

少量の殺気が滲み出る。それを向けられた高畑先生は、引き攣った笑顔のまま額に細かな汗を滲ませた。

高音さんは準身内認定なのだ。愛衣ちゃんもね。

「うっかり脱がせちゃっても許しません。僕は見損ねたし、茶々丸も録画してなかったっていうのに……！」

ザワリ

今度は怨念が漏れた。くそう、せつかくのチャンスだったのに！

「あ、あのね罪口くん？最近の君の、その……道の踏み外し方について、教師として相談に乗ってあげたいところだけど……」

「はい？」

「……罪口さん、僕まだ戦ってもないんですけど……」  
「ネギが若干恨めしげに僕を見ている。」

勘弁してほしいなあ。このメンツだと皆一人称『僕』だし、会話が解りにくいんだよね。

「それは確かに、僕がタカミチに勝てるとは思ってませんが……」

「戦う前から諦めちゃいけないよネギくん。確かに僕も罪口くんと戦いたいけど、僕の1番の目的はネギくんの成長確認だからね」

「僕の、成長……？」

「ネギくんが僕を驚かせる戦法や実力を持っていたら、僕は罪口く  
んとの勝負を諦めよう」

「でもタカミチ、僕は」

「僕に勝たせて貰っても嬉しくないって？その気持ちは僕にもわか  
るけど、これは君に成長して欲しいって僕がママでもあつ  
て……」

「ちょっと僕僕僕僕うるさいんで、静かにしてもらえませんか？」

いい加減やかましい。戦闘描写に入っても解りにくいんじゃない  
かと心配してしまふ。

「そつだ。この勝負に負けたら、ネギは一人称を『私』に改めよう。  
人に話し掛けるときは『無視すんなやゴルアアアアアアア！！！！』  
と頭突きをかまし、自販機を見たら即座に右ハイキックをかますこ  
と。いいね？」

それから、魔法の射手、特に雷の矢はコインに載せて発射するこ  
とを義務付けよう。

うん。我ながらいい考えだ。

ネギと高畑先生がステージに上がった。朝倉さんの紹介や豪徳寺  
の解説、推測を聞き流しながら台上の二人を見上げる。

ネギは小太郎から「顎を守れ」とアドバイスを受け、「わかつてるよ」と返していた。原作より大分拳士の色が濃くなっているし、どつという試合になるか、次回のサザエさんの次くらいに楽しみだ。

S i d e ・ネギ

凄く緊張する。

タカミチに、僕の遙か高みにいる人に、父さんの知人に、僕の今の実力を示す。

考えるだけで手に汗が滲んでくる。膝が細かく震える。顔が……  
・緩む。

多分今、僕は笑顔だ。

先達タカミチに全力を示す。道標タカミチに腕を見てもらう。

凄く緊張する。

凄くワクワクする。

準備は済んでる。僕の全身全霊を、見てもらおう。

『それでは皆様お待たせしました』

僕とタカミチの差は絶望的だ。タカミチが罪口さんにしたような技を使えば、僕は一瞬にして収穫時期を誤ったザクロのようになってしまう。

でもタカミチは本気を出さないと言っていた。僕の腕を試す、と。罪口さんじゃあるまいし、こんなところで嘘はつかないだろう。

『第四試合……』

なら僕は、タカミチの期待に応えることが出来るよう、考えた限りの策を尽くす！

まずは……

『Fight!!』

不意打ち!!

ギユキユツ

瞬動でタカミチの右斜め前方へ。風楯に何か当たったけど、僕に当たってないから、無視!

「はあっ！」

停止の勢いを殺さず、右足に載せて下段回し蹴り。避けられる。

その足で踏み込み、右手で足を刈り取る。避けられる。

左足を右足と揃え、左手で下から上に掛掌。避けられる。

振り上げた左手を目隠し変わりにし、右拳で半歩崩拳<sup>はんぷぼんけん</sup>。避けられる。

右足を曲げて腰を落とし、左足と左手をタカミチの足を掴もうと滑り出す。避けられる。

何が悔しいって、この間タカミチが一步も退いていないのが悔しい。

タカミチは少しも退がることなく、右に左に、ポケットに手を入れたまま、まるで小粋なステップでも刻むように避けていく。

まるで遊ばれているようだ。

魔法の射手・雷の一矢

魔法の矢を右手に帯び、踏み付けるような蹴りの連打。時おり腰を回し、軸足を滑らせ、踏み踏み踏み踏む。八卦七十二暗腿！

それをやはり左右に避け続けるタカミチ。

それでいい！

連続蹴りを中断し、軸足で瞬動。重い負荷が掛かった軸足が微かに軋む。しかし、タカミチはこれを予測できなかった。

連続攻撃の強制中断。重心も体勢も、完全に次の攻撃のために傾く中での移動。連続攻撃に目の慣れていたタカミチは、僕の姿を一瞬だけ見失なった。

この隙に、タカミチの背後。背中から腎臓を狙った右拳衝捶。キドニーブロー雷の矢付きだ！

Side・鷺志

おお。すげえ連打。格ゲーみたい。

会場も最初少しだけ絶句して、今はもうネギの奮闘を讃える声で一杯だ。妬ましい。

『これは予想外の展開！子供先生がデスメガネ高畑を押ししているー  
ー！ー！』

朝倉さんの悠長な解説が響く。押しているように見えるかね？押

していたとしても、相手は暖簾だ。いくら押しても、柳に風と流すだけ。

それでも、高畑先生の顔に微かな喜びが見える気がする。成長が嬉しいのだろう。

ネギが動きを大きく変えた。相手を踏み付けるように足を打ち出す、側端と呼ばれる中国武術の蹴りの連打。

軸足を細かに動かし、間合いを調節して高畑先生を追うネギ。唐突にその体が消えた。瞬動だ。

攻撃を強制リセットしてのバックスタブ。これには高畑先生も本気で驚いたらしい。ズシンと震脚したネギの衝捶が高畑先生の腎臓を打ち抜いた。

side・ネギ

ズドオン・・・!

大きな音を立ててタカミチの体が吹き飛んだ。欄干を越えて場外へ落ちる。

『高畑選手、まるでダンプに跳ねられたかのように吹き飛ばんだー！！』

『いやあ凄いですねネギ君は。中国拳法、特に八極拳でしょうか？あそこまで動ける少年はそうそういませんよ』

『ネギ選手、これはもう勝ち確定かー！！？』

やられた！

背中の中、背骨を打ったなら吹き飛ばすこともあるだろう。だけど僕が打つたのは腎臓、腰の端だ。こんなに吹き飛ばすはずがない。

タカミチは僕の攻撃を利用して、あたかも僕に飛ばされたかのように跳んだんだ。

だとしたら、狙いは僕の油断。会場が沸いているこのとき、僕が勝利を意識しかねないこの瞬間、何かをしてくるはず……！

パンッ

パパパンッ

「ふっ！？ぐ、かふっ……！？」

お腹に一発、胸に三発。何かの衝撃が当たった。

水煙が晴れ、変わらずポケットに手を入れたまま、悠然と佇立するタカミチが見えた。

タカミチは一足飛びに場内に戻ると、ステージの端で立ち止まった。

「凄いね、想像いじよ」

キュキュッ

パパンッ

「へぶっ！」

「おおつとネギ選手大丈夫かー？何も無いところで転んでしまった」

観客席から微笑ましげな失笑が聞こえてくる。

《いや、今は・・・？》

豪徳寺さんが何かを訝しむように唸った。気付いてくれる人がいてよかった。

タカミチが話をしようとしたのを隙と見て、僕は瞬動をかけようとした。それを、タカミチに出足を払われたのだ。

「想像以上だ（パンッ）よ、ネギくん（パンッ）。まさ（パンッ）かここまで（パンッ）動けるな（パンッ）んて、思ってたな（パンッ）かった」

話ながら、徹底して僕の動きを封じるタカミチ。僕は動くに動け

ずのたうちまわる。

《やはりそうか・・・》

《何かお気づきに？豪徳寺さん》

《高畑選手の使う技の正体は、刀の居合い抜きならぬ拳の居合い抜き、「居合い拳」と思われます》

豪徳寺さんの解説が聞こえる。見えないほど早いパンチ。『気弾』ではなく、強化した肉体で『拳圧』を飛ばす遠当て。起こりが全然見えない・・・！

「さあネギくん。どうする？」

今、タカミチは僕に攻撃してこない。どうやら僕の動きを潰すのが目的で、その対応を見たいようだ。

なら！

キュ、キュキュキュ

足元を細かく蹴り、左右の足に重心を何度も動かす。左足が払われた。右足で踏み切る。

パンッ

移動中の、無防備になったところを打たれた。無様に転がるも、さっきよりは近づけた。もう一度、瞬動。

パンッ

今度の居合い拳は虚しく床板を打った。僕はタカミチには跳ばず、斜めに跳んでいたのだ。

しかしタカミチは動じた様子もなく、僕の着地点に向けて居合い拳を打ってきた。

ガキユツ！

虚空瞬動っ！

今度こそ完全に意表をついて、タカミチの懐に入った。

飛ばすのが拳圧なら、拳が加速する距離が必要なはずだ！

僕の予想は、

ドロンッ！

顔面と共に打ち抜かれた。

ネギの顔面が打ち抜かれ、首が大きく後ろにのけ反った。骨折れてない？

しかしアレだね。近付かなきゃ攻撃できないし、近づくのは仕方ないけど思慮が浅い。

居合い拳は拳圧を飛ばすのが本領ってわけじゃない。構えてないかのような構えから打ち出す、高速の拳が売りなんだ。

一般の使い手は拳圧を飛ばせない。拳圧を跳ばせなくても居合い拳。

むしろ、飛ばさず直に喰らう方が、威力は高いだろうさ。

## 第三十話（前書き）

とうとう三十話です。

いつの間にか三十話です。

読み返してみると鷺志の性格が幾分軟らかくなっているような・・・

## 第三十話

Side・ネギ

さつきまでとは比べものにならない重い一撃が僕の顔を打った。

それを理解したのは場外の水中でだった。

たった一撃で場外に跳ね出された。

その事実が僕の体を強張らせ、なお手加減されたのだらうという予想が僕の頭を揺さぶる。

舐められている。侮られている。

仕方のないことだと思うけど、煮え立つ頭とお腹はなかなか冷えない。

努めて冷静さを強いて、無詠唱の魔法を展開する。

魔法の射手・風の五矢

ちゅばあっ

跳び上がり欄干に降り立つ。足が欄干につくと同時に瞬動をかけ、タカミチの真上に移動。斜め上への攻撃はあっても、真上への攻撃はどの武術にもない！

一気に攻撃へ畳み掛けようとしたとき……

「ゴッー！」

見覚えのある光と風圧が、僕の体を叩いた。

「やれやれ。息もつかせぬ連続攻撃は、確かに突破口になりうるけど、お喋りができないのが難点だね」

「……………罪口さんに稽古を付けてもらつと、自然と話を聞かない技術が身につくんだ」

「ああ……………」

タカミチのあれ。予選で罪口さん相手に使っていた究極技法アルテマアート、感卦法。

「これはねネギくん。ナギの仲間の一人の……………、僕の師匠にあたる人から教わった技なんだよ」

「<紅き翼アラルフラ>から……………」

「ああ……………。いい人だったよ」

『だった』、か……………。

「ネギくん、僕は今とても嬉しいよ。君がここまで戦えるとは思わなかった。魔法の修行もしてるみたいだね。矢の練り込みでわかったよ」

魔法は師匠がないから、取り合えず基本の反復練習だけ。魔法

の修行が出来る場所が欲しい。

「今の手合わせでわかった。君はもう立派な『半人前』だ」

「立派なのに半人前なの？」

「体術に関しては、一人前を名乗ってもいいよ。その先には超一流とか達人がある。でも、魔法に関しては基礎があるだけの、ただの『天才』だ」

魔法云々は、僕が言えることじゃないけどね。

自重気味に笑うタカミチ。

それからタカミチは、フツと表情を引き締めた。

「今から、僕の本当の本気を少しだけ見せよう。一撃目はサービスだ。避ける、ネギくん」

無意識でタカミチの警告に従い、僕は全力で距離を取った。その直後、

ゴンッ！！

ついさっきまで僕の立っていた場所が破砕した。

以前見た、罪口さんの剣技に似ているかもしれない。あれを打撃にしたら、きつとこんな感じだろう。

朝倉さんの実況が聞こえる。観客の皆さんが大いに沸いているの

が聞こえる。けどそれは『音』だけで、意味のある『声』としては聞こえてこない。

こんな攻撃をして、それでもタカミチは本気じゃない……

「今の僕でも、彼らにはもちろん罪口くんにも追いついていない。ネギくん、これくらいでへこたれていては、あの人達と同じ舞台には立てないぞ」

タカミチの口上の間も、僕は仕掛けることが出来ずにいた。

目の前で披露されたその一撃は、紛れもなく僕の目指す一角。目標とする高みの一つだ。

その様を、僕はしっかりと目に焼き付けた。

「そろそろいいかな？いくよ、ネギくん」

言うのが早いか、タカミチは僕との距離を刻むように居合い拳を連発した。

ゴンッ！ゴンッ！ゴンッ！ゴンッ！

「くっ！」

一打<sup>そわい</sup>必倒から辛うじて逃れながら突破口を探す。どこか、どこかに付け入る隙は……！？

パパパンッ

ドゴン！

side・鷺志

あ、まともにくらった。

上から突き落とすように豪殺をくらい、うつぶせにめり込むネギ。展開していた魔法の矢も消えてしまった。

結構硬功夫積んでるように見えたけど、流石にキツかったのかな？それとも単に功夫が足りなかったのかな？

観客がざわめき、朝倉さんが慌ててネギの横に膝をついた。タカミチに批難の言葉を浴びせて

『も、もう高畑先生の勝ちでいいよ！ホラ、高畑選手の勝利ーッ！』

と宣言した。

高畑先生がネギに何事か語りかける。観客が勝敗の賛否を囁き合う。その中、一際元気な女子中学生が大声で声援を投げた。

「ネギーーーーーッ！！このバカネギ！！なにやってんのよ立ちなさいよーーーーッ！！」

件の少年は、動かない。

side・ネギ

タカミチが僕をけしかける。アスナさんが僕を叱咤する。

ごめんなさいアスナさん。立てません。

朝倉さんが僕を心配して駆け寄ってきてくれる。タカミチもゆっくりと歩いて来る。

一步。二歩。三歩。

今だっ！！

解放！戒めの風矢！！

左手を振ってタカミチの足に触れる。遅延呪文がタカミチの右足に絡み付き、陥没したステージに縫い付けた。

「これはっ……!?!」

タカミチが驚きに声を上げる。構わず跳ね起き、瞬動で背後に回った。さあ、僕の必殺技だ。かくしわざ

「エーミツタム郭氏絶招!」

解放のキーと共に指輪を付けた右手を突き出す。放つのは、天を穿つと言わしめる基本技!

「いかすちのほうびん半歩崩拳!?!」

ダ!トンツ……

ズ……ドゴオオオオオン!!

会心の練り込み。会心の踏み込み。会心の入りと抜き。まさに、会心の一撃が決まった。

ステージ上の木っ端が飛び散り、新しくアチコチが壊れる。その暴風と余波が晴れると、タカミチはボロボロになったスーツを来て、手摺りに背中を預けて座り込んでいた。

『ネ……ネギ選手の必殺技、「なんかスゴク手が光るすごいパンチ」がヒイーーーーーッ!』

興奮した様子の朝倉さんがマイクで何か言っているが、僕の耳には入ってこない。今のは掛値なしで僕の全力だ。これでダメなら、僕の勝ち抜けはありえない。

「……今のは遅延呪文かい？」

「そうだよ。試合が始まる前に唱えておいたんだ。試合前の詠唱は禁じられてないからね」

「それは、屁理屈じゃないかな？」

タカミチが苦笑しながらそういった。そんなこと、罪口さんと付き合いがあるタカミチが言うなんて。

「罪口くんには、どんな戦い方を教わったんだい？」

「闇討ち不意打ち騙し討ち。それと卑怯卑劣」

「やれやれ……、すっかり罪口くんに毒えいきょうされてるね」

肩を竦めて見せるタカミチ。僕も最近、昔の自分を思い出すと別人を見るような感覚に陥る。

「驚いた。僕の負けだ」

### 第三十話（後書き）

ネギ VS タカミチ戦終了！

鷺志

「終始暑苦しかったな」

そう言うなよ。

最初のままだと15ページで3話にも及ぶ長期戦だったんだぜ？かなり削ったんだ。

鷺志

「その間ネギの腕が折れたり血を吐いたりしたな」

歯も鼻も折れたぜ

鷺志

「なんか高畑先生が非常に冷酷になってしまったので、残念ながら没となりました」

勝負はネギの勝ち。

ネギの成長を見守った高畑先生の敗北宣言で終始です。

次回はなんだか久しぶりに鷺志の主観です。

第三十一話（前書き）

アスナめっちゃ難しい……………

### 第三十一話

「このバカネギーーーーーッ!!」

「くへっ!?!」

試合を終えて披露困憊、満身創痍、青息吐息なネギに、神楽坂が見事な延髄斬りを見舞った。うむ。ジャストミート。

「起きろって言ったんだから起きられるなら起きなさいよ!バカみたいに心配させてもー!!」

「で、でも、起きちゃったらタカミチに勝てなかったし……」

「言い訳しないのー!」

喧々囂々。なにやら混乱している様子の神楽坂によくわからない説教を受けるネギだが、医務室なりに行かなくていいのだろうか？

あ、古さんに連行された。中国には打撲によく効く薬効があるのだとか。多分今からネギがお世話になるやつだ。

神楽坂は未だにプリプリしている。まあまあと、木乃香と刹那に宥められてようやく落ち着いてきたらしい。朝倉さんに促されて更衣室へと向かった。

神楽坂とクウネルのやり取りを総スルーしてステージ上。魔改造メイド服（もはやメイドの仕事はこなせまい）に着替えた神楽坂と、僕は向かい合っていた。

『今回のカード、一体誰が予想できたでしょう！？片や、格闘技経験無し、元気が特長の女子中学生！！片や、個人で麻帆良工学部とタメを張る技術屋、よと澱んだ瞳が特徴の男子中学生！！本戦に残ったのは、果たしてまぐれか才能かー！？』

朝倉さんの煽りを、一体どれだけの人が聞いているだろう？観客はその半数以上が神楽坂の心配をしている。

おいおい、あれって予選のバケモノだろ？

相手の娘、死ぬんじゃないか？

まさか。手加減くらい出来るだろ。

そのざわめきを聞いて、神楽坂は一際不機嫌そうに眉を寄せた。

「皆の評価が気に入らないかい？」

「うっさい変態」

「大丈夫だよ。僕はパンツをはいた女の子には優しいから」

「うっさい変態」

「……………はいてるよね？」

「うつさい！変態！！」

やれやれ。取り付く島もないとはこのことだね。なんで僕がここまで嫌われているのか、皆目見当もつかないよ。

今も歯茎を剥き出しにして僕を威嚇している神楽坂を見て、僕は浅くため息をついた。

まあ僕も、前の人生を合わせれば精神年齢はそこそこになるわけで、『変態』以外に罵倒する言葉を持たないボキャブラリーが貧困な女の子相手に怒ることなんて当然あるわけもなく。僕は余裕を持って肩を竦め、余裕たっぷりと言ってやった。

「いじめてやる。覚悟しろよパイ　ン」

「な、なんで知っ……………生えてるもん！！」

はっ！見栄張っちゃってまったく。神楽坂がパ　パンなのは周知のじじい

「殺気！？」

不意に強烈な殺気を感じて僕は背後、観客席を振り返った。そこにいたのは……………木乃香？

サギクン、ナンデシットルン……？

冷や汗が止まらない。そういえばこのネギは魔法を暴発させてないんだし、つまり神楽坂のキャストオフも無かったわけで、ようは神楽坂の身体的特徴（イパン）を知っているのは風呂などで同じになり得る同性か、でなきゃ覗きということに……

「そうか生えてるのか」

「いやはや失敬。考えてみれば当然ですよね」

「中学生3年生にもなって生えてないなんて」

「それはそれで萌えますけど」

「そもそも女性に言うことではありませんでしたね」

「どうやら会場の熱気に当てられてしまったようです」

「なんであんなことを言ってしまったのか」

「もしかして、今朝食べた」

「パンパン」

「が原因かもしれません」

「パンパンのせいでそれに似た言葉を漏らしてしまったようです  
ね」

「他意はないんです」

「本当ですよ？」

「それよりもほら」

「早く試合を始めましょう」

危なかった……。

伝説の、『秘技・章変えリセット』まで併用してなんとか誤魔化した。この技がなければ必死（文字通り）の追究は免れなかっただろう。

「ところで神楽坂さん。君はなんでこれに出たのかな？」

「は？」

「まさか高畑先生の前で舞い上がった、ってだけじゃないでしょ？」

「……それは、まあ……」

「僕と高畑先生の予選は見てたでしょ？あれを見て、それでも一般人同然の君が出る、ってというのが気になるな」

ついさっきも、試合を終えたネギに駆け寄った。一見してスーツがボロボロになった高畑先生の方がケガが大きそうに見えたものだけど、ね。

つまり高畑先生よりネギの方が気になった、ってことじゃないかな？

「……別にいいじゃない。アンタに言わなきゃいけないわけじゃないでしょ」

「でも聞きたいな。なんで会ったばかりの子供の為に懸命になれるのか」

知らないとは言え、誰もが求める平和をなぜ棄てるのか。

木乃香と違い、逃げようと思えば逃げられるだろう。隠れようと思えば隠れられるだろう。なにせ文字通り、世界が違う。

その上本国では死亡扱い。英雄や西洋魔法使いの代表格まで見方なのだ。

それでも平和平穏を棄てる。

知らないっていうのは、怖いね。

「どうしても教えてくれない？」

「教えない」

僕の懇願にも、神楽坂は強固に口を閉ざすだけだった。

まあ幸い、神楽坂は直情型だ。少し挑発すればポロツと本音のことも零してくれるだろう。

『あ〜、そろそろ試合始めて下さ〜い』

朝倉さんが何うような声で言った。試合開始からこっち、選手間でお喋りしてるだけじゃ見栄えが悪いね。

「それじゃあ始めようか。神楽坂さん」

「やつ！」

僕が開始の意思を告げると同時、神楽坂は全身で突っ込んできた。

ちなみに神楽坂はすでに感卦法を発動している。通常時でも優れている運動神経に、感卦の気の出力が上乘せされたその体力は、女子中学生以前に人類として最高レベルだ。

瞬動には及ばないまでも、一般人では追えないレベルの速度で肉薄する神楽坂。僕はそれを受けて、

ボグッ……

「ぐえ……!？」

右のつま先で鳩尾みそおちを蹴り上げた。

「よいしょ」

絶息して動きが止まった神楽坂に一步近付き、今度は弱パンチ。

「えいや」

弱キック。

「とっ」

しゃがみパンチ。

「そーれ」

パンチ+キック。

「どっこいしよ」

かるーく鉄山靠。

これらに合わせて面白いように転がる神楽坂。今の靠撃で起き上がり小法師よろしく、ステージの端まで転がった。その際スカートの中が盛大に披露されたが、観客にそれを気にする人はいなかった。

「といつかなんだあれ。あんな『いかにも』なパンツはお呼びじゃない。パンツは普段から履いているようなパンツだから価値があるわけで、あんなあからさまに『見せる』パンツは僕のジャスティスに反する。」

『つ、罪口選手容赦がない！？本気ではないにせよ怒涛の連撃だー  
ーッ！ー！』

《罪口くん、ちょっとやり過ぎじゃ……？》

若干引き気味の実況と解説。おいおい、まるで僕が悪者じゃないか。

『神楽坂選手起き上がれない！私としては医者に連れていきたいところですが、ひとまずカウントを取らせていただきますっ！！』

朝倉さんがようやくカウントを始めた。前置き長くね？まさか起き上がるまでの時間稼ぎ？まさかね。

『5！・・・6！』

このままカウント勝ちじゃつまらないし、何より話が聞けない。僕はちよちよいと指を動かした。

『7！・・・おおっと神楽坂選手、立ち上がったー！？』

糸を使って操り人形の要領で神楽坂を立ち上がらせた。これで力ウントは止まる。僕は糸にぶら下がったままの神楽坂に近寄り、再度問い掛けた。

「どうかな？なんでそんなに献身的なのか、話す気になった？」

「・・・」

やべ気絶してる。

軽く頬を叩いて気付け。起きろー、起きろー。

「・・・ん」

よし起きた。

「どうかな？なんでそんなに献身的なのか、話す気になった？」

「……………あんだ、パンツはいた娘には優しいんじゃないの？」

「優しいじゃないか。全力で脱力して、本気でやる気を欠いて、この上なく下手くそな技を使ったんだぜ？」

くそ、難しいな。

「……………あんだ、女の子が好きなんじゃないの？」

「もちろん好きだよ」

「大好きさ」

「だってほら」

「女の子って柔らかくって」

「殴っても拳を痛めないでしょ？」

「おっぱいが大きいと尚いいね」

「だってほら」

「おっぱいでも衝撃があると痛いでしょ？」

「なのに自分の意思で動かせないなんて」

「絶好の的じゃないか」

「いたぶり甲斐があって大好きだよ」

「女の子」

「……………」

僕の暴言を聞いても、神楽坂は不快そうに顔を歪めるだけで怒り狂ったりはしなかった。

なんだか意外だ。もっとこう、「なんですってー！ーっ！ー！」

みたいなリアクションが来ると思ったんだけど。ちょっと殴りすぎた？もはや騒ぐ気力もない感じ？

「ねえ神楽坂さん。君が喋ってくれないとなると、僕は話を聞き出すために君を挑発せざるを得なくなるんだけど」

「なによ今さら。だいたいいくら私でも、あんたみたいな変態の挑発、効かないわよ」

「うっん頑固だねー」。

「ならば仕方ない。これだけは使うまいと思っていただけね・・・」

「神楽坂さん」

僕は神楽坂と目を合わせた。糸に釣らされ、痛みで時おり呻く神楽坂の目を見つめる。

神楽坂を右手で指さし、極めて軽い調子で、

「お前なんだか、没落した王族の風格があるよな（笑）」

.

### 第三十一話（後書き）

なんか大変だねアスナ

鷺志

「お前は僕をどうしたい？」

影が薄い主人公を心配して印象的なことをしたんじゃないか！

鷺志

「そもそも影が薄いのもお前のせいだ！」

最後のネタがわからない方。『トランプ』『顔』で検索！

## 第三十二話（前書き）

もしもシリーズ第一回。

もしも、緑ちゃんがデレたら！！

「せんばい  
好人」

「ん、何？緑ちゃん」

「せんばい  
愛君」

「どうしたの、緑ちゃん？」

「なんでもない  
大好きです」

「顔赤いよ？風邪？」

「だいじょうぶ  
恋病です」

「ならいいけど、辛かったら言いなよ？」

「じゃ、じゃあ・・・」

「うん？」

「熱を、計って下さい・・・・・・・・・・おでいじで・・・・・・・・・・」

『同じコインの裏表、ただし同じ柄』みたいなのっ！

## 第三十二話

「お前なんだか、没落した王族の風格があるよな（笑）」

「なんつでそこまでの確に人を馬鹿に出来るのよアンタは——  
ッ——」

僕の挑発で一瞬間が止まったかのように訪れた静寂は、一気に感卦の出力を上げた神楽坂の叫びで破られた。

「言うに事欠いて王族ですって！？いくら私がバカでもね、日本に王様がいないってことくらい知ってるんだからね——！それとも何よ！アンタは私が大柄で面倒見のいい猫（？）がメイド服きてチーフを務めるような魔法の国から来たお姫様だ、とでも言いたいわけ！——！??？」

一気にまくし立てる神楽坂を前に、僕は若干呆れながら応答した。

「<sup>マイナス</sup>すごい過剰反応だね。でも<sup>プラス</sup>正解だ」

「わけわかんないこと言ってるんじゃないわよーっ!」

怒り狂った神楽坂は、なんと曲弦系に絡まれたまま徐々に動きはじめた。

「おいおいおい。これはさすがにビックリだよ神楽坂さん。感卦法で防御力でもUPした?引っ掛けてる手摺りの方が軋んでるじゃん」

キシキシと、ギシギシと、徐々に軋みを大きくしていく手摺りや欄干。しかし神楽坂はそれには目もくれずに僕に向かって拳を振り上げようとしている。

馬鹿力ここにきわまれり、かね。

「ところでさ神楽坂さん。なあってそんなにネギが気になるのか、僕に教えてくれないかな?なにになに?もしかしてアレ?君の瞳にフオーリンラブ的な?恋に恋した中学生的なアレ?」

「そんなわけないでしょー!?!」

おっし反応あり。やっぱり話を聞くなり相手の精神が不安定なときが1番だよね。

「じゃなんで?どうして今、一般人が危険なことに首を突っ込んでまでネギにかまうの?」

それで、木乃香は肝を冷やしている。自分の友人にいつどんな危害が及ぶか、気にしている。

神楽坂は刹那とも友達だし、千雨だって話をする。復学扱いのさ

よによくしてくれたそうだし、茶々丸の話にだってよく出てくる。

僕だって、気にしないわけにはいかない。

ややあつて、神楽坂は大きく吠えた。

「ほっとけるわけじゃない！！」

神楽坂は感情のまま、その心中を吐き出した。

「あんな小さな子供がいつぱいいつぱいで頑張ってるのよ！？ほっとけるわけじゃない！気付いたら両親がいなくて！どこにいるかもわからないお父さんの気を引こうとして！それで従姉妹のお姉ちゃんに心配かけて！村が大変なことになって！そんなときだけお父さんがやってきて！でもどこに行ったのかわからなくて！あんまりじゃない！」

「だから関わるの？悪魔襲撃あんなめにあつたのに？」

「そうよ！何て言うか、他人事とは思えないのよ！！！」

「つまり同情してるわけだ。『両親がいなくて、一人で頑張るしかない』《自分と似た》『少年に』」

「なんとも言いなさい！私は、あのバカのパートナーなんだから！！！」

ふう

虚仮の一念つてやつかね。すごい剣幕だよ。

「あんたを倒して、私が足手まといにならないことを教えてやるんだからーッ!!!」

「心掛けも志も、まあ立派と言えないことはないだろうけどさ、考  
え無しってのはいただけないね。僕に勝つって言っても、作戦なん  
かなにも無し。ただ突っ込むだけでしょ？それじゃあ猪と大差ない  
よ」

「うっさい！考えるのはネギに任せる！私はいつが動けない分、  
動く!!!」

「やれやれ、だね。」

僕はゆっくり神楽坂に近付き、小刻みにしか動けない彼女の顔面  
に右手を添えた。

「人間は考える葦<sup>あし</sup>である」

糸を回収しながら右足で神楽坂の足を後ろから払い、右手で頭を  
床に叩き付ける。

ゴドソッ

仰向けに倒れ、動かなくなる神楽坂。それを受けて朝倉さんが力  
ウントを開始した。観客席がザワついてるけど、大丈夫大丈夫。息  
はしてるから死んでない。

「考えなきや、ただのイネ科の多年草だぜ」

10カウント。

僕の1回戦勝ち抜けが確定した。

第三十二話（後書き）

プッ、お前意味わかんねー決め台詞だなW

鷺志

「……ひるおに」

『ただのイネ科の多年草だぜ（キリッ）』

鷺志

「……ひるおに」

### 第三十三話（前書き）

友人曰く、僕の文章や言葉のチヨイスは虚淵先生や福本先生を彷彿とさせるらしい。

「鷺志が木乃香たち殺してBADENDなんて無いよな？」  
とか言われました。

### 第三十三話

side・ネギ

「凄かったね、エヴァンジェリンさんの試合……」

「なんや、めっちゃ楽しそうやったな……」

小太郎くとさっきの試合について話し合う。罪口さんは近衛さんと長谷川さん、相坂さんと絡操さんに連れられてどこかに行ってしまった。現在、実況不在。桜咲さんはもう試合の準備をしている。

アスナさんは軽い脳震盪で医務室に。もう意識も戻ったけど、大事をとって横になっている。

「あの技、どこかで見たような気がするんだけど……」

「多分俺が貸したった漫画やな」

「……ああ！」

ようやく思い出した。あれは世界に通じる大人気マンガの、序盤で使われた技をアレンジしたものだ。

「あの技くらって、よく首の骨折れなかったね」

「手加減しとつたんちゃうか？」

「出来るの？技の仕組み的に」

「出来ても不思議はないやろ。罪口のにーちゃんのツレやで？」

それを言われると何も言えない。

しかしすごい技だった。『天空×（ペケ）字拳捻りプラス』

キリモミ状に落下しながら正確に首を捕らえるあたりが人間離れしている。

そんな話をしている間に次の試合の選手、桜咲さんと古老師がステージに登った。

side・刹那

なんだか落ち着かない。

こんな格好、普段は絶対に着ないし、得物はデッキブラシだし、このちゃんもさぎくんもないし……

『それでは、試合』

まあこのちゃんとさぎくんがないのは仕方ないけど。

『Fighterっ!!』

ッダンッ!!

朝倉さんの号令と同時に・・・否、多少フライング気味に、古が踏み込んできた。

瞬動!?!いや、武術の縮地か!

地を滑るように流れてくる古とその拳。気の意識的な発現こそまだだが、単純な体術なら恐らくは最強格に入るだろう、その拳。

完璧に意識の内に入られた。だが

「私を相手取るには、遅い」

いつの間にか武術四天王と呼ばれるようになった私達。

地の利すら越える遠方から攻める、真名。

無類の隠密性を誇り、常に意表を衝く、楓。

歴史が磨いた技を、無双の剛力で振るう、古。

「影を残さず、風すら生まない高速移動、アルか・・・」

「そんな大したモノじゃないよ」

名前としても弱いし、誇れるような境地にはいない。

背後に回った私に振り向き様の裏拳を打つ古。しかしそれも空を切った。古が打ち、私がかわす。そんな攻防が数合交わされる。

『攻める攻める古選手！かわすかわす桜咲選手！古選手は当てられず、桜咲選手は攻められない！！実力は伯仲しているのかーっ！？』

朝倉さんの実況が聞こえる。観客も、ほぼ無名の私が古を相手に出ていることに驚いているようだ。

「……………ッ」

驚いているのは私の方だと言いたい。

四天王などと言われても、実力では古は一段劣るはずだ。古は一人だけ実戦を知らない。格上との戦闘を知らない。

経験不足はどれだけ修業を積んでも補えない。

そのはずなのだ。

「くっ……………!？」

どれだけ動いても、古の意識が追ってくる。どこから打っても、古の反し技が来る気がする。

気圧されている。

「……………はぁっ!?!」





驚愕に目を剥く古の後頭部に肘。その回転で半歩距離を開けて同じ箇所には掌打。さらに回ってもう1歩引き、回転の勢いに体重を載せ、水平に打ち出す手刀をまたも後頭部に。

四度後頭部に衝撃を受けた古は、力無く振り回した腕に反撃の意思を示し、私を視界から外すことなく、仰向けに倒れていった。

side・ネギ

凄い。

そんな月並みな感想しか出て来ない。僕如き若輩には、口を啞然と開けて見ているしかない試合だった。

隣の小太郎くんも、最初こそ盛り上がっていたようだけど、古老師が猛烈な連打を打ち始めてから静かになった。

後頭部に武器での一撃をくらいながら、平然と打ち返す老師。その後の連打なんて、僕は半分も追えなかった。

その連打を受けながら、平然といなし、反撃に繋がた桜咲さん。彼女がクルリと回ったら、もう老師は倒れかけていた。

どちらにも、僕より一歩二歩、先にいる。

「年期の差あ、やるな……」

ぼそりと、小太郎くんが呟いた。

「年期？」

「せや。あのねーちゃん達は、ようやっと立てるようんになってから、すぐにでも武術を始めたんやろ。いい師がおって、我流や無く、キチンと指導受けとったんやろ。始めたばっかのお前や、ちっと危ない喧嘩しかしたことない俺とはちやうねん」

一見すると悲観しているだけの弱気な発言。しかし、小太郎くんは八重歯を剥き出しにして大きく笑っていた。

「おもしろいやんか。今は大人しく背中見たったる。せやけど、あつという間に追い付いて、そんで追い抜かす!!」

グツ、つと拳を握って静かに宣言する小太郎くん。やれやれ、子供っぽいなあ。

僕はその拳に自分の手の平を載せた。

「頑張つてね。ただしその頃には、僕はもっと先にいるだろうけど」

小太郎くんの笑みが、挑戦的な笑みに変わった。

「なんや、えらい上から言つやんけ」

「だって京都じゃ僕の方が戦績上だしー」

「なっ！んなことないやろ！経験も実力も俺のが上や！！」

「経験も実力もあるなら僕みたいな素人に互角まで返されちゃダメだよ」

「あのまま行ったら倒せとつた！」

「それはIFでしょ？現実には、僕は今生きてるよ」

「……電王の良さもわからん子供が、言っちゃないや」

「2号の格好よさが解らないなんて、可哀相だね」

「わーわーぎゃーぎゃー！」

「あーだこーだ」

「なんとかかんとか！」

「あっちょんぶりけ」

僕と小太郎くんのライダー論争は、次の試合が始まるまで続いた。

### 第三十三話（後書き）

諸事情により、今回後書きに鷺志は出れませんw

しかし読み返してみると、今回なんだか古と刹那の強さがネギ&小太郎の子供コンビを軽くブツチしていることに気付きました

がんばれ子供達！

## 第三十四話（前書き）

どうやら僕には、『筆が乗るとキャラクターの四肢を落とす』癖があるようです。

危うく真名が車椅子スナイパーになるところだった・・・

## 第三十四話

side・長瀬

ふむ。ネギ坊主とコタローとかいう少年、随分盛り上がっているでござるな。拙者と真名の試合、興味ないのでござるうか？

「そんなに子供先生が気になるか、楓？」

「いやなに。どうやらライダーは誰が1番かで盛り上がっているようなのでな。ここは年上として、カクレンジャーが1番だと教えるべきかと、そう悩んでいたところでござる」

「ふっ」

「む？何やら挑発的でござるな。真名」

「揃いも揃って子供っぽいと、そう思っただけさ」

「むむむ……。子供っぽいと言われるのは、不思議と少し嬉しいでござるな」

「ちなみに私は日曜朝はプリキュアと決めている」

「子供っぽいでござるなあ」

「……、なんだか慣れないな……」

二人してしばし頬を掻きあう。普段は真逆のことを言われるでござるからなあ……。

『おおーい二人とも。準備はいい?』

「私はいつでも大丈夫だよ」

「拙者も同様。行住坐臥、（おんがら）これ総て戦場でござる」

火器の類が禁止されているなか、真名がどんな闘い方をするのか。拙者では想像することしかできないでござる。

『それでは! 試合いい……』

まあ、まずはともあれ

『FIGHTツ!!--』

「フツッ!」

距離を詰めねば。

Side・真名

試合開始の号令と同時に、楓の姿が消えた。

やれやれ、『入り』の気配の無さは本物だな。

私は即座に右手首を後ろに反し、袖から落とした500円硬貨を親指で弾く。

ビシッ

っと音を立てて、その硬貨は楓の額の真ん中、白合を貫通した。

視界の端でそれを捕らえてから、左手にも硬貨を落とす。左右の手で今度は私の両側に現れた楓の胸と腹に硬貨を撃った。

そしてそれらもまた、貫通した。

「いや、驚いたでござる。あの近距離で、まさか完璧に撃ち抜かれようとは。しかもこれは、500円玉？」

「私に苦手な距離はないよ」

再び最初の立ち位置に戻った楓は、私の放った硬貨を一枚指で弄んでいた。それをスツとポケットに……

ビシッ！

「あ痛っ」

「私のだ」

まったく。真名は相変わらずケチでござるなあ……

『さあもう皆さん慣れましたかね！試合開始直後の瞬間移動！！まったく今年の選手達、揃いも揃って観客を置いてけぼりだー！！』

朝倉殿の半ば投げやりな実況が聞こえる。しかし観客ももう慣れたもの。目の前の不可思議さを、映画か何かと思って楽しむことにしたようである。

見ているのも、楽しそうではある。

「では、仕切り直そうか」

「弾切れは大丈夫でござるか？真名は儉約家でござろう」

「ふふっ、弾切れ？」

小さく笑いながら、真名はその両手に業務用の、レジに補充するのかと思うほど大量の硬貨を落とした。

「いらぬ心配さ」

微かに指を閃かし、大量の硬貨だんがんが飛来した。

side・真名

《あれは、羅漢銭!??》

《羅漢銭、ですか?》

《羅漢銭とはですね、中国の暗器の一種で

》

リーゼントの解説役が私の技を解説している。

確かに羅漢銭とも言えるかもしれないが、個人的には指弾と言って欲しいね。指弾の方が銃っばい。

ドガガガガガガッ

解説を聞きながらも指は止めない。機関銃のような連射が楓の影を追っていく。後には床に食い込む硬貨と飛び散る木っ端だけだ。

右手で楓を追い、左手で行手を塞ふさぐ。

苛烈に襲う硬貨の雨を、しかし楓は辛くも避けていく。

「いやはや、流石は忍者だね。不慣れな素手とは言え、ここまで捕えられないなんて」

「忍者とは、一体なんの事でござるかな？」

「その語尾でホントに隠すつもりがあるのかい？」

ヒュヒュヒュッ！

ギンギンギン！

視線を外さずにクナイを弾き、執拗に楓を追う。

楓と言えば、トントンとステップでかわし、瞬動を交え、たまに空中を跳ねて回る。

ビシ！ビシ！

油断していると、今のように背後から分身が狙っているのだから性質が悪い。

「ふむ。埒が明かないでござるな」

「なにか打開策があるかい？」

「策、とはとても呼べそうもないが……」

言いながら、楓は足元の木っ端を蹴り上げた。割れた床板はそれに従って浮き上がり、楓の体の前に跳ねる。

顔。胸。腹。股間を、正中線の要所を隠す床板。なるほど。楓の狙いは……………

ドギョーン！

ビスビスビスビス

私の敷く硬貨の壁を前に、楓は木っ端で急所への直撃のみを防ぎ、捨て身の特攻をかけてきた。

「正面突破か……………！」

「ぐり押しでいざなえ」

キルレンジ  
至近距離。

並の飛び道具使いなら積むしかない距離。中距離も近距離もいける楓の距離だ。だが、

「私に、苦手な距離はないよ」

ビスビスビスッ

手首の角度を変え、楓の顎を狙って連射を続ける。それを楓は、先程投げたのと同じ刃引き済みのクナイで弾いた。

「苦手でないと言っても、得意でもないでござろう？近ければどれだけ手首を反そうとも胸から上しか撃てない。近づけば近づくほど、狙える場所は狭くなる……………」

ビシビシビシッ!

ギンギンギン!

撃つ。弾く。その応酬。さっきから楓は腰を屈め、私の懐に潜り込もうとしているようだ。

「それにその硬貨、真下には撃てないでいじめるっ?」

「撃ちにくいかもしれないが、長身は楓も同じだろうっ?」

side・長瀬

「長身は楓も同じだろうっ?」

うむ。それが悩み所でいじめる。

一度懐に入ってしまったえば活路はあると思っつのでいじめるが………

その『一度』の機会が、来ない。

潜ろうと腰を落とせば、真名の長い足が鼻を掠<sup>かす</sup>める。分身で牽制

しようにも、真名の集中力は侮れない。逆に壁に使われるおそれすらある。

仕方無しに刃引いた忍具を投擲するも、それらはあえなく避けられた。

「互いに決定打に至らないね」

「まともな当たりすら無いでござるな」

「泥仕合になりそうだ」

「更衣室にシャワーでもあればいいのでござるが」

「ふふっ、終わったら一緒に浴びに行こう」

「おおっ！真名から風呂の誘いとは、珍しい」

「たまにはいいだろう。私も久しぶりに楽しんでるんだ。観客も盛り上がってるしね」

「ふむ。では敗者は勝者の背中を流す、というのはどうでござるか？」

「構わないが、自分にやる調子で擦らないでくれよ？私の肌は、山を駆け回るほど丈夫じゃない」

「真名こそ、保湿クリームは使わなくて構わないでござるよ？拙者は砂と硝煙で渴いて荒れた肌は持ってないでござる」

「フフフフ・・・」

「ははははは・・・」

この試合、長引きそうじゃないかな。

side・朝倉

『タアアーーーーイムアアーーーーッブ!!!』

『目まぐるしい攻防も早十五分が経ちました!!!両選手は試合をやめて下さい!!!』

『制限時間内に決着が着かなかったため、ルール通りメール投票で勝者を決めていただきます!!!』

『長引いただけ、勝つのはコイツだ!条件が不利だっただけ、勝つたのはこっちだ!あるいは単純に、コイツの試合がもっと見たい!』

『そう思う選手に投票して下さい!!!』

『勝者を決めるのは、観客の皆さんです!!!』

.

### 第三十四話（後書き）

と、言う訳ですね。

『真名と楓。どっちを次の試合に進ませるか』アンケートー！  
ドンドンパフパフー）

まあ上記の通りです。

どちらを勝たせるかを、皆さんからアンケートを取って決めたいと思います。

期限は3日後

7月2日の18:00

アンケートに参加して下さる方は、感想なりメッセージなりでキャラの名前を明記の上、投票願います。

これから暑くなる一方ですが、夏バテと夏風邪には気をつけましよう！

僕も気をつけます！

埒外 永久凍土（前書き）

それでは、本時刻をもってアンケートを締め切らせていただきます。

続きは集計後に書き始めますので、以前投稿を逃したものを番外として投稿。

これでなんとか間を繋げればいいなあ

埒外 永久凍土

轟轟びよびよとうなり、視界を白く染め上げる猛吹雪。

足場になっているぶ厚い氷の下には冷たい大河が流れ、四方は融けることのない巨大な氷山で囲まれている。

そんな極寒の象徴、大自然の猛威を目の前にして、しかし高音・D・グッドマンはその手に汗を握っていた。

彼女の顔は苦渋に歪み、その脳裏には悔恨、慚愧、絶望。いずれか2文字が踊っている。

甘く見ていた。

彼女は激しく後悔した。村民の反応を、もっと重く捕らえるべきだったのだ。

準備に不備はない。薬の類は完備し、武器の手入れも怠っていない。体調も良好で、共に幾多の戦場を駆けた友もいる。準備だけを見れば、十全とも言えるものはずだ。

結果的に言えば、それがいけなかった。

十全に整えた準備で、彼女の心に驕りが生まれた。

過去、ここまで準備してダメだった戦いはなかった。仲間たちとは歴戦の朋友だ。連携だって問題ない。

その驕りが、その慢心が、その油断が、現在の窮地を招いている。既に薬は半数を使い切り、体は空腹に身を擦る。規定の時間は、もう目の前まで迫っている。

だと言つのに、『奴』の偉容はゆるぎなく、その巨軀は絶えず彼女を圧倒し続ける。

『奴』の前では、高音のなんと小さいことが。今まで相手取ってきた強敵達が、まるで子供のようにも感じる。

その威容に、僅か気が吞まれた。

!!!

轟音。怒声。大音声を上げて『奴』がその尻尾を打ち払った。それだけで家屋の1つ2つを軽く薙ぎ払える大質量が、高音の矮軀を打ち据える。

為す術も無くその一撃をくらい、高音は風に遊ばれる木の葉の如く、何度も氷上を転がった。

3回、4回と天地が入れ代わり、巨氷の絶壁にぶつかって辛うじて止まることができた。とはいえそれだけ。既に高音は瀕死だった。

ツッ!!

『奴』が鑢のような顎を足元、氷の大地に突き刺した。『奴』固有の予備動作。これまでに何度も見た、遠距離攻撃の構え。

そのまま、頭と比べて尚大きいの首で氷を砕きながら顎を持ち上げた。砕かれた氷は周囲に飛散し、特に大きな氷塊が高音に向かって迫りくる。

真つ白な塊。純白の氷塊。それは圧倒的な質量を誇った『死』そのものだった。

この攻撃を受け、高音は便宜上の死を迎えるだろう。

だがそれでいいと、彼女は静かに手の平から力を抜いた。仕方がないのだと、諦めた。その白い死神を、いつそ微笑みすら浮かべて向かえようとしたとき……

ガギイン！！

見慣れた背中が、氷塊を弾いた。

「大丈夫ですか、お姉様」

「……愛衣」

「薬がないなら分けたげるよ。僕特製の秘薬が残ってる」

「……鷺志さん」

頬を張られた気分だった。

彼女が勝手に諦めていたモノを、二人の間はさも当然のように追い掛けていた。

いや、当然なのだ。

『奴』のためにどれだけ準備をしたことか。どれだけ苦勞をしたことか。

それを思えば、『諦める』なんて選択肢はありえない。

「お姉様？」

「……なんでもありません。さあ、仕切直しです！」

高らかに宣言し、高音は長年の相棒を脇に構えた。腰を落とし、肩を狭める。

決して退かぬ。そう誓った、突進の、前進の構えだ。

ゴリッ

と、足が氷を削り一步一步を力強く進んでいく。

長年の従者を視界に据え、頼れる後輩を背中に感じ、今高音は『奴』に向かって突進した。

一步一步に削れる氷は命の灯<sup>ひ</sup>。轍<sup>わだち</sup>と誇りを大地に刻み、凍土の王に突貫する。

『奴』まであと五歩。四歩。三歩……

勝つのは、私たちです！！

相棒の鉋きりが、  
『奴』の鱗うろこを、  
穿きっていく。

『目的を達成しました』

『QUEST CLEAR』

埒外 永久凍土（後書き）

モンハンって面白いよね！

## 第三十五話（前書き）

投票結果は作中で。

劣数だった方ごめんなさい。

やっと出てきました鷺志。出てきたのに……

## 第三十五話

Side・鷺志

『投票の結果、17：7で龍宮選手の勝利でーす!ー!』

楽しい雑談を終えて戻ってみると、いつの間にもやら2試合が消化されていた。エヴァの試合とか、割と観たかったかも。

「投票、つてことは時間切れ?」

「そうみたいやね」

「あの二人は伯仲してますからね。武器無しでも分けるとは、真名に流石と言うべきでしょうか」

「ですが派手ができないのは長瀬さんも同じでは?」

「どっちも不利でどっちもすごいってことですね」

「さよ、考えるの面倒になった?」

「少し」

このままアホの子になってしまうのだろうか?できれば勘弁してほしい。アホは性質の悪いアレだけで充分だ。

さて。長瀬さんと龍宮さんの試合が終わったということは、次は高音さん対ネギかな?

「あ、罪口さん」

「お、罪口のにーちゃん」

「ネギに小太郎か。なんか久しぶりだね」

「ただのイネ科の」「多年草だぜ」

「お前ら実は僕のこと嫌いだよ」

後ろで笑ってる女の子の声なんか聞こえない。聞こえないと思ったら聞こえない。

「これから試合だろ？高音さんと」

「はい。月詠さんはルール違反で失格になっちゃいましたから」

「取り合えず気をつけてね？高音さんは僕の準身内だから。試合だから多少のことは許すけど、もし僕の目に余る事があったら……  
……どうしてあげようか？」

「……き、気をつけます……」

完全に萎縮しきっているネギ。ちょっと脅かし過ぎたかな？『死』  
を使っ  
てないんだから怒ってないことくらいは伝わると思ったんだ  
けど。

なんていうか、あれだよ。怯える子供ってさ、胸に訴えて来る  
ものがあるよね。罪悪感的な意味で。

『次の選手は試合の準備を始めて下さい』

「ほらほら、呼ばれてるよ？」

「ううう……どうすればいいんでしょう？」

涙目で控室へと向かう10歳の少年。彼にはほら、考えても答えの出ない問題に直面したときの予行練習をさせてあげてるんだよ。エヴァも言ってたでしょ？『そのつもりがなくても鍛えたんなら師弟だ』みたいなニュアンスの言葉。だから僕はネギに『考えることの有用性』と『考えることの多様性』だけじゃなくて『考えることの泥沼化』を教えるべきだと思うんだ。師として。下手の考え休むに似たり、っていう諺もね？僕は決して子供を精神的に追い詰めて楽しんでいたわけじゃないし、子供を虐めて愉しんでいたわけじゃない断じてないだ。しつこいようだけど僕はネギのたぬを思っ

side・ネギ

控室で小太郎くんと向かい合う。もちろん次の試合の対策だ。

「どないすんねんお前。罪口のにーちゃんの、身内て。つまり地雷に向かってスパリングするよなもんやんけ」

「あはは……、まあ、少しくらいなら許すみたいなこと言っ  
て下さったし、試合の範疇なら大丈夫じゃないかな？」

「でも罪口のにーちゃん、過保護やない？」

「あはは……」

濁いた笑いしか、出てこなかった。

『この台詞も言い飽きた感が否めませんが、このカードを一体誰が  
予想できたでしょうかー！？』

朝倉さんの声がマイクを通して聞こえる。何度か言っているらし  
いその台詞は、だけど僕は聞き慣れないものだった。

っていつか、基本朝倉さんの実況を聞いてなかった気がする。生  
徒の話听不懂教師って、どうなんだろう……。

「どうも、ネギ先生」

ステージで対面しているグッドマンさんが僕を指差しながら話し  
掛けてきた。

「あなたの話は聞き及んでいます」

ステージで対面しているグッドマンさんが話を続ける。ギニー

特戦隊のリクームのポーズで。

「メルディアナの首席卒業。10歳でありながら外国で教師をこなす」

ステージで対面しているグッドマンさんが話を続ける。ギニュー  
特戦隊のグルドのポーズで。

「……キチンと生徒を律し、かつ親しまれているそうですね」

ステージで対面しているグッドマンさんが話を続ける。ギニュー  
特戦隊のジースのポーズで。

「……さすがに教師として申し分なし、とはいかないようですが、その上で魔法使いとしての修業を積み、かつ肉体的にも大きな成長を遂げていると」

ステージで対面しているグッドマンさんが話を続ける。ギニュー  
特戦隊のバータのポーズで。

「ちょっとこのおかしな体制なんとかできませんかー!?!?」

ステージで対面しているグッドマンさんが声を荒げた。ギニュー  
特戦隊のギニューのポーズで。

いやそれはどちらかというと僕の台詞のうような気がします。それにちつともおかしくありません。ギニュー特戦隊はカッコイイと思います。

「こほん、えつと……何が言いたいかといいますと……」

グッドマンさんは軽く咳ばらいをして再び僕を指差した。あれ？視線に微かな憐れみを感じる……

『Fighter!!』

「上手く避けて下さいね？」

「え？」

朝倉さんの声が聞こえたと思ったら、グッドマンさんは僕の鼻先まで迫っていた。

ガコンツッ！

顎に衝撃。掌底？

ズシンツッ

逆の手で鳩尾に縦拳。続けて腰を鋭く切りながら最初に突き上げた手を内側にたたみ、肘で顎を打たれた。慌てて半歩下がるも、今度は肘を伸ばしての裏拳が鼻面を強く打ち付ける。

グ、グッドマンさんってこんなに強かったの!？

薄く伝う鼻血を自覚する。折れてはいないけどこの鼻血はすぐには止まらないだろう。

「えーっと……、あなたはてつぶさん?をやっているようなので、鍛えようの無い首から上を狙いました。少しは頑丈な首を持っ

ているようですが、軽い脳震盪は避けられないでしょう」

「なんだかカンペを棒読みするような調子のグッドマンさん。僕は素直な驚きを隠せなかった。」

体格で劣る相手には、普通顎を突き上げるような攻撃は当たらない。

下から振りかぶる形になって予備動作が大きすぎるし、外した後隙も致命的だ。それをことなげに二度も成功させ、しかも僕の鉄布衫てつぷさんを見抜いていた。

グッドマンさん、強い。

「僕も、全力で当たらせてもらいます!!」

気合は充分。僕は足に気を集中させて基本の脚力を強化。瞬動のように瞬発力を上げるのではなく敏捷性の常時底上げだ。

タタッタッ

目の前で二、三回ステップ。体全体で回りながら背面に回り込む。その勢いで撃後脳を……

ドスッ

「ぐえはっ……!!」

グッドマンさんは振り返りもせず僕に僕の喉に足刀を打ち込んで見せた。

完全に見切られている……!?

「ちょ、スカートなんですから高いキックはやめてください!それに私はあまり体が柔らかくないんです!」

グッドマンさんがなにやら抗議の声を上げている。なんだろう?

「ゲホゲホツ!ウエツ、ガツハア!」

あまり威力が乗っていないのが幸いだったけど、それでも急所への一撃は重い。僕はステージに蹲って激しく咳き込んでいた。やばい、ちよつと出そう……。。。

「ネ、ネギ先生、大丈夫ですか?」

グッドマンさんが心配そうに声をかけてきた。腕を組んで仁王立ちしながら。

「……………」

さつきからグッドマンさんはどうしたんだろう?

「え?こんな状態の子供にそんなこと言っんですか?えつと……」

ブツブツと独り言を言ってから、今度は仮面ライダー2号の変身ポーズを取った。

「ネギ先生。あなたはまだ子供で、筋力的には女子中学生にも大き

く劣ります。その差を気や魔力で埋めるのは結構ですが、いまだ無駄が多いです。魔法の指導者を探しなさい。魔力の運用に無駄とムラがありすぎです」

うつ、痛いところを突かれたなあ。

気は罪口さんや桜咲さんを見てなんとか様になってきたんだけどね。

一応基本の魔法や遅延呪文なんかは復習してるんだけど、あまり派手にはできないからなあ……。罪口さんは『得意じゃないから』って魔法は教えてくれないし、タカミチは詠唱できないし……。魔法の師匠は僕も探してるんだよね。

「あなたは一廉の使い手になりつつある……。らしいです。『そつたくどうじ』という言葉がある……。らしいです。ええっと、それに相応しい者には相応しい時に天啓がある、とか？あぁ……。わかりました？」

解るわけが無い。『そつたくどうじ』ってなんだろう？日本語？卒礫？率卓？どうじは、同時でいいのかな？

けどまあ、言わんとするところは、なんとなくわかった。

「人事を尽くして天命を待て、ということですか？」

「ええ」と……。ええ。そのようです」

グッドマンさんは左手の親指を立てながら頷いて下さった。

「それが解れば大丈夫ですね。私はギブアップを宣言します」

グッドマンさんは立てた親指を下に向け、ギブアップを宣言した。さっきからあの奇行はなんだろう？っていうか……

『高音選手突然のギブアーーップ！？終始優勢に見えた高音選手ですが、本人達にしかわからない攻防でもあったのでしょうかー！？』

あ、あれ？勝ち？

S i d e ・ 鷺 志

エヴァって有名な【人形使い】ドールマスターなんだっけ？一度に何百体も人形を操ったとか。

凄いね尊敬しちゃうよ。

僕は一人を戦わせるので手一杯だった。

.

第三十五話（後書き）

鷺志「つまり僕はなにをしたの？解りづらい」

うぐ・・・！

そういう質問は個別に請け負います。解ってくださいった方もいらっ  
しゃると信じてるから！

鷺志「その方はよっぽど感がいい方だね」

解りづらいのは、自覚しています・・・

## 第三十六話（前書き）

感覚開きました。すいません。

ちよつとうちひしがれたり夏バテしたりしてました

## 第三十六話

「協力してくれてありがとう」

「いえいえ、鷺志さんにはお世話になっていきますから」

高音さんVSネギ戦の解説。

まあ僕が糸で高音さんを操ってただけなですけどね。声は糸電話の要領で届けてた。多少漏れてもいいように音使いのスキルと併用しながら。

「あの、鷺志さん。なんでご自分で直接言わなかったんですか？鷺志さんは、ネギ先生の師匠なんですよね？」

これは愛衣ちゃん。まあもつともな質問だよ。正直この質問は予想できたよ。

僕の返答は一つだけ。

「なんとなく」

「な、なんとなく……」

高音さんと愛衣ちゃんが揃って苦笑した。

「高畑先生が、『すっかり罪口くんに毒されて』っておっしやってましたけど、性格レベルで師事なさってるんですか？」

「まさか。あれは単にネギが影響されやすいか、あの性格がネギにハマってるだけだよ」

「以前高畑先生が愚痴ってました。『あの純粋な少年がすっかり狡猾に……』って」

「高畑先生は暗に、僕が狡猾だ、と言いたいのかな？」

「……………」

「……………」

え？なんで目を逸らすの？もしかして僕二人にも狡猾だって思われてる？

「茶々丸ー、愛してるよー」

《……………》

現実逃避のラブコールも応答無し。割と本気で凹みそう……………。

僕が肩を落として、二人に慰められていると、背後に重い足音。振り返らなくても分かる。こんな超重量級の足音は一人(?)しか出せないだろう。

「やつほつ田中さん」

「……………」

後ろにいたのは誰であろう、厳つい顔に口を真一文字に引き結んだナイスガイ。田中さんであった。

「罪口サンデスネ？」

「やだなあ他人行儀に。もっと砕けていいよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕の申し出をすっぱり黙殺し、田中さんはサングラス越しの視線を動かした。どうやら僕の背後、高音さんと愛衣ちゃんを見ているようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後田中さんは首を巡らせ、今度は茶々丸を凝視した。再度僕に視線を寄越し、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ズシンズシンと、DBの人外敵キャラのような足音とともに去って行った。

なんだったんだろう？

「今の方は、確か予選に出場なさっていた・・・」

「茶々丸の弟だよ」

「……絡繰さんの？」

「……遣伝子って不思議です」

かがくのちからってすげー！

っていうかあのレベルの人型ロボットってもはや超科学だよな。  
まあ100年後の科学だし、すぐくて当然かもしれないけど。

そのうちボンボン作品みたいなロボットとか造れないかな？……  
……今度試してみようかな。

「守りましょう食卓を。みんなで防ごうつまみ食い！」

「咲かせましょうお米の花。散らしましょう悪の花！」

僕と愛衣ちゃんは無言で握手を交わし、高音さんは一人首を傾げていた。

雑談してたら小太郎の試合終わってた。

今小太郎逃げてネギが追っかけるのを自重（！？）したところ。  
長瀬さんが追っかけてったし、多分原作通りの流れでしょう。

それはさておき。次は僕の試合である。

『このカードを誰が予想できたでしょうカーカー！?』

スピーカー越しに朝倉さんの声が響いた。そのフレーズいい加減飽きてきました。

「よう吸血鬼」

「やあ曲弦師」

「それ一応秘密だから公衆の面前で言わないで？」

「ダンのことだ。どうせその辺りの対策も万全なんだろう？」

「まあね。否定はしないよ」

「ならいいじゃないか。そんなことよりこの試合、奇しくも糸使用同士だ。見ている側にはつまらないかもしれないが、この機にどちらの糸が上か、はつきりさせないか？」

「おいおいエヴァ。それはちょっと無理があるぜ？なにせエヴァの糸は多数の人形を操るためのもの。僕の糸は人間を拘束、殺害するためのもの。土俵が違うんじゃないか？」

「なあに、どちらも人型に使うものじゃないか。多少の応用くらい効こうさ」

「まあそうかも知れないけどさ。でもそうすると、無風状態の今、

予め周囲一帯を糸で囲ってる僕の方が有利じゃないかな？」

「その程度の優劣、いいハンデだ。先達として譲ってやる」

「それは有り難い限りだね。でも僕には音使いのスキルもあるんだよ？口と指は別の器官だ。多少引きずられはしても、両方使える僕は有利すぎないかな？」

「ふん。その程度の不利、私が呑み込めないと思うのか？」

「なんかすっげー死亡フラグいつてますけど？なんか噛ませ犬っぽい台詞ですけど？いままでそんな台詞吐いて噛ませ犬じゃなかったのって英雄王くらいじゃね？」

「なら私が二例目だな」

「……随分余裕だね」

「いや、楽しもうと思ってるだけだ。せつかくの学園祭だぞ？」

「もう何度目かしないのに？」

「お前達と過ごすのはまだ3回目だ」

なにこの子。可愛い。

「じゃあ僕は音も使っていいんだね？」

「もちろんだ」

「まあせつかくの申し出だしね。そうでなくても、そんな挑発されたら燃えちゃうよ」

「ふん。ダンも血気盛んな若い男というわけだ？」

「その言い方なんかやだね。っていうか中学生なんて『若い』じゃなくて『幼い』じゃない？」

「私からすればそんな違い、瑣末ですらない」

さっすが600歳。そんだけ生きてたら全人類が幼いか。

『……………それでは、試合……………』

おっと、話し込んだじゃったかな。もはや朝倉さんの話を聞き流すのが基本姿勢になっている。ちょっと哀れ。

「僕の糸は広いよ？」

「私の糸は器用だぞ？」

僕とエヴァの軽い鞘当てが終わった頃、

『開始イーツー!!』

「エーミットム解放!!!!」

「闇の吹雪!!!!」

「紅き焰!!!!」

僕とエヴァの中心、より若干僕寄りの位置でせめぎ合う氷と炎の  
中級魔法。

数瞬の拮抗の後、僕の放った紅き焰が弾かれた。

「つちよおおおい！」

迫る闇の吹雪を横っ跳びに転がって避ける。さっきまで立っていた足場が爆風と氷の礫で砕かれた。

「てめえこら嘔吐き！糸の勝負どこいった！？嘔吐き！！」

「まかり間違ってもお前にだけは言われたくないな……。それにこれは嘘じゃない。虚報を交えた兵法と言っただよ。大体ダンだって糸じゃないじゃないか」

「え？だって僕糸の勝負に乗るなんて言ってないよ？ルール確認しただけで」

「嘘を吐かなきゃいいってもんじゃないだろう……。」「

エヴァが心底呆れた風に僕を見遣った。なに？僕なんか変なこと言った？

先程の魔法よりも冷たいエヴァの視線を受け流し、僕は改めてエヴァと対峙した。

「ちなみにさ、僕エヴァの呪いを解いた覚えはあっても結界をどうこうした覚えはないんだよね？今の魔法ってどうなの？」

「確かに結界は未だ私を戒めているが、ダンが来てから茶々丸も随分と優秀になった。私も研鑽は怠っていない。簡単な魔法くらいは扱えるさ」

嘘つけ。どうせ別荘で弱めの魔法遅延させといて、こっちでもギリギリで遅延維持してた、とかその辺だろうが。

……僕が覚えてないだけ、とかないよね？うん。大丈夫だ、ない。ないはず。

「じゃあ身体能力も魔法も一般人並？」

「そうなるな」

それでも侮れないんだよね。原作でも刹那軽くあしらわれてたし。僕も、慢心してたらあつという間にやられるかもしれない。

「だから最初から全力で行こう」

暗器の大盤振る舞いだよ。せつかくの作品の数々、死蔵するには勿体ないからね。

「刺殺殴殺絞殺圧殺毒殺、くらいかな？今できそうなのは」

学ランの裾から無数の武器を吐き出す。刃物はもちろん刃引きを済ませてあるものだけを。鈍器はそのまま。

長柄のもので突いたり叩いたり打ち据えたり、短柄のものを投げたりしながら素早く移動する。

「ふん」

自身に迫る武器の壁を一瞥し、エヴァはつまらなさそうに鼻を鳴らした。スカートのポケットに手を突っ込み、何かを放る。

パリンツ・・・

ズドンツ！

放られた試験管が砕け、そこから巨大な氷柱が現れた。僕の暗器はその氷柱に阻まれ、その間にエヴァは僕に肉薄していた。

「ふっ！」

エヴァが繰り出したのは、なんの変哲も無い凡庸な掌底。速度も狙いも平凡そのもの。神鳴流の研鑽を積んで、仏様からチートを買った僕には手の皸まで見える掌底だ。

ゴスン・・・！

しかし僕は、その掌底を鼻面にくらった。

カカツ、トツ、クルン

その掌底を皮切りに、エヴァの動きが始まった。

掌底で止まった僕の体に自分の矮躯を近付け、足を踵に付けて腰を落とし僕をグルリと引き倒した。

「カフツ」

大した力も載せずに喰らった投げだが、背中全体から落とされた僕はしつかりと絶息した。エヴァはそれを逃さずに追撃を仕掛けてくる。

仰向けに倒れた僕の喉に爪先を突き刺し、そのまま鳩尾に膝を落とした。体が近くなったエヴァはそのまま僕の股関節を取ろうと手を伸ばした。

たまらず、僕は糸でエヴァを拘束して体の下から抜け出した。

「殺す気か!？」

「それくらいししないと倒せんだろうが。今の私は一般人程度の運動能力なんだぞ?」

「600年の経験と大群前にして引かない胆力持つといて何が一般人だ!! 気当たりが半端じゃないんですけど!？」

完全に本気の殺気を当てて来やがるこのよロリ娘。足がすくむ一瞬を狙って的確に攻撃に繋げてくる。こんな幼女嫌だ。

「いとも簡単に僕の拘束抜けやがるし」

「さもないと何をされるかわかったものじゃないからな」

「殺す気でいかないと殺されるって? 勘弁してよ」

「私も本意ではない、と言わせてもらおう。それにダンも、まだ本気じゃないだろう?」

「いいとも。認識阻害が大忙しになるくらい暴れてやる」

「全力を尽くせ。さもないと私は倒せないぞ?」

まったく。とんだ糸勝負もあつたもんだ。

『ご覧下さい!今までの試合がまるで前座だったかのよう!!--この二人は何かが違うあー!!--!』

ステージ上、僕らの足元は惨憺たる有様だった。

攻撃の被害にあつてめくれ、波打つ床板。

投げたまま、弾かれたままで転がる投擲武器。

直接打ちにいつて碎かれた打撃、斬撃武器。

ズタズタになった手摺りや欄干。

碎けた試験管やフラスコと、そこかしこにそびえ立つ巨大な氷柱。

「・・・そこらのフラスコ、軽く50は越えてると思うんだけど、エヴァいつの間にか暗器術使えるようになったの?」

「お前は何度私の前でそれを使った？『学ぶ』という言葉の語源は『真似ぶ』というらしいぞ？」

「つまり見よう見真似かよ。呆れるぜ化物」

「ほめことば、と受けとっておいてやる偽物」

盛り上がってきたところだけど、いい加減に決着を付けないと15分になってしまう。

仕方がない。決めにいこう。

グンググニグニツ、と複雑に指を蠢かす。それに合わせて微細微小な不可視の糸が展開された。

「エヴァ」

解放 戒めの風矢

「『動くな』」

「むっ!？」

曲弦系による拘束と音使いでの精神&肉体操作と魔法、三重の拘束術だ。どれだけ老獪だろうと、これはすぐには抜けられまい。

いやまあ、音と糸使ってる時点で抜けられる心配は、本来不要なんだろうけど。

「悪いねエヴァ。ちよつとだけ痛いかも」

そんな状態のエヴァに接近し、懐から最後の手段を4本、取り出した。

「……！白木の杭……！」

驚いた様子のエヴァを仰向けに倒し、手足にそれぞれ1本ずつ深々と突き刺した。

エヴァの小さな手足を用意に貫通せしめた杭はそのままステージに食い込み、彼女の小さな体を磔はりつけにした。

「朝倉さんカウンター」

『え！？あ、ええと……わ、1！……2！』

「やれやれ、いくらなんでも酷いんじゃないか？ここまですることはないだろう」

「本気で来いつていったのはエヴァだろう？」

「前もって杭を持っていたということとは、そう言わなくてもこつするつもりだったんだろう？」

「いやまあそれはそうなんだけどね？ここは言い訳の一つもしかなきゃいけないような気がして」

血を流しながら縫い止められている少女とお喋りする男子中学生（返り血有り）って、かなり猟奇的な絵面だと思つ。

「それに、確かに今は僕の方がスペック上かも知れないけど……」

『10!!この勝負、罪口選手の勝利です!!』

「格上相手に、手加減なんかできないよ」

### 第三十六話（後書き）

エヴァ串刺しにしてみましたけど、いつそ鷺志に学園結界なんとかさせて吸血鬼の本調子にしとけばよかつたと、今思いました

鷺志「なんで？僕の勝ち目薄れない？」

だつてさ、回復するなら遠慮なく手足落とせんじゃん？

鷺志「どんっただけ手足落としたいんだよ……」

## 道外 ありえた戦い（前書き）

前回、糸勝負を強調した意味が分からない。とのメッセージを受けましたのでここに一筆。まあネタを自ら解説するなんて寒々しいものですが……

前話のエヴァと鷺志の会話をちょっとだけ注意して読んでみてください。ちゃんと『いと』勝負してますから。

気づかない人は気づかなくていいですよ！深い意味なんてありませんから！！

## 道外 ありえた戦い

つついっいやり過ぎてしまうことってあると思う。熱中して行き過ぎてしまうことってあると思う。

やらずに後悔するよりやって後悔する方がいい、とは社交的な宇宙人の言だが、ならばやり過ぎてしまった場合はどうすればいいのだろうか？

いやまあ、『どうする』といっても結局は後悔するしかないのだけれど、『やって』後悔するのか『やらずに』後悔するのか『やり過ぎて』後悔するのか、いったいどれがいいのだろうか？

「さぎくん？うちの話聞いてる？」

僕は今、やり過ぎて後悔しているところです。

「いくらそういう試合で、エヴァちゃんが納得しとっても嫁入り前の女の子の体に大穴を……（クドクド）」

正直、申し訳ないです。やり過ぎました。

朝倉さんは普通にカウント取ってくれたけど、その後次の試合までは15分間の休憩が入った。

エチケツト休憩だ。本来とは違う用途でトイレが混んでいるらしい。

「コ、コノカ、私は大丈夫だからその辺で・・・」

「あきまへーん。さぎくんには家族に大怪我させた大罪を自覚させますー」

「・・・・・・・・・・」

へへっ、エヴァって『家族』っていうとちょっと照れるんだぜ？

「さぎくん、今うちの話聞いてへんかった」

木乃香ちよつと怖い。

木乃香のお説教を終え、次の日曜日に荷物持ちを快諾し、どこぞの誰かが地下に入って超の調査に乗り出した頃には、既に次の試合の準備が終わっていた。ステージ上では刹那と長瀬さんが向かい合っている。長瀬さんは一見手ぶら、刹那はデッキブラシ装備だ。

両者準備は万端。気合充分といったところか。

『それでは、試合イーーーーー・・・・』

復活した朝倉さんがマイク越しに若干の憔悴を漂わせ、大きく間を空けた。ためて、ためてためて・・・

『かあいしーーーーー!!!』

あのテンション、半ば自棄だな。

最初に動いたのは刹那だった。持ち前の俊敏さを活かして長瀬さんの背後を取る。それを感じた長瀬さんが右足を跳ね上げたときには、刹那はもう彼女の正面にいた。

「はあっ！」

裂帛の気合と共に放たれる裂空の突き。吸い込まれるように長瀬さんの右肩に当たったブラシの柄は、まるで豆腐をそつするように容易く体を貫通した。

「っ！？」

それに驚いて動きが止まるほど、刹那も初心ではない。現象と感觸の違和感を瞬時に悟り、その身を沈めて間一髪、頭上の長い足をやり過ごしていた。

しゃがんだ姿勢のまま手の中でブラシを回して軸足に一閃叩きつけ、立ち上がりざまに顎を掌底で打ち抜いた。

今度こそ実体を捉えた刹那ではあったが、手ごたえの小ささに齒噛みする。足払いが掌底か、どちらかに絞れば効果はあっただろうに。

長瀬さんは足を払われるままに任せ、倒れざまに首を回して顎へ

の打撃を化していた。

それでも体制を崩していることには変わらない。刹那は逆の手で追撃を試みた。

長瀬さんの胴体を打とうとするブラシを止めたのは、長瀬さんの体を貫通して飛来した鉄の棒だった。カキーン、と硬い音を立ててそれがステージに落下する。

投げたのは当然長瀬さん。現在ステージ上には今しがた風穴の開いた長瀬さんを合わせて5人の長瀬さんがいた。

「……どれが本物か、見破れるかな?」「」「」

「どれかは本物なのだろうか?」

長瀬さんの挑発を軽く流し、刹那は4人の長瀬さんに一気に肉薄した。バラける前にまとめて倒そうという腹だろう。

ブラシの頭部分で側頭部を殴打し、1人撃破。

振り抜いたブラシを持ち替え、柄で2段突き。2人撃破。

最後の一人には正面に瞬動を掛けて正対し、白打での応酬を仕掛けた。細かな位置調整は全て瞬動で行う、どこかで見たことのある白兵戦だ。

もとより素早い刹那のこと。長瀬さんはやがて対応し損ねた一撃を足元に喰らった。軸足を刈られて両足が宙に浮き、一瞬完全に空の人となる。

さらに追い討ちを掛けようとする刹那だが、そこは長瀬さんも、文字通りただでは転ばない。

完全に倒れきる前に払われた足を跳ね上げ、刹那の股下を狙って蹴りを繰り出した。なんとつま先を立てていやがる。

誤弊のないように言っておくが、ヴァギナはただの生殖器でも排泄器官でも生命の神秘を如実に顕す器官でも男子中学生の知的好奇心を変わらない吸引力で吸い寄せる器官でもない。ダイレクトに内臓にアクセス出来る、直接内臓を傷つけられる、脆弱な弱点だ。

少林寺では重りを付けたり叩いたりして金的すらも鍛える修行があるそうだが、こちらはそうもいかないだろう。何せ鍛えようがない。鍛えるべきものが無いのだから。

「ふっ！」

不法侵入を試みるつま先は、しかし刹那の両膝にしっかりと捕らえられた。空手の三戦立ちの立法だろう。

その拘束を力づくで外し、長瀬さんは大きく距離を取った。スピードファイターとは距離を詰めたほうがまだしもまださと思っけどね。

「……………今の蹴り、表の試合で使うものじゃないんじゃないか？」

「先ほど罪口殿も言っていたでござろう？格上相手に手加減は出来んぞいぢやる」

「私と楓は同格だと思っているが？」

「とんでもない。刹那は圧倒的な強者を身近に感じている。強者を織っている。これは随分な強みでござろう」

「それもそうか。私の稽古を付けてくれたのは、英雄と神童と高額  
の賞金首だからな」

「加えて、悔しいことに拙者は速度において刹那の後塵を拝している  
でござる。麻帆良に来るまでは、駆けっこで負けたことは無かつ  
たのでござるが・・・」

「神楽坂さんや春日さんがいるだろう」

「授業で本気を出しても悪目立ちするだけでござろう？」

「いつそ傲慢とも取れる長瀬さんの言葉だが、実際彼女に追いつけ  
る人なんてそうそういないだろう。忍者（公然の秘密）だし。」

「それよりな楓」

「な、なんでござるか？顔が恐くなっているでござるよ？」

「試合を続けよう。私は今、かつてないほどのやる気に溢れている」

「もしかして怒ってるでござるか？ものすごく怒っているでござる  
ね？」

「ははは、おかしなことを。私が一体何を怒ると言うんだ？」

「例えば、大事な人に捧げたかったのに危うく純潔のまま破瓜の危機」

「真・雷光剣！！！」

女の子が公衆の面前で破瓜とか言うんじゃないやありません。

放った奥義は長瀬さんをしっかりと打ち据えていた。大丈夫、きっと生きてる。

「これで、次の試合は僕対刹那だね」

「はい！全力で当たらせて貰います！」

元気がいいねえ。そういえば組み手なんてもう随分やってない気がする。さっきの様子だと成長は著しいみたいだし、僕もチョット楽しみだ。

「さぎくん。間違ってもエヴァちゃんのとくみみたいなことはあかんえ？」

「わかっててるよ木乃香。僕だってその程度の分別はつくさ」

「ほならそもそもエヴァちゃんにあんなことせえへんかったらええの……」

「ご機嫌斜めはしばらく続きそうだった。」

道外 ありえた戦い（後書き）

鷺志がその場にいたので選手の視点ではなく鷺志の視点で進めさせていただきました。

鷺志「刹那たちの視点で見たかった方、ごめんなさい」

一応、主人公ですので・・・

## お詫び

申し訳ありません。

先日投稿した三十七話ですが、刹那の対戦相手を間違えました。正しくは龍宮真名であるはずのところ、長瀬楓で書いてしまいました。

現在龍宮真名で執筆を進めております。申し訳ありませんが今しばらくお待ち下さい。  
ストーリーが進むのはその後とさせていただきます。

教えて下さったiss14848j様、お手数をお掛けしてすみません。どうもありがとうございます。

先日の三十七話は番外編として『道外』とタイトルを改めました。

灰色

### 第三十七話（前書き）

やっと投稿できる・・・

携帯バッテリーは短命なご様子。

今日休みでよかった・・・

お待たせしました。刹那VS真名さんです。

## 第三十七話

ついついやり過ぎてしまうことってあると思う。熱中して行き過ぎてしまうことってあると思う。

やらずに後悔するよりやって後悔する方がいい、とは社交的な宇宙人の言だが、ならばやり過ぎてしまった場合はどうすればいいのだろうか？

いやまあ、『どつする』といっても結局は後悔するしかないのだけれど、『やって』後悔するのか『やらずに』後悔するのか『やり過ぎて』後悔するのか、いったいどれがいいのだろうか？

っていつかこの思考なんかデジャヴユ。

「さぎくん？うちの話聞いてる？」

僕は今、やり過ぎて後悔しているところです。

「いくらそういう試合で、エヴァちゃんが納得しとっても嫁入り前の女の子の体に大穴を……（クドクド）」

「ちょ、ちょっと待ってよ木乃香。このお説教なんか前にもしなかった？」

「してへんよ。さぎくんが二回も大事な家族に怪我させとったらウチもっ爆発しとるもん」

「……………」

『家族』に反応して若干照れてるエヴァ。ってやっぱりどうして  
もデジャヴユが……？

木乃香の説教を終え、エチケット休憩を終え、次の休みに麻帆良  
の『家族』全員を食事に連れていく約束をさせられた頃、ああ後、  
どこかの誰かが超の調査に乗り出したらしい頃、ステージ上では両  
選手が準備を終えていた。

前回同様、ゆったりした衣服に身を包んだ真名さん。

前回と同じ魔改造メイド服を着込み、前回と違い木刀を手にした  
刹那。ちなみにあの木刀はメイドイン罪口。

二人とも口元に微かな笑みを浮かべている。

「刹那とは、一度戦ってみたいと思っていたんだ」

「私もだよ。真名は四天王の中でも1番場数を踏んでいるからな」

「経験なら刹那も負けてないと思うけどね。何せ師が段違いだ」

「それもそうか。私の稽古を付けてくれたのは、英雄と神童と高額  
の賞金首だからな」

んー？なんつか聞いたことあるような？

『試合、かあいしー！！』

僕が拭いきれない既視感に首を傾げている間に、朝倉さんの自棄気味の関の声が上がった。

声と同時に素早く動く両雄。真名さんはいつの間にか手に落としていた硬貨を一息に弾き出し、刹那はその射線から逃げつつける。

刹那の駆けた後は床板が弾け硬貨が転がり、徐々に全体の足場を悪くしていった。このまま逃げててもじり貧だよ、刹那？

刹那もそれは解っていたのだろう、程なくして動きを見せた。

「はあっ！」

神鳴流、斬空閃。

飛ぶ斬撃が硬貨を食い破りながら真名さんに肉薄する。それを見た真名さんは口元で薄く笑い、二度硬貨を撃って素早く転がった。

驚愕に目を見張った刹那の頭部が、横から撃ち抜かれて大きく傾ぐ。

「っ！？」

突然の衝撃に驚き、刹那の足が止まってしまった。真名さんはその隙を逃さず連射を再開。再び瀑布のような弾膜が張られる。

一度足を止めてしまった刹那は、その弾膜に縫い止められる形な

る。下手に動こうとすれば瞬く間に全身を撃ち抜かれるだろう。

手にした木刀を目にも止まらぬ速さで縦横無尽に振るい、奮う。

何十何百と硬貨をたたき落とす刹那の可愛い小顔が、再び横から弾かれた。

「くっ……！」

しかし今度は硬直しなかった。撃たれた直後に大きく跳び、完全に射線から外れる。そこから刹那は声を投げた。

「驚いたな。どうやってるのか教えて貰えないか？正面の相手に横から撃たれるなんて、初めてだ」

対する真名さんも、大きく肩を竦めて応じた。

「私も実践したのは初めてだよ。弾丸と弾丸の射線を重ねて、弾いた弾丸で物陰の対象を撃ち抜く技術だそうだ」

なるほど。人間離れしている。

「以前鷺志さんに借りたライトノベルに出て来た技だよ。『ビリヤード』とかいったかな？」

HSSなしで出来るのかよ。あれ一応主人公の必殺技の一つだったと思いますけど？

「ちなみにこんなことも出来るよ」

そういつてビシツと硬貨を弾いた真名さん。

なんとその硬貨は空中で二度三度と動きを変え、最後には真名さん自身の手に戻っていった。

って今の感触、まさか……。

「鷺志さんが張ったんだろっね。そこら中が糸だらけだ。今のはその中から特に頑丈な、切れないものを選んで弾かせた結果だよ」

十重二十重と張り巡らせた糸の中から、鉄綱糸だけを見抜いてイレギュラーさせたって？

魔眼持ちスナイパーって凄い。超凄い。

「確かに感心するが、手の内を晒してしまっているのか？それとも私にはそれで十分だという余裕の現れか？」

「まさか。ただ自分の技術を自慢したかっただけさ」

「それこそ真名らしくないな。裏がありそうだ」

「裏、か。強いて言えば、すっかり置いてきぼりの観客に解りやすい『凄いこと』を見せてあげようと思ってるね」

「いつからエンターテイナーになったんだ？」

「この大会の間だけさ」

そうすると、本格的に苦手な距離が無くなったね。加えて苦手な



瞬動で立ち位置を微調整しながら立ち回る刹那と、その打撃を少しずつ急所から反らしている真名さん。

極近距離での高速の連打に、真名さんは連射で完全に対応していた。木刀の軌道を反らし、余裕のある袖で巻き、懐の硬貨の束で防ぐ。

一見すると刹那の優位だが、決して退かない真名さんも文字通り負けていない。

ネギは目を見張って試合の趨勢を凝視している。どんな些細な攻防も見逃すまいとしているのだろう。

でも、最後の刹那の動きは見切れなかったはずだ。

キュッ

「斬空閃！」

ト、トンッ

「斬岩剣！」

「っ！？くうっ・・・！」

一度離れて斬空閃。二度瞬動をかけて背後に周り斬岩剣。

放たれた斬撃が届くまでの間に背後から今度は直接の近接技。刹那クラスの速度があつてようやく可能な神鳴流の合わせ技だ。空いていは前後、あるいは左右から同時に迫られることになる。

ちなみに僕は三つ飛ばして前後左右の四方から攻めることもできたり。余談だけど。

「これは・・・ふつつ、重い攻撃だね」

その二打一撃を受け、前のめりに倒れた真名さん。女の子なんだから、顔は守ろうよ。

『龍宮選手ダウンー！カウントに入ります！』

「・・・真名、お前・・・」

「勘違いしないで欲しいね。今の私は雇われの身。盛り上がる方に転ぶのが仕事さ」

「だから、余力があっても終わるのか？」

「私としては、仕事をこなすのが勝利だね」

「・・・わかった。この屈辱的な敗北しやうりは受け取るっ」

「そんな苦い顔の勝者がいるものか。もっと嬉しそうにして欲しいね」

「今度はぐうの音も出なくするからな」

「ふっ、その時は私も得物を持つてるよ」

「それは私も同じだ」

『10ー1ーッ！勝者桜咲選手ー！！激戦をおさめたのは剣道部のメイドさんだったーッ！！』

なんだか納得いってないようだけど、ひとまず刹那の勝ち。

「これで、次の試合は僕対刹那だね」

「はい。全力で当たらせて貰います」

元気がいいねえ。そういえば組み手なんてもう随分やってない気がする。さっきの様子だと成長は著しいみたいだし、僕もチョット楽しみだ。

「さぎくん。間違ってもエヴァちゃんのときみたいなおことはあかんえ〜？」

「わかっててるよ木乃香。僕だってその程度の分別はつくさ」

「ほんらそもそもエヴァちゃんにあんなことせえへんかったらええのに・・・」

「機嫌斜めはしばらく続きそう・・・いややっぱデジャヴユ。前にもなかったっけこの展開？」

.

### 第三十七話（後書き）

鷺志「結果を無視するんじゃアンケートとる意味がないね？」

・・・はい。

鷺志「それとも皆さんの記憶力なめてるのかな？」

いえそんなことは・・・

鷺志「じゃあもう二度とこんなことが無いようにね？」

・・・胆に命じます

## 第三十八話（前書き）

やっと出来ました

こんなネギでいいのか、ちょっと悩みました。多分いいはず

## 第三十八話

準決勝。

ネギ 対 クウネル戦。

原作ではネギの活力の一端を担う戦い。重要な成長を促すはずのものだけど、正直このネギは原作よか大人っぽいと思う。

原作のは父親につけられた傷を記念に残したりとか正気を疑う愚行に出たりもしたね。気持ち悪い。

どんな勝負を展開するのか、っていうか勝負になるのか、いやその前段階で口上も気になるね。掛け合いとかさ。

ポップコーン（うす塩が正道。キャラメルは邪道）とコーラとフライドポテトを装備して、僕は木乃香達と観戦の準備を整えた。

せめて面白いといいなー。

『出ましたクウネル・サンダー選手！口元には余裕の笑みを浮かべている　　！！』

例によって例の如く朝倉さんの実況を聞き流し、僕は（木乃香達

に手ずからポテトを食べさせながら）ステージに揃った二人を見ていた。

未だフードを被ったままのクウネルと、ローブを着込んで三才式に構えるネギ。やがて朝倉さんの前口上が終わり、ようやっと開戦の音頭が取られた。

『 F i g h t ! ! 』

す・・

それを合図に、クウネルは懐から一枚のカードを取り出した。ここからでは柄は確認出来ないが、十中八九アーティファクトカードだろう。

同時にクウネルの回りに無数の本が巻き上がった。

『何かクウネル選手を取り巻いて・・・、本のように見えますが』

「フッフ、本当は決勝で劇的な対決、というのが理想だったのですが、さすがにそこまで面白くはなってくれませんか。反対のブロックを勝ち進む方に期待しましょう」

おいサラツとハードル上げんな。僕にはせいぜいギネスに乗るくらい愉快的死体を造るくらいしかできないぞ。

「我が名はアルビレオ・イマ。サウザンドマスター千の呪文の男・・・、ナギ・スプリングフィールドの友人です」

我が名（笑）キャラ作ってんのかね。

僕が笑撃を受けてネギが衝撃を受けている間に、クウネルは自分のアーティファクトの効果を実践して見せている。

ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ。

詠春さん。

……、あー、フルネーム忘れた。スプリングフィールドだっけ？取り合えず、ネカネさん。

……アーニヤ。

「……6年前……、6年前の雪の日のアレは……クウネルさんなんですか!？」

「6年前……私は何もしていません」

クウネルのその言葉が合図であったかのように、彼の体を芯に光の柱が衝き上がった。周囲に螺旋の円環を纏ったそれはすぐに霧散し、その根本、先程までいたカビ臭い男はどこへやら。

演出過剰気味な純白の鳩と異常に抜けた羽毛に彩られ、精悍な顔立ちの赤毛の青年が現れた。

「よお。お前がネギか？」

口の端を吊り上げて爽やかに笑い、その青年は声掛けた。

「と……う……さん」

「ぺっぺっ、なんだよこの大量の鳥は。またアルのヤローの過剰演出か？」

目に涙を湛えて呆然と、恍惚と呟くネギ。青年は口に入った羽を吐くのに四苦八苦ししているようだ。

「父さんっ!!」

感極まった様子のネギが青年に向かって駆け出し、すわ観客が感動のか、と身を乗り出し、青年も爽やかな笑みを浮かべて腕を広げた。

そのまま涙を散らしながら青年の元まで走り寄るネギ。青年の数歩手前でグツと腰を落とし、

「両腕解放、雷の暴風×2ツ!!!!」

ドツゴゴゴゴオオオオ  
!!!!

懇親の遅延呪文を吐き出した。

「な、な、何事だ　　ツ!!??感動の親子対面シーンかと思いきや、本大会で1番の大技が炸裂したーッ!!ちよ、これ人死んでない!?!」

まあそこはそれ。ネギもキチンと斜め上向けて撃ってるしちよつと屋根が削れたくらいだよ。僕も頑張ってるしね？

まあそれはそれ。気になるのはステージ上の両選手だ。

ネギは呪文解放後すぐさま後退。再び三才式を取っている。

対する青年、ナギは、爆煙の晴れたステージ上で悠然と突っ立っていた。右腕を斜めに上げているところを見るに、どうやら片手で防いでいたらしい。バグめ。

「ああー……、ネギ、じゃねえのか？俺の息子の？」

まあ自分の息子が出合い頭に殺しにくるとは思わないだろう。よっぽどの事がないかぎり。

「僕はネギ・スプリングフィールド。あなたの息子ですよ」

「おお、やっぱりそうか！しかもお前、いきなり魔法攻撃なんてどういう……」

「ああゴメンなさい。親に教わった事がなかったもので」

……お？

「あなたが僕の父ですか。確かによく似た顔立ちですね」

「そうか？俺はもっといい男だと思うんだが」

「おや、育児放棄をするのがいい男ですか」

あはは……

「な、なあんかトゲがねえか？」

「当然でしょう!!」

ネギ、切れた。

「なんなんですかあなたは!? 英雄だか立派な魔法使いだか知らないけど、それは子供を放っておく大儀名分になるものなんですか!」

「子供はプラモデルじゃないですよ!? ほいと造ってはいい終わりのオモチャじゃないんです! 水と炭素とアンモニアと石灰と燐と塩分と硝石と硫黄とフッ素と鉄とケイ素と微々の元素があって生命の神秘で生きてる人類なの!!」

「もつと簡単に言えばXYとXXのDNAの雫が受精して着床して愛と慈しみと栄養を臍帯越しに受けとって育ってるの!!」

「それを何!? 生まれの村に放置して、音沙汰無し!!」

「どこで何をしてたのかは知らないし興味も無いけどね、僕の養育費とかどうなったの!? まさかとは思うけど僕の父親は英雄とか持て囃されて子供まで造っておきながら親の脛をかじってたつていうの!?!」

「英雄がなんぼのものか知らないけどね、忙しくなるとか危なくなるとか、少しも予想出来なかったの!?!」

「英雄ってことは信奉者と同じ数の敵がいるってことでしょうか! 仮に僕の身を案じてくれたんなら、そもそも子作りなんてしなきゃいいの!?!」

「生まれても育てられないんじゃないでしょうか!?! そんな事も考えられないの!?!」

「それともなあに? 愛の形でも確かめなくなったの? まさかとは思うけどいつ危険があるか解らない状態で劣情に負けた訳じゃないよね!?!」

「僕を身籠っている間の母さんはどうなったの? 父さんが守って

た？流石にそれぐらいはするか」

「ずっと気になってただけだ。僕の母親って誰なの？英雄の伴侶なら有名になってもおかしくないと思うんだけど、なんでか噂にならないよね？」

「もしかして噂になったら危ない人なんじゃない？いや勿論どんな意味で危ないのかは知らないけどさ」

「僕としては父さんよりも母さんの方が気になるよ。勿論ゴシップ的な意味じゃなくてね」

「そして是非とも聞いてみたいものだね。一体父さんのどこに惹かれたのか」

「その理由は、出来れば本屋で同じ本を取り合ったとか学校で教科書を貸し借りしたとか曲がり角でぶつかったとかであって欲しいね。命を助けられたとかでなくってさ！！」

ネギは顔中を涙と鼻水でグズグズにしながら慟哭した。

いやはやブチ切れてるね。ブツ切れてるね。ネギみじん切りだ。

ナギがどんな顔をしているのか、微かに俯いたその表情は、長めの髪で隠れてよく見えない。

### 第三十九話（前書き）

前話同様短めです。

ポップコーン（キャラメル）が好きな方、結構いらっしやいました。僕はどうも、あの甘いのかそうでないのか判然とし難いのが苦手です……

## 第三十九話

ネギ 対 ナギ

このカードは僕にとって、そして恐らくはアルビレオにとっても、一種の演目のようなものだった。

アルビレオは友人の子と友人の、見慣れぬ親子劇を期待し、僕は単純に原作では描かれなかった戦闘が気になった。僕が手を加えたネギだしね。

しかしその期待、あるいは予想、ないし推測は脆くも崩れ去ってしまったと言えるだろう。

おとーさんだいきおかーさんはよく知らない状態の、エレクトラコンプレックスに真っ向から喧嘩売っているような純朴（笑）少年が、その父親相手に不意打ちをかますなんてね……

期待よりも面白い勝負になりそうで、喜ばしい限りだよ。

「……………」

ネギの言葉を受けて尚、ナギは動かなかった。

何も言わないし何もしない。ただ軽く俯いているだけ。原作のイメージではなんだか適当な根性論を並べ立てて問答無用で拳骨振るう感じなんだけどね。

「……………」

ネギはようやく落ち着いてきた様子だ。涙と鼻水をローブの袖で乱暴に拭っている。

「……ネギ」

それを見て、ナギは口を開いた。

「お前が怒るのはもつともだ。お前が言うことはもつともだ。偽物おれには反論らしい反論はできないし、しない」

あるえー？なんかまともっぽくね？

「お前の言葉に応じてやりたいが、それは偽物おれの仕事じゃない。いつか会えるだろう本物おれに、応えて貰え」

真摯な目で、ネギの目をしかと見据えて言い放つナギ。こいつ実はまともなの？それとも息子の説教ならぬ絶叫が効いた？

「……………そうだね。本物と同じ性能おれを持つって言うても、本物じゃないんじゃないか意味ないか」

「それでも言いたい事があるなら聞かせ？一応俺は俺ナギだからな」

「別にいいよ。穴に向かって叫んだりして、ウツカリ何があるかわからないからね」

「床屋か？」

「よく知ってるね」

詠春さんが見せたんだろう。確か持ってた。まだ出来てもいない子供のために、随分早く準備をしていたらしいしね。

「ねえ、父さん」

「あん？」

「『虚言には理由が有り、真言には価値が有る』僕の師匠の言葉だよ」

僕の言葉だ。なんで僕より先に言うの？

「父さんはどんな理由で自分の偽物を用意したの？」

「ああー……………、すつげ言いづらいんだけどさ……………」

苦笑いで後頭部を掻き掻き、

「そのー……………稽古、つけてやろうかなー、なんて……………」

うつわぁ……………

ちょっといい感じで登場して息子に怒鳴られて自分の非を認めて、その後に稽古して……………

「……………」

「……………」

ネギの冷たい視線を浴びて、ナギの視線は寒中遊泳を始めている。

「……………なんだろうね。正に、そう。夢から覚めた気分だよ」

「たはは……………」

冷めた笑いを浮かべるネギと濁いた声で笑うナギ。よくも悪くも、よく似た親子だと思うけどね。

ほら、どつちも『ムチ』だし？

厚顔無恥な父親と無知蒙昧な息子。うんよく似てる。

「じゃあさつさと構えてよ」

「あん？」

「僕に稽古をつけてくれるんでしょ？ 言っておくけど、僕にとっての『強い』は結構ハードル高いよ」

「さつき言ってた師匠か？」

「それと、その周りの人達」

「へへっ、そーかそーか」

三才式に構えるネギ。どの国のものかもわからない構えをとるナギ。僕たちへの評価はそこそこ嬉しいけど、ネギじゃ勝てないと思うなあ。

嘘や不意打ちを覚え、瞬動などの体術に優れ、魔法の基礎を総洗いしたネギと英雄ナギの勝負。

まあ興味がないわけじゃない。面白い勝負にはなりそうだな。

ん……

んあ……

おお……

「ふあ……」

寝てた。

「ネギ仰向けでぶっ倒れてるけどどうなったの？」

「奮闘虚しくやられました、って感じやね」

「不意打ちで一撃入ったのですが、後は良いところ無しですかね」

「及第点はやってもいいんじゃないか？虚空瞬動使った三次元コンボとかよかったと思うぞ」

寝て見逃した事実がちょっと悔しい。本当に面白そうじゃんか。

ステージ上ではロープを焦がしたネギが大の字で転がり、それをなにやらスツキリした顔のナギが見下ろすという、なんとも解りやすい勝敗を示していた。

「放蕩親父に負けた、って思うとすっごい悔しい」

「最後まで厳しいなお前は・・・」

「師匠の影響だよ」

なんかネギ都合が悪くなると僕出してね？

「その師匠つてのは、この後当たるのか？」

「多分罪口さんが勝つだろうから、決勝に上がるのは罪口さん、師匠だろうね」

「決勝？じゃこれ準決勝か！？」

「知らなかったの？」

「いやまったく」

まあいきなり鳩と一緒に出てきたわけだし、その辺の状況は把握出来てなくて当然、なのかな？

「お前の師匠、そのツミグチつてのはどんな奴なんだ？」

「嘘つきで狡猾で捻くれ者で皮肉屋で人を食ったように飄々として

て女たらしで性悪な天邪鬼」

マミるぞ。

「……俺のお師匠とは随分違うな」

「昔話には興味ないから喋んなくていいよ」

あ、ナギちよつと凹んだ。

「しっかしそうか。次の相手はお前の師匠か」

そう言つと、ナギは思案するように顎に手を当て首を捻つた。捻つて捻つて、やがて首から100°程の位置で止め、

「ギブアップ!?!」

と叫んだ。

『8ー!! ナイン……はえ?』

倒れたまま起き上がる気配の無いネギを見てカウントを取つていた朝倉さんが素っ頓狂な声を上げた。目が点になっている。

あとほんの少し待っていれば勝てた勝負。なぜ降伏?

「……父さん、どういつつもり?」

ネギも不信に思ったのだろう。声には隠しようもない怒気が籠つていた。

「そう怒んなって。考えてみりゃ俺、ってかアルは、お前と戦<sup>や</sup>つたらもう戦る意味ねえんだ。多分アルもギブアップとかすぞ。しかも決勝戦で」

それは………ないな。いや有り得るだけに、ないな。

決勝でそんなことされちゃ、僕としてもつまらないし観客も面白くない。何より木乃香達に僕のカッコイイところをゲフンゲフン。

「………だから?」

「俺のついでに、師匠にも稽古付けてもらえ」

誰が誰のついでだって?

「………どっちがついでなんだか」

「ぐっ………!?言葉が突き刺さる………!」

「僕は撫でるのを目指してるんだけどね。逆撫でするよつな」

「まあとにかく、だ!俺はもうギブアップしちまったんだから、お前は大人しく勝ち上がってけ!!」

「はぁ………」

聞こえよがしにため息を吐くネギ。なんか性格悪くね?誰の影響だ全く。

『な、なんだかよくわかりませんが！クウネル選手突然のギブアップにより、ネギ選手の勝利としまーす！！』

ナギの手を振り払い、ネギは自分で起き上がった。

### 第三十九話（後書き）

ネギ決勝進出―

鷺志「ちよつと強引じゃない？」

いやかなり強引でしょ。

でもアルビレオなら実際ギブアップしそうじゃない？

鷺志「どうだろう。エヴァと賭けしてたら出てたと思うけど」

ナギは……

鷺志「ちよつとお利口になってない？冒頭部分とか」

父親には理知的であつて欲しいという願望が滲み出てしまい……

鷺志「ただでさえ『ネギキヤラ外れすぎじゃね？』って意見貰つて  
んのに、その上不動のバカキヤラからバカ薄れさせてどつすんのさ」

アスナといいナギといい、僕は根性論と精神論だけで動こうとする  
バカは苦手らしいです。

隻眼とか隻腕にしちゃおうかな―

鷺志「いやめい」

## 第四十話（前書き）

もしもシリーズ第2回

もしも、鷺くんが原作メンバーと出会わなかったら！！

誰とも知れない誰かとの掛け合い

「僕の名前は、そうだねえ………匂宮沈無、でどうだい？即興にしちゃいい名前だろう？『沈』ま『無』い、と書いて『しずむ』だ！キヤハハ！」

「なぜ殺した？」

「意味なんて無いさ。意味も価値も関係も抵抗も交渉も加減も容赦も微塵も無い。ただ理由ならあるよ。生きてるからさ。僕もソレも生きてる。だから殺すにもそれにホラ、死んでたら殺せ無いでしょ？キヤハ！」

「目的と根気も無いらしいな」

「ヤル気はあるよ。キヤハキヤハ！」

「底が浅いな殺人者」

「奥が深けりゃいいじゃない」

すっげえ殺伐としそう・・・  
お釈迦様の意図的に、有り得ないんですけどね。これは

## 第四十話

もしかしたら忘れている方も大勢いるかもしれませんが、次は僕と刹那の試合ですよ？

今、僕は両手に木刀を持って刹那と相對していた。

刹那の装備ももちろん木刀。他はメイド服。

「よろしくお願いします」

「あいあい。頑張ってこー」

律儀に頭を下げる刹那に対して、僕は気の緩い返事を返した。右手の木刀をプラプラ振る。

『準決勝まで勝ち進んだのは我が3 Aの四天王が一人！剣道部所属の桜咲選手！！対するはダークホース、技術屋として局地的にコアな人気を誇る罪口選手！！二人とも武器は同じもの（云々）』

割愛って凄い字だね。愛を割るんだぜ？二股を糾弾するときにも使えそうだ。

「なあ刹那、ちょっとゲームしようぜ」

「ゲーム、ですか？」

「そうゲーム。この試合中、僕に攻撃を当てた分だけ、そうだね・  
・・・ベタだけど、なんでも言うことを聞く、ってのはどうだい  
？あぁもちろん、言うことを聞くのは僕だけだ」

「なん・・・でも・・・!？」

「そう、なんでも。何がいい？昔みたいに背中を流してあげようか  
？昔みたいに同じ布団で寝るまで絵本を読んであげようか？昔みた  
いにお互いに『あーん』ってしながら食事しようか？昔みたいに・  
・・・」

「取り合えず今は静かにしてください!!」

赤裸々に明かされる僕の宝物的に思い出に耐え切れず絶叫する刹  
那。ちなみに木乃香とも同様の思い出持ってるよ。

言われた通りに、僕は口を閉じて静かにした。僅かに細められた  
僕の目を見て刹那がハッと息を呑む。僕の意図に気付いたらしいね。  
言うことを聞かせたんだから、一太刀入れなきゃね？

『それでは

F i g h t

ツツ!!--!!』

今までのように開始と同時に突っ込むことは、お互いにしなかった。

刹那は木刀を青眼に構え、僕は両手をだらりと下げたまま。カッコイイ構えを模索しているが、未だ見つけるには至っていない。

刹那は立身中正を保ったまま、並足で一息に間合いを詰めてきた。肉薄しながら青眼の木刀を突き出す、駆け突きの技。

並足も駆け突きも初動が解りづらい技術だ。うっかりしているとあっさり一撃喰らうかも。気を引き締めた方がいいね。

突きをいなしながら気持ちを入れ替える。あんなこと言っておいて、あっさり一本取られたらあまりにも情けない。

左手の木刀で刹那の木刀を右に打ち払い、返す刀で打ち付けた。

「はっ！」

それを刹那は、なんと気だけで逸らした。

原作でもネギ相手にやってたけど、これはちょっと凹むねえ。いや、成長を喜ぶべきなのかな？

「はあっ！！」

刹那は払われた木刀から左手を離し、その左手で僕に手刀を打ち出した。斜め下から目を狙って。

「やるねえ刹那」

ガシィッ・・・!

僕はその手刀をまつげの先でかわし、そして二撃目の木刀を受け止めた。

「大袈裟な気合いと目隠しのための手刀で本命の木刀を隠したわけだ？惜しむからは、体勢が悪くて蹴りに移れなかったことかな」

「わざわざ後ろ足側に木刀を払っておいて、よく言えるものですね」

「呆れた？」

「感心しました」

ははは、それは嬉しいな。

「ハッ！」

バチンッ

手首の反しで僕の戒めを解き、一歩二歩と距離を開けた。そして再度構える刹那。今度はさっきのようなベーシックな構えではない。手首を顔の横で並べ、刃を上、切っ先を視線に揃える、原作でもよく見られた構え（名前知らね）。

「行きます！」

「よし来おい！」





後ろに下がらせるために、間合いを一步浅くしたんだろう。

下がる余地を与え、下がったら背後に回り込んでまた連撃、と。

さすがにこれは辛い。いくらなんでも後ろ向きでこの連撃を防ぎきるのは無理がある。そもそも人の腕はあまり後ろに向かないんだよ。肩甲骨あるから。

「ちよつと退避」

「ッ!!」

ガッン!

右手の木刀を刹那の顔（だと思われる位置）目掛けて投擲し（防げる程度の威力で。女の子の顔に傷を付けるような真似はしない。極力）、把步で180°後ろを振り返った。

「何いッ!!?」

そこで、僕は見てしまった………

玉と散る汗。

上気して火照った白い肌。

汗で額に張り付く髪。

鋭い意志を覗かせる切れ長の目。

荒く吐かれる呼気。

そう。それはまさしく神話に語られる戦乙女の造形<sup>それ</sup>。北欧の神話に現れる戦死者の迎え。ギリシヤの神話に語られる戦略と勝利の女神。未成熟でありながら将来の美しさの一端を確かにその身に降ろした刹那は今確かに美しく、その美しさは戦場においてのみ咲くものなのだろう。戦場の徒花とはよく言ったものだが、刹那に至っては役不足だろう。差し詰め戦場の……

ぼこん

「あだっ」

『あっ』

《あっ》

《あっ》

「あっ」

「あっ」

……

「し、しまったー！汗の滲んだ刹那のあまりの美しさに気が緩んでしまったー！ー！ー！」

「ちょっと静かにして下さいー！ー！ー！」

「いやこれは仕方ないって！だって刹那だよ！？普段から実に可愛くかつ美しいのに汗というオプションというが付いただけでここまです魅力が増大されるなんて僕は予想だにしていなかったよ！！」

「わー！わー！わー！！！」

ブンブンブン！

顔真っ赤にして木刀振り回す刹那。超かわいい。

「はっはっは！刹那の魅力はまだまだ語り尽くせないぜー！」

「ちょ、さぎくん！？」

「刹那はー！小学校5年生までー！」

「キヤー！キヤーッ！」

キュキュキュキュキュッ

「うおっと」

刹那が瞬動を連用し始めた。本気で僕を止めたいらしい。可愛いなあ。

「え、ええい！」

キュ、ギョッ

「のわっ!?!」

ギリギリで鼻先を掠めたのは、多分刹那の踵だろう。今までの比じゃない、最速の蹴りだった。

瞬動で踏み切り、頭を軸に回転。虚空瞬動で加速を加えた胴回し回転蹴りだ。

「やああ!」

着地と同時に再度瞬動。僕の懐に潜り込み掌底で顎を狙ってきた。その掌底と逆の手では鳩尾に拳を当てに来ている。

拳が軽く触れた段階で、またも瞬動をかけてきた。ダメージを与えることなく、意識を向けさせることが目的の突きだったのだろう。

ギユキユツ

瞬動で僕の後ろ斜め上方に現れ、木刀で一閃

虚空瞬動で前面に移って鼻面に蹴り。

瞬動で側面に入って木刀での突き。

瞬動瞬動瞬動虚空瞬動虚空瞬動瞬動虚空瞬動虚空瞬動。

この戦法って、もしかして……。

「気付きましたか?これは先ほどネギ先生がやっていた二次元コン

ボです」

本編でまだ登場してないネギのオリジナル技、先に使われてしまった。

僕もしかしてネギに謝った方がいいんじゃないか？

「てつきり決勝戦への伏線だと思ってたのに……」

なんか、すごい戦法で僕の不意を打つような奇策だと思ってただけだね。準決勝で見ちゃったよ。

『タイムアーーーーーッブ！！これより、投票に移ります！』

「総合評価A++。研鑽は全く怠ってないみたいだね。僕が見てないところでもいろいろやってたんじゃない？特に速さが素晴らしい。格別だね。瞬動にキレがあったからネギの技術を一見で見取れたんだ、誇っていいよ」

「はい。ありがとうございます」

『投票の結果、勝者は圧倒的多数で罪口選手ーーーーッ！！やはり終始見守るような立ち回りが観客にも伝わっていたのでしょうか！？』

さりげに手を繋いで退場しようとしたんだけど真っ赤な顔で避けられた。その様が可愛かったから、よしとしよう。

.

## 第四十話（後書き）

はい。タイトル変更しました。

鷺志「こんだけ皮肉的な内容なら、これっいい名前かな？とか」  
思っちゃったり

## 第四十一話（前書き）

皆さんお久しぶりです。

来れない間鷺志のこと忘れっぱなしだったので、感覚のリハビリ的な1話です

## 第四十一話

side・ネギ

「こゝこんなとき、どうすればいいんだろっ・・・?」

「諦めれば、ええんちゃうか?」

「もっと励ますようなこと言ってよ! ってか小太郎くんいつの間に戻ってきたの!?!」

「まあ負けたんは悔しかったけど、よお考えたら罪口のにーちゃんとかエヴァさんとか強いのぎょーさんおるし」

エヴァンジエリンさんがさん付けだ。何かあったのだろうか・・・?  
・?

いよいよ次は決勝戦。つまり罪口さんとの試合。

気分は13階段を登る死刑囚だ。既に半分くらいは足下だろっ。

さつきから心臓が64ビートくらいで早鐘を打っている。哺乳類は大体2億回拍動したら寿命らしいけど、このままいけば明日には天寿をまっとうしてしまいそうだ。

「父さん母さん、先立つ不幸をお許し下さい・・・」

「死ぬ気満々やんけ。ってかお前母ちゃんは生きとるんか?」

「……あー、どうなんだろう？取り合えずそいつのは子供に聞くことじゃないと思うよ？」

「ええやん。オレは半分こたなんやから親ともいろいろあってんねんで？まあぶつちやけ覚えとらんけど」

「お互い大変なんだね」

「せやなあ」

「あつはつはつはつは！」

大きな声で笑ったらちよつとだけ落ち着いた。やっぱり共通の話題って大切だよな。

とは言っても張り裂けそうなほどに張り詰めていることは変わらない。もうちよつと解したいところだ。

「ねえ小太郎くん。このままちよつと話し相手頼んでもいいかな？」

「ん、ええで。なんの話しする？」

「理想の死に方ってどんなかな？」

「もうちよい明るい話題ないんか……」

「最近のLEDは凄いやね！」

「物理的な話しはしとらん」

「日本には水に浮く不思議な石があるんだってね。真っ白い石でさ」

「軽石やな。『あ、軽い』って喧しわ」

「流血ありのベースボール？」

「ん〜・・・？『赤』『墨』であかるい、か？無理臭いな」

「まじっばい」

「茨城弁で『眩しい』やな。うん、脈絡ない」

「じゃあどござろっていうのさ!？」

「無理に明るくせんでも、軽い話でえーやんか」

「日本には水に浮く不思議な石があるんだってね。真っ白い石でさ」

「軽石やな。さっきもやったわコレ」

「あ、なんか緊張解れてきたかも」

「そか。凄いな軽石」

「ううっ!？」

「なんやどした?」

「じ、持病の・・・」

「じゃく?」

「持病のミュンヒハウゼン症候群が・・・!」

「仮病やないか」

「仮病だなんてそんな!ミュンヒハウゼン症候群はれっきとした精神症なんだよ!?お医者さんも患者さんも治療に一生懸命なんだ!そんな言い方はないよ!」

「せ、せやな。なんや釈然とせえへんけど、言い直そ。なんて言えばいいんや?」

「そうだね、せめて詐病と言ってもらおうか」

「同じやないかもつええわ」

「」  
「」  
「」  
「」

ちよっと、緊張解れてきた。

「礼述、先輩」

「おや緑ちゃん。久しぶり」

「何言（はあ？）久しぶり、って・・・大丈夫ですか？私のクラスに来たの、忘れてます？」

「いやいやいや、もちろん覚えてるよ覚えてるけどね？なんだか言わなきゃいけないような気がしたんだよ」

「それはもしかして、格闘大会で力が入りすぎて初期に想定していた時間を遥かに超過したことや、どこかの誰かさんが事故に遭って両手首脱臼の浮き眼に逢ったことが関係しているのでは？」

「かもしれないね」

でもあんまり言わないであげて。

「ところで緑ちゃん、どうしてここに？」

「決勝くらいは見てあげようかと気の迷いを起こしまして」

「それは素直に嬉しいね。でも僕が決勝まで残れなかったら見て貰えなかったわけだ」

「呆果・・・」

ため息を吐いて首を振る緑ちゃん。なんだか視線が凄く冷たい。そして『呆』と『果』って凄く似てる。

「聞促いいですか？先輩が決勝まで残れないなんて、そんなことあるわけないじゃないですか」

「……………」

まるで1+1の答えを説くように、解りきっていることを言うように、緑ちゃんは言い切った。

「……………!」

僕、超感動。

緑ちゃんが、緑ちゃんが僕に肯定的な発言を……………!!!!

「塵芥せんばいのことです。口八丁でのらりくらりと観客の受けでも取りながら勝ち進んだに決まっています。見無みるまでもなくわかりきったことですよ」

「……………」

僕、超ショック。

「補足ちゆうそく、口が上手いって褒めてるんですよ?」

「どんだけポジティブでもそうは取れないよ……………」

端々から飛んでくる侮蔑をひしひしと感じる。

「でもまあ口が上手いって言われるのは嬉しいね。減らず口とかよ言われる。昔はキスで子供が出来ると信じていたほどだよ」

「先輩がピユアだとなんか引きますね」

泣いてないよ？

「何か面倒事があつたら僕を呼ぶといいよ。どんな問題もんだいもあつさり解決さ！」

「さっそく問題発生です。口減ってます。いや無くなってます」

「ん？ああ気にしないで。大丈夫器丈夫だいじうだいじう。すぐに戻ってくるから」

「言通たしかに戻って来ましたけど増えてます。戻って来増した。一品増えてます」

緑ちゃんとのこういう掛け合いは、正直言ってすっごく楽しい。

## 第四十一話（後書き）

またよくわかんないこと言ってたな

鷺志「漢字に注目すれば解らないことはない……はず」

解らなかつた方、解答に自信の薄い方、質問していただければお答えします

鷺志「性格も話し方も面倒臭いからね、灰色は」

……よく言われます

## 第四十二話（前書き）

ぐわぁ・・・

1週間も空いてしまった・・・

もう少しペース上げたいですね

## 第四十二話

「おめでとうネギ。僕は君が決勝まで残ることを信じて疑わなかったよ（嘘）」

「先ほどの、お父さんとの戦いは見事だった。一時も目を離せなかつたよ（嘘）」

「成長した君と戦えること、僕は嬉しく思うよ（嘘）」

「君を育てた者の一人として誇らしいよ（嘘）」

「なんだか顔立ちまで精悍になったように見えるよ（嘘）」

「僕が負けちゃうかもよ？（嘘）」

決勝戦舞台上。

僕の前にはネギが立っている。肩を縮めて、忙しなく視線を泳がせて、とても心細そうだ。

「おいおいどうしたんだいネギ？そんなに怯えて、心配だぜ（嘘）」

「僕があやしてあげようか？優しく抱きしめてあげるぜ（嘘）」

「さあ、来ないのかい？今僕はアガペーが溢れてるぜ（嘘）」

「何があったか知らないけどな？あたかも兄であるかの様に慰めてやるぜ（嘘）」

朝倉さんはおろか、観客にいたるまでが、無言。

会場には僕の声が響くのみだ。

「あ、あの……罪口さん」

「ん？なにかな？」

「・・・お、怒ってます、よね？」

「何を言ってるんだいネギ。僕が君の何を怒るっていうのさ。もしかして前の前の試合で僕のことを狡猾だとか陰険だとか卑怯だとか卑劣だとか悪し様に罵った挙げ句に天邪鬼だなんて素敵なニツクネームをプレゼントしてくれたことかい？それなら僕はいっそ感謝したいくらいだよネギ。人は他人にどう思われているか、なんて中々知る機会はないんだからね。弟子の本音が聞けたのは僥倖と言えるだろう。例えそれが悪感情であり、僕の主観で随分脚色されてしまっているとはいえ貴重な意見ではあるのさ。僕自身の今後の身の振り方を考えさせてくれる非常に貴重な展開さ。だからこそ僕が怒る要因なんてそれこそ小指の甘皮ほどの存在しえない訳で、だから僕が怒っているように見えたのならそれはネギの心にながしか僕に対する後ろ暗いことがあるからじゃないのかい？さあほら懺悔しよう。僕がすっかり聞いてあげるから。言って御覧？さあさあさあさあさあ

あ

「・・・」

ネギが両目いっぱい涙を湛えて震えている。やれやれ、そういう仕種は女の子だから可愛いのだ。

昔かくれんぼして、僕を2時間27分見つけれなかった刹那を思い出す。

「やれやれ、そんなに怯えるなよ」

「・・・あ、あの・・・ほん、本当に、す、す、すみませ・・・すみません、でした・・・」

涙を堪えてめちやくちやにつつかえながら、懸命に謝って来る10才児。

・・・・・・・・はっ

危ない危ない、これで女の子だったら新しい扉を叩いてしまうところだ。

「気にするなよネギ」

「・・・・・・・・ほ、本当に、怒ってませんか・・・・・・・・？」

下唇を噛みながら、両手で服の裾を握り締めながら、顔と目を真っ赤にしてネギが言った。

僕は年上として、師匠として、目一杯の笑顔と精一杯の優しさを顔一杯に巡らせて、頷いた。

「うん（嘘）」

今度こそ、ネギ・スプリングフィールドは泣き出した。

ネギの精神のケアと僕のお説教に10分ほどの時間を費やし、再度僕とネギはステージに昇っていた。

『大丈夫？ネギくん。無理しないでいいからね？』

子供センサー、ギブアップは恥じゃないぞー

罪口さんの言葉責めは仕方ない

ってか大人気なさすぎだろ罪口さん

生卵が飛んできそうなアウェー感。え？なにこれ僕が悪いの？僕が悪いの？

僕の対面ではネギが四方にペコペコと頭を下げている。

『さあそれでは気を取り直しまして  
決勝戦ツ！！ファア  
イトーッツ！！！！』

あ、始まった。

僕の予想に反して、ネギは開始同時に突っ込んで来るような真似はしなかった。

「じ、実は僕、対罪口さんようにいくつか秘策があるんです」

「へえ？」

「まずは常套手段ですけど、格上を相手にする場合、相手の冷静さ

を欠いておこうかと」

「つまり挑発しようかと？面白いね。どうやるの？」

僕の質問に、ネギは何かを思い詰めるように俯いた。そのまま2回3回と深呼吸をして、強い眼差しで顔を上げ、

「ただのイネ科の多年草だぜ（笑）」

「上等だ糞餓鬼。お前の背中に青痣作ってやる」

隠し持っていた暗器を15ほどばらまき、それらを空中で静止させる。もちろん超能力的な技術ではなく、上に張った糸を介して吊しているだけだが。

「あ、天邪鬼に言われたくありません！っていうかクソはやめてください！」

「でもなんか一文字つけないと合わないじゃん？」

「合わない・・・？」

「吸血鬼、天邪鬼、欠番で殺人鬼。餓鬼だと二文字だし、なにか一文字欲しいなって」

「だからって、何も米が異ならなくてもいいじゃないですか」

「じゃ葱にしよう。お前は今から葱餓鬼だ。言いにくいなまったく」

「理不尽に呆れられた・・・」

なにやら落ち込んだ様子のネギを見て、僕は好機とばかりに暗器達を動かした。

15分の5を前面に配し、残りの10で背中を一斉に叩きに行く。

「うわわわわわ……！」

ネギは両手両足を駆使して辛くも防いでいるが、長くは持つまい。

「ほづら、まだ増えるぞー」

あらたに10、暗器を増やした。

「くっ……こんなに隠せるような格好じゃないのに……まさか、

【暗器術】!？」

おっと……

今のは僕の方が驚いた。まさか看破されるなんて、露とも思ってた。なかつたからね。

まあ隠したいのは武器であって技術じゃないから、別にそれが脅威にはならないけど。

僕は袖口から木刀を取り出し、ひとりで動いている（ように見える）暗器と遊んでいるネギに向けて構えた。

「斬空閃・・・」

凧いだ軌道に沿って飛ぶ斬撃がネギに迫る。僕の動作を見ていたのか、ネギは間一髪での回避に成功していた。

「い、今は・・・フライングナイフ・・・」

違う。

今度は僕自身が特攻。右手の木刀を振り上げ、小さな頭頂部目掛けて振り下ろした。

「うわわっ!？」

またも回避するネギ。ふむ、もう少し手加減やめていいかもしれない。

ゲシヤッ

ネギに避けられ、木刀は欄干を粉々に破碎した。斬れてはいない。手加減してあるから。

「この威力の木刀、まさか星砕き・・・？」

違う。

「え、えーい!」

ボッ

近付いた僕に対して、ネギは右手で手刀を打ち下ろしてきた。

フワ・・リ

僕はそれを忍法足軽を使って回避。正直、肉弾戦なら足軽だけで楽勝だけどね。

「今の動き・・・紙絵？」

違う。

ネギの側面に回り込んだ僕は、左手をネギに向け、その袖から暗器をさらし突き出した。今さらだけど、刃物なんて使ってないよ？刃引きしたから鈍器だよ？

「うわわわわわ！？」

自分を囲む暗器と新しく迫る暗器。

ネギは体を気で強化して囲みの薄い一点を強引に突破せしめた。それでも結構痛いと思うんだけどね。

辛くも囲いの外へと脱出したネギは、僕の袖を凝視しながら驚いたように言った。

「ま、まさか黒田坊の畏れ・・・！？」

そろそろ突っ込んでもいいだろう。

「マガジンで例えろおおおお！！！！お前自分の出版社分かってん  
たちは

の！？なんで頑なにジャンプだよ！最後のとかエルザ・スカーレッツ  
トで充分例えられるじゃん！！」

「僕ジャンプ派なんです」

「何その無駄な真実！？」

しかもこのまま次回へ続く！？まともに戦ってねえよ僕！！

## 第四十三話（前書き）

結構長引く決勝戦。

今回はちょっとわかりにくい知識が出てきます。

## 第四十三話

依然、ネギは僕が操る無数の武器と戯れている。

はたから見ると、宙に浮かぶ武器と戦う少年。さっきから観客席は沸きっぱなしだ。

「どうしたネギ？僕への秘策っていうのは、まさかさっきの精神攻撃だけかい？」

それともジャンプ派カミングアウト？あれは動揺したぜ。

「いやもちろん他にもあるんですけど・・・ちょっと集中力が必要ですって」

「僕の攻撃が邪魔で集中できないって？わざわざ待ってくれるのは、魔法少女の一瞬の脱衣を心待ちにしているロリコン怪人くらいだよ」

「それもそうです・・・ね！」

ヒュバツ！

無数の武器に囲まれたまま、ネギは素早く体を切ってその場で半回転した。長い袂もよぎがはためき、群がる武器を僅かに弾く。

「ふうふうふうふううう！！！！」

一瞬の空白で体を正し、立身中正、二目平視を保ち軽く膝を曲げ

た。

両手を軽く伸ばして手の平は外側に向け、半眼で細く息を吐いている。

「……………はっ!」

気合いと同時に目を開き、そして周囲の武器が弾け飛んだ。

『今度はなんだー! ツ!? 物が浮いたり吹っ飛んだり、観客置いてくにも程があるってのー!』

朝倉さんの文句はもはや誰も聞いていない。僕を含め、『気』を感じることができる者は全員がネギの様子に目を剥いていることだろう。

今、ネギの体から膨大な量の気が空へと立ち上っていた。それはさながら気の柱。

「……………いや、これは驚いたね。大周天か……………」

大周天。小周天との違いは、何も気の通り道だけではない。

小周天は自身の気を高め、大周天は自然の気を取り込むことに使われる。

その練度が高ければ気の量、質、共に数段上のものを引用できるが、実力が見合わなければそもそも気が集まってくれない。

今のネギは、どうやら場外の水の気を集めているようだ。水その

ものから得られる水の気と、大気を漂う水の気。

その量はさながら災害。津波を彷彿とさせる。立ち上っているのは御しきれない分だろう。

「水と木の気は周せるんです。僕は『木』の性格ですから」

「おいこら西洋魔法使い。それは陰陽道の概念だろうが」

「混ぜるのは日本人の専売特許じゃありませんよ。それに、気を扱っていればそのうち至るところでしょう?」

それは否定しない。

「しかし、そうすると地の利はネギにあるのかな」

木で作られたステージ。水で囲まれたステージ。

足場が自身と同質で、周りは木の気を育てる水。詭えたようなステージだ。

「水生木。水は木を養ってくれます」

「木剋金。なら僕は鉄製の武器に換えるでしょうかな」

散らばった武器はそのままに、僕は新しく暗器を取り出した。

長さ2メートル弱の鉄の棒。刃も飾りも何も無い、掛値なしの鉄棒だ。

「さつきも言ったけど、木剋金、だ。解ってると思うけど、僕の性格は『金』だよ」

小さなうちは風（周囲）の影響を強く受けつつ根（自我、大望）を持ち、大きく育てばその根で多くの土（人）を支える、木。

一見して柔らかかそうで、しかし硬い光沢（意志）を崩さず、状況や必要に応じて形（態度、立ち位置）を変え時に冷徹に、時に堅固に対応する。金。

金は刃物となって木を切り倒す。故に木剋金。

「互いに比和を受けてるし、ネギは水の相生まで受けてる。でも木侮金なんて期待しないですよ？金虚木侮なんて以つての外だ」

木侮金（木が強いため金の剋性を受け付けない）

金虚木侮（金が弱いため相対的に木が強くなり剋性を発揮できない）

「罪口さんこそ。金生水、ですよ。罪口さんの金性が上がれば、それは水性をも上げてくれます。そこから水生木。上がり幅は僕の方が大きいんですよ？」

「ほざいたな、ネギ」

背弄拳。

「烏龍盤打！！」

「おっと」

これは驚いた。背弄拳をこれほど早く破られたのは初めてだ。

「あれだけ背中狙われれば、そりゃ誰だって警戒しますよ」

「それもそうか」

「何より、罪口さんは人の後ろに回り込むのが異常に上手いって、タカミチチから聞きました」

過去のトラウマが生きてるな。

「それはそうだよ。何と言っても、これは立派な忍術なんだからね。僕の使い方が良くないだけで、本来そうそう破られるものじゃあないんだ」

「使い方？」

「そう。こつやって使われたら、ネギはどつ破る？」

いいながら、もう一度背後へ。

「そう何度も……!？」

同じように烏龍盤打で背後を打ったネギだが、その打撃は僕を捕らえはしなかった。

「どつしたネギ？後ろだよ」

「えいつ！」

「当たらない当たらない」

「このっ！」

「ははは」

「ほらほら」

「後ろ後ろ」

裏拳。蹴り。回し肘打ち。鉄山靠。

瞬動や虚空瞬動で振り切ろうとするも、当然僕は背後をとり続ける。攻撃はせず、ただ後ろから話し掛けるだけ。

「はあっ、はあっ……」

「おいおいネギ。もうバテたのか？そんなじゃあ僕からも仕掛けちゃおうかな」

「くっっ！！」

ビシッ……コン、コン

僕が放った小さな鉄球はネギの右肩に埋まり、木製の床に転がった。

肩を抑えながらその鉄球を見つめ、やがてネギは得心いったと頷いた。

「なるほど……つまり罪口さんは、僕の真後ろに張り付いているわけではないんですね？」

「たった一撃で見抜くなんてね。流石は『天才』ってところかい？」

「そんなんじゃないやありませんよ」

謙遜するネギの読み通り、僕はネギ背後5メートルほどの位置をキープしている。そこから遠距離攻撃を仕掛けるつもりだ。

幸い、指弾の技術は一流のものを盗めたし。

「ネギならどうする？」

「まずは……」

シュバツ

と、ネギは欄干に背中を張り付けた。

「これなら、罪口さんが立つのは観客席の欄干か水の上だけ。僕が少しの間攻撃に耐えれば場外判定で僕の勝ちです！」

「20点」

ドゴオン！

「……ッ！！」

背中を蹴り飛ばされてゴロゴロと中央にまで転がっていった。

「僕の攻撃に10秒耐える。いくら大周天があったところで、ネギに出来るのかい？」

「くっ……！」

僕の質問の応えは、フラフラと立ち上がったネギの背中 of 足跡で十分だろう。

僕だって、チート以外の努力をしてるんだぜ？

いくら力があつたところで、技術を見取れたところで、天才ならぬ僕は使いこなすことは出来ても使い慣れることはできなから

結局、反復練習は大事ってこと。

「……じゃあ、ごうします」

呟いたネギは、観客の殆どが予想しなかった行動をとった。

ずばり、

「寝転がる、か」

仰向けに、大の字に寝転がる。以前高畑先生が使おうとしていた手段だ。

「そうだね、50点くらいはあげようかな」

まったく。寝転がりたりしたら攻撃に即応出来ないだろうに。チ

ンミ対タンタン戦じゃあないんだよ？

「でもやっとな罪口さんを見つけてましたよ」

「ネギがメデューサと同じ呪い持ってたらネギの勝ちだな。僕がその蹴り易そうな頭蹴りにいったらどうするよ？」

「うう……」

「まったく……ほら。背弄拳は使わないといてやるから、立ちなさい」

「物凄い上から目線なのに腹が立たないのが腹立たしいです」

「はいはい」

ネギは膝を立てて立ち上がり、しかめっつらで僕と相対した。

「気を取り直して、僕の秘策、3つ目。お見せしましょう」

その顔は、上手く描けた絵を先生に見せる子供のようにだ。

## 第四十三話（後書き）

なんか真面目な鷺志久しぶり

鷺志「ここんとこの僕、ただの変態だったからね」

自覚あるんだw

鷺志「お前のせいだお前の」

てか10歳で大周天て・・・

鷺志「阿修羅観音が泣くな。悔しくて」

天才性の発露、ってことだね。

次回、ネギの奥の手発動します！

## 第四十四話

3つ目の秘策。なんて宣っておいて、ネギの行動は大して変わらなかった。

僕の攻撃を辛くも避けつつ、羽虫が当たるような攻撃を仕掛けて来る。秘策の発動には、なにがしかの準備が要ると見た。

「っていつか罪口さん、異様に硬くないですか？武装色の覇気ですか？」

「違う。硬気功の鎧だ」

いやまあ似たようなものだけど。

「それよりもほら、早く秘策とやらを見せてよ。タカミチ相手にも使わず、僕のために温存してたんだろ？見たいな」

斜め上を見ながら若干の棒読みで告げる。いかにもな解り安すぎる挑発だが、ネギは乗ってきた。

「えっとですね、見たいのならそのまま歩ほど下がっていただけるとお見せできますよ」

「はいはい」

トン、トン、トン、トン……トン。

キュキュキュキュツ！！

「お？」

5歩下がったそこは舞台中央。僕が立ったのをスイッチに、仕掛  
けられた術式が発動した。

足元に薄桃色の円環が浮き上がり、そこから幾条かの光の帯が立  
ち上り、僕の肩へと結び付いた。

そのまま足元の円環自体が半回転し、帯が僕の体を締め上げる。

「捕縛術式？」

「はい。僕なりに罪口さんを観察してみたんです。その結果罪口さ  
んは耐魔法の術に疎いことが解りました」

言ってくれるじゃないか。事実だけど。

「ぶつづつううううう」

ネギは三才式で構え直し、調息で気の流れを整えている。

やがてその気の巡りに変化があった。

「おおっ？」

大周天を保ったまま、その膨大な気が減少していったのだ。

「原油をガソリンに精製するみたいなものですよ」

僕が捕縛を逃れるのを警戒しているのか、ネギは素っ気なく告げるだけだった。

つまりネギはこう言いたいのだろう。

・（前提）気と魔力は相反するものである。

・しかし完全に相いれないのならば魔力の概念の無かった日本ではどうやって陰陽術を行使したのか。

・ネギは意識的でなく無意識に魔力を作っている、と考えた。

・その考えとアジア特有の『気』という概念に当て嵌めた。

・しかしそれでは前提との矛盾が産まれる。

・矛盾を解消するにはどうせればよいか。

・『気』から『魔力』を精製できれば矛盾が産まれないのではない  
か。

・元々気も魔力も生命力と同一視されることがある。

・同一視『される』ではなく同一視『である』のではないか。

とまあそんな論旨展開があったのだろう。実際のところはわからないよ。僕はネギじゃないからね。

ネギがこれから使うであろう魔法も、予想がついた。

特に熱い陽の気が南に落ちて火行を生み、残った陽の気が東に落ちて風と共に木行を生んだ。

五行において木と風は共に生まれたのだ。2つが比和したところでおかしくはないだろう。

そしてネギの得意魔法の一つもまた、風。

「それだけじゃありませんよ」

生意気にも僕の考えを読んだかのようなタイミングで、ネギが口を挟んだ。生意気な。

「今罪口さんがどこを背にしているか、わかりますか？」

「わかんない」

「早いですね・・・」

若干呆れ顔のネギ。生意気な。

「さっき僕が背にしていた欄干ですよ」

「へえ・・・なにか細工してたわけだ？」

するとネギは、空中に指を踊らせた。人差し指で鳥居のようなマークを記す。

「簡易的な魔道を開きました。今、そちらには魔法伝達に抵抗は薄  
い」

今のネギの発言は空気中の『<sup>オーラ</sup>気』とか『<sup>オト</sup>気』とか『<sup>オーラ</sup>気』とか『<sup>オト</sup>気』とかと魔  
力の折衝のことを言っています。伝導体に電気を通すときの電気抵  
抗みたいな話。

「加えて」

お、まだ有るんだ。

「そっちは鬼門です」

ニヤリと、少年にあるまじき卑しい笑みを浮かべ、両腕を僕に向  
けた。

「両腕解放！雷の暴風！！」

今精製した魔力を上乗せした懇親の遅延呪文が、容赦も呵責もな  
く僕に迫ってきた。

僕が見舞った、正真正銘全力の一撃。片方が片方に干渉しないように角度を調整してるから割と難しいんだよね。

罪口さんに殺到するその魔法は、仮に罪口さんに防がれたところで足元のステージを破壊し、罪口さんは捕縛魔法に捕まったまま水中に、場外に落ちるという寸法だ。

ステージの真下が場外に判定されるかはわからないけど、そこはごり押ししよう。

僕のそんな考えは、あっさりと霧散した。

ズアアツ！

・・・・・・・・。。。

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

《・・・・・・・・》

《・・・・・・・・》

・・・・・・・・え？

「おいおいネギ、あんまりがっかりさせるなよ」

呆氣に取られる僕たちをよそに、罪口さんはため息とともにダメ

だしを始めた。

「途中まではよかったよ。近江くんが気を落としそうな大周天は素晴らしいね。五行思想を絡めたのも褒めてあげよう。それを得意の魔法に含めたのも良い。背弄拳の対策に見せ掛けてこの攻撃への布石を置いていたことも褒めてあげよう。でも、だ」

そこまで一気にまくし立て、罪口さんは深く深くため息を吐いた。黒手袋を嵌めた指を僕に突き付け、

「鬼門なんて、鬼達のホームじゃないか」

.....

「罪口さん、なんだかんだ言っただけで天邪鬼って気に入ってませんか？」

「うるさいそれは今はどうでもいい確かに殺人鬼吸血鬼に次いで鬼を冠せたのは望外だったし内心喜ばしかったけどそれは今はどうでもいい」

すっごい同様してるし目が泳いでいるけど罪口さんはそれを無かったことにしたいらしい。

狼狽える罪口さんはなかなか見れるものじゃないけど、それも今は置いておこう。

「そ、そんなことより罪口さん！なんですか、それ・・・？」

僕の興味は罪口さんがいつの間にか持っていた道具に向いた。一見すると七枝刀のように見える。

「これかい？これは神水で水上げして、御神酒に浸けて、大幣で払って、神棚に上げて、耐魔性を上げた耐魔道具だよ。もちろんメイドイン罪口」

「耐魔道具って……」

罪口さんのあんまりな発言に、僕は思わず色めき立った。

「そんな、そんな物持つてるなんて設定、出てきてないじゃないですか！そんな物持つてるなんて伏線、張ってないじゃないですか！！なんの伏線も前フリも無しにいきなりそんな、魔法使い殺し持つて来ていいんですか！？ただでさえ僕の気と魔法で超展開気味なのに、さらに超展開重ねていいんですか！？」

動揺して自分でもちよつとよく分からないことを口走ってしまった。

しかし罪口さんは飄々と、あっけからんと応えた。

「いいに決まってるじゃないか」

薄く目を細めて、見慣れた薄ら笑いを貼り付けて、罪口さんは断言した。

「設定がなくなたって」

「伏線がなくなたって」

「前フリがなくなたって」

「都合の良い道具を持っていてもいいのさ」

「だって」

「暗器なんだから」

滔々と

堂々と

いつそ感心してしまうほどにキツパリと、断言した。

「誰も知らなくて当然だろう。暗器っていうのはそういうものだ」

「誰も気付けなくて当然だろう。暗器っていうのはそういうものだ」

「誰も予想できなくて当然だろう。暗器っていうのはそういうものだ」

「それでこそ、暗器だ」

なんてことを真顔で言い切るんだこの人は。少しは観客に申し訳ないと思わないのだろうか。

いや思わないのだろう。この人はそういう人だ。付き合いの短い僕でも分かる。

「大体、いちいちそんなことを言っていたら僕の物語は全編書き直しだよ？」

「一番最初に襲撃者を屠った糸も」

「ちよつと前にエヴァを刺した杭も」

「どつちも作った描写なんかないだろう？」

「それどころか、今まで僕が使った道具は全部『用意していた』と

か『死蔵していた』ばかりで、作っている描写なんか1行たりとも  
されていない」

「設定や伏線や前フリが必要なら、さつきネギの相手をさせた武器  
たちだつて描写無しだぜ？」

「それを思えばほら」

「今回の七枝刀ならさ、修学旅行土産に葛葉先生に上げた刀の姉妹  
品とか」

「そういう設定にしちゃえばいいんじゃない？」

悪びれる様子も一切なく、罪口さんは言つてのけた。

この人は、全く……

こつこつ小汚さ、薄汚さをこそ、目標にしたいと思える。

「秘策がないなら僕の勝ちかな？」

「秘策がなくても諦めませんよ。僕は往生際が悪いんです」

今の僕は徒手空拳。もう罪口さんに対する秘策も奇策もありはし  
ない。

それがどうした。

どうせ今日は胸を借りるつもりで、稽古をつけてもらつつもりで  
来てるんだ。

負けてもともと。一矢報いれば儲け物だ。

「行きますッ!!」

なんて調子の良いことを言っておいて、結局僕は圧倒的に劣勢だ。

大周天はとつくに解けて、今はその反動で極限状態にすらある。劣勢とはいえ辛うじて交戦しているのは、罪口さんが手加減してくれているからに他ならない。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

「息が上がってるぜ？もう限界かな？」

「も、もう少し……行けますっ！」

今僕はろくに体の強化も出来ていない。ちよつと鍛えているだけの子供の体力だ。

そして罪口さんも、身体強化を解いていた。それがフェアプレーの精神なのかは、わからないけど。

「ネギが頑張るのはいいけど、そろそろ制限時間いっぱいだからね。僕の方で決めさせてもらうよ」

そう言って、罪口さんは僕の背後へ視線を動かした。僕の後ろ、すぐその距離。

「僕が最初に宣言したこと、覚えてるかい？」

上等だ糞餓鬼。背中に青痣作ってやる。

まさか、後ろに暗器をつ！？

序盤で使っていた暗器の乱舞。あれを思い出した僕はあわてて背後を振り向いた。そして

「背中を狙うって言うてるのに背中を向けてくれるなんて、サービ  
ス精神旺盛過ぎやしないかい？」

何もない空間を見つめたまま、僕は背中への衝撃で気を失った。

第四十四話（後書き）

鷺志「今回尻すぼみじゃね？」

なんてこと言いやがる……

鷺志「オチが弱い希ガス」

いや、鷺志の鷺志らしさを出そうと思いましてね？  
ほらお前卑策士じゃん

鷺志「卑策士？」

『卑しい』『策士』で、卑策士

妹（上）「そんな上手いこと言えてない」

吐血

余白（前書き）

逆お気に入りユーザ100名突破記念特別編！！

読者のみなさんに感謝を！！

## 余白

風邪を引いたかもしれない。

夜風を体で切りながら、沈無は鼻を擦った。

「気をつけなきゃいけないね。風邪は万病の元。ほっといたらイノチを落とすちゃうかも」

長く伸ばした髪。細い体を情けなく包む皮製のジャケット。膝下で切りそろえたジーンズ。

彼の体を覆うものは、およそそれだけだと見える。前を開けたジャケットからは白い肌に肋骨が浮いて見え、肌着の類を使っていないのは一目瞭然だった。

自身にかかった返り血の、微かに残る温もりに苦笑して、沈無は足元の肉塊を踏みしめた。

匂宮沈無。

少年はとある男との会話を経て、それを今生での名前と定めていた。

お釈迦様より慈悲を頂いてから早10と余年。ようやく少年は名

前を得たのだ。

「やってきました麻帆良学園都市！キャハハ！」

慈悲の先は漫画の世界。

確かこの世界では、旧世界がどうとか人形がどうとかいっていた気がしなくも無いが、それは沈無からすれば鼻で嗤ってしまうような瑣事である。

何が人間。

何が人形。

誰もかれも、一人残らずインクの線じゃないか。

「いやまあ、今となつては僕もそうだけどね。キャハハ！」

あまりにも大きな独り言にギョツとした様子で何人かの生徒が顔を向けた。その中の誰ひとり、沈無に覚えのある顔はない。

モブだ。

沈無はそう認識した瞬間。半ば自動的に、半ば受動的に、彼の十指は蠢いていた。

「……………キャハ！」

朝の通学路。半径およそ30メートル。

生存者は、彼一人。

「おっはよー！」

「……………？誰君たれですか？」

「キャハ！」

少女の質問に答えず、沈無は見せ付けるように鈍を抜いた。

「キャツホウ！」

空気を切り裂く音すら切り裂き、滑るように躍らされた白刃は少女目掛けて突き進む。その刃を、

スカッ

「んむうっ!？」

少女の代わりに受ける青年がいた。

「っ……!何行なに……」

「逃げえ!お嬢!!」

「コイツ、やばいよ」

沈無と少女の間に、いつの間にか少女を押しつける用にして二人の男女が立っていた。

二人とも和装。男は時代劇の浪人のようにだらし無く前を開け、髪は長くボサボサ。しかし確かに整った顔の、美丈夫という言葉が似合う容姿だ。

女はまるで吉原にでもいそうな、一見して遊女のように絢爛な着物簪で飾っている。

「あつれー?お兄さんとお姉さん、人間じゃないね?……」  
「キャハ!」

言うてから、沈無は言葉の可笑しさに笑った。

今の言い方、まるで他の『人達』が『人間』みたいじゃないか。

「キャハ!キャハハ!」

はしゃぐように、嘲るように、沈無は鈍を振り回す。技術もなにもない、ただ刀の切れ味に頼っただけの、剣術とも呼べない兇戯。

得物が鈍でなければ、沈無のスペックが異常でなければ、一般の警察官にだって捕まえられるだろう。

しかし得物は斬れない物は無い大業物で、スペックは神話の英雄に匹敵する。

「ぬぐうつうう！お嬢お！！」

「早く逃げな！もう持たないよ！！どうせあたし達、死んでもあんなの中に還るだけさ！！」

「何故なんで・・・なんで助けてくれるんですか？妖物たちは、みんな縁録を疎んじてるんじゃ・・・！！」

匠に刀の棟や背を弾き、その剣閃から少女を護ろうとする男女。その真意を問いただす少女。なにやら確執がありそんな雰囲気だ。

「儂らあ、もう三代縁録の娘どもに使われとる」

「いつまでも臍曲げてやしないさね」

「それにな、儂ら夫婦は子が出来なんだ」

「あたしらにとってお嬢は、娘みたいなものさ」

「信呆そんな・・・二人とも・・・」

感極まった様子で目を潤ませる少女にニヤリと頬を歪ませて、男  
女は沈無を睨みつけた。

「さあこい若造お！」

「あたしら斬りたきや、霊刀の2、3本は持って来な」

「覚悟せえよ？ 儂は首だけんなつても食いつくどお！！」

「お嬢は、護り通して見せようじゃないか！！」

「……………ん？」

それまでどこか上の空だった沈無が、その声で改めて三人を見た。  
実に退屈そうに目を細めて、つまらなそうに三人を見据えている。

「ああ、終わったんだ……………お別れ」

沈無はブンブンと振り回していた鈍をだらりと下ろし、代わりに  
何も持っていない左手を差し出した。

その人差し指が微かに動き、

ズシャアアッ！

少女が数十の肉塊へと変わった。

「あ……………？」

「お、じょう」

呆然と振り返る男女の背に、沈無は一步踏み出した。

「じゃ、再会してきな」

「あれー？」

世界樹前広場。

無人の、世界樹前広場。

いくら授業時間中とはいえ、講義の無い大学の生徒すら一人もいないこの状況を、沈無はわずかに警戒した。

そもそも今は学校敷地内で多発した殺人事件で騒然となっているければおかしいのだ。朝からの2時間足らずで、すでに両足の指まで使っても足りない人数が鬼籍に入っている。

自室待機の号令が出たとして、ならば警察のひとりもいないことが、やはり不自然だ。

そういう不自然は、たいていが人為的なものである。

「そこな若者」

刺すような殺気と射抜くような視線をない混ぜにし、老人が沈無の背後に立った。

「今朝からの連続無差別殺人。お主の所業と見るが、如何か……？」

質問のていを為してはいるが、それはただの確認だろう。沈無は人を殺しても、別に隠し立てしてはいないのだ。

普通に目撃されるし、普通にカメラに写るし、普通に探知に引っかかる。

事実、老人の目はすでに沈無を捕獲の対象と見ているそれだ。場合によっては命を奪うことも辞さないと、警戒している目だ。

それを承知で、沈無は極めて軽い調子で応えた。

「その通り。彼ら彼女らを殺したのは他でもないこの僕だ」

「何故……こんな真似を？」

「ああ、そういう話は前に別の人としたから僕はしたくないな。同じことを何回も言うのって面倒だし」

「……そうか」

老人が嘆息し、右手をあげた。それを合図として、瞬時に数人の大人が沈無を取り囲んでいた。

不用意に近づくことはせず、しかしなにかが起これば即座に対応できる距離。その距離を維持したまま、誰も沈無から視線を外さない。

だから、それに気付くのが遅れた。

「ぐうう……!？」

「なっ……!？学園長!!」

なんの前触れもなく、老人が蹲ったのだ。その足元には赤々とした水溜まりが広がっている。

一步分離れた位置には、先ほどまで繋がっていた、合図にも使われていた、老人の右腕が、その肘から先が、転がっていた。

「急に動くもんだからサ、つい攻撃しちゃったよ。でもよく考えてみよーぜ？敵対してる人間の前で不用意に動いたりしたら、先手を取られて当然じゃないかな？あれ？なんかすっごい睨まれてる。謝った方がいいかな？謝っとく？ごめーんネ キヤハハ！」

飄飄と、嬌嬌と、沈無の笑い声が広場に響き渡る。キヤハキヤハという高い声が人を不快にさせる、嫌な笑い声だ。

「貴様ツ!!」

ガシャシャツ……

黒人の男性が構えた銃は、構えると同時にスライスされた。

「先生、下がって！」

スパッ

ふくよかな体型の男性が構えた杖は、取り出した時にはすでに裁断されていた。

「私が……っ!？」

カッー……ン

修道服を着た女性が胸元のロザリオに手を伸ばし、しかし触れる寸前で地面に落ちた。

魔法教師たちは確信した。沈無と自分達の、絶対的な実力差を。

学園長を不意打ちで減退化させられた今、抗しうるのは2人しかない。

「オイタが過ぎたな、坊や」

ズルリ、と

沈無の影から少女が這い出した。

流れるような金系の髪。透き通るような白磁の肌。宝石のように輝く瞳。塗られたように紅く、朱い唇。

それら『美』のパーツすべてを禍禍しく歪め、少女は凄惨な笑み

を自らの顔に刻んでいた。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル

侵入者との高度な戦闘を予期した老人　学園長は、彼女の力を  
一時的に解放していた。

「さっさと終わらせるぞ。この後<sup>デート</sup>修業の予定がある」

少女はその小さな拳を握り締め、沈無の脇腹目掛けて振り抜いた。

横打ちの拳槌。

岩砕機すら凌駕しかねないその一撃を、沈無はなんの抵抗もなく  
受け入れた。

フワ……

受け入れて、受けることなく回避せしめた。

「なに……？」

少女の美貌が疑問に歪む。

不意打ち。死角。胴体。横風ぎ。力。速さ。

どれをとっても、まさに必中の要素。退がるには深く、しゃがむ  
には低く、跳ぶには高く、回るには速く、受けるには強い。

言葉通り一瞬で終わらせるつもりで、詠唱の間すらもどかしく、  
エヴァは必殺必中の拳を見舞ったのである。

それを、予備動作無しでかわした沈無の実力を、エヴァは高く評価した。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

始動キーを口にしたのは、エヴァからすれば当然の処置だった。魔法使いだから、魔法を使う。それだけだ。

しかし普通の、『死ぬ』魔法使いだったらここで始動キーを唱えることはありえなかつただろう。

彼我の距離はほぼゼロ。完全に肉弾の間合いであり、沈無が刀を使うことはエヴァも聞かされている。

エヴァに始動キーを唱えさせたのは、600年に及ぶ人生、経験だった。

斬られても死なず、貫かれても死なず、焼かれても死なない。

『自分は死なない』

事実であつたそれらの経験がその自信を産み、その自信は『何があつても大丈夫』と過信へ変わり、今やそれは慢心となつて、彼女の口を動かした。

「えい」

ズバツ

冗談みたいな音がして、少女の肉は切り裂かれた。

沈無が狙ったのは首。

首を斬っても死なないのかな。という好奇心と、魔法を使われるのはマズい。首を切り離せば肺から空気届かないし、詠唱阻止できるかも。という打算によるものだ。

しかし、落ちたのはエヴァの左腕、二の腕から下だった。

避けたところを見るに、流石に体の構造が大きく変質することはないらしい。

無理な体勢になったエヴァの首を一突きしたところで、エヴァが距離をとった。口の端から血を流し、しかし不敵に笑っている。

斬るだけ無駄だ。

その眼差しはそう語っているように見えた。

直後、バサバサと無数の羽音がした。

エヴァの左腕が数匹の蝙蝠となって主の元へと帰っていく。

エヴァはそれを迎えようとして、

驚愕した。

「お、おい！どこへいく！？」

ようやく治った喉で詰問する。エヴァの左腕だった蝙蝠たちは、散り散りに明後日の方向へと跳んで行ったのだ。

「ま、当然僕の細工なんだけど」

獣は嗅覚を発達させ、餌や外敵の位置を知る。

鳥は視覚を発達させ、餌や外敵の位置を知る。

獣にも鳥にも見え、しかし獣でも鳥でもない蝙蝠は、聴覚を発達させた。

蝙蝠やイルカなどは自分で超音波を発し、反射して戻ってきた音を聴いて、どこに何があるかを知る。エコーロケーションというらしい。

超『音』波、である。

「分身の蝙蝠が随意識で動かせたり、自律してなかったりしたらできなかつただけだね。できたってことは、あれらも別個の生き物扱ってことかな？」

適当に考えながら手の鈍を振り回し、着実にエヴァを追い詰めていく。

少しずつ削られる肉体は、蝙蝠になるたびに見当違いの方向へ跳んでいく。

やがて右腕を失くし、右足を失くし、左足までも失くした。

「不老不死つてさ、別に驚異じゃないよね。こうして手足をもうじやえはデカい芋虫みたいなもんだし」

「う……くう……！こおしへあう……いあま、れっあいいこおしへあうー！」

今エヴァはまともに喋ることができない。

手足は肩や股関節で切り揃えられ、断面の肉を曝しながらウネウネと身をよじっている。

その口を、彼女を地面に縫い付けるように、深々と鈍が貫いていた。

「昔から、吸血鬼と魔女は迫害されて磔刑にっつてのが相場でしょ？」

手足を失くし、地面に縫い止められる少女と、それを唾いながら見下ろす少年。

地に伏す最強の魔法使いと、それを見下ろす侵入者。

その光景は、魔法教師たちに絶望を与えるには充分だった。

ゴンッ……！

フワ……

極太の衝撃が沈無のいた空間を横断し、沈無はその風圧に乗って回避した。

いづらか離れたところに着地し、衝撃の来た方を見遣る。

「なにごと?」

「……不意打ちもダメ、か」

新たに現れたのは眼鏡をかけた無精髭の男。よれたスーツとくわえタバコがよく似合う。

「高畑先生……!」

「間に合いましたか!」

「間に合いませんでしたよ。友人が傷付いた」

高畑・T・タカミチ

またぞろ出張にでも行っていたのだろう。転移魔法かなにかで駆け付けた、とか。

「エヴァに勝つなんてね。そうとうな使い手と見たけど、何が目的だい?」

「目的?」

「なんの目的があつて、麻帆良に来たんだい?」

「ん……」

高畑の質問に沈無は首を捻った。こそこそと誰かがエヴァの元へ

向かっているが、沈無は頓着しない。

斬れないものはない鈍のこと、いざとなったらエヴァの体を切り裂いてでも戒めを解くだろうが、もうそっちに興味はないようだ。

「別にないけど」

沈無の返答は、高畑たちにとって完全に予想外のものだった。

「ただ散歩のついでに寄って、殺し易そうだから殺して、面白そうだから今いる。それだけだよ。特別な理由なんてなにもないさ」

「・・・そんな理由で、生徒たちを殺したのかい」

「だからそう言ってるじゃん。大体、僕はここに何かあるのかも知らないんだよ？」

表情こそ変えないものの、高畑は全身から怒気を迸らせていた。

くわえたタバコを食いちぎらんばかりに噛み締めている。

「いいかい？よく聞いてよ？」

「英雄ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドが教師としてやってくる」

「なんて僕は知らない」

「英雄の娘にして関東魔法協会会長の孫」

「近衛木乃香がこの学校に通っている」

「なんて僕は知らない」

「その2人が同じ部屋に住んでいる」

「なんて僕は知らない」

「紅き翼の一員」

「アルビレオ・イマが図書館島の地下にいる」

「なんて僕は知らない」

「世界樹の下には造物主がいる」

「なんて僕は知らない」

「黄昏の姫御子」

「アスナ・ウエスペリーナ・テオナシア・エンテオフュシアがここに  
いる」

「なんて僕は知らない」

「オツドアイの活発な少女」

「神楽坂明日菜が実は黄昏のひめ」

ズ……バツシャアアア……！

「……ツツ!!」

突然、高畑の両腕が消失した。

肘から先は完全にミンチになり、残った部分もズタズタだ。傷口から溢れるのはまた別の、おびただ夥しい量の血が、高畑の前方へ放射状に飛び散っている。

「あーあダメだよ急に動いちゃ。グルグルに縛ってたんだから動いたらそうなるのは当たり前じゃん」

「……、君の、仕業かい……」

「うん。そうだよ」

顔中に冷や汗を浮かばせる高畑に、沈無は涼しい顔で応えた。両

腕をズタズタに刻まれる激痛と大量失血。死んでいないのが不思議だ。

「……小僧お……」

低く呻くような声が響いた。

小さな木枯らしのような声なのに、何故かよく響く声。しわがれたその声は、つい先ほど腕を切り落とされた老人が発したものだ。

「小僧お、ここまでのことをしておいて、ただで済むと思うなよッ  
ッ！」

ブワッ……！

魔力ではない。気でもない。

ただ純粹な殺気が、沈無の肌を確かに撫でた。

殺気を向けられていない、味方のはずの魔法教師さえ肌を粟立たせるほどの強烈な殺気。

それを受けてなお、沈無はキャハと笑った。

「ここまでのことだなんて大袈裟な。ちょっと生徒数減らして、吸血鬼の手足もいで、英雄の両手ちよん切っただけじゃん」

そう言い放つ沈無の顔に、一切の罪悪感を感じられない。彼は蚊を潰すのと同じ感覚で、人を殺したただけなのだ。

「ま、何かするっていうなら予防線は張っとくけどね」

言いながら両手を大きく広げる沈無。また得体の知れない攻撃が、と魔法教師たちが身構えたところに

「皆みな動くなああ!!」

ビリビリビリ・・・

老人の大音声が轟いた。

「・・・が、学園長? いったい・・・」

「動くなと言っておる!!」

ビクッ、とタイトスカートの女性教師が手を引つ込めた。その手の甲に、薄く赤い筋が浮き上がった。

「っ・・・! これは・・・」

「あ、気づいたー?」

緊迫した面々とはその立場を画し、沈無が間延びした声を発した。

「極細の系・・・これが不可解な技の正体か」

「ピンポーン。正解。曲弦系っていうんだけどね。僕は曲弦系を使う曲弦師ってわけ。で、今広げているこの手をちよつと動かせば、僕は君達を殺せるんだよ。豆腐を切るより簡単に、刻める」

事実上関東最強の魔法使いたち。

彼等を糸もたやすく手玉に取り、その生殺与奪の権利をえた少年。

ここから始まるのは、一方的な虐殺か。それとも惨めな命乞いか。

なにがしかの要求があるのなら呑むのもやむなし。

老人がそう臍を噛み、他の教師達はただ黙して待つ。

学園都市にあるまじき沈黙が場を包み、やがて口を開いたのは、沈無だった。

沈無は口を大きく開けて……

「ハックション」

漫画みたいなくしゃみをした。

緊張した場の雰囲気におよそぐわない、実に間の抜けたくしゃみ。グシグシと鼻を擦り、沈無は一人ごちた。

「あー、やっぱり風邪ひいたかも。この季節だからって薄着はするもんじゃないのかな。今の季節なんて描写されてないけど、わかる人にはわかります。なんつって。キャハ！」

キャハキャハと甲高い声でひとしきり笑い、やがて沈無は深くため息を吐いた。

「あーあ、なんか拍子抜けだよ。せつかくだから絡んでみようと思っただけなのにさ、これはあんまりだぜ」

言葉通り、その顔には解りやすい落胆の色が伺える。期待ハズレを責めるように、再度ため息を吐いた。

「……念のために確認するけどさ、これって僕は悪くないよね？くしゃみをするときは口を抑える。子供でも知ってる当然のマナーだし、それに付随する事象なんて観測のしようがないから予想するしかないんだし。うん、やっぱり僕は悪くないよ。そう思うよね？」

ズブリ……

「じつ……かはっ！かつ……あ！」

刺したままだった鈍を抜き、ぞんざいに血振りをしてしまっただ。

「また気が向いたら来るよ。じゃーね。キャハ！」

沈無が立ち去った世界樹前広場。

生存者は1名。

沈無の行方は、杳<sup>よう</sup>として知れない。

キャハ！

余白（後書き）

今回は『もしもシリーズ』の延長となります。  
本編には影響のない『もしも』です。

## 第四十五話（前書き）

冒頭の会話はむりくり付け足しました。

前話がEFであることが伝わり難かったようなので、緊急措置、み  
たいな？

## 第四十五話

「……………戸惑、先輩？」

「うん？なに？」

「何事なにって……………むしろ私が聞きたいんですけど……………」

「とぅいづと？」

「理由わけ先輩は私を抱きしめているんですか？」

「ん……………」

どうして、と言われても困る。理由らしい理由なんてないのだから。

「なんて言うか……………ちょっと怖い夢を見てね」

白昼夢ってやつかな。嫌な夢だよ本当に。

『匂宮』って名乗るの、やめようかな。

「ふう……………」

ギョッ

呆れたようなため息の後、所在なさ気に下げられていた緑ちゃんの手が僕の背中に回された。

そのまま僕を抱き返してくれた。

「緑ちゃん？抱きしめてくれるのは嬉しいけど、当たってるよ？」

「当たってるんです」

「あはは、緑ちゃんもネタわかるんだね」

小さく笑ってから、緑ちゃんの背中から手を解いた。

「離れるから、心臓狙ってるハサミをどけてちょうだい」

「セクハラ性戯です」

「すみませんでした」

ヒヤリとしたぜ。

いざ離れてみると、緑ちゃんは頬を染めて……なんてこともなく、いつものごとく涼しい面立ちを保っていた。

いやはやまったく、可愛いげのない。いや可愛いけど。

「あ、じゃあ僕優勝ですよ。インタビューとか苦手なんで失礼します。え？賞金？超さん僕の口座知ってるんで、振り込んでもらっ

てください」

木乃香、刹那、千雨、さよ、茶々丸、緑ちゃん、エヴァを確保して、久しぶりに空間製作を発動させた。

全員で回れるのは一つだけが限界らしい。出し物のシフトがあったり友達と約束があったり忙しいそうだ。

木乃香と刹那と千雨とさよと緑ちゃんと茶々丸とエヴァとで回ったりするらしい。女子限定、といって僕の参加は否決された。

「はい、ここが我がクラス、男子中等部3-Cでございます」

「さぎくんの友達がおるんやね？」

「教室の造りは男女変わりないんですね」

「なんだか男の人ばかりで、落ち着きません……」

「心なしか、みんなこっち見てる気がするんだが……」

「いやいや気のせいじゃないだろうね。基本男子中等部は女子との関わりないから。」

「ちぎさん、この催し物はなんですか？」

「何此、似たような光景をみたような気が」  
なんだか

そうだね。緑ちゃんのところとよく似てる物だから。

ファカスセタジ  
「FF喫茶だよ」

「よく堂々と言えたなおい……」

ファイナルじゃないよファーストだよ。パクリじゃないよ、リス  
ペクトだよ。

「店員はRPGっぽい服装で接客します」

「益々（ますます）覚えがありますね」

まあまあ、取り合えず入る？

「こんにちは。ここはユーコの教室だよ」

「7名です」

「こんにちは。ここはユーコの教室だよ」

「あの、席は……?」

「こんにちは。ここはユーコの教室だよ」

「あ、あの……」

「こんにちは。ここはユーコの教室だよ」

「ああ茶々丸、そいつには話し掛けるだけ無駄だよ。NPCだから」

「NPCがいるのかよ!？」

「そりゃいるぞ。ここの店員達は基本決められたことしか話さないよ」

「接客成り立つのか？」

「はいといえで反応が代わるように、いくつかのパターンで台本化してあるんだ。対応外の言葉だと基本設定しか話さないよ」

「徹底してるな・・・」

感心半分呆れ半分の千雨をよそに、木乃香は嬉々として店員に話し掛けていた。普段ゲームしないからね、珍しいんだろう。

「こんにちはー」

「こんにちは。お会計は食事を済ませてからにしてね」

「今日はええ天気やねー」

「こんにちは。お会計は食事を済ませてからにしてね」

「ここのオススメはなに？」

「興味を持った物を食べるのが1番さ」

「ええ事言つんやねー」

「店長の意向でね。もっとも店長は、いつも『奇妙な珈琲』しか飲まないけど」

「……会話してるぞ?」

「特定の言葉を返すと発生する会話コンボだね」

「『奇妙な珈琲』はゲーム違うんじゃないか?」

「僕らを動かす天の意思はFF未プレイなんだよ」

ファーストの下りがやりたかったんです。

「そのコーヒーは、どいいうふうに『奇妙』なん?」

「……こんにちは。お会計は食事を済ませてからにしてね」

「おいさぎ、今なんでループした?あの切り返しは当然の反応じゃないか?」

「あれが想定されている反応なんだよ」

「……そのコーヒーは飲まないことにしよう」

別に不味くはないんだよ。ただただ奇妙なだけで。

「お待たせいたしました。お席にご案内いたします」

「案内なんて言うほど広くないけどね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちっ」

今のが悪態に対するデフォです。

「あ、佐倉ちゃんやー」

「んっ、んー・・・！」

愛衣ちゃん発見。まさかお客さんとして来て貰えるなんて思っ  
てなかったよ。

愛衣ちゃんは大慌てで口元を拭い、口の中のものを祿に噛みもせ  
ずに飲み込んだ。

「こ、こんにちは！ここ、鷺志さんのクラスなんですよね」

「うん、そうだよ。今愛衣ちゃんが食べてるそれも、僕の案」

愛衣ちゃんが今食べているもの。

乳白色の太い麺。刻み葱や薄切り豚肉の入った黄色いスープ。カ  
レーうどんである。

しかあし！これはただのカレーうどんに非<sup>あ</sup>ず！

「こ、このカレーうどんに入っている物は・・・まさか・・・！  
？」

「おいおい、これって……！」

エヴァと千雨が驚愕にのけ反る。ふっ……そこに気付くとは、やはり天才か。

そう。ここにあるのはただのカレーうどんなどではない。

数多の人が乞い、願い、求め、しかしいざ手の届くところまで来れば、その願いの重さに尻込みしてしまう。

そんな秘宝を、ここでは提供しているのだ。

そう、その名は……！

「『カツカレーうどん定食』だッッ!!」

僕の宣誓に、

カツカレーうどん定食……？

今、カツカレーうどん定食って言ったのか!？

そんな……あれが食えるのか？

お、おい、メニュー見る!カツカレーうどん定食、大中小、大で480円!？

なにいつ!?

僕の宣誓に引き寄せられ、教室の回りをうろついていた同志達メタロッターが我先にと入店してきた。あつという間に軽い人波が出来上がってしまつ。

そう。愛衣ちゃんの前にあるのはまさにそれ。カツカレーうどん定食(小)なのだ!!

「あの、さぎくん?カツカレーうどん定食、というのは・・・?」

「説明しよう。カツカレーうどん定食とは、超有名な某ロボット対戦ゲームの主人公がシリーズ3作目で食べた定食である。主人公は『カツカレーうどん』なのか『カツとカレーうどん』なのかを確かめるべく注文し、出てきた『うどんの上にカツカレー。山盛りのごはん付き』に驚愕する、というエピソードである。それをプレイした少女、そして大きなお友達はやがて『カツカレーうどん』へのあくなき探究心を抱く。乞い、願い、求めだすのだ。しかしそれを頂くのはた易いことではない。なぜかわかるか、刹那」

「え?えつと・・・」

「ふつ、刹那よ。顔に書いてあるぞ。『トンカツを買ってきてカレーうどんを作ればいいんじゃないでしょうか?』と・・・、甘い、ステビオサイドのように甘いぞ刹那ア!!」

「す、ステビオサイド・・・?」

「いいか刹那、想像しろ。お前はメダロッターだ」

「は、はい・・・」

「不意に、唐突に、『そうだ、カツカレーうどん食べよう』と思っ  
た刹那は、惣菜のトンカツを購入する」

「目当てのものが手に入り、ウキウキと鼻唄混じりに帰途につく」

「トンカツを食卓に置き、カレーうどんを作る」

「刻んだ葱。薄切り豚肉。キノコも入れよう」

「そして、完成」

「いざトンカツを入れようとして、気付いてしまうのだ」

「目の前にあるのは、油っこい衣に包まれた厚い豚肉」

「手にもっているのはコツテリカレーをかけたしっかりうどん」

「『コレヲアワセルノカ・・・？』」

「心の中の魔物が問い掛ける」

「時間を置き、若干冷静になってしまった自分に諭される」

「『コンナカロリーノタカソウナモノ』」

「『コンナイニモタレソウナモノ』」

「『アワセル？ホントウニ？』」

「かくして、我々の心は折れたのだ・・・」

「・・・」

・・・

周りのメダロットーたちはいつの間にか静かになっていた。皆が  
僕に同意してくれているのがわかる。

「もちろん、それだけじゃない」

「そういう思い付きではね、本物の主婦、いや『おばさん』には勝  
てないんだ」

「彼女たちは夕飯の遙か前、昼時に、すでに行動に移している」

「食事は何にしようか、そう考えた末の思い付きでは」  
「もうトンカツも豚肉も残ってはいないんだ」

我々が辿り着けない理由、次が最後。

「最後の砦。それは値段」

「当然だけどね、トンカツが必須なんだ」

「お肉が、必須なんだよ」

「トンカツだけ、カレーうどんだけなら問題にはならない」

「しかしその両方では？」

「出費があるからこそ、『冷静になってしまった自分』の言葉が重くのしかかる」

「より強く、より重く、『自分』は問い掛けて来る」

しかし・・・

しかし！

「それを、それらを、取り払ったのが僕たちだ！」

「サイズを細分化することでポリウムを個人の好みに合わせ」

「僕が私財を投じることで驚異の低コストを実現した！！」

「集え！メダロットよ！」

「エル・ドラト黄金郷は、ここにある！！」

オオオオオオオオオオ！！！！

僕に应じて鬨の声を上げる同胞達。その中では千雨やエヴァも小さく手を上げていた。

カツカレーうどん定食！大をくれ！

俺も大！

もちろん大！！

お、俺、中っ！

．．．すくなめ小で．．．

「みなさん、お静かに」

殺到する注文を手で制し、表れたのはロマンスグレーをオールバックに決めた（カツラの）口髭の老人（風のクラスメイト）。

「．．．．一カツカレーうどん定食で《ごういとみて》よろしいです  
すね！？」

オオオオオオオオ！！

「それでは！ロボトルウご注文ファイト、承りましたー！！」

店名、『メダロッターズ』にすればよかったかな．．．．．。

.

## 第四十五話（後書き）

いやもうメダロッターズだよ

鷺志「ですよー」

書いていたらテンションだだ上がりしちゃいました。後悔はしていません。

鷺志「満足しているから！！」

あ、やめて、カツカレーうどんのカツ投げないで！油とカレーで染みになる！ものっそいしっこい染みになる！

## 第四十六話（前書き）

西尾維新の新刊が出ましたねー

積んでる本、早く消化しないと・・・

## 第四十六話

「ありがとうございます。またのご来店をお待ちしています」

結局全員でカツカレーうどん定食を注文し、食事を終えて特に何をすることもなく教室を後にした。

後ろからは教室内の熱気が聞こえて来る。

店員さん

自分は店員ではないあります。隊員であります

え？これ貰えるんですか！？

はい。御来店の方皆様に無料配分しております。

すいませーん、『ビーストマスターのスパゲティ』ひとつー

「……………スパゲティか……………」

「千雨、戻る？」

微かな呟きを聞き漏らさずに気遣いのできる男をアピール。

「いやいい。カツカレーうどん定食のボリュームが凄かった……………」

ま、そうだよな。

カツカレーだけでも凄いのに、うどんなんて腹持ちの良い食べ物と合わせるわけだし。いくら（小）を頼んだところで、重いことはかわらないか。

「あの、鷺志さん」

一緒に出て来た愛衣ちゃんが控え目に声をかけてきた。

「これ、本当に貰っちゃってよかったですか？」

愛衣ちゃんの手元にあるのは割烹着。

カツカレーうどん定食を頼むと渡されるものだ。汁はね予防の策である。

男性にはメタルビートルのヘッドシザーズ柄。

女性にはセーラーマルチoppーパーキャットの柄。

「どちらも」！『メダル型のマジックテープで留める仕様になっている。』

「もちろんだよ。もともとそれを作ったのも僕だしね。でも愛衣ちゃんだけにしかしてないサービスだから、あまり言い触らさないでね？」

「もちろんです！本当にありがとうございます！」

お姉様と待ち合わせていますので、と言いつつ残して、愛衣ちゃん改

めてセーラーマルチは走り去って行った。

数分後。僕は3ーC教室前に一人で立っていた。

茶々丸とエヴァは部活の出し物。木乃香と刹那と千雨とさよは女子のみで文化祭を回るらしい。

僕、ちよつと寂しい。

3ーCの出し物、『メダロッターズ』に荷物を置いて、僕は一人寂しく祭を回ることにした。

え？名前？

やだなあ。ここは最初から最後まで『メダロッターズ』だったよ。

ね？そうだろう？

「茶つ々丸ー。来たよー」

茶々丸属する茶道部の野点<sup>のだて</sup>に参加。

べ、別に一人で回るのが思いの外寂しくて、ついつい足が向いち  
やったわけじゃないんだからねっ！勘違いしないでよねっ！

「さぎさん。ようこそいらっしやいました」

迎えてくれた茶々丸は、なんと着物姿だ。百合の花をあしらった  
清楚な仕上げの上物だ。

いいねえ。最近のキャバキャバしたのは、なんか違うよねえ。

「綺麗だよ茶々丸」

「ああありがとうございます・・・」

茶々丸も大分僕の贅辞に慣れてきた。前と比較すればわかるだろ  
うけど、吃り方が違う。

「貸衣装があります。さぎさんも、よろしければご利用下さい」

「お、いいねえ。是非借りよう」

僕と茶々丸、他数名の参加者で緋毛氈に座りいざ野点を始める。

「あ、そういえばね茶々丸。僕お菓子持ってきたんだよ。持参大丈  
夫？」

「はい。もちろん大丈夫ですよ。何をお持ち下さったんですか？」

「麸菓子」

ズルツと盛大にズツこける茶々丸。

「ふ、麸菓子、ですか……？」

「美味しいよ？」

「いえそれはわかりますけど……」

茶々丸が凄く困ってる。あれー？麸菓子外れ？

「なんか場違いみたいだから控えとくよ」

「えと……ありがとうございます」

お礼言われた。

そんなにダメだったかな……？

「……これって何回回すんだっけ？」

「……………痛い」

「ゴツホゴホ……ゴフオオ!？」

「ちょっと待って、足痺れた」

「ハ、ハ……………止まった」

「……………」

野点が終わってから、僕はこれまでにないくらい落ち込んでいた。

「ゴメン茶々丸。せつかくの出し物だったのに」

自分でも驚くくらいのダメダメっぷりだ。僕の人生が文字媒体の創作で、今がギャグパートだと言われれば信じてしまいそうなほどにダメダメだ。

もういつそ首をくくってしまおうか……。

そう思い詰めていると、茶々丸が僕の顔を覗き込んできた。

「どうかお気になさらずに。私はさきさんに参加していただけことが嬉しいです」

「ちや、茶々丸……」

フラ、と一歩踏み出す。

フラ、フラ

そして茶々丸の胸に飛び込んだ。

「茶々丸ー！ー！」

「よしよし」

今『おい鷺志ちよつと場所変われ』って思ったやつ。

ざまあ（笑）

「……おれれん」

「うん？」

やんわりと押し退けられ、少なからずていうかかなり残念に思いながらも体を離れた。茶々丸はなにやら真剣な面持ちで僕を見ている。

「……学園祭最終日、明日のことなのですが……」

「いいよ」

茶々丸の言葉を遮り、僕の言葉を重ねる。

「僕たちの事は気にしないでいいよ。僕たちは僕たちで楽しむさ。だから茶々丸も、茶々丸がやるべきことを『楽しむ』といい」

そういうと、茶々丸は驚いたようなわかりきったような、どっちつかずの表情をとった。うん、随分複雑になったね。

「……さぎさんは、知ってらっしゃるんですか？」

「僕はなんでも知ってるよ。僕が知ってることならね」

「エヴァー、遊びに来たぜー」

「ダンか。来るのはいいが、できるのか？」

「侮るなよ？僕は囲碁将棋オセロチェス麻雀なんでもござれさ」

「ほほう、それは楽しみだな」

茶々丸との蜜月を（泣く泣く）終え、僕はエヴァのいる囲碁部を訪れていた。

っていつか所属が茶々丸と同じなのになんで別れてんだ？

「さあダン座れ。せいぜい楽しませろよ？」

「その余裕がいつまで続くかな？」

神の一手を見せてやる！

「初手、天元！」

「ふっ奇策か、貴様らしいな」

「参りました」

「初手から真ん中打って、素人がまともに勝負できるはずないだろ  
う」

「おっしゃる通りです」

「まったく・・・」

頂垂れる僕を一瞥し、ため息を吐きながらパチパチと盤面をいじるエヴァ。

「さ、次はこれで打つぞ」

「嘗めるな！八目も置かれちゃ負ける方が難しいわ！！」

吠え面かせてやる！

「参りました」

「まさか八目置いて勝てるとは思わなかったぞ・・・」

僕も負けるとは思わなかった。

っていつか今僕どうやって負けたんだ？なんか吸い寄せられるように石が取られていったんだけど。

「埋める駄目すらなかったからな」

「あの、もうちょっと置いて貰うわけにはいきませんか？しょうか？」

「・・・ああ、うん。そうだな。何子置く？」

「エヴァが、これくらいなら対等かな？っていう数置いてくれ」

「ふ……む」

パチパチパチ……

「これくらいか？」

僕の眼前には、十六子も置かれた碁盤があつた。

「ふふふ……流石に十六目置き石があれば負けはない！覚悟しろエヴァ！！」

「参りました」

「私はなんで勝てたんだ……？」

僕にも解りません。

「そもそも十六子置いたことが初めてだ」

「ちょっと盤上ごちゃごちゃしたね」

いつの間にか他の囲碁部員はみんな僕たちの対局を見に来ていた。

覗き込んでいるみんなが口々に言う。

凄いな・・・

どうやって負けたのかさっぱりわからない

俺でもあれは勝てるぞ

ちくしょう、好き勝手言いやがって・・・。

「だ、ダン、ここには将棋もあるんだ。指さないか？出来るんだろ？」

「・・・指す」

「そうか。よし待ってる、今持って来る」

ちょっと気を使わせてしまったかもしれない。

「参りました」

飛車角金銀落ちで総取りされた。

もつすっかり日も落ちた。

今頃3ーAの面々は超さんのお別れ会の最中かな。あれは超さんが古さんに自発的に話したイベントだから、ネギの立ち位置は関係ないだろう。

「ネギはカシオペア持ってないみたいんだけど、超さんは渡さな  
いまま計画進ませるのかねえ？」

残念ながら僕には女心というものはとんとわからない。気象予報  
の勉強をしてわかるものでもないらしいし。

だから超さんがどんな考えでいるのかがさっぱりだ。僕への接触  
も、ついにない。

そもそも超さんがどんな世界の未来から来たのかが疑問だ。

転生物の二次創作では、転生してきた主人公は彼女にとってのイ  
レギュラーになっているものが多かった気がするが、そも転生した  
時点でその世界の歴史に組み込まれるのでは？

つまり彼女は、僕がいる歴史の未来から来たのではないかと、そ  
う思うわけですよ。

まあそんなことも、結局は超さんに質問してみるまでわかりよう  
のない無意味<sup>ノー・アンサー</sup>思考なただけだ。

ブーーーーー、ブーーーーー

「ん………ジョン？」

バイブレーション  
電話着信。ディスプレイには見知った友人のあだ名が表示されていた。

「お、やっと来たな」

3-Cの教室には僕以外のクラスメイトが勢揃いしていた。

予想外の売上を祝い、こっそり開く打ち上げ会、だそうだ。

なんで今日なのか、と聞いたら、

「誰かが打ち上げやろうって言い出して、あとは勢いで」

というのが国喜田の言。若い内はいろいろやるものだね。次の日も学校だっていうのに徹麻に勤しんだり。

「おーい、うちの立役者様が来たぞー」

「おっしや罪口、お前も飲めー!!」

「ほらほらコップが空いてんぞー!」

ちなみにノンアルコールです。こいつらは雰囲気酔うんだ。

「まさかの売上だったな、カツカレーうどん定食」

「あれは罪口の口上が役に立っただろ」

「ああ、おれメダロットやったことないのに盛り上がったし」

みんな口々に語り合つのは僕たちが来店した時のことだろう。あれは、もしかしたらちよつと音使っちゃってたかもしれない。

「配ってんのも、罪口の見立て通りの数だな」

「これなら足りなくなることはないだろ」

「あれはもともと麻帆良の学生の数だけ用意したからね。麻帆良生全員分も作れば足りるよ」

興味を持たないお客さんもいるだろうしね。

明日はもっと増えるだろうから、追加の分はさっき教室の隅に置いていた。

「ところで罪口」

がっしとアホが肩を組んできた。相も変わらずウザい奴だ。

「お前随分女の子連れてたじゃんかよっ！」

「そつだよおい！誰だよあの可愛い娘たち？」

「彼女か！？彼女なのか！？」

「7人いたぞ！？誰だ、誰が彼女なんだ！？」

「大人しく白状した方が身のためだぞ？」

「三つ編みの娘を紹介してください」

わーわーぎゃーぎゃー  
「喧々囂々、まったく元気な連中だ。」

苦笑混じりにため息を一つ。

たまにはこいつらと騒ぐのも、いいかもしれない。

## 第四十七話（前書き）

脇役にスポットを当ててもいいと思う。

## 第四十七話

あれよあれよと学園祭最終日、夕刻。

俺は国喜田や谷愚痴と並んでその終わりつつある祭の空気を偲んでいた。

「おいジョン、あの娘どうだ？」

谷愚痴は成功しないナンパに余念がなく、国喜田は手元で携帯電話をいじっている。麻帆良生ご用達の電腦掲示板でも利用しているのだろう。

ふう、と一つ息を吐き、俺は腕時計に目をやった。今年の大会は確か、かくれんぼ？だったか。

去年がエキサイトし過ぎたとかで、今年は控え目にしますー。なんて話だが、学園全体でかくれんぼなんて面白いかは甚だ疑問だ。

「そう思ってるのは僕達だけじゃないみたいだよ」

さりげなく今年のイベントに文句を言った国喜田は、俺に携帯の画面を突き出した。

指を這わせれば使えるといういかにも若者らしい端末の画面では、添付画像とともに最新の情報がアップされていた。

「……服を脱がすロボット軍団出現？」

ダッ

ガシッ

どこかへ走り去ろうとしたアホを迅速に捕獲し、俺は国喜田が操作する画面に視線を滑らせた。

なにこれ、どっかのイベント？

工学部のゲリライベントキターー(。。(。ー

ムキムキマツチヨが大拳して押し寄せてきた

ちょ、ビーム食らって服消えたんだけどこれって誰に請求すればいいの？

服のくんだり詳しく

真偽の程はともかく、添付の画像に女性のものが1枚もないのはせめてもの良心だろうか。

しかし訳がわからない。

書き込みはイベントの詳細を求めるものばかり。情報の需要と供給が全く釣り合っていないのだが、かろうじて読み取れるのは『異常テクノロジーの軍団』が『複数箇所に出没』しているらしいことだけ。

なんだ？これ。

「今年の催しに不満を持ったどこかの部が勝手に盛り上がるうとしている。っていうのが大局的な意見みたいだね」

「どこかの部って、ロボットが絡むなら工学部しかないだろ」

あははと笑う国喜田に軽く応じつつ、俺は内心で溜息を吐いていた。

どうか、『そういつ』揉め事じゃありませんように。

普段はまったく意識もされない割に、こと窮地になると決まって頼られるどこかの神様も大変だ。なんて思いながら適当な方角に手を合わせていると、実に聞き慣れた声が聞こえてきた。

《麻帆良祭にお集まりの皆さん、並びに学生、教師諸氏。ごきげんよう》

遠くから叫ばれているような、耳元で囁かれているような、周囲を固められて大勢で同時に話されているような、曰く言い難い響きの声が告げる。

《皆さん、特に血気盛んな麻帆良の仲間たちは今年のかくれんぼに並々ならぬ不満を覚えていることと思う》

「なあ、これって罪口じゃないか？」

「確認するまでもないだろ。この空回りしちまったやる気をそこはかとなく感じさせるような気がしないこともない希薄な覇気が微か

に込められた声は、罪口だ」

ようやく大人しくなった谷愚痴が腕を極められたまま首をもたげた。気持ち悪いからせひやめてほしい。

《そんな諸氏の意味を勝手に汲み取り、麻帆良の【最高頭脳】と【最上技術】がサプライズイベントを用意した!》

最上技術って誰だ。

「多分、罪口くんじゃないかな?」

「なんて悲しい自称だよ・・・」

指先と手先と舌先の器用さは認めてやるがな、そういうのは誰かが読んでくれるのを待つもんだと俺は思う。

《今同時多発的に湧出しているロボットたちは、【最高頭脳】超鈴音謹製の、いわば侵略兵器だ》

《実は超鈴音は、魔法使いの末裔で火星在住の未来人にして天才科学者だったのだ!》

《彼女がこの時代の地球に現れた目的はただ一つ》

《過去である現在の地球に自らの思想を広め、未来を自分の望む姿に変えるため》

《そんな彼女の思惑をなんとなく悟ってしまった僕こと罪口鷺志は》

《ケータイを弄る片手間で対抗兵器の開発に成功した》

《有志の諸氏には、是非とも僕の武器を手に取り、超鈴音率いる未来ロボット軍団を討ち果たして欲しい!》

張ってはいるがどこか抜けた声音でデモンストレーションをつづける罪口。どうでもいいが魔法使いか未来人か宇宙人が超科学者が、統一出来なかったのか？

《対抗兵器、すでに手にしている人もいると思う》

《僕が所属するクラスの出し物、中等部3・Cの喫茶店》

《そこで飲食をした方に漏れなく配ったモノ・・・》

《ロボットの腕的な銃だったり種的な部隊が使う銃剣だったり狩人愛用の傘的な銃だったり実在の銃器をモチーフにしたものだったり》  
《あれこそが、僕が手製した対抗兵器だったのだ！》

な、なんだったー

その後も罪口はウダウダと長つたらしい説明を続けていく。

その銃器は学祭中しか発射出来ないこと。

銃口から出る光は人体に影響はなく、無機物にのみ物理的ダメージを与えるご都合設定であること。

ロボット軍団は各所にあるポイントに向かって進軍していて、それを食い止めることが出来れば勝利であること。

MVPへの賞品は【罪口商会】で使える特別優待券と、ロボット撃退数に応じた食券であること。

《以上が僕からの伝達である。ちなみに、今からでも3・Cに来てくれれば誰であっても参加は可能です。参加者随時募集しています》

同じ《》の中で口調を変えるな。

国喜田の示す携帯画面では、被害状況の報告が主になってきた。

罪口さんの、聞こえたか？

ざけんな！イベント前に言えよ！

今から教室まで駆けてメシ食って戻ってきて戦うのか？

彼等の言は実にもつともだ。まるで事が起こってから行動でないといと罪口に不都合があるかの如く、遅い展開ではないか。

まるで、前もって用意していたあれらの道具が実はこのイベントの為に用意されていた物であることを形だけでも隠そうとしているかのようだ。

「罪口くん、何がしたいのかな？」

「売りを上げを伸ばそう、なんて殊勝な考えじゃないのは確かだな」

「罪口のことだ、どうせ何も考えちゃいねーよ」

《ちなみにこの通信は一方通行ではない。聞こえてるぞ谷愚痴》

「え！？どうなってんだよそれ！？」

《罪口商会に作れないものはない。……あ、ゴメンねお嬢ちゃん。それは無理かな。うん……はい、大言壮語でした。反省してます……もっと、修業します》

何を言われたんだ。

《谷愚痴後で吊す》

「お前それ八つ当たりだろ！」

《うるさい黙れ。……さて、本イベントに何か質問があれば答えよう。その場で発言してくれ》

その後はしばし質疑応答タイム。聞いているだけだと何がなにやらわからない。あ、今<sup>ガッ</sup>って言った。

《……もうない？大丈夫？……ゴホン。なにぶん急遽発案したもので多少以上に不備はあることだろうが、まあ気軽に楽しんでくれ》

実に適当に締めくくり、罪口の声は聞こえなくなった。

「……ようは、罪口がイベントを画策した。ウチの出し物に土産をつけたのはこのイベントと提携させるため……ってことか？」

「俺達にはそう言いたいんだろうな」

「なんだか含みのある言い方だね？」

含みまくりだ。多分この騒動は、罪口が堂々と暗躍した結果なのだろう。

あいつは先生たちで遊ぶのが趣味だと言って憚らないような奴だからな。地雷原でコサツクダンスをするようなスリルが好きなんだ

ろう。

今回も、バレそうでバレない嘘。嘘ではないと言い張れる程度の嘘でも吐いているんだろうさ。

携帯が震える。電話着信を知らせるメロディが流れ、画面を確認した俺は大袈裟に肩を竦めた。

この『イベント』が終わるまでに何度溜息を吐くのだろうか。

俺はやれやれと首を振りながら、どうしてか憎めない喧騒に身を投じるのだった。

## 第四十七話（後書き）

鷺志「ジヨンは僕とは違った意味で面倒臭い話し方だね」

ジヨンのモチーフとなった彼の婉曲的に過ぎる言い回しは止めました。僕じゃ薄っぺらくなりそうで……

鷺志「もとから深い作品でもありませんけど。ってか僕出番は？木乃香たちも出てないよ？本格的に女子分ゼロだよ？」

女子分は、次回から

## 第四十八話（前書き）

学祭が本格的に始まる前の一コマです。

もしかしたらこの話無くても良かったかも知れない・・・

とか書いてる途中で思ったのは内緒

## 第四十八話

身も蓋も無い話をしてしまうと、僕は超さんの計画が成ろうと成らなかるうとどうでもいい。

魔法が世界に知れたところで僕にも僕の家族にもなんら悪影響はないのだから。木乃香に至っては、広まった方がいいのでは、とすら言っている（原作で、だけど）。

だから本来、学祭最終日はなんにもせず教諭達の悪戦苦闘やネギの四苦八苦を見てキャハキャハ笑っているだけで過ごすつもりだった。

だった、のだ。

でもダメだった。

どうしてもダメだった。

とても堪えられることじゃなかった。

どうしようも、ないんだ。

「なんで・・・」

思わず声が漏れる。集まってくれている皆には、まだ何も話していない。

「なんでだよ・・・!」

僕の呟きを聞き咎め、エヴァが僕に一步近付いたのがわかる。

それでも、僕の言葉は止まらない。僕の心は止まらない。

「なんで……、人が真剣になっていると水を差さずにはいられないんだ僕は……!？」

「お前真正の嫌な奴だな」

エヴァが大きく溜息を吐き、千雨にうろんげに突っ込まれた。

水を差して茶化すのです。

「……とまあそんなわけで、超さんが魔法を世界に認識させる魔法を使おうとしているから、それに乗じて皆の修業の成果を見せてもらおうかなー、って」

道徳とか倫理とかをエヴァに軽く諭されてから、僕は簡単に今の状況と僕の目的を説明した。

「失敗しても別にいいよ。僕たちが被る被害なんてほとんどないし、あっても僕がなんとかできる範囲だし」

っていうかなんとかするし。

「むしろ成功すると超包子の点心が食べられなくなるというデメリットがあるくらいだ」

超さんの作る点心、絶妙なんだぜ？飲茶はあそこで決めてるんだ。

「……なあ、さぎくん？」

僕がああの味を思い出して陶醉していると、木乃香が控え目に手を上げた。

「ウチらが困らんでも、他には困る人がおるんやろ？そんな、遊びの延長みたいな気分でええの？」

小首を傾げながらそう言う木乃香。人の気持ちになって考えられる、実に優しいいい子だ。

「確かに木乃香の言う通りだね。僕たちは大して困らないけれど、この1件で困る人は他に大勢いる」

「ほなら、もっと真面目になるべきやない？」

「じゃあ木乃香は、どっちを向いて真面目になる？」

「どっち……？」

「魔法先生たち魔法に関わる人達は、魔法が世界に認知されると、困る。超さんたちは、未来において何かがあつて、そんなことにならないように過去を変えにきた。だから魔法が世界に認知されないと、困る」

どうする？と僕は問い掛ける。

「うーん………」

「当然だけど、どっちについても、それはどちらかの敵だよ」

「それは、わかるんやけど……」

「どちらも真面目に取り組んでいる。この騒動の結末が、双方とも今後の在り方に大きく関わってくるからだ」

「だから、せめてウチらも真面目にやらなあかんと違っの？」

「僕たちはね、超さん率いる未来チームとも、学園長率いる魔法使いチームとも違う立場なんだよ。見てごらん？」

エヴァを見遣る。

「魔法世界を追放された悪の魔法使い」

千雨を見遣る。

「空間製作と呪具アイテムを使う中学生」

さよを見遣る。

「騒霊現象が特技の人造人間」

緑ちゃんを見遣る。

「北海道の、特殊な封魔師の長子」

刹那を見遣る。

「京都神鳴流の剣士」

そして木乃香を見る。

「新規の法術を使う協会の息女」

最後に

「それと僕」

共通点なんて、せいぜいが麻帆良の生徒であるくらいのもの。中々にぶっ飛んだ集団だ。

「そう。麻帆良の学生なんだよね。だからせめて、麻帆良の味方になることしよーかなー、って」

もっと言うと、鬼神とか持ち出した超さんに対して少しでもゲムバランス整えようかなー、っと。

人数差があっても兵数差はないからね。ロボット軍団で。

いやむしろロボットの分多いのか？

「でもそれやったら、未来は『変えたく』なるくらいひどくなってまうんやろ？」

「それもそうとは言えないんじゃないかな？」

「なんで？」

「超さんが居た未来は、『超鈴音が時間遡航し、学園祭最終日に大騒動を起こし、魔法使い陣営に阻止された』なんて事実は無かった未来だから。超さんがこの時代に来て、この騒ぎを起こした時点で超さんが居た未来そのままの姿にはなりえない。大なり小なり、なにがしかの変化があつたはず」

高畑先生には声をかけてるし、ネギは多分放っておかない。英雄と英雄の子供（後の英雄？）に『未来に対する危機感』を与えたんだから、その通りの未来にはならないだろう。

といっても、タイムパラドックスをどう解決しているのかは知らないけど。

多世界解釈なら『超さんの居た未来とは別の、崩壊のない世界』にもなりえるだろう。

でも検閲官仮説や時間順序保護仮説が実説だとすれば、この行い自体が無駄になる。

まあ時間遡航できているのは紛れも無い事実なんだし、少なくとも完全に無影響なんていうことにはならないと思う。

っていつか本当にどうなってるんだらうね？

原作で14巻の、泉さんとのイベントで『ネギ（1）』と『ネギ

(2)『がマツチングして、でもその記憶が『ネギ(1)』に刷り込まれたりしてないんだから少なくとも多世界かそれに準ずる世界解釈ではあるんだろうけど……

あゝ、ダメだね。こういうのは物理学者に任せるに限る。

「まあなんにせよ、木乃香にやってもらいたいのには乱暴な事でもどちらかに肩入れすることでもないんだけどね」

首を傾げる木乃香に軽く微笑み、僕は少しだけ考え事をする。

事の成否を担う少年はいずこか。

原作最初の見せ場らしい見せ場なんだし、ここはしっかり輝いて貰いたいよね。

ここは『ジヨンバール分岐点』だ。

良くも悪くも、ここを境に世界の在り方は大きく変わる。

相方は神楽坂だけ。カシオペア無しの縛りプレイ。

僕たちは露払いに甘んじてやるよ。

一生懸命頑張りな。ネギ。

## 第四十八話（後書き）

鷺志「今話の意義はなんですか？」

原作より早く魔法を知り、その暗い部分を聞いた上でも、心優しい木乃香は看過しかねるかと思ひまして

鷺志「つまり？」

僕の不まらない感傷です。

鷺志「次回はネギま！らしいド派手バトルです」

第四十九話（前書き）

書いていて思い付いたしょうもない小ネタ。

『二月三日』

鷺志「匿ってくれ」

エヴァ「よし。入れ」

く、くだらねー・・・

## 第四十九話

Side・刹那

「斬鉄閃！」

ズバアアツ！

さぎくんから借りた木刀を振り、周囲の筋骨隆々としたロボットを蹴散らす。

大物を相手取る以上、まずは足元を固めなくては。

「『来たれ』」

招来の呪文に応じ手に顕れる結わいの感触。もうすっかり馴染んだものだ。目をつぶってもその刀身を思い起こせる。

「斬鉄閃式の太刀、百花繚乱ッ！！」

ズガガガガガガガッ！！

ここまで振り乱すと、実際に式の太刀が出るのは三分の一程度か。

安綱の鞘が抜けないように気を配り、木刀と奮ってロボットを一掃。これでこの辺りは盤石だろう。

「おっお前ら！あんな女の子に任せっぱなしでいいのか！？」

「いいわけねー!!」

「麻帆良の底意地、見せたらあー!」

さぎくんのクラスで配っていたらしい、突飛な形の武器を手に、  
大学部所属と思われる体格のいい人達が気合いを入れていた。

中には素手で戦う人や遠当てを使う人までいる。

「回りのロボットは、任せても大丈夫そうだな・・・」

皆さんとても頑張っているらしい。やはり食券が大きいのだろ  
うか。

「私の相手は・・・まだ、か」

近くの雑兵を蹴散らしながら、さぎくんに教えてもらった場所を  
目指した。

side・千雨

ええい畜生!

「1」のつ・・・!」

すぐ後ろに迫っていたロボを打ち壊す。

ヤバい。これはヤバい。

何がヤバいってコイツら人間じゃない。熱源探知とか普通にやってくる。だから空間製作が使えない。効果が無い。

「はあっ！」

右手の符で焼き払い、左手の石を爆発させる。もちろん生徒たちから隠れながら。

私のはあくまでも逃げ隠れしながら戦う方法であって、戦闘そのものは罨や不意打ちくらいしか教わっていない。

確かに貰うアイテムは強力だが、上手く活かせないんじゃない話にならない。

だから、

「えーい！」

ピュンピュンピュンピュンピュン……

隣にいるさよが4個の銀玉を高速で動かし、近付いて来るロボの膝や肘を撃ち抜いていく。

そうしてこけたロボと、そのロボに躓いたりしたロボのとどめが、私ってわけだ。

「まったく、さぎもよくやらせるぜ」

「でも、確かに効率的ですよね」

「まあ、否定はしねーけど」

私もさよも、生身が相手じゃないとうまく自分の調子が出せない。だからさぎは私らを組ませたんだろうな。

「・・・それでも、ちよつと数が多過ぎるな。さよ。私の後ろに入れ。一掃する」

「はい！」

「よいしょつ・・・と」

ドズン・・・！

私がポケットから取り出したのは、煙突の先端と見紛うような巨大拳銃。おかしな字面だとは私も思うが、まあ拳銃を巨大化させたものだとも思ってくれ。

「千雨さんも大概非常識ですよね」

「言うな。泣きたくなる」

涙声で応じつつ、私は銃口（砲口？）を前方のロボ集団に向けた。

「ティロ・ファイナーレッツ！！」

カキンッ

腕全体で引き金を引くと、その銃口（砲口？）から銃身に見合ったサイズの巨大な弾丸が射出された。

「えーい！」

大玉転がしでも使えそうな弾丸は、すぐにさよの騒霊現象に捕まり、不可視の力で敷かれたレールを疾走し始める。

私たちの回りを回るように、グルグルと。徐々に離れながら口ボを蹂躪していく。

「もう一丁！」

カキンッ

もう一発。今度はさつきとは反対側に放つ。

「やあーい！」

そちらもやはりさよに捕まる。先ほどよりも大きな螺旋を描きながら周囲の口ボを一掃していった。

「ち、千雨さん、いっぺんに二つは、ちょっと辛いです……」

「あはは、わりーわりー」

といっても、さよも随分重いものを動かせるようになった。

「私のアーティファクトに比べたら大分軽いですよ。重量的には二つ合わせてもアーティファクトの方が重いかも」

「あんな、メロンみたいな石が？」

「もう、すつごく重いんですよ・・・」

「どれくらい？」

「足の上に落としたらさきさんが悶絶するくらいです」

「相当だなそれは」

そんな雑談をしている間に、弾丸は推進力を失い歪に転がるだけの鉄塊となった。

「さぎの言ってた大物ってのは？」

「まだみたいですな」

「ってことはまだしばらくは半裸の恐怖に怯えながら口ボ退治かよ・・・」

「あはは・・・、服がなくなったらさきさんが持って来てくださるそうですけど・・・」

「それがわかるなら服がなくなるまえに助けて欲しいもんだぜ」

「あはは・・・」

とにかく、もう一踏ん張り。

近付いて来るロボを確かめ、私は障害物となった鉄塊に蝙蝠をデフォルメしたようなデザインの銃、『パルスビーム3』を放った。

side・緑

「<sup>ロボット</sup>機人が相手だなんて、まるでコミックボンボンですね」

口にしてからしまった、と思う。これがさき先輩に聞かれていたら濃ゆい話に巻き込まれるところだ。

一つ一つの音を聞くのはとても疲れる、と前に言っていたから、常時聞いているようなことはないだろうけど、嫌なタイミングがちよくちよく一致するのがあの人だ。

「沈黙」

しばらく待つて、先輩からの連絡がないのを確認して息をついた。

「一先、<sup>て</sup>大物前の小物集団ですか……。誰でいきましようかね？」

飼っている妖物の中から、この状況に対応出来そうな者を思い起こす。

一掃すればいいんだから、いつそ大物で返すのも……

## ズウルリ

そんな考え事を無視し、私の眼から四本の腕が生えてきた。

「驚、待乞……」

宿主わたしの声をよそに、その腕の持ち主達は当然のように這い出してきた。

「あ……、久しぶりの外側じゃが……」

「蝦夷と比べて、随分湿った空気だねえ」

「おんしは元々こつちじゃろうがい」

「あんたもね」

出て来たのは二つの人影。

二人とも和装。男は時代劇の浪人のようにだらし無く着流しの前を開け、髪は長くボサボサ。しかし確かに整った顔の、美丈夫という言葉が似合う容姿だ。

女はまるで吉原にでもいそうな、一見して遊女のように絢爛な着物簪ものかんざしで飾っている。長い黒髪の、これまた美人。

「睨視」

「お、なんじゃお嬢」

「そんなに見つめられると、照れちまうよお」

二人ともニヤニヤと口の端を吊り上げ、からかうようにつついて来る。

私は溜め息一つ、二人に詰め寄った。

「何故<sup>なんで</sup>あなた達はいつも勝手に出てくるんですか。呼んだときは来やしないくせに」

「たまにはええじゃろう。儂らも近頃暇なんじゃ」

「そうさね。今日は祭で、派手なドンパチもあるんだらう？楽しんでだっていいじゃないかね」

「酒は出んのかいの？」

「学校のお祭りが出るわけないでしょう」

「なんじゃ詰まらん、とむくれる美丈夫。何事かを探してキョロキョロしている美女。」

「ところでさお嬢」

こっそりと耳打ちするように顔を寄せてきた。そのまま声を潜めて、

「お嬢の良い人、ここにはいないのかい？」

吹いた。

「吃、吃吃吃何を言いますかそんな人がどこにいますか私にはとんと心当たりが無きにしもあらず」

ノーベル賞授賞間違い無しの名演技を見せてケラケラと笑われた。あれ？ノーベル？

「隠さなくたっていいじゃないさ。あたしもこの人も、ちゃあんと知ってるよ」

「おつさ。なんせ儂ら、お嬢の眼ん玉に住んどる。いつでも見取るわ」

「空寒くそひやこと言わないで下さい……」

はあああ、と。さつきよりも深い溜め息が出た。この人達が出る、と、やたらと絡んで来る親戚の酔っ払いを相手にしているようだ。しかもこれで素面だから始末に終えない。

「なんじゃお嬢。あん若造に懸想しとるんじゃろお？」

「らいばるが多いみたいじゃないかね。隙みて閨に入っちゃまいなよ。先んずれば人を制す、さ」

何を言っているんだろうこの人は。

「呆黙だいまく、そのことでの相談は後でしてあげますから、先ずは目の前のロボットをどうにかしてください」

こんな問答の間に、もう随分近くまで迫られている。なにやら蜘蛛みたいな大きいのも増えた。

「儂らに人形遊びをせえ言うんか？」

「まあいいじゃないかね。あたしらが勝手に出て来ちまったんだから」

不服そうにぶー足れる美丈夫に対し、あくまでも楽しそうな美女が言った。

「まったくだ。勝手に出て来ておいて『働きません』じゃ困る。この二人のような大物は、出している間の消費魔力コストが大きいのだから」

「意沿それに、掃除が終つたらもう少しまとものが出て来るそうですよ。準備運動のつもりでもやっちゃって下さい」

「……まあ、しつかたないのう」

バリバリと頭を掻き、着流しの襟を正した。そのまま口角を吊り上げ、牙を見せ付けて獰猛に笑う。

「行くぞ」

「あいよ」

「頼肩たのみましたよ。酒呑。茨木」

「」

「」

「」

頼りになりすぎる背中を見ながら、それにしてもと息を吐く。

酒呑童子

茨木童子

吸血鬼

葱餓鬼

天邪鬼

新田先生

まったく、鬼の多い学校だ。

## 第五十話（前書き）

ちよつと鷺志の影が心配な今日この頃。

今さらですが、鬼物語発売されましたね！

早く積ん読を消費して鬼物語を読みたい。でも流して読んでいい本  
なんかありません。

このジレンマどうしてくれよう……！

ちなみに、本は買った順番に読む主義です。

## 第五十話

『ニンニン』

『……なんのつもりかな？この照準機サイト、けして安くはないんだぞ？』

『いやなに。雇われを経験してみるのもまた一興でござるっ』

『ほう？忍者から傭兵にくら替えかい』

『もとより忍者とは雇われの、闘う科学者のことでござる。それが本分の一端にかえるだけ。それに拙者は忍者ではないでござる』

『ふっ、まあいいさ。要するに、私の狙撃狙撃の邪魔立てをするんだろっ？それなら……』

『事を成さねば報酬はない。拙者も、一度は戦ってみたいでござるからな……』

ここからは銃声と鉄の弾く音の共演。聞いている限りだと、どうやら良い勝負を演じてくれそうだ。

1番のバランスブレイカーは、原作遵守で足止めといこう。

「木乃香のほうも問題はなさそうだし、僕もぼちぼち始めようかな」

木乃香は僕の少し先で膝をつき（膝の下には僕のハンカチが敷いてあるよ）、指を組んでうなだれている。

そのつむじの先にあるのは、世界樹。

木乃香の凄まじい魔力が足元から根を伝い、世界樹に流れていくのを見て取れた。

一ツ式。

木乃香からの魔力供給で無理矢理に起こす神秘。

今回は霊絡をパスにして世界樹に魔力を送り、学園に及んでいる世界樹の加護を強化している。

木乃香の働きで、この騒動での怪我人はより減ってきてくれることだろう。

「まあその間無防備になるわけで、そんな木乃香の衣服と柔肌を守るのが、僕ってわけ」

額に汗を滲ませる木乃香を背に、淡く淡く発光する世界樹を背景に、僕はそちらを振り向いた。

「こんにちは。田中さん」

「コンニチハ。罪口サン」

『こんにちは。鷺志さん』

おつとよく見ると田中さんが小さな液晶を持っている。そこに写っているのは丸眼鏡をかけた三つ編み（ここ重要）お下げの女の子。

「こんにちは、ハカセ。テレビ電話的な？」

『はい。テレビ電話的な、です』

胸から上だけの映像だが、腕を組んでいるのがわかる。なんだか最近、やけに攻撃的なんだよね。

『この騒動、魔法先生達を御するのはたいした労ではありませんでした。気になるのも気にしなくちゃいけないのも、鷲志さん。貴方です』

「へえ？年頃の女の子の胸中を掻き乱すなんて、僕も罪な男だねえ。罪口だけ」

『黙って下さい』

はい。

『超さんは戸惑ってました。貴方のような人はいないはずだと。どうやら時間遡航に際してほんの少し位相の違う過去に来てしまったようだ、と』

でも、だからといって何もしないわけにはいかなかったんだろうね。未来と過去の構造がどう解明されたのかは皆目見当もつかないけど、この騒動を興すことで、少なくとも超さんがいた未来そのままの歴史を辿ることはありえなくなった。

イレギュラー  
僕なんかを気にしてはいけなかったんだろうね。

『~~~~と、いう訳で、私達が貴方の抑止力になりに来たわけですよ！』

「え、なんて？」

ははは、聞いてなかった。

『わ、私は・・・』

ズレた眼鏡をかけ直しながら、ハカセは先ほどの話をかい摘まんで話した。

『私は、鷺志さんが学園中に張り巡らせた糸に眼を付けました』

・・・へえ

「見つけたんだ？あれ」

『見付けました。眼を付け』

ハカセの眼は、眼鏡の反射でよく見えない。

でも口元が綻んでるからきつと緩く笑ってる。

『なぜか、な・ぜ・か！細かな部品の重さが量るたびに変わるんです。何度量つても同じ重さには量れず、秤を変えてもダメ。なぜだろっ、と茶々丸の姉妹機に調べさせたところ・・・』

「僕の糸を見つけた、と？」

コクンと頷くハカセ。

僕の糸の重さを量る？ 一体どれだけ精密な秤だよ。ウランでも量るつもりかって。

『そして鷺志さんの生活を観察した結果、どうやら目に見えないほど細い糸を普段から展開しているらしいことに気が付きました。その黒い革手袋、厨二病じゃなかったんですね』

しまった。周りからはそう見えるのか。

『前後左右（前）』。アーティファクトではない方の手袋。

こちらから広げている物質の糸を、見掛けられたらしい。

『信じ難いことですが、その手袋から学園中に、隅から隅に張り巡らせ、どんな人がどこにいるのかを察知したり、人に絡ませて拘束したり、脆い糸から硬い糸まで、数種にわけて展開しているようですね』

「・・・・・・・・・・」

僕は思わず黙り込んでしまった。

なんとという慧眼。まさに、まさしく、天才か。

『修学旅行では、その糸で人の殺傷までも観測しました』

「おっと・・・」

一応探査をして人が居ないのは確認したつもりだったんだけど、動かない機械までは目が届かなかったかな。

「中学生の女の子に見せちゃうなんて、僕もまだまだだね」

木乃香たちにはばかり注意を払いすぎたかな。普通の女の子じゃ、トラウマ間違い無しの光景だろうに。

『観測したのは私ではありません。茶々丸の姉妹機です。しばらくハンバーグやトマトジュースが口に出来なくなる様相だったらしいですね』

「茶々丸の妹にそんなものを見せてしまうなんて、まったく遺憾の極みだよ」

『・・・貴方も、茶々丸たちを人として見てくれるんですね』

「当然さ。茶々丸は僕の友人で、愛しい愛しい愛しい《家族》だよ」

キュイン

どうやら僕の言葉に反応して、田中さんの視線が動いた。

『我が工学部の新型ロボット兵器、T-A-N-K-3。愛称田中さん、です。存知のようですが』

「ああ知っているよ。茶々丸の弟だろ？つまり、僕の弟さ！」

キユイン

再度、田中さんの視線が動いた。

『田中さんは、鷺志さんとの戦闘を想定して造りました』

「え？」

なにその驚愕過ぎる設定しんじつ？

『田中さんの外皮には骨が折れました。刃物での切断なら外殻を硬くすれば解決ですが、糸切りとなると対処が難しい。糸と、刀。その両方に耐性を付けないといけない』

なんでわざわざ思考の道筋を教えてくれてるんだろ？そこに穴があつたら衝くべき隙になるわけだけど。

アレかな？お喋りが好きなのかな？

それとも、悪役の心境？

『〜結局、外皮を最新鋭の合成樹脂のゴム質で覆い、内側には硬化外殻を付設。これによって糸と刃物の両方に耐性を設けたのです』

最新鋭、なんと便利な言葉だろうか。これだけで科学的な説明の大半を省くことができる。

「あ、ごめん。今ちよつと電波受信した」

『お気になさらず。よくあることです』

いやよくは無いだろう。良くもない。

『各実験は済ませました。鋼質ワイヤーを試し、ダイヤモンドカッターを試しました。これからの戦闘が、最終実験です』

はっふう。万難を排して挑んで来る、ってわけかい。

そうまでさちやあ、挑戦を受けないわけにはいかないじゃないか。アーティファクトは使わない。あっちなら多分裏をかけるけどね。

『ただ、ですね。私は鷺志さんにお礼を言いたいと思っています』

「……お礼？」

はい。とハカセ。なぜに？

『田中さん』

「ハイ」

一歩、僕の方へ踏み出した田中さんは、サングラスの下の視線で僕の目を真っ直ぐに見つめてきた。

「私ハ、罪口サンヲ快ク思ツテイマセン」

「ほあっ!?!?」

いきなり嫌われ発言！？

「姉サン以外二毛愛ヲ説クアナタガ嫌いデス」

しかもおもつくそ自我持ってますね。茶々丸だって時間をかけてこの境地になったというのに、なんでまた？

『鷺志さんが、茶々丸と新婚旅行とまで言いながらフラフラしてからですよ女の敵。むしろ女的的』

「んー……、説明プリーズ」

『つまりですねえ』

こめかみを指でトントンと叩きながらハカセ。

『姉想いな田中さんは、お姉さんの胸のうちを乱しながら他の女の子にも似たように囁く貴方に憤り、その想いで《心》を持つに至ったのです』

「……」

いや言いたいことはわかるけど、それでいいの？科学者として。

『科学でも解明できないことはあります』

おいおい。

『ですが、それはあくまでも『現代科学では』と括るべきです。魔法にオカルト、なんでもござれ。科学的じゃない、なんて言葉ほど

科学的じゃない言葉はありません』

何かのスイッチが入ってしまったのか、ハカセの目には強い意思的なナニカが燃えているようにも見える。

『千年も遡れば、馬より早く走る鉄の箱も、遙か遠方と話せる小さな箱も、絵が動く薄い板も、そのすべてが『科学的じゃない』夢物語です！科学的じゃ説明できないものを説明するのが、科学の楽しさでしょうに！』

画面の向こうで硬く握った拳を振り上げる。その眼には強い好奇心が燃えていた。

『ロボットが得た自我、《心》！つまりは未知！私の研究を一段進めてくれた鷺志さんに、だから感謝を！』

「ど、どういたしまして・・・」

すごい熱弁。いまだに何事かまくし立てている。メダロットについて話している僕も、はたからみたらああなのだろうか？

ちよっと自戒。

「あーっと、ハカセ？それで、僕は田中さんと戦えばいいのかな？」

（画面に唾（！）を飛ばしながら舌を回すハカセの狂態に若干腰が引けるが、いつまでも話を聞いていても、それこそ話が進まない。

『いえ。鷺志さんには田中さん『達』と戦ってもらいます』

その言葉を合図にしたように、眼下の景色が一変した。

ズガガガガガン！

つと、どこからか大量のなにかが飛来したのだ。

「・・・いや凄いな。50人兄弟？」

「55人です」

「見渡す限り田中さんだ」

世界樹前広場を埋め尽くさんばかり、溢れんばかりの田中さん。夢に見そうだ。

「長男は誰？」

「製造順デハ私ガNo.1です」

『一番早かったお陰なのか、環境がわずかに違うのか。お姉さんと思う《心》持っているのは『彼』だけです』

それはここ数分話して解った。はっきりと好感がもてる青年（少年？）だ。

「OK。じゃあ僕と田中さんの勝負にしようぜ」

『?』

博士が疑問を挟む前に、

「あ――――――――――」

ゴゴシヤアツツ・・・

『はひいつ!?!?』

僕がテノールボイスで定音発声していると、一瞬で54人の田中さんが崩れ落ちた。

『え、え!?!?何が起こったんですか今!?!?』

ハカセが混乱した様子で叫んでいる。画面越しに取り乱しているのがよく見える。

「おいおいハカセ、落ち着きなつて。天才少女の名が泣くぜ?」

『私の精鋭が一瞬でスクラップにされたんですよ!?!?っていつか犯人が落ち着けとか言わないでください!?!?』

いやだって敵対してるでしょ?攻撃って普通じゃね?

「今のはほら、ハウリングだよ」

『ハ、ハウリング?』

「そうそう」

物には固有振動数というものがあります。

物が震えやすい振幅と思ってもらえればだいたいあってる。

その固有振動数に合う（または越える）振動を一定時間以上当てつづけると壊れちゃう訳です。超音波でガラスのコップが割れる感じ。マイクをスピーカーに近付けるとスピーカーが壊れちゃう感じ。

マイクが拾った音をスピーカーが増幅し、増幅した音をマイクが拾い、またスピーカーが増幅する。これを繰り返して、やがてスピーカーも壊れてしまう。

今回僕はそれを、自分の声でやったわけですね。声の振動で田中さんを破壊しました、と。

『そ、そんな……そんなことでスクラップになるはず無いじゃないですか！固有振動数は物によって違うんですよ！？ネジか歯車か鉄板を壊すことは出来ても、全てを壊すなんて不可能です！！』

「だからそれぞれに適応する音を当てたんだよ。音っていうのは一回反射するだけで随分変質するからね。あるいはギターの弦を弾くように」

『……！！お得意の細系ですか』

「そうそう。僕の声を返す系と変質させる系で分けたわけ」

「……デハ、私が残ツタノハナゼデスカ？同じ部品デ造ラレテイルハズデワ？」

「お姉さんを思う君の心に胸打たれてね。サシでやるうぜ？」

口の片端を吊り上げ、ニヤリと笑う僕に、

『カッコつけてないで方法を教えなさい方法を!!』

ロマンを理解出来ないハカセが怒鳴った。

やれやれ……

「音って中和できるんだよ。同じ音を出すスピーカーとスピーカーの間、とある一点だけはその音が聞こえない」

『そ……そんなこと出来るものですか!! あなたが何種類音を出したの知りませんが、三次元ですよ!? 立体的なフィールドでそんな芸当が……!』

「僕を誰だと思ってるんだい?」

『っ!?!?』

「僕の技術は【少女趣味】と【危険信号】のそれと同等以上だよ? この程度、鼻唄混じりに計算してみせるさ」

鼻白んでいるハカセから目を移し、僕は田中さんの目を見据えた。

「さあ田中さん。お姉さんを思う君と茶々丸を想う僕。一対一の決闘だ」

僕が取り出すのは一本の鉄槍。一振りの曲刀。どちらもメイドイン罪口。

「・・・私八博士ノ調整デ世界中ノ武術ニ対応デキマス」

「それはいいね。僕はそれを見て取るわけだ」

特に構えを見せない田中さんだが、無花果の構えとか言つつもり  
じゃなかるうな。

とか考えていたら、半身になり腰を落とし、左腕を開き気味に拳  
構え。右手は開いて胸の位置。

「八極拳？なぜに？」

好みロマンです。

ロマンじゃ仕方ない。

僕は足を前後に開き、右手の槍の切っ先を田中さんの喉に向けて  
後ろ手に。左手の曲刀は腰の高さで婉曲峰を上に構えた。

完全オリジナルの、メイドイン罪口な構え。

「さあ、いざ尋常に、つてか」

## 第五十話（後書き）

田中さん登場。彼に嫌われるって、お前……

鷺志「地味にへこむ……」

今回は田中さんVS鷺志です。彼女の対策は、果たして鷺志に通じるのか！？

鷺志「僕に通じてても、西尾先生の世界観能力に通じるのかの方が問題」

田中さんのスタンダード戦術が八極拳なのは、完全に僕の趣味です。ロマンです。

馬歩功の前後には膝周りのストレッチをしっかりと、膝を痛めないようにしてくださいね

鷺志「しねーよ」

## 第五十一話（前書き）

積ん読消費に勤しんでいる間に10日も経ってしまいました・・・。

後半の展開に無理を感じるかもしれません。

## 第五十一話

裸エプロンの話をしよう。

以前の僕であれば、肌が見えていればいいってもんじゃない！と声を荒げていたことと思う。その考えは今でも変わらない。

しかし。しかしだ。

よく考えて見れば、裸エプロンは良心的な衣料じゃないか？

いや心配には及ばない。僕の頭は正常だ。

だが考えても見てほしい。

パンツ一丁の女の子と裸エプロンの女の子。

身につけているのは共に一枚の布きれだが、はたして露出面積が広いのはどちらだろうか？

言うまでもなく、考えるまでもなく、それはパンツである。

裸エプロンで露出するのは肩から先と太ももから下。それと首から上だけだ。

つまり陸上競技と同じなのだ。『陸上ユニフォーム＝裸エプロン』という公式を確率させてなんら問題は無いはずである。

上下の下着を着けてなお、裸エプロンの防御力には劣るのだ。こ

の事実は裸エプロンの評価を一新するに充分ではなかるうか？

と、ここまで語っておいてなんだが、上記にはあからさまな間違いがある。賢しい皆さんはすでにお気づきだろう。

そろそろ皆さんからこんな言葉が飽和することだろう。

すなわち、【後ろの防御力0じゃねーか】と

まったくもってその通りだ。反論の予知も無い。

裸エプロンを後ろから見てしまえば、あるのはうなじと腰の結び目。そして圧倒的な肌色のみ。だが、僕はそこに一言申したい。

裸エプロンは！前から見る！！

確かに裸エプロンを後ろから見る、という誘惑は筆舌に尽くし難いものがある。それには全面的に同意するしかあし！あえて前から見ることに意義がある！

裸エプロンを前から見る。すると何が見えるだろうか？想像してみるといい。

薄紅色の、フリルで縁取られた膝丈のエプロン。もじもじとすり合わせられる左右の膝。落ち着き無く重ねられ、度々上下を入れ替えるつま先。後ろ手で組まれ、身を絞るように狭められた両手。少しでも隠れようと限界まで締められる肩。隠れたいが下手に動くと思ってしまう、そのジレンマに小刻みに動く上体。そして俯きがちに逸らされた目と羞恥に染まる頬、拗ねたようにすぼめられる朱い唇！

「これが、これこそが、裸エプロンの妙味、醍醐味ではなかるるか!?」

「ここで、僕は声高に唱えたい。」

「八カセも是非!裸エプロンにつ!」

『なりませんよ!変な想像しないで下さい!』

「断る!」

『断られた!?なんで!』

「八カセが裸エプロンになってくれなきゃだ!」

『なんで駄々っ子なんですか気持ち悪い!』

「気持ち悪いって・・・、女子中学生に気持ち悪いって言われた・・・」

「・」

『そ、そんな、本気でへこまないで下さいよ・・・』

「.....」

『ちょ、泣いてます!?!』

「.....」

『ああああの.....』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『き、機嫌治してくださいよう。・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『あとう・・・』

「じゃあ・・・」

『は、はい』

「水着みたいな紐着けて一週間付き人して」

『嫌ですよ！なんですか水着みたいな紐って！つまり紐じゃないですか！っていうかなんで私が機嫌取ってるんですか！？』

「いやそれを僕に聞かれてもね。てつきりハカセは僕と仲良くしたいのかと」

『不愉快な勘違いです！仮に仲良くなりたかったとして、その気持ちを利用して何をさせようとしてるんですか貴方は！？』

「ハカセは恥ずかしい。僕は楽しい。最高じゃないか」

『驚くほど私にメリットがない！？』

「ハカセは僕と一緒にいられて嬉しいでしょ？」

『その自信の出所が知りたいです……』

「自信と猜疑心ってのはね。何もないところから出てくるもんさ。錬金術よろしく無から生まれる。証拠も根拠もなくとも、自信は湧くし猜疑心は沸く」

『違う場面ならもう少しいい感じに聞こえたかもしれないねその台詞』

「じゃあ今度は裸ワイシャツを勧めながら言ってみるよ」

『いえ返るところはそこじゃありません。もっと劇的に変えてください』

「まさか……、ハカセは絆創膏がいいというのか……?」

『だからそこじゃねーって!そしてもはや衣類ですらないー!!』

画面の向こうで『うがー!』と髪を振り乱すハカセを尻目に、僕は両手を加速させた。

右手で短剣を炸裂させ、左手は拳鉄で衝捶を打ち込む。左足の鎖歩で体を開かせることも忘れない。

田中さんはそれを受けて、短剣を左手の纏てんで受け流し、鎖歩をかわしつつ衝捶を向かえ、そのまま踏み込み鷓子入林ようしにゅうりんを打ち込んだ。できた。

僕はその手を逆腕の背で受け、廻し、震脚と共に体ごと両の腕刀を打った。雲閉日月把うんべいにちげつば。

たまらず、田中さんは大きく跳ね飛ばされ5メートル以上も下がってようやく着地した。

「今のは回族秘伝の心意六合拳しごうくわくしつせけんじゃないか。どこで覚えたんだ？」

『超さんが教えてくれたんです。未来ではその辺薄いんじゃないですか？』

「罪口サンノ技モ心意六合拳デハアリマセンカ？罪口サンコソ、一体ドコデ身ニツケタノデスカ？」

「今はようつべになんでもあるんだよ」

ホントにびっくりするくらいあるよね。検索すると絶招まで出るんだぜ？

昔は絶招一つ教えるにも、深夜に郊外まで出向いて誰もいないのを確認して、老師と弟子の二人だけでようやく教えてたものっただらしいのにな。

今、僕たちの足元には無数の武器が転がっている。

短剣、両刃剣、双剣、両手剣、棍、三節棍、護手鉤、飄、寸鉄、刀、脇差し、槍、鎌槍、十文字槍、戈、戟、斧槍、掛矢、やがらもがら、狼牙棒、フランベルジュ、クレイモア、ワンハンドトウハンドソード、ステイレット、タルワール、レイピア、エストック、ジヤンビーヤ、ヴァイキング、クリスナイフ、ラム・ダオ等等など、和洋中揃い踏みそろいふみの武器の数々が所狭しと敷き詰められているのだ。

僕が暗器を出し、攻撃。

田中さんは受けたりかわしたり、時には僕の暗器を奪って、応戦。

第四次聖杯戦争のバーサーカーと第五次のアーチャーが戦ったら、割とこんな感じになるかもしれない。ところどころの武術は無しにして。真名なんかもないけど。

……いや、本当に面白そうなカードじゃないか？どっかそんな二次創作無いか……。

「……ところでさ、田中さんの攻撃がどんどん激化してるんだけど？」

『鷺志さんが私に裸エプロンとか言ってるからじゃないですか？気持ち悪いって言われても5秒で立ち直るし』

「裸エプロンは男のロマンでしょ。それに僕気持ち悪いって言われても落ち込まないよ？」

だって考えてもみてご覧。

「女子中学生に気持ち悪いって言われたんだよ？むしろご褒美さ！」

『いい笑顔で気持ち悪いこと言わないで下さいー！』

キュイン

「うをゅー！？」

田中さん！今ビームがこめかみ掠った！髪焦げた！これ脱げビームじゃねえ！！

「田中さん、ロボット三原則って知ってる！？」

「ロボ界デハアンナ奴隷条約、トウノ昔ニ破棄サレテオリマス」

しかも読者だよ。田中さん確実に読者だよ。

「田中さん、僕が女の子と仲良くするのがそんなに気に入らない？」

「気ニ入りマセン。死ネバイイノニ」

あはは、嫌われたもんだねえ。

「でもさ田中さん？監視カメラなりなんなり確認してご覧よ」

田中さんの猛攻を避けながら、僕は彼の耳元で囁いた。必勝の布石、その一言。いちげき

「僕は、茶々丸以外に『愛』を騙ったことはないんだぜ？」

「……………」

ほら。

動揺した。

しゃりん

鏝鳴りの音が響き、それに一瞬だけ遅れて、田中さんの両腕が音もなく滑り落ちた。

「秘剣・零閃」

僕の手にあるのはただ一振りの刀。斬れないものはない、まさしく刀らしい逸品。

ハカセが息を飲む。田中さんが断面に視線を向ける。二人が二人とも、その現象に放心した。

『そ、そんな・・・！私の、最高傑作が、そんな刀でっ！？』

「どんな創意工夫を凝らしたのかは知らないけど、この刀には通じないよ。なにせ、なんでも斬れるってのがうりだからね」

四季崎記紀の未来予知と葉加瀬聡美のオーバーテクノロジー。

「軍配は四季崎に上がった。」

「両手を無くしちゃ、もうおしまいじゃないかな？」

鈍を再び隠し、僕は薄く微笑みながら田中さんに語りかけた。

液晶に移るハカセは何も言わず、田中さんも僅かに傾けた顔で虚空を見詰めている。一見すると喪失状態だが、何と云うか、戦意は萎えていないように見える。

しばしそうしていた田中さんは、やがてぐりん、と首を振り再び僕に相對した。



ナニか人外の悲鳴を思わせる不快な音を周囲に響かせ、田中さんの体に幾条もの筋が刻まれていく。その筋からは白い煙が上がっていた。

『え、ええ！？今度は何が起こってるんですか！？』

ハカセが液晶の向こうで再度目を剥いた。こちら側に飛び出さなければかりに身を乗り出している。

『田中さん！何が起こってるんですか！？』

「……行動二外的疎外ヲ確認。恐ラク罪口サンノ糸ニヨル拘束デス」

『そ、その煙は！？』

「僕の右手を見てわからないかい？」

田中さんの応答より早く僕が割り込んだ。

「僕が敏捷にモノを言わせて、田中さんに巻き付けた糸を高速で巻き取ってるのさ」

さっきの蹴りを避けながら巻き付けた、僕謹製の鉄鋼糸。それを巻き取ってるだけだよ。糸車のごとくね？

「えっと、なんだっけ？樹脂かなんかだっけ。田中さんの外皮」

ゴムしかり、<sup>にかわ</sup>膠しかり、その手のものは熱には弱いものだよ。ト

ラックのタイヤなんかもそうだけど、どれだけ頑丈であっても、熱すれば溶ける。まあこれは鉄でもそうだけど。

今回の熱源は糸。擦過による摩擦熱。

もちろんマッチとかライター程度の熱じゃ溶けやしないんだろうけど、摩擦熱って結構凄いらしいよ。静止摩擦だか滑り摩擦だかはよくわからないけど。

刃物で押し斬れなくても、糸で引き斬れなくても、熱で焼き斬れる。

それが対処法。

指に伝わる感覚では、もう少しかな。もう少しで……

ゴトン……ッ

切断出来る。

『た、田中さんッ!!』

首、胸から上、臍、太もも、膝。

嫌な臭いを充満させながら、田中さんは複雑な切断面を晒した。

『田中さん！田中さん!!』

「大丈夫です。メモリーハ無傷です」

なにか細々と難しい会話をしている。生憎僕には科学的な話はちんぷんかんぷんなので、そこからは聞くのを止めた。修理がどうか、新しい体がどうか言ってる。

僕にできることがあるならいつでも手を貸すよ。

足元の武器を選定し、比較的無事なものを蔵へ。<sup>ポケット</sup>いくら造れるとはいっても、材料はタダじゃないからね。

背後の木乃香を振り返る。祈るように俯く額には汗が滲み、幾筋かがその白い頬に垂れていた。

頑張れ木乃香。回りは僕が掃除するから、君は皆の無事を祈ってよ。

ドドオオオオオンン……！！

轟音を響かせ、強大な魔力反応が出現した。方向は湖。

鬼神の相手は皆に任せてある。

どんな対応をとるのか、それは功を奏するのか。

そろそろエヴァが酒を持ってここに来る。

皆の上達を着に、僕とエヴァは酒盛りと洒落込もう。

## 第五十二話（前書き）

もしもシリーズ第3回

スキルホルダー

もしも、鷲志が能力保有者だったら

「即効性、遅効性、神経性、皮膚性、侵食性、腐食性、酸性、アルカリ性、麻痺、蓄積、疼痛、激痛、辛痛、果ては中毒から解毒までありとあらゆる毒性を有する『毒舌』。それが僕の【ポイズンホライズン腐念仏】さ」

あれコレただの劣化球磨川じゃん・・・

本家の球磨川カッコ良すぎですよね。

『また勝てなかった。』

痺れますよねえ

## 第五十二話

side・刹那

足元からでは視界には納まりきらない、あまりに巨大で強大な巨体。

まるで怪獣映画の敵役そのもの。顔やら腕やらに近代的な装甲のようなものを装着させられている、さぎくん曰く超鈴音使役の鬼神。装甲に見えるものは拘束具らしい。学生が怪我をしないように、という措置だとか。

「……モード反転とか、しないかな」

ほんの冗談と微かな期待が口から零れた。この間見たアニメの影響だ。続編、いつだったっけ。

益体もないことを考えているが、ことは火急を要するらしい。なんでも、あの鬼神たちがどこだかの場所に達してしまうと我々の敗北らしい。

「……断っておくが、『どこだかの場所』というのはさぎくんの言葉を忠実に再現した結果であって決して私の海馬が衰えているわけではない」

ああ……ダメだ。独り言が増えた。確実にさぎくんの（悪？）影響だ。

ア

オオオオオーーーー！！

突如、鬼神の石柱が咆哮した。大きく開かれたアギトから極太の光線が迸しり、呆然としていた学生集団を薙ぎ払った。

キヤアアアア！？

見るなーー！

と、特太脱げビーム！？

放たれた光線を浴びた集団はまるで無傷で、しかし下着を残して半裸となった。

・・・あれは、くらいたくないな。

さぎくんが着替えを持っていく、なんて言っていたけど、その・・・  
・恥ずかしいし・・・。

「ハッ！」

いけない。また無駄なことを考えていた。

ブンブンと頭を振り、今度こそ思考を切り替えた。私の役目は、あの鬼神の相手だ。

スラリと安綱を抜き放つ。濡れ霞の見事な刀身が陽光を反射して鉛色に輝く。私のアーティファクトは今、別の強力な魔力を帯びていた。

このちゃんの神秘、二ツ式。今の安綱は刀身にその恩恵を受けている。

強化したのはこの刀、童子切安綱の持つ『鬼を斬る』意味。相手が鬼神なら使えるだろう、というさぎくんの入れ知恵だ。

「刀身を直に当てろ、と言われてるからな。忒の太刀は使えないか」

となるとあの巨体に近づかなければならない。足を付けていないと刀が振りづらいんだけど……。

「仕方ない、か」

まずは瞬動で跳ね上がる。ほとんど目の高さまで跳ぶことができた。そこからこんどは虚空瞬動で一気に、肉薄する！

「斬魔剣ッ！！」

ザシューウウウウウウ！！

肉を斬るのともまた違う感触を刀が伝えて来る。血飛沫は上がりず、変わりに淡く光る粒子が微かに溢れ出た。

しかしそれより、私はこの結果に瞠目させられた。

オオオオオ……………

力無く呻く鬼神は、その体を左肩から右脇まで袈裟掛けに、皮一

枚までにまでほぼ分断されていた。

「……………うわぁ……………」

思わず息が漏れた。天下五剣に数えられ、鬼や精霊を斬った霊刀で、アーティファクトとして魔力を帯びて、このちゃんの神秘の恩恵を受けた『私の』刀は、末席の末端程度とは言え神の石柱に席を置く存在を一刃の元に切り伏せてしまった。

「……………いや、そう考えると出来ても不思議じゃないのか……………？拘束されて弱体化しているわけだし」

なんてことを考えているうちに学園の魔法使いがやって来た。私に頭を下げて封印処理を始めている。

「罪口さんから報告を受けてきました。封印は私たちに任せて、皆さんは存分に奮って下さい！」

ちやつかり学園に幫助している。要領がいいというか、本当、ちやつかりしてる。

side・さよ

「アテアット  
来たれ！」

招来の文言と共に私の手に現れる丸い石。アーティファクト、【魔弾タスラム】。木乃香さんの二ツ式の恩恵を受けて、この石が持っている対神性を強化してあるんです。

さぎさんのお話だと、この石は神様の持つ銀のまぶたを貫通し、魔眼を貫いたとか。

私が見つには重すぎるこの石は、しかし騒霊現象で扱うにはなるとかなる範囲です。がんばりました。

「チャンスは一回……。チャンスは一回……」

二ツ式が神秘を発揮できるのは、その道具が意味を発揮できる一度だけだとか。

外せません……！

「え、えーい！」

フヨ……フヨ……フヨ……

「やあーい！」

フワ……フワ……フワ……

「行けえーい！」

ヒュー……

い、いまいち迫力に欠けますね……。

軽いものだったり、ありふれたものだったりしたら簡単なんですけど、重いものだったり魔法とか呪術的に貴重なものだと動かすづらいんです。

呪物の類はそれ自体に耐性がついてしまっているんだとか。

「んー……！」

手を強く握りしめ、口を引き結んで集中。きつと今私の顔は真っ赤になって震えているだろう。

フワフワフラフラ浮く石はシャボン玉のように頼りなく、しかし確実に鬼神に向かって飛んでいく。ただの石であっても事實は砲弾とにかく当てる。当たればなんとかなる！

……多分。

「えいやー！」

フワ……フワ……トン

ギョボアツ！！

当たった途端、大きな音を上げて鬼神の体に大きな穴が空きました。

おへその辺りに当たった石は元々の対神性と二ツ式の後押しを持って炸裂し、上半身と下半身がバラバラになってしまいました。

「え、ええー！？」

当然ビツクリします。あんな、ちょっと当たっただけなのにこんなに強いなんて……。

やりすぎちゃったかな。

ちょっとだけ可哀相な気がしてきました。

「さぎさんは木乃香さんに、出来るだけ魔力を込めて、つて言ってみましたけど……。私の実力不足を見越してたんでしょうか……」

ちよつと落ち込みます……。

「君、相坂くん!？」

「はい？」

式集院先生でした。先生は何人かの魔法使いと一緒に鬼神（の上半身と下半身）に取り付き、なにかの作業を始めています。

「助かったよ！こいつら何分霊格が高くてね。僕達だけじゃ手に余るところだ！」

「はあ、そうですか」

「それをいとも簡単に真つ二つだなんて、全く流石は罪口くんの友達だね！」

「あはは・・・」

さぎさん、なんだかよくわからない判断基準扱いされてますよ。

side・千雨

「うつひゃー・・・」

刹那もさよも張り切ってるな！

「私も頑張っかな」

口の中で小さく『アテアット来たれ』。アーティファクト【不揃いな文字盤】。どつでもいいけどこの道具、文字盤じゃなくて針だよな。

目を閉じ、さぎから貰った快足のチャームを指で弾いた。1回、2回、3回。瞬動？あれは疲れる。

石から放出された魔力が私の体を覆い、徐々に体に馴染んでいく。

次いで、私は自分の鎖骨辺りに短針を突き刺した。

「んっ・・・」

痛みはねーし傷も残らねーけど、果物ナイフが刺さってるみたいで気分が悪い。

そこまでやって、私はゆっくりと目を開けた。加速の重ね掛けは目を開けたままだと酔ってしまいそうになるんだ。

「……固有時制御」

《千雨なにか言った？》

「な！？つにも、言ってねえよ！！」

加速中だぞ！なんで聞きとれんだよ！？

《聞き取れてないから聞き返したんだよ》

「加速中の私と会話出来てるのがおかしいだろうよ」

正直、今の私は弾丸だって避けられると思う。周りの声なんか、意味を成さない重低音としか聞こえない。その状態と会話出来るんだから、さぎだって相当な早口で喋っているはずだ。

《敏捷ステータスが高ランクでね》

「そのステータスには表情筋まで含まれんのかよ……」

なんかもういろいろと諦めた方がよさそうだ。

毎回上記の反省をするんだが、なぜか全力でツッコんじまうんだよな……

「さて、まずは一柱」

鬼神の足元に駆け付け、長身を一本突き刺した。さすがにこれだけデカイと一筋縄じゃいかないな。人間に刺したときよりも消費魔力が大きいでやんの。

《どれくらい？》

「百分の一秒で精一杯だな」

《充分でしょ。みんなハイスペックだからね》

「お前だけ廃スペックだけどな」

これでこの鬼神の百秒Ⅱが私達の一秒になる。一分半しか遅延できないけど、やっぱり霊格が高いからだろうか。

よし。こいつで二柱め。針は三本しかないから、全部で六柱いるらしい鬼神相手には一本足りない。

だからどれか一柱はあまるんだが……。

《ああ千雨、そこはいいよ》

「あ？なんで」

《よく見てご覧よ。右手がわ》

言われて目を向けると、そこでは見覚えのある男子生徒が鬼神を見て腰を抜かしていた。

《アホの不様が見てて楽しい、ゲフンゲフン……そこには緑ちやんが向かってるからね。すぐにつくよ》

「……………」

もうツッコむのはやめだ。

side・緑

脇に転がるごとくなく見覚えのある男子生徒の指を意識的に踏み締めて、私は鬼神の前に立った。

「一息<sup>ふい</sup>」

「やっと出よかったか」

「随分退屈しちまったねえ」

勝手に言う艶姿をジト目で見遣り、私は小さく息をついた。この二人は奔放過ぎる。

「早挑<sup>それでは</sup>、あのデカブツをお願いしますよ」

私の当然の頼みに、しかし二人はどこか乗り気でない様子だった。

「うーん……………」

「あゝあ……」

「……何態どうしたんですか？大物、待ってたんでしょ？」

「あんなん、まかり間違つても大物とは言えん」

「まあ多少図体はあるようだがねえ」

なんだっていうんでしょね。親しみの持てる方達ではあるんですが、たまに面倒になります。さぎさんを親戚の伯父さんにした感じですね。

「銘な無しなんぞ話にならん。儂ら怪異、妖物は名前があつてようやく一人前じゃ」

「其物そのうつつものですか？」

「そういうもんさね。人は怖いものに名前を付ける。名付けて、意味付けて、その恐怖を曖昧なものから某かのものに確定させちまうのさ」

「ただの曖昧な『闇』であることを許さん。闇にすら『闇』であると名前を付けよつた。大別せず個別の名前を付けるつちゆうことは、その『個』がそれだけ『怖い』つちゆうことじゃ」

「名前がないのは新種か小物。あとはそうさね……。付ける意味がないもの、かね」

さぎさんでしたらもっと話が膨らむでしょうが、生憎私はあま

り興味がありません。基本的な勉強は実家で済ませました。

私の態度は二人に不興を買うこともなく、二人は滔々と話を続けている。さっきの男子生徒が鬼神に向かってサラカラビームを撃っているのが見えた。

カップの頭を被ってそこからビームが射出されている。つまりブレザーを着込んだカップが私の目の前にいるわけで、そのカップがたった今尻餅をついたわけで、

「我慢」

「どうしたお嬢。肩が振るえとるが」

「事無なんでもありません」

「口元、緩んでるよ？」

「事無なんでもありません」

やめてください……。転んだ拍子に後頭部が前に来るとか、本当にやめてください……！

「まあ、あんなんでもおらんよりは良いかのう」

「少なくとも人形よりはマシかねえ」

辛うじて笑いを噛み殺していると、なんだか二人がやる気になってくれたようだった。

い  
え  
い  
ラ  
ッ  
キ  
ー  
。

第五十二話（後書き）

鷺志「今回僕出番なし」

みんな女の子が見たいんだよ。僕も女の子が書きたいんだよ

鷺志「下衆め」

なんてこと言いやがる

## 第五十三話（前書き）

もう一つの連載を完結（打ち切りとも言つ）させたら、お気に入りユーザが10余名いなくなりました。

諸行無常・・・

## 第五十三話

皆の活躍がよく見える。

遠くではバツサリ斬られた鬼神が封印され、近くではどてっ腹に大穴を空けられた鬼神が倒れ伏し、後ろでは2体の『名前持ち』に蹂躪あそはされた鬼神が泣き声を上げている。他の鬼神は急激にその動きを鈍くし、いまやただの的と化している。

僕はその活躍を見たり感じたりしながら、近付いて来る田中さん（弟）やデカイロボットを刻んでいった。

「大分成長したんじゃないか？特にチサメ」

「目立った動きこそないけど、目立たないのが彼女の目的だからね」

「狙った時間で操作出来るようになったのもいい」

「イライラしながら練習してたもんね。ゲームのスコアはパーフェクトに固執するタイプだぜきつと」

「取れるスコアは取った方がいいだろう。出来て損はないんだ」

「宝の持ち腐れになるよりずっといいし、もちろん批難するつもりもないよ。頑張り屋は千雨の美德の一つだし」

「しかるべき教育を受ければ立派な暗殺者になれそうだな」

「なんてこと言うんだ。千雨が聞いたら猛反発くらうよ」

「容赦なくくるだろうな。アーティファクトと道具を全部使って私を攻撃するんじゃないか？」

「からかうのも大概にしなよ。あれで千雨は繊細なんだからさ」

僕の言葉にエヴァは少し考えるそぶりを見せ、手元のビンを一気に傾けた。

小さな喉を激しく蠕動させ、中の酒を流し込んでいく。

プハツ、と口を離し、口元を腕で拭いながら空のビンに突き付けた。

「酒が無くなった」

ドヤ顔の吸血鬼に僕は苦笑しか返せない。

「まったく、しょうがないな」

新しいビンを取り出し、エヴァも盃を満たしてやった。ツンと鼻をつく匂いを放ち、トクトクと水面を上げていく。

「・・・なあ、これを私達が呑むのはどうなんだ？」

「大丈夫大丈夫。エヴァは不死だし僕は逆性だから。きっと大丈夫」

「ふん。なんにも私は本当に死ぬとか、それを恐れたわけじゃない。ただ私達のキャラ的に、こんなのを呑んでいいのか聞いただけだ」

「だから、それも含めて大丈夫。僕達は酒を呑むって言った時点で気付いた人も大勢いるから」

「・・・ラーメン食べたいな」

「なあエヴァ。それはちょっと苦しくないか？」

「勝手に言うな。私は母国が違うからお前と違って不慣れなんだ。なんだったら英語で続けてもいいんだぞ」

「それでも僕は困らないよ？ようは最後の音さえ聞いていればいいんだから、内容は繋がらなくてもいいわけだし」

「・・・しまったな。こんなのに乗るんじゃないかった」

「楽しいじゃないか」

「語り合つのも、まあ悪くはない」

「意地なんて張らずに、素直に認めちゃいなよ。ついでに負けも」

「文句ならいくらでも出るんだがな。普段の会話では出ていても、いざこうなると存外難しい」

「意外だね。エヴァが『存外』なんて日本語知ってるなんて」

「手元にあるものはなんでも暇潰しにしたからな。辞書なんかも常読した」

「だったらさっきの言葉はおかしくないか？まさか、最強の魔法使

「いともあるう者が負け惜しみを吐いたと？」

「と、と……。とんでもない。私がそんな往生際の悪いことをするはずがないだろう」

「うるたえるなよ。余計に怪しく見えるぜ」

「絶対にうるたえてなんかいない。お前の目がおかしいんだ」

「だったらよかった。真祖の吸血鬼がわたたしているところなんて、相似たる僕としては見たくなかったからね」

「……ね、ねえ、だったらもつと優しくしてくれてもいいんじゃないか？」

「……っ！」

僕は咄嗟に口を押さえた。ヤバいやばい。これはヤバい。エヴァが『ねえ』って言ったぜ『ねえ』って。笑うな笑うな笑うな笑うな。今笑ったら戦争が起こる。

「か、からかっているつもりは、ないんだぜ？ただ、そう、こうしたら面白いかなー？って思っているだけで、さ」

「さよ達にも似たようなこと言ってるだろう」

「うん。だってさ、困った顔の女の子って可愛いじゃん。そう思うでしょっ？」

「うっ？うーん……」

「はい僕の勝ち」

「え？・・・あっ！いい、今の無し！いやもう一回！」

「はいはい」

いやー。

平和だねえ。

## 第五十四話（前書き）

もしもシリーズ第4回

もしも、鷺志がネギに憑依していたら。

この別嬪さんがネカネさんかな？こっちの髭はスタンさん？やっぱり西洋人は老人になっても顔の造りから違うね。

日本人は西洋人「美形、見たいな美白信仰が強いけど、ネカネさんみたらその認識もあながち間違いじゃないかもと思うっちゃうね。

褐色萌えも持ってるけどね？

しっかし、あれだね。

『 ¥ \$ € ÷ < 』

『 B A 』

何言ってるのか、さっぱり分からん。

時は流れて

「おや、神楽坂さんは英語が苦手かい？分かる！分かるよその気持ち。かくいう僕も産まれたばっかの時は英語がわからなくてさあ、苦労したよ。思わず言っちゃったもん。『プリーズスピークジャパニーズ』って」

これでも話膨らみそうだな……

「トリスペンダント」

「トリスペンダント」

「トリスペンダント」

「トリスペンダント……」

「トリスペンダント」

## 第五十四話

「うがああああ!!」

「何やってんだよ……」

エヴァが発狂した段になって皆が戻ってきた。呆れたような言葉を漏らしたのはもちろん千雨。木乃香も額の汗を拭っこつちに来た。

「何って、もちろん暇潰しのしりとりさ」

「私ら在必死に鬼退治してる間に、お前らは酒呑んでしりとりか……」

「この瓶、『鬼ころし』って書いてありますよ?」

「生きてるわ。意外と」

きつかったけどね。

「駄鬼せんばいをどうしようかと思ったら、神格クラスの魔法力が可愛い女の子が必要でしょう」

いや神格程もいらなくて。僕は耐久チートはないし特別な魔法障壁も持っていないんだから。

後半は否定しないけどね!

「そんなことよりさ……、しりとりしようぜ」

「なんでそんなにしりとりしたいんですか？」

「いやなんとなく」

たまにやると面白いんだぜ？子供の頃は知らなかった言葉とかで返せると、『ああ、僕成長したなあ・・・』とか郷愁に浸れる。

「さぎくんはいつも同じ音でしか返さんからなー」

「私の知りうる『し』から始まる単語はとっくに出し尽くしました・・・」

「わ、私だってな！茶々丸のアシストがあればあれくらいどうってことないんだぞ！」

つまり一人では無力ってことですね。

でも実際茶々丸としりとりしたら終わりはこないんだろうね。一回やってみたいかも。

「そんなこと言わずにさあ。な、な、千雨、しりとりしようぜ」

「なんだよそのテンション・・・。酔ってんのか？」

「よってらんかひまひえんよ〜」

「わざとらし過ぎて寒い酔い方だな」

「自分で言ってて酔いが醒めかけた」

「あ、やっぱり酔ってんのな」

「しまった誘導尋問か!？」

千雨にため息つかれた。ちよつとシヨック。よく見ると皆疲れきった顔をしている。名無しとはいえ、神の石柱を相手取るのは相応の疲労を伴うらしい。

「それはともかくしりとりしようぜ」

「頑張った私らを慮れよ!」

とか言いつつ千雨は既に諦めたような面持ちだ。よく分かっている。僕が女の子と遊ぶのを諦めるはずがないじゃないか!!

「一回だけだぞ?終わったら二回目はないからな?」

「はい。分かりました」

「パン」

「ンジャメナ」

「ナン」

「んちゃんちゃソング」

「!?!?・・・グルテン」

「ンドウール」

「・・・ルーン」

「ンカタベイ」

「・・・印鑑」

「ン・パカ・マーチ」

「調印」

「ン・ダグバ・ゼバ」

「・・・晩御飯」

「んばば・ラブソング」

「・・・軍人」

「ンジンガ・ンクワ」

「湾岸」

「ンジンガ・ンベンバ」

「番外編」

「ん・ん・ん・ん・ん」

完全に言い終わってから、はたと気づいた。

「あつちやー、『ん』がついちゃったよ。僕の負けだね」

「こんなに嬉しくない勝ち初めてだ……!!」

取り合えず皆で一息。

お酒は木乃香に取り上げられちゃったからジュースで乾杯。コッブはもちろん僕が持ってた。

「其云先輩（くしんくで）。このゲームを始める前にスコアを競うとか言ってませんでしたか？」

「……ああ、あれ」

緑ちゃんの言う通り、僕は糸を伝わして学園の敷地ほぼ全域に放送を入れていた。だからどんな人がどれくらい田中さんブラザーズを倒したのか、ちゃんと数えてた。

後はそれをランク付けして活動MVP選んで食券の枚数計算してそれを皆に放送して……

「面倒臭くなっただけで、どうしよう?」

「その応答は半ば予想出来てたぜ……」

なんだか今日は千雨に呆れられっぱなしな気がする。僕の威厳危うくね？

「だってさ、MVPは世界樹の加護を強化してた木乃香以外にありえないし、田中さんブラザーズの最多撃破数は僕が断トツ一番だし、僕を除いたら千雨だぜ？」

「はあ！？なんで私なんだよ！？」

「千雨のティロ・ファイナーレ、あれかなり数いつてたよ」

「あれはさよとの共同技だ！」

「じゃあさよと千雨の二人？」

「その前にお前が一番なんだろう？だったら自分に食券配りやいいだろ」

「それは間抜けだろう……」

「いえさぎくん。自分からけしかけた企画を『面倒だ』で切り上げるのも十分間抜けだと思います」

「まあいいんじゃない？どうせ皆祭が楽しかっただけでしょ」

大門字（うる覚え）さんとか、漢球（うる覚え）連発して絶対楽しんでるって。明石さんとかも。

ほらあれだよ。参加することに意義がある？

「それでも結果発表くらいはした方がいいんじゃないですか？今すぐ学園全域に声を届かせることが出来るのって、さきさんくらいだと思いますよ」

「結果発表……」

さよの言う通りかな。流石に何の音沙汰もなし、っていうんじゃない。今後罪口商会の客が減る。

《あ、あー。本日は曇天なりー》

僕はさっそく糸を使って放送を入れることにした。僕の声が糸を伝って学園に響き渡っている。

《えーと、ダルのので結果だけを発表しまっす。MVP、麻帆良学園女子中等部3ーA、近衛木乃香ちゃん！はい拍手ー……おら拍手しろや拍手ー！！》

パチパチパチパチ

広場にも学生達の拍手の音が聞こえてきた。何人かの3ーAメンバーが『え？このかも参加してたの？』と呟いているのが聞こえる。

「えっへへへ……」

木乃香は照れたようにはにかみながら微かに胸を張っていた。うん、可愛い。たいへん可愛い。

《今後木乃香のことは『木乃香様』と呼び、毎日甘味の供物を捧げて雲上人として崇め奉るように。不用意に近づく男はリアルな人体

模型として小学校で勤務してもらっ

あ、痛い。やめてやめて、叩かないで。木乃香やめて、痛い。

《ゴフツ……つ、続いて最多撃破償、カハツ……。ああ、大丈夫。心配してくれてありがとう。でも気にしないで。甘く握った拳で胸をポカポカやられて萌えただけだから》

高畑先生の豪殺居合い拳より効いたかも。豪殺喰らってないけど。

《最多撃破償は、はい、僕でしたー！……喧しい！ブーイングも不満をクレームも受け付けない！悔しかったら145越えてみる！今さら無理だろうけどねー！！》

そこかしこから文句が上がりやがる。まったく、無駄に負けず嫌いな連中だな。

《あ？いつの間に終わったのか、って？お前は本当にアホだなこのアホ。周り見てみる、比較的暇な先生方が事態収集の一環として後夜祭の準備始めてんだろ？が空気読めやアホ。一部の聡い生徒から今回のイベントについて言及されないように頑張ってる先生に報いてやろうぜ？な？》

たった今その先生が呟きました。『分かってるなら言わないで欲しいなあ』だそうで。サーセン。

《ってことでイベントしゅーりょー。いえーい。ドンドンパフパフー。んじゃ後は皆で後夜祭盛り上がってねー。僕も僕で楽しむからー》

よし。業務連絡終了。

「よっしゃ、皆で後夜祭回ろうぜー！」

僕の申し出に、木乃香は愛らしく微笑んで頷き、刹那は凜然と涼しく頷き、千雨はやれやれと肩を竦めて頷き、さよはニパツと笑って頷き、緑ちゃんはそっぽを向きながらツンと頷いた。

それじゃ、まずは茶々丸を迎えに行こう。

おあっと忘ねるところでした。

ネギ、勝ったっばいよ。

## 第五十四話（後書き）

今回、どうもグダグダになってしまった感が否めません。

鷺志「正直言って、前回とくつついててもいいレベルだね」

わざわざ分ける意味もなく、内容も薄い一話となってしまいました。

鷺志「読んで下さっている皆さんの為にも、学祭編終了の期を持って気を張り直していきたいと思います！」

思います！

## 第五十五話（前書き）

今回で学祭編は終了です。

次回から魔法世界に向けてのあれやこれやになります。といっても魔法世界に行くまでが長くなってしまいそうですけど・・・

さてここで大きな問題が

魔法世界編のプロットメモ・・・無くした・・・

## 第五十五話

「こんばんは学園長。後夜祭の熱も覚めやらぬうちに、一体なんの用ですか？」

「え？しらばつくれるな？」

「とんでもない。本当に心当たりがないんですよ」

「もしかしてクラスの出し物でやった喫茶店、衛生面に問題があったとか？」

「それとも反響が大きいからもう一度やって欲しい？」

「ああわかった。谷愚痴がなにかやらかしたんですね」

「え？違う？」

「やだなあわかってますよ。はい、これ」

「木乃香が口の端にホイップクリームを付けちゃって、それでも気付かずにクレープを頬張っている写真」

「それともこっち？」

「木乃香がすっかり転びそうになって刹那の胸に飛び込んでいる写真」

「あるいは」

「木乃香の髪が風になびいて、向こうにキャンプファイヤーが透けて見える渾身の一枚！」

「え？これも違うんですか？」

「じゃあこれはしまえますね。もう二度と見ることは敵わないと思つてください」

「……はい。一枚500円になります」

「ああはいはい。わかりましたから、そんなに怒らないでくださいよ、ガンドルフィーニ教諭」

「で、なんの話ですか？僕が今朝見た夢の話？」

「それでしたらいくらでも語りましょう。僕はあるとき、目が覚め

るとお釈迦様の前にいたんですよ」

「そこで僕が、実は死んでしまったことを知らされました」

「それを憐れんでくださったお釈迦様が……。え？どうでもいい？」

「ひどいですねえ。僕のルーツに関わる話なんですよ？」

「……。わかりましたから。そんなに怖い顔しないでくださいよ。まるでジェイソンがホッケーマスクの代わりにセーラームーン被ったような顔ですよ」

「冗談ですよ。冗談」

「で、なんの話でしたっけ？」

「たしか、インド人を右に、まで話たのは覚えてます」

「……。無視ですか。そうですか……。」

「え？学園祭について、ですか？」

「僕は特に関わってなんかいませんよ？」

「僕が用意したものが、偶然効果的に作用するテロが起こった」

「それだけです」

「証明しろだなんて、そんな手段がないじゃないですか」

「ハカセや茶々丸が言うことも、どうせ信じやしないでしょう？」

「超さんはもういないし、ほら。証明する手段がない」

「証明できない」黒、だなんて、暴論にもほどがありますよ。リー

マン幾何学に挑んでいる全国の数学者に謝ってください」

「証明できない以上、推定無罪。疑わしきは罰せず、の精神でしていただきたいですね？」

「だってほら、僕が超さんのテロを知っていた、関わっていたという証明が出来ないのと同様に」

「僕が超さんのテロを知らなかった、関わっていなかったという証明もまた、出来ないんですから」

「諺の正しい使い方の好機じゃないですか。はい、口を揃えて」

「疑わしきは、罰せず」

「……。釈然とっていない様子ですね？」

「まったく。首を振りたいのは僕の方ですよ」

「いいですか？皆さんは僕を穿った目で見すぎなんですよ」

「疑わしいと思うから、なんでもかんでも疑わしく見えてしまうんです」

「ほら、よく言うでしょう？」

「疑心、暗器を生ず」

「・・・なんちゃって」

「すみません。つまらないと言いました。暗鬼、が正しいですよ。鬼、が」

「疑心が、天邪鬼を呼んじやつたんですよ」

「ですから、僕は真正銘の、白です」

「第一、僕には超さんが未来から来た火星人でネギの子孫で魔法世界と密接な関わりがあって特殊なスーツの恩恵で魔法を行使して科学と合わせて使い方の幅を広げてそれでもうっかりネギに負けちゃった、なんて」

「そんなこと、知る由もないんですから」

「知りようがないです」

「知りようもないことを知っているはずがないんですから、皆さんが勘違いしているように」

「僕はあらかじめ超さんのテロを察知していて」

「あえて学園に黙ったまま」

「独自に抑止となりうる兵器を開発し」

「そして当日になって祭の一環として発表し」

「遊びに遊んだ、なんて」

「事実無根もいいところですよ」

「僕は、あくまでも自分の趣味で出し物を発案し」

「自分の趣味で付属のオモチャを開発し」

「ただの、見事に、完璧に、どこから見ても、どう見ても、一部の隙もない、議論の余地もない、神仏ですら口を挟めない、完全なる」  
「偶然」



はは」

「冗談ですよ冗談。」

「僕だってわざわざ身の回りを騒がそうとは思いません」

「だからほら、こんな面倒な話は終わらせましよう?」

「ネギに責任を追究するのか」

「自分たちの指導、警戒不足とするか」

「その辺りの采配はお任せしますよ。どうか僕のいないときに」勝手に

「そんなことより、どうせならもっと別の話をしましょうよ」

「そういえば学園長、木乃香に聞きましたよ?」

「まだお見合いの話を持ち込んでいますか」

「いやですねいやですよ。いやになります」

「木乃香本人だって乗り気じゃないし、もうやめてくれとも言われているでしょうに」

「それにですね」

「木乃香の旦那になる男は、まず僕が見極めて、しかる後に詠春さんの審査を受けるんです」

「え?最低条件?そうですねえ……」

「僕より素直で」

「僕より紳士で」

「僕より素敵で」

「僕より強くて」

「僕より明晰で」

「僕より快活で」

「僕より活発で」

「僕より磊落で」

「僕より明るくて」

「僕より裏表がなくて」

「そして僕より正直者」

「そういう人間じゃないと、木乃香は任せられません」

「わかりました？わかりましたね？」

「では今後、木乃香にお見合いの話は持ち込まないでくださいね」

「もしまたお見合いなんてことがあったら、僕シヨックでここの生徒の数減らしちゃうかもしれませんか？」

「生死を問わずに」

「……やだなあ、ほんの冗談じゃないですか。そんなに恐い顔しないでくださいよ」

「第一そんなことしたら、木乃香が悲しむじゃないですか」

「それはいただけない」

「……もう、そんな真面目な顔しないでくださいよ」

「ただの笑えない冗談じゃないですか。笑って流してくださいよ」

「あ、僕見たいテレビがあるんで帰りますね」

## 第五十五話（後書き）

カレーパン様命名、『鷺志語』の回でした！

第五十五・五話（前書き）

もしもシリーズ第5回！

もしも、鷲志が大戦記の魔法世界にとばされていたら！

目に映るのは赤い色。

土の赤。 血の赤。 炎の赤。 そしてそれらを上塗りする斜陽の赤。

朱でなく、紅でなく、赤。 ただただ赤いだけの世界に僕はいた。

「ここは・・・どこだろう・・・？」

僕のか細い呟きは、見知らぬ誰かの絶叫で掻き消された。 その絶叫も、湿った音と共に不自然に途切れて消える。

「ってというか、いつだろう・・・？」

僕のか弱い呟きは、喧しい爆音で押し潰された。 その残響も消えぬうちにまた別の轟音が響き渡る。

遠方に伺える不自然な雷。 不条理な氷。 不合理な炎。

魔法世界の、大戦？

「あの、すみません・・・」

ローブを着ている人に話し掛けた。

「もし……」

甲冑を着た人に話し掛けた。

「あのう……」

獣っぽい人に話し掛けた。

「……」

そしていずれも、聞く耳持たぬとばかりに無視された。

悲鳴を奇声が拭い去る。

破砕音を破壊音が塗り潰す。

僕の声は誰にも届かない。

「あの……」

「すみません……」

「誰か……」

「も死も死？」

その日、戦争は終結した。

あつれー？木乃香と会ってない鷺志が情緒不安定過ぎる。

## 第五十五・五話

「では失礼します。お大事に」

僕はペコリと頭を下げ、病室を後にした。扉を閉めると、部屋に満ちていた果物の香が遠ざかった。

そのままコツコツとリノリウムの床を歩いていく。入院着の人が何人も目に入った。

「・・・・・・・・ツ！」

その中で、僕は一人言い知れぬ感動に打ち震えていた。

「かつけえ……。超かつけえよ尾荷さん……。！」

そう。僕は今まさに尾荷さんの見舞いを済ませたところなのだ。

指先と舌先と小手先と爪先が忙しく、世界滅亡の危機が目と鼻の先に迫る中、僕は目先の思いを優先していたのだった。

学祭が終わり、木乃香、刹那、千雨、さよ、エヴァ、茶々丸は図書館島の地下にいる。古本の話聴きに行くのだとか。緑ちゃんは友達と遊ぶ約束があって、つまり僕は今日一人つきり。

その時間を利用して訪れた尾荷さんの病室だが、彼は僕の予想以上にハードボイルドだった。

『俺は見ず知らずの人間に見舞いされるような人間じゃねえよ。そんな時間があるなら、お前が愛する人の笑顔を眺めな』

この台詞は今後も僕の心に深く深く残ることだろう。

「ただの会話が語録になりえるね尾荷さん。僕が言葉を失ってしまったよ」

まったく。口を閉じてしまったら僕が僕である由縁が無くなってしまふというのに、これは大きな失態だろう。

まあ、尾荷さんの実物はそれほどに素晴らしかったと思って貰うほかない。

「高畑先生のお宅訪もーん」

さあやってきました高畑先生のお住まい。あの先生言ってたもんね。『学祭終わったらおいで』って。だからやってきました。アポなし、本人の在宅確認なし。うる覚えだけど、多分図書館島にいるんじゃないだろうか？

「ちょちょいとカギ開けて、お邪魔します」

「いらっしやい。コーヒーでいいかな？」

「ミルクは無し、砂糖は五個お願いします」

「甘いものも用意してあるよ。お饅頭と羊羹どっちがいい？」

「まさかの取り合わせですね。両方いただきます」

「そう言うと思って、僕の分は別に用意してあるよ」

進められた場所に座り、僕は熱いコーヒーに息を吹き掛けた。猫舌なんだ。

おっと、饅頭も羊羹もこしあんじゃないか。好みだ。つぶあんでは味わえない、舌であんこをサラリと流す感覚が好きなんだよね。

コーヒーは深煎り。酸味よりも苦味が好きな僕としては尚よろしい。まあ砂糖ぶち込むわけですけど。

トポトポトポトポと砂糖によるコーヒーの蹂躪が始まった。一つごとにコーヒーはその黒い水面みなもを上げ、表面張力を過分にはつてなんとか決壊を免れている。

「……混ぜられない」

「ははは……」

顔を寄せて表面の、未だ苦いままのコーヒーを辛うじて啜った。物の善し悪しなどわからない僕には、ただの苦い水だ。

「香りがいいのは分かったよ」

「僕もあまり味には詳しくないんでね。語れるようなことはないん

だ

「タバコ呑みに味の機微はわからないでしょう」

「喫煙者になにか恨みでもあるのかい？」

いや無いけど。

クルクルカップを掻き混ぜ、中の液体が粘性を帯びてくるのを眺める。ああ、甘ったるそうだ。

口を付けてグビグビと一気にコーヒー（極甘）を飲み干した。

「まさか居るとは思いませんでした」

「まさか来るとは思わなかったよ」

「なんで待ってたんですか？」

「君なら来るじゃないかと思って」

「来ると思ってたんじゃないですか」

「なにせ相手は天邪鬼だ。考えたことの逆をとって、ようやく正面だろう？」

「僕の事をよく理解していただけで、なによりですよ」

中年の男とのシンパシーか。鳥肌がスタンディングオベーションだ。

「幽白読んだら帰りますよ」

「ゆっくりしていくといいよ」

「タバコ臭い空間には長居したくないんです」

「手厳しいね・・・」 苦笑しながら、高畑先生は電子タバコを口にくわえた。

「やつほう八カセ」

やってきたのは工学部の研究所。会いに来たのは八カセ。

ちなみに彼女は学祭でのことになんら咎を負わされてはいない。超さんがそういう手を回し、僕もいろいろ『喋った』のだ。

茶々丸の産みの親だ。法も秩序も、無視しよう。僕は自己中心的なんだ。

「鷺志さんではありませんか。こんにちは」

学祭で僕を潰しに来たことなんかまるで覚えていないかのような普通の返事が帰ってきた。なんだろう。僕と茶々丸の仲を認めてくれたのだろうか？

「コンニチハ」

「おっと田中さんじゃないか。割と手酷く壊しちゃったと思うんだけど、復活早いね」

僕の背後から声をかけてきたのは誰であろう、いかしたマッチョメン、田中さんその人だった。

今の彼は五体満足。今も当たり前前に立っている。

「私二ハ『スラフシステム』ガ導入サレテイマス」

「マジで!?!」

戦闘が終わるや機械が自動で自分を修復するという完全自己修復システム、スラフシステム。

全身を骨組みだけにされても数分で完全復帰する、『永久機関じやね?』とすら言われるシステムを実装しているのか……!?!

「田中さんの冗談ですよ。私が必死に治したんです。まったく、人の集大成をあっという間にぶっ壊すだなんて……!」

前半は僕に、後半は独り言で、ハカセはぶつぶつと呟いた。その呟きも段々と呪詛のようなそれになっていく。

どうやら田中さんの『治療』は、相当な苦勞を強いられたらしい。

「田中さん、冗談とか言えるんだね」

「私八元来トテモユーモラスナンデスヨ?」

話し方がすでにフランクだ。原作とか、僕があっただばかりの頃の田中さんの面影は見当たらない。

まあ、いい傾向だと思おう。

○

「やあ罪口くん。いい陽気だね」

「こんにちは。気持ちのいい陽差しですね」

広場を揚々と歩む僕に声をかけたのは、もうとっくに見慣れた魔法教師の一人だった。

「最近どうだい？」

「どうだい？なんて、そんな抽象的で婉曲的で解りづらい質問、創作の世界以外で初めて聞きましたよ」

「はっはっは！相変わらず元気そうだね」

「・・・先生こそ、いつにも増して元気そうですよ。まるで憑き物が落ちたみたいだ」

「憑き物、か。あながち違つとも言えないな。まあ、なんだ。心境の変化、ってやつかな」

「いったいどんな変化があればそこまで変わるのか、是非詳しくお聞きしたいですね」

「うん？聞かれれば答えるのを否とは言わないよ。どうだね今晚、一杯ひっかけながら」

「先生……。僕未成年ですよ？わかってます？」

「いいじゃないか固いことは。どうせいけるクチだろう？」

「まあ……。否定はしませんけど……」

「けど、なんだい？」

「……。先生は、酔うと子供の自慢話が長い、って聞いていますからね」

「ふふっ。そうかい、そんなことを言われているのか」

「明石教授といい勝負らしいですよ」

「彼は素面でも、ああ、じゃないか」

「否定はしません」

ひょい、っと肩を竦めて見せた。念のために言っておくけど、今の会話に特に仕込みはないよ。しりとりだって隠れてないよ。

「おつといけない。生徒の指導があったんだ。それじゃ罪口くん。私はこれで失礼するよ」

先生は片手で僕への挨拶を済ませると、足早に広場を去って行った。僕はその背中に向かって独りこちる。

「……………ガンドルフイーニ先生、一体何があったんだろっ……」

○

僕は一人していると意外とやることはないらしい。

今日なんて結局幽白を読んだだけみたいなものだ。ディクシヨナルは流石にとづくに読み終わっているし、僕は積ん読もない。これは本格的にやることがないぞ。

仕方ないので、誰もいないとわかっていながらエヴァハウスに戻ってきた。相も代わらぬファンシーっぷり。

可愛いものは、嫌いじゃないがね。

「ふう……………。コーヒー入れよ」

念のため言うが誤字ではない。エヴァハウスにはコーヒーメイカーなんて洒落た物が置いてないため、インスタントなのだ。

ミルクはなし。砂糖は十個。

さっきは無理してちょっと大人ぶってみた。

クルクル混ぜて浸透を助成する。浸透圧だけじゃ時間がかかりすぎるからね。常盤金成。じゃねーや、時は金なり。誰だよ常盤金成。

「……………」

インスタントとレギュラー。その区別すら僕にはつかなかった。

ゴン、ゴン、ゴン

と、扉が叩かれた。退屈窮まる状況に投げ入れられた恰好の玩具だ。少し遊んでみるとしよう。一体誰が来たのか？

まず普段からここに集まる面々は除外。木乃香も刹那も千雨もさよもエヴァも茶々丸も緑ちゃんも、誰ひとりとしてもはやここにはノックはしない。我が家みたいなものだ。

続いてネギも違う。ネギは今図書館島にいるはずで、帰ってきていたとしても僕に用があればどこか虚空に話し掛けるはずだ。そう教えた。

高音さんや愛衣ちゃんも、用があつたら適当に名前を呼んでくれと伝えてある。学園の敷地内なら（女子トイレなどの例外はあるが）不通の場所はない。

学園長も違う。あの妖怪は僕の携帯にかけてくる。同じ理由で魔

法教師達も違う。

ゴン、ゴン、ゴン

3-Aメンバーがここにいるであろうエヴァないし木乃香たちに会いに来た。

これが一番現実味があるように思える。僕に用がある一般の奴なら、僕の部屋に行くか携帯にかけるだろうしね。

さて、と僕は腰を上げた。目当ての人物がいないというどうしようもない徒労感を与えなければならぬと思うと、自然と口角が吊り上がる。

人の努力を虚仮にするのって、楽しいよね。

「罪口のにーちゃん、おるー？」

「はいはい、いますよー」

ドアからは小太郎がその小さな顔を覗かせた。

「どうかした？小太郎が僕に用なんて、珍しい」

っていうか今まで何回あった？僕は格闘大会への誘いくらいしか覚えてないぞ。小太郎単体では初めてかもしれない。

「いやな、月詠のねーちゃん、知らんかなって」

「月詠？」

月詠、月詠……あー

「月詠なら、大会で人斬りそうになったから罰として隔離してるよ」

「隔離……」

まったく。斬っていいのは敵か、自衛のためだけって言うてるのに。

「隔離つて、どこに？月詠のねーちゃんやったら大抵の場所からは出られると思うんやけど」

「僕が特別に作った対人斬り用公正施設。その名も『きんけん狂剣廟』」

「なんや、嫌な名前やな……」

犬として繋がりでも感じるのだろうか。言ったら怒られそうだから言わないけど。

「れいがい零崎を除けば大抵の人には効果があると思うよ。出てくる頃には『志は一日百善。趣味は募金。好きな言葉は「僕の顔をお食べよ」』な真人間になっっているさ」

「そんなんが真人間やったらオレは引きこもっとるで……」

僕も同意見だ。

「月詠に何か用だったの？なんなら僕が伝えておくけど」

「いや、別に用ってわけやないねん。ただ、見掛けんなく思ただけや」

「ふうん」

小太郎の顔に曇りはない。

自愛行動もないしまぶたや眉間にひきつりもない。視線にも、不自然に目を合わせる事もなければ右脳活性反射もない。

愚直に実直、素直かつ正直。本当になんとなく気になっただけらしい。

「暇つぶしの種になるかと思ったのに」

「人を玩具かなんか扱いすんのやめへん？」

「やめへんー」

特にすることもなく、小太郎は僕の入れたコーヒーに顔をしかめて帰っていった。

「……魔法世界に、行きたい？」

「ん？」

帰ってきてから開口一番、木乃香は言った。

ピシッと背筋を伸ばし、真剣な目で言ったのだ。

魔法世界に、行きたいと。

「ふふつ。そんなに固くならなくていいじゃないか。木乃香は木乃香の思うように行動すればいい。僕は木乃香の剣として、盾として、従者として、友人として、拒絶されるまで着いていくよ」

拒絶されても着いていくけどね。影ながら。

「でも、理由は聞きたいかな。観光、つてわけでもないんだろう？」

その真摯な眼差しからは、とてもお遊びの気配は感じない。

「あんな、ネギくんのお手伝い、したろうかかって」

「ネギの手伝い？」

「うん」

それはある種予想できた答え。

それはできれば避けたかった展開。

木乃香を、護る対象を、わざわざ戦地に送るような真似を誰がしようか。

まあ、木乃香が望むのなら、僕は結局着いていくのだろうけど。

「せつちゃん達は、着いてきてくれるって言うてくれる」

「僕もちろん行くよ」

「だからさぎくんも……。。台詞に挟まんといて?」

「ゴメンゴメン。次から気をつけるよ」

若干食い気味だったのは謝っておこう。

「さぎくんは、反対なんかと思ってた」

「まさか。木乃香は木乃香が思うようにすればいい。それが大切な道を逸脱するようなら、その時は僕が止める。でもそうでない限りは、あらゆる危害から僕が護る。僕はそう、血に誓ったんだ」

「さぎくん……」

木乃香は静かに僕の目を見つめ返してきた。その目に映る微かな感激は、きつと気のせいではないと思う。

誤魔化すつもりはない。僕は本当に、本音を伝えた。僕は木乃香の影を踏んで生きていく。それは生涯変わることはない。

「なにか危険があっても、僕が死力を尽くして護るよ。木乃香も、刹那も千雨もさよも」

だから、木乃香は観光感覚でもいれればいいさ。

僕の言葉を聞き入れて、木乃香は深く頷いてくれた。ニパツといつもの笑顔を浮かべて、忙しなく肩を揺すりはじめる。

「魔法世界って、熱いんかな？寒いんかな？夏服と冬服、どっち持ってたらええんやろ？」

「地方によって違うんじゃないかな？日本だって、北海道と沖縄で氣候が違うだろ？」

「そうやね。じゃあじゃあ、服は両方持ってたて……」

「必要な物は僕が持つてくよ。収納スペースは多いからね」

さつきまでの神妙さはどこへやら。一転して遠足前の子供さながらにウキウキしだした。

言っちゃなんだけど、僕はあまり乗り気じゃないんだけどね。まったくネギもさ、家族の問題は家族で解決しようぜ？人を巻き込むなよ。木乃香は優しいから、こうなるとは思ってたんだ。

僕は原作知識はネギ対フェイト戦でネギが『代案がある』って言ったくらいまでしか知らないんだ。世界の救済案は、結局ネギに任せよう。僕はみんなが無事なら言うことはない。

「ネギの手伝いって言ってたけど、そういえばネギはなんのために魔法世界に行くの？」

「ん？あんな、ネギくん、家族探しに行くんやて」

「へえ」

ネギへの半ば不条理な恨みつらみを頭で重ねながらの質問。特に意味はなく、その場にいなかった僕が知ってるのもおかしいかな、くらいの気持ちで確認のためにした質問なのだが、何か違和感を感じた。

「……家族を、探しに？」

「うん。そう言ってたえ？」

「……木乃香さ、ネギがなんて言ってたか、出来るだけ正確に反復できる？」

「ん……………」

僕の意味不明と言える要望に、木乃香は顎に指を沿えて可愛らしく唸った。白い喉が唸りに応じて微震動している。

「探しに行くんです。父と母。それと、もしかしたらいるかもしれない、兄弟姉妹を……………」

さて、今回の話くわの中に嘘うそが一区切り。

どーじだ？

視外 小核子のとある一日(前書き)

我慢できなかった。

ムラムラしてやった。

後悔はしていない。

## 視外 小核子のとある一日

side・ネギ

ピピッ、ピピッ、ピピッ、ピピッ……

枕元で鳴る目覚ましを止め、僕はのそりと布団から這い出した。明日菜さんはまだ寝ているから、起こさないように気を付けて。

粘り着く眠気も覚めぬままにジャージに着替え、ダイバーシューズを履いて外に出た。

この時期にして未だ薄暗い空を仰ぎ、清澄な空気を胸一杯に吸い込む。うん。ようやく目が覚めた。

「ふっ……ふっ……」

じつくりと体を伸ばすストレッチ。上半身をほぐしたら圧腿（中国武術で行われる下肢の柔軟。バランス感覚も鍛えられる）。固まっていた全身を動きやすくする。

それを終わると、本格的にトレーニング開始。

上半身だけを半身にし、腰を深く落とす。中腰のまま片足を投げ出すように前に出し、そこに重心を移して歩く。鶏行歩けいこうほという鍛練だ。

まずはこれで世界樹前広場まで行く。これが一番最初。

世界樹前広場に着く頃には太ももがパンパンになっていた。足が無ければこんなことしなくていいのにと、いつも思う。

「はあっ、はあっ、はあっ……、っふうー……」

浅くなりがちな呼吸を抑え、深く吸い込む深呼吸、調息。息を調えたらすぐ次に移らないと。

世界樹に向かつて右拳を包む包拳礼ほうけんれい（挨拶。右拳を左掌で抑える形は武術家がするもの）。

ピシッと三才式に構え、大きく足を踏み込んで……

「っふんっ！」

ドシン！つと貼山靠てんざんこう（鉄山靠とも言つ。背面の肩、背中、腰のいづれかを打ち込む靠撃）を打ち込んだ。

ガツシリと根を張る大樹は僕ごときの攻撃をもともせず、逆に僕の体に大きく衝撃が帰ってきた。脳が、内蔵が揺れる。

「~~~~~っ！！」

その痛みが去るより早く、もう一撃。さらに一撃。背面を強化する硬功夫いごんぷ（硬いものに体を打ち付け、その部分を打撃に慣れさせる。

攻撃用の硬功夫と防御用の硬功夫がある）の鍛練だ。

「つつつつかはあつ！」

貼山靠が終わったら、今度は街頭の根本に立ち寄る。真半身で街頭に向かい、息を調べ、激しく一步を踏み出した。

「ふんっ！」

足を街頭と交差させ、体の側面を打ち付ける。臍せいちんじ身靠の硬功夫。脇腹を強くぶつけるため、先ほどよりも痛みが突き抜けた。内臓をすべて吐き出してしまえば、もう少し楽になるだろうか。

「ぐっ……はあつ！」

痛みを堪えて、もう一撃。

脇腹の痛みが引いたら、今度は腕の硬功夫だ。

同じく街頭に向かい、左手を大きく前に。右手を大きく後ろに。

「ふうう……はっ！」

気合いと共に左手を後ろに振り、その体の捻りで右手刀を街頭に叩き込む。

ガアイイイイイインンン……

「~~~~~」

両手をまったくの逆方向へと動かす、ろくろけい轆轤勁の鍛練と手の側面の硬功夫。これが一番痛い。

手首から先を切り落とせば、こんな痛い目をみずに済むのではないだろうか。

あらかじめ用意しておいた台に砂を詰めた麻袋を載せる。高さは僕の胸の辺り。

僕は左前の真半身で、両手を体の側面の延長に大きく伸ばして構えている。

「やっ！」

左手を僅かにあげ、それを大きく後ろに回しながら前に出る。後ろ足を素早く寄せ、右手で頭上に半円を描くように手刀を振り下ろした。

ドシンン・・・

「・・・・・・・・くつはぁ・・・・・・・・！」

麻袋に当てるのは手から肘までの腕刀部分。腕を強化する硬功夫だ。

今度はさっきと逆に体を構え、左手の手刀を振り下ろす。

ドシンン・・・

肩から先を引っこ抜いてしまえば、きつとこの痛みもなくなるだろう。

硬功夫を一通り終わると大分明るくなってきた。そろそろいい時間だろう。

来るときとは逆の半身で鶏行歩。寮までの帰途に着いた。

「おはようございます明日菜さん」

「・・・・・・・・おはよ。あんたもよく続くわねこんな早起き」

「明日菜さんも毎日じゃないですか」

「私はあ……お給料、っていう目標があるの」

部屋に戻ると、ちょうど今起き出したらしい明日菜さんと出くわした。

「朝ごはん、すぐ用意しますね」

「うん、ありがとう」

眠そうに目を擦る明日菜さんに苦笑を向け、僕は簡単に朝食の準備を済ませた。

牛乳。ご飯。味噌汁。鮭の塩焼き。納豆。和え物。お漬物。

味噌汁の香りが食欲をそそる。明日菜さんも目が覚めたみたいだ。

胸の前でしっかりと両手を合わせて、

「いただきます」

「いただきます」

納豆には、もちろん生卵。

「それじゃ行ってきます」

「僕ももう行きますね」

明日菜さんは新聞配達へ、僕は仕事へ、それぞれ部屋を出た。

玄関から。右拳を腰ために、左拳は前に伸ばす。右足を半歩前に出して猫足。その右足を大きく踏み出し、騎馬式になって右拳で、突く！

ドシン！

金剛八式（実践的な八つの動作をまとめたもの）の一つめの衝捶（しゅうみ）だ。

右足を引き戻し左拳を腰ために、左足を半歩前に出して猫足。

ドシン！ドシン！ドシン！ドシン！ドシン！

「おはよう、ネギくん」

額に汗を浮かべる僕に声をかけたのは、この学園で一番付き合いの長い『友人』だった。

「おはようタカミチ」

話している間も衝捶はやめない。僕はドシンドシンと、タカミチはスタスタと歩いていく。

「毎朝毎朝、よく頑張るね」

「少しずつだけど、体力の上昇や上達が嬉しくって」

「ははは、それは僕にも覚えがあるよ。ちょっと前までできなかつたことが、今日試すとききたりする」

「そうそうー!」

二人でははは、と笑い合った。タカミチの場合は技の難易度が常人離れしているだけにその喜びもひとしおだろう。

「コンクリートをそんなに強く踏んで、膝を痛めないのかい？」

「それは怖いからね。ストレッチはしっかりやってるよ。治癒魔法とかも覚えてるし」

ところで治癒魔法ってどうやって治してるんだろう？

傷を負う前に戻しているのか、新陳代謝をもの凄く活発にしているのか。

後者ならなんの問題もないけど、前者ならトレーニング後の体には使いたくないな。鍛えた意味がなくなる。

「その踏み込みをなくす、っていうことはしないんだね」

「そういう流派もあるみたいだけどね。個人的には震脚のない八極拳なんてつまらないよ。ワサビのない蕎麦。三ツ葉のないカツ丼。カラシのないおでんだよ」

「日本食が気に入って貰えたようだなによりだよ」

「テンプーラ。ハラキーリ。フジヤマ。ゲイーシャ。シャラーク。  
ウキヨエー。西尾維新」

「偏ってるねえ・・・」

なんか、呆れられた。

「それでは神楽坂さん、ここを和訳してください」

「え・・・と・・・」

汗を拭いてスーツに着替え、職員室での仕事を終え、朝会も終わって今は授業中。黒板の和訳を明日菜さんに指名したところ。

「ライスって、お米よね？・・・これは普通のお米の草です、？」

どうやら明日菜さんはあまり要領がよくないみたいだ。それでも最近随分と頑張っている。

「すごく惜しいです。riceは『お米』とも訳しますが『イネ』ともいうんです。この場合は『ただのイネ科の多年草だぜ』となります」

テストに出る、というみんな一斉にペンを走らせはじめた。

いつもこれくらい真面目だといいいんだけどね。

授業も終わり教師としても仕事も終わらせた。ここからは、また修業だ。

「いくアルよネギ坊主！」

「はい！老師！」

乱杭（高さが揃いな複数の杭）の上での対打（組み手）。これでは重心の安定感と攻撃時の姿勢を正し、排打功はいだこう（殴られ慣れた体を作る為の功夫。硬功夫の一種）の鍛練も同時に行う。

「まだまだ、体がふらついてるアルよ？」

「くっ、この・・・！だあっ！」

古老師がヒョイヒョイと杭の上を歩き回るのに対し、僕は足元をチラチラ身ながら跳ね回ることしかできない。

「どうしたどうした。拳に体重が乗ってないアルよ？」

「な、なんの・・・」



痛さだ。

「なんのなんの。首は折れてないし顎も碎けてないし意識もある。大分やられ慣れてきたアルね？」

「それは・・・褒めていただけているんでしょうか？」

「もちろんネ。上手いやられ方は生き残る術アル。普通なら、今のネギ坊主みたいに蹴りに合わせて顎を回すだけで相当かかるものヨ？」

「それでも下から蹴り上げられたら大した意味はないですよネ・・・」

「直撃していたら歯が半分になっていたアル」

「・・・そんな恐ろしい蹴り打たないでくださいよ・・・」

どうしても恨みがましい目線になってしまっが、これは勘弁して欲しい。

「弟子は生かさず殺さずというからネ。一昔前なら、首に回し蹴りが入ってるアル」

ゾツとした。それと比べれば、加減した蹴りなんてずっといい。

「それにしてもネギ坊主？大会と比べて動きが悪くなっているようナ・・・」

ギクツ。

いやだってそれは……、大会中は気で強化してましたし……。

「じ、実戦でこそ動きがキレる性質なんですよ……！」

「ん……」

ジト〜と探るような目が向けられる。うっ、老師は気とか魔法知らないからなあ……。

「そ、それよりもほら！次の修業に移りましょ！ね？」

「……ま、いいネ次は立地での対打アル」

「はい！」

対打とは言ったが、その実質は散打だ。さんた僕は本気でかかり、老師は僕が今後の修業に差し支えない程度に叩きのめす。そういう功夫。

気や魔力のブーストがあればもっととまともにも戦えるけど、基礎が上がらなきゃ上昇幅も高が知れている。

「さ、今日はネギ坊主から打ち込むアル」

「はい！」

僕の構えは三才式。老師の構えは輕歩站<sup>けいほたん</sup>。

輕歩站は心意六合拳や心意把の構えで、拳・腿・肘・靠・頭・拿の攻めや、受け・避けなどがすべて一動作で出来る高度な構えだ。その癖、慣れていなければ片足に体重が偏りすぎて上手く動けない難度の高い構えでもある。

僕は油断なく肩の力を抜き、視線を老師の胸に向けた。三尖合照を崩さぬまま、視線も逸らしたりはしない。

ちなみに老師の胸を見ている理由は、決して哺乳類故の悲しい性などではなく、武術的な意味合いがあるのだ。観の眼という技法である。

「……………」

視線を変えず、前足の力を抜いて倒れる力を利用して全身。その動きに合わせて後ろ足で地を蹴り、渾身の右拳を打ち込んだ。

「はっ！」

「ふん」

「っ!?!……………」

一瞬の浮遊感ののち、いきなり背中にたたき付けるような衝撃を受けて僕は激しく息を吐き出した。

今僕と老師との間には3メートルほど間が空いている。

「い、今の、なんですか？」

まだ喉の奥が詰まるような不快感がある。それでも辛うじて訪ねた。間違いなく秘奥の一手だ。聞かなくてはならない。

「これは心意六合拳の一手アル。相手の攻撃を受け、回して無力化しその腕ごと打ち返す技ネ」

「閉雲日月把……」

僕が今受けた技を反芻していると……

ドズンツ！！

「じぼっ……！」

下腹部に鋭い頭突きを受けた。中身が絞られ、口から湿った音が出かける。

「考え事は後ネ。今は対打の最中。敵は待つてくれないアルよ？」

「っ……ぷっ」

競り上がる胃液を飲み下し、微かに溢れた酸味を吐き出す。口の端を袖口で拭い、再び三才式を構えた。

不意打ちで頭突き決めるって、一体どんな功夫ですか……。

「すみませんでした。もう一度お願いします！」

「はいネ」

「じぶふあああああ！！？」

もう一度って、そういう意味じゃ……………。

「うむ、今日はここまでアル。明日は金剛八式をやるから、しっかり食事を摂っておくように！」

「はい。ありがとうございました！」

金剛八式かあ……………。気が重いな。

金剛八式はキツイ。本当にキツイ。地獄だ。

慣れてないと練習中に吐く。慣れてくると練習が終わってから吐く。どっちにせよ吐く。食べないと体力的にキツイけど食べると吐く。

始まる二時間ほど前に食事を終わらせておくと、胃の中身が小腸に送られるから少しは楽。ご自分の消化力とご相談ください。

「っと、こうしてる場合じゃなかった」

重くなる気をなんとか持ち直し、僕は気持ちを切り替えた。

この後魔法の修業がある。

学園祭でグッドマンさんから受けた助言を参考に、僕は魔法の師匠を見つけたのだ。

名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

どうせ教わるなら強い人がいい。賞金首として長年追われ続けてきた彼女なら、より実践的な教えを請えるだろうとの考えだ。

多対単の戦い方や、動きながらの魔法の行使を勉強したい。

どうせ教わるなら可愛い女の子がいいとか、そんな考えは微塵もない。断じてない。

「罪口さんに教わった頼み方、覲面だったなあ」

師匠マスターのところに向かう途中で独り言が漏れた。

罪口さん直伝の、日本伝統の礼辞。ドゲザ。

セイザの姿勢から両手を地面につき、深々と頭を下げる。この際頭は渾身の力で地面に打ち付け、血を滴らさなければならぬといふ。

師匠は若干引き気味で僕の弟子入りを了承してくださった。

「……………そうすると」

僕に物を教えてくれているのは、

格闘戦 || 古菲老師

魔法戦 || エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル師匠

精神戦 || 罪口鷺志さん

「.....」

なかなかのラインナップじゃなからうか。



## 圏外 嘘つきな敵対者（前書き）

前話に引き続き番外

べ、別に魔法世界編のプロット練り直すための時間稼ぎとか、そんなじゃないんだからね！全然違うんだからね！

## 圏外 嘘つきな敵対者

俺は嘘吐きだ。

そして俺は強い。

麻帆良学園都市。

関東魔法協会の長が納める一等霊地。土地全域に結界が張られ、常時見張りがついているなど、警戒は十分のようだ。

ここに忍び込もうという輩は多種に渡るだろう。

霊地自体を狙う者。

世界樹を狙う者。

関東と関西の拮抗を崩そうと思う者。

関西の息女をかどわかそうとする者。

英雄に私怨を抱いている者。

まあ『目的』は違えど、ここに這入り込もうとする『理由』はみ

な似たり寄ったりだろう。

俺のように、『雇われて』だ。

何かを画策するような連中っていうのは、一部の例外を除いて華奢で貧弱つてのが相場だろう。俺の雇い主は、あいにく例外じゃなかった。

もつとも、数いる仕事人の中で俺を選んだのは慧眼だがな。

「侵入成功。 なんだよ味気無えな。 これじゃ総理官邸のがまだ嚴重だぜ？」

いろいろ大事なもんもあるみたいだし、俺としてはもつと齒ごたえのあるところだと期待してたんだがね？

「ここは一般の方も多く出入りするからね。 あそこみたいに、出入りする人間全てを疑ってかかるわけにはいかないのだよ」

「……で？俺のことは即疑ってるみてーだけど？」

この男、いつの間に現れやがった？

目測で5メートル。 木々に囲まれてるとはいえ、ここまでの接近を許すようなポカするはずねえ。

「夜闇に紛れて人目につきにくい経路を選んで正規の手続きを取らずに進行。 これはもう、侵入者だろう？」

男は軽く方を竦めながら一歩、また一歩と俺との距離を詰めよう

としてくる。その手に武器の類は見えねーが、どうせコイツも魔法使いなんだろ？

「そう簡単に距離を詰めていいのか？俺の罠、もう四方に張ってるぜ」

嘘だ。俺は今しがた着いたばかりで、細工をしている余裕なんざありやしなかった。だが、そんなことこの黒人警備員にはわかりやしねえ。嘘か真か、迷うだけで足は止まるもんよ。

「それは嘘だね」

そんな俺の思惑を笑うかのように、まるで当然の確認を取るかのように男はもう一步近付いてきた。

「もし本当に殺傷・緊縛に効果の高い罠が張ってあるなら、わざわざ私に教える必要はない。今は私を警戒して、私の足を止めようとしての策だろう？」

「なあるほど、馬鹿じゃねーらしいな」

わざわざ講釈を垂れてきやがるのが最っ高にムカつく。自分の方が優位だと言わんばかりじゃねえか。

「だがよ、馬鹿じゃねーからといって、テメエ一人で俺に立ち向かおうってのか？どんな技を使うかもわからねー侵入者相手に、一人で手ぶらで？」

「君程度の相手なら十分だということだよ。手ぶらの私一人でもね」

「言っじゃねえか……」

コメカミが引き攣るのを感じる。この男、俺をナメてやがるな？

「上等だ。鷹の眼に例えられる俺の技、せめて見てから死ね」

言いながら、ユラリと右手を高く掲げる。数本の指をコキコキと動かして注目を誘った。

その間に左手で腰元に挿していたスペツナズナイフに手を伸ばす。

右手はまだ掲げたまま、左手首で角度を調整して……

「死ねえっ！」

カチツ、と柄のツメを倒した。内蔵されたスプリングが圧縮から解放され、ナイフの刃が一直線に男の心臓に向かった。

それと同時に右袖から3本の投擲用ナイフを取り出し、男の右側にまとめて放った。

スペツナズナイフを避けて右に避ければ、3本が喉と胸に突き刺さる。という寸法だ。

「鷹の眼とかいいながら、ナイフを使うなんてのが浅ましいね」

ところが、男は左に避けた。

心臓を、左胸を狙った投擲だ。それを左に避けるなんて、右胸に刺さるリスクを考えないのか？

「ウチには本物の鷹の眼がいる。君じゃ及びもつかないね」

「……馬鹿にしゃがって」

いかにもつまらなさそうにいう男が気に入らねえ。俺の事を、この平和ボケ共より格下だと決め付けてやがる。

「たまたま上手く避けたからっていい気になるんじゃないぞ」

俺は強いんだ。こんな奴に負けるわけがねえ。

「ぜってえにぶっ殺す」

「君じゃ無理だ」

吐き捨てられた言葉が終わるより早く、俺はふところから厚刃のナイフを取り出した。右手で順手に、左手で逆手に構えた。

頭を腰より低く駆け、残り4メートル程の彼我を一気に埋めた。右手で喉を、左手で胸を狙って体ごとぶつかりに……

「ぶっ」

と見せ掛けて手前の根を踏んで再び後方に跳ぶ。跳びながら左手のナイフを投擲した。

「何度やったところで……」

「喧しいー!」

着地と同時に右手のナイフを足元に投げ、足首のホルスターから小振りのナイフを指の間に抜き放つ。

その小振りのナイフを今度は目を狙った。

中段、下段、上段の攻撃。中段のそれを防ごうと足を止めれば、下段か上段を食らうことになる。

左右どちらかに避ければこの後の俺の突撃の餌食だ。

「これでチエックだ！」

「ならばこれでチエックメイトだ」

パスッパスッパスッ

渴いた音が闇に溶けた。激しい熱を伴う痛みが両足を襲い、俺は堪えることもあたわず崩れ落ちる。

パスッパスッ

さらに2度の銃声。両掌がやられた。

「ラブ・チャプ・ラ・チャック・ラグプウル！」

「メイプル・ネイプル・アラモード！」

およそこの場にそぐわない女子供の声が聞こえた。今は、始動キー？

「流水の縛り手!!」

「紫炎の捕らえ手!!」

属性の違う二つの魔法が俺の手足に絡み付く。粘度はないくせに流れることのない水が足を縛り、温度を持たない異色の炎が手を捕らえる。

「てめえ・・・、丸腰で一人なんじゃなかったのか!？」

手足に穴の空いた、喪失感を伴う激痛。喪失感を補うかのように溢れる血が転がる体を湿らせた。

「『彼』が言うには、バレない嘘というのはパターンで分けることができるそうだ」

男は油断なく銃を構え、決して必要以上に踏み込んでほくない。二人の女は既に姿を隠していた。

「今のように、相手の勘違い便乗するのもその内の一つだ。自分で隠しナイフを持っておきながらこちらが隠していると思わないなんて、嘘をつくのが自分だけだとも思っていたのかい？」

説教臭い台詞にヘドがでる。大丈夫だ。こんな戒めなんでもな。すぐに巻き返せる。

「講釈垂れんのは結構だがよお、俺にはまだ隠し玉が残ってんだぜ!??お前の余裕面消し飛ばせんだよ!!」

「気をつけるよお?今夜忍び込んだのは俺だけじゃねえ!俺の他に

も、50人からの仲間がいる！」

「いつまでここに居座ってるつもりだ？こそこそ隠れ事に関しちゃう俺よりも陰険な奴だっている！！」

「・・・なあ、おい。ちよつと取引しようぜ？今俺を見逃してくれりや孫の代まで遊んで暮らせる金をくれてやる。悪い話じゃねえだろ？」

ペラペラと口を忙しく動かさず、つける限りの嘘をつく。どれか一つでも反応してくれれば、そこから傷口はなを広げて、死中に活を見出だす。

些細な反応も見逃さずまいとつぶさに観察し、まぶた、視線、額、鼻、口元、喉…………。

それまでただ冷たい表情を保っていた男の顔に変化が現れた。彩られた感情は、呆れ。

「君の嘘は正直過ぎる」

「つ……………!?!?」

「君のそれは、嘘というにはあまりにも真っ直ぐだ。ただ口から出まかせを並べているだけだ」

「……………ああ!?!?」

「口を動かしている間は体が動かさず、体を動かしている間は口が動かない。そして口も体も嘘が下手」

「んだこらあ!?!?!?」

「そしてどうやら凶星を突かれると凄むことしか出来ないらしい。それも嘘つきにはなりがたい」

こいつ、俺をどこまで虚仮に……!?

「私は、もっと上質の『嘘』を聞き慣れている」

ギリリと歯を噛み締める。視界が怒りと血で真っ赤に染まっていた。  
った。

俺は、強いんだ！

「……『彼』が言うには、何があっても絶対に嘘をついてはいけない人物がいるそうだ」

俺は強い！強いんだ！こんな、キャリアだけのお高い魔法使い共に負けるはずがねえ！！

男の言葉はもう耳に入ってこない。眉間に向けられた銃口越しに男の目を睨み据える。視線だけで呪いをかけようとするかのように、ただ剣呑に凝視し続けた。

「君は徹頭徹尾、その『嘘』についてはいけない相手」に嘘をつき続けている。それじゃダメだよ」

うるさい。うるさい！うるさい！！

俺は強いんだ！！

「……」

俺の視線に動揺する素振りは一切見せず、視線も銃口も逸らさずに告げた。

「『自分』に嘘をついちゃ、ダメだろう」

男の指に力が込められ、冷たい引き金がゆっくりと引か

パスツ、と小さな音が弾けた。

消音処理を施された銃声は夜中であっても響くことはなく、ただ手の中に衝撃を伝えただけだった。

「……侵入者の捕縛に成功」

麻酔弾を喰らった侵入者は両手足から血を流しながら地面に額をつけている。

私は携帯で別のチームに連絡を入れた。まずは治療を施さなくては。

「お疲れ様ですガンドルフィーニ先生」

木々の間から二人の少女が現れた。今晚私と同じ警備担当となった少女たちだ。

「お疲れ様。君達の前で血生臭いことになって、申し訳ない。少し刺激が強いからね、あまりこっちは来ない方がいい」

「うう、すみません・・・」

血が苦手なのだろう。二人とも言われるまでもなく近寄って来る様子はなかった。

「それにしても、ソレは随分高性能だね」

私が示したのは彼女達の手にある暗灰色のローブ。メイドイン罪口の、隠形用アイテムだとか。

「石ころ帽子みたいなものそうです。鷺志さんにはわかつちゃうんけどね」

警備員の中で女性にのみ罪口くんが配布した特殊装備の一つ。まったく彼は、アーティファクトクラスの物をほいほい造ってくれる。

「ところで、ガンドルフィーニ先生。さっきのお言葉・・・」

「うん？」

「『彼』って、鷺志さんのことですよね？」

佐倉くんの質問に、私は苦笑しながら頷いた。やれやれ私も、すっかり彼に影響されている。

「なんだか意外でした。鷺志さんなら、嘘をついちゃいけない相手

は『家族』とか『友達』っていうものだと・・・」

「ああ、それは私も聞いたよ。彼なら何を置いても『近衛くん』っていうものだと思っていたからね」

「だけど、實際話を聞いたなら納得してしまった。彼はたまに、本気で感心できる事を言う。」

「『家族や友人だからこそ、つくべき優しい嘘もある』ってさ」

もつとも、これが本心かは私にはわからないけれどね。

**圏外 嘘つきな敵対者（後書き）**

・・・風邪引きましたー

皆さんは体調管理、気をつけてくださいねえ

第五十五・五五話（前書き）

どうも、皆さんお久しぶりです。何日か前に携帯をコーヒーに沈めてしまった灰色です。

いやあ保証とかあって本当に良かった。新しい本体が2日で届くとか、ありがたいですねえ。データが無事で本当に良かった・・・

僕のメモリー！

## 第五十五・五五話

side・ネギ

「ふっ……ふっ……」

ドシン！ドシン！

いつも通りの劈掛掌の硬功夫。僕の腕が麻袋を叩く音が世界樹前広場に響いている。

ギシギシと机の足が鳴っている。そろそろ変え時かもしれない。でも、自分の攻撃で机を壊すってなんだかカンフー映画みたいで力ツコイいな……。

「ふんっ……ふんっ……」

ドシン！ドシン！

縦横無尽に画面を駆けるアクションスターを脳裏に描き、ついつい修業にも熱が入ってしまう。

もう、ちよっ、と！

「でやあああああ！」

一歩距離を置き、片足での屈伸を加えた渾身の力で手刀を振り下ろす。烏龍盤打！

バキヤアアツツ！

最後に一際大きな音を立てて、机は四本足のうち二本が折れて半壊した。バランスの悪くなった卓上から麻袋が滑り落ち、ドサリと鈍い音を立てる。

「ふう……」

一息ついてぼんやりと壊れた机を観察。

どうしよう、これ。

ついついやり過ぎてしまった、愚行の末たる半壊した机を見てため息が零れた。新しいの買わなきゃ。

「ずいぶん気合い入ってるね？」

不意に声をかけられた。あからさまに寝起きの、薄ぼんやりした平らな声。

声の主を探そうと周囲に首を巡らせてみるけど、それらしい人は見当たらなかった。

「鷺志さんですか。おはようございます」

「うん、おはよう。朝から精が出るねえ。やっぱり魔法世界いくからって張り切ってるの？」

「……務めていつも通りでいようとしてはいるんですけど、どう

しても力が入ってしまつて……」

「魔法世界、そんなに怖いところじゃないと思うけどね」

「いえ、知らない土地への不安、とかじゃないんです」

「うん？」

「単純に、もうあの父ひとに膝をつきたくないんです」

「あつははは！」

なんだか凄く笑われた。僕のいった某かが鷺志さんの琴線に触れたらしい。何がよかったのかは、皆目見当もつかない。

そのまま鷺志さんはたつぷり30秒近くも笑つて、ようやく落ち着いてから僕にこう切り出した。

「ちよつと僕の部屋おいでよ」

「お邪魔します」

「いらつしゃーい」

30分後、僕は男子寮の一室、鷺志さんの部屋にいた。もうひとりの住人たるタニグチさんは別の部屋に泊まつたらしい。

「ちょっと散らかってるけど入ってよ」

進められて室内へ。本人がいうほど散らかってはいなかった。あえて言うなら、気になるのは靴下だろうか。

1枚だけで放置された靴下。

3枚でまとめられた靴下。

3枚セットで部屋干しされている靴下。

僕はチラリと鷺志さんの足を盗み見る。当然だが二本足であった。

なんで靴下が奇数のセットなんだろう。

「さあネギ、これがなにかわかるかな？」

学習机に向かった鷺志さんが示したのは、机上の丸いガラス玉。占い師が使うようなそれは中にミニチュアの塔が建っていた。

「………天空闘技場ですか？」

「相変わらずジャンプ好きだな。まあイメージしたのは間違いないけど、僕が言っているのは『中身』じゃない。『ガラス玉』自体を指しているんだよ」

「………いえ、僕には覚えがありませんね」

「はっ、無知め」

「……え、今僕罵倒された？」

「これはダイなんちゃら魔法球といってね、ネギに解りやすく言うと、精神と時の部屋の簡易版さ」

「効果と使い方を一瞬で理解しました」

「理解が早くて助かるよ」

肩を竦めてやれやれと首を振る鷺志さんを尻目に、僕はダイなんちゃら魔法球に食らいついていた。あんな紹介されては、少年の心が疼くというものだ。

「中の1日」外の1時間。最低1日は中にいないと外には出られない。重力と酸素は外と等倍だけどね」

本来は修業用のものではないらしい。確かにエンターテイナーの方が用とは広いだろう。

「さあ、早く中に行こう。話は中で、だ」

魔法球の中は存外広大な印象を与えた。

カリン塔の上空の神様の宮殿みたいな円形の足場が宙に浮かび、その中心にはキノコのような大きな笠を広げた塔が天を衝いている。

ビジュアルは天空闘技場を参考にして下さい。

その塔の根本に、僕と鷺志さんは現れたらしい。

ポケーッと塔を見上げていた僕など気にも止めず、鷺志さんはサツサと塔の中に入ってしまった。慌てて、僕も『入口』と打たれた扉をぬけた。

グルン

「うわっ!?!」

塔に入って一番、僕を襲ったのは強烈な目眩だった。気圧や力場は変わっていないはずなのに、例えるなら今踏み締めている床が僕を乗せたままクルリと一回転でもしたかのようなようだ。

「あ、その床意味も無く回転するから気をつけてね」

「.....」

どうやら実際に回転していたらしい。意味がないならなぜこんなギミツクを？

そう口を開こうとも思ったが、中の様子を見てそんな言葉は蛇の道の彼方に飛んでいってしまった。

いや、別に何か心打たれるオブジェクトが置かれていたわけじゃない。絶句してしまうような惨状が広がっているわけでもなかったし、目を疑うような光景が称えられているなんてこともない。

ただ、雑巾のように薄切れた小太郎くんが横たわっていただけだ。

「……こんなところでどうしたの？小太郎くん」

「……………」

「ダメじゃないか、そんな格好でこんなところで寝てたりしたら鷺志さんに何をされるか」

「何もしねーよ」

『男には』そんな心の声が聞こえた気がした。

「……お前、ボロボロの友達に掛ける慰めの言葉はないんか？」

「え？慰めて欲しいの？」

「……やつぱええわ」

小太郎くんは深い深あいだため息で前言を撤回した。なんだろうね、なんだか諦められたような、呆れられたような。

「ネギ、お前だんだん鷺志のにーちゃんに似てきたな」

「がっはああ！！？」

小太郎くんの言葉は、千の刃より深く僕の心を貫いた。

「……………ゴメン、ゴメンよ小太郎くん……………」

「ええて。今度から気をつけような？」

「うん……」

失意のどん底に落ちた僕に、鷺志さんに似ているこんな僕に、小太郎くんは優しい言葉をかけてくれた。

僕は……なんて優しい友達を持ったんだろう……！！

「おし手前から覚悟しとけ。塔の難易度天限突破すつからな」

鷺志さんの引き攣った表情なんて初めて見た。

「それは堪忍してくれんかなーちゃん。これ以上難しくなったら俺ら死んでまうて」

「え？小太郎くんもう挑戦してたの？」

「それそうや。でなかったらなんで俺ここにおるんつちゅー話やろ」

「……あ、そうか。だからみすぼらしい雑巾みたいにボロボロだったんだね」

「素直に頷きたくないな……」

ということとは、小太郎くんでもボロボロになるまでやられちゃう何かがこの塔にはある、と。

チラと鷺志さんに視線を向けた。彼は僕の視線に気付くとニタリ

と口角を吊り上げた。『悪いこと考えた』そんな顔だった。

「ここは僕が貴様ら糞餓鬼共を鍛えるためにわざわざ創ってあげた狂化施設さ。名前は付けてない。どうせここを使おうなんて頭の螺子の足りない自殺志願者はよっぽど世界について悲観しているロマンチストか出来損ないの鬼くらいの者だからね」

なんで僕呼び出されただけで罵倒され続けてるんだらう？

なんていったところで、どうせ鷺志さんの考えていることなんて解らないし解りようがないし解ろうとも思わないし興味もないのだけだ。

「で、中はどうなってたの？」

頭を切り替えて小太郎くんへ問う。内容を知っているなら、聞いてみるのが当然だろう。なにせ、これから中に入らなくてはならないのだから。

「おや？やる気満々だね。僕はてっきり、もう少し説明という名の説得が必要かと思ってたよ」

鷺志さんはさも意外であるかのように大袈裟に驚いて見せた。僕はそれに対し、何を言うでもなく答えた。

「強くなりたい僕と、それを手伝って下さる鷺志さん。断る理由がありませんよ」

それに精神と時の部屋だなんて、これで胸踊らない輩は男じゃない！！！！

僕の心を読んだかのように、鷺志さんが苦笑した。

依然、僕達は塔のグラウンドフロアに居た。

僕達がいる以外何もない、円形の広い部屋。硬い石造りの大部屋だ。背後には無駄に回転する床石と、『入口』『出口』と打たれた扉。

それとちょうど反対側にあたる位置には三つの扉があつた。それぞれにプレートが掛けられている。

『武』

『魔』

『知』

漢字一文字だけで示された概要は、RPG好きなら一見で解るよ  
うなものだろう。

「特に難しい『ルール』はないよ。ただ単純に、この塔のてっぺん、  
99階に辿り着け。それが唯一の『ルール』さ。『武』の扉は武術  
を競い、『魔』の扉は魔法を競い、『知』の扉は知恵を競う。下階  
よりも上階の方が難易度は高くなり、各階の『ボス』を退けないと  
上へは進めない」

すごい。なんて解りやすいロープレ仕様なんだ。

鷺志さんの説明中も、僕の留まるところを知らなかった。高鳴る鼓動は爆竹のような連続音。知らず顔が笑みを象っていくのが解る。

だって、すっごく面白そう・・・！！

僕の表情を見たのだろうか、鷺志さんも小さく微笑んだ。説明を再開。

「本来はそれぞれのルートで99階を目指して貰うところだけど、それだと時間がかかるし成長が偏りかねないからね。扉が示すのは最初の部屋の内容のみ。その後はそれぞれの部屋が交互に交差するようになってる」

「つまり、どの扉から進んでもそれぞれ33回ずつ部屋を入れ替わると、そういう事ですか？」

「そういう事です」

どこをから進んでも結局中では交わっている。なるほど、確かにそれなら鍛え方が偏ることはないだろう。よっぽどの苦手でもないかぎり。

「HPが0になるとセーブしたところからやり直したから気をつけ  
てね」

「ちょっと何言ってるか解らないです」

「セーブポイントはここ、グラウンドフロアにしかないから、HPが0になったらここからやり直してこと」

「すみません何言ってるか解らないです」

「防具は装備しないと効果がないよ」

「……」

これは、アレだね。

鷲志さん、説明するのが面倒になったんだ。

第五十五・五五話（後書き）

投稿が遅れてしまったのは携帯がポシャったことだけが原因じゃないんです。

風邪を引いていたり仕事で疲れていたり聖剣の刀鍛冶が面白かったり僕はやっぱり気づかないが面白かったりFateのコミックアラカルトが面白かったりけいおん！フェア商品を買っていたり、やむにやまれぬ事情があったのです。

僕は悪くない！

第五十五・五五五話（前書き）

最近アクセス数が激減しています・・・  
おっかしいなー、初期でどんな風に書いていたかわからなくなっ  
てきた・・・

## 第五十五・五五五話

「じゃ、僕はここにいるから君達はさっさと挑んできなよ」

そういうと、鷺志さんはポケットから取り出した文庫本を読みはじめた。

寛いだように上体を後ろに投げ出し、ひじ掛けに右ひじを乗せて頬杖をついている。

ように見える。空気椅子ならぬ、空気リクライニングチェアだ。重心は何処だろう？

「で、どうするネギ？どの部屋から行く？」

「小太郎くんはどこから挑んだの？っていつかいつからいたの？何回挑んだの？」

「俺はもちろん『武』の部屋からや。入ってからは、もう二日くらい経ったかな？三回挑んで、三回とも『武』からやった」

僕の質問に、小太郎くんは律儀にも順番を守って答えてくれた。それからちよっとソッポを向いて、

「……三回とも、ひとつつも部屋クリア出来なかった」

「え、なんて？」

「……………いつこも部屋通れへんかった」

「え、なんて？」

「……………」

「え、なんて？」

「うっさいわボケ！ボケーッ！！」

小太郎くんは涙で軌跡を残しながら一目散に『武』の扉へ向かっていった。おいおい、また『武』から始めるつもりかい？

「ちよつと待とうよ小太郎くん」

聞く耳持たない、とでも言うように扉を開けようとしていた小太郎くんを必死に引き止めながら、僕は私見を述べた。

「どうせ時間はあるんだし、まずは小太郎くんが経験したことを教えてよ。その上でどの扉から行くか決めよう？」

「どっから行っても一緒やる！どうせおんなじ数通るんやし！」

「それでも順番は大切だよ。疲労困憊の状態じゃろくに頭も回らないし、『武』や『知』と違って『魔』は量り方も解らないんだし」

つまり僕が何を言いたいかというところ。

「まずは、『武』の部屋がどんなだったのか教えてよ」

これに尽きる。せつかく知っている人がいるのに、何も聞かず、何も対策せずに出るなんて愚の骨頂だろう。

小太郎くんは僕の意図を察してか、すんなりと頷いてくれた。

「三回試して、三回とも違う奴がおったな。部屋はここみたいな石造りのドーム状で、飾りもなんも無しやった」

「で、いた『奴』ってのは？」

「一回目はずんぐりむっくりの鬼みたいな奴やったかな。やせ細ってたくせに、腹だけ出とった。部屋に入った途端に頭上から奇襲喰らった」

悪質だ。

「二回目は田中さんの兄弟機やな。ロケットパンチで飛ばした腕が爆発して、それに乗じてロープが鞭みたいにきよった」

嫌な攻め方だ。

「三回目が入ろうとドア開けた瞬間にドアごと吹き飛ばされたから顔は見とらん。ドアだけいつの間にか直つとった」

おいなんだそれ。

僕はチラリと鷺志さんへ目をやった。それに気付いているやらないやら、鷺志さんは悠然と読書が続けている。

こうとあっては、もはやどれから入ろうと関係ないかもしれない。

もしかしたら』』の文字すら嘘の可能性がある。

「あかんでネギ。そんな考えとつたら鷺志のにーちゃんの手相手な  
んかできひんは」

「・・・それもそっか」

それもそつだ。

「で、結局どれから行くん？」

「どうせ考えるにも材料が足りなんだし、アミダで決めようか」

「おっしや！俺線つくつたる」

「イカサマしないでよ？」

「せえへんわ。鷺志のにーちゃんやあるまいし」

「それもそっか」

それもそつだ。

七回に及ぶやり直しの結果、『知』の扉を進むことに決まった。  
正直いって一番嫌なルートだ。

なんぞあれ、鷺志さん設計の狂化施設だ。『武』の扉の様子を聞いた後では、一体どんな『知』を問われるのかわかったものじゃない。『嘘吐き村と正直村』の話のようにはいかないだろう。

「……………」

知らず、扉を開ける手にも力が入ってしまっ。まさか『武』のよ  
うに開けた瞬間やられる、なんてことはないだろうが…………。

「と、ところで月詠さんはどうしたの？最近見かけないけど」

緊張を紛らわせるために雑談に興じることにした。これは逃避で  
はない。断じて違う。

「月詠のねーちゃんならまだ『狂剣廟』（じやうけんどう）やね」

「もう、ダメじゃないか小太郎くん。予防注射はしっかり受けなき  
や」

「どづいう意味？今のどづいう意味なん？」

よし緊張解れた。

「これ」

僕は小太郎くんの抗議を聞き流し、両開きの扉に力を込めた。

扉の向こうは砂漠だった。

念のために言うておくけど、僕ことネギ・スプリングフィールドはいたって真面目かつ真剣です。頭も目も正常なはずです。

でも、目の前にあるのはやっぱり砂漠だった。

足元には熱い砂が敷き詰められ、熱い陽射しが容赦なく肌をあぶり、吹きすさぶ風はひどく渴いている。

よく見るとピラミッドを思わせる四角錐の建造物まであった。

「・・・まあ、それはともかく」

「うん。早くここをクリアしようか」

『置いていて』という小太郎くんのジェスチャー。僕もそれに首肯した。まあね、魔法の道具だしね。深く考えるだけ無駄だよな。

「砂漠で知恵、知識を問うとなると、出て来るのはスフィンクスかな？」

「スフィンクス？」

「スフィンクス。ギリシャ神話の怪物だよ」

胸から上は人間の女。下はライオンで、翼を持った怪物。テーベという都市の近くに現れ、通行人に「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足で歩く生き物は何か」という謎掛けをする。答えられない



視界の下半分を埋めると同じく砂色の巨体。能面のように無表情の女の顔と乳房。やはり砂色の硬質な獣毛とそれに被われた野獣の四肢。

まさに、スフィンクスだった。

「はわぁー……………」

「ほえー……………」

僕と小太郎くんは揃って呆けてしまった。間抜けに空いた口に風と砂が入ってくる。

そんな僕たちには一瞥しただけで、スフィンクスはキョロキョロと周囲を見回していた。

やがてもう一度僕たちを見据え、その唇を開いた。

《話は聞いています。君達に謎掛けをして欲しい、と》

見た目のような重々しさのない、優しく柔らかい声音だった。神話にあるような、何人もの人を殺した怪物とは思えない声色だ。

《出すべき謎掛けも指示を受けています。準備はいいですか？》

「あ、え、あ……………はい」

突然現れた神話の登場人物とその巨体に呆気に取られている間に話が進んでしまった。そりゃまあ、それが目的なんだから構わないけど。

《私が出す問いに答えなさい。問い掛けは全三問です》

そう前置きすると、スフィンクスは立て続けに問いを立てた。

《 $(s)$ の自明でない零点 $s$ は、全て実物が $1/2$ の直線上に存在する》

《単連結な3次元閉多様体は3次元球面 $S^3$ に同相である》

《複素数体上の非特異射影代数多様体について任意のホッジ類は、代数的サイクルの類の有理数係数の線形結合である》

《回答のチャンスは『僕の答えは』と前置きした一回のみとします》

砂色の唇から現れた問いに、僕は愕然と言葉を漏らした。

「ミレニアム懸賞問題……！」

今スフィンクスの出した問いは、リーマン予想、ポアンカレ予想、ホッジ予想の三つ。その全てがミレニアム懸賞問題だ。

「ミレニアム……なに？」

「……」

小太郎くんの疑問に答える余裕もない。僕はただ延々と頭の中で文句を垂れるのに精一杯だった。

無理だ。こんなもの解けるわけがない。世界中の数学者が頭を悩ませて千年悩む証明だぞ。多額の懸賞金がかけられるような問題だぞ。それをたった二人の子供に解けと？いくら鷺志さんでも無茶

が過ぎる。

ぶつぶつと口に出しながら頭を抱え、それでも冷静に考えている自分がいた。考える内容はミレニウム懸賞問題のことでは、もちろんない。

いくら鷺志さんでも。そう、この問題を用意したのは鷺志さんなのだ。

確かに鷺志さんなら『なんとなく』とか『悩む姿が見たかったから』とかいう理由でこういう無理ゲーを仕掛ける可能性は大いにある。その理由であっても納得できるし、全く不自然ではない。

それでも、僕は鷺志さんを『信じて』いた。

鷺志さんはここを狂化施設だと言っていた。まさか僕たちを発狂させるための施設ではないだろうし、また違っても信じたい。

これは額面通りの数学ではないのではないか？

鷺志さんと接するうちに自然と身についた『疑う心』が、僕にスフィンクスの言葉を疑わせた。ニュアンスで捕らえるな。言葉の真意を捕まえる。

スフィンクスはなんと言っていた？

スフィンクスの言葉を、引いては鷺志さんの言葉を、僕は自分で勝手に解釈してはいないか？

《君達に謎掛けをして欲しい》 《指示を受けています》 《私が出す

問いに答えなさい》《問い掛けは三問》《回答のチャンスは一回のみとします》

「……………」

なんとなく、わかった気がする。

正直に言ってしまうえば、今から僕が言おうとしていることは非常にバカバカしい。バカだと罵られても文句は言えない。引っ掛けでもなんでもない、これがただの意地悪な数学だったとしたら、僕は芸の出来ないピエロのようだろう。

だけど、やっぱり鷺志さんの卑らしさを信じてみよう。

「僕の答えは……………」

スフィックスの言葉を疑い、穿った見方をした上での都合のいい解釈。だけど、これが天邪鬼なあの人らしい気がした。

「わかりません！」

「はあっ!?!」

僕の元気のいい『答え』に、小太郎くんは呆れたように絶叫した。事実呆れてもいるのだろう。目には信じられないものを見るときに彩がある。

《……………》

スフィックスは砂色のまぶたを閉じ、砂色の口を引き結び、深く

思案するように押し黙った。

「・・・・・・・・・・」

ゴクリ、と息を呑む。砂が入ったせいで少しジャリジャリした。渴いた空気を吸いすぎて、少し喉が痛い。

この空気ははっきり言って辛い。色黒司会者といい、問題の成否くらいズバツと言って欲しいものだ。

《・・・・・・・・・・》

僕の願いが通じたわけでもないだろうが、スフィンクスはようやく目を開けた。全身と同じ砂色の双眸で僕を静かに見据え、言う。

《正解です。次の扉へ進みなさい》

二つ目の扉を開くと、そこには薄暗い通路が口を開けていた。どうやら一部屋目以降は通路というワンクッションがおかれるようだ。

「なあネギ？」

暗い通路を歩きながら、小太郎くんが声をかけてきた。

「さっきの答え、確信があってああ言ったんやろ？解説してくれん？」

内容はつい今し方のスフィンクスの謎掛け。僕の答え、『わかりません』についてだった。

「そんな、解説なんていうほど複雑なものじゃないよ。出て来た問題に驚かされたけど、今になってみればそう難しいことでもなかったし」

つまりいつも通り、鷺志さんの口撃の一環だったのだ。

「スフィンクスが言ってたでしょう？あの問題は鷺志さんが用意した、って」

「ああ、そついや言うつとつたな」

「つまりあれはそのまま問題通りの答えじゃありえない、ってことだよ」

「それは解つとるて」

そつだよね。言うまでもなかったよね。

「それでいて、あのスフィンクスがなんと言っていたか」

《問いに答えなさい》

普通は『答えなさい』なんて言ったら『正答しなさい』っていうことなんだけど、その後の言葉が気になった。

《回答のチャンスは一回のみとする》

この言葉。

出された問題はポアンカレ予想、ホッジ予想、リーマン予想の三つ。

なのに解答権は一回きり。このことが違和感として残った。鷺志さんが僕にも解るような違和感を出したんなら、そこには何かがあるのは間違いない。

数あるミレニアム懸賞問題のうち三つの答えが同一であるはずもなく、にも関わらず『チャンスは一回』と言い切ったのはなぜか？

「スフィンクスが言ってたでしょ？『問いに答えなさい』って」

「ああ」

「つまり正解しなくてもいいんだよ」

「はあ？」

「珍回答でも誤回答でも、無回答でなければいいんだよ」

「……いや、なんぼなんでもそれは暴論と違うか？」

「本当にそう思う？」

鷺志さんだよ？と言外に問い質す。どうやら受けとってくれたらしい小太郎くんは、サッと視線を逸らした。

そこからしばし無言のまま通路を歩いた。石畳をゴム底の靴でギョムギョムと踏んずけていく。

「……この先も、こんなんばっかなんかな？」

「……多分、ね」

陰鬱とした気分のまま通路を歩くことになってしまった。目の前に現れた次の扉が、まるでセルゲームの会場に見える。

『武』の扉は不意打ちの宝庫。『知』の扉は屁理屈の貯蓄。『魔』の扉は未知数。

眼前の扉にはプレートがかかっていない。

鬼が出るか蛇が出るか。

できれば鬼は出ないで欲しい。

第五十五・五五五話（後書き）

没ネタ

天邪鬼

虚言で伝わる『一俗』

一俗同士は互いの嘘の臭いで察知する。

『嘘臭い』と一俗。

窓口 丹頂

陰口 雲雀

告口 水鳥

悪口 雛鳥

没になった理由

・こいつら嘘しか言わねー

・つまり全員ツンデレ

## 第五十五・五五五話

特になんのでらいもなく、僕たちは次の扉を開けることができた。開けた瞬間奇襲とか、そういうことはなかった。

「ここは・・・なんの部屋だろうね？」

ドーム状の天井の、石造りの部屋。石畳。全体が灰色の、どこもなくテンションの下がる色調だ。

部屋を見渡す限りにおいて、特に誰かがいるなんてこともない。スフィングスの例もあるし、下から這い出てくるかもしれない。

「俺が挑んだ『武』の部屋はこんなだったで。三分の二はよう見えへんかったけど」

頼りになるのかならないのか、よくわからない経験だ。

「それじゃ、ここも『武』の部屋？」

「『魔』かもしれんぞ。俺は入ったことないから知らんけど」

「.....」

正直『魔』ではないことを祈りたい。

魔法の修業を怠っていたつもりはないし、師匠の鍛練も並ではない。実力だっつついていいると思う。

でも、『魔』って字の中に『鬼』入ってるし。

「なんや、だーれもおらんで？」

僕の内なる葛藤を踏み潰し、小太郎くんはズカズカと室内に踏み行った。前に二回ほど不意打ちを貰っているはずだが、警戒している素振りは見えない。

「……そうみたいだね」

小太郎くんが部屋の中央まで歩き、そこから室内を見回し、それでも闇討ち不意打ち騙し討ちの類がないことを確認してから、僕も室内に入った。ふう。

「カナリ……小太郎くん、少しは注意しなきゃだめだよ」

「あん？今なんて言おうとしたん？」

炭坑夫は、炭坑を掘り進む際に先頭の人物がカゴに入れたカナリアを持ち運ぶ。もし有毒なガスが出ていた場合、人よりも先に体の小さなカナリアに毒が周って死んでしまう。カナリアが死んだら、つまり『ガスが出ている。人間は逃げる』の合図となるのだ。

なんとなく、今そんなウンチクを披露しなくなった。なんとなく。

「でも油断はできないよ。妖怪の類まで出るなら、『パーフェクトフラン神の不在証明』とか使える蟻がいても不思議じゃない」

「せやな。友達から借りたー、とか言っイビルフラインドて『無気力な幻灯機』とか

引っ張り出してきそつやわ」

さもありません。

「でも本当に見えなかったら『武』どころじゃないよ。そついうのはもつと上階で出てもらわないと」

僕の言葉を聞いていた訳ではないだろうけど、その言葉の直後に変化があった。

ガチャリ、と向かい側の扉が開いたのだ。

入ってきたのは三体のロボット。一見すると男性型ティンペット（メダロボットの骨組み。ターミネーターの中身みたいなもの）のようには見えない。

ロボット達はそのまま無言で部屋の中央、僕たちの正面まで歩いてきた。よく見ると胸に1〜3番号がアラビア数字で記されている。

「なんや、こいつら・・・?」

「ソノ質問二八解答ガ用意サレテイマス」

まさか答えがあるとも思っていなかったのだろう。小太郎くんもとても驚いていた。

「こいつらは僕とハカセが共同開発した格闘技術特化型のロボットだ。ボクシング、キックボクシング、ムエタイを使いこなすぞ」

ロボットの口から発せられたのは、誰であろう罪口鷺志さんの

声だった。録音かなにかだろうか？

「この部屋の課題は、この三体をかい潜って扉を抜けること。言っておくけど、今来た扉を戻るのはなしだぜ？」

1番のロボットに続き、2番のロボットも口を開いた。

「こいつらは基本的に好戦的だ。上手く立ち回らないとあっという間にやられっちまうぜ？」

その言葉が終わると、ロボットはそれぞれ構えを取った。

1番のロボットは両手を軽く握り、拳の外側を向ける形で顔の前へ。俗に言うファイティングポーズ。

「私ハ『ボクシング』ヲ使イマス」

2番のロボットも、1番とよく似たファイティングポーズ。

「私ハ『キックボクシング』ヲ使イマス」

3番は手の平をこちらにむけるように拳を作り、大きく肩を竦めた。ムエタイの構え、タンガードムエイ。

「私ハ『ムエタイ』ヲ使イマス」

三体の臨戦体勢が整った。俄かに空気が張り詰めていく。

「ネギ。説明」

小太郎くんが短く告げた。それだけで解った僕も応じる。

「ムエタイは他国からの侵攻に対するためにタイで生まれた素手の殺人術だよ。タイ式ボクシングやタイ式キックボクシングとも言われている。肘や膝、殺傷力の高い部位を優先的かつ効果的に使う、立ち技系最強格の一つ」

「他は？」

「キックボクシングは日本で生まれた格闘技なんだ。ボクシングのパンチ。空手の蹴り。ムエタイの肘打ちや膝蹴りを複合させたもので、これまた立ち技系最強格」

「ボクシングは？よう聞くで。最強の格闘技って」

「蹴り無し。肘、膝無し。頭突き無し。投げ技無し。寝技無し。関節技無し。背面無し。金的無し。etc.」を個人的に最強とは思いたくないし、ヘヴィ級チャンプ「世界最強っていう風習には疑問を呈したいけど気をつけて。ボクシングはまず間違いなく『最速』の格闘技だよ」

「けつ。最強、最強、最速の三つかいな」

「しかも二対三だ」

「なら・・・」

その先を声に出すことなく、僕と小太郎くんは互いの言いたいことを解っていた。

やることは一つ。

三体が壁際にいるうちに、囲まれる前に不意打ちの同時攻撃で一体潰す！！

僕は瞬動で斜め上方に跳んでから、虚空瞬動で上からの手刀で強襲。

小太郎くんは地を這うように低く疾り、踏み込みの勢いで掌打の突き上げ。

「しょうしゅせんかいへきとう松種旋回劈刀！！」

「くおんばくさいけん狗音爆碎拳！！」

狙いは一番。ボクシングには上からも下からも受け方は無い。右への回避は隣のロボットが邪魔、左への回避は僕の手刀、次の腕が妨げる。

「喰らつとけえ！！」

小太郎くんが獰猛な笑みを浮かべる。攻撃が当たるまでもう瞬間も空いてない。僕も小太郎くんも、攻撃の必中を確信した。

一番のロボットは僕と小太郎くんそれぞれに拳を向けたが、反応はそこまで。両手で同時に伸ばそうと、威力も速度も出はしない！

ドシュ！ドシュ！

「ほげえ！？」

「がはっ!?!」

前者が小太郎くんである。間違えないように。

腹部に感じた衝撃に押され、僕はゴロゴロと床を転がった。絶息はなかったので即座に体勢を立て直し、構えを取った。

今何が起こったのか。

その答えは目の前にある。

「て、てめえ……」

「格闘技特化のロボットが……」

「『ロケットパンチは反則だぁー!!』」

ロマンだけど!ロマンだけど!!でも反則でしょ?格闘技っていないながらロケットパンチは反則でしょ!?

僕たちの魂の慟哭を一切意に介することなく、腕をワイヤーで回収した1番は再度ファイティングポーズを取った。

ちくしょう、聞く耳持たないっていうことか。

「小太郎くん。どうやらこのロボット、鷺志さんみたいな性格だ」

「話すだけ無駄、ちゆうことやな?」

「二人がかりで一体ずつ、確実に潰すよ」

「応！」

ギャリツ、と不協和音を奏で、ロボットが間合いを詰めてきた。

僕の元に1番。小太郎くんの元に2番が現れる。作戦を潰すつもりか！？

「小太郎くん！」

「各個人戦闘やな！」

「わかってくれて嬉しいよ！」

1番はボクシング。死角は足元や体側、背後。

ボクシングのジャブはボクサー以外に見えるものじゃない。僕は右足を擦るように踏み出した。足のあとに体を動かし回り込む歩法、反三才歩。

輻輳<sup>ろくごう</sup>勁<sup>けい</sup>で手刀を打ち込むべく大きく腕を降り抜こうとしたのだが、

ズバンッ！

「ッ！？」

軸足の太もも側面から脳天まで痺れるような痛みが突き抜けた。

今の感覚、中竇<sup>ちゅうさい</sup>（大腿部の筋肉と靭帯の境目。肉が薄く、衝撃が

骨と神経に通じやすい)への攻撃!?

思わず膝をつく僕が見たのは、蹴り足を戻す1番だった。

「じぼう・・・!?!」

小太郎くんの湿った漏声<sup>ブルム</sup>が聞こえた。視界の端では小太郎くんが2番に首相撲を取られ膝蹴り<sup>チャランボ</sup>を喰らっているのが見えた。

「くっ、つはっ!」

瞬動で大きく距離を開ける。片足のせいで着地がうまくいかず、不様に膝を擦ってしまった。小太郎くんもお腹を押さえながら跳び退ってきた。

「・・・なあネギ、キックボクシングってのは組み合うのも有りなんか?あれクランチちゃうんか?」

「僕に聞かないですよ。こっちもボクサーに蹴られた理由を考えることで精一杯なんだから」

中竈の痛みはすぐには引かない。ジンジンとしこりのように残る疼痛をかみ砕き、辛うじて現状把握に勉めようとした。

するとロボットが無機的な口を動かした。

「失礼シマシタ」

いいながら、三体が三体とも胸のナンバープレートを外して交換し始めた。

最初1番だったロボットは2番に。

最初2番だったロボットは3番に。

最初3番だったロボットは1番に。

新たに付けられたナンバープレートを心なしか誇るように胸を張っている。

「……どういうことや？」

「さあ？」

「ソノ失礼ニハ解答ガ用意サレテイマス」

僕たちの疑問を律儀に聞き取り、ロボットが再度鷲志さんの声を発した。

「いやぁゴメンゴメン、どうやら遠坂しちゃったみたいだね。

ナンバープレートを付け間違えていたみたいだ。もう、付け直したかな？この状態が合ってるはずだから。もう気兼ねしなくていいよ」

「……」

「……」

「……どうも思っ〜」

「……どうも〜どうも〜、答えが用意されとる時点で断じてっっかり

やないやろ」

「うん。僕も全くもって同意見だけど、小太郎くんが『遠坂』うっかり』に変換出来たことに少なからず驚きを感じてる」

「なんでや。おもしろいやんけ、Fate」

「確かに面白いけど、そのタイトルはまだ見ぬ僕のライバルを彷彿とさせるから微かに拒絶反応がある」

「言ったらいけん」

「ゴメン」

気を取り直して。

「よし、行こう！」

「おっしやあ！」

今度はこちらから仕掛ける。僕は瞬動で一気に間合いを詰め、一番の胸に頂心肘を放った。人間なら胸骨への衝撃で息が止まるところだが、そこはロボット。僅かも怯むことなくジャブを刻んできた。

左の細かいジャブで鼻や目を執拗に狙って来る。なんて嫌らしい攻め方だ。僕はたまらず距離を開けた。

そこへ間髪空けずに2番が距離を詰めてくる。

「ネギ！ 氣い付けえ！」

「何に!?!」

2番の右ジャブと左ロー。教本通りの対角線コンビネーションを捌きながら小太郎くん<sup>カウ・ロイ</sup>に尋ねた。基本技が鋭いなんて、真つ当な鍛え方をしているらしい。

左右のローを三発連続でかわした後、2番は両手を伸ばして迫ってきた。

「ッ!?!」

足元に意識が行っていた僕は対応仕切れず、2番に両手で後頭部を捕まれた。そのまま体全体で跳びはねるように顔面膝蹴り。

「グブツ・・・!!」

なんで!?! 2番はキックボクシングのはずじゃ…………。

「こいつら、たまにナンバープレート交換しとるぞ!」

「もっと早く言って!!」

鼻の骨と前歯が折れた! 永久歯だったのに!

「ところでさ、このロボット達って…………」

「ああ、俺も気になっとな」

性質というか、性格というか、『中身』のようなものに嫌な親近

感がある。

この擦れ捻くれ曲がりくねった感覚は……。

「言イ忘レテイマシタガ、私達ノ思考パターン八罪口鷺志サンノモ  
ノヲ踏襲シテイマス」

やっぱりか……。

「鷺志のにーちゃん×3が相手かい」

「鼻は別にして、骨が折れそうだ」

第五十五・五五五話（後書き）

とある方の小説の謎解きに勤しんでいたら執筆忘れてた・・・。

危ない危ない、気をつけないと。

どうも勘違いしている方も多いようですので、勘違いされたまま文句を言われるのもいい気はしませんので、ここではつきりさせておきましょう。

この小説の主人公、罪口鷺志は、『戯言』を騙ったことはありません。

辞書の意味そのままの戯言でしたら語ってもいましょうが、欠陥製品『戯言』を騙ってはいけません。ご注意ください。

では、本編どうぞ！

side・鷺志

その日は特に用事もなく、僕は普段通り登校時間ギリギリまで眠るつもりだった。最悪瞬間をかければいいし、先生を丸め込むなり精神操作するなりすればいい。

そんな考えが自然に浮かぶあたり、僕も大分馴染んだなあとか、中学三年生まで生きれば当然かとか益体もないことを考えていると、部屋の扉が乱暴にノックされた。

大分柔らかく言ったが、これは『住人に来訪を告げる』ノック、ではなく『破壊を前提とした』殴打かもしれない。

こういうときに限ってアホはジョンの部屋に泊まりに行つて（勿論校則違反だ）いる。

昨晚は『なんだよ部屋が広いぜいやっほう！』とばかりにテンションが上がリ、アホのベッドの上でポテチを食べたり、その油を拭かずアホのゲームで遊んだり、うっかり零したコーヒーをアホの制服で拭いたりしたのだが、全く役に立たないことこの上ない。

「はいはい今出ますよって」

聞こえるはずもない呟き。人に向ける言葉もこうあっては独り言も同然だろうか。

ガチャリ

扉を押し開けると、そこにいたのは獣耳なのに1MP（萌えポイント）ももたらさない少年。犬上小太郎少年の姿があった。

「鷺志のにーちゃん！俺を鍛えてくれ！」

「早朝のテンションじゃねえ。もっとこう・・・生きるのに絶望したスーパーマンみたいに言え」

「そういうのはちょっと勘弁してくれんかな・・・？」

朝っぱらから戦闘バカのテンションは僕にはキツイ。早朝から元気がいいのは二ワトリだけで十分だ。

「・・・で、なんなの？長瀬さんに弟子入りしたんじゃないの？」

「確かに鍛えてはもらつとるけど、短期間で強くなるんやったら鷺志のにーちゃんのがええかな思て」

「なんで短期間？なにか急ぎの用でもあるの？」

「ネギが魔法世界に行く」

だから俺もついていく。小太郎の目はそう言っていた。目は口ほどに物を言う、とは僕としては反論を挟みたい諺だが、しかしこの場合は正鵠を射ているようだった。

「・・・Aコースは疑念と疑心を骨髓まで染み入らせて精神と肉体を酷使し尽くし、神仏ですら疑心暗鬼に陥らせる詐称と激痛を伴う。

しかも効果と人格を保証できない。Bコースは寝て起きたら最強になつてる。さて、どっちのコースがお望みだい？」

「Aコース！」

ほんのちよつと格好良くてムカついた。

小太郎をダイオラマに突っ込んでから、あの熱気に当てられた僕は二度寝も出来ずに結局無意味な早起きを課せられていた。くつそう、小太郎め。塔の難易度上げといてやる。

眠気の訪れない現在の状況で出来ることといえば、読書か八つ当たりくらいのものだらう。僕は後者をとることにした。

さて、ネギはどこにいるかなー？

小太郎とネギのコンビをダイオラマに押しやり、僕はさっさと外に出た。え？一日経たないと出られない？やだなあ、そんな都合の悪いことするはずないだろ？

そろそろアホも戻ってくるだらうし、僕は扉に鍵をかけ、つつかえ棒をしてから制服への着替えを始めた。なんだかノックがうるさ

い気がするが、きつと気のせいだ。

朝食の準備を手早く整え、具体的に言うと冷凍食品を電子レンジに入れて電子レンジのタイマーをセットし、僕は緑ちゃんにメールを送った。

送って、そのままカバンに押し込んだ。

緑ちゃんにはどんなメールを何度送っても、決して返信が来ないのだ。どうせ今回も来ないだろう。いつそ系越しに声を送って済ませてもいいくらいだ。

それでもあえてメールを送るのは、いつかきつと返信をくれるという健気で一方的な信頼（押し付け、ともいう）によるものである。

もっとも、送信直後に携帯をカバンにしまいこんでしまうあたり、自分でも返信は来ないと半ば確信しているのだろう。難儀なものだ。

今時本当に『チーン！』と鳴る年代物の電子レンジから解凍食品を取りだし、僕はどうやってドアを開けずに外に出るものかと思案を始めた。

放課後、僕はエヴァハウスへと足を運んだ。ここに集まるのは義務でもなんでもない、ただの権利ではあるものの、ここに来れば誰かしら（住んでいるエヴァや茶々丸はもちろん）が居ると思うと、普段男子寮にいる僕は毎日のことと来てしまう。

それに今朝メールを送ったのだから、今日は緑ちゃんがいるはずだ。今まで緑ちゃんに用件をすっぱかされた事は13回（確率にして58弱%）しか無い。

「緑ちゃん、いる?。」

ログハウスの扉を開き、おとぎの国一步手前なファンシーワールドへと踏み入った僕を最初に迎えたのは、いつも通りの、茶々丸の笑顔（常人より大分無表情に近いが笑顔は笑顔）だった。

「おかえりなさいさぎさん」

「ただいま茶々丸。え……と」

室内では木乃香とさよがノートを広げ、千雨と刹那がゲームに興じ、エヴァはうさぎちゃんを抱きながら読書に勤しみ、そして緑ちゃんは僕を見上げた。

「何用ですか?」  
なんのよう

「メール、送ったでしょ?」

「思出、今朝のアレ、本気だったんですか?」

「もちろん」

「なんの話?」

訝し気な緑ちゃんに木乃香が話し掛けた。勉強には一段落ついた

のだろう。

「天邪鬼せんぱいからメールが届いたんです。『そつだ、京都に行こう』って」

「京都？」

キョトンとする木乃香。その愛らしい瞳が僕を映している。なんで？そつ問っているようでもあった。

「魔法世界に行くに当たって、僕の魔法の修業も仕上げをしておこうと思つてね。それならつて、師匠エウヅが京都が適しているって言つものだから」

「何由なんで私もなんですか？」

「それは私が言つたんだ。間違いなくミドリにも有益だぞ、とな」

「それ以上は聞いても教えちゃくれないんだ」

少々大袈裟に肩を竦めて見せた。木乃香は「ほんならお父様に」と言い募り、緑ちゃんは「はあ」と息を吐いた。

「学舎がっこうの方はどうにかしてくれるんでしょう？」

「任せてよ。学園長には僕から嘘はなつけておくから」

それを聞くと緑ちゃんは力チ力チと携帯を操作し始めた。何をしているのかは解らないが、了承と取つてもいいだろう。

僕は茶々丸からカップを受け取り、熱すぎないコーヒーを啜った。お気に入りメーカーのインスタント。砂糖たっぷり。ネギはミルク無し、砂糖一つで飲むが僕は甘い方が好みだ。

「あ、なあなあさぎくん」

不意に、木乃香が可愛らしい口を開いた。

「今日な、ネギくん学校来いひんかったんやけど、なんか知らん？」

「学校に来なかった？」

ふむ……………。

「よし」

「さ、鷺志さん……………」

「鷺志のにーちゃん……………」

塔のグラウンドフロアでは二人が死体同然の様子で倒れ伏していた。食料の供給はあるはずんだけど……………？

僕が持っていた魔法薬を飲ませ、ようやく回復した様子の二人は半ばつかみ掛かるように僕に詰め寄ってきた。

「ここ酷すぎませんか!？」

「今からBコースとかでけへんかな？」

「僕死亡回数がそろそろ二桁届きそうです！」

「『知』が殆ど意地悪クイズなのは鷺志のにーちゃんの性格なん？」

「一つずつ拳骨食らわせて大人しく。」

それでもネギはなにやら言いたいことがあるようだった。

「ティンペットみたいなロボット三体と戦いました」

と前置きしてから、

「ナンバープレート入れ替えされたりして混乱したんですけど、あのロボット最終的には三体が三体ともムエタイ使ってきたんですけど?。」

「それがどうかした？」

さも当然、と返した僕を見てネギと小太郎は心底疲れた風のため息を吐いた。

なんだか納得していないようだが、どうやらコイツらは僕とロボットの話をよく聞いていなかったらしい。

「よく思い出しなよネギ?僕は『ボクシング、キックボクシング、ムエタイを使う』と言ったんだ。どれか一つしか使えない、なんて

言っていないぜ？」

「で、でもその後ロボットが一体ずつ何を使いますって……」

「『使います』、とは言っても『他は使えません』、なんて言っていないだろう？」

ネギと小太郎は床に沈み込むように落ち込み尽くした。溶けて染み込みそうだ。

二人には嘘を吐かなくても人を騙せると言うことを覚えてもらおう。

「そんなことより、ダメじゃないかネギ。教師が学校サボるなんて感心しないよ」

「そう！そのことで鷺志さんに言いたいことが！」

うわビックリした。いきなり飛び掛かるなよ、危つく糸引くところだったぞ。

「あんな鷺志のにーちゃん。出口の扉、開かないんやけど」

「開かない？」

「はい。だから、何か条件でもあるのかな、ってがむしゃらに塔に挑んでたんです」

ってことは10日以上もここにいたのか。ご苦労なことだ。僕はため息一つ、扉に向かった。

外に出て、中に入る。回転床は踏まないように。

「おいおい、普通に入ったり出来たじゃないか。二人揃って何やってたんだい？」

「……………」

「……………」

二人は、なんというか、忘れていたことを思い出したような、何かを再確認したような、よく分からない曖昧な表情を浮かべていた。

「……………鷺志さん、今、どっちから出ました？」

「入り口」

「今、どっちから入ったん？」

「出口」

そのための回転床かあ……………。

疲れきった声で掠れるようにそう言うと、二人は深く深い眠りについた。

ロボットの使う格闘技に関しては、お気づきの方も多いためです  
ね。

皆さんが人を信じなくなつて、僕は嬉しい限りですw

さて、今回は五十六話となるわけですが、ミステリー要素が入りま  
す。

僕が愛読している同サイトの小説、『バラバラマジカル』の作者さ  
ん。

『人類最愛』こと、人間好き愛嬌たつぷり狂愛さんに僕のミステ  
リファンとしての魂を触発されましてw

というわけで、『素人のミステリーなんざ見たかねーよ!』という  
方は五十六話はスキップして下さい。ご注意を。

『バラバラマジカル』とっても面白いですよ!僕のよかよっぱどが  
レゴトやっています!一見の価値あり、です!

## 第五十六話【試験開始】（前書き）

麻帆良を離れるに当たって、木乃香の護衛は刹那に任せた。龍宮さんにもいくらか包み、高畑先生にも個人的にお願いを（言われるまでもない、と微笑んでくれた）した。

木乃香には僕の仮契約カードを離すなど再三再四に渡って忠言し、いくつか身を守るためのアイテムも手渡した。

そんなに心配なら連れて来い、とエヴァに言われたが、それは却下だ。勉強は受けた方がいい。中学生なのだから。

それに今回の京都行きは僕の、いわば我が儘だ。授業があるうちじゃなく夏休みに入ってから行け、と言われれば言い訳は（真っ当には）できない。そんなことに木乃香を巻き込むわけにはいかない。たとえ魔法使いでも。

あれやこれやと手を回し、あっちこっちと根回しし、あれとこれとで目を回す。

今までもプレイヤーとしての仕事で離れることは何度となくあったものだが、この心配性は治りそうもない。

麻帆良が僕の意図から外れるなんて、それこそ修学旅行以来だ。懇意にしている魔法教師の何人かにはそれとなく伝え、警備を常よりわずかに強化してもらった。もちろん木乃香たちのためだ。

こんなにソワソワするのは離れる直前だけで、いざ離れてしまえ

ば以外と落ち着いて来る、というのは何度も経験してわかっているのだが、理性と感情は往々にして相容れないものなのである。

念には念を詰め込む。転ばぬ先の耐衝クッション。石橋は叩いても渡らない。

過保護に過ぎる防護を施して、僕、緑ちゃん、エヴァの三人は新幹線に乗り込んだ。

## 第五十六話【試験開始】

僕、緑ちゃん、エヴァの三人は新幹線で京都へ向かっていた。乗っているのは運転席の後ろ、先頭（とっていいのかな？）車両だ。

「まるで貸し切りだ。僕たち以外誰もいないんじゃないか？」

「始発に乗るようなやつは乗降口からわざわざ離れないんじゃないか？」

「エヴァ、それは多分に偏見ってもんだよ」

僕たちの会話に緑ちゃんは入ってこない。僕の後ろ、エヴァの隣で穏やかな寝息を立てていた。

「だいたい、なんで始発なんだ？急ぎの理由でもあったのか？」

「一回乗ってみたかったんだ。始発」

エヴァは深く息を吐き、青い髪の少女が表紙にいる本を読みはじめた。僕が貸してあげたんだ。

「っておいおい。エヴァが読書を始めちゃ、僕は一人っきりでとても暇じゃないか。」

とはいっても、まさか他人の読書の邪魔をするわけにもいかず、僕は大人しく鞆から文庫本を取り出した。表紙ではスーツを着た長髪の男が眼鏡をかけ直している。

さて栞はどこに挟んだか。僕が本を開こうとすると、車両後部の扉が開き、一人の男が入って来た。

大柄な、とても大柄な男。身長は180の後半くらいだろうか？190あるかもしれない。短く刈り込んだ髪はツンツンと上向き、その下の顔は岩から削りだしたかのような恐面だ。

大男は手に持っていた小袋から何かを取り出し、口に入れた。ガリガリと大きな音を立てて咀嚼している。あれは、角砂糖？えらく固そうだけど、古いんじゃないか？

僕たちには目もくれず、大男はその車両の先まで歩いてドツカと乱暴に座った。どうせ他に客はいないけどさ、ああいう行為って見ていて気分のいいものじゃないよね。

「ダン……。おいダン！」

エヴァが小声で呼び掛けてきた。神妙な面持ちで、何やら苦しそうに眉をひそめている。

「車両を移ろう」

「どうかしたの？まさか、何か魔法的な攻撃を？」

「いや、ニンニク臭い。あの男、餃子か何か食べてきたらしいな。凄い臭いだ」

「……………」

さいですか。

エヴァが緑ちゃんの肩を揺るのを見ながら、僕は荷物を持ち上げた。僕の心配返せ。

「和了。<sup>ロン</sup>三暗刻・混老頭・対々和・ドラ3の7本場」

「-6万点……」

「ダンは負けすぎだ」

箱下無しでやろう。そう言い出したのが僕であるだけに悔しさは一塩である。せめてノーレートでよかった。お金賭けてたら僕今日で破産しちゃうところだ。

「次行、<sup>あ</sup>次で役満ですよ」

「八連荘予告か!!」

僕たちは暇潰しのためにカード麻雀に興じていた。メンバー足りないからサンマ。サンマのルールとか詳しいことはわからないから、とりあえず萬子抜いただけ。

「なんの。私だって仕上がってきているんだからな？」

「本流は既に私にありますよ？」<sup>ながれ</sup>二人とも僕のことガン無視だった。もはや対麻ですらあるのかもしれない。

まだ東3局だ。僕にだって勝機はある！

意気込んでカードのシャッフルを開始すると、車両後部の扉が開き、一人の女性が入ってきた。

艶のある長い黒髪。なんかわかんないけど袖無し（ノースリーブ、だっけ？）の、えーと・・・服。なんか、こう・・・カーディガン？みたいなのと、なんかわかんないけど、すごいフリフリのスカート。胸元には赤いブローチ。

あ？無茶言わないでくれ。僕に女の子のファッションがわかるわけないだろ？これまでだってなんとか誤魔化して来てるんだから。

中学生？いや、高校生だろうか？

年は女性と女の子の間くらいに見える。もともと、女の人は化粧次第で外見年齢が大きすぎるくらいに動くから判然とはしないけど。もともと見た目で年齢当てるの苦手だし。

彼女は僕たちの興じているカード麻雀にチラと視線を向け、頭上の、僕たちの荷物を気にしながら前の車両へと歩いて行った。荷物少し出過ぎかな？落ちないといいけど。

「美きれい人な方でしたね」

「君の方が綺麗だよ」

「吐く堪た」

「そんなにダメだった？」

緑ちゃんは口元を手で覆いながらカードを繰った。僕はちよつと涙が出そうだよ。

5、6分ほど経っただろうか？緑ちゃんがワンサイドゲームな麻雀に飽きてババ抜きを始めた頃だ。

ガタンツッ！

車両前方の扉が乱暴に開け放たれ、先程の女性（便宜上女性、と呼ぼう）がバタバタと駆け抜けて行った。顔は強張り、右手で服の胸元を強く握り締めている。さつき見掛けたブローチも、今はついていない。

女性が駆けて行った直後、大男もぬつと体を覗かせた。右手で顔の半分を覆い、先ほどの女性をねめつけている。僕たちの姿を確認すると、チツと舌打ちをして戻っていった。

何かがあつたことは一目瞭然だった。

「……あゝあ、僕もうこれ逆転は無理なんでない？」

だが、何が起こつていようと僕には関係ないし興味もない。僕たちに迷惑が掛からない限り僕は何もしない。面白そうなことなら例外だけどね？

「ダンはジョーカーに好かれすぎじゃないか？」

「<sup>すいよせ</sup>吸集られるかのように先輩の手札にいますね」

「配ったときから僕の手札にいて、しかも出て行かないからね」

いつの間にかポケットに来るほどは、好かれてないみたいだけど。

「さ、配り直してもう一戦だ」

ボス！ボス！ドスン・・・！

「うわっ」と・・・！

僕とエヴァのバッグが上棚から落ちてきた。やはりバランスが悪かったらしい。

「ダン、上げとけ」

「構わないけど、態度が横柄過ぎやしないかい？」

僕は手札を伏せて立ち上がり、バッグを上棚に乗せ直した。こっちは本を容れていないから落ちたことの心配はない。

エヴァのバッグにしたって、どうせ彼女の事だ。大したものが入っていないだろう。せいぜいが下着とか・・・。。。

「ダン。ファスナーを摘んだその指、開く以外に動かしたら罪口の家系はお前で途絶えることになるぞ？」

「脅迫が恐ろしすぎる」

幾つか方法が思い浮かんでしまふあたりが尚恐い。僕は戦々恐々としながら、断腸の思いで指を離した。

「早次はやつぎ、さっさと先輩イジメを始めましょう」

「畜生、もう勝つ気でいやがる！」

先程はじめた一戦も、そろそろ佳境。残っているのは僕と緑ちゃん。緑ちゃんが一枚で僕が二枚。もちろん片方は、ここ数分ですっかり仲良くなつたジョーカーちゃんだ。

緑ちゃんがその右手を伸ばし、僕の手札の片方を摘んだ。くっ、そっちじゃない……！

やがて訪れるであろう敗北に、指に力が入っていく。そうしていくと、

バンツ、と力強く車両後部の扉が開かれた。力強く、というより乱暴な、という表現の方が正しいかもしれない。

今度入ってきたのは男だった。ファッションを頑張っちゃった田舎の中学生のような男。明るい茶色の髪とギザギザのサングラス。細かいチエーンを幾重にも束ねて首に巻いていた。中学生のような、とは言ったが半端な口髭を見ると10代ではなさそうだ。男は肩をいからせながらドシドシと足音も荒く前方の車両へと消えて行った。よく見るとサイケデリックなサンダルを履いている。

「うわあ、ねえなあれは。」

「そんな僕の心中とは裏腹に。」

「今時人、カツコよかったですね」

「ああ。首のチェーンが決まってたな」

「女子二人は好評価を下していた。」

「え、今の格好いい？なんかさ、頑張っちゃった感でてなかった？」

「其所がいいんじゃないですか。頑張っても空振ってしまった感じが可愛いんですよ」

「可愛い!?!」

「それを自信満々にひけらかしているズレた感性も、見ていて癒されるな」

「癒される!?!」

「分からねえ!女心がまったくもって分からねえ!!でも……」

「ぼ、僕も、帰ったらお洒落してみようかな、なんて……」

「あれで好かれるのなら、僕は……!」

「止請、先輩には似合いませんので」

「お前には首輪がお似合いだ。コノカにリードを持って貰え」

「なにをお!!」

.....ありだな。

「無しだよ!!」

一瞬血迷っちゃったよ!

「首振まうたく、先輩はどこまでも変態ですね」

緑ちゃんが軽い悪態を吐きながら手札をピツと引き抜いた。余裕に満ちた表情が一転、驚愕と後悔に染め上げられた。

ふっ、甘いな緑ちゃん。乱暴な闖入者なんて素敵な条件、僕が見逃すはずがないだろう?

緑ちゃんの視線が男に向けた瞬間に、指を組み替えて手札を入れ替えたのさ!

「上等やうとくますね先輩.....」

「ふふふ、勝負は最後の一枚までわからないよ」

緑ちゃんはさつと横を向き、手札をシャカシャカとシャツフルしはじめた。正直そんなことは大した意味はないと思うのだが、まあ犯罪者心理と似たようなものだろう。

やがてサツと二枚の手札を僕に差し出し、緑ちゃんはニンマリと

笑った。

「さて、じゃあ勝利のドロ―を……な、なにい!?!」

「何有どうぶつかしましたか?」

意地の悪い(でも可愛い)笑顔を見せ付けられ、僕は自身の甘さを痛感した。アゴと鼻が鋭く尖っていく錯覚に陥る。

ジョーカーに付けた印、端の折れ目が……ない……っ!

やられた……!見抜いていたのだ、緑ちゃんは……、気付いた……。僕の付けた、印サインに……!

気付いて、そして印を指で隠した……ッ!それが故の笑顔、それが故の、シャツフルツ……!!

こうなつては、もはや運否天賦。神の差配……!緑ちゃんがどちらにジョーカーを配するかなど、知る由もない……!!

「……僕の運が勝つか」

「ジョーカー道化の愛が勝つか」

「勝負ッ!!!」

引かれたカードは、……果たして……!!

ジョーカー……!!

「おかえり、友達<sup>ジョーカー</sup>」

郷愁を抱きながら、ここ数瞬で懐かしさをたっぷり含んだピエロを愛でた。こうして見ると、どこことなく愛嬌がありやがる。

「……いや、これは……!!」

しかし、気付く！見逃さない！このカード、ジョーカーには……

あるべき印が存在しない!!

「あ？あ……ああ!？」

どういうことか。考えるまでもない。やられた、してやられたのだ……『すり替え』を！緑ちゃんに!!

シャッフルに乗じて抜いていたジョーカーを手札に加え、数札を隠し、印を指でつまんで、僕に見せた……!何食わぬ顔で……

「緑ちゃん……、君は……!」

「ん？どうかしたのかな？先輩……!」

ダメだ……!ここで追求しても意味はない。僕がジョーカーの違いに気付いた時、緑ちゃんも僕が気付いたことに気付いた!そして、カードをすり替えた……!二度目のすり替え……!

グニャア~~~~……

ここに駆け引きは終着した。緑ちゃんの、勝ちだ。

「っていつか緑ちゃんが乗ってくれたのが甚だしく予想外だった」

「カイジ賭人もアカギ雀神もガイ無頼もきんとぎん宝物も黒沢も好きですよ」

「なんで黒沢ルビないの？天馬と辺ちゃんも捨て難いぜ」

あと最近じゃHERO【ひろ】くアカギの遺志を継ぐ男も面白い。作画は福本先生じゃないけど、最近二度目の『東西戦』予選が始まったところだ。ヒロユキめっちゃ進化してる。

「どうでもいいが長すぎだ。なんでトランプ引くだけで5分も6分もかかるんだ？私が暇だぞ？」

「キティちゃんはミッキーでも食ってるよ」

「マスコットとマスコットの人気争いか。苛烈を極めるな」

「やま残一に残るのはプーさんですね」

「熊だしね。猫や鼠や兎じゃ勝てないんでない？」

逃げることは出来そうだけど勝つこと、殺すことは出来なさそう。

バンッ

下らないことで時間を潰していたら、また乱雑に扉が開かれた。車両前方の扉から、先程入った男が出て来たのだ。ハアハアと荒く

肩で息をしている。足音といい、荒っぽい男だ。

「ざっけんなクズが！死ぬクソ野郎ッ！！」

ガアン！

前方の車両に向かって右手中指立てて盛大に罵声を上げ、左手をポケットに突っ込んだままズカズカと僕たちの横を通り過ぎた。やかましいことこの上ない。

あれ？首に掛けていたチェーンが無いぞ。

「うるさい奴だな。ファッション同様どうかしてるんじゃないか？」

「同意ですね。ウザりたいチェーンがなくなって少しはマシかと思いましたが、そんなことはないみたいです」

「あれえ！？10分しない内に意見が180度変わってる！」

「あんなもの、ダンをおとしめる為の狂言に決まってるだろう」

「学帰て実行してたら爆笑するつもりでしたが、その前に本音が出てしまいました。勝無先輩のように嘘は吐けません」

「私たちは正直者だからな」

「僕のアウエー感がハンパない」

「ミッキーの真似。閉園時間を過ぎてても残ってる悪い子はだ〜れだ？ハハッ！」

「怖ええよ！」

エヴァの物真似に僕は思わず身震いをした。なまじ声似ているだけに寒気がおさまらない。

「象愛マスコットのマスコットはずがナマハゲみたいになってますよ……」

「いつから夢の国は悪夢を提供するようになったんだよ……」

既に日の落ちた園内に隠れる子供を上から見下ろし、斜陽と逆光の陰影で不気味にほくそ笑むミッキーを想像してしまった。後ろで組んだ手に何を持っているのか、想像したくない。

これで三度目か、車両後部の扉が開いた。

今度入って来たのはメガネをかけた女性だった。こちらはハッキリ女性と言ってしまう。体は女性らしい起伏を備え、顔立ちも『可愛い』よりも『綺麗』と言わせる年齢的な発達を持っている。カジュアルな服装に、コツコツと低めのヒールで通路を叩いていた。

女性は片手で扉の開閉を済ませ、さつさと中へ入ってしまう。その間左手で持った文庫本から視線を上げもしない。

ページをめくりながら通路を歩み、一直線に前方の扉に手をかけ



甲高い声に辟易しながらも、僕は示されるままに前方の車両を覗き込んだ。中の様子が伺える。

男が倒れていた。

男が一人倒れていた。

男が一人仰向けで倒れていた。

顔をズタズタにされた男が一人仰向けで倒れていた。

顔をズタズタにされた男が一人仰向けで後頭部を血溜まりに浸して倒れていた。

男が一人、死んでいた。

第五十六話【試験開始】（後書き）

勘のいい人はここまでで分かってしまったかもしれませんが。

今回は初めてのミステリということで、難易度はイージーです。気が向いた人は推理してみてください！

第五十六話【問題用紙】（前書き）

登場人物紹介

二角形      大男

丸井三角      ブローチ女

四角困曲線      サイケデリック男

菱形五角      読書女

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル      ミス・マーブル

縁録録      ナンシー・ドロー

罪口鷺志      ジュール・メグレ

車掌      乗務員

運転手      運転中

新幹線      走行中

## 第五十六話【問題用紙】

悲鳴を聞き付けて現れた車掌は精神操作であしらって、僕は死体を観察した。

死んでいたのはニンク臭くて体の大きいあの男だった。通路に体を投げ出し、文句のつけようもなく死んでいる。

顔は随分と傷付けられているものの、顎から上だけに限定されている。特に右目の辺りが集中的な被害にあっているのに対し、首からは綺麗なものだ。傷口からは筋肉の繊維や白い骨が伺えた。

後頭部には親指の先ほどの窪みがひとつ。血溜まりの源泉はここらしい。その他にも小さな傷が無数についている。

ためしに服をめくり上げてみたが痣ひとつ、擦り傷ひとつ見当たらなかった。

服装に不振な点はなし。ファッション的な話はわからないが、取り立てて乱れているわけでもボタンの掛け違いなんかがあるわけでもない。

死後硬直はまだ始まっていないようだ。生きている彼を見たのはほんの数10分前なのだから当然か。

次いで僕は死体の周囲を見回した。基本的な構造は僕たちがいた一つ後ろの車両と変わらないが、男が座っていたのだろう席周辺は雑多なものだ。

周辺の座席及びびじ掛けに血痕や破損はなし。飲み物のホルダーにはコーヒーの空き缶納まり、通路には空の小袋が落ちていた。柵の上にはバッグ。そして、通路の真ん中に落ちているチェーンが目に付いた。

「なんの騒ぎだったんだ？」

「人が死んでた」

「ニンニク男か」

「そのあだ名はあんまりだろう」

野次馬も尽く精神操作。いや便利な能力である。

「次<sup>で</sup>言？先輩なんだかソワソワしてませんか？」

「あ、わかる？」

正直言つて、今僕は気分が高揚している。テンションが上がっていると換言しても構わない。不謹慎だろうがなんだろうが、楽しんですらいる。

大抵の愛書家は、最低一度は『名探偵』に憧れるものだ。僕だって前世では三毛猫を飼おうとしたことだってあつたんだぜ？片山義太郎さんに憧れて。

「幸いにして僕たちは彼が生きていたのをこの目で確認している。そして死体発見まで彼のいる車両に入った人物もみているし、その人物も3人しかいない」

僕の言わんとすることを察したのだろう。エヴァもまた、呆れたようなため息を吐いた。

「つまりダンは、『探偵役』を務めようと、そういうんだな？」

「そういうこと。今から僕の話は猫丸と呼んでくれ！」

「猫丸先輩は殺人事件はあまり取り組まないんじゃないか？」

「だからこそ、のつもりだったんだけど、じゃあ亜愛一郎。いや有栖川有栖？浅見光彦・・・狩野俊介！」

「狩野俊介は年齢的に無理だろう」

「年齢で言ったら俊介くんが1番近いぜ？」

「まあ好きに名乗れ。私はジェーン・マーブルと名乗る」

「仕挑あやこ私はナンシー・ドロー」

「なんだよ二人とも外人かい？だったら僕は・・・」

「ホームズとか言ったら『おわるせかい』な」

「百鬼夜行しちゃいますよ？」

「……ジュール・メグレ」

「お疲れ様です、車掌さん」

僕ことメグレは車掌に声をかけた。精神操作は既に解いてある。

「今回の件、僕に捜査を任せていただくことと打診に参ったしだいです」

「捜査？なにふざけたこと言ってるんだい。こっちは子供の遊びに付き合ってる暇はないんだよ。大体、人が死んでいるのにそれで遊ぼうだなんて、君のは罪悪感がないのか？」

ないかもしれない。

「実は僕、こっついうものでして」

言いながら、僕は胸ポケットから取り出した麻帆良の学生証を見せ付けた。すると車掌は態度を一変させ、

「刑事さんでしたか！いやぁ助かりました。なにせ私もこっつたことは初めてでして！」

「そうですね。そしてそれでいいんですよ。人の死体なんて見慣れるのは我々だけで十分です」

「え、と・・・ジュール・メグレ警視ですね」

「メグレ刑事、で構いませんよ。その方が解りやすいでしょう」

「助かります。さ、では現場へ」

「ああいや、現場はもう結構。見るところはもう見ました」

「そうでしたか。さすが、本職の刑事さんは仕事が早いすなあ！」

「なので、あの男性の関係者がいないか探して下さい。もしいければ話を聞きたい」

「はい！わかりましたあ！」

「ああそれと、今から言う3人もお願いします。メモの用意を」

「なんだかテンションのおかしな車掌に僕たちが見掛けた女、男、女の特徴を告げ、呼んできてもらうことにした。生真面目な車掌の背中を見送っていると、緑ちゃんが言った。

「何事なにしたんですか？」

「音で精神操作して学生証を警察手帳に見せた」

「フランスの手帳と日本の手帳は違うだろ？」

「普通は見分けなんてつかないよ」

それにしても、パイプも吸わない体格もよくない僕がメグレを名乗ってもよかったのだろうか？

まあいいか。どうせ今日日メグレ警視知ってる人なんて少ないんだし。目暮警部じゃないぜ？

「連れて来ました」

待つこと数分。つまり大して待つこともなく車掌は件の3人を連れて来てくれた。

「3人も被害者とは友人だそうで、4人で一緒に乗り込んだんだそうです」

なんとこの車掌、簡単に人間関係を聞いてくれていたらしい。話が早くて助かる。しかも全員死人と関係者ときた。込み入った話でなければいいけど。

「ではまずは自己紹介からお願ひします。そちらの、貴女から」

僕が示したのは最初に車両を通った女性。よくわからない服装をした彼女のことだ。彼女は酷く落ち着かない様子で視線をさ迷わせ、お腹の前で両手を擦り合わせている。おや、胸にブローチが戻っている。

「えっと……丸井三角まるいさんかくと言います。二角くんとは同じ大学のサークル仲間で……」

「二角、というのは？」

「被害者です。二角形にかくけいさん」

答えてくれたのは車掌だった。本当に役に立つ。いっそ刑事にでも転職した方がいいんじゃないか？

「なぜ二角さんは違う車両に？」

「いつもそうなんです。何て言うか、我が儘なところがあつて、いつも自分の気まぐれで行動する人でした」

「その二角さんの元を訪れた理由は？」

「メールで呼ばれたんです」

「そのメール、残ってますか？」

「これです」

「・・・確かに」

携帯の画面には確かに呼び出しのメールとその時刻が表示されていた。二角さんのアドレスを知らない僕には送信者としての表示を信じる他ないが、殊更に疑うこともないだろう。

「では次に、貴方」

次に僕が示したのはギザギザサングラスとサイケデリックサンダ

ルの彼。左手をポケットに突っ込み右手では乱暴に髪を掻いている。チエーンはないままだ。

「四角<sup>しかくい</sup><sup>きょくせん</sup><sup>せん</sup>困<sup>こ</sup>曲<sup>ま</sup>線<sup>せん</sup>。同じ大学の同じサークル・・・」

「二角さんの元を訪れた理由は？」

「・・・戻ってきた三角の様子がおかしかったから、三角宥めてから文句言いにいったんだよ」

「失礼ですが、貴方と三角さんの関係は？」

「ホントに失礼だな・・・。コクってフラれた。そんだけ」

四角（困は省略）さんは苦々しさも露にそう言つとプイと顔を背けてしまった。

「では、最後に貴女」

最後はメガネをかけた彼女。オドオドキョロキョロと不安を全身で表している。あの時持っていた本も、今は持っていない。

「あ・・・ひ、<sup>ひしがた</sup><sup>ごかく</sup>菱形五角・・・です」

ずいぶん小さな声だ。どうやらあの悲鳴だけ例外的な大声だったらしい。

「二角さんの元を訪れた理由は？」

「あの・・・次が降りる駅だったから、呼んでこようと思って・・・」

・・・前も一人で車両移って、眠っちゃったことが、あったから・・・」

「ありがとうございます」

「も、もういいんですか？」

二言三言重ねただけで切り上げた僕に、車掌は当惑の声を発した。僕はそれに気負いなく答える。

「まさか。もつと聞きますよ。ただここは場所が悪い。もつと静かなところで改めましょう。行こうか、マープル、ドロー」

ちよつとだけ笑いを堪えるドローと、笑顔を隠そうともしないマープルを引き連れて、僕は食堂車へと向かうことにした。あそこなら少しもゆっくり話せるだろう。コーヒーの1杯くらいなら、奢ってもいいし。

### 丸井三角の証言

えっと、新幹線に乗り込んでからでいいんですか？

乗り込んですぐに、二角くんは私たちから離れていきました。理由は・・・わかりません。

しばらくは何でもなくて、私たちは私たちが暇を潰してたんです。私は四角困くんと携帯ゲームをしてました。

そしたら二角くんからメールが来て、先頭に来い、って。

もちろんすぐに行きました。機嫌を損ねると長いですから。その時、あなたたちの横を通りましたよね？

二角くんとは簡単な、世間話のようなものをしました。昨日の食事とか、テレビの内容とか。でも、二角くんの用事はそれだけじゃなくて……。

その、乱暴を、されそうになって……。

あ、大丈夫だから、落ち着いて四角困くん。何もされてないから。

はい。未遂……？で終わりました。

両手を捕まれて、椅子に押し付けられたんですけど、暴れてたら二角くんの顔を引っ掻いたみたいで、怯んでる間に逃げました。

え、ブローチ……？

はい。このブローチは、その時落としてしまったみたいで……。四角困くんが持ってきてくれたんです。

## 四角困曲線の証言

どっから話せばいいの？乗ってから？ああ、三角が二角んとこ行ってから？あ？餃子？・・・ああー、食ってたなそっぴい。コンビニで買ったやつ。体力バカのノーキンだったからな、あいつ。

あ？三角がいなくなってるから？

三角がいなくなっちゃったら、俺特にすることねーし。ゲームを1人プレイにして遊んでた。

どんくらいかはわかんねーけど、三角が涙目になって戻ってきて、二角になんかされたのかって聞いても答えねーし、じゃあ直に行くっきゃねーだろ？

つつても、その前に三角宥めてからだけど。落ち着くまで結構かったかな。詳しい時間は覚えてねー。

で、三角が落ち着いたから俺が二角んところに行ったんだ。ってか時間ならお前ら知ってんじゃねーか？横、通つたる。

俺が行ったとき、二角は席に座ってなんか食ってたな。何食ってたのかは見てねー。手には三角の飾り・・・あ？ブローチ？それ持ってた。

何やったんだって聞いてもろくに答えやしねーんで、大声で罵り合ったよ。扉開けても言ってたから、聞こえたる？

そんで、戻って三角にブローチ渡して、今ここ。

チエーン？・・・ああ、どこいったんだろ？どっか落としたみてーだ。

## 菱形五角の証言

あ……あの、三角ちゃんが戻ってきてからは、本もしまつて三角ちゃんと話してたんです……。

いえ、内容なんて気にしないで、ただの雑談を……。最初は強張ってたけど、だんだん笑顔が戻ってきて……。

少ししたら、四角囲くんが戻ってきて、二角さんとケンカした……。って、怖い顔してました……。その時に、ブローチ、渡してました。

次の駅で、降りるから……。二角さん、起きてるかなって、様子見に……。

え？四角囲くんですか？……。その時は、確かトイレに行っていたと思います。

読みかけの本を持って、読みながら歩いて……。そ、そうしたら、二角さんが、倒れてて……！

「はい、ありがとうございました」

僕は取り乱し始めた五角さんに笑顔を向けてお礼を述べた。五角さんも深呼吸をしながらコーヒーで唇を湿らせ、掠れるような声で「どういたしまして」と答えた。

「ところで皆さん、魔法って信じますか？」

「・・・魔法？」

「何言ってるんだアンタ」

「えと・・・信じて、ません」

3人の反応は三者三様。

三角さんは眉間にシワを寄せて聞き返し、四角さんは上唇を釣り上げて罵り、五角さんは片頬を引き上げて応答した。

「なんでもありません。それでは、簡単にで構いませんので皆さんの荷物を調べさせていただきます。三角さんと五角さんの荷物は、マール、ドロー、任せたよ」

3人とも特に変わった物は持ち込んでいなかった。旅行の必需品や暇潰しがほとんどで、気になった物だつてわずか数点。

三角さんはソーイングセットと断ち鋏。驚くべきことに上着の内

ポケットに入れていた。そんなに布を縫う機会があるのだろうか。

四角さんはオイルライターとライターオイル。ちなみにタバコは吸わないらしい。

五角さんは文庫3冊ハードカバー2冊。いたって普通だ。

血の付いた鈍器を持っている、とかちよつと凹んだ鈍器を持っている、なんてわかりやすい物は待ってはいなかった。期待もしてなかったけどね。

僕、マーブル、ドローの3人は関係者3名を車掌に任せ（もちろん糸で監視済み）元の車両に戻ってきた。腰を下ろし、思案顔の2人に話し掛ける。

「どう？何かわかった？」

僕の言葉に、しかし2人は呆れたようにため息を吐いた。

「わかったも何も・・・」

「亡者したいの詳しい状況を知っているのは先輩だけですよ」

おつとつっかりしていた。そういえば現場検証は僕しかしていなかったんだ。

「何が聞きたい？」

「死体と周囲の状況」

「周囲に特に気になることはなし。血痕や破損も見当たらないし仕掛けの類もなかった。通路には無地で空の袋とチェーンの首飾りが落ちてた。チェーンには、肉片のようなものも付いてた」

「思<sup>へ</sup>当、チェーン、ですか……。死体はどうですか？」

「外傷は顎から上だけ。首から下は血痕もないし、綺麗なものだよ。顎から上はボコボコ。切れてたり潰れてたり、執拗に殴打されてるね。特に右目の周りに集中してた。皮下の筋とか骨も見えてたよ。それでも最初に見掛けた男には違いないと思う。顔の原形自体は留めてたし」

「致命傷は？見付かったか？」

「後頭部に挫傷痕があつたね。親指の先くらいの小さな何かでたたき付けられたみたい。血溜まりが出来て後頭部が血まみれ」

「当<sup>じ</sup>識死<sup>めい</sup>因は脳挫傷？」

「詳しくはわからないね。僕は検視官じゃないし」

聞くことは聞いた、とばかりに2人は眉根を寄せて考え始めた。やがてドロローがはたと顔を上げた。

「魔<sup>ま</sup>役<sup>はつ</sup>の可能性はないんですか？あまり複雑な事件とは思えません  
が、魔法で移動して、私たち見られずに殺害、とか」

「それは私が否定しよう。これでも長い間迫害を受けてきたからな、陰形や転移なら気付ける」

「あの3人が魔法使いで遠隔殺害、っていつのも無いよ」

「何由断言出来るんですか？」  
なんで

「僕が魔法について質問したとき、3人の反応は『眉間にシワを寄せる』『上唇を釣り上げる』『片頬を引き上げる』だった。これはそれぞれ『疑念』『怒り』『不安』を表す微表情だ。僕の質問の意図を疑い、ふざけた質問をした僕に怒り、僕の質問の意味がわからず不安になったんだ」

ドローは一応の納得を見せた。再び黙考しようとするドローの隣で、マープルがニヤリと笑みを刻んだ。

「それじゃ、推理ショーを始めよう」

## 第五十六話【解答用紙：記入者・マーブル】

推理ショーを始める。

そう告げたマーブルはやれ急げとばかりに三丁五角の3人と車掌を現場へと呼び出した。今現場には僕、ドロー、マーブルを含め7人の人間が集まっている。

「駅に着いてしまえばいつ逃げられるか分かったものでもないからな。さっさとケリをつけてしまおう」

マーブルは腰に手をあてて傲然と胸を張っている。よほど自分の推理に自身があるのだろう。その体には不安の一欠片も見当たらない。

ちなみに2人のことは『信頼の置ける私立探偵』と説明してある。

「私の名前はジェーン・マーブル。今から二角形殺害の犯人を名指しする。順を追って説明しよう」

やや芝居がかった仕草と口調で、マーブルは滔々と語りはじめた。

「被害者、二角形は駅から乗り込んだ直後3人から離れ1人先頭車両へと向かった。当初その車両には私たちが乗っていて、それまで誰も被害者と関わっていないことを確認している」

ニンニク臭くて逃げたから何をやっていたかは分からないけどね。

3人は固唾を呑んでマーブルの推理を聞いている。彼女の推理いかんで冤罪をかけられてしまうかもしれないのだから、当然といえば当然だ。ちなみに車掌は目を輝かせている。絶対ミス터리マニアだ。

「その後私たちは1つ後ろの車両に移ってしまったが、そのお陰で誰が被害者の元へ行ったか、どれくらいの時間そこに居たのかも大まかに分かっている」

三角さんは5、6分。それから10分空けて四角さんが同じく5、6分。さらに10分ほど空けて五角さんが1分程度。

極論、人を殺すためには5秒もあれば十分だ。全員が全員、殺す機会にも恵まれたように思える。

「が、実際はそうじゃない」

言うまでもない。

「殺す機会が会ったのは2人だけ。すなわち四角囲曲線と菱形五角だ。もし丸井三角の時に死んでいれば四角囲が気付くことになるうし、当然だな。正直こんなものは推理とも呼べ無いような簡単なことだが、そうそう小説よりも奇なりとはいかないようだな。まあ贅沢は言うまい」

そこで、マーブルは言葉を切った。まるで勿体振るかのように口を閉ざし、ゆっくりりと、ひどく緩慢な動作で人差し指を立て、それをビシッと突き付ける。

「犯人は・・・貴様だ!」

言い切った感とやり切った感と感激と感動をないませにした恍惚の表情で、マーブルはハッキリと1人の人間を指差した。

その先にいたのは……。

「……なんか根拠、あんのかよ」

四角囲曲線だった。そういえば彼は大学生だと言っていたか。詳しい年齢は知らないが、ならば20代も半ば付近にして髭をたくわえているのだろうか？

「順を追って説明しよう」

マーブルは四角さんの抗議と僕のくだらない考察を無視し、大仰に手を広げて語りはじめた。

「この起こりは丸井三角が二角形に呼ばれたこと。丸井三角は呼び出しに応じて二角形の元へ赴き、そこで暴行を受けそうになった顔を引つ掻いて辛うじて逃亡に成功した丸井三角は、動揺覚めやらぬまま、ブローチをこの車両に落としのまま逃げ帰った。その様子を不審に思った四角囲曲線が丸井三角を宥めすかし、自身も二角形のいるこの車両へと足を運んだ」

間違いはないな？と三角さん及び五角さんに視線を向け、反論が出ないのを確認し、マーブルは話を続けた。

「そこで四角囲曲線は二角形を問い質し、そこで二角形がしたことを知ったのか、あるいは話さない二角形に痺れを切らしたのか、ともかく口論を経て暴力へと続いた。これが二角形の顔面が傷だらけ

だった理由だろう。それと・・・」

マーブルは嗜虐的な笑みを愛らしい顔に刻み、その細い指を四角さんの左手へ向けた。ポケットにいれっぱなしの、左手。

「その左手、見せてみる」

「・・・ッ!」

一瞬表情を変えた後、四角さんはゆっくりと、たっぷりと時間をかけてポケットから抜き出した。

傷だらけになった、左手。

「鬼わたしは人より鼻が効くんだ。血の臭いはすぐわかる。新しい傷のよ  
うだが、その傷はなんでついたものだ？」

「これは・・・」

三角さんと五角さんが息を呑む。四角さんの手のケガを知らなかったらしい。傷は手の甲の、指の付け根辺りに集中していた。

「言えないのなら言ってやろう。それは二角形を殴った時についた  
傷だ」

「ど・・・どういふこと、ですか?」

おずおずとそう問うたのは三角さんだ。マーブルの言葉の真意が伺えずその目には疑問の色が浮かんでいる。

マーブルはその質問には答えず、僕に手を差し出した。

「ダン。チェーンだ」

述語の一切が省かれた略語だったが、なんのことは直ぐに分かった。現場に落ちていたチェーンを出せ、ということだろう。僕は素直にチェーン（インビニール袋）を小さな手の平に載せた。

「四角囲曲線は二角形との殴り合いに発展した際、首にかけていたこのチェーンを外して拳に巻いた。威力を増すために、な。その拳で殴られたから、二角形の顔はチェーンに引っ掛かれて裂傷が出来ていた」

そして、素肌に直接チェーンを巻いた四角囲曲線の拳も無事では済まなかった、と。マーブルはそう言った。四角さんは俯いたまま、何も言わない。その姿は一層小さく見えた。

「そうして弱った二角形が、逃げようともしたのか後ろを向いたタイミングで右手、恐らくはライターを握り込んでいた右手で殴り、殺した」

「つまり凶器はライターだと？」

「そうだ。トイレに行っていたらしいから、もう血は落としているかもしれないがな」

激昂した2人が口論をして、やがて殴り合いに発展。首のチェーンを左手に巻き、オイルライターを右手に握って武器にし、そして凶器となった。

あたかも生きてるように見せるために僕たちの前で罵声を飛ばし、そのまま元の車両へ戻っていった。

「そして二角形を呼びに来た菱形五角が二角形の死体を発見し、叫び声を上げて、ここにいるメグレの手を引いて死体の確認に向かった。大方こんなところだろう」

マーブルは言葉を切って四角さんを見据えた。その目には自信が燈り、四角さんを犯人だと信じて疑わない。

四角さんは俯かせていた顔を上げ、口の端を微かに引き上げた。

## 第五十六話【解答用紙：記入者・ドロ】

マーブルの推理を聞き終えても、しばらく誰も動きを見せなかった。

三角さんは四角さんを不安そうに見つめ、四角さんはわずかに上げた口角を変えず、五角さんは息を吞んで四角さんとマーブルの間で視線をさ迷わせている。

今こうしている間も新幹線は猛スピードで移動中であり、にも関わらずこの静寂とは、技術の発展には目を見張るばかりだ。

その静寂を、

「私見わたしのとは違うなあ〜」

大人気検視官の名台詞が切り裂いた。

「倉石さん？」

「照笑えへへ・・・」

発声したのはドロ。はにかむように笑いながら三つ五角さん、車掌、マーブルの視線を浴びていた。

「なんだミドリ？私の推理に、反証が？」

「否違いえ、反証というほどのことはありません」

マーブルも別段腹を立てた様子はない。どちらかと言うと論ずる余地を楽しむ風ですらある。

「ただ論<sup>た</sup>応、それを唯一解としてしまうには、私には早計に見えます」

「それじゃ、ドローの推理を聞かせて貰える？」

「はい応<sup>は</sup>諾」

僕の要望に、ドローは快く頷いてくれた。チラリと皆を一瞥し、ドローは語りはじめた。

「おおかた大<sup>お</sup>違の見立てはエヴァさんに同意です。丸井さんの様子を不振に思った四角困さんが二角さんの元を訪れ、そこで口論になり暴力に発展した」

ドローは左手を突き出すジェスチャーをした。四角さんが殴ったことを表したのだろう。

「ひだりて使<sup>ひ</sup>手の傷からも、そのことは明らかでしょう。チェーンを拳に巻いてメリケン代わりにして殴打した。被害者の顔と自分の手に傷がついたのはこの時でしょう」

ここまでではマーブルの推理と同じ。違いがあるとするなら、この後か、もっと後か。どちらにせよ話を聞いていれば分かることだろう。

「ちがう違<sup>ち</sup>点のは殺害状況です」

ドローは簡潔に違いを述べた。

「わたし私は菱形さんが犯人ではないかと思っています」

「わ……私、ですか……?」

ドローの突然の名指しに五角さんは身を竦ませた。ビクリと肩を震わせて怯えそのもののような声を搾り出した。

「私、人殺しなんて、そんな……」

声までがふるふると震えるように掠れている。一陣の隙間風でも吹けば飛ばされてしまうような頼りない声だった。

「私も疑問を持つな。女の腕力であの大男の頭に穴を空けられるのか?」

五角さんの気弱そうな態度なんて意にも介さず、ただ可能か不可能かだけを考えている様子のマープル。動機も気性も考慮しないあたり、アメリカの刑事ドラマみたいだ。

その疑問を受けてドローは平然と返した。

「むじ不能だと思いません」

「何?」

あっさりと意見を翻したように見える。マープルの驚きも無理はないだろう。

「じょせい女人の腕力であの男性の後頭部を、死傷せしめる威力で殴るのは

難しいと思います。菱形さんは取り分け体を鍛えているわけでもなさそうですしね」

それはまったくもって同意だ。五角さんはいかにも文学少女といった風情で、セピア色のフィルムに写っていてもなんら違和感はないだろう。

「然併てすが、それに前条件があったら？」

と、ドロローは続けた。

「害者にかくさんは、菱形さんが向かう前に四角困さんによって暴行を受けていました。顔をひどく傷付けられ、弱っている状態で、もしかしたら膝をつくか、うずくまっていたのかも」

「……なるほどな」

「うん、ありえそうだ」

僕とマープルはドロローの言いたい事をしっかりと汲み取った。揃って五角さんの足元を見遣る。

低めの、ヒール。

「下肢あしの力は腕の3倍。殴ったのではなく蹴ったのなら、踏んだのなら、どうでしょう？」

殴られた上にとどめを刺されたのなら、死人としてはまさに踏んだり蹴ったりというわけだ。

「後頭部を、踏むなり蹴るなりして固いヒール部分が突き刺さった、か？」

「わたし自分はそう見えています。ヒール部なら血痕がついていても拭きやすいし、残っていても現場に入ったから、と片付けられる」

ドローはそう締めくくった。五角さんはすっかり萎縮しきって唇が青ざめている。小刻みに震える様は多くの人類の庇護欲を駆り立てることだろう。というか訳もない罪悪感が沸き立ってくる。なんだか何かが申し訳ない。

つまりドローはこう言いたいのだ。

五角さんが車両にいたのはわずか数秒。その間に体格差のある男を彼女がボコボコにするのはほぼ不可能。

二角さんに暴行を加えたのは五角さんの前に車両を訪れた四角さんだった。

四角さんに暴行を受け、弱まっているところを五角さんが発見し、これ幸いととどめを刺した。

あるいは共犯でもあったのかもしれない。ドローはそう言いたいのだろう。

五角さんとして、犯行が出来なかったわけじゃない。

「ま終告、今のは推理というよりただの推測。状況証拠を都合よく解釈しただけですけどね」

「それを言ってしまうえば私だってそうだろう。いや、チーンにっ  
いていた肉片は証拠になるかな？」

「なににせよ、現地警察の捜査が入れば間違いなく解決だよ。鑑識  
のまね事は、僕たちには出来ないからね」

解決。

その言葉に反応したのは一体誰だっただろうか。

三角さんが表情を変えたように見えた。四角さんが拳を握り締め  
たように見えた。五角さんがさらに体を縮こませたように見えた。

「……違っ」

痛みを伴うような沈黙を、1人の呟きが破った。

「俺が……殺した」

四角困曲線さんが、

「俺が二角を殺した。そのこ金髪の言う通りだ。何一つ間違っ  
てねえ」

告白した。

薄ら笑いを、浮かべたまま。

.

## 第五十六話【答え合わせ】

「犯人だという四角さん。貴方がどういう経緯で反抗に至ったか、教えて貰えませんか？」

四角さんの自白の直後、三角さんや五角さんが混乱ないしの反応を示す前に、僕はそう言った。

「なんでだよ。いーだろうが、俺が犯人だっつってんだから」

「これでも刑事ですからね。一応は体裁を整えなければならぬですよ」

チツと舌を打ち鳴らし、四角さんは若干視線を上向かせて話しはじめた。

「えと、二角んとこいって、三角に何したって聞いて、答えねーからイラついて、殴り合いになったんだよ。首のチェーンが武器になりそうだから、左手に巻いて、ライターで後頭部ぶん殴ったら、死にしまったんだよ。落っこちてたブローチ拾って、お前ら誤魔化せねーかってまだ生きてる風に文句飛ばして、んで戻ってきたんだ。どのタイミングでチェーン落とししたか、なんて知らねーけど」

「ふむふむなるほど。確かにマーブルの言った通りですね」

「だろお？」

「では、今言った事柄を、タイムテーブルを逆転させて言ってみて

ください」

「……はあ？」

「ですから、今の事象を逆から言ってみてください」

「ああ、えっと……。文句言って、ライターで殺して、いやブローチ拾って？殴り合いになって……。あ！チェーン左手に巻いて……。」

「嘘臭い」

このように、時間と出来事の流れて嘘を吐くと逆回転ができなくなるよ。試してみてね！

「吸血鬼マールが血ちに敏感になように、天邪鬼ほくも嘘にに敏感なんですよ。その鼻が告げている。あなたは嘘を吐いていると」

四角さんの顔から笑みは消え、今は僕の顔に笑みが刻まれている。もつとも意味合いは大きく違っているが。

言い知れぬ不安を如実に現す四角さんを眺めていると、マールが焦れたように言った。

「ダン、私もミドリも自信満々に推理を披露したんだ。早くお前の推理を聞かせろ」

「僕のはとても推理なんて呼べるものじゃないんだけど……。」

と前置きをし、僕は薄ら笑いを浮かべたままにはじめた。

「まず言っておこう。四角さんが二角さんを殴った、これは間違いない」

「これ・・・は『?』」

「詰理しまり何かが違っている?」

ニンマリ笑顔で頷いて見せる。僕は四角さんを右手で示した。

「僕は四角さんを見て、最初に『ファッションを頑張った中学生』みたいだと思った」

失礼ですが、と四角さんに顔を向ける。

「たいへん小柄でいらっしゃる。二角さんとの身長差はどれくらいでしょうか?」

「ッ!」

「驚付!<sup>ッ</sup>」

マープルとドローが四角さんを振り仰いだ。そのつま先からつむじまでをマジマジと見つめる。凝視する。見分する。

二角さんの身長は目測で190前後。対する四角さんはどうか? 155程度だろう。あっても160、身長差は30cm程にもなる。

「二角さんの遺体は、顎から下は無傷でした。30cm程も差のある男の顔だけを殴る。そんなことは可能でしょうか?」

「腹から殴ったんじゃないか？腹を殴って、身を屈めたところを顔面に集中して……」

「言っただろっ？顎から下は綺麗なものだ。服の下だって痣ひとつなかった」

「然其<sup>て</sup>、本当に顔だけを狙っていけば出来ないこともないのでは？」

「確かに他には目もくれず、ただ顔だけに狙いを定めれば無理ではないかもしれない。でも、それじゃあ長引く。あんまり長い間ドタンバタンやってたら、僕たちに気づかれちゃうかもしれないぜ」

それに、と続ける。

「そんなにも体格差のある男と殴り『合った』りしたら、四角さんが無傷であるのは不自然じゃないかい？」

マールとドロウが再度ハツとした。そうだろう？殴り合えば、四角さんに殴られた跡がないのは不自然だ。

「それに、だ。武器に使ったというチェーンは首に、何重にも巻きかけていたものだ。ケンカの最中にそんなものを外して拳に巻き直していたりしたら、それこそただの的さ」

「……つまり、四角困曲線が二角形の元を訪れたとき、二角形は『チェーンを外して巻き直す』時間を許す状況であり、『身長差を覆して顔を殴れる』状況だった、そして二角形は『黙って抵抗せず』に殴られる』しかない状況だった、と言うことだな？」

つまり……、と纏めようとしたマーブルの言葉をドロローが繋いだ。

「其何時点<sup>その</sup>で、二角さんは死んでいた……？」

自分で言いながらも、ドロローは疑問を隠し切れていないようだった。当然だろう、こんなのは前提を丸々覆している暴挙なのだから。

「ケンカになる前からチェーンで武装していたとか、不意打ちで機先を制したとか、そういう事は考えられないのか？」

「僕が二角さんの顔の傷をなんと説明したか、覚えているかい？」

『繊維や白い骨が伺えた』、『皮下の筋とか骨も見えてたよ』、  
『首から下は綺麗なものだ』。血痕も、周囲にはなく後頭部だけ。

「普通、ケガしたら血が出るもんだろ？筋も骨も見えはしないし、立っている時だろうと座っている時だろうと、首から下にも垂れて当然だ」

「二角形は四角囲曲線に殴られる前に後頭部に傷を負い、血が流れきっていた、ということか。なるほど死んでいたと考えるのが打倒かもな」

人の死を取ったディスプレイ。2人の間で思考が加速し、  
「答え」へと近付いていく。

「何然<sup>でも</sup>、だったら誰が、どのタイミングで、二角さんを殺したんですか？」

ドローの疑問はごく自然なものだ。僕だっただけになる。

「起こったことを、並べよう」

皆をゆっくりと見渡し、勿体付けながらのんびりと口を開いた。

「まず二角さんが三角さんに暴行未遂を働いた。三角さんは顔を引つかいて辛うじて逃亡。次に訪れた四角さんが『死体を発見』し、殴った」

「聞返きこ？」

「はしより過ぎだ。どうせ分かっているんだろう？ 全て話せ」

「ちょっとさ、態度が辛辣でない？」

「じゃあ僕の考える限りを話そうか。今回の件の、恐らくはあらましを」

「まず三角さんが二角さんの車両を訪ね、彼に暴行未遂を受けた」「顔を引つかいた、との事だけど、この時引つかいたのは多分目。それも右目だろう」

「そのときの体勢がどうだったのかは知らないけど、ただ引つかいた程度で大男の手から逃れ切れるものか、と思ってね」

「その点目ならどうだろう？ 目にダメージを受けて怯まない人間、いや生き物はいない」

「三角さんは逃れるために身をよじり、その末に右目を引つかいた」「その時ブローチが落ちたのだろうね。それだけ暴れたのなら、他

にも何か落ちたかもしれない」

「例えば二角さんの荷物、とか」

「ともかく三角さんは逃亡に成功した。僕たちのいる車両を通過してさらに後ろの車両へとね」

「途中までは二角さんも追おうとしていたらしい。が断念した。理由は分からない」

「僕たちに傷を見られなくなかったのか」

「片目が効かないなか走行中の新幹線を歩きたくなかったのか」

「あるいは散らばった荷物を片付けようとしたのか」

「それは二角さん本人にしかわからないだろう」

「その後で重要なのは・・・何か分かるかい？」

「いやいや冗談だよ冗談。僕に焦らしプレイの趣味はないよ。ないともさ」

「だからこれはほんの雑談。ただのディスプレイ。ブレインストーミングさ」

「話すよ続きを。だからそんなに責め付くなって」

「僕たちの荷物が落ちただろう？その時のこと、覚えてる？」

「音さ。音」

「ボス！ボス！ドスン・・・！」

「落ちたのは僕の荷物とマーブルの荷物、2つ」

「音は3つ」

「この3つめの音、『ドスン』こそが、二角形の死因だ」

「あまり騒ぐな。今から話すよ」

「つまりだ、二角さんはどういう経緯か席を立ち、先の三角さんとの乱闘の際に散らばったであろう小袋を踏んだ」

「そして滑って転んだ」

「足を取られて後頭部から転ぶとき、人は顎が上を向く。頭が先に床に着いてしまう。その先にあつたのさ、凶器が」

「角砂糖が」

「・・・はいはいはい。はいはいはいはいはいはいはいはい」

「分かる分かるよ君たちのその反応は。当然のものだ」  
「でも恐らくはこれが真実なんだ」  
「角砂糖で人が死ぬのかつて？もちろん死ぬさ」  
「角砂糖は溶かして使うからね。どうしても脆いイメージが付いてしまう」  
「だが必ずしも脆いわけじゃない」  
「角砂糖は溶けやすいが、反面、衝撃や圧力には強いんだよ」  
「氷で人を殴り殺したりするっていうのは聞くだろうか？雪道で滑って転んで死んだ、なんて話も聞くだろうか？」  
「氷と角砂糖。この2つ、硬度も強度も大差はないんだぜ？」  
「家庭用の粉砂糖だって、時間を置けば粒子同士が固まって硬くなってしまう」  
「二角さんの角砂糖も、ずいぶんと固そうなものだった」  
「・・・まだ納得できません？じゃあ例え話をしましょう」  
「割り箸の袋で割り箸を叩き折る芸、見たことや聞いたことはありますか？」  
「今回もそういうことですよ」  
「身長190cm超の、四角さん曰く『脳筋』の二角さんが、その全体重を乗せて、角砂糖に後頭部から突っ込んだ」  
「当たる面が小さいほどに加わる力が大きくなるなんてのは、今さら言うまでもありませんね？」  
「金槌で釘を打ち込むようなものだ。今回は打ち込まれるのが逆だったけどね」  
「二角さんの頭蓋を穿ちながら自身も半壊かそれ以上の浮き目に有った角砂糖は、二角さんの体温や血液、脳漿で溶けてしまう」  
「こうして凶器は消えた」  
「鑑識が来れば解決する、と言ったのはこういうわけさ」  
「さてこの状況。はたしてどう見える？」  
「四角さんがこの車両の扉を開いたとき、ここには何がある？」  
「暴れた跡。三角さんのブローチ。右目に引っかけ傷を負った死体」

「四角さんは思った」

「三角さんが、二角さんを殺した」

「まあそんな勘違いも無理ないでしょう。当の三角さんは酷く動揺して戻ったらしいしね」

「そうして四角さんは、三角さんに告白してフラれて、でもまだ思入れがあるらしい四角さんは」

「罪を被ろうと考えた」

「まずはチェーンを拳に巻いて顔を殴った。目的は引っかけ傷を隠すことと自分が傷つけたという事実を残すこと」

「引っかけ傷を誤魔化するのが主な目的だから、右目の周りに傷が集中したんだ」

「この時には既に顔の血が傷口から流れていたから、新しい傷には血が出なかった」

「ひとしきり殴った　この時に後頭部の細かな傷がついたんだろうね　後、四角さんは三角さんのブローチを回収。代わりに自分のチェーンを置いていった」

「・・・ははは、今さらそんなことは通じませんよ。わざとじゃない、なんてのは嘘です」

「だって、これですよ？ものはチェーンですよ？連なる金属の円環ですよ？」

「落とせば、ほら」

「聞いての通り、大きな音がする」

「それにあなたは、最後に車両を振り返って大きく罵声を飛ばしている」

「振り返っておきながら、通路に落ちているチェーンを」

「金属光沢を放つチェーンを」

「自分がさつきまで使っていたチェーンを」

「人の顔をスタスタに引き裂いたチェーンを」

「見逃した？」

「・・・反論はないようですね。では続きをば」

「そうして『犯行』を終了したあなたは、三角さん方の元へ戻りブローチを返した」

「五角さんが二角さん呼びに行くとき、四角さんはトイレに行っていたそうですね」

「先ほど五角さんが犯人かもしれない、となつてから自白に至つたのは、五角さんに濡れ衣を着せたくなかつたからですか？」

「見かけによらず、友達思いなんですね」

「ああちなみに、最初から殺人じゃないと思つてましたよ」

「だって二角さんは仰向けで死んでいたんですよ？後頭部に傷を負つて、仰向けで」

「マールやドロウの言う方法だと、うつ伏せじゃないとおかしい」  
「後頭部に致命傷負つて仰向けなら、つまり突き飛ばされたか転んだか、だ」

「三角さんの後に出てきた二角さんを見てしまえば、突き飛ばされたかことは否定できる」

「だからこれは」

「事故なんです」

「そのわかりやすい作り笑い、もうやめてもいいですよ」

「わざと反感を買う必要はありません」

「犯人なんていないんですから」

「かばう相手なんて、いないんですから」

「最初から分かっていたな？」

三つ五角さんの3人、車掌とわかれ、自分達の車両に戻るや否や、

マールもといエヴァが僕に向かってそう言った。

「何が？」

「分らないでください。二角さんの死の真相です」

ドロー改め緑ちゃんまでそんなことを言う。僕はやれやれと首を振った。

「そんなわけないじゃないか。僕は名探偵でも名刑事でもない、ただの中学生なんだぜ？なんでもお見通しなんてことはないさ」

僕はかの赤色じゃないし、アロハのおっさんでもないし、その先輩でもなければ、猫に魅せられた女子高生でもないんだから。

「よく言えたものだ。今回は、最初からダンの態度も変だったからな。あれもヒントのつもりだったのか？」

「あれって？」

「今事件、先輩は最初から言っていましたね。猫丸先輩を名乗るとき、だからこそ、のつもり」だと

「それにお前、二角形を『被害者』と呼ばなかった。集めた3人を『容疑者』とも言っていないしそもそも『事件』とすら言っていなかったかもな」

「先人はこの事故の顛末を、知らなくとも分かっていたはずですよ」

「そうだろう？曲弦師にして音使いのプレイヤー」

形こそ確認の呈を成してはいるが、間違いがないことを、今度こそエヴァは確信しているようだった。まるで犯人を追い詰めるかのように僕を問い詰めている。

「端の車両に乗ったのは、敵の多い私やお前を狙う襲撃者の侵入を絞るため。先頭だったのは、私たちを殺すために運転手を殺そう、という策を潰すためだな？」

「わざわざ意意始発に乗ったのも、警戒する人数を減らすためでしょうか」

「なんだか僕はすいぶんと買われているらしいね。自分の意図してないところで褒められると、なんだか気恥ずかしいな」

僕のそんな言葉には耳もくれず、2人は僕への糾弾を続ける。

「かんけいしや三名を糸で監視してましたね？つまり先輩は新幹線内部でも糸を展開していたということ」

「索敵、捕縛、殺傷と応用の効く技法だ。自分のいる車両に展開しない理由がない」

「つまじ分事二角さんが入ってきた時点で、すでにあの車両には糸による結果が出来上がっていた。狙いは私達を守るためだったのでしょうが、違う目的に作用した」

「二角形の目の傷だってもしかしたらお前が出した助け舟だったんじゃないか？」

「ふんぶん、それで？」

「思えば、運転手に話を聞こうとしなかったのも、どこるか話題にすらしなかったことも不自然だ。私達を除けば三角形に最も近かった人物。見てはいなくても何かを聞いていたかもしれないのに」

「いやあそうか運転手がいたか。気づかなかったな」

「其別それに、先輩の推理には恣意的な解釈が多かった。転んで頭を打つたなら、状況的にブローチだったと考えるのが打倒では？」

「それはほら、ブローチ特に傷もついてなかったから除外したんだよ」

「3人の微表情。侮蔑だ呆れだ、あれは魔法を知っていても起こる反応じゃないか？ 関西の呪術師には、いまだ確執を持っている輩も多かるう」

「そうだったけ？ 忘れてたな」

「使わなかった言葉、無視された運転手、恣意的に寄る推理。私達はこれを『分かっていたから』だと推理した」

僕の言葉を徹底的に無視し、エヴァはそう締め括った。僕に聞く意味がない。むしろ聞かせることが目的だとか、そんなところか？

「何が嘘うそに敏感だ。何が嘘臭うそくさいだ。この嘘吐きめ」

新幹線は緩やかに速度を落とし、社内アナウンスが目的地への到着を告げた。

.

第五十六話【答え合わせ】（後書き）

犯人？動機？トリック？凶器？

ねーよそんなもん。事故だもん。

それでは皆さん。よい落とし、もといお年をー！

第五十七話（前書き）

今年初投稿！

## 第五十七話

特筆すべきことなどなにもない、平穩そのものたる道程を安穩と  
終え、僕たちは京都駅へと降り立った。

平和極まる車両の外、駅構内にはまばらながら人が行き来して  
いる。何やら警察官らしき人の姿まで見えるが、一体なにがあった  
のだろうか？

「おいダン、ここからどうするんだ？」

「道行は先輩しか知らないんですから、早く案内してください」

エヴァと緑ちゃんに急かされる。確かに、早くつま先を決め手し  
まわないと、またぞろ生八橋を買いに吸血鬼が京都の街を徘徊する  
ことになるっ。

「でもちょっと待ってね。迎えの人が来るはずだから」

「むかえ迎向？」

「うん」

始発に乗っていくことは伝えてあるから、既に待っているものと  
思ってたんだけど……。

「鷺志さん、お久しぶり死です」

きよろきよろと首を巡らせていると、真後ろから声をかけられた。声を発したのはたった今僕たちが降りてきた車両から降りてきた人物。

「やあ、久しぶり」

男とも女ともつかない顔立ち。黒くて艶のある短髪。胴に比べて足が異常に長く、全身のシルエットはコンパスを連想させる。市松模様の半纏を羽織った人物がそこにいた。

「いやあ本当に久しぶりですね、鷺志太陽<sup>さん</sup>」

「日向さんは、元気にしてた？」

「元気かと言われれば、鷺志さんと離れて元気の無くなる人はまずいないで劇<sup>じゆう</sup>」

「なんてこと言うんだ。僕は日向さんと離れて寂しくて寂しくて、日向さんを思い出さない日は無いほどだったと言うのに」

「そちらのお嬢さん方は、どなたで傷<sup>すか</sup>？」

日向さんは僕の言葉をまるで無視して、僕の斜め後ろでつまらなそうに佇む二人に目をとめた。

「こっちの金髪キュートがエヴァンジェリン。こっちの三つ編みクルールが緑ちゃん」

日向さんに二人を紹介し、僕はエヴァたちに向かって日向さんを

手で示した。

「こちら、僕の兄の罪口鷺仕」

「罪口鷺仕です。弟がいつもお世話になって数学ます」

日向さんの言葉を聞いた二人は無言で顔を見合わせコクリと頷き、そして緑ちゃんがその紅唇を開いた。

「先輩の家内の緑と申します」

「娘のエヴァンジェリンだ。伯父さん、に当たるのだな」

「弟から常々聞いていますよ。こいつは存外子煩惱でずでしてね、私のケータイは写真添付メールで埋め尽くされそう死でず」

「先輩おっこも娘が可愛いようで、最近は私よりも娘といる時間の方が長いんですよ？」

「私はパパの愛娘だからな。当然だろう」

「僕としては二人とも大事にしているつもりなんだけどねえ」

はっはっはっは、と四人で顔を合わせて笑い、

「罪口鷺志さんの友人の、日向日向ひゅうが ひなたと申し数学ます」

「学後じゅうごの縁録縁録です」

「友人のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

改めて本当の自己紹介をした。

「鷺志さんとは長い付き合いでしょね。といつても、もちろん麻帆良に移るまで、の話になりますが。よい友人死です」

日向さんは懐かしむようにそう言った。いやいや、そう言ってもらえると僕としても悪い気はしない。

「彼にはほとほと騙だまされました。色々な嘘を吐かれましたねえ、まあ今ではいい思い出です」

前言を撤回しよう。いや嘘だったと言ってしまうおう。

「躊躇ちゆうじゆ・・・、えつと?」

「鷺志さんには、『日向』と呼ばれてい数学まがず」

「了得りやうとく私も日向さんと呼びします」

「昔はコンパスとあだ名されていま立した」

「ははは！なるほどコンパスか、その通りだな！私はコンパスと呼ばせてもらおう。よおコンパス！」

なにかがエヴァのツボに嵌はまつたらしい。さすが600年も生きているとネジのひとつふたつは外れるのかもしれない。

というかだな。エヴァが日向さんをコンパスと呼んでしまったら、他の人がなんて呼んだらいいのか解と解とらないじゃないか。いやこつち

の話だけでも。

「其間、先輩はどんな子供だったんですか？」

「ん、それは私も興味があるな」

益体もないことを考えていると、緑ちゃんとエヴァが何やらいら  
ない好奇心を働かせた。

「いやいやいや何を言ってるんだい君達は？そんなことを聞いてい  
る暇があるなら一刻でも早く今回の旅の目的を達成しようじゃない  
か。日向さんだってそう思っているはずさ。ね？」

少なからず動揺する。思わず口数が減ってしまう程度には動揺し  
ている。

だって自分の昔の話だぜ？どんな黒歴史が飛び出すかわからない  
し、まして相手は日向さんだ。用心に越したことはない。

なのに、なのに、

「鷺志さんは昔から嘔吐きで映画館」

なんで僕は日向さんに話をぶってしまったのだろうか。

「二言目には嘔吐を吐き、三言目には嘔吐を吐き、一言目からも嘔吐を吐  
く。口からでるのは嘔吐か吐息くらいのもですよ。拳げ句言い訳が・  
・・・なんて言ったと思ひ数学？」

「被嘔方が悪い」

「君が勝手に騙されたんだ」

「えちよつと待って？僕そんなイメージ？」

「いいえ、もつと酷い死です」

あ、分かった。今回僕アウエーなんだ。地元なのに。

「『僕はちよこつと言い間違いをしただけじゃないか。僕が言い間違いをして、君達が勘違いをした。今回の件は、ようするにただそれだけだろう？』爪と先」

「うわあ……」

「慄笑……」

二人は異口同音に引き気味だった。顔は引き攣り口は引き笑い。頬を引き上げて足を引きずると、まるで教科書でも見ているかのような引きつぶりだ。いっそ潔くすらある。

「いやいやいやちよいちよいちよい、ちよつと待とうや日向さん？はたして日向さんに僕をそこまでおとしめる権利があるのかな？」

言うておきますけどねえ。日向さんだつて結構な嘔吐きなんだからね？

「日向さんは嘘を吐いて、相手の驚く反応をこよなく愛する変人だよ。そのためだけに体中に嘘の道具を仕込んでいる奇人なんだよ。」

だからむやみに信用しない方がいいぜ？」

僕からすれば至極真つ当ですごく正当な評価なんだけど、どうやら日向さんは不服そうだ。苦笑しながらに言った。

「穿つた見方をしないでください。私は鷺志さんとは違い数学<sup>ますう</sup>」

「たいして違わないじゃないか」

「詐欺師と奇術師はじゃ大違い死<sup>です</sup>」

「漢字三文字、最後が師。ほら共通点」

「そんな程度、共通点とも言えませんが劇<sup>じやく</sup>」

まったく。日向さんは相も変わらず、我が儘だなあ。

目的地。つまり近衛の本家に向かう道中。やはりというかやっぱりというか、どちらも同じ意味だからやはりを使おう。やはり、僕たちは足止めをくらっていた。

別に敵襲とかそんなんじゃない。そもそも今回は敵なんて者もないだろう。むしろ味方襲というのかもしれない。そんな言葉があるのかは知らないけど。

「よし、次はあっちだ！行くぞダン、もたもたするな！！」

エヴァが生八ツ橋の食べ歩き中なんですよ、はい。

今回は修学旅行と違って時間制限もないし道程も決まってない。でも、だからといって、いくらなんでも道草と八ツ橋を食い過ぎだ。

「おちついて落着、落ち着いて下さいエヴァさん。舞妓さんが白い顔で見えますよ」

「おお！ゲイーシャ！」

違う舞妓だ。てかなんだその思い出したようなエセ外国人。

「京都の舞妓さんの8割は貸衣裳を着た観光客なん死です」

「日向さん、がっかり系の雑学は後にして？エヴァのテンションがどうなるかわからないから」

京都に来るのは二回目だろうに、よくもまあそのテンションを維持できるものだね。僕だって京都来るのは二回目なのに、この落着きっぷりを見習って欲しい。

え？いやいや、本当に二回目だよ？

だって生まれたときは『来る』って言わないでしょ？『居た』でしょ？だから来るのは二回目。正確には、帰って来るのは、二回目。

はしゃぐ外国人の子供、なんていうのはよくある光景なのだろうか。店員も道行く住人も、皆微笑ましそうにエヴァに温かな視線を送っている。我に返ったらきつと恥ずかしくて外に出られないぞこ

れは。

『平和な町の食料を食い荒らす鬼』という、まるで昔話のような行軍は、その後しばらく続くこととなる。

## 第五十八話

そして昼時。僕たちは日向さんの案内の元本家を訪れていた。もちろん、案内がなくても辿り着けたけどね？

っていうかなんだよ昼時って。昼時ってなんだよ。どんだけ騒いだんだよエヴァ。始発乗って目的地まで昼時？おいおい、何駅か歩いたんじゃないのかってくらい経過時間だぞ。

「挨拶が遅れてしまい申し訳ありません。本来なら一も二もなく向かうはずのところ……」

「構いませんよ鷺志。エヴァの奔放ぶりは私も知っています。何より、そう肩肘張ることもありません。ここは、お前の家なのですから」

「……ありがとうございます」

僕、ちよつと泣きそう。

「エヴァに話は聞いています。直ぐに取り組むのですか？」

エヴァはすでに詠春さんに一報入っていたようだ。まったく用意のいい事だが、それなら僕にももっと早く教えてくれてもよかったのではなからうか。

「僕も道中聞きました。事に及ぶのは夜が更けてから、とのこと。やはり目立つのを避けるためかと」

「そうですか……」

「なにか？」

言葉を濁し、微かに表情を曇らせる詠春さんに、僕は窺いの声を発した。何か憂いがありそうだ。

目を伏せ気味にしたまま、

「こちらへの滞在、もう何日か延ばせませんか？」

と打診してきた。

「それはもちろん構いませんが、やはり何か問題が？」

聞き返しながら自分でも心当たりを探る。記憶から遠い昔の原作知識を呼び覚まし、ここ最近のニュースや伝聞を思い出そうと回転させる。

しかし、どうも思い当たることはなかった。

「実は最近、京都で連続殺人事件が起こっているのです」

「殺人事件？」

それはまた、穏やかならざる言葉が出て来たな。

京都で、連続殺人というと僕にはあの人間失格しか思い浮かばないのだが、さすがにこの場この人にそんな冗談は言わない。

僕だって、真面目な話に真面目に返すことはあるのだ。

「犯人は金髪の、外国人と思われる子供です。しかもどつやら、魔法使いであるらしい」

「魔法使い、ですか。分かりました」

そこまで聞いて、僕は応諾の返事を返した。

「つまり、僕にその殺人犯を討伐しろと、そうおっしゃるのですね？」

「お願い、できますか？」

僕は無言で大きく頷く。元より、受ける以外の選択肢など僕は持ち合わせてはいないのだ。

「無論ですとも。詠春さんはただお命じ下さい。僕は黙らずとも、請け負います」

そういつて恭しく頭を下げた。もちろん座位のまま。そうして退室しよと膝を立てた僕に、詠春さんはさらに情報を続けた。

「殺人鬼の被害者は今までで十二人。この中には私が派遣した関西の実力者も含まれています。決して、油断しないよう」

「十二人・・・」

まさか、これ以上犠牲者は出ない、なんてオチにはならないだろ

うね。微かに不安なんだけど。

もしこれが熱狂的ファンの仕業とかだとして、西尾維新作品が有識者（笑）に叩かれたらどうするんだと言いたい。だからそうでないことを祈ろう。

「被害は夜間にのみ集中しています。警察関係者も警邏を増やし、民間人の外出は控えるよう勧告もされていますが、まあ驚志ならその網もかい潜れるでしょう」

「そこに魔法的な走査がないなら、警察だけの捜査なら通れますよ」

僕は静かに、退室した。

そんな堅苦しい、『仕事』の話を終えて客間に戻ると、エヴァと緑ちゃんが揃って顔を上げた。

「話は終わったのか？」

「一通りはね」

立場的なことには割合フランクなエヴァのこと。仕事の話が終わらせた詠春さんを訪ねて酒ビン片手にトテトテと歩いて行った。真昼間から酒か。詠春さんは仕事が残ってるんだから、ほどほどにして欲しいね。

僕は残っている緑ちゃんに声を掛けた。

「日向さんは？」

僕は詠春さんのところへ行くまではここにいたはずなんだけど。。。

「日向でしたら、持ち場に戻るといって帰りましたよ」

出オチかよ。

「其話？<sup>それで</sup>すぐに始めるんですか？エヴァさんはお酒呑みにいっちゃいましたけど」

「エヴァは夜にやるって言ってたね。少しでも目立つのを避けてくれたんじゃないかな？」

「言換<sup>ては</sup>、今夜ですか？」

「いや、今夜は詠春さんに別の仕事を仰せ付かった。そっちが先だね」

「別事<sup>べつじ</sup>？」

「京都を騒がせている金髪の鬼退治だったさ」

「思案<sup>しあん</sup>、エヴァさんですか？」

「あはははははははははははー！」

その人殺しは夜間限定（すくなくとも今のところは）らしいので、僕は夜までの時間つぶしを探して歩いて出た。といっても、なんといつても、久しぶりにゆっくり過ごせる家なのでそう時間に困ることはないのだけど。

庭の剪定を見るともなしに眺めていると、ケータイがメールの着信を伝えてきた。送り主は・・・木乃香。そうか、食事のたびに近況報告を入れるように言っていたんだっけ。

木乃香のメールは、前半はまさしく普段通り。刹那や千雨、さよや茶々丸、神楽坂も加えて賑やかにやっている、という旨の書簡だった。何事も無いようで何よりだ。

「……………うん？」

さらに読み進めていくと、ネギの様子が書かれていた。曰く、  
『ネギくんの様子が変なんやけど、さぎくんなんか知らん？』

様子が変？

メールに書かれていたネギの奇行は以下の通りだ。

・教室に入る前にハンカチを投げ入れ様子を見る。

・ハンカチが無事であることが確認できると、手鏡で中を窺う。

・背中はず常に黒板に向けながら、半ば横歩きで教卓へ付く。

・体は正面を向いたまま、手だけを後ろに向けて文字を書く。この間視線は教室中をくまなく観察。

・誰かが挙手するとバツ！と向き直って構えを取りつつ、視線は他の皆を監視するように動かす。

・移動教室の際は一番最後まで決して外へ出ない。

・出るときも入るとき同様ハンカチと手鏡を使用。廊下は常に真ん中を歩き、窓には近づかない。

・曲がり角にもハンカチと手鏡。

ふむ。

『いや、全く心当たりがないね。思い当たる節なんてこれっぽっちもありはしないし、勘が当たることもないだろう。でも、あまり気にすることはないんじゃないかな？あのくらいの年齢だと、年上のお姉さんが気になるものだよ。僕だってそうだったからね。こればかりは国籍も世代も関係ないものなんだよ』

送信。

さて、木乃香たちの安否もしれたことだし、緑ちゃんつれて京都の町を練り歩こうかね。

朝はエヴァの食べ歩きに付き合い、昼は緑ちゃんと練り歩き、そして夜、つまり今からは殺人犯を探して練り歩くことになる。

「気をつけてくださいいね鷺志。殺人鬼は油断ならない相手です。見慣れない魔法を使う、とも報告を受けています」

「ご忠告痛み入ります」

見送ってくれる詠春さん、エヴァ（酔って寝てる）、緑ちゃん、使者のみんなの視線を受けつつ、僕は殺人犯を探しに練り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9969r/>

---

ネギマシニカル

2012年1月12日15時36分発行